

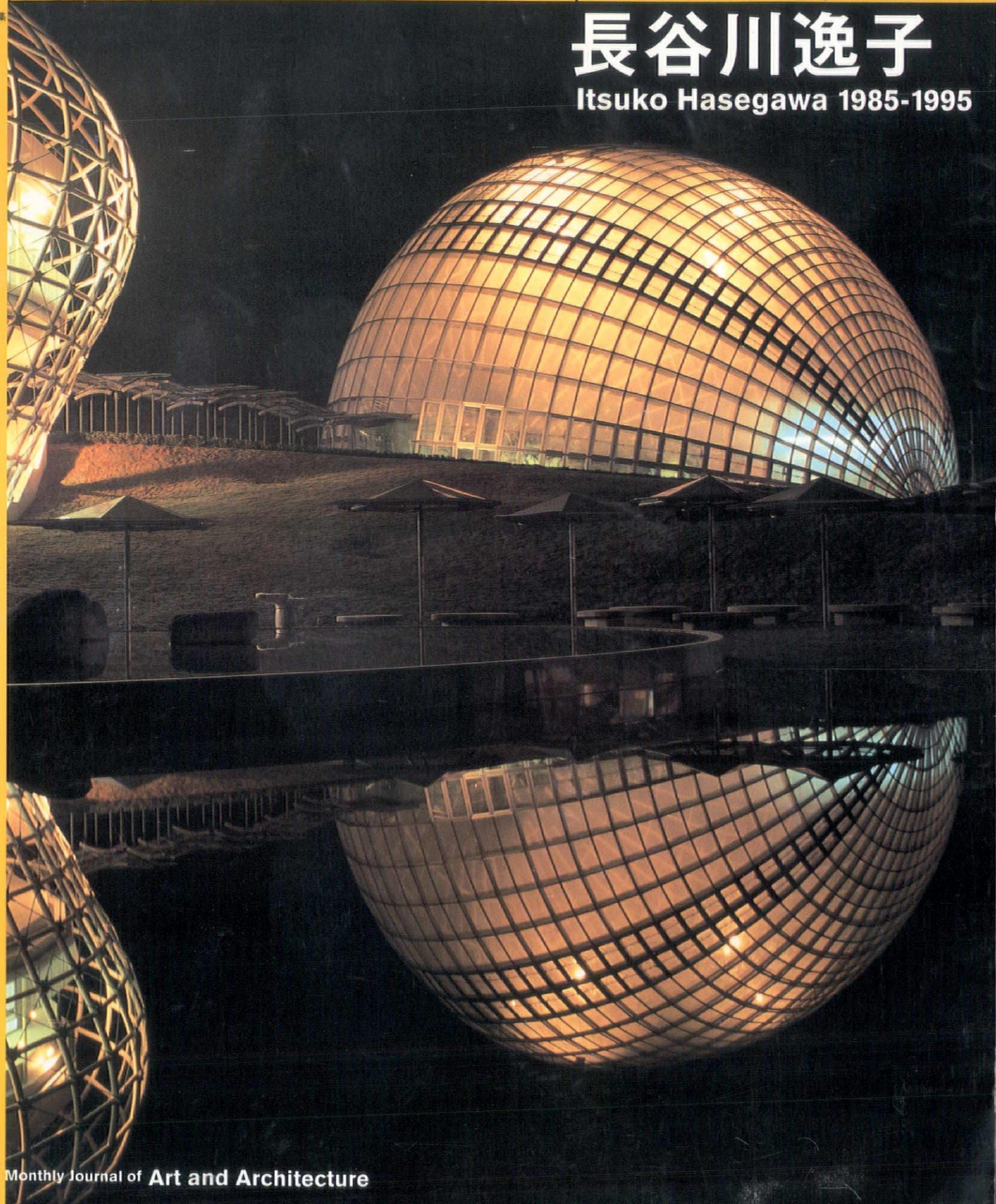
9511 | space  
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991  
第374号 1995年11月1日発行  
毎月1回1日発行  
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

# 長谷川逸子

Itsuko Hasegawa 1985-1995





マットな輝き、多彩なパターン

# METAL TONE

メタル トーン

重厚な落ち着きをベースにしながら華やかな表情を持つメタリックな壁面。メタルトーンは、そのメタリックウォールに多彩なパターンを取り入れることで、さらに格調高い仕上げを可能にする内外装壁面仕上材です。

- 多彩なテクスチャーと上吹きメタリック塗材の組み合わせで、マットな輝きを持つアルキャスト風の重厚な仕上げです。
- 上吹きメタリック塗材は水系アクリルタイプで、吹きムラがなく耐久性・紫外線遮断効果・耐薬品性に優れ、外壁材としても最適です。また、汚れの付きにくい帯電防止塗膜構造です。
- 間接照明との組み合わせで効果のある光輝チップ混入タイプもご用意できます。(内・外装用共)
- 基本カラー12色。基本パターン6種。

## ■目地施工例



## ■天井施工例



FURUKAWA

株式会社

フューコー

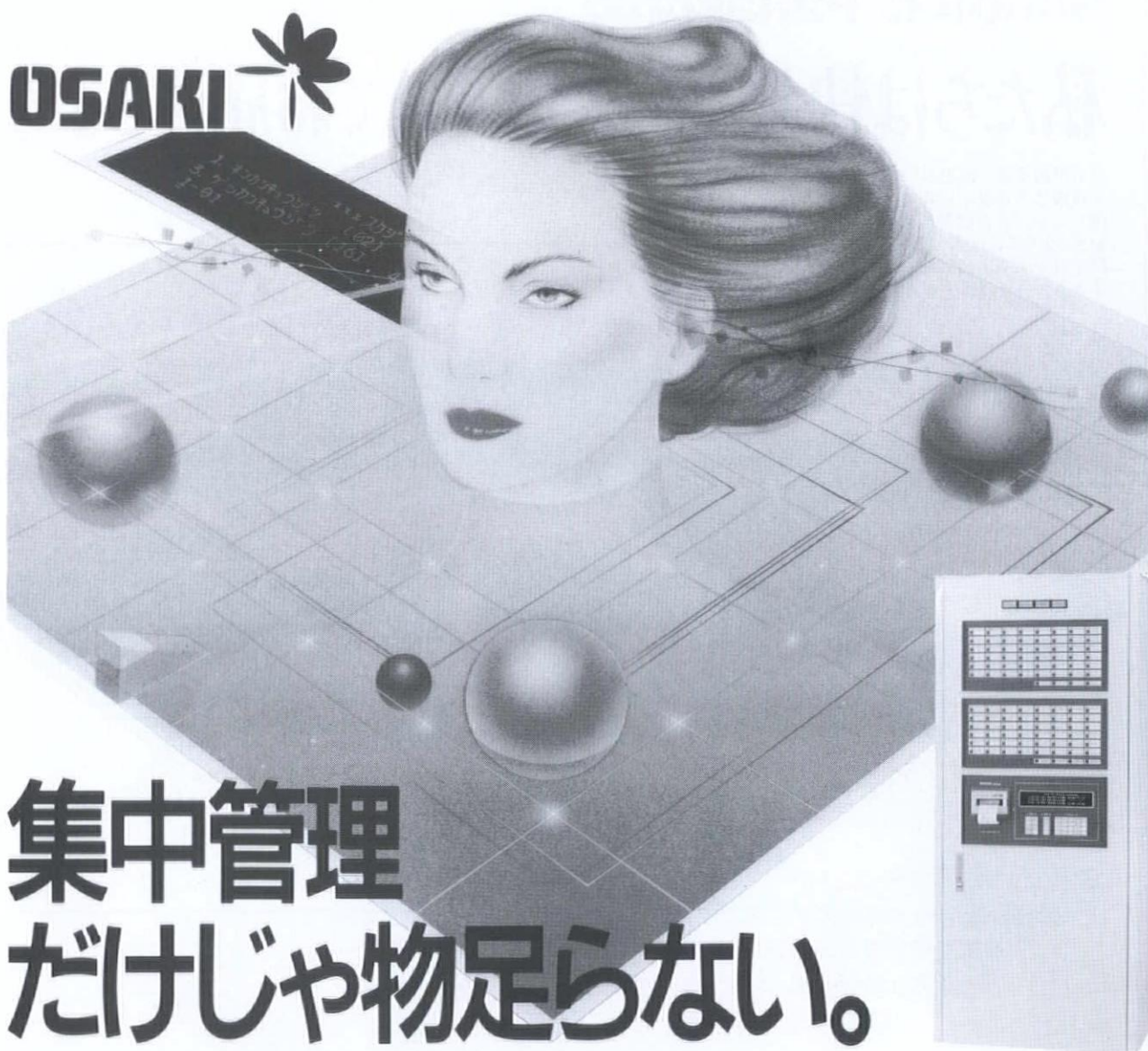
本社・工場 〒406 山梨県御坂町下黒駒1611金川工業団地内 ☎(0552)62-2111(代) Fax.(0552)62-9101  
厚田営業所 〒150 東京都渋谷区神宮前4-21-1 ☎(03)3423-0366(代) Fax.(03)3423-0422  
中野営業所 〒165 東京都中野区丸山2-7-13 ☎(03)3223-1221(代) Fax.(03)3223-1255  
田原営業所 〒406 山梨県御坂町下黒駒1611金川工業団地内 ☎(0552)62-9114(代) Fax.(0552)62-9101

大阪営業所 〒541 大阪市中央区淡路町2-4-3  
福岡営業所 〒810 福岡市中央区大名2-10-27  
仙台営業所 〒980 仙台市若林区通見塚2-4-1  
EIKKO U.S.A. 8211E Riverside Blvd. #106 Scottsdale, AZ 85255

☎(06) 222-0808(代) Fax.(06) 231-1256  
☎(092)714-2831(代) Fax.(092)751-4575  
☎(022)282-8551(代) Fax.(022)282-8554  
☎(022)502-5354 Fax.(022)502-5358



OSAKI



# 集中管理 だけじゃ物足りない。

## かゆいところに手が届く、ビル管理システム **OSMAC-mini** 中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的ではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隅々にまで神経が行き届いた管理を実現します。

### 特 長

- 基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。
- 時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。
- 登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。
- 全免停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。
- 免停点数最大48点、負荷監視点数最大96点と豊富な管理点数。
- 故障および警報信号を外に取り出せるので、無人管理が可能。
- 設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。
- 筐内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。

### 主な仕様

- 定格電圧/100V±10% ●定格周波数/50Hz、60Hz共用 ●管理点数/運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、発停制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点 ●表示/5×7ドット モノグリーン蛍光表示管 40字×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示 ●設定操作部/シートフラットキー、蛍光表示管との対話方式 ●記録/停復電記録、状態変化記録、故障・警報記録、日変わり記録、時間外運転記録(日報、月報)、個別発停操作記録、運転時間記録、カレンダー設定変更記録 ●停電補償/240時間 ●外形寸法/壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

## 大崎電気工業株式会社

本社/〒141 東京都品川区東五反田2-2-7  
システム機器営業部第2課 ☎03(3443)7176

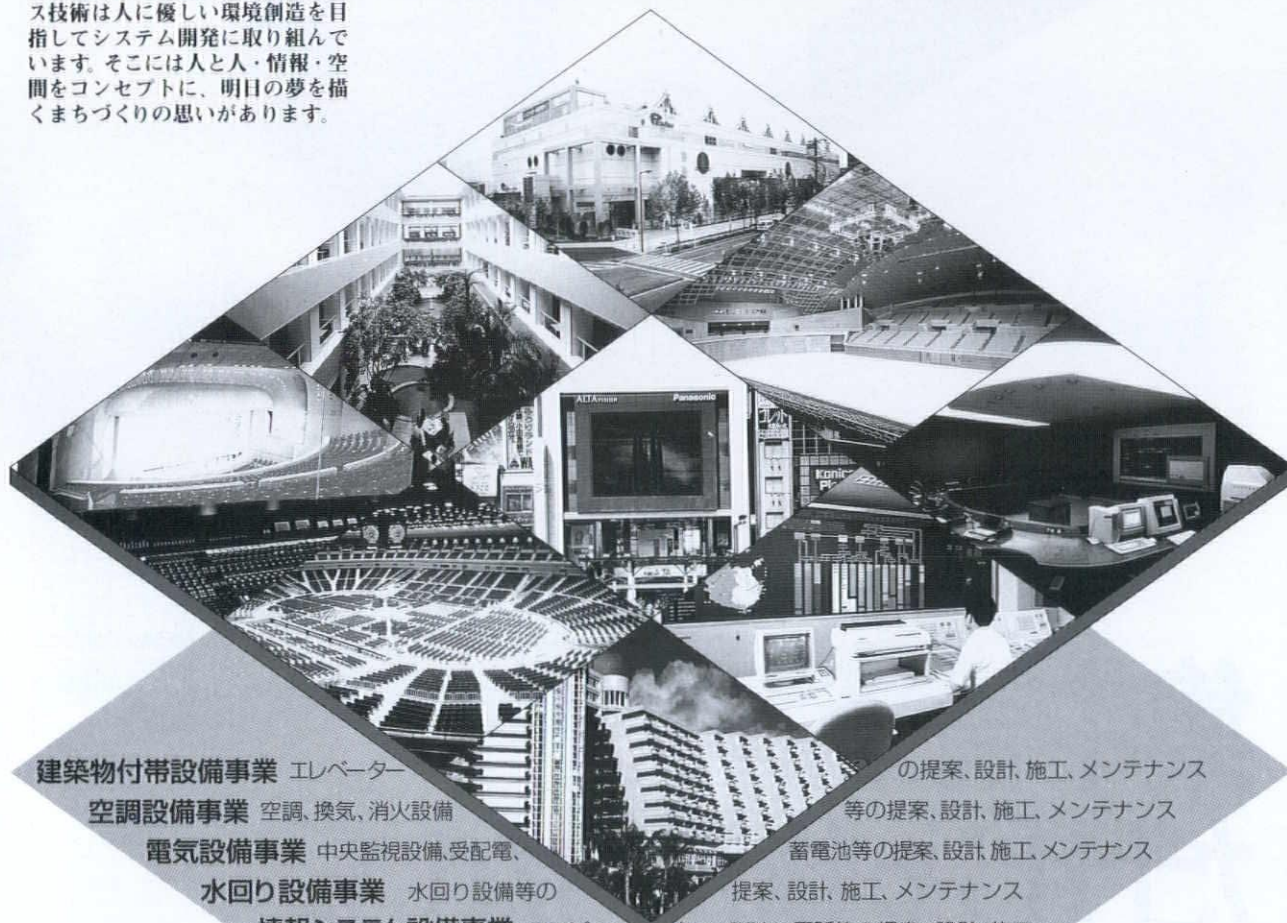
大阪支店 ☎06(373)2556 札幌営業所 ☎011(251)6622 仙台営業所 ☎022(223)3747  
千葉営業所 ☎043(241)7447 横浜営業所 ☎045(664)5561 広島営業所 ☎082(243)1611  
沖縄営業所 ☎098(832)7406



# National/Panasonic

## 私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



**建築物付帯設備事業** エレベーター

**空調設備事業** 空調、換気、消火設備

**電気設備事業** 中央監視設備、受配電、

**水回り設備事業** 水回り設備等の

**情報システム設備事業** コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

**映像・音響設備事業** 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

**まちづくり事業** 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

松下電器産業(株)システム営業本部  
建設システム営業部

☎03-5460-2809

北海道支店 ☎011-222-5815

東北支店 ☎022-223-5111

首都圏建設システム支店 ☎03-3436-5045

神奈川支店 ☎045-682-3701

中部支店 ☎052-951-6010

関西支店 ☎06-949-2251

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0678-21-3133

九州支店 ☎092-431-1100

沖縄支店 ☎0988-53-2826

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



# AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

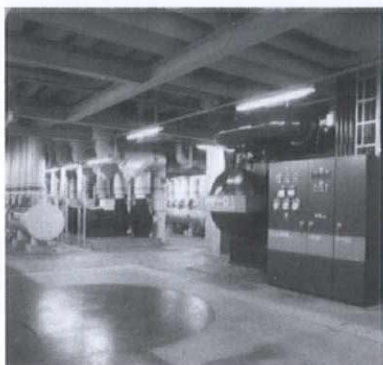


KANDENKO



快適な環境をお届けするのも  
——関電工の技術です。

## 個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…  
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、  
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。  
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が  
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河  
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、  
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する  
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ  
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ  
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快  
適な環境の場をお届けしています。

# 関電工

お問い合わせは/環境設備部

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TTN 4431)2111



# 時代が求める快適空間へ。

## より経済的に、最適なリニューアルを実現する 確かな診断技術。

綿密な調査・診断により、リニューアルが必要な部位を的確に把握。リニューアル効果確認のためのプログラム、高効率な施工法の採用などにより、最少限の費用で、また短期間でご要望通りのリニューアルを実現します。



配筋非破壊システム

## 静かに、クリーンに、リニューアルをすすめる カームジェット工法。

高速水噴流により、床や壁のコンクリートのみを破碎。破碎したコンクリートやジェットの排水を完全回収するカームジェットシステムは、無振動、低騒音で粉塵も発生しません。静かで、クリーンなカームジェット工法なら業務を続けながらのリニューアルも可能です。



超高压水を噴射するカームジェットのノズル

快適度を高める

## アメニティの総合診断。

室内の温湿度分布、気流、粉塵、CO<sub>2</sub>濃度、振動、照度など。快適性にかかわるさまざまな要素を系統的に診断。さらに問診からそれぞれの設備機器の性能診断にいたるまで、きめ細かに収集、解析、症状ごとに総合的に診断します。そしてトータルコンサルテーションを通し、設備機器や照明のオペレーションを実施、より快適な環境を実現します。

未来も快適に——リニューアル後の

## 事業収支評価システム。

リニューアル後の事業をさらに活性化、発展させるためには、綿密かつ複合的な視点をもつプログラミングが必要です。カジマでは、土地の所有形態から事業手法、建物規模、用途、資金調達など、さまざまな角度から検討でき、またビルオーナーとテナントといった異なった立場からも検討できる事業収支評価システムを採用。リニューアル後の事業の採算も予測したうえで、最適なプログラムで実行します。

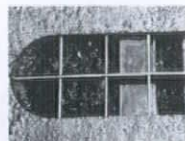
リニューアルならトータルな技術力と

豊富な実績をもつカジマにお任せください。

私たちは、単なる改修・補修ではなく建物そのものの活性化を図り、新たなビジネスチャンスを生み出す付加価値の高い空間づくりをご提案いたします。リニューアルなら多様なニーズに高度な技術と豊富な実績・ノウハウでお応えするカジマに、ぜひ一度ご相談ください。



床コンクリート破碎状況(カバー内)



鉄筋・配管が残された破碎後の床



多彩なニーズに応えるカジマのリニューアル技術。

R

E

N

E





**W**

**A**

**L**

**in 鹿島**

**KAJIMA CORPORATION**

本社: 千107 東京都港区元赤坂1-2-7

お問い合わせは

技術営業部 03(3404)2011



# 四季宴会

KARUIZAWA  
MEETING  
& PARTY



軽井沢  
ホテル 鹿島ノ森  
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:  
ホテル 鹿島ノ森 予約係  
☎03(3478)6220  
現地 ☎0267(42)3535(代)  
FAX: 0267(42)5335



# 大興物産の海外建材シリーズ

## No.4 ガラス



埼玉・バイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーティアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ  
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076  
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915  
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996  
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179  
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074  
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867  
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719  
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248  
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722  
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996  
シンガポール  
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714





ロビーラウンジ

## ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、

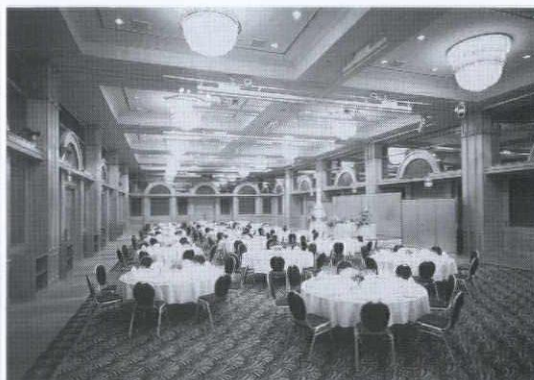
あなたの新しい物語がはじまります。

### (客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。  
(シングル¥15,000〜 ツイン¥25,000〜) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した  
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。  
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角  
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最大  
800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完  
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの  
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

### (レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【ブラスリー ハーモニー(2F)】  
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】  
●アフリカンムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】  
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】  
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



大宴会場 永代

HOTEL  
*East*  
**21**  
TOKYO

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。  
東陽町駅〜ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ  
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

**ホテル イースト21東京**

〒135 東京都江東区東陽6-3-3  
TEL 03(5683)5683代 FAX 03(5683)5775







日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

**日新工業株式会社**

営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

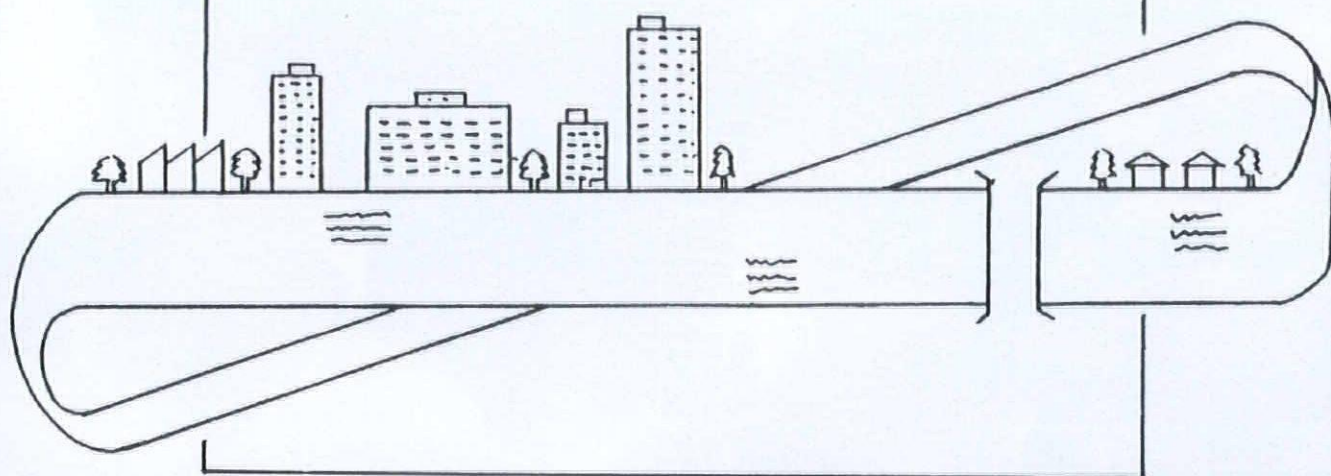
東京	☎03(5644)7221 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(245)0201 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)

広告についてのお問合せの際は<<SDを見て>>と御明記願います



# 水環境を

# クリエイトする



株式会社  
**西原**  
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18  
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

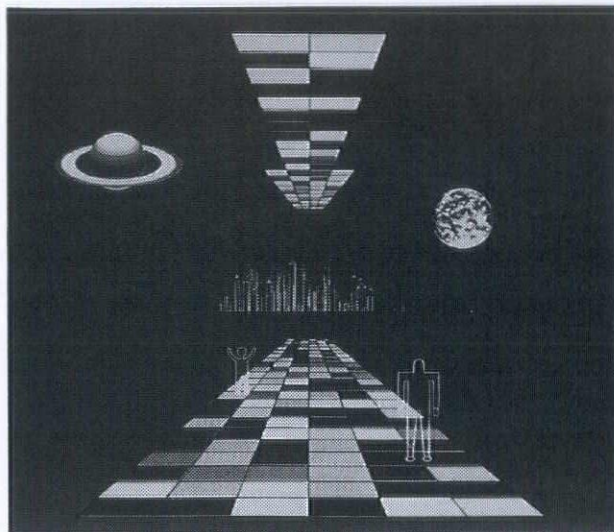


快適な環境を  
つくります。

営業種目 設計・施工・監理

●電気設備

受変電、幹線  
動力、制御装置  
電話、放送、インターホン  
防犯、防災  
中央監視制御  
システム計装



●空調・給排水・衛生設備

空気調和  
工場配管  
水処理  
コージェネレーション  
クリーンルーム

●プラント

プラント計装  
システムエンジニアリング

●情報通信設備

情報通信ネットワーク  
情報処理  
通信システム  
放送システム

●電力流通設備

受変電  
架空送配電  
地中送配電

人と都市の

活力と魅力にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400  
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03) 3454-7311



# 都市アート計画。



ビルの表情を個性ゆたかに彩る、三和のステンレス建材です。  
 どこまで個性を主張できるか。どれだけ都市に美しく調和できるか。それが、これからの建築に求められる大きなテーマです。三和のステンレス建材なら、建物のイメージにあわせてデザインは自由自在。その高級感あふれる質感と、耐蝕性にすぐれた特性を活かし、ビルのフロントはもちろん、インテリアからエクステリアまでを個性ゆたかに彩ります。ビルに、都市に、アート感覚をプラスする、先進のマテリアルです。

## STAINLESS CONSTRUCTION MATERIAL

三和シャッター工業株式会社

本社 〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル44階 ☎ 03(3346)3011  
 関西ビル建材事業部 〒532 大阪市淀川区宮原4-4-50 真和ビル ☎ 06(396)6811



# イメージが、かたちになります。



●笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム

家具・室内 設計製作

株式会社 青島商店

〒105 東京都港区芝大門1丁目1番11号 Telephone : (03)3431-7788 Facsimile : (03)3459-0878



次の快適をみつめて。  
トーヨー理研は、少し先にいます。



そよ風が贅沢だなんて、  
どんな時代だろう。



株式会社トーヨー理研

空調 建材 エンジニアリング 防災

東京本店 〒102 東京都千代田区三番町8番地7 第25興和ビル TEL. 03-3221-1910(代) FAX. 03-3262-3635

## VALUEとQUALITYを追求するバルカー

### 鉄骨耐火被覆材

**バルカウエット**.....湿式吹付けロックウール

**バルカロック**.....乾式吹付けロックウール

**バルカロック** **W** 乾式吹付けロックウール(スラリー工法)

**リコボード**.....繊維混入けい酸カルシウム板

### 耐火遮音間仕切壁

**バルカウエットウォール** 湿式吹付けロックウール  
耐火間仕切壁



日本バルカー工業株式会社

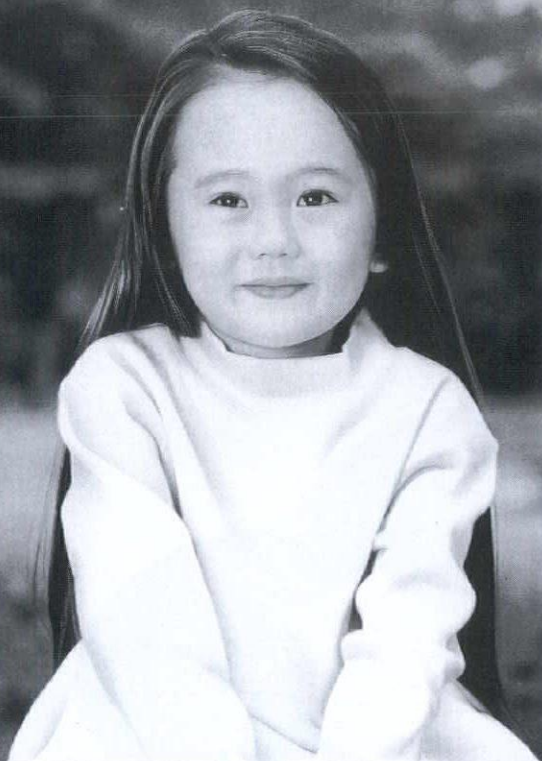
本社 〒100 東京都千代田区丸の内3-3-1(新東京ビル) ☎03(3212)8571

工事事業部 〒105 東京都港区芝3-39-8(コンチエルト三田ビル) ☎03(3769)1721

札幌事業所 〒060 札幌市中央区北三条西2-1(カミヤマビル) ☎011(222)7038



自然より自然に、  
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

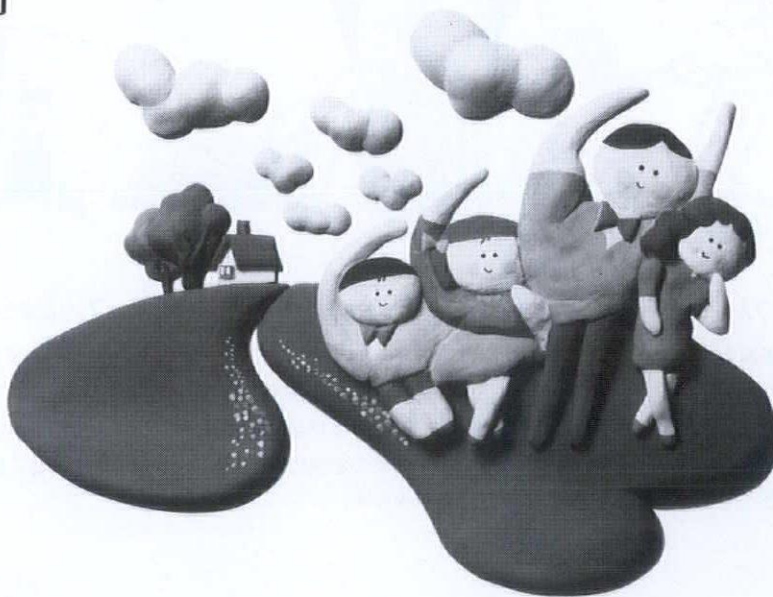
もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



確かな歩み未来まで……



**総合設備の設計施工**

電気・水・空気・光・情報の各施設

心のふれあい大切に

**株式会社 中電工**

本店/広島市西区上天満町1番15号

TEL(082)291-7411

支店/広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪



ビルオートメーション  
オープンにしたらBAに創造力が生れた。



「オープン」だから、リーズナブル。

高性能で低価格な量産品機器をベースに、きんでん独自のエンジニアリング・ノウハウを生かし機能的で信頼性の高い「A&Aシステム」が実現。お客様にご満足いただける価格でご提供できます。

「オープン」だから、フレキシブル。

制御プログラムをリモートステーションに実装する分散処理システムの採用で、さまざまな建物や施設の運用目的にあわせた対応が可能。将来の拡張にも柔軟に対処することができます。

「オープン」だから、ユーザーオリエンテッド。

お客様のご要望をじゅうぶんに反映させ、細部にいたるまで、投資コストを生かす最適なシステムを構築。導入後の変更や保守はお客様ご自身で行うこともできます。

総合設備エンジニアリング  
**株式会社 きんでん**

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531  
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141



鹿島出版会  
東京都港区赤坂6-5-13  
電話:03-5561-2111(代)  
振替:00160-2-180883

年間定期購読料  
25,000円(特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー常備店  
〔東京〕  
八重洲ブックセンター  
03-3281-8203  
三省堂本店(神田)  
03-3233-3314  
書泉ブックマート  
03-3294-0011  
紀伊国屋本店 03-3354-0131  
大盛堂書店 03-3463-0511  
〔大阪〕  
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167  
〔札幌〕  
旭屋書店 011-241-3007  
〔横浜〕  
有隣堂本店 045-261-1231  
〔京都〕  
大龍堂書店 075-231-3036  
〔大学生協内書店〕  
東北工業大学 東京工業大学  
法政大学工学部 早稲田大学  
理工学部 関東学院大学

**9311 アンソニー・ラムズデン/DMJMの新作** 1950円  
アメリカの大組織事務所DMJMの新作を紹介。細江勲夫の新作。ブルーノ・タウト再発見。ウィトゲンシュタインのストンボロー邸。田窪恭治/サン・ヴィゴール・ソ・ミュー礼拝堂プロジェクト1

**9312 SDレビュー1993** 2400円  
第12回SDレビュー誌上発表。クライン・ダイサム・アーキテクツ、和田克明、計画意匠研究所/片木篤十有馬立郎、吉本剛/吉本剛建築研究室、他。関西国際空港旅客ターミナルビル

**9401 原 広司** 3500円  
地球外建築、空中都市、梅田スカイビル、JR京都駅、厚部、グラーツ・影のロボット、ヤマトインターナショナル、他。論文:原広司、B.ボグナー、三宅理一、他。写真:宮本隆司、大野繁

**9402 台湾現今設計観察** 1950円  
建築と都市を中心とした台湾現代デザインを紹介。台湾建築:李祖原、吳增榮、潘賢、陳瑞憲、他。グラフィック:劉潤、陳龍宏。写真:鍾春鋒。取材・監修:村松伸、小嶋一浩

**9403 バイオクライマティックタワー** 1950円  
自然環境との適合を課題とした高層建築を模索するマレーシアの建築家ハムザ&ヤング。文:池田武邦、ケン・ヤング、他。〔都市を考える—The Cell Cityの提案〕大都市を複数の細胞に区分する新提案

**9404 堂夢の時感/木島安史の世界** 3000円  
作品:青狸庵、孤風院、YAS居、球象洞森林館、折尾スポーツセンター、設計競技作品、他。文:木島安史、桐敷真次郎、木村俊彦、高橋青光一、橋本文隆、他。略年譜、作品データ、執筆一覧

**9405 東ドイツの近代建築** 1950円  
旧東ドイツの近代を席巻した表現主義建築を、35都市にわたる調査をもとに紹介。クリンゲンベルクのダム(H.ベルツィヒ)、アインシュタイン塔(メンデルゾーン)、他。文+写真:長谷川章

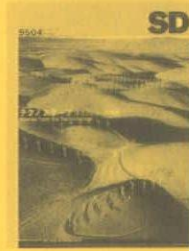
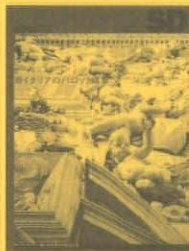
**9406 アートがつくるワークプレイス** 2500円  
「働く人々のための空間とアート」に着目し、海外の事例を紹介。文:南條史生、D. F. ハンセン。アーティスト:アンドレア・ブラム、他。企業等:IBM、ブリティッシュ・カウンシル、他

**9407 ビーター・ウォーカーの世界** 2200円  
アメリカ・ランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、IBMクレアレイク、バーネット・パーク、ロングエーカー公園、他

**9408 マッシミリアーノ・フクサス** 1950円  
フランスを中心に展開する近作を紹介。ロアンのヨーロッパ建築研究所、他。文:D.マンドレリ、堀池秀人、他。〔異界の僧院—モルドバのルーマニア正教会堂〕 写真:平剛、文:山崎暁史

**9409 思考と建築・都市:アメリカ東海岸の新たな動向** 1950円  
B.シャーデル&ギブニス、マイケル・ソーキン、他。文:松樹強、他。〔「手法」から「縁起」へ/吉川油脂寄宿舎〕TAO ARCHITECTS/野田俊太郎、写真:堀内広治

**9410 トロハの選した構造と空間** 3000円  
鉄筋コンクリートを表現の素材として追求したエドアルド・トロハの遺作を紹介。〔芸術都市への蘇生/イタリア・ジベリーナの試み〕地震で全壊した同市の復興プロジェクト



**9411 シティ・ターミナルの空港建築**  
世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルの技術的、デザインの可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際空港、他。文:ディヤン・スジック、他  
3500円

**9412 SDレビュー1994**  
第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、J.ビザル+P.ルーゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田堀繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇大、他。〔国際競作プロジェクト/オシヴィエンチム孤児院〕  
1950円

**9501 山本理顕**  
作品:緑園都市、岩出山町立統合中学校、憩居性老人デイケアセンター、保田第一団地、他。写真:北嶋俊治、大野繁。論文:山本理顕、宇野求、T.ヘネガン。鼎談:横文彦+植田実+山本理顕  
3000円

**9502 南イタリアのバロック建築**  
地中海の島シチリアとプーリア地方サレント半島のレッツェを中心に、南部イタリアのバロック建築を紹介。掲載都市:バレルモ、シクリ、他。写真:小野一郎。文:竹山博英、長谷川正允、岡田哲史  
1950円

**9503 集合住宅の現風景**  
近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文・作品:荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安光、元倉眞琴。座談会:植田実+室伏次郎+松隈洋  
1950円

**9504 テクノスケープ**  
テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視線を提示する。文:宇野求、岡河貴、永瀬唯、A.ロジェ、他。座談会:中村良夫+三谷徹+宇野求。東京湾岸マップ  
3000円



**9505 メガ・アーキテクチャ**  
巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作を紹介。シャルル・ド・ゴール空港、TGV-RER駅、他。対談:安藤忠雄+P.アンドルー。〔神戸外国人居住地の形成とその展開〕文+構成:坂本龍比古  
1950円

**9506 デジタル・アーキテクチャの可能性**  
インタビュー:原広司、伊東豊雄、N.M.ディナーリ、他。CAD研究室将来の可能性:笹田研究室、両角・位寄研究室、他。〔自然と共存する家具〕写真:浅川敏  
1950円

**9507 柳澤孝彦/美術館の空間とディテール**  
作品:東京都現代美術館、富岡市立美術博物館、郡山市立美術館、他。文:鈴木博之、内藤康、青木淳、大野秀敏。座談会:宇佐美圭司+柏木博+柳澤孝彦。写真:村井修  
2700円

**9508 まちのパブリックスペース**  
人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリ作家の近作からみる。作品21点。文:中川理、仙田満。オンライン座談会:青木孝+中川理+花田佳明  
1950円

**9509 丹下健三**  
最新作シンガポールの超高層ビル[UOBプラザ]、新宿の新たなスカイラインを構成する〔新宿パークタワー〕を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。  
3800円

**9510 環境に呼応する建築:シーザー・ペリの最新作**  
近年、海外での活躍が目されるペリの最新作を紹介。〔ランドマーク・グラフィティ—「タワー・アート in 通天閣:ヴァナキュラーな電脳都市展」より〕  
1950円





## アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武蔵 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



## 菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



## 白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、夙別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井昱磨。座談＝大江宏+藤井正一郎+宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



## 象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、造修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



## 横文彦

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多様性を加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



## 伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



## 高松 伸

## 高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁き溜まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。緑陣I、III、他。

3800円



## 早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



## ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



## 続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川恵英×安村基。

3708円



## ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスボラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



## ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールーその歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレンゴの形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



## 横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館(TEPIA)というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



## 磯崎新 ① 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流に分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

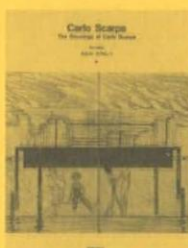
4800円



## 磯崎新 ② 1985-1991 part 2

part1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティームディズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人]舞台美術、他。

4500円



## カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収録。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

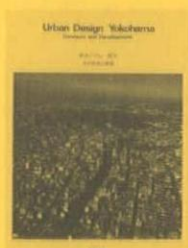
3500円



## 安藤忠雄 ① アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトII、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



## 都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×義原敬×小澤恵一、他。

5000円



特集

## 長谷川逸子 1985-1995

編集長：相川幸二  
編集スタッフ：  
寺田真理子 高木伸哉  
山田良 大野由美  
飯塚りえ  
アドバイザー：伊藤公文発行人：河相全次郎  
編集人：長谷川愛子発行所：鹿島出版会  
〒107 東京都港区  
赤坂6丁目5番13号  
電話：  
(03) 5561-2551 営業  
(03) 5561-2555 編集  
FAX：  
(03) 5561-2561 営業  
(03) 5561-2565 編集  
TELEX：  
02422467 KAJIMA J  
振替00160-2-180883番印刷・製本：  
凸版印刷株式会社  
〒174 東京都板橋区  
志村1丁目11番1号  
電話：  
(03) 3968-5111 案内取次店：トーハン・日販・  
大阪屋・大洋社・  
栗田出版販売・誠光堂・  
鈴木書店・西村書店・中央社特別定価：3,000円  
[本体2,913円]年間直接購読料：25,000円  
特別定価号+送料込み表紙：  
山梨フルーツミュージアム  
表紙写真：大橋富夫  
表紙デザイン：小泉均

6	世界に開く建築を求めて	長谷川逸子
24	12 山梨フルーツミュージアム 公共建築の新時代と新しいモダニズムの生命力の予感	岡河 貢
36	26 すみだ生涯学習センター 解放と発見	クリスティーン・ホーレイ 訳=手塚貴晴
46	38 大島町絵本館+ふれあいパーク アクティビティを喚起する等身大の公共建築	小嶋一浩
59	48 滋賀県立大学体育館 52 氷見市海峰小学校 54 氷見市仏生寺小学校 氷見の建築文化	長谷川逸子
94	60 氷見市海浜植物園 64 STMハウス 68 フットワーク コンピューターセンター 72 岩木山プロジェクト 74 富ヶ谷のアトリエ 76 世界デザイン博覧会インテリア館 80 奈良シルクロード博覧会浅茅原休憩施設 82 横浜グランモールプロジェクト 84 湘南台文化センター 進化し続ける才能——長谷川逸子	ピーター・クック 訳=千葉 学
115	98 熊本の住宅 100 練馬の住宅 102 東玉川の住宅 104 自由が丘の住宅 106 葉っぱの住宅 108 不知火病院 110 菅井病院 112 コナ・ビレッジ 住宅建築をつくり続けたい	長谷川逸子
149	116 熊本市営託麻団地 118 茨城県管滑川アパート (仮称) 120 長野市今井ニュータウン (オリンピック村) 122 KJプロジェクト 124 マレーシアの住宅 126 天草ローズガーデン 128 CP防波堤プロジェクト 130 T市庁舎プロジェクト 132 横浜港国際客船ターミナル国際コンペ 136 カーディフベイ・オペラハウスコンペ 140 新潟市民文化会館および周辺整備計画 (仮称) 対談：形式としての建築から公共としての建築へ	多木浩二×長谷川逸子
157	作品1985-1995	
166	連載：apple tomology MOVE FORM トムの時空形象学 2 動一ム	戸村 浩
169	展覧会レポート： ものの存在性：「1970年—物質と知覚」展より	松畑 強
173	新刊紹介	
174	書評	
178	ニュース 昼と夜とを描き分ける：ジャン・ヌーベル展「リュミエール」と講演会より	面出 薫
180	お知らせ	
182		
185	海外建築情報リミックス：都市のインフラストラクチュアと建築 その3 「インフラをつくる」	



Special Feature:

# Itsuko Hasegawa 1985-1995

Chief Editor: Koji Aikawa  
Associate Editors:  
Mariko Terada  
Shinya Takagi  
Ryo Yamada  
Yumi Ohno  
Rie Iizuka  
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai  
Executive Director:  
Aiko Hasegawa

Published by  
Kajima Institute Publishing  
Co., Ltd.  
6-5-13 Akasaka,  
Minato-ku, Tokyo 107,  
Japan  
TEL:  
03.5561.2551 (Management)  
03.5561.2555 (Editing)  
FAX:  
03.5561.2561 (Management)  
03.5561.2565 (Editing)  
TELEX:  
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥3,000  
¥30,000 a year  
¥50,000 two years

Order Form: Page 204

Cover: Museum of Fruit,  
Yamanashi

Cover Photograph:  
Tomio Ohashi  
Cover Design:  
Hitoshi Koizumi/NID

6	<b>In Search of Global Architecture</b>	Itsuko Hasegawa translation: Hiroshi Asano
12	Museum of Fruit, Yamanashi	
24	<b>The Era of New Public Architecture and Harbinger of a New Vitality of Modernism</b>	Mitsugu Okagawa
26	Sumida Culture Factory	
36	<b>Disclosure and Surprise</b>	Christine Hawley
38	Ohshima-Machi Picture Book Museum	
46	<b>Human-scale Public Architecture Evokes Activities</b>	Kazuhiro Kojima
48	The University of Shiga Prefecture, Gymnasium	
52	Kaiho Elementary School, Himi	
54	Busshoji Elementary School, Himi	
59	<b>Architecture of Himi</b>	Itsuko Hasegawa translation: Hiroshi Asano
60	Himi Seaside Botanical Garden	
64	STM House	
68	Footwork Computer Center	
72	Mt. Iwaki Project	
74	Atelier in Tomigaya	
76	Nagoya World Design Expo Pavilion	
80	Nara Silkroad Expo, Asajigahara Rest Area	
82	Yokohama Grandmall Project	
84	Shonandai Cultural Center	
94	<b>Ever-Evolving Talent of Hasegawa</b>	Peter Cook
98	House in Kumamoto	
100	House in Nerima	
102	House in Higashi-Tamagawa	
104	House in Jiyugaoka	
106	Leaf House	
108	Shiranui Hospital, Stress Care Center	
110	Sugai Internal Clinic	
112	Cona Village	
115	<b>I want to keep designing houses</b>	Itsuko Hasegawa translation: Hiroshi Asano
116	Takuma Housing project, Kumamoto	
118	Namekawa Housing, Ibaraki	
120	Imai Newtown Housing, Nagano (Olympic village)	
122	KJ Project	
124	House in Malaysia	
126	Rose Garden, Amakusa	
128	CP Jetty Project	
130	T Civic Center Project	
132	Yokohama International Port Terminal	
136	Cardiff Bay Opera House	
140	Niigata-City Performing Arts Center	
156	<b>True Regionalism is Global</b> Reflections on the conversation with Koji Taki	
157	<b>Data List of Works 1985-1995</b>	
166	Series: <b>MOVE FORM</b> apple tomatology 2 <b>DOVE</b>	Hiroshi Tomura
169	Exhibition Report: From the exhibition "Matter and Perception 1970"	Tsuyoshi Matsuhata
173	Book Information	
174	Book Review	
178	News: From the exhibition "Lumières" and Lecture by Jean Nouvel	Kaoru Mende
180	Announcements	
182		
185	Eminent Works Abroad: City Infrastructure and Architecture 3 Creating Infrastructure	



Special Feature

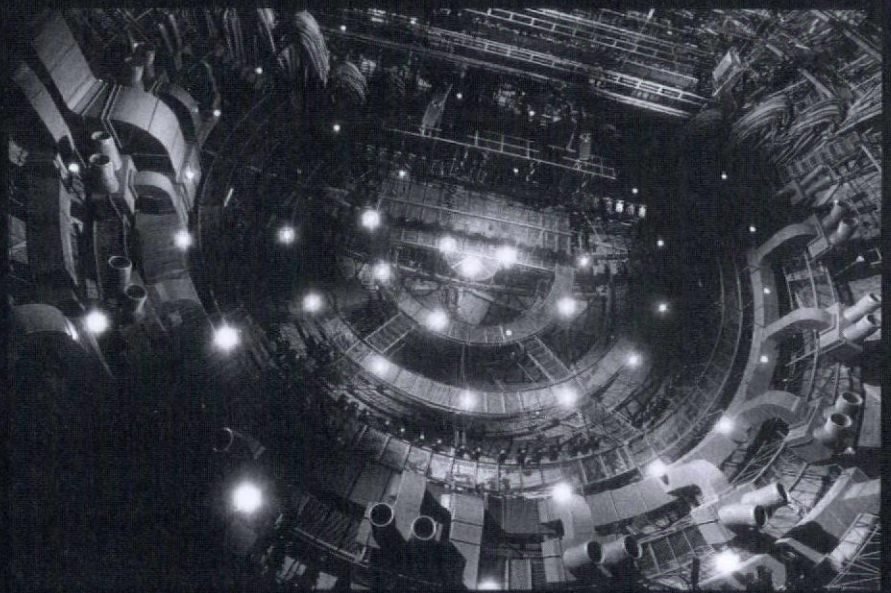
# Itsuko Hasegawa

Opening up a New Architecture Scene Through Communication

特集

## 長谷川逸子

コミュニケーションが開く建築シーン





# In Search of Global Architecture

Itsuko Hasegawa

## The Idea of Harappa

The residential projects of the first 10 years of my career were featured in the April 1985 issue of SD. The development of these projects was also a process of destroying my naive academic theories of the autonomy of architecture by actually participating in residential design, and broadening my mind. The result of several years of communicating with clients, designing, and making models was a confirmation of the reality of overwhelming diversity. It was a search for and trial of methodology to deal with complex heterogeneous issues.

As a student without any commissions, I was sketching many varieties of space with two contrasting ideas; substance and fiction, ordinary and extraordinary, transparent and opaque. While working on the design of the equilateral triangle-shaped house in Yaizu, I started to seek an architecture in which simple space coexists with nature and complex architectural ideas beyond this simplistic dualism. For example I designed a house in Midorigaoka, a plain concrete box whose interior was divided by a large slanted wall. Instead of pursuing architectural autonomy and forcing theories on

projects, I began to find architecture through communication with clients and to perceive of architecture as incidental dimensions rather than permanently fixed notions. Even in my very early rather formal work, interior spaces were left positively as a *garando* (empty space). The *garando* provides maximum flexibility, but at the same time demands an understanding of the owner's life style, requiring closer communication.

The Shonandai Cultural Center, which I won in an open design competition in 1986, was my first public building commission. Since the program included a community hall, a children's museum and a theater, and was closely tied to local citizens' activities, I wanted the design process to be open and to include local participation. We held a number of public forums.

The site was created by land redevelopment but remained vacant for almost 15 years. It was mostly used by urban gardeners for growing vegetables, and as a playground for children. If the original building program had been followed literally, the site would have been covered with massive structures. I instinctively felt that there was a unique potential for public space in this untouched *harappa*

## 世界に開く建築を求めて

長谷川逸子

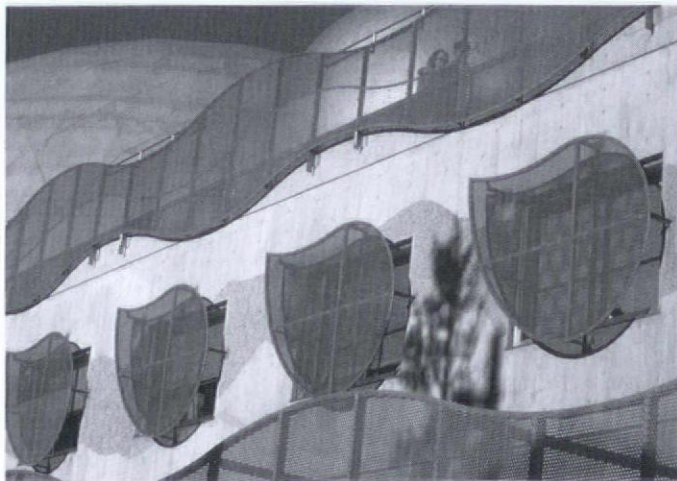
### 原っぱの思想

初期10年間の住宅建築はSD1985年4月号にまとめられているが、住宅の設計を通して具体的なものへの関心を展開していくことは、理論武装し建築の自律性を探求することが建築であると考えていたそれ以前の研究室的思考が打ち壊される過程だとも言える。数年にわたりクライアントと意見交換をし、その時々のも出来事と対応しながら設計図と模型をつくり続けていく作業は、把握しきれないほど変化するものに取り囲まれて生きていることの確認であり、異質なものと多様化した関係を捉えるための方法の探求であり、社会的実践とっていいものだった。

実施のチャンスもなく研究室で住宅のスタディをしている頃は、虚と実、日常と非日常、透明と不透明というふたつの領域が対峙した空間を数多くエスキースしていたように思うが、直角二等辺三角形を組み上げた〈焼津の住宅〉の実施設計を行う過程で、二元論を越えて両者が自然に共生する建築、単純な空間であっても複合的な建築を目指すようになっていった。そしてシンプルなコンクリートボックスの中に、1枚の斜めの壁を持つ〈緑が丘の住宅〉などを実現させてきた。建築の自律性を追求し論理を優先して作品づくりにねじ込むのではなく、クライアントとのコミュニケーションの過程そのものの中に建築

を見出し、固定した作品というよりも出来事の次元として建築を捉えていきたいと考えてきた。初期に設計した建築は、一見すると形式性の強いものだが、内部は積極的にガランドウをつくろうと考えていた。逆説的なことだが、ガランドウの空間は最大限のフレキシビリティを確保するけれども、クライアント側にどのような生活をするかという具体的思考を要求することになり、ガランドウをつくるためには数多くのコミュニケーションが必要となった。

'86年の公開コンペで獲得してスタートした〈湘南台文化センター〉は、初めて携わる公共建築の設計であった。施設の内容は、地域の人々の生活と密着した公民館、子ども館、市民劇場などの機能をもつローカルなものであり、コンペ直後からできるだけ公開しながら設計を進めたいと考え、利用者との意見交換の場が数多く設けられた。敷地はまちの区画整理によって生じたもので、15年近く空地となっていたが、



Shonandai Cultural Center



(raw field). A concept of "architecture as topography" was born, and 70% of the programmed functions were built underground to retain the character of *harappa*.

In retrospect, *garando* (empty space) in houses and *harappa* (fields) in public buildings are the same concept. When I think of architecture as a place, I do not have any preconceived notion of forms. I prefer to describe possibilities for the future. I use the word "place" as a space of flexibility. Rather than creating architecture as a social object, the space should be created as a result of the participation of many concerned citizens.

As *garando* is the base of my house designs, the essence of public buildings is *harappa*, a communication space open to all people, a field of flexibility for all kinds of activities, a positive void space where people can gather for politics and arts. The architecture defines the form, and the space thus created has a meaning. My wish, however, is to create a place of performance for all people as a proto-architectural space.

Public buildings should be built as a result of inclusive public dialogues. The responsibilities cannot be solely left in the realm of

bureaucrats and architects. A vision that makes imaginative architecture possible often comes from a creative design process involving the diverse visions of many people, rather than from a small number of experts. To maximize the benefit from this inclusive approach, we must find a new methodology of decision making other than the majority rule and representation system.

We are not trying to define the meaning of "public-ness" nor introduce new principles to the concept of public-ness. A community of 8,000 obviously has different needs from that of 60,000, 500,000 or 10 million. If democracy means to unify all opinions in society, we still do not have a tool to do so, and even if it is possible, public opinion tends to be too changeable to pin down.

In these circumstances, the most effective method for the design of public buildings is to incorporate a sense of public-ness in the actual activities to be housed in the building. We first establish a well-thought-out concept as a basis of public debate and adopt as many changes as appropriate to finalize it into a practical place for architecture. For this purpose, the initial concept must be exciting to the people, as well as flexible.

その間この空地では、都市農業をしている人達が野外活動の場としていろいろと利用したり、子供の遊び場となっていたり、様々な使われ方をしていたようである。要求されている施設の規模をともに建てれば大きなヴォリュームのビルディングとなってしまうが、私はむしろこのままの何もない空地の中にこそ、パブリックな空間の可能性が潜んでいることを直感し、そうした原っぱ的空間を残すため建物の床面積の70%を地下に埋め込み、地上を開放された空間とした。この時「地形としての建築」という概念が生まれた。

振り返れば、住宅建築のガランドウと公共建築の原っぱは同じレベルにあった。建築＝場を考える時、私は建築自体の形式をイメージしてはいない。可能性を多く残している「未来」の有り様を描きたいと考えている。場という言葉は、変化に対応できるフレキシビリティを持っている空間という意味で使っている。建築を社会的なオブジェとしてのレベルに固定してしまうのではなく、いろいろな人々が関わりを持つことによって立ち上がってくる空間として機能することを考えている。住宅のベースをガランドウとしてつくった時と同じように、公共建築の理念は原っぱではないかと考え始めている。あらゆる人たちに開かれているコミュニケーション空間。いろいろな活動を引き受けられる自由な場。皆が自由に集まって集会もできれば、芸術も立ち上がる積極的なヴォイドの空間。建築は形態を伴い、空間は意味を発生するが、建築以前に人々のパフォーマンス・プレイスとしての場をつくりあげたい。

公共建築は非常に多くの人々が参加する、より大きな対話の結果としてできるものでなければならず、単に行政や建築家の考えだけでできるわけではない。小数の専門家だけでなく、幅広い人々の参加が重要であり、それらの重なり合うヴィジョンが創造的な建築を可能にする。しかし、そのためには単に多数決や代表制による同意のやり方で

はなく、もっと別の方法が見出されなければならない。

公共とは何かということが求められているのではない。公共という概念の中に何か新しい原理をつくりあげることが重要なわけではない。一口に公共といっても、8千人の公共と6万人の公共と50万人の公共と1000万人の公共は異なる。民主主義が社会を構成するひとりひとりの意見を総合することにあるとしたら、そのためのテクノロジーは未だに不十分であり、仮にそれが達成されたとしても民意というものは常に流動する川の流れのようなとりとめのめないものになる可能性も高い。

このような状況の中で有効なのは、よく考えられたひとつのアイデア＝計画を提示して、これをコアとして開かれた意見交換の場を設定し、プロジェクト＝建築が建ち上がっていくような場をつくりあげることである。そのためには、提案される計画そのものが人々の想像



Sumida Culture Factory



Most importantly, the dialogue must be free and open. Under the current bureaucratic systems, it is difficult to employ this method, but we must understand that the essence of the public building is in its design process. We call this place of dialogue "Utage," the banquet, or a space of conviviality, or sometimes "the opening up of a new architectural scene through communication." We advocate re-examining the idea selected in a competition in a public forum, and revitalizing the creative process of architecture. The role of architects as managers of both the physical environment (hardware) and programs (software) is extremely important.

### The Idea of Reality

Through the experience of the public design process of Shonandai, Sumida Cultural Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum and others, I came to recognize that even at a small community level, world affairs (such as the fall of the Berlin Wall) have a certain impact on the local way of thinking. Since the end of the Cold War, there has been a new wave of globalization, not necessarily of nations and cities, but probably in the form of reorganizing

information networks on a global basis. The conventional concept of cities and regions is no longer adequate.

Regionalism was one of the main themes of the Sumida Cultural Factory Design Competition. But our discussions with local citizens during the final design stage revealed that their interests and concerns were not limited to local issues. Cultural exchanges with the German town of Hamburg were already in place, and the courses provided at the center included serious subjects of a universal nature such as Shakespearean studies, cosmology and the meaning of life. The architecture is already connected to the world in a very abstract way. We also proposed a media studio, where business people could contribute their skills to help the elderly and the handicapped (who lack networking), and provided them with a social image of the coming age of conviviality.

You cannot experience wind or scent from a TV screen which only appeals to audio and visual senses; there is no real world there. Then suddenly on Jan. 17, 1995, scenes of the earthquake devastated city of Kobe flashed on televisions. As the list of over 5,500 dead appeared on the screen, I felt tremendous emotion for each individual life

力を喚起するものでなければならない。そして何よりも計画は、よりよく開かれたものでなければならない。現在の行政のシステムにおいては、このやり方は多くの困難を伴うが、これからの公共建築の持つ価値は、それがつくられるプロセスの中にこそあるのだといえるだろう。これまで私達はこのような場のことを「宴」と呼んだり、「共生」(Conviviality)の空間と言ってみたり、「コミュニケーションが開く建築シーン」と名付けたりしているが、コンペによって得られたアイディアをもう一度開かれた対話の場へと戻し、建築がつくられるプロセスをクリエイティブにしていくことこそが、結果としての作品性よりも重要なのだという主張を込めている。そしてそのためには、ハードとソフトの間に立つ建築家の果たす役割は非常に大きいと考えている。

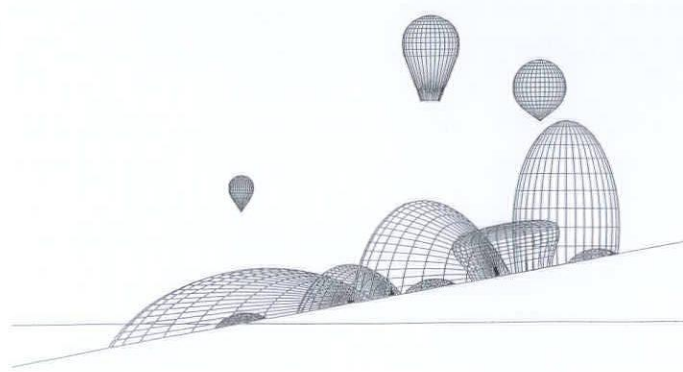
### リアルな思想

湘南台の後、くすみだ生涯学習センター、く大島町絵本館」といくつかの公共建築の設計を通してわかってきたことは、まちの人達も行政も地域性や自然性すなわち個別のローカリティを追求しながらも、次第にベルリンの壁の崩壊を始めとした次々に起こっている世界レベルの社会変動を通して、ボーダーレスの時代へと巻き込まれつつあるということである。冷戦後の世界には新たなグローバリゼーションの波が湧き起こっているが、これはネーションや都市の違いとは関係なく、ワールドワイドなネットワークの中での再編に向かっており、これまで都市や地域を語ってきたやり方では治まらなくなっている。

すみだ生涯学習センターにあっても、地域性はコンペ要項の主要なテーマであったが、その後、ハードの設計と平行してソフトづくりのために何度も意見交換した地元の人々の意識は、そうした行政のテーマを超えていた。市民参加や文化活動をどう進めていけば良いかということドイツのオッテンゼンの人達と一緒に考え始めたりという活

動も始まっていた。そうした交流が活発になり、学習のテーマもシェークスピア研究から宇宙論、生命論までグローバルなものを重視するようになった。こうしたことから建築という場合は、すでに見えない抽象的レベルで世界に開かれているのだということを知ることになった。また、私達はここでメディア工房を提案した。企業人である自分の仕事を持った人達が、日頃仕事で使う技術を持って老人や身障者などのネットワークをつくりにくい人達をヘルプし、互いに共同作業を行う場としてつくって、次なる共生の時代の社会イメージへの導入を図ろうと考えた。

私達の見るテレビの画面からは今のところ匂いも風も吹いてこない。テレビの前で視覚と聴覚のみを集中させていても身体を震わせる具体的場は存在しない。そのテレビに突然、建築が崩壊した都市が映し出



Museum of Fruit, Yamanashi



which I had never felt before. The trendy concept of virtual reality and simulation just fell apart in front of my eyes.

I no longer want to participate in the construction of falsehoods based on a hypocritical hypothesis. I wish to touch upon the reality which cannot be reduced to anything else. While watching the dismantling of the Berlin Wall, I felt a strong need to reevaluate the now obsolete ideas of politics, capitalism, information manipulation by the mass media, or simply the inertia of ordinary institutions and customs. After the earthquake, that sense of urgency is a great deal stronger.

### The Concept of Screen

The basic concept of Niigata Performing Arts Center is screens standing in the middle of a field. It is an outdoor space for flower viewing defined by soft fabric screens, where winds play with leaves and passers-by casually drop in. It is a place of various encounters and communication.

Three different types of hall are enclosed softly under a high-tech glass membrane made up with DPG (dot pointed glazing), sun

screens, and custom-made glass panels with built-in louvers. The halls and spaces created between them respond, by their flexible nature, to various functions and activities associated with the performances. We expect the facility to be a magnet for people of different professional backgrounds, and a place where many hybrid programs and new arts are created. I would like to send the new arts created here by artists and citizens from a cross-pollination of East and West, traditional and modern, all over the world. I hope that this center will become a stronghold of local culture while adopting different cultures, new technologies and environments, instead of becoming a process station of information from the larger cities. Then, it will truly enrich and inspire the citizens of Niigata.

This June I visited the Danish resort town of Humlebæk near Copenhagen to participate in the opening of an exhibition "Japan Today" at Museum Louisiana. In preparation for the exhibit, I met with Mr. Kjeld Kjeldsen, curator of the museum many times over the past several years. He was more interested in experiencing traditional and contemporary Japan, and its complex and multi-layered urban space, than in the details of the exhibition meetings. He was

された。1995年1月17日早朝、神戸を中心に大地震が起きた。この圧倒的現実を前にして、私達はただ茫然とするばかりであったが、テレビスクリーンに流れる5500人を越える死亡者の名前が長々と流されたとき、個々の人間の生(life)に思いを馳せた私は、これまでにない「リアル」な何物かに圧倒される思いがした。これまで建築の世界にも流通していた仮想現実(virtual reality)やシミュレーションといったベールが、パラパラと剥がれ落ちていくのが見える思いがした。

偽善的な虚構をもとにフィクションを重ねていくのはもう一切止めにしたい。透明で軽快な空気を通して、他の何者にも還元できない「リアル」に触れていたい。ベルリンの壁崩壊のテレビ画面に釘付けになった時も、フィクションとなった政治のイデオロギー、資本主義の経済主導の原理、マスメディアによる情報操作、日常的な惰性となっている制度や慣習、そういったものを改めて捉え直し、「リアル」を経験する場として建築を考え直していかなければならないという予感があったが、ここに至ってその思いはますます強くなった。

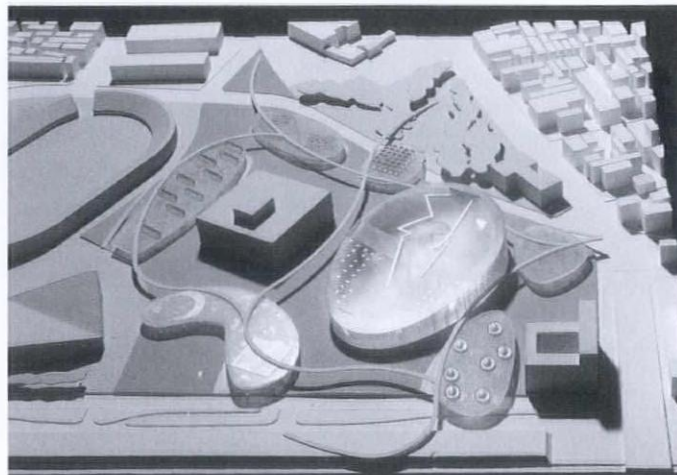
### 幔幕の思想

新潟市民文化会館の建築は、原っぱに立ち上がる幔幕というイメージによって発想されている。幔幕とは野外に開かれたやわらかな布によって設けられる花見の宴の空間であり、そこでは風が吹き、木々がざわめく中、突然の通過者も加わることで地域を超えた結び付きとプログラムの拡張が行われる。多様な出会いのなかでコミュニケーションが開かれる。

それぞれ形式の異なる3つのホールはDPGと遮光スクリーン、細かいルーバーが仕込まれた特殊複層ガラス等によるオープンでテクノロジカルなガラスの幔幕によってゆったりと包まれ、そのゆるやかな関係と融合によって様々な要求と活動に対応できる場となる。複数のジ

ャンルの人々の参加を促し、いろいろな分野がクロスする新しい企画を発生させ、西洋と東洋、伝統と現代、芸術家と市民のクロスオーバーが生み出す新しい芸術をこの場から発信させたいと考えている。大都市から流されてくるものを上演するのではなく、固有の場所性を中心に据えながらも、異なる文化のジョイントを引き受け、新しい環境、テクノロジーの変化に対しても充分に開かれ、人々の生活の中に変化と優雅さを導入できるような公共パフォーミングアーツセンターを目指している。

この6月に私はコペンハーゲンの保養地であるフムレベックにあるルイジアナ美術館の企画展「JAPAN TODAY」に参加して、その準備とオープニングのために現地を訪れた。この展覧会の準備のため、学芸員のケル・ケルツェンさんとはこの数年のうち何回も東京でお会いしたが、彼は打ち合わせよりも自分で日本の伝統とモダンとを、そし



Niigata City Performing Arts Center



especially interested in the contrast of cutting edge technologies and the Asiatic human environment. At the opening day press conference, we were shown a video tape of Japanese scenery. It made even a resident of Japan like myself feel exhausted after watching a sea of humanity, traffic, commercialism, chaotic cities and architecture, overwhelming amounts of information, and the coexistence of traditions and multi-faceted modern life. After the conference, I ended up walking around an exact recreation of the art and architectural scenes I had seen on the video in the exhibition hall.

The main themes of the exhibit, "Tradition and Modernization" and "Complexity and Assimilation" were chosen to let Europeans see the realities and anarchic landscapes of Japan with their own eyes. The show revealed a contrasting world to the quiet sea and green surroundings of the museum. I also wanted to introduce the idea of "New Architecture Through Communication" to them. We treated a 19 by 14 meter exhibition hall as an exterior space, carpeted the floor with white pebbles collected from the beaches nearby, then set-up an oval of white screens as a ceremonial space. The soft

textured fabric established an instant space of communication, as in cherry blossom viewing parties. The screen moves gently when it feels human movements. Four shelters covered with translucent fabric were placed within the screens. The shelter frame shapes remind people of plant seeds and flowers, or sometimes of a primitive form of clothing. The shelter trembles in response to the people within, sending a ripple effect to the larger screens. Those slight movements resonate off each other. The fluctuation is a hint of a biological rhythm. The multiple fluctuations make one feel the complexity of nature in a simple system of movements.

The shelters contain computer terminals, containing my three messages about "reality," "second nature," "communication." After reading those, visitors can use the computers to communicate with our office in Tokyo via International network about the three themes of the exhibit. Throughout the exhibit, the tapestry of our communication is generated and replayed to the next site of this traveling exhibition.

This experiment to expand a corner of the museum into a round table discussion, both in time and space, is a development of a

て都市の複雑さと重層空間の現在を体験することに心を奪われていたようで、特に先端テクノロジーがつくる風景と、アジア的な人間環境に非常に注目していた。オープニングの日、この展覧会が巡回する予定になっている北欧の諸都市の人達も集まって記者会見が開かれたが、その席上ではビデオに収められた日本の現在が映し出された。人々や自動車や商品のあふれたシーン、都市と建築のカオティックなシーン、メディアシティとして情報の氾濫、人々の今日的で多面的な生活と伝統的なセレモニーの共存など、一通り見せられるとその過剰さのあまり、その中で生活しているはずの私でも疲れ果ててしまうようなビデオであった。ところが、ディスカッションを終えてその場から展示室に戻ると、見たばかりのビデオの続きのようなアートと建築の展示空間の中をさまようことになった。「伝統と近代化」、「複合と同化」というこの展覧会のメインテーマは、まさに表象の帝国としての日本の現実、アナーキーな風景をそのままサンプリングして、ヨーロッパ人が自らの目で見て考えたいという主旨のもので、美術館の周りに広がる静かな海と緑の空間とは全く対照的な世界が封じ込められることになった。

我々はこの展覧会で、「コミュニケーションが開く建築シーン」というテーマを日本だけでなくヨーロッパに持ち込んでみようと考えていた。与えられた19m×14mという大きな展示ホールを屋外と見立て、美術館の近くの海岸から白い小石を多量に拾ってきて床に敷きつめ、屋外で宴を開く時のような白い布の幔幕で囲まれた楕円の空間をつくった。季節の変わり目に花見を楽しむように、床に布を敷いたり幕を張ったりするような簡便な手法で場を設えた。幔幕は布でできた緩やかな境界にコミュニケーションを行う場を立ち上げる。この幕は人が近付くとその圧力で裾がまるで呼吸しているかのような動きを見せる。その中にさらに薄く透ける布で覆われた4台のシェルターを置いた。

シェルターのフレームの形は植物の種や花、あるいは身体に纏う衣服のプリミティブな有り様を連想させるが、それぞれのシェルターは、中の人に反応して緩やかに動き、その揺らぎは大きな幔幕に伝達され、それぞれの異なる振動がかすかに伝わりあって共振する。こうした揺らぎは生命のリズムを暗示させるが、それが複数あることでシンプルなシステムの中に複数の存在が感知されるようになっている。シェルターの中には言葉によるコミュニケーションのためのモニターが配置されており、3つのテーマについて、私のメッセージに続けて会場を訪れた人が、コンピュータ端末に打ち込めるようになっている。デンマークの展示会場と東京の私達のアトリエはインターネットで結ばれ、会期中、訪れた人達と我々によるテキストの織物が生成され、次の国の展示場へと継続されていくことになっている。

ここで目指されたのは、美術館の一角を、時間的かつ空間的に引き



Oshima-Machi Picture Book museum



concept of the screen as a physical shape with fresh wind and light. In this project the notion of super-place was brought in by adding an electronic network (The interior space enclosed by the screens become externalized by means of the computer network). The nomadic nature of the traveling exhibition and the creation of the exterior space within the museum confines altogether generate an unreconstructable plurality and complexity. We find that the concept of screen can be established somewhere between space and time, beyond the physically confined notion of the field.

In the past ten years, we have worked on an increasing number of public projects. The great social events during this time, such as the dismantling of the Berlin Wall and the Great Hanshin Earthquake, greatly influenced our architectural thoughts. These events had tremendous impact at a global scale beyond their immediate communities. Architecture, if it is concerned with only narrow local issues, would become instantly obsolete because it would not be flexible enough for any future changes. We emphasize the integration of architecture and software programs from the users perspective instead of being preoccupied with special forms and layouts, in order

to establish the possibility of activities. We have to expand the concept of architecture to a social scale because we cannot find its potential within the traditional boundaries of architecture and city. Only by projecting architectural possibilities in contemporary society, can architecture have an effective social existence. We plan to continue our effort to find the meaning of modern society through these activities.

Architecture as a place for a variety of activities and a component of the city is no longer sufficient in this time of global communication. Only architecture of time and space will open up new architectural scenes to the world through communication.

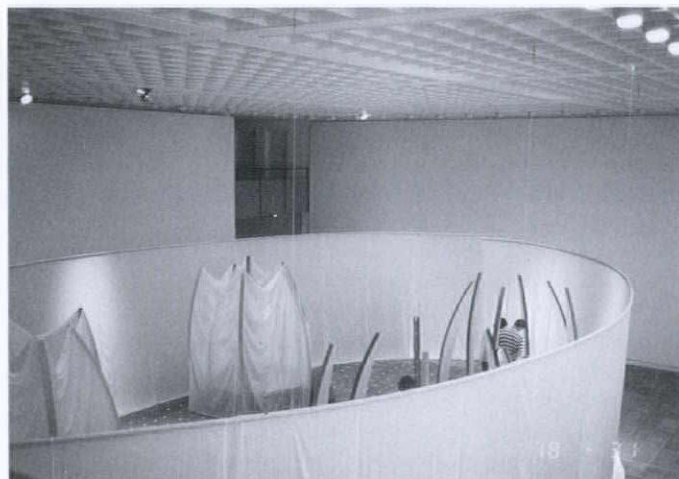
伸ばされたミーティング・テーブル（会議室）にしようという試みであり、建築をつくる上で私達が用いる「幔幕」という概念を場所を超えて拡張しようという実験である。これまでに建築を野外に張られる幔幕であるとして捉え、できるだけ多くの活動を、屋外のようにさわやかな風と光と共に包み込もうと考えてきたが、今回のプロジェクトは、その中にさらに電子的なネットワークによる非場所性（幔幕によって囲われた内部がネットワークを通じて外部化している）、各都市を移動するという非限定性、美術館の中に仕掛けられた外部という幾つもの錯綜する条件が重なりあって、異なるものの共存、還元できないある種の多数性、複雑性が生まれている。ここにおいて私達は、幔幕は場所に限定された原っぱを超えて、空間と時間の間に設けられるものであることを見出した。

公共建築を設計するという仕事が増え、この10年間取り組んできたが、その間にベルリンの壁の崩壊、阪神大震災など社会的な出来事に直面し、私達の建築に向かう姿勢も大きく変化している。こうした出来事は、その地域だけの問題ではなく、グローバルな問題としてその影響はもはや世界中を揺れ動かす。建築は、そこにある条件を問題にすればできてしまうという理念では、ただの物体となってしまう、思いがけずフレキシビリティに欠けてしまう。建築設計を特に利用者の立場に立ってよく利用されることを目指すため、建築とソフトを一体化して考えることを重視してやってきたのも、空間の形態や配置をテーマにするのではなく、そこでの活動の可能性こそ立ち上げなければならないと考えたからだ。そして建築や都市といった従来の枠組みではもはやその可能性は見出すこともできず、社会というレベルまで建築を押し広げていかなければならなくなった。可能性を受け、現代社会のイメージを建築化する。そのことで初めて建築は、社会的な存在として機能する。コンテンポラリーな活動をテーマにすることで、

現代社会をどう生きていくかということの可能性を追求したい。

建築はもはや都市に寄り添い、多様なアクティビティを誘導するだけでは、開かれた場は見えてこないのかもしれない。一ヶ所に定住した中でのコミュニケーションではなく、世界を横断するコミュニケーションを導入しなければならない。時間と空間の間に建築を構想することによって、世界に開かれた建築シーンを展開することに向かわなければならない。

●はせがわ・いつこ／建築家



Installation for <JAPAN TODAY>



# Museum of Fruit, Yamanashi

Yamanashi, Yamanashi 1995

## 山梨フルーツミュージアム

Yamanashi Prefecture is one of the greatest producers of fruit in Japan. The Museum of Fruit was planned to be part of a public park surrounded by vineyards. Historically, human beings have always revered fruit as aesthetic objects, and sometimes attached religious significance to them. In thinking about a museum devoted to fruit, we were faced with spiritual aspects involving sensuality, intelligence, and human desires, as well as global ecological issues involving our physical environment. Such thoughts about fruit must be expressed by architecture itself. The object is to create architecture as a poetic machine which expresses this spiritual, social and environmental context.

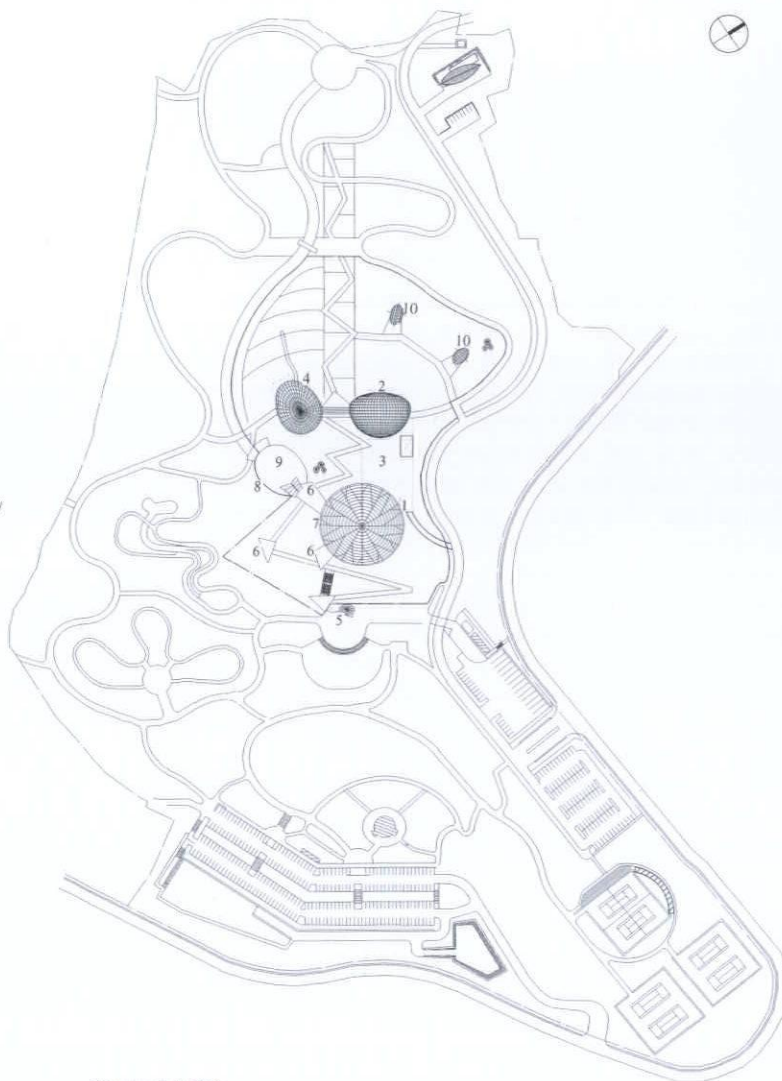
The museum takes the form of a group of shelters scattered around the site as a metaphor of the vitality and diversity of fruit; a primordial landscape hidden deep in the fantastic human psyche. The Fruit Plaza represents the final grown-up image of seeds; large trees, themselves a beginning of a new cycle. The greenhouse, an encyclopedia of fruit, represents the memory of the tropical sun where seeds germinate. The underground exhibit hall is dedicated to the world of fruit genes. The workshop is a symbol of "foreignness" inherent in the vitality of seeds.

The shelters are of different sizes and materials, either planted firmly in the ground or attempting to reject the earth, as if they had just landed from the air or were trying to fly away.

この敷地は日本でも有数の果物の里である山梨県のぶどう畑の中にあり、その斜面を公共公園として整備する中で、その一部にフルーツミュージアムをつくるという構想が生まれた。人類の文化におけるフルーツとの関わり合いは常に美的価値を伴い、時には思想的、宗教的意味を持ってきた。そしてフルーツのための博物館を考える時、今日我々が直面している地球規模のエコロジーとは、物理的な環境と共に、感性、知性、欲望といった精神的な領域を同時に含んでいることに思いが至る。こうした内容に相応しいものとなるよう、この建築はそれ自身がフルーツをめぐる思想を表現するよう意図され、環境と同時に、精神や社会としてのエコロジーを表現する詩的装置でもある。

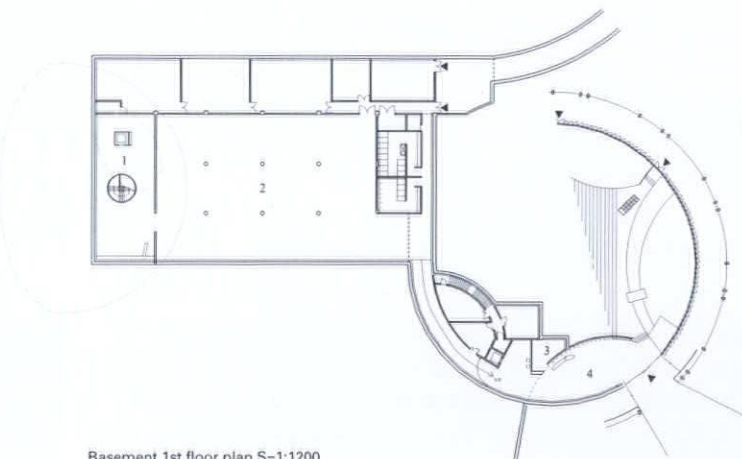
フルーツミュージアムは、フルーツの生命力の多様な存在様式を表現する分散された諸施設の一環である。これは新しい時代の集落と言うべきものであり、いまだ現れたことのない、個人の奥深い幻想の中に沈んでいる光景である。「くだもの広場」は時かれた種の成長した最終的な形態として大きな木のイメージを、果物百科の「トロピカル温室」は生まれ故郷の熱帯の太陽に憧れて芽を出そうと上に伸び上がる種子のイメージを、「地下展示室」はフルーツの遺伝子の世界を、「くだもの工房」は種を増やしていく生命力に本来秘められた異形性のシンボルを与えられている。連立する3つのシェルター群は、それぞれ異なる規模と素材を持ち、大地に対して異なった接し方をしている。つまり、たった今舞い降りてきたばかりのように、あるいは今まさに飛び立とうとしているようにと動きを見せている。

- 1: Plaza
- 2: Conservatory
- 3: Exhibition hall
- 4: Workshop
- 5: Information centre
- 6: Deck
- 7: Shop/Rest area
- 8: Sunshade
- 9: Pond
- 10: Small conservatory

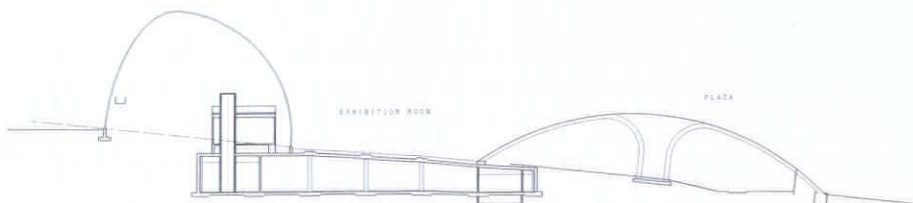


Site plan S=1:5000

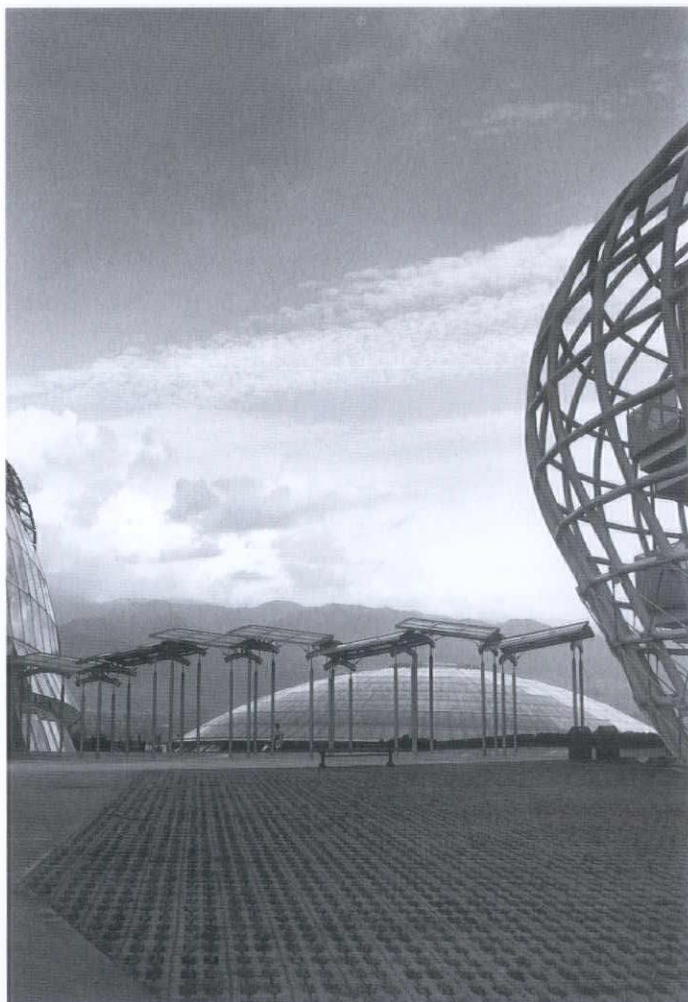
- 1: Gallery
- 2: Exhibition hall
- 3: Museum shop
- 4: Entrance lobby



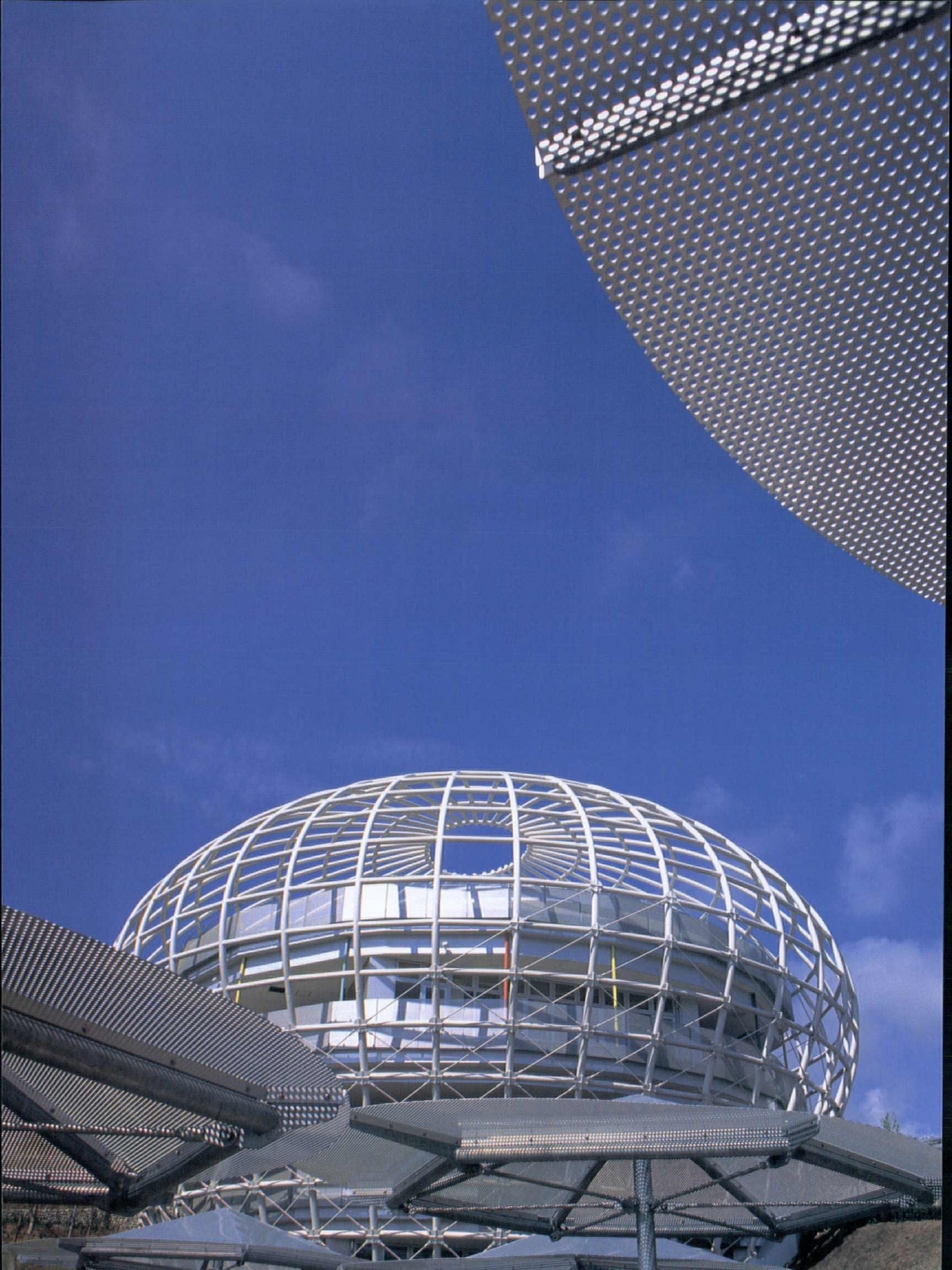
Basement 1st floor plan S=1:1200







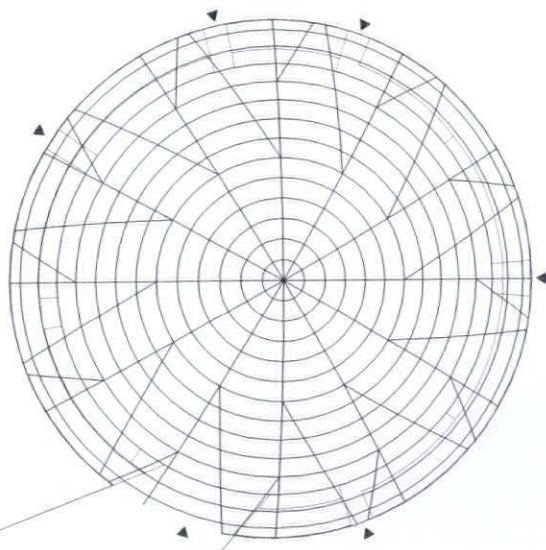
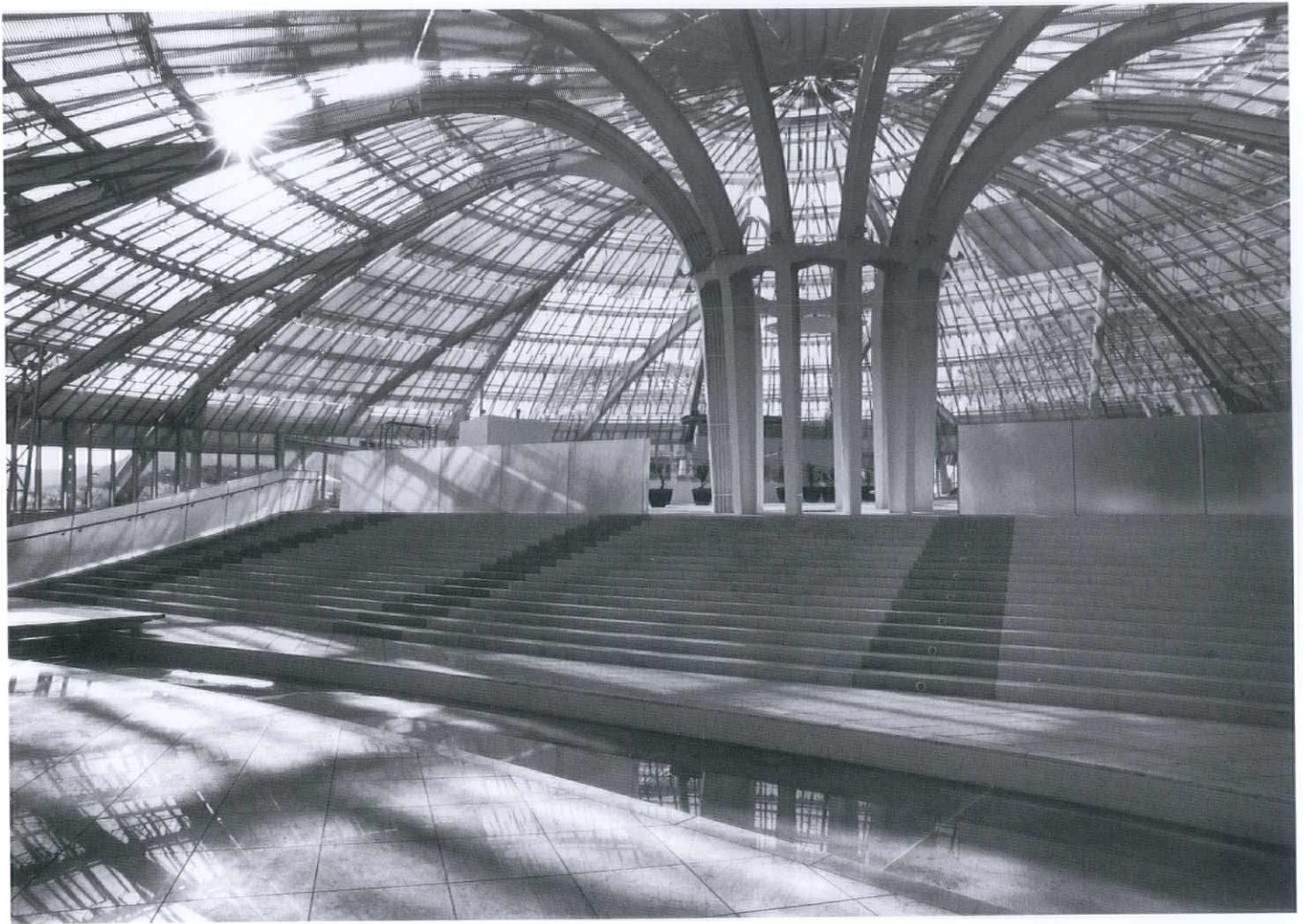




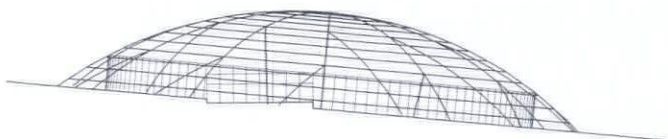




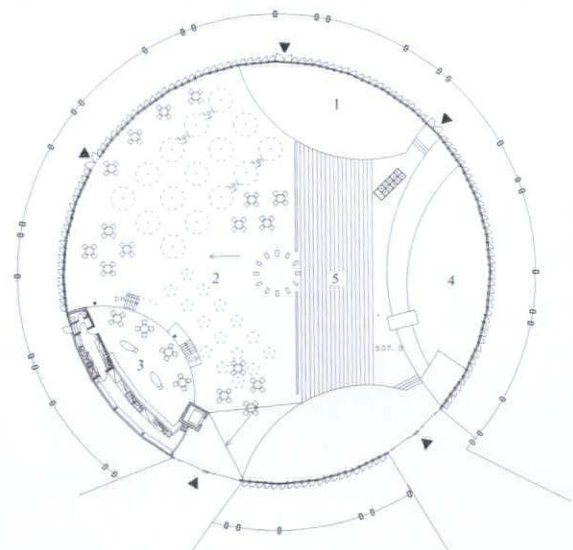




Roof plan S=1:800

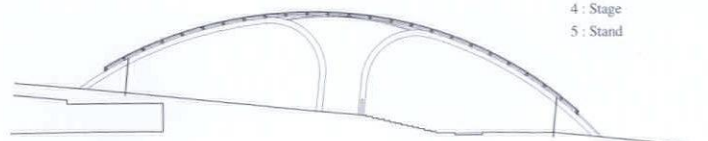


South elevation S=1:800



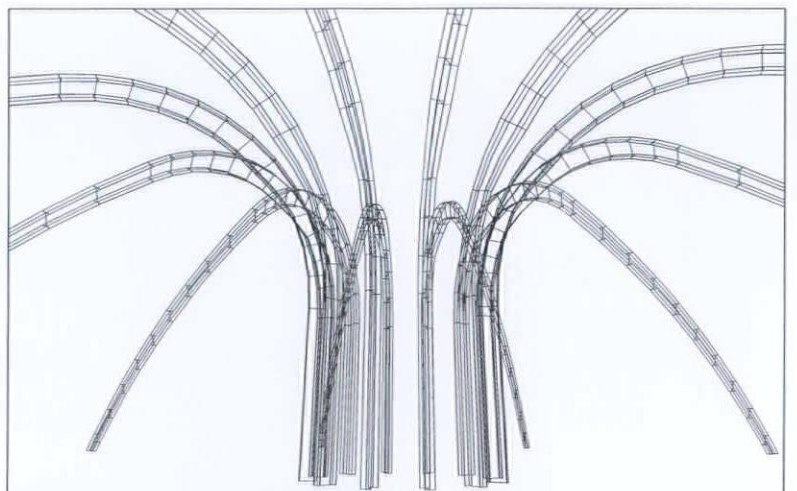
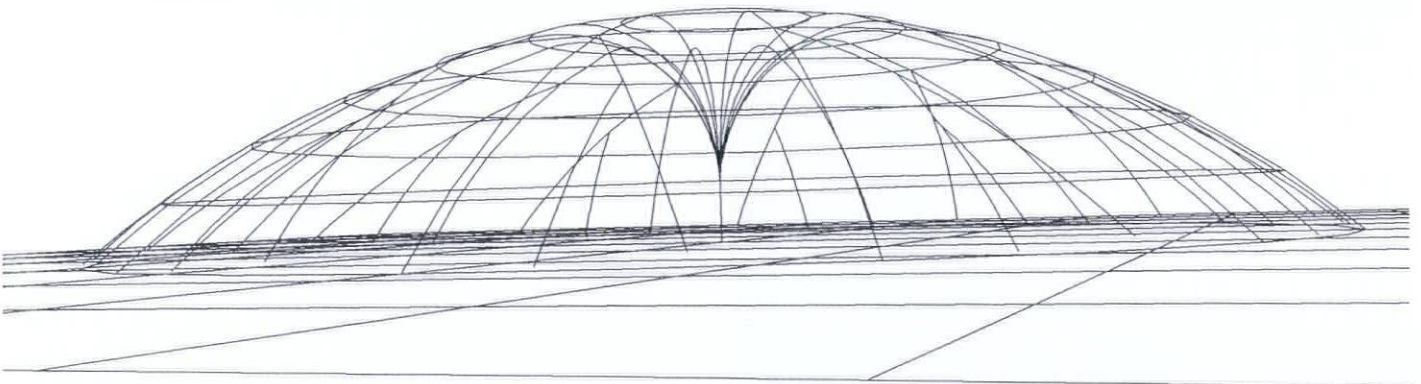
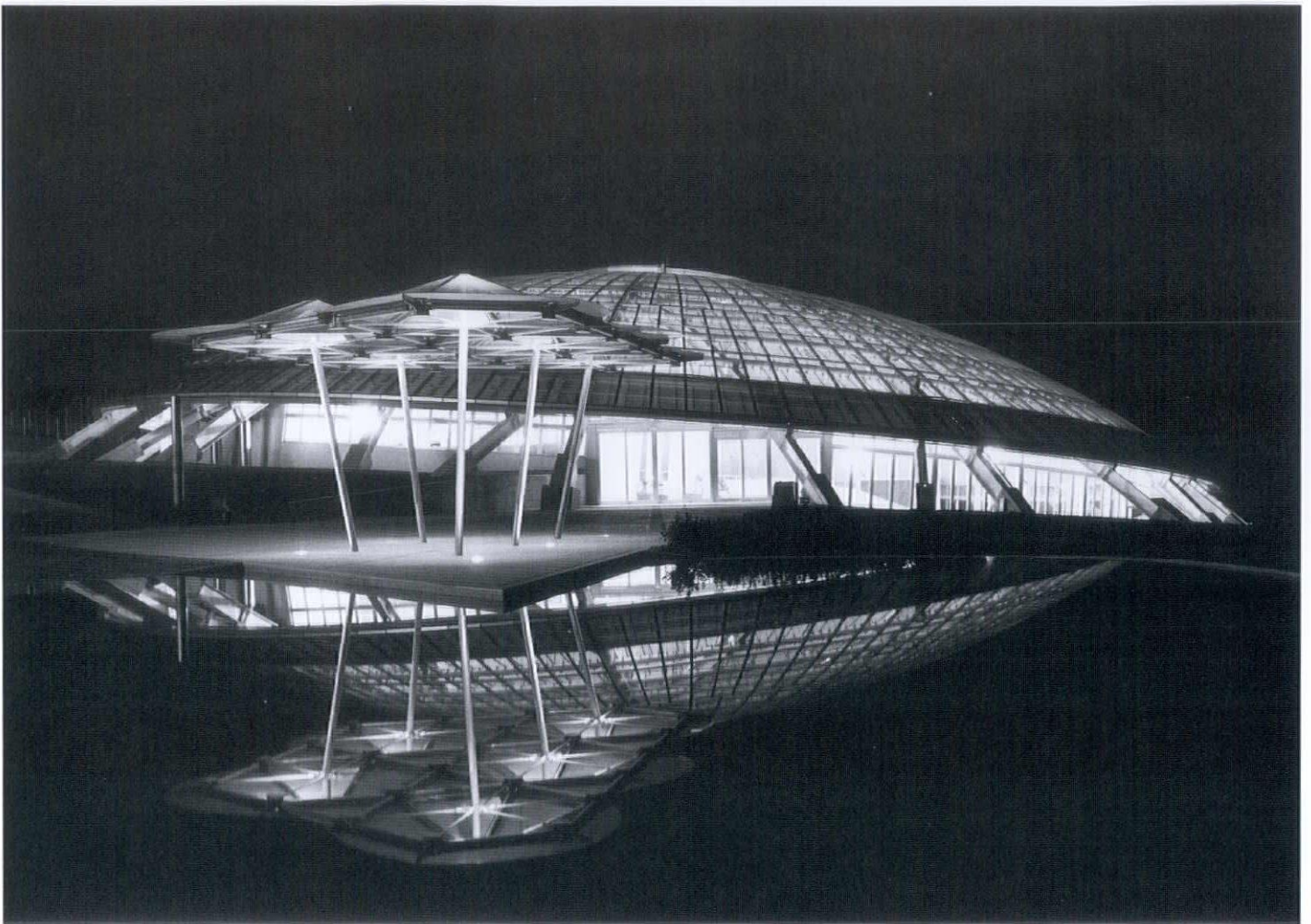
Plan S=1:800

- 1 : Indoor floor bed
- 2 : Green space
- 3 : Cafeteria
- 4 : Stage
- 5 : Stand



Section S=1:800





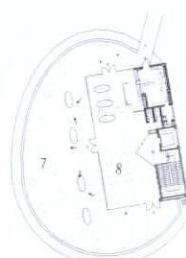








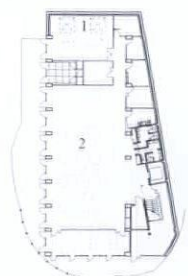
3rd floor plan



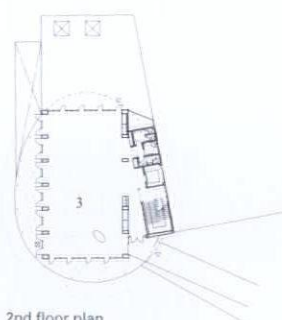
4th floor plan



Roof plan

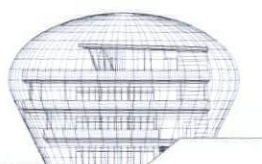


1st floor plan



2nd floor plan

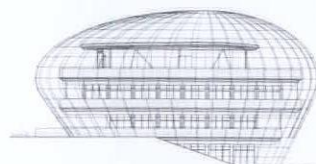
- 1 : Meeting room
- 2 : Office
- 3 : Hall/Shop
- 4 : Library
- 5 : Work shop
- 6 : Cooking room
- 7 : Roof terrace
- 8 : Restaurant



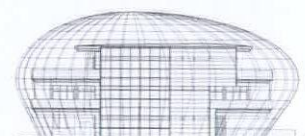
East elevation S=1:1000



West elevation

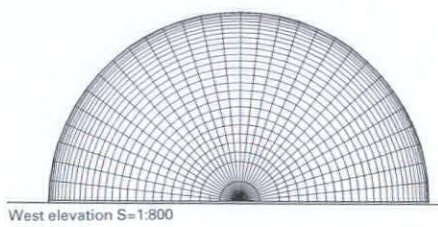


South elevation

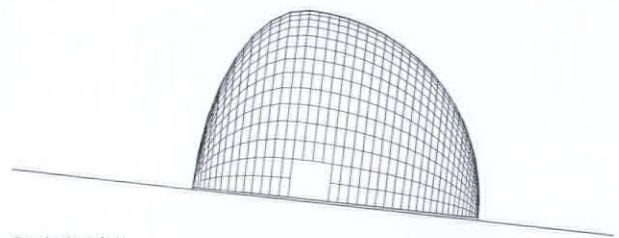


North elevation

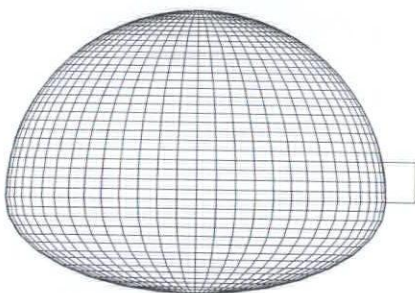




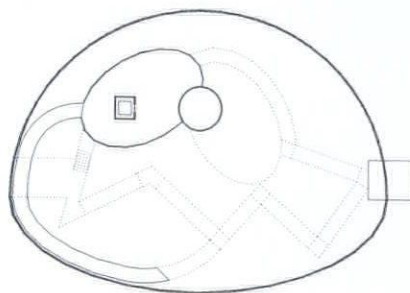
West elevation S=1:800



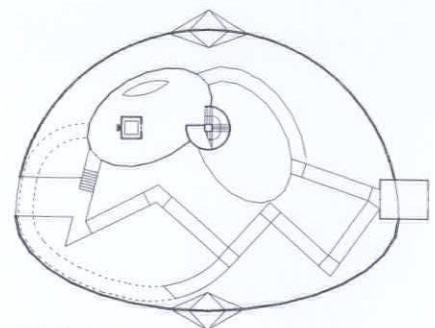
South elevation



Roof plan S=1:800

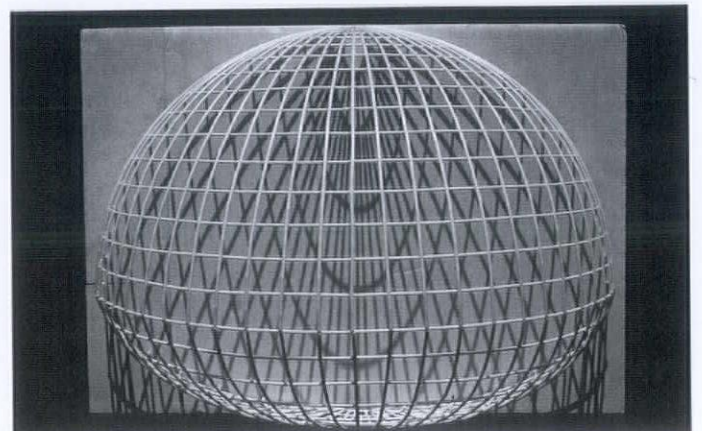
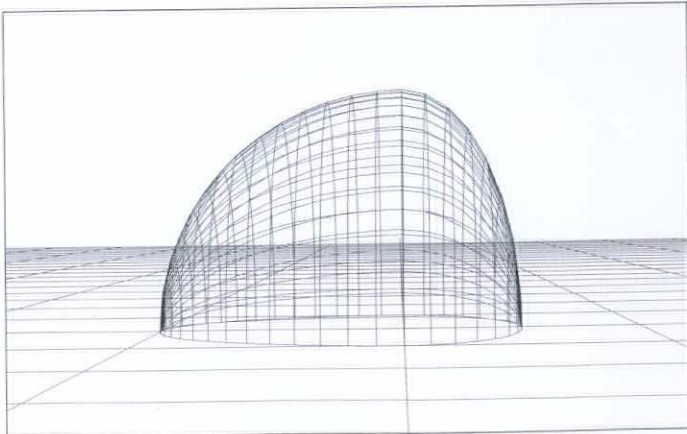
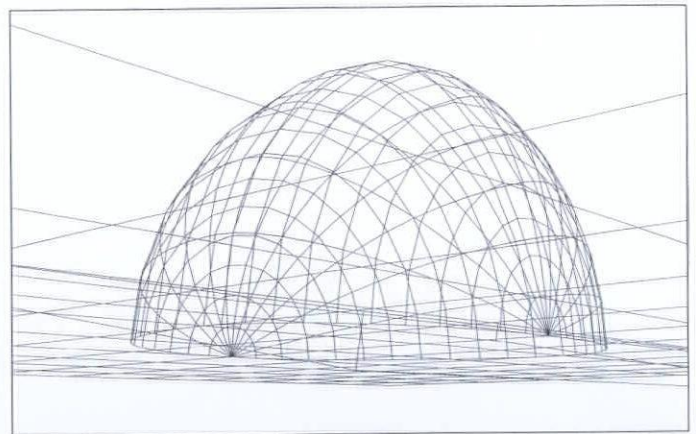
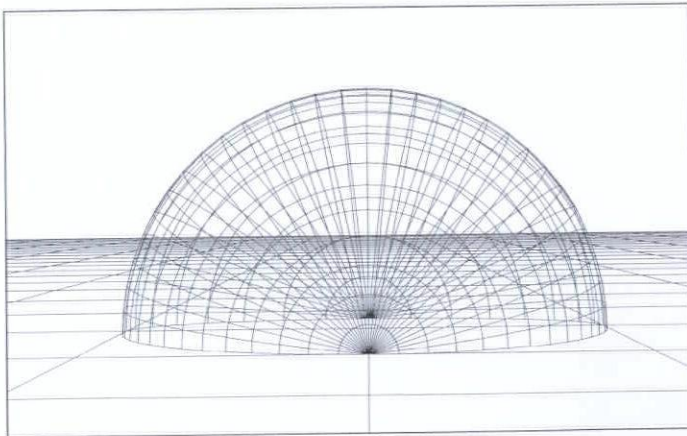


2nd floor plan



1st floor plan

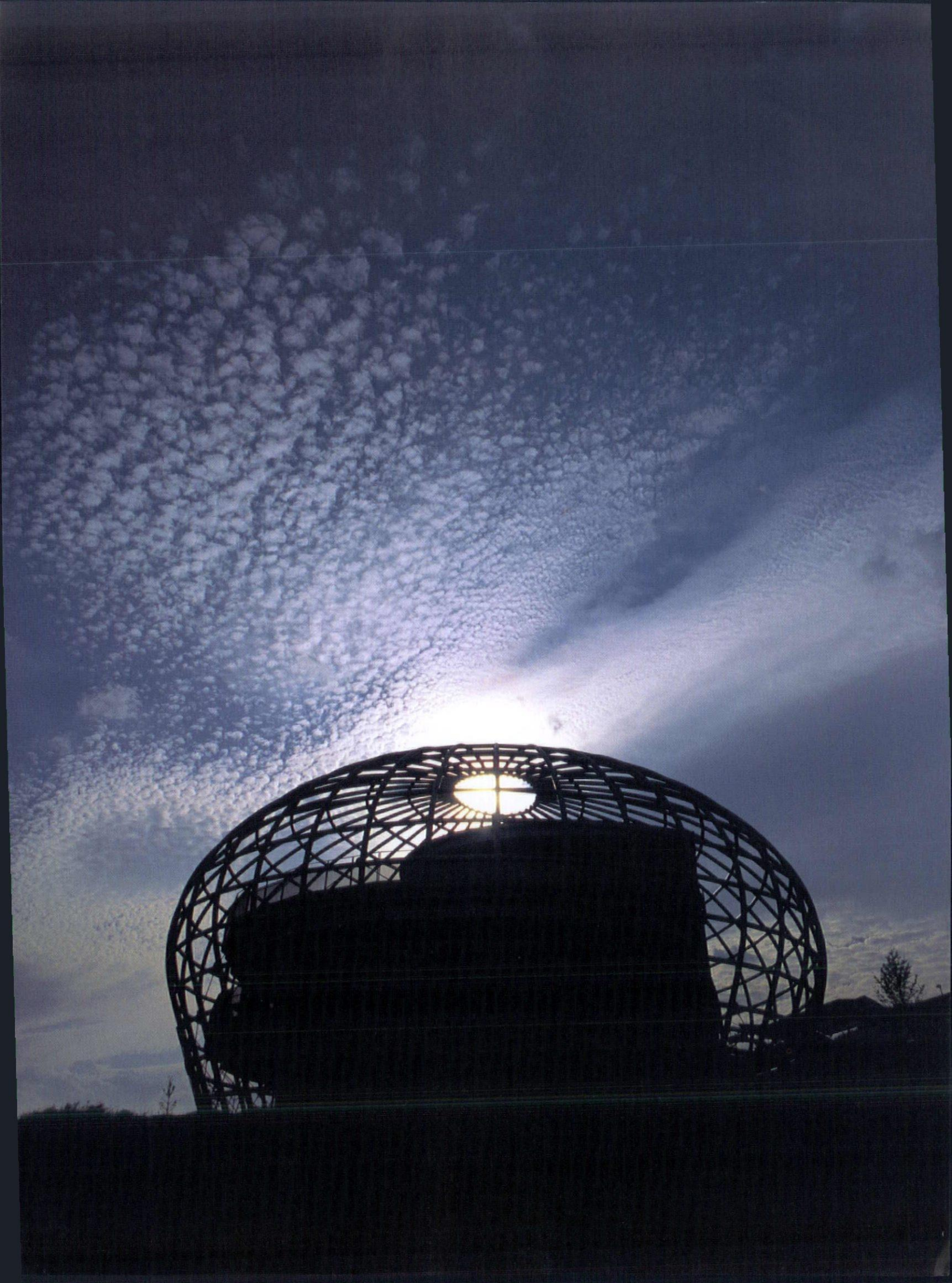














# The Era of New Public Architecture and Harbinger of Modernism's New Vitality

Mitsugu Okagawa / Translation by Hiroshi Asano

Itsuko Hasegawa's victory in the Shonandai Cultural Center design competition in 1986 was a watershed event for the era of new public architecture in Japan. Not only had a small architectural studio led by a woman won a large public design competition, but Hasegawa and her design team had proposed a totally new approach in the history of Japanese public architecture in terms of concept, design and construction process, as well as in facility management. It was a harbinger for a new kind of public architecture in Japan's modernization process.

Since the Meiji period, public architecture has represented images of the government authorities more than anything else. The quality of architectural design has been judged on how well the message of the government was embodied in the buildings. Therefore, the history of public architecture is full of grand architectural styles. After World War II, architectural planning and technologically advanced construction methods were necessary for the democratization and industrialization of Japanese society. In this period, public architecture was seen as an appropriate vehicle for the expression of modernist architectural forms. However, this kind of public architecture projected a somewhat aloof and isolated image to society in general. Modern Japanese public architecture, with its added element of stoicism, lacked popular appeal

and looked forbidding. Even cultural facilities were unfriendly when they were not in use.

The Shonandai Cultural Center is full of a sensitivity that alters public architecture's grim isolation. The Sumida Culture Factory, completed in September 1994, inherits various design concepts developed in Shonandai and skillfully adapts them to the ordinary landscape of downtown Tokyo. The group of glass and concrete buildings is wrapped in aluminum screen panels and seems to create an intimate alley-like environment. With the articulated upper part of the buildings representing the imagery of a village-like landscape, and aluminum screens adding a touch of modernity, the architectural forms generate a continuity between chaotic Asian space and downtown Tokyo urbanity. The aluminum panel screens create fuzzy borderlines with the immediate surroundings and turn this facility into an intermediate state of architecture and city. This urbanized architecture is definitely a new form of public space.

Hasegawa's latest work, the Museum of Fruit in Yamanashi, shows the development of her architectural approach. This facility represents a refreshing new design in the natural environment and destroys conventional concepts of museums. The master plan of the museum includes two glass domes and a building covered with a steel

framed basket as landscape elements on a sloped site surrounded by nature and vineyards. The exhibition space is hidden under the landscaped garden. From a distance, the museum looks like three water drops on the sloped greenery, similar to water drops on a lotus leaf that are naturally created by the balance between gravity and surface tension. The perfect spherical shape formed by surface tension is deformed by gravity and sways in the wind, like all natural forms around us. Water gives life to plants, and form to seeds and fruits; they too have distorted forms. The cutting edge architectural forms that assimilate plant form images were made possible by computer graphics. However, the real significance is not the forms themselves, but Hasegawa's wonderful sensitivity which bridges nature and technology. Instead of nature and technology as antagonists, she sees them as continuous entities. Her attitude becomes very clear when her work is compared to Paxton's Crystal Palace, a building which was a harbinger of modern architecture. The Crystal Palace took the form of a glass temple as an environmental machine which clearly separated inside and out, nature and architecture. Itsuko Hasegawa's idea of nature and technology has landed as a harbinger of the vitality of the new modernism.

● Architect



岡河 貢

1986年の〈湘南台文化センター〉のプロポーザルデザインコンペ1等案は、長谷川逸子にとっても、日本の公共建築の歴史においても、新しい公共建築の時代の予感に満ちた出来事であった。女性が主宰する建築設計工房が巨大な複合公共施設の設計競技を勝ち抜いて実現するというだけでなく、日本の公共建築の歴史の流れの中で、公共建築というものの在り方、そのデザイン、それを実現してゆくプロセス、そしてその施設の運営ということについてまで、長谷川逸子とそのチームは今までになかった新しい状況を切り開いたのであった。そのことは、近代化（モダニゼーション）のプロセスとしての公共建築の日本における役割が、新しい時代を迎えることの予兆的出来事であったといえるであろう。明治以来の公共建築は何よりも、国家のイメージのメディアとして機能することが要請されていた。デザインの良否は、まずその国家のイメージのメッセージ力によって判断された。したがって立派で見上げるような様式建築をいかにデザインするかが公共建築のデザインの歴史であった。戦後、民主主義社会と工業化社会においては、民主的な建築計画と近代工業による建設技術の、人々へのプレゼンテーションが民主社会と建築の近代化のプロセスとして要請されたのである。この時期においては、公共建築は近代主義建築の手本であり、人々にとってそれは学ぶべき対象であった。いずれにしても公共建築は人々に対して一線を引く存在であり、公共建築はどこか敷居の高い建築として社会の中に存在していた。さらに近代主義が禁欲性と合体した我が国の公

共建築には、そこに行ってみいたいという魅力に乏しく、人々にとって閉じられた場所というイメージが付きまとっていた。文化的な施設でさえ、催しが行われていない時にはそのような存在であった。

〈湘南台文化センター〉は、その閉じられた公共建築を人々に開いていこうとする感性に満ちていた。1994年9月に竣工した〈すみだ生涯学習センター〉では、湘南台で提出されたさまざまな手法が、湘南台とは全く異なった環境である東京の下町の日常風景の中に巧みに展開されている。ここではガラスとコンクリートで建てられた建築群は、アルミニウムのスクリーンに囲われて全体として路地的な境界空間をつくりだすことが意図されているように見える。ここでは分節度の高い上部の形態群はアルミニウムの素材感によって現代的な質感を発しながらも、集落に通じる形態群としての風景をつくりあげることで、アジア的な乱雑さとしての東京の下町の都市風景との連続性をつくりだしている。アルミニウムのスクリーンはさらにあいまいな周囲との境界をつくりだすことで、この施設を建築と都市との中間領域として提出している。この都市的場へ変容された建築は、極めて都市の公共空間の新しい有り様だといえるだろう。

最新作の〈山梨フルーツミュージアム〉は、さらに新しい長谷川逸子の展開を示している。この施設はミュージアム（博物館）という既存概念を打ち破る自然の中の新鮮な風景を提示している。全体は自然景観と生産緑地に囲まれた、傾斜地上に庭園的要素として、ふたつのガラスドームと鉄骨のかご状フレームに

囲われた建物が配されている。展示室は地下に埋められ、その天井には土が被せられ、傾斜した地形の中に姿を消している。遠望すると緑の斜面上に大きな3つの水の玉が置いてあるように見えた。蓮の葉の上を転がる水玉の形は、重力と水の表面張力のバランスによって自然に出来上がる形である。表面張力がかたちづくりの真球は重力によって歪み、風によって揺らぐ。我々が自然の中に見る形態は何らかの歪みをもつ形である。水はまた植物の生命に連なってゆき、植物の生命の始まりである種子や果実に連なってゆく。植物の種子や果実もまた、歪みをもった形態である。この一連の形態とイメージの連鎖を可能にするこの建築群のフォルムは、コンピュータによって実現可能となる極めて今日的な形であるが、これが単に形として自立したものでなく、実は自然と建築（テクノロジー）の境界上における長谷川の極めて優れた感覚から導き出されていることに言及しなくてはならないだろう。つまり自然と建築（テクノロジー）を二項対立とする思考ではなく、そのふたつを連続可能なものとして建築を切り開いてゆこうとする試みである。このことは近代建築の始まりを宣言した、バクストンのクリスタルパレスとこの建物を比較すれば明確になる。神殿の形態は、自然と建築を断絶させるために用いられ、内部は外界と断絶した環境機械としての温室がクリスタルパレスである。長谷川逸子の自然とテクノロジーの境界面上の思考は、新しいモダニズムの生命力の予感として地上に降りてきた。

●おかがわ・みつぐ／建築家



# Sumida Culture Factory

Sumida, Tokyo 1994

すみだ生涯学習センター

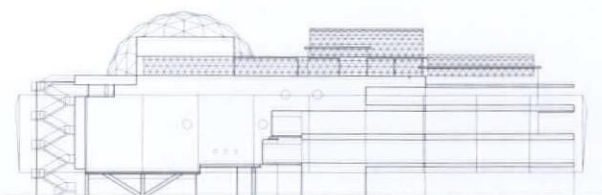
The entire building is enveloped with translucent perforated aluminum screens in order to create a subtle architectural order of the simplest form against the crowded and chaotic context.

The circus tent-like skin is an element of enclosure and opening, and sublimates a solid architectural object into a more amorphous abstraction. The lightly framed interior space of the tent is further wrapped by multiple translucent membranes which reflect the free movement of people inside the volume.

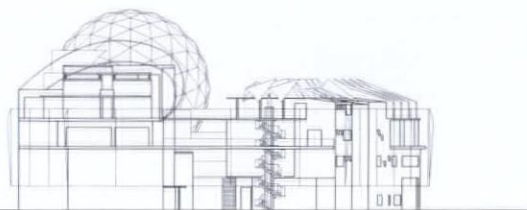
The building is distributed in three volumes around a central plaza which is connected to the three neighbor passages, allowing hitherto impossible access through the site. The west block contains meeting facilities; the east, exhibition halls, an information center, an audio-visual library and media studios; and the north, rooms for a community education center. Most of the interior space is left as open as possible for programming flexibility. The three blocks are connected to each other by eight bridges; therefore, visually and functionally they seem to expand. These flying bridges and see-through elevators help to give the project a visually kinetic sense. The major interior spaces surround the plaza to allow visual interaction.

この建物ではその全体をアルミパンチングメタルの半透明の幕がゆったりと包み込んでいます。この喧騒的な近隣に対して、できるだけシンプルな表現を持って緩やかな秩序を形成するためである。サーカステントにも見えるこの膜は外壁でも開口部でもあり、建築という具体的なものを非常に柔らかに抽象化させている。構造のシステムとしても、分棟的な配置とそれを結ぶブリッジを一体の構造として解くことによって、この幕のディテールの均質化とそれによる外観の一体化を実現している。この軽やかな被膜の内部は2重3重の半透明な幕によって包み込まれ、内部の人々の動きがスクリーンに映し出されるようにふわっと浮き上がったり、人々の身振りを自由なパフォーマンスへと誘うような効果を生み出している。

建物は3つのヴォリュームに分かれてプラザを取り囲み、その隙間はプラザレベルで敷地周辺の3つの路地に連結され、通り抜け可能とすることで新たな人の流れをつくった。西のヴォリュームは集会施設、東のヴォリュームはエキシビションホール、情報センター視聴覚ライブラリー、メディア工房、北のヴォリュームは学習センターが入っている。それぞれガランドウのような空間でありどのような利用形態に対しても交換可能であり、プログラムの変化に対して最大のフレキシビリティを持つ。3つのブロックは空中を飛び交う8つのブリッジで連結され横断的な関係を構成し、視線の交錯の中に機能の拡大を引き起こしている。上空にいくつかのブリッジが水平に飛び交い、シースルーのエレベーターが垂直に立ち上がり、人の動きをリアルに映し出している。施設内のほとんどの場所はプラザに向かって開かれており、視覚的に一体となっている。



South elevation



East elevation S=1:1000

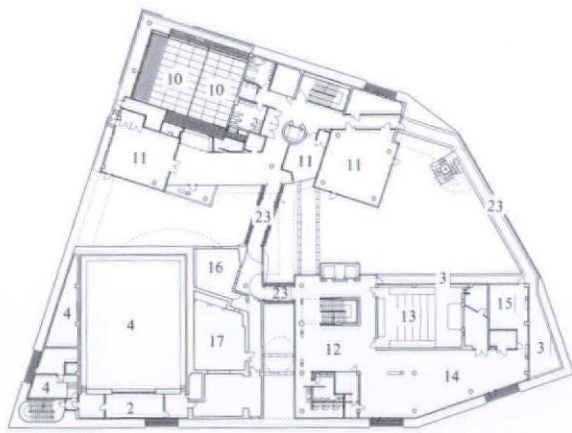


Site Plan S=1:1500

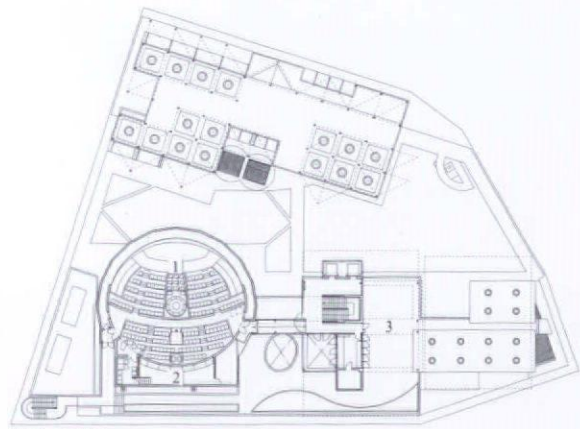




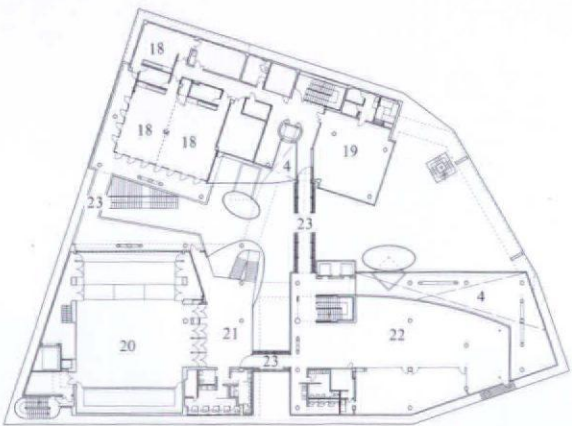




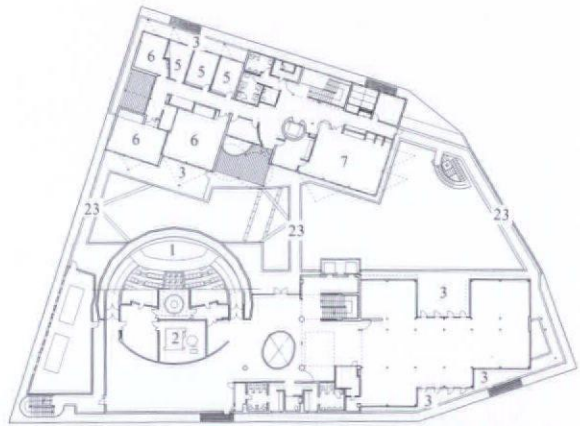
3rd floor plan



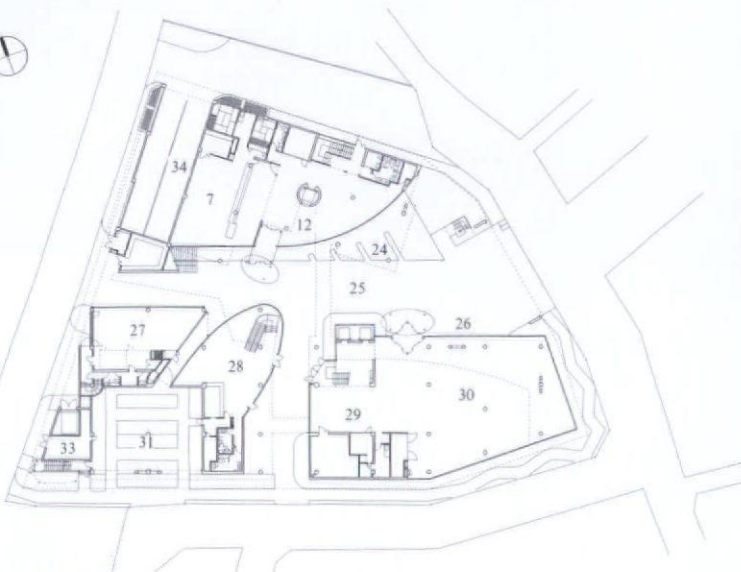
5th floor plan



2nd floor plan



4th floor plan



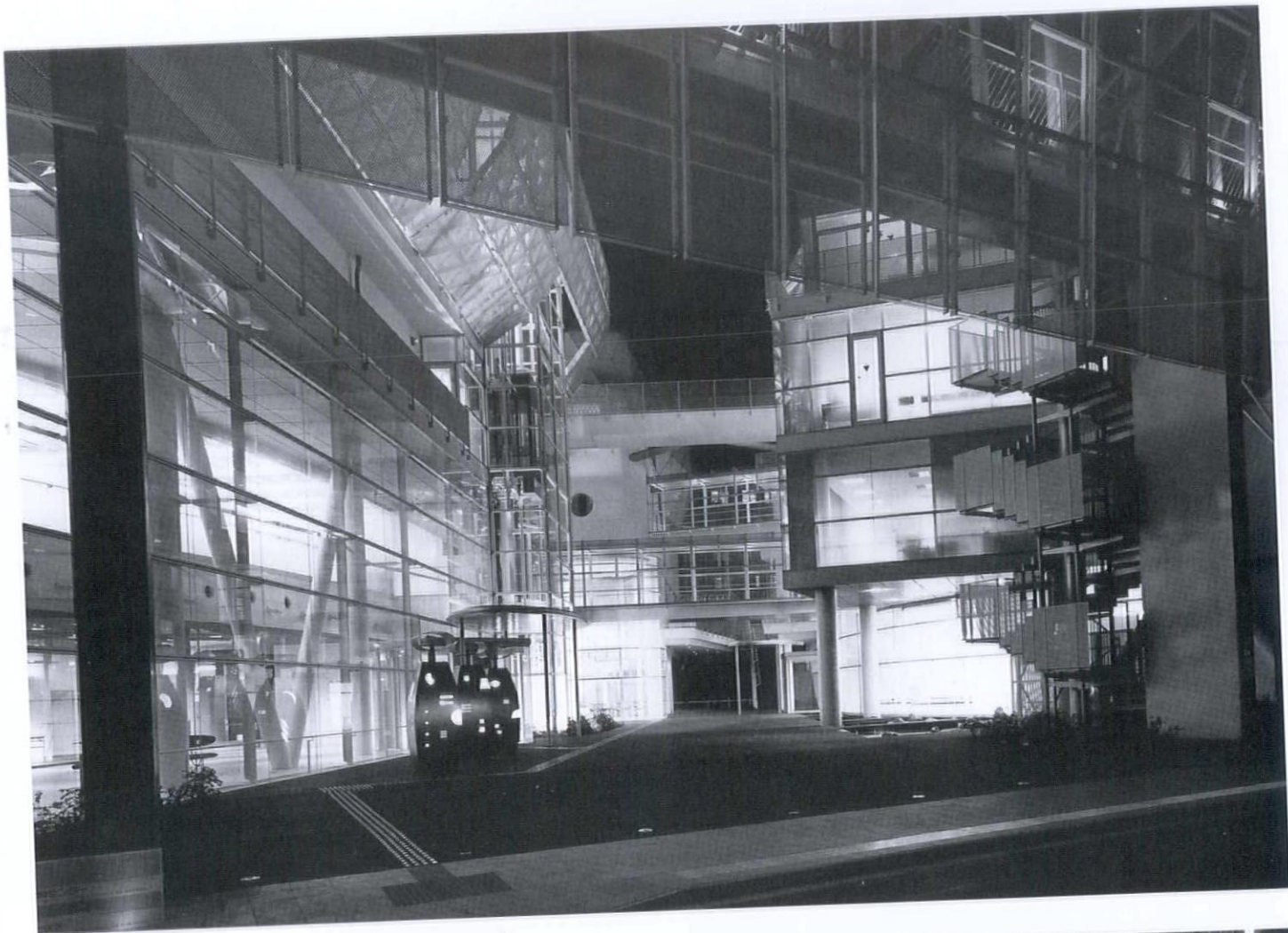
1st floor plan S=1:1000

- |                           |                         |
|---------------------------|-------------------------|
| 1 : Planetarium           | 18 : Workshop           |
| 2 : Control room          | 19 : Staff room         |
| 3 : Terrace               | 20 : Hall               |
| 4 : Void                  | 21 : Foyer              |
| 5 : Reception room        | 22 : Media center       |
| 6 : Play room             | 23 : Bridge             |
| 7 : Office                | 24 : Water place        |
| 8 : Library               | 25 : Plaza              |
| 9 : Media Laboratory      | 26 : Show case          |
| 10 : Tatami room          | 27 : Rehearsal studio   |
| 11 : Study room           | 28 : Restaurant         |
| 12 : Lobby                | 29 : Information        |
| 13 : Audio-Visual room    | 30 : Exhibition gallery |
| 14 : Audio-Visual gallery | 31 : Bicycle            |
| 15 : Storage              | 32 : Parking            |
| 16 : Music studio         | 33 : Mechanical room    |
| 17 : Audio-Visual studio  | 34 : Ramp               |

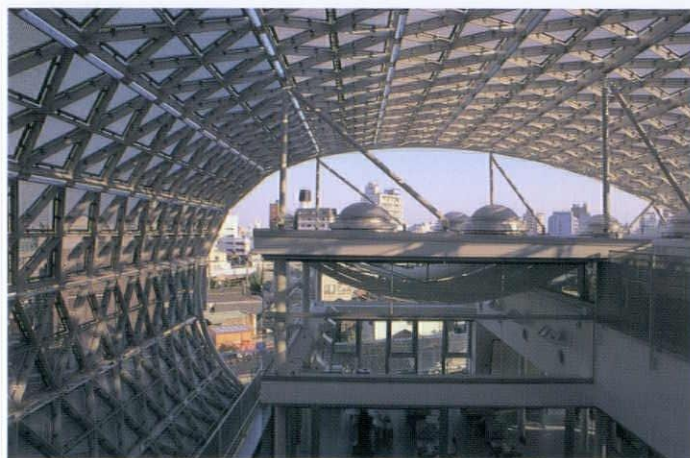


Section S=1:1000

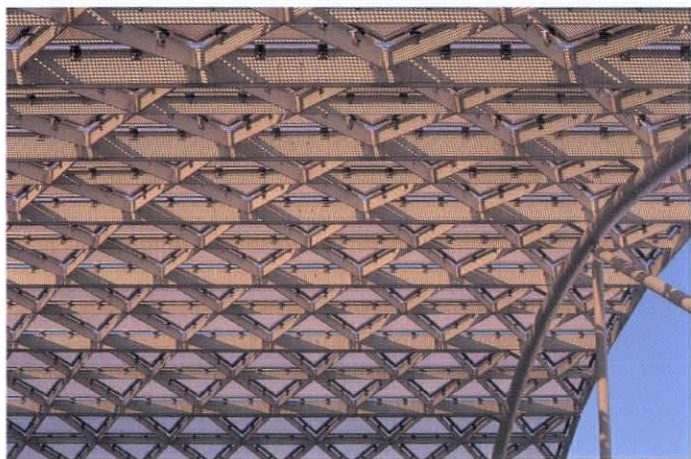


















Just as the Earth has its place in the universe, everything and every one of us has some relation to something or someone else. Even if what we do or our motivation for doing it differs from other people, our very energy links us to other people. Simply being near other people has a meaning of its own.

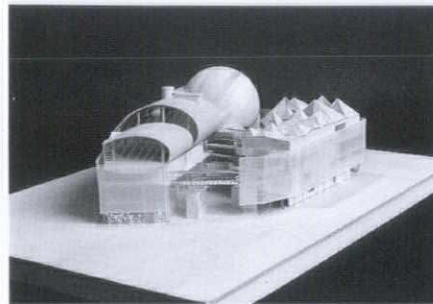
For this reason, we propose the Sumida Culture Factory, a place where new media can be put to their fullest use to promote interpersonal exchange. The Sumida Culture Factory will work as a new role as a multipurpose facility consisting of a cultural center, a life-long education center, and an academic education center.

To go beyond the confines of specialized activities and to stimulate a free exchange between the people involved in those activities, a new place must be created where people with all kinds of interests may share something in common. Thus we propose the Media Workshop as a place where the focus is placed on creative activity. The proposal calls for the use of computers as a new medium with which Sumida Ward's traditional craftsmen may work, and which would promote interpersonal exchange between people involved in a wide variety of creative work utilizing the advantages presented by computers. An artist can create a new work while a housewife makes leaflets for a neighborhood choir right next to him. A shopkeeper can make an advertisement for his store while a group of students work together nearby to create a promotional video for their university club. One can work on a design for a pottery painting while another studies the mechanics of a golf swing at the next terminal. This would make it possible to bring together people who had no reason or opportunity to meet before, and it would promote a whole new series of interpersonal exchanges. By bringing together a wide variety of people, we would also succeed in bringing together a wide variety of interests, and this in turn would make it possible to motivate an entirely new range of activities and promote them in entirely new directions.

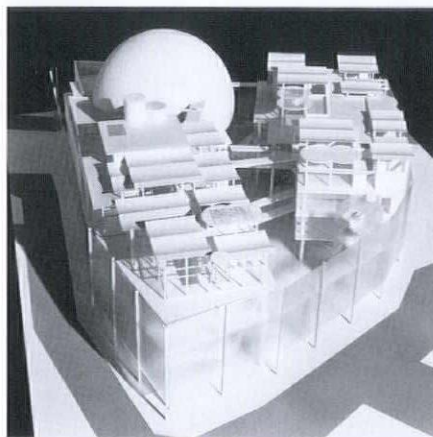
What is most important here is the networking of facilities, information, and individual activities. This is why we have proposed the creation of a network to enrich and develop these activities. Of course, since it would be physically impossible to encompass all conceivable activities in a single center, what we must do is to create a system capable of responding to the individual needs of the people who do come, and of stimulating people to independent activity.

The information center we propose to create for the Culture and Education Center would be capable of providing a variety of information to people involved in different activities.

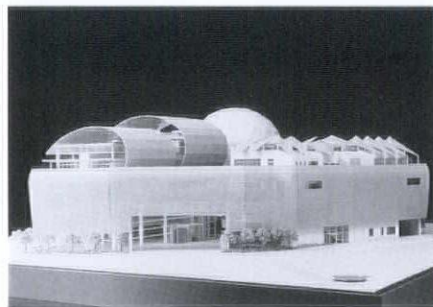
One more important requirement is for the center and its staff to be able to respond flexibly to create an atmosphere favorable to free and creative work. This means that the job of providing information must not be entrusted to machines, and that consideration is required to promote interpersonal communication and exchange.



First model



Second model



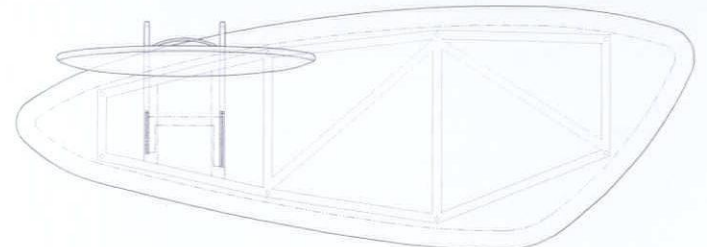
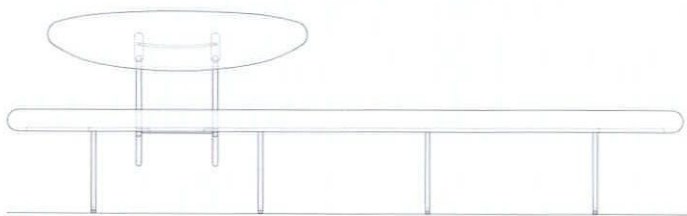
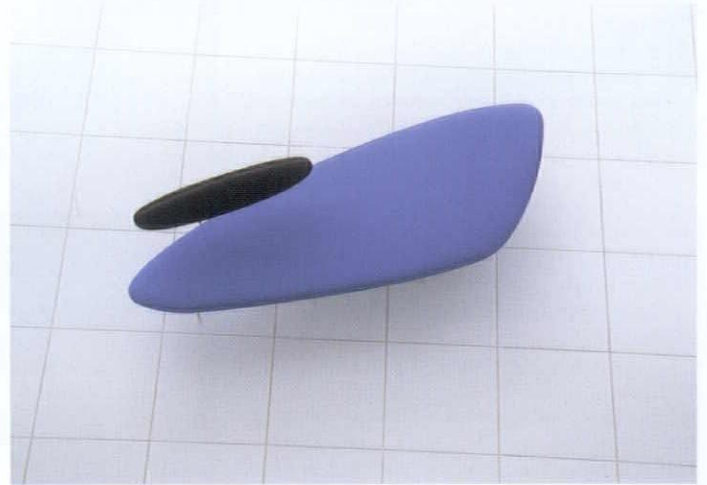
Final model

世界や宇宙の存在と同様に、それぞれの活動は何かの関係をもって存在している。活動の内容・方向性が異なっても、その時人々が発するエネルギーは何かの関係を持つ。隣り合うだけで意味が発生するのである。ここで私達は、単に学習するための空間を配置するのではなく、様々な可能性を開く場を積極的につくりたいと考えた。そして新しい交流と結び付いた新しい手法としてのメディアの活用形態、それが文化センター・生涯学習センター・学校教育センターという3つの役割を持つ複合施設(すみだ生涯学習センター)に対する新しい提案である。各活動分野の枠内の展開だけではなく、相互の自由な交流と展開を発生させる手法として、どの分野にも共通する要素に焦点を合わせた新しい場を設定した。

ここでは「つくること」(創作活動)に焦点を合わせた場「メディア工房」を提案した。メディア工房では、墨田の伝統職人が新しいメディア(コンピュータ)をコミュニケーション・ツールとして有効に活用することを始めとして、人々の多様な創作活動を介した交流を発生させることを目的としている。芸術家が作品を制作している横に、ママさんコーラスのリーフレットをつくるお母さん、お店のチラシをつくるおじさんの横にサークルのプロモーションビデオをつくる学生たち、陶芸作品の絵付けのデザインをするおじいさんの横にゴルフのスイングを研究するお父さんと子供といった具合に、今までは隣り合うことのなかった人々の新しい交流と共生の場が発生するのである。人々の多様な興味のアンテナが接触することによって、多様な活動の動機と新たな進展が可能になるのである。

それと同時に重要なのは施設、情報・活動の各種のネットワークである。すべての活動をこのセンターだけで実現させることは物理的に難しい。情報センターでは、多様な活動の各レベルの人々に多様な情報を提供し、最適な場所へ導く文化・学習に関する相談活動にもコミュニケーション・ツールとしてのメディアの在り方と手法を提案した。情報システムにおける重要なポイントは「積極的情報提供の提案」人々の交流と新しい活動への触発である。利用者による随時的、選択的、双方向的な情報利用が可能で、常に利用者の好奇心を触発するような情報提供の方法論や、新しいタイプの有効な画面デザインを施す必要がある。施設やスタッフの柔軟な対応と雰囲気づくりも情報の提供も、機械だけに任せず、非常に大切である人と人との交流を介したきめ細かい対応への配慮が必要である。インターネット時代を迎え、使う意図に応じたコンピュータによる新しいコミュニケーションの在り方を発生させる。これからのコンピュータは、情報を提供するためのネットワークとして、制作活動のツールとして、様々な場面で有効に展開させることが可能なのである。











## Disclosure and Surprise

Christine Hawley

In a European sense the "Sumida Culture Factory" is a marvellous piece of linguistic tautology in that it implies irreconcilable opposites, the notion of "culture" the beliefs, traditions heritage and aspirations of generations being housed and produced in a building that has mechanistic, product orientated contradictions is a wonderful paradox. Yet this title in the description of the building and its activities is quite accurate and I suspect very Japanese. The building brings together people at a social level, it brings together people with their interests and yet offers the possibility of far more. The European "model" simply does not exist, the range of activities and amenities in this building is quite breathtaking. Facilities for making music, broadcasting, art, film, exhibitions, educational facilities and even a planetarium is part of what the "Factory" has to offer. The beauty of the Sumida Culture Factory is that it has so much to offer in one place. For those that study the social evolution of the family, this must be a good thing. In Europe the social structure of the family as a tightly knit nucleated unit has fractured unredeemably in post war generations, one imagines that the same forces are at play in Japan. However it was a genuine delight to see small children, teenagers, thirty somethings with a more elderly contingent all engaged and absorbed in what is available in this complex and surprising building. It is and will be undoubtedly a wonderfully successful magnet for many and provides the platform for creation, explanation and interaction—one might say that it is as much a social vehicle as it is a building.

The building is a surprise in more ways than one might imagine. Discreetly tucked away in a part of downtown Tokyo. As a fleeting European observer the area was a maze of small buildings, shops and alleys. The scale was distinctly "sub" urban and the architectural grain identifiably oriental. There was of course the visual compression of space, the use of low, horizontally defined buildings covered in banners, signs and the ubiquitous web of service lines as they run in and around the buildings. The area reminded me of those pockets of Tokyo that you stumble upon from time to time where the furious pace and scale of a metropolitan city is left behind. The pan western skyline gives way to a physical scale that is intimate

and about the individual. A very appropriate location one might immediately think for a building with such an overt social function. However for any architect to build what is in effect a public building in an area not given to major public gestures it represents a major challenge, one of translating effectively both architectural language and scale. It is immediately obvious that the site is very difficult. The configuration of the site is contorted as the building "shoehorns" its way between neighbouring structures. The extraordinary bifurcated shape of the boundary largely determines the configuration of the building. The orientation, I suspect was also not negotiable. A main-street that slices through the neighbourhood is the obvious artery through which people will flow to gain access. A pedestrian who turns the corner is met with two linked slices of building through which a curvaceous pedestrian courtyard runs. Discreetly slotted into an available opening it presents a cool and elegant contrast to its surroundings. There is an immediate impact in the use of a clear white uncompromising modern language. The forms are minimal and the use of white with layers of transparency provides a seemingly ethereal entry into a building whose complexity is far from apparent from the outside. The cascade of water that runs down to one side of the external staircase provides a magnetic feature for children. As I walked towards the entrance squeals of chatter came from a small group of boys intent on diverting the course of water with their feet. The building from the moment you see it obviously does not have the mantle of a dour public facility—this building is going to be fun.

In retrospect my introduction to the building was too fleeting. I was expertly guided from one level to another, from library to meeting place from space simulator to cafe and planetarium. For a European familiar with the classic devices of the public building and their methods of orientating an unfamiliar public—these spaces were initially a puzzle. I had to refer to the plan on more than one occasion and only then did I begin to realise that the rooms appeared to almost melt into the pockets of site. The building broadly falls into two linked sections with complex vertical subdivisions allowing the maximum advantage of creating a sense of space on a very compressed site.

Each level is thematic variation of white concrete, white cladding and glass. The use of colour is carefully targeted. Three key columns in each block are colour coded to denote the anticipated mood of the activities. All the colours are vibrant. The balance between the cool elegance of these white rooms and the startling palette of colours is heightened by the vivid sculptural seating that sit like pools of brilliant liquid in parts of the building.

As one negotiated a route through the building it becomes more apparent that no gestures have been made towards neo-classical organisations; the building is more about disclosure, of turning corners and discovering space. Looking through layers of glass or layers of structure and white metal mesh one sees suggestions of space beyond or above and below. For those that enter it for the first time such as myself it is experienced as a sequence of discovery, surprise and delight. There are, of course some familiar architectural icons, quotation from the distinctive Hasegawa vocabulary—the dome, the geodetic structure housing a planetarium which is tucked more discreetly into the roofline than in the "Shonandai Culture Centre." Its impact is subtle, its singular form glimpsed from various parts within the building but never totally disclosed until eventually one reaches the interior. The use of white metal mesh so often used in previous construction as a device to signify the building externally is here used to great effect as a veil—more I suspect to shield the interior from a physically oppressive site. The device is simple and it is successful—there is a sense of being in another world with few distractions once inside. Entered from above, the small cafe was an appropriate point at which to pause and reflect on the building. The view across a small courtyard is layered and fragmented, cool and elegantly organised it is a building that will never disclose its identity at first glance—it is too subtle and too clever, just as one was struck by the delighted children on entry to the Sumida Culture Factory the cafe (my point of departure) was full of every generation all animated, all having enjoyed this beautiful facility tucked away in downtown Tokyo.

● Architect, UCL Bartlett Professor of Architecture



クリスティヌ・ホーレイ／訳＝手塚貴晴

我々ヨーロッパ人から見れば、くすみだ生涯学習センターは言語学的に卓越した類語反復（トートロジー）の業績である。というのは、文化、信念、伝統、各世代の欲求などの様々な文化的要素が、それとは相入れないはずの機械と生産主義の矛盾を抱えた建築の中に、素晴らしいパラドックス体として巧みに育まれているからである。この建築の英語名Culture Factoryという名称は、建築自体との中で繰り広げられるアクティビティの表現としては正確であるが、また同時にこの建築が日本的な作品であることも意味している。この建築は、単にある特定社会のグループから人を集めるのではなく、その多機能さを武器として様々なタイプの人間をかき集め、期待した以上のものを結果的に提供する。いわゆるヨーロッパによく見られるような一般的な公共建築の設定に飽き足らない、この建築のアクティビティとアメニティの幅には実に感嘆させられる。音楽、放送、芸術、映画、展示、教育、果てはプラネタリウム等の施設に至るまで、実に様々な機能がこの施設（Factory）には要求されていた。このくすみだ生涯学習センターの素晴らしさは、その多機能さに他ならない。ここは家族という社会単位の在り方の変遷について考え直すには最適の場である。ヨーロッパの戦後世代では、深い絆を持った核としての家族が、社会構造上修復不可能なまでに破壊されてしまったのであるが、日本社会もまた同じ道筋を辿りつつある。しかしながら、この複雑かつ驚くべき建築の中では、子供、10代から30代の若者が老人のグループと出会い、交流し合うという、実に微笑ましい情景が展開されている。間違いなくそれは、多くの人々を引き付ける磁石として、かつ創作、学習、情報交換の場として、現在から未来に渡って成功を収めるであろう。これはむしろ単に建築と呼ぶよりも社会の媒体と呼ぶのがふさわしいのかも知れない。

この建築には、予想以上に様々な点で驚かされる。この建築は東京の下町に注意深く織り込まれている。行きずりのヨーロッパ人観察

者にとっては、この地域は小さな建物や店や小道の続く迷路に他ならない。街のスケールは明らかに準都市的で、建築のサイズは実に東洋的である。この敷地の界隈を一巡りすると、一見して街のスケール感覚は小さく、その低く水平を強調した建築群は、幟や看板や蜘蛛の巣のような電線に覆われているのが見て取れる。この地域で私が気付いたのは、東京は傍若無人な速度の巨大都市でありながら、しばしば足を止めるに値する界隈を未だ残しているということであった。そこに一歩足を踏み入れれば、どこにも見られる西洋的なスカイラインが個別的なヒューマンスケールにとって代わられているのがわかる。複雑な機能を要求条件として求められたこのような建築にとっては、うってつけのロケーションであろう。しかしながら、明確な公共性を持ち合わせていない敷地で、建築言語とスケールをはっきりと公共建築として表現するのは、建築家にとっては大きな挑戦となる。この敷地は明らかに難解である。この敷地では、近隣の町並みの合間に建築を嵌め込まねばならない。無秩序な2方向に分裂した敷地境界が自動的に建築の配置を決定する。私の思うに、建物の方向性については議論の余地もなかったであろう。近隣を貫く大通りはアクセスの動脈となるであろう。歩を進めて角を曲がれば、美しい曲線を描く歩行者専用コートヤードを挟んで繋がった2枚の建築物が展開する。それは与えられた隙間に丁寧に差し込まれ、近隣に対してクールでエレガントなコントラストを成す。それはまさしく純白で妥協のないモダニスタイル言語の見せる即効である。形態はミニマリズムであり、透明な重なりとあいまった白の採用は、複雑な建築の上に軽快な外観を演出している。外部階段の傍らを段状に流れ落ちる水は、子供達を魅惑する。エントランスへと歩を進めると、足で水の流れを変えようと遊ぶ、少年達の喚声が聞こえてくる。いわゆる厳めしく陰気なありきたりの公共機能と無縁のこの建築は、人々を楽しませてくれる。思い返せば、私にとってこの建築の見学は大忙しであった。私は階から階へ、図書館から会議室へ、スペースシミュレーターから喫茶、そしてプラネタリウムへと慣れた手順で案内された。クラシックな単純平面の公共建築や、慣れない大衆を端的に案内するよくある手法に慣れたひとりのヨーロッパ人にとって、この建築は迷路に他ならない。私は何度もプランを見返し、漸くこの現場の袋小道にほぼ溶け込んでいるかのような

その部屋を見つけたのであった。この建築は実にせせこましい敷地の中に最大限の空間のセンスを生かし、複雑に仕切られ繋がれたふたつの棟に大まかに分けられている。

それぞれのレベルは白いコンクリートと白い外壁とガラスを基本要素として、類型化されている。色は丁寧に選択され、キーとなる柱は階ごとに色分けされている。多分、その階のアクティビティの雰囲気表現しているであろう。全ての色は鮮やかである。白い部屋のクールなエレガンスさと華やかな色合いのパレットのコントラストは、鮮やかな液体のようにうずくまる彫刻的家具によって、さらに高められている。

建築をさらに解釈するにしたがい、新古典主義の空間構成に対して、この建築は何の興味も示していないことが明らかになってくる。この建築の興味はむしろ解放についてであり、角を曲がることについてであり、空間の発見についてである。ガラスや構造体の重なり、そして白銀のパンチングメタルを見透せば、その裏のもしくは上のまたは下の空間が暗示されている。私のように始めて訪れる人間にとっては発見と驚きと喜びの連続である。もちろん見慣れた長谷川逸子特有のヴォキャブラリーのアイコンも採用されている。〈湘南台文化センター〉に比べればルーファインの下に注意深くたくしこまれた、プラネタリウムを包み込むジオディティック構造のドームの効果は絶妙である。その形態はこの建築の中のあらゆる場所から垣間見ることができるが、観察者はそのドームに入るまではその全容を把握することはできない。建築の外観を強調するためにしばしば過去に用いられた白銀色のパンチングメタルは、ここでもベールとしての大きな効果を発揮している。多分今回は、むしろ内部をその重苦しい外部環境から隔絶するのが目的なのであろう。この小道具は単純でありながら成功している。内部はあたたかみも少しも破壊の手の届いたことのない異次元のようである。小さな中庭を隔てた眺めは、クールでエレガントに断片が折り重ねられていて、簡単に建築の全体像を伺い知ることにはできないように実に巧妙に組み立てられている。くすみだ生涯学習センターの入口で誰かがご機嫌の子供にはち合わせたとき、東京下町の中に美しく織り込まれた施設を満喫した様々な世代で喫茶は賑わっていた。

●クリスティヌ・ホーレイ／建築家、ロンドン大学バートレット校教授



# Ohshima-Machi Picture Book Museum

Imizu, Toyama 1994

## 大島町絵本館+ふれあいパーク

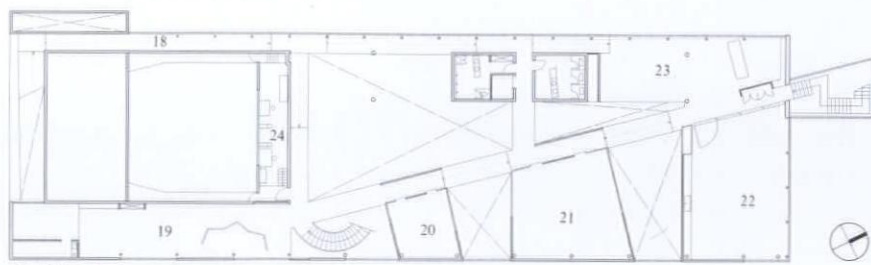
Within the flat topography of the town (which has only a five meter variation in grade) we wanted to create a place of fantastic power in the form of a hill. As the site is divided into three parts by rural paths, there naturally evolved three hills. These are arranged progressively higher from the entry point to create a diagonal perspective leading to the woods surrounding a large house located beyond the north east corner of the site. On this landscape, a simple, ship-shaped, airy shelter is gently placed.

The interior space is treated as an extension of the exterior space. A large oval-shaped library, a stepped performance hall with forced perspective, a fixed seat theater and a trapezoidal computer graphics workshop are placed along the meandering interior ramp. The essence of the ehon is a combination of smooth uninterrupted story lines and vivid visual scenes developed on every page. Our intention is to reflect this ehon composition in architecture by connecting various places with circulation spaces such as ramps, bridges, and providing visitors with a sequential experience of these places. Rather than focusing on narrow functional purposes, unprogrammed architectural places are there for unexpected happenings.

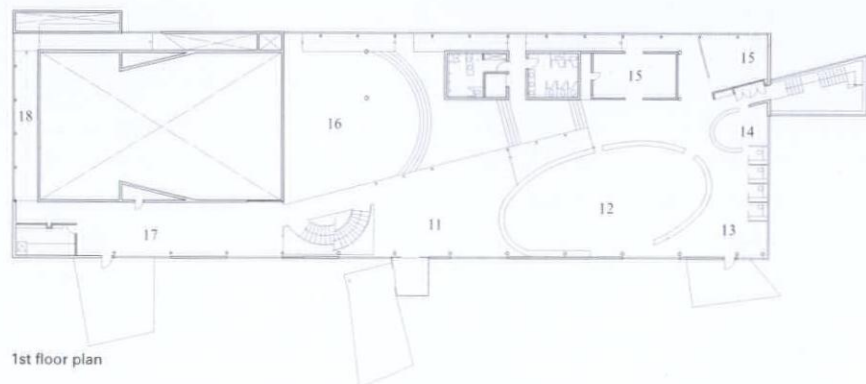
The adjoining park is a continuation of the interior space. The sound of a water harp, the breeze under a wind arch and an amphitheater on the hill; these places are scattered around the site. We hope that both spaces, inside and out, will foster new development of the ehon culture.

富山県大島町で続けられてきた絵本文化事業をさらに発展させるべく求められた建物である。極めて平坦なこの町に丘という新しい地形を提示し、フィクショナルな力の作用する「場」として立ち上げた。敷地は農道で3つに区分されていたので、そのまま3つの丘として奥に行くほど高くして、入口から対角線上にある北東の屋敷林まで、パースペクティブにのぞめるように高さを決めた。このランドスケープの上に空気を内包するシンプルなシェルターとして船のように絵本館を浮かせた。外部の延長としての内部空間に、大きな楕円形のライブラリー、パースの効いた段床状のパフォーマンスホール、固定席段床型のホール、台形のCGワークショップなどが浮かぶように配置され、これらを回遊するようにスロープを配した。絵本というメディアは滑らかに連続するストーリーとページごとに鮮やかに展開する場面によって構成されている。この構造を建築に落とし込み、様々な「場」をスロープやブリッジによって連結しシークエンシャルな「場」の連続体験空間をつくり出すことを試みた。そして特定の機能を加速させ、人々の行動を方向付けするよりも、むしろそこから離れたより建築的な「場」を提示することにより、予期せぬことが起こることを目指した。

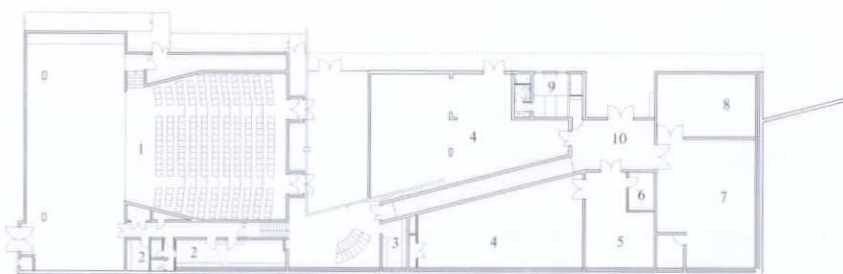
「ふれあいパーク」には建築の内部に連続するよう、水の音を楽しむ水琴窟、風の動きを視覚化する金属のアーチ、丘の頂部に穿たれた屋外劇場など様々な「場」がばらまかれた。内部、外部で様々な「場」が立ち上がり、絵本の新しい展開がここから始まることを期待している。



2nd floor plan



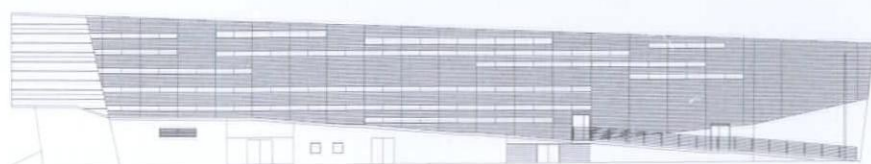
1st floor plan



Basement 1st floor plan S=1:600



East elevation



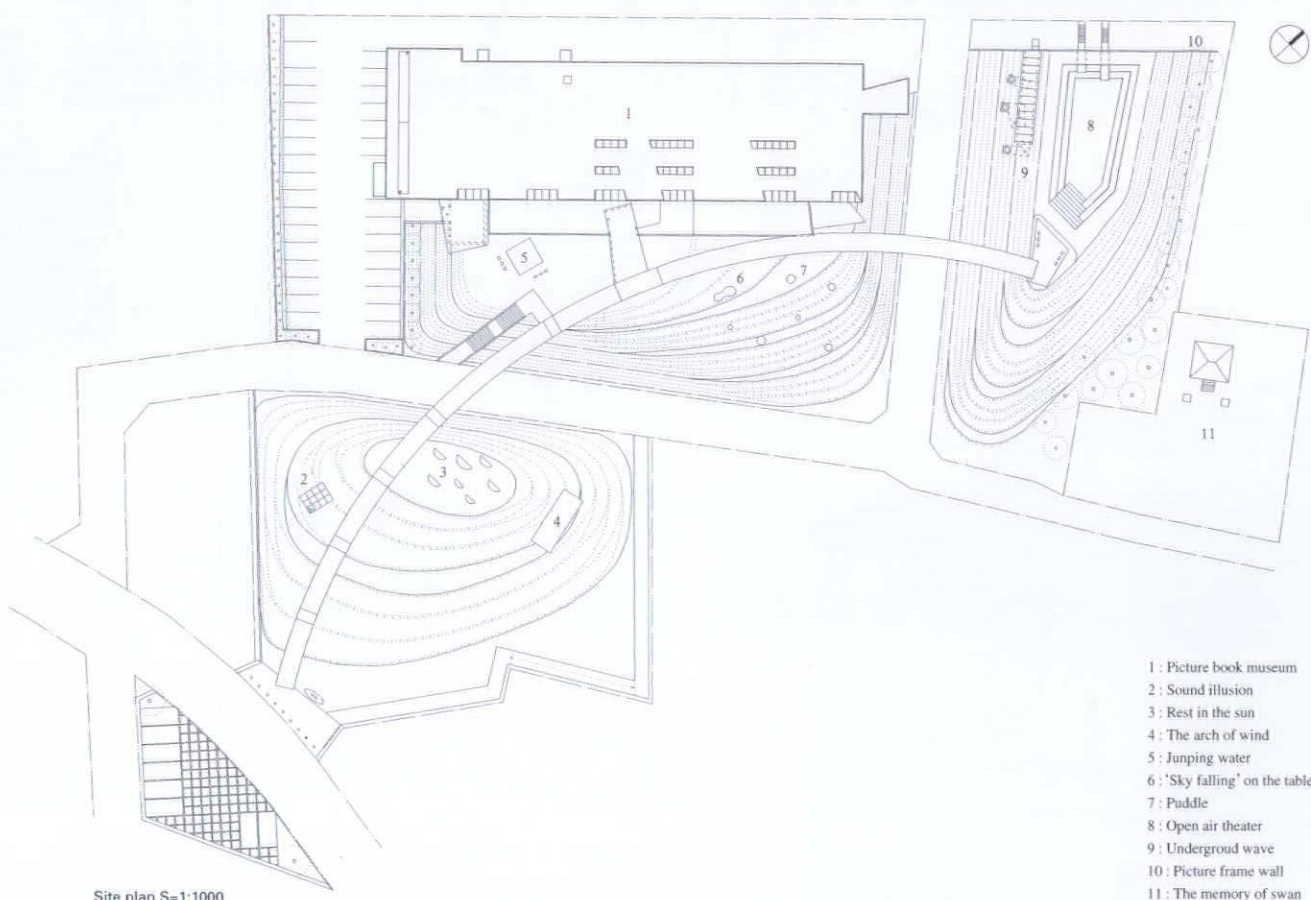
West elevation S=1:600

- |                           |                      |                       |
|---------------------------|----------------------|-----------------------|
| 1: Theater                | 9: Lounge            | 17: Café              |
| 2: Back stage             | 10: Staff entrance   | 18: Gallery           |
| 3: Locker room            | 11: Entrance hall    | 19: Staff room        |
| 4: Storage                | 12: Library          | 20: Meeting room      |
| 5: Stack                  | 13: Reading area     | 21: Workshop for C.G. |
| 6: Storage for collection | 14: Kid's garden     | 22: Workshop          |
| 7: Machine room           | 15: Exhibit room     | 23: Lounge            |
| 8: Electrical room        | 16: Performance hall | 24: Regulation room   |













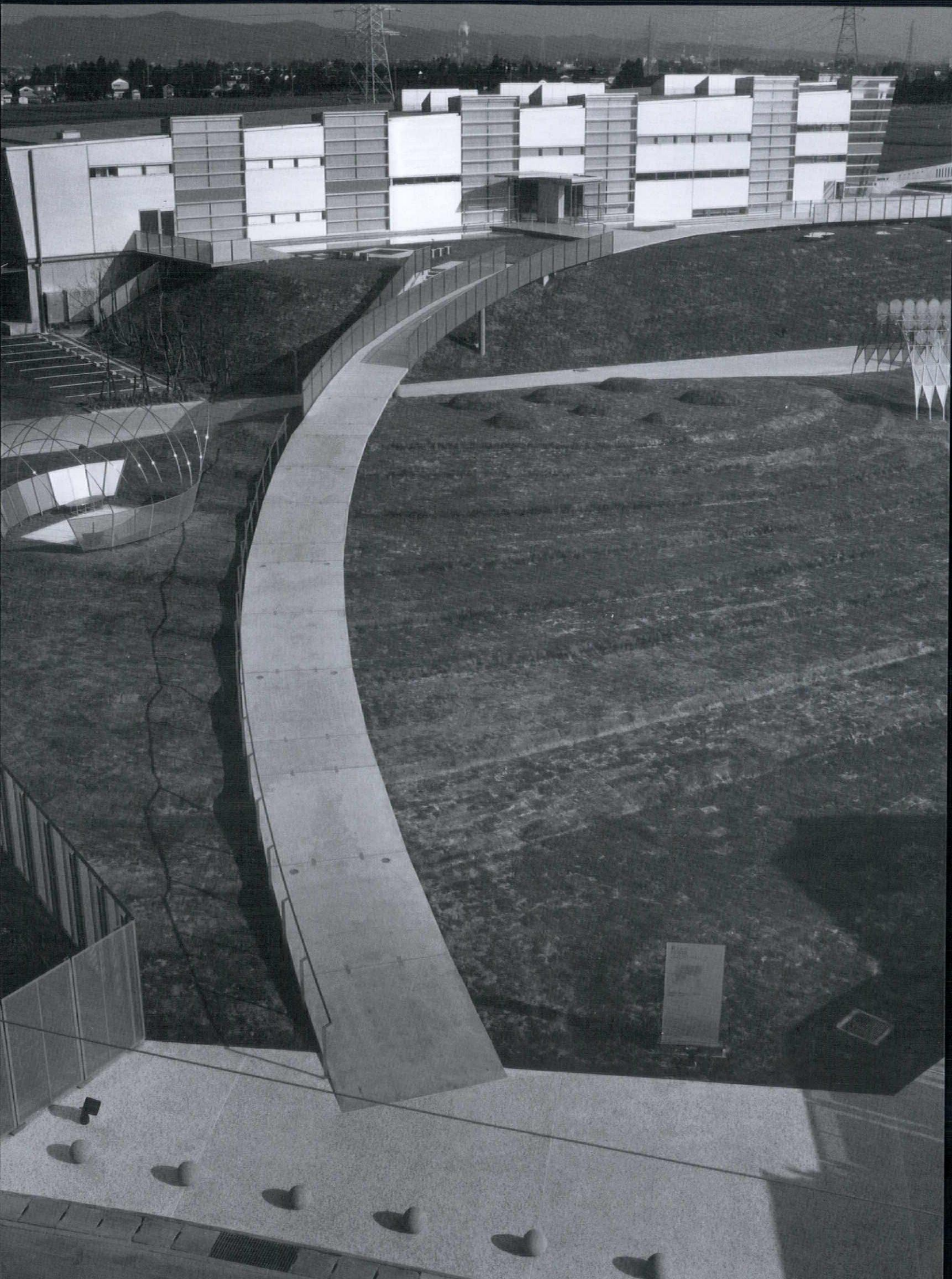




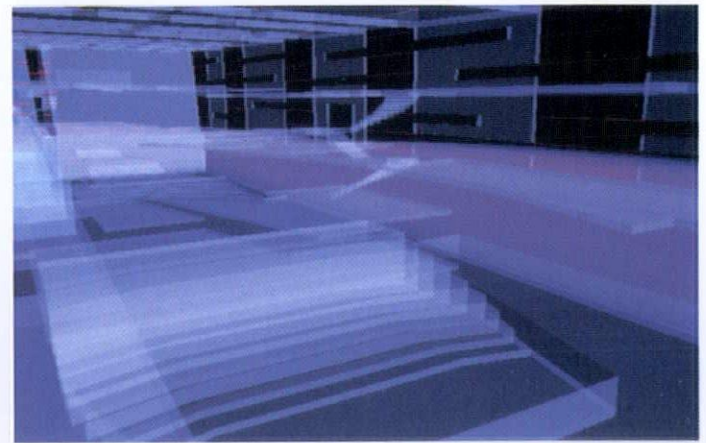
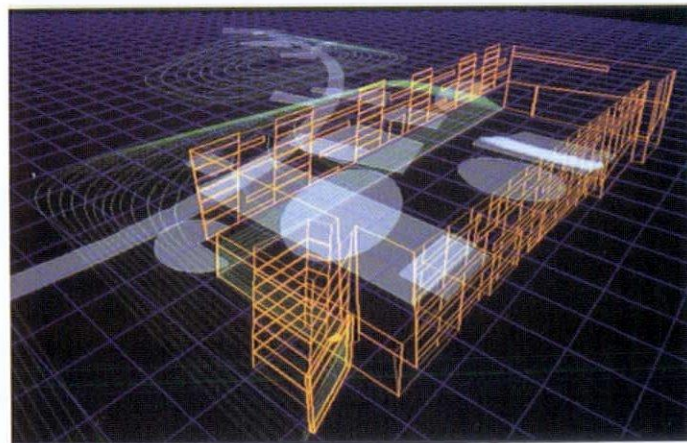
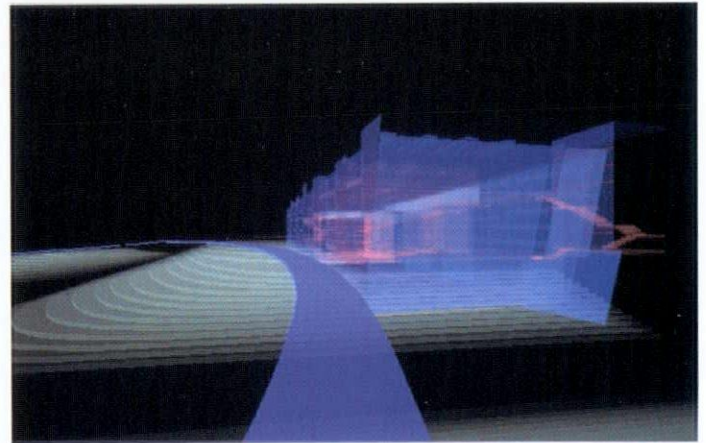
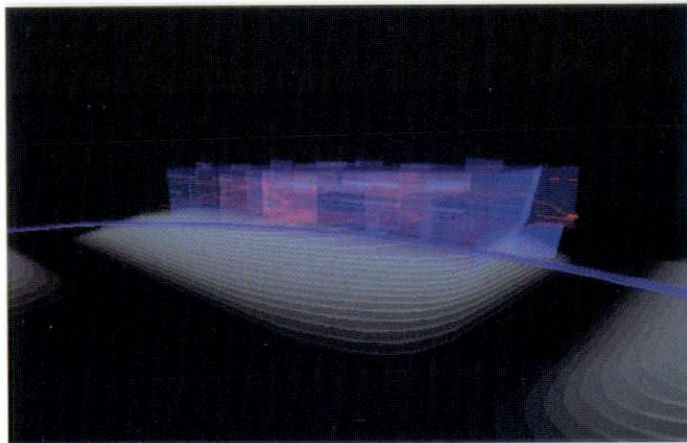
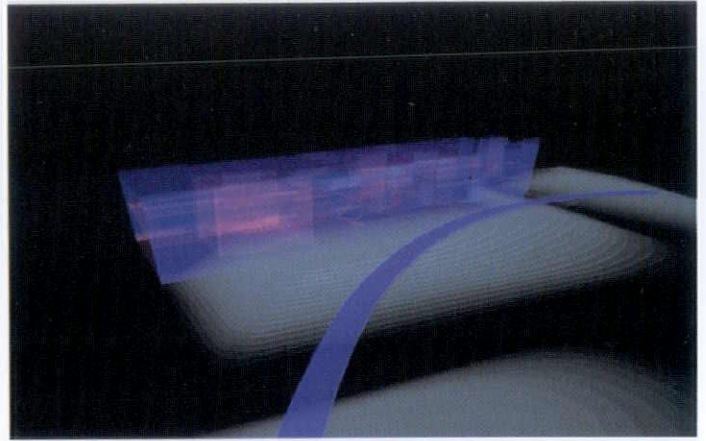
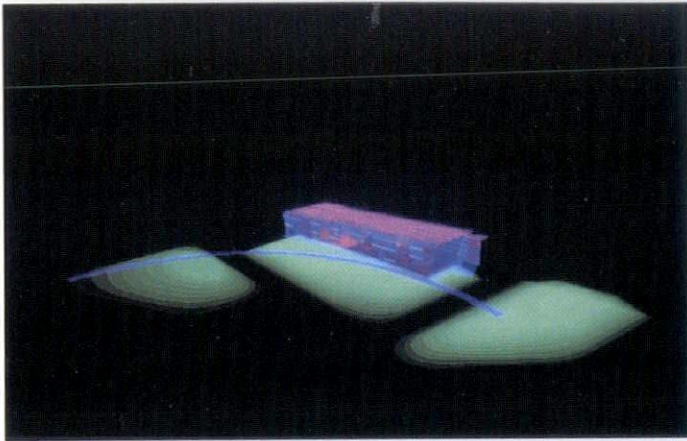














# Human-scale Public Architecture Evokes Activities

Kazuhiro Kojima / Translation by Hiroshi Asano

This is a large space, but it is much more intimate than what I expected from photographs. The simple volume contains a compact 7.5-meter high three-story atrium and a bridge. A library, exhibition space, workshops, and other specific functions are scattered around in three-dimensions and connected to each other by circulation routes. The spatial fluidity of individual rooms of the Oshima-Machi Picture Book Museum, along with low floor-to-floor heights and ramps, are responsive to natural movements of people. Architectural elements (columns, walls) and detailing are well thought-out and do not cry out for our attention, which also contributes to the fluid atmosphere. Ubiquitous double-layered polycarbonate plastic interior partitions and exterior glass curtain walls play upon visual transparency and translucency to create silhouettes of activities. Multi-directional long views enable one to grasp the scale of the building. An office area is located at the end of the ramp which cuts through the building diagonally, revealing glimpses of human activities.

The architecture is not preachy; it does not force people to do or not to do certain things. The activities and spatial qualities which can be sensed everywhere in the building lead to the generation of more activities and provide a clear perception of orientation. Visitors, including a large number of adults, enjoy walking freely about the facility. The architect's intention to create a "landscape with active people" is achieved brilliantly. There is a freedom of action here; one can move about, stay put or lie down. The gentle airiness of the interior space is the result of human activities instead of physical elements. At the same time it is a quiet space, which encourages people to stay longer. I was glad to witness that the program elements, such as the picture book workshops, are not left behind by the architecture itself. The architect's intention to design the whole process of active user participation, and not only a building, seems to be quite successful. During our conversation with other visiting critics, we talked about how the photographs of completed buildings are in a suspended state. In reality, there is a process in which a building is created, as well as a continuous period of time in which they are used. The liveliness of this building is a

great achievement of the architect and therefore I wish that photographs of the museum being enjoyed by people would be published.

The museum site is wedged among ordinary houses and rice fields. The front approach to the museum is dominated by landscaping rather than architecture. The device on the ground by the main entrance which shoots water up is very popular among children (adults do not get close to it for fear of getting wet). I was so fascinated with it that it took a while to get into the building. Many possibilities for activities are scattered around the exterior space. The slanted walls and idiosyncratic roof profile, with which I was familiar from the published photos, do not stand out because they are hidden by a hill (in the distance), and are out of the cone of vision at close range. When you stand in front of the building, there is no excessiveness of architectural expression. Itsuko Hasegawa's buildings often taken very strong forms. The museum building is a tilted rectangular parallelepiped with a series of skylights along the edge of the facade. As far as this building is concerned however, the print media gives the wrong impression. In reality, the interior space and the landscape are predominant elements.

Itsuko Hasegawa is one of the architects who have challenged the conventional status of public architecture. She is persuasive when she suggests that "architecture is not an object of art but something to be used." I support this contention when I see how her buildings are used and from my conversations with the people who use them. The public buildings she has designed so far are more or less peripheral. In the past, this type of building was not designed through a design competition nor has it attracted much national or international attention. Yet why have so many well-known large-scale public architectural projects actually alienated citizens? The recognition of Hasegawa's architecture as peripheral itself may be the result of our preconception of equating publicness to authority and its larger-than-life imagery. From that perspective, I am certain that Niigata Civic Center, regardless of its much greater scale, will be similar to the museum. By rejecting the aesthetic monologue of "art for art's sake" approach which forces preconceived archi-

tectural images onto a site, and utilizing many practical ideas for "lower case publicness" instead of an upper case "PUBLIC CONCEPT," her works show what she means. More of the public spaces around us should go through a similar process of conceptualization.

In the past, such an attitude seemed to be reflected directly in Hasegawa's village-like building massing, and the ambiguity of different space peripheries. Lately, one can sense changes in her forms which have become bolder and simpler. I, of course, do not subscribe to the notion that these changes are more authoritarian; instead I find increasing confidence in the way she complements architecture with such symbolic programs of user participation and her strong involvement in training building support staff through workshops. The Picture Book Museum and Busshoji Elementary School, which we visited this time, can be perceived as her transitional works.

It is a Hasegawa concept to provide an "empty field" (where things which happen are positively accepted) instead of a rigid unchanging authoritarian architecture which dominates people from the moment it is completed. I am delighted to see people enjoying the spaces without fear or hesitation. Her comment that "architecture is meaningless unless people are involved" leads to her position of "providing architectural flexibility which respond to various personalities through public discourse". Itsuko Hasegawa's architecture of "empty space full of possibilities" evokes public activities and lays down a new connection to stronger communities.

● Architect



## アクティビティを喚起する等身大の公共建築

小嶋一浩

ワンルームのスペースがある。写真から想像していたより親密なスケールだ。天井高が7.5mほどに抑えられたコンパクトな3層吹き抜けとそれを巡るブリッジが、シンプルなパッケージの中に入る。図書・展示やワークショップといった機能が立体的に離散的なコーナーとして置かれ、回遊性のある動線でつながる。

〈大島町絵本館〉の個々の場所が連続する空間の流動性は、小さい階高と自在に巡るスロープとで、人の動きによく応答している。柱や壁といった建築を構成する事物とディテールが整理されていて存在を主張しないことも、そうした効果を高めている。視線の透過性・半透過性が、室内に多用されているポリカーボネードの複層シートや外部との境界となるカーテンウォールで演出されて、他のアクティビティがシルエットで見え隠れする。また、長い視線の抜けが、いろいろな方向に、建築全体のパッケージの大きさを示すように確保され、事務室も平面全体の対角線にとられたスロープの先でコーナーになっている。そうした隙間にも人がチラチラ見える。

建築が説教がましくないのがいい。あれをしろ、これをするなという、押しつけがましさが無い。どこにいても建築内の他の場所のアクティビティや空間を自然に感じ続けられることが、別のアクティビティを誘発し、あそこへ行きたいと思ったら直感的にその通りに動けばとりつける。大人も多い来訪者は、自由に歩き回っている。「人が活発に動いている風景をつくり出したい」という、建築家の意図は、見事に実現されている。ここには、移動するにせよ、留まるにせよ、横になるにせよ行為の自由さがある。柔らかな空気感につつまれる室内は、事物ではなく人のアクティビティの気配によって現象している。しかもそれはノイジーではない。結果として、来訪者の滞在時間が長くなる。絵本作りのワークショップなどの活動が建築に置いてきぼりを喰うことなく併走しているのが確認できたのもよかった。完成した建築の力だけではない、プロセスを重視し、生き生き使われる状態を設計していこうとする姿勢が生きている。

一緒に訪れた人たちとの話の中で、竣工写

真は、時間が停止した状態だという話になった。実際にはそれを作ってきた時間があり、それが使われていく時間がある。この建築の中の生き生きとしたアクティビティは建築家の仕事の成果でもあるのだから、人がいて使われている風景も発表してほしい。

絵本館はそっけない住宅と畑とたんぼの隙間のような敷地に建っている。館に正面からアクセスすると、建築よりはランドスケープの印象が支配する。エントランスの脇の、床からモグラたたきのように水が飛び出す仕掛けは子供たちに大人気（大人は服が濡れるので近付けないのだ）。それに引き寄せられてなかなか入館できなかった。外部にもそうした行為のきっかけがばらまかれている。写真で見て知っていたはずの、斜めになった壁や特徴的な屋根のシルエットは遠目には丘に隠れてあまり目立たず、近付いたときには全体は視野に入らない。過剰さを感じない。これは、行ってみないとわからない。長谷川逸子の建築には、かたちが強く現れるものが多く、ここでも全体は斜めになった直方体のようで、エッジに立ち上がって並ぶスカイライトと併せてシルエットにかたちの特性が集約されている。しかし、この建築に限ってはそれが印刷されたメディアでミスリードを誘発しているように思う。そのくらい実際に訪れた時インテリアとランドスケープの印象が強いのだ。

長谷川逸子は、公共建築の有り様を変えてきた建築家のひとりだ。「建築はオブジェのように飾っておくものではなく、使うものです」という言葉には説得力がある。実際に使われている状態を見て、使っている人たちと話してみてもそう思う。公共を日常の行為の延長へと還元する。今までに彼女が手掛けてきた公共建築は、誤解を恐れずに言えば、「周辺・周縁」のものだった。〈湘南台文化センター〉や〈すみだ生涯学習センター〉を始め、永見市のふたつの小学校のような施設は、コンペが行われて建築家が参加することなどなく、全国的に、あるいは世界で話題になることもなかった。一方で、今までに数多く作られた大型の「公共建築」の大半が「市民のもの」のは

ずなのにそうは感じなかったのは、どうしてだろう。長谷川逸子の建築を周縁的と感じるその意識が、すでに公共＝権威、あるいは等身大ではないものと習慣づけられたものなのだろうか。そういう意味で、〈新潟市民文化会館〉もその工事規模とは関係なく、絵本館のようなものになるに違いない。「自らがつくりあげている建築のイメージを無理やり敷地に押し込めるといった作品主義」の「モノローグ」的な美学ではない世界を、「大文字の公共概念の提出ではなく、具体的な小文字の公共をいろいろなアイデアを試みながら実践」するこの建築家の仕事の成果が、そこにある。私たちの身の回りの公共空間はもっともっと変わっていいはずなのだ。

以前は、そうした姿勢は「かたち」にストレートに反映されるように見えた。集落のような建築、知らない間にその中へ入り込んでしまっているような境界のあいまいさ。それが最近少し変わりつつあるように見える。大きくて単純な輪郭。だから権威的になった、などということではない。建築の力にだけ頼るのを止めて、建築のユーザーやサポートする人を同時に育てていこうというワークショップを開催する方法に象徴されるような建築家自身の自信がそこに発見できる。今回訪れた〈大島町絵本館〉や〈永見市仏生寺小学校〉はその過渡期の作品のようにも見える。

権威で人を従えて竣工したときから何も変わらない建築を作ろうとするのではなく、「ガランドウ」の「原っぱ」でそこに起こることを積極的に受けとめながらやるのが長谷川流だ。ユーザーが場所をこわごわ使っているのではなく、のびのび使いこなしているのがいい。「建築だけがあってもは駄目で、人が関わったり、よく使われたりしないと実像にならないんです」という姿勢が「議論をし、さまざまな個性を引き受けしていくことで、建築は変化に対応する可能性を持つ」というスタンスにつながっている。

長谷川逸子の建築は、アクティビティを喚起する「きっかけに満ちたガランドウ」として、一般社会への回路を切り開く。

●こじま・かずひろ／建築家



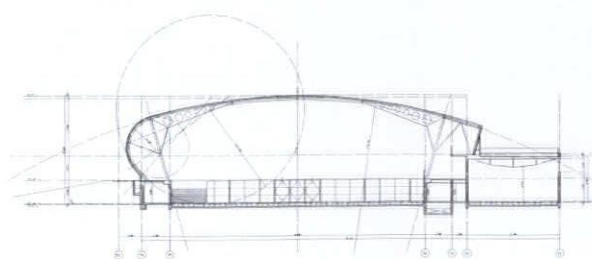
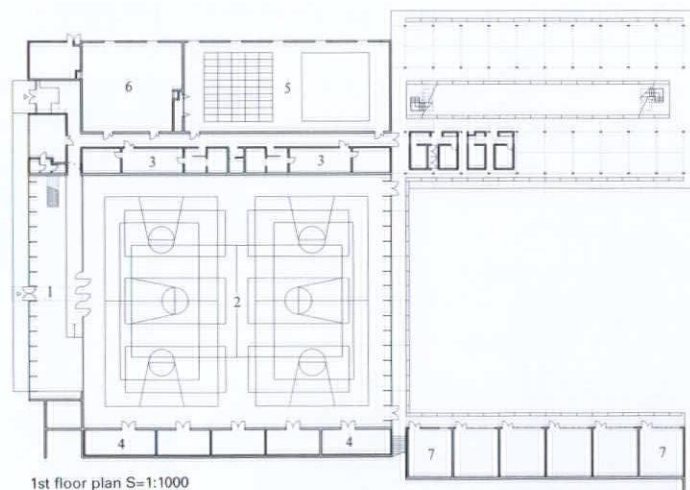
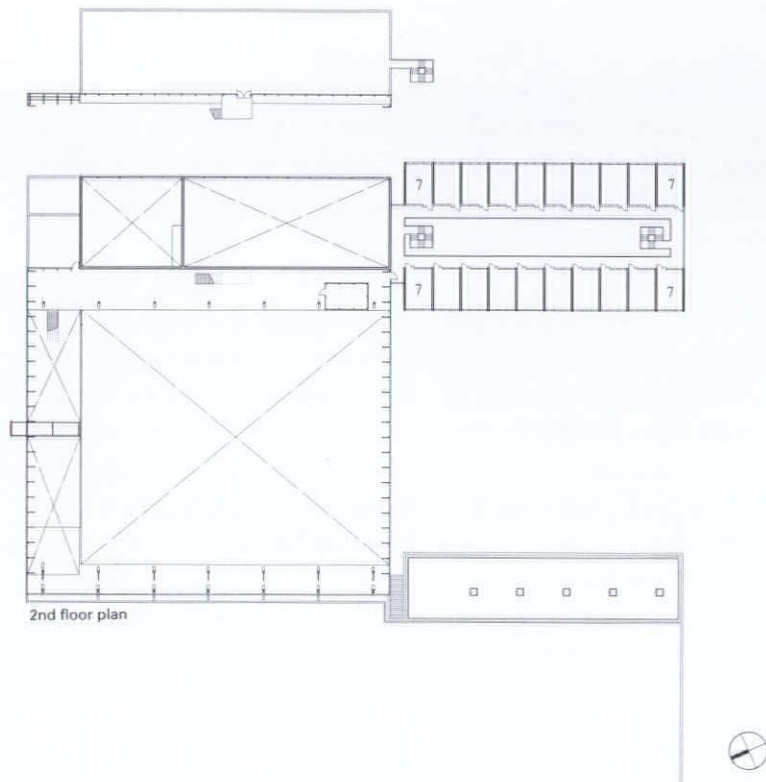
# The University of Shiga Prefecture, Gymnasium

Hikone, Shiga 1995

## 滋賀県立大学体育館

The university of Shiga, whose master-plan was done by a master-architect Shozo Uchii, required a "soft unity" for planning the distributed site. The gymnasium, in the form of a wind-swollen curtain, is located at a vantage point which overlooks several facilities of the new university. Through the transparent gymnasium, Mt. Kojin, a city landmark, is visible from the parallel classroom buildings. Yet-to-be-completed tennis courts on the west side of the gymnasium, surrounded by a sloped grass seating area, will give the visual impression of a large plant seed trying to jump out of the ground. The gymnasium's front facade and the one facing the baseball field are fully glazed for natural light and visual transparency. The gallery level contains support functions such as locker and shower rooms. Under the gallery and outdoor exercise area, there is a martial arts hall and a training room, which are connected to the club house building on the south. One club house is built on pilotis above the bicycle parking lot, and the other one is built into the slope around the tennis courts. The gymnasium and the two club houses define edges of a large glassy yard on the south. The roof, a thin light shelter, is supported by tree-like columns and brackets. The orderly rows of these columns are reflected on the glass walls and appear to be a forest.

滋賀県立大学は、マスターアーキテクトによるマスタープランに基づき、分割された敷地を「ゆるやかな統一」を持って計画することが求められた。この体育館の風を大きくはらんだ帆のような形態は、新設される大学の様々な施設から見渡される位置にあり、並列する大学部棟からは透明な体育館を通して、町のシンボルとしての荒神山を臨むことが可能である。テニスコートの計画されている西側は、テニスコートの観客席にもなる芝の斜面の中に埋もれていて、まるで巨大な種が大地から飛び出さんばかりの風景になるであろう。体育館のアプローチ側と野球場のある側はオープンな全面ガラス張りとなっており、採光と視覚的な透明性を確保している。体育館に付帯するシャワー室などの上部にアリーナに向けたギャラリーを設け、そのギャラリーと屋外トレーニングのテラスの下に柔剣道場、トレーニングルームを設けて、南側のクラブ棟とのつながりをつくっている。クラブハウスは自転車置き場のピロティの上部にあるものと、テニスコート側の芝の斜面に埋め込まれたものの2種類が用意されている。体育館の南側には、体育館とクラブハウスに取り囲まれるように大きな芝生の光の庭が広がり、体育館はその外部の広がりを取り込んで成立している。屋根は薄く軽快なシェルターであり、この屋根を支える柱と束材が樹木状に並ぶ。その樹木状の構造は時にはガラス面に映り込み、林状に連立し、折り重なる風景を見せてくれる。

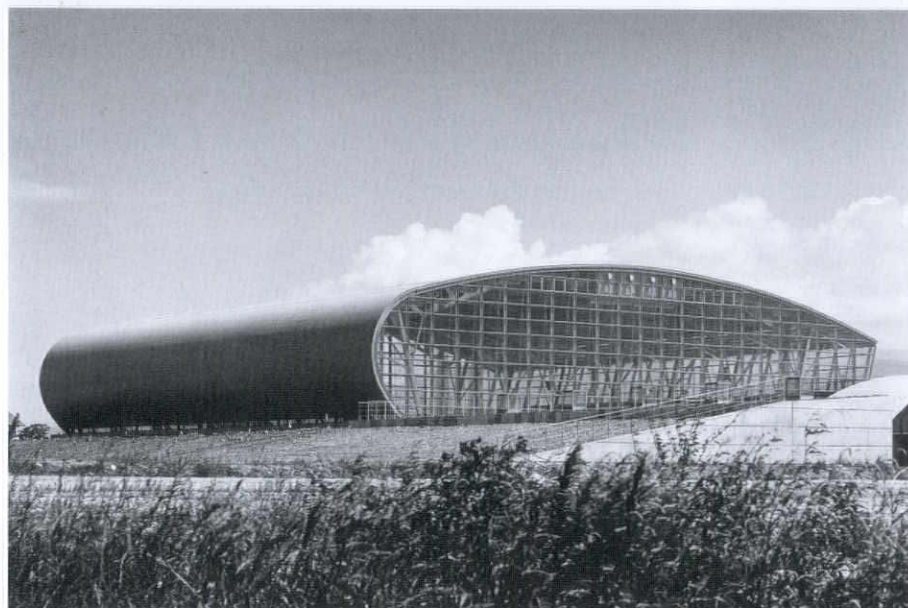
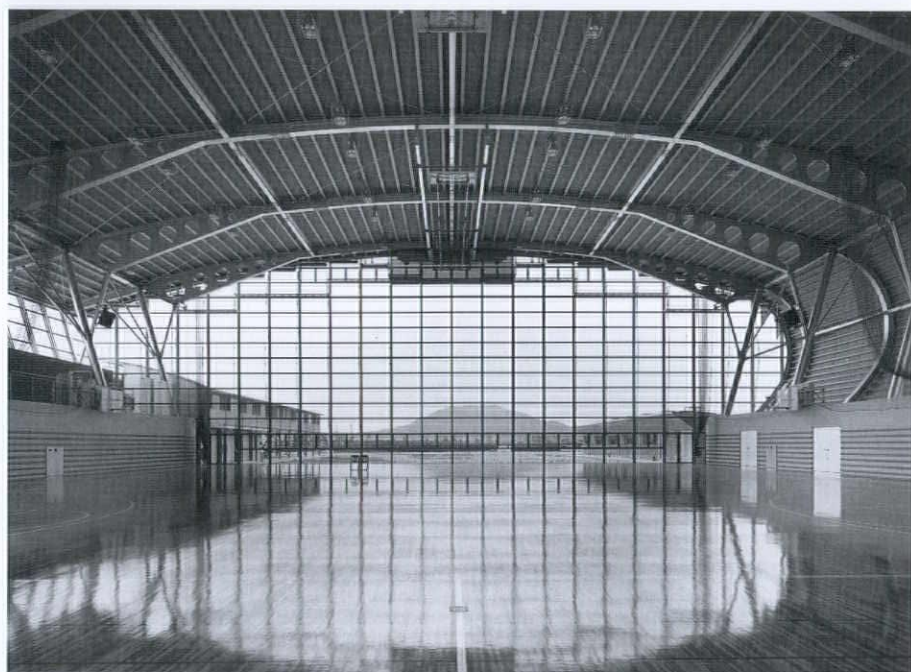
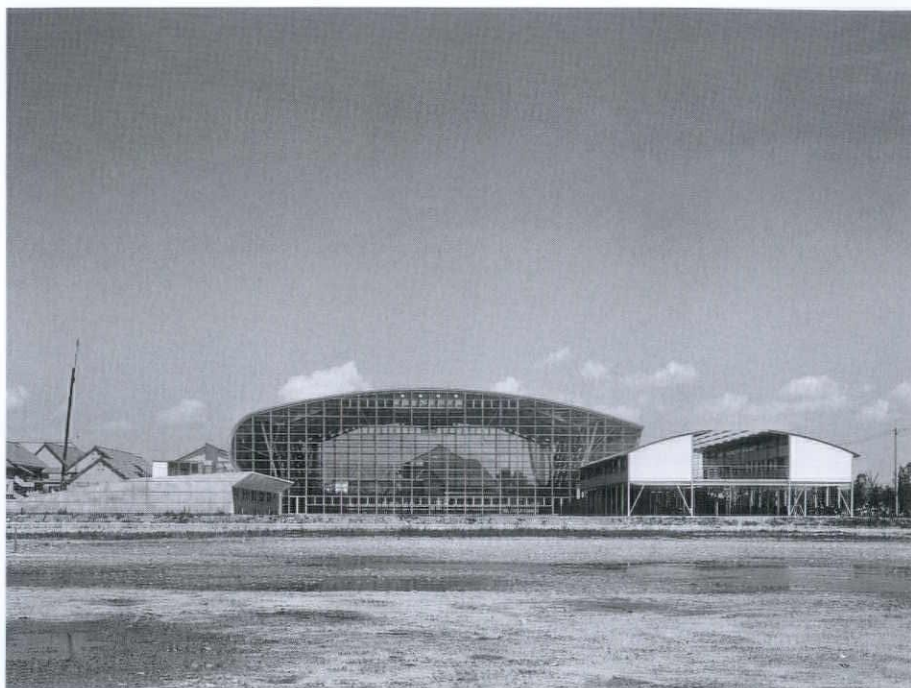


- 1: Entrance lobby
- 2: Arena
- 3: Locker and dressing room
- 4: Equipment room
- 5: Martial arts hall
- 6: Training room
- 7: Club room

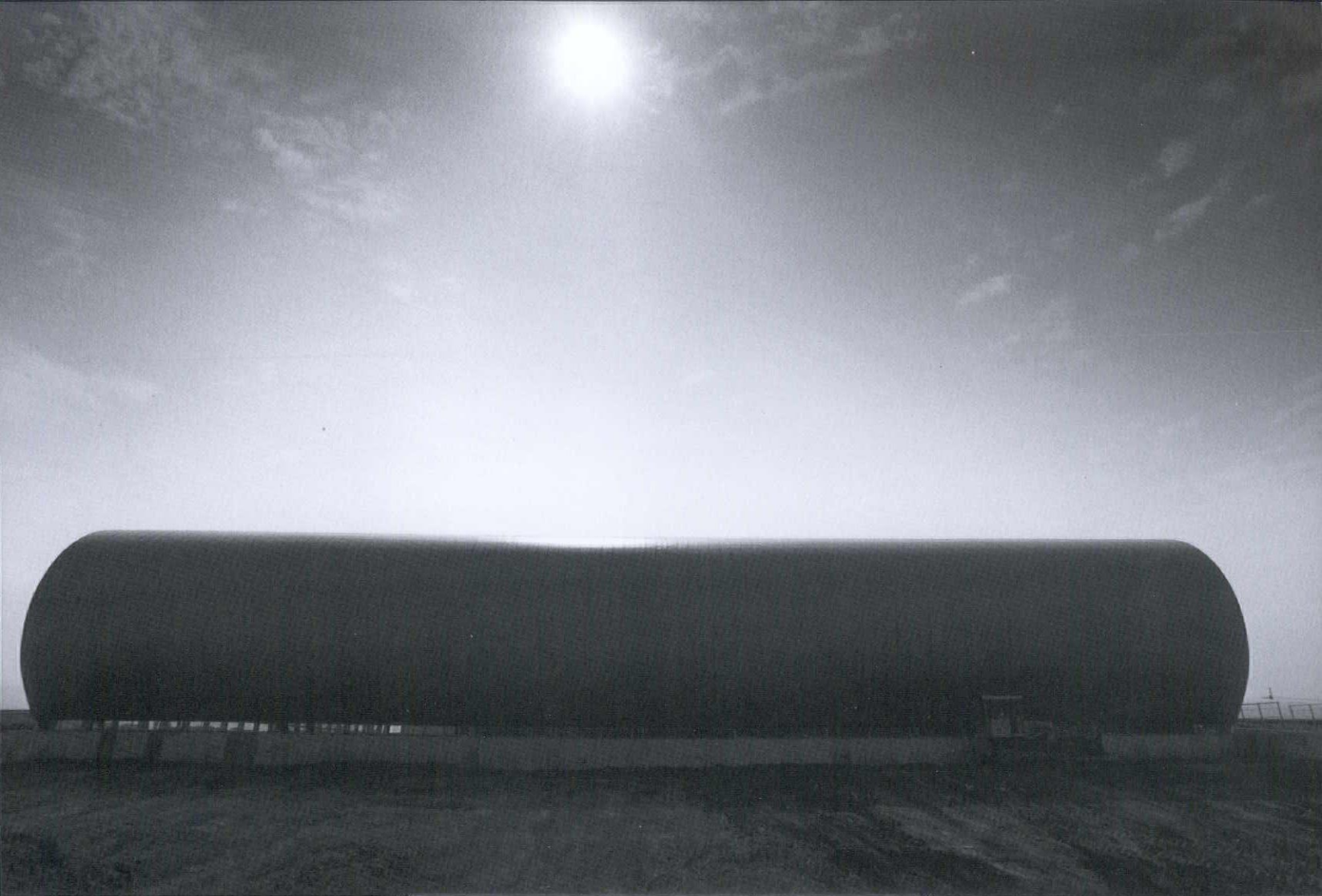














# Kaiho Elementary School, Himi

Himi, Toyama 1993-

## 氷見市海峰小学校

Kaiho Elementary School is located near the seashore of Himi City. The design concept reflects the image of the sea by dealing with the inclusive environmental context of the site. The architecture was perceived as a part of the overall landscape design.

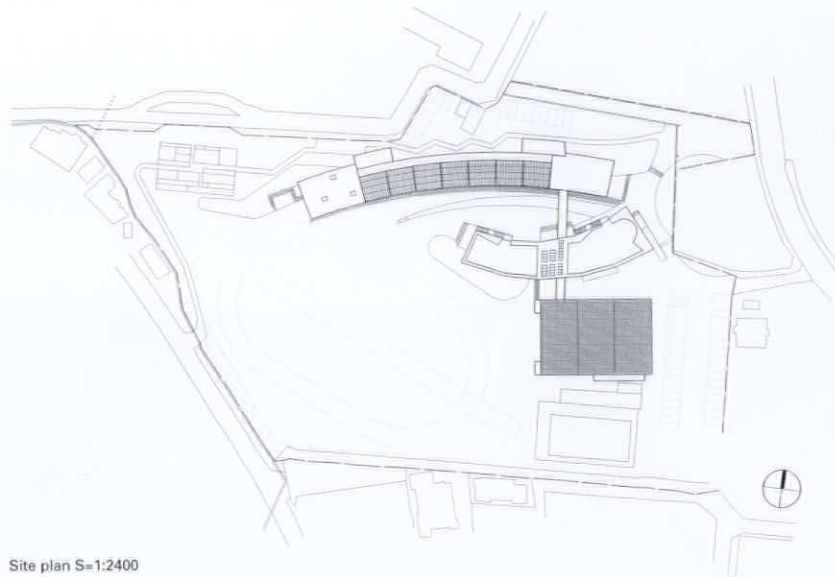
The architecture of "Speed Wave" (named after its shape which echoes sea waves and sandy hills) also expresses the sense of speed of a nearby bypass roadway. The long wavy north wing contains classrooms, while the central wing is used for special education and community activities. The largest, south wing is a gymnasium which is open to both students and their siblings. All the rooms have movable partitions and can be opened to the outside for more flexible uses. A water canal, grassy field, landscaped hills and an amphitheater dot the school yard. The buildings roof gardens are used for science classes, reading, assembly and lunches.

This is a new kind of landscape architecture, "architecture as topography"; it is a "garden school" for the entire community. Children should be able to use the school freely, both in the spirit of the vibrant local culture, as well as in the context of a global information society. I believe that the whole town will take advantage of the school facilities for continuous regeneration of civil society.

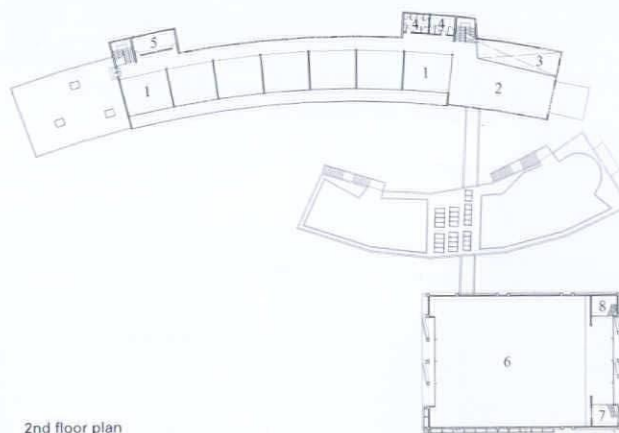
氷見市の中にあって海に最も近い海峰小学校は、海のイメージを持って立ち上げたいと考えていた。海のゆらぎ、きらめき、広がりそして変化まで包み込んだ空間として敷地を捉え、建物もそのランドスケープの一部としてデザインした。波のゆらぎ、砂丘の流動性を形態のテーマとし、「スピードウェーブ」と名付けたこの建築は、新しい交通時代のスピード感を表現し、それは近隣のバイパスの風景にもふさわしい。

長い波型の北棟が教室棟である。真ん中の棟は特別教室棟であるが、地域の人々に開放されるクラブハウスでもあり、まちのコミュニティセンターとしての役割も果たす。一番大きな南棟が体育館で生徒と地元の父兄とで共同して使用することができる。それぞれの施設は可変の間仕切り壁により様々な活動に対応したり、また外部に対して開放的なつくりとすることにより、内部と外部が一体となった使い方ができる。校庭には水路、芝生、築山、円形劇場などを配し、また建物の上には屋上庭園があり、生徒たちはその両方で実験、観察、読書、発表会、食事会などを行うことができる。

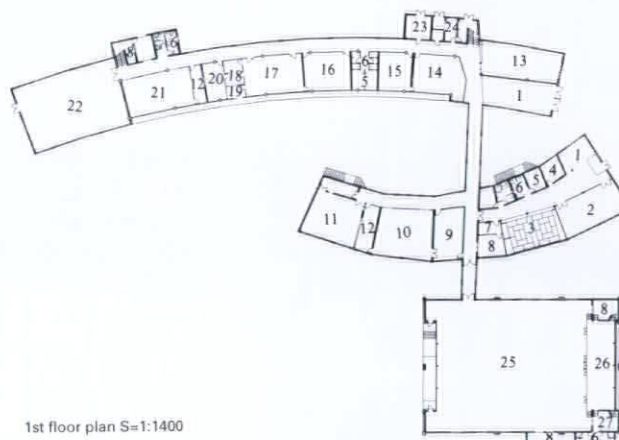
これは新しい自然としてのデザインである「ランドスケープ・アーキテクチャ」あるいは「地形としての建築」、「庭園風学校」ともいえるもので、多様な空間を演出することで学校関係者だけでなく、まちの多くの利用者にも親しまれるものとした。情報化社会にあって世界を見つめつつも、この豊かな地域に根差した活力のある空間を子供達に自由かつ活発に使って欲しい。クラブハウスを訪れるまちの人達も、そうした開放的な場所を得て新しいプログラムをつくり、時代の感性を持って新しい文化を生産していくことを確信する。



Site plan S=1:2400



2nd floor plan



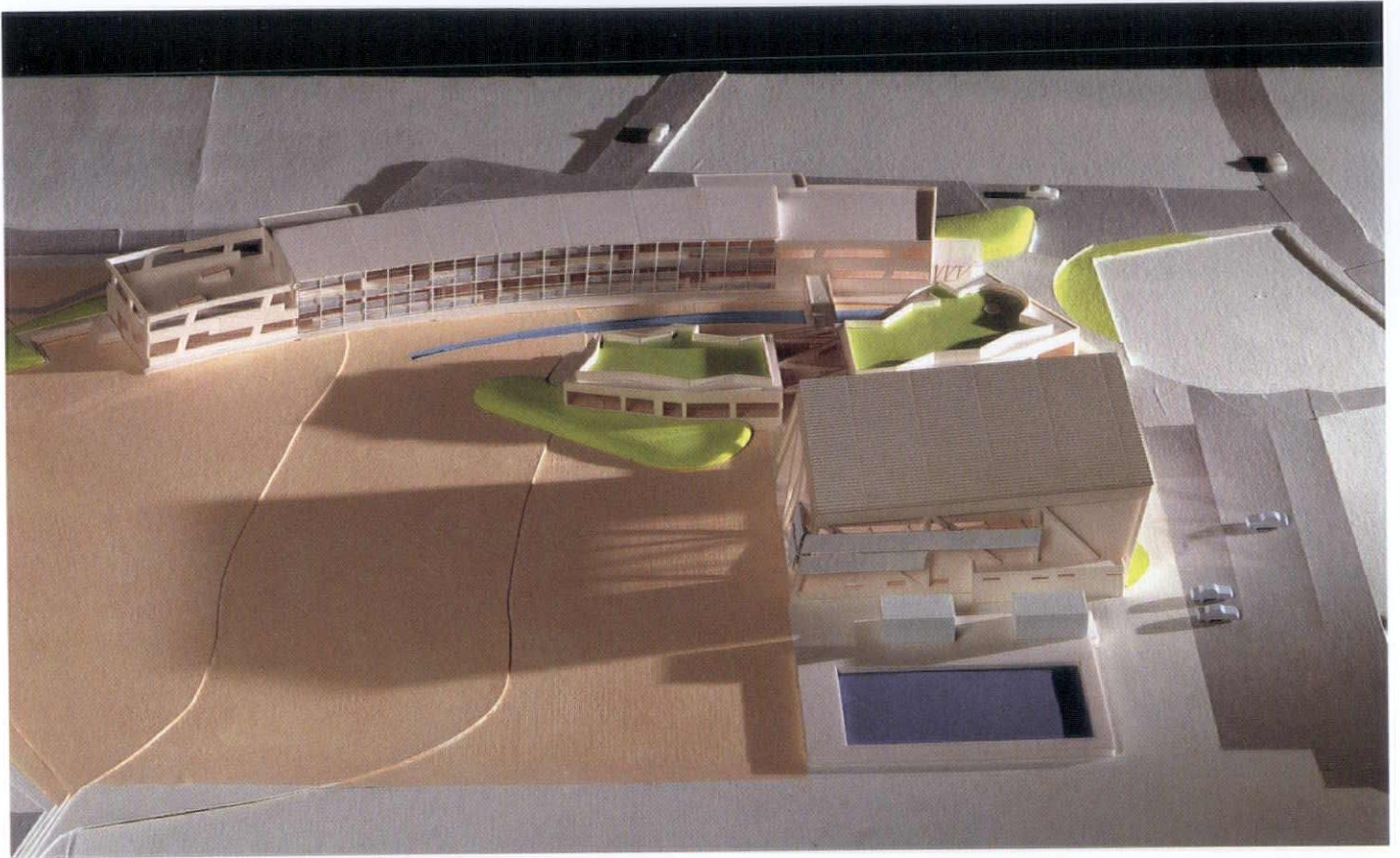
1st floor plan S=1:1400

- 1: Entrance
- 2: Meeting room
- 3: Tatami room
- 4: Office
- 5: Locker room
- 6: Rest room
- 7: Instructor's room
- 8: Storage
- 9: Science room
- 10: Science & home making course room
- 11: Music room
- 12: Preparations
- 13: Library
- 14: Audio visual education room
- 15: Health service room
- 16: Principal's room
- 17: Teacher's room
- 18: Printing room
- 19: Announce room
- 20: Reference room
- 21: Class room
- 22: Multipurpose room
- 23: Void
- 24: Rest room
- 25: Teaching material room
- 26: Gymnasium
- 27: Announce room
- 28: Storage



South elevation S=1:1400







# Busshoji Elementary School, Himi

Himi, Toyama 1994

氷見市仏生寺小学校

- |                           |                       |   |
|---------------------------|-----------------------|---|
| 1: Entrance               | 11: Teachers' room    | 21: Ante chamber                        |
| 2: Class room             | 12: Studio            | 22: Stage                               |
| 3: Multi-Purpose room     | 13: Printing room     | 23: Tatami room                         |
| 4: Library                | 14: Data room         | 24: Science and home making course room |
| 5: Audio-Visual room      | 15: Locker room       | 25: Preparations                        |
| 6: Teaching material room | 16: Machine room      | 26: Craft room                          |
| 7: Dispensary             | 17: Meeting room      | 27: Music room                          |
| 8: Dining hall            | 18: Instructors' room | 28: Studio                              |
| 9: Services room          | 19: Storage           | 29: Store room                          |
| 10: Principal's room      | 20: Gymnasium         |   |

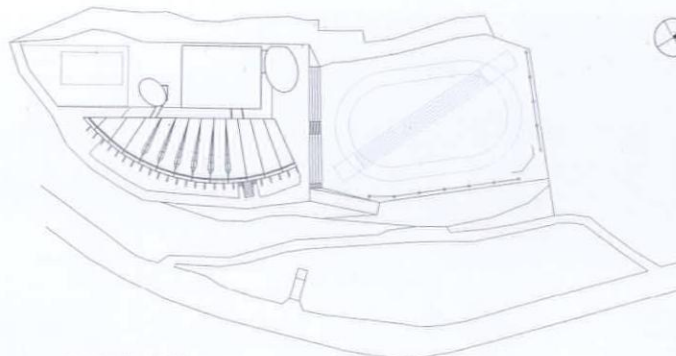
Busshoji Elementary School with 120 students, one class for each grade, faces a declining population of students. Our mandate was to create multi-purpose space that considers future student population changes and use by local citizens; therefore the interior space has a minimum of structural elements and walls. With this understanding, we made the theme of the project, "a simple shelter architecture that gently fills the space."

The south elevation is all glazed. Walls around the multi-purpose hall are made of translucent double layer poly-carbonate panels and provide a sense of open space. The roof contains long skylights which bring in natural light and a changing sense of landscape. It is a kind of soft-edged technological shelter full of responsive children showered with bright light; the mysterious music of a seashell shaped space combined with the fragrance of flowers and trees outside. We believe that educational space should not articulate the regimental functions of teaching but should articulate freedom in which teachers and students can create together.

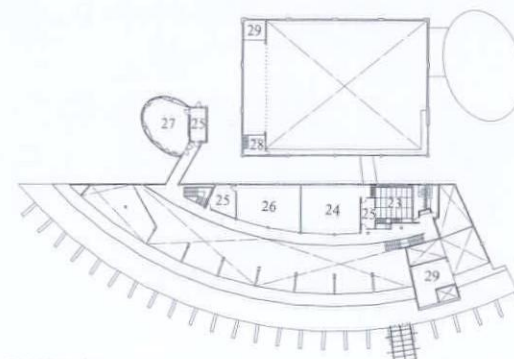
Four blocks, classrooms, music room, gymnasium and activity rooms, are laid out to have separate identities but connected for overall comprehension. The building blends into surrounding nature, but at the same time it has a contemporary nature that stands out like a UFO landed on the hill. I would like to think that the beauty of nature and spirit of technology, reality and unreality, coexist to form a new landscape.

氷見市の山岳の多雪地帯に建つこの小学校は、1学年1クラスと小規模で、120人の生徒数は今後も減少傾向にあり、将来的にクラス編成を変えたり、地元の人達の公民館のように使用できることが設計当初から要望された。建物内を構造壁でなるべく仕切らないシステムを採用し、将来地域の人達が多目的に利用できるように提案した。校舎棟の基本テーマは「なめらかさをはらむシンプルなシェルターとしての建築」である。南面をすべて開口部とし、また多目的ロビーとの間仕切りは複層ポリカーボネードの半透明な壁としたので、全体に透明感のあるインテリアとなった。長型のトップライトからも十分な光が入り、周辺の自然環境の変化に敏感に感應する空間である。感性豊かな子供達が光に包み込まれ、海辺の貝殻のような空間からは不思議な音楽が聞こえ、周辺の木々と花々の香がいつもたちこめる、ソフト・テクノロジーのシェルターを目指した。初等教育の場に相応しい建築とは、既成の機能上の分節をことさらに強調する空間ではなく、むしろ生徒と先生が創造的に自らの空間を自由に分節できる流動性に富んだ場であることが大切だと考えた。

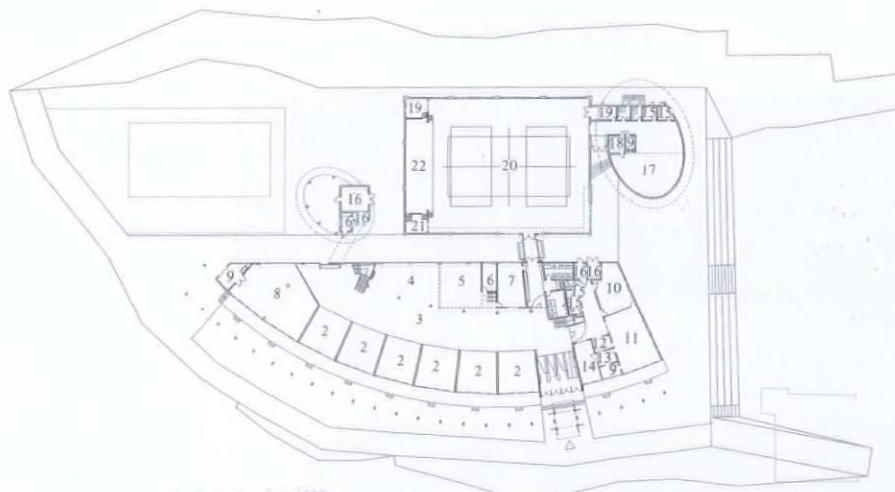
校舎・音楽室・体育館・クラブハウスの4つのブロックは、それぞれ活発な活動の場となるような固有性を持ちながらも全体が連続するように配置された。周辺の自然に溶け込むと同時に今日性を合わせ持つこの建築は、まるで丘陵に降り立った未確認飛行物体のようでもある。自然の美しさとテクノロジーの塊の異質さ、リアルとアンリアルが共存する新しい自然風景が実現した。



Site plan S=1:3000



2nd floor plan



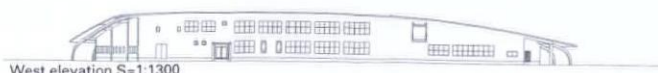
1st floor plan S=1:1300



East elevation



West elevation

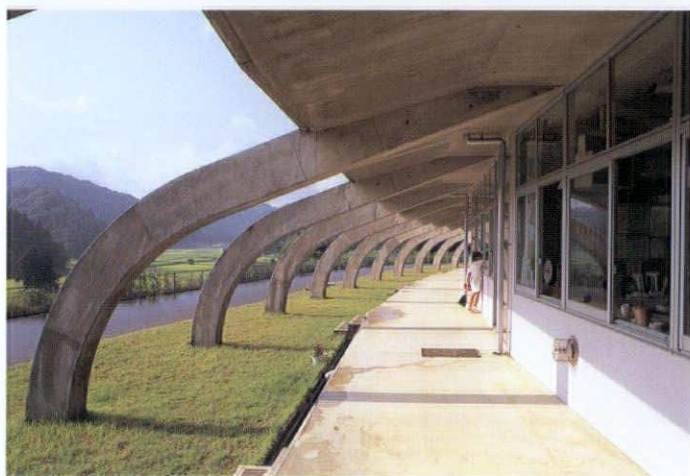


West elevation S=1:1300

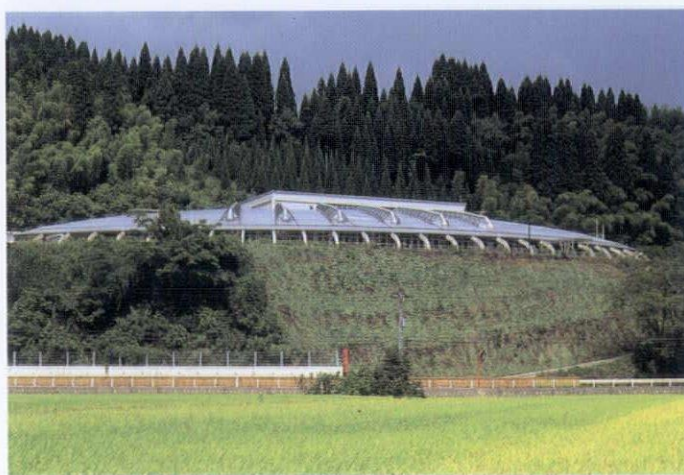


















Itsuko Hasegawa

We have built four projects in Toyama Prefecture and one is under construction. Except for the Ohshima-machi Picture Book Museum, all of them are located in the city of Himi. In earlier periods in our practice, we had similar concentrations of residential projects in Yaizu and Matsuyama.

Himi is a city of 60,000 in the northwest corner of the prefecture, close to the Ishikawa border; located along the shore of Toyama Bay, it is full of scenic beauty with views of the Noto Peninsula and Tateyama Range in the distance. Several canals crossed by many bridges run through the center of the city. Our first job was, in fact, to design a utility bridge in the form of a mechanical clock using a doll from the comic book Ninja Hattori-Kun as inspiration, because the creator Fujio Fujiko was born in Himi. The normally quiet neighborhood becomes quite animated with many spectators when the clock strikes the hour. I felt the generous warmth of Himi's citizens from the beginning.

This city of many beautiful landmarks has 13 elementary schools. For quite some time the city has focused on improving their schools ahead of other public facilities. I assume that this is partially due to their interest in education, and partially due to their hope to develop strong communities around the schools where children have their first encounters with the social life. They are also progressive in promoting community use of school facilities. The completed Busshoji Elementary School was built into a hill and is surrounded by gentle mountain slopes. In contrast, Kaiho Elementary School (under construction near the seashore) is in a different architectural expression.

The emphasis on education and regionalism is strongly expressed in the "Botanical Garden Program" which is based on the "Toyama Prefectural Urban Design Fair" doctrine. This program designates several locations of auxiliary botanical gardens to complement the existing central botanical garden. There is a well-known giant water lily habitat on Shimao Beach in the city, and it is only natural that the city decided to build Himi Seashore Botanical Garden nearby for climatic reasons. It is intended to be a research center for the protection and restoration of the rapidly disappearing coastal environment. Construction of the garden is finished and currently the facility is being readied for the public opening.

Our office is preparing an entry for the "Himi City Friendship Park Sports Center" design competition. In the past, a team from Himi won a national title in team handball. Therefore the handball tournaments of the Japan National Athletic Games in the year 2,000 will be held at the new sports center in scenic Asahiyama Park (We will know the result of the competition by the time this magazine is published).

All the projects we worked on in Himi have been very well conceived from both regional and historical points of view. We are extremely thankful that we have been given these great opportunities to learn how to build public facilities in cooperation with the local governments. When I was designing houses in Matsuyama, I wrote that after working continuously in a place, one developed on understanding of a cross section of local life. Here in Himi, we have been lucky to get involved in its cultural activities with large regional themes.

長谷川逸子

富山県には、私達の事務所の作品がすでに4件完成し、現在1件が建設中である。これらの作品は、大島町の絵本館を除いてすべて氷見市に散りばめられており、これは事務所における初期の焼津の住宅群やその後の松山の作品群に匹敵する数である。

氷見市は県の北西端に位置し、石川県に隣接する人口約6万人の市である。景勝地に富み、海岸や高台からは富山湾の向こうに能登半島や立山連峰が一望できる。市の中心部をほどよいスケールの川が複数横切り、同市ではこれまで多くの橋を作ってきた歴史がある。事務所での最初の仕事も湊川にかかる配管のための橋を「からくり時計」に仕立てるというものであり、同市出身の漫画家藤子不二雄A氏にちなんで忍者ハットリくんがキャラクターとして採用された。普段は人影のまばらな川辺りに時報ごとに見物の人々が集まってくる様子は、微笑ましいと同時に、私達の事務所を迎えてくれたこの町の人々の大らかさを感じる。

市内に多くの景勝地があるように、氷見市には13もの小学校が散りばめられている。氷見市は長らく他の公共建築に優先して、小学校を充実させてきた。これは教育に熱心な県民性と共に、初めて学ぶ場となる母校を中心に豊かな地域生活を発展させようとする意志の表れではないかと思われ、併設されるクラブハウスを始め、地域への施設開放に積極的である。すでに完成している〈氷見市仏生寺小学校〉は、なだらかな山々に囲まれ自らもそのひとつの中腹にはめ込まれるように建っている。現在建設中の〈氷見市海峰小学校〉は海の近くで仏生寺小学校とは極めて対照的な敷地に、やはり建築も全く異なったものとして建ち始めている。

教育と地域の重視の姿勢は、「富山県都市緑化フェア」に基づく「植物園公園構想」にも表れており、中央植物園を補完するものとして、いくつかの専門植物園が県内に分散されて計画された。氷見市にはもとよりオニバスの生息地もあり、その風土的特徴から島尾海岸に〈氷見市海浜植物園〉を計画することになったのは、ごく自然な経緯であると思われる。失われつつある日本の海岸線の緑化に貢献する研究施設にもしたいという意気込みもある。この植物園は、すでに建築が完成してオープン準備が進められている。

現在、事務所では「氷見市ふれあいスポーツセンター」のコンペ案に取り組んでいる。かつてのハンドボール全国優勝の実績から2000年に開かれる国体でのハンドボール競技場の役割を担うこの施設は、絶好の景勝地朝日山公園の中腹に予定されている（この雑誌が発行される頃には当落が決まっている）。

氷見市における計画は、どれもがその地域性や歴史的背景から極めて心地良くその内容が決められており、私達の事務所が「地方自治体と協働して公共建築を作り上げること」を快適に学んできていることを感謝したい。「ひとつのまちへの建築の継続的な埋め込み作業は、そのまちの生活が横断的に見えてくる思いがする」と、松山でいくつかの住宅をつくっている時に書いたことがある。町の文化づくりに参加し、地域に密着しながらも、大きなテーマで取り組める仕事をさせていただいている。



# Himi Seaside Botanical Garden

Himi, Toyama 1995

## 氷見市海浜植物園

Because of its geography, the Japanese archipelago is full of plant life strongly influenced by sea water and sea winds. The shorelines are rich in geological varieties such as dunes with shifting sand, cliffs standing against pounding waves, and tidal flats at river mouths with salt water marshes. How does plant life adapt to such severe environments? Seashores maintain particular plants which survive in adverse conditions; they can teach us the mysteries and power of life forms and ultimately encourage our ecological understanding.

The circular architectural form of the botanical garden was chosen to represent the cyclic characteristics of man and nature. Exhibition halls, greenhouse and glass tube corridors are linked around an oval courtyard exhibition area. Visitors are naturally led through the exhibits along the curving circulation route. The aim of the exhibition hall is to teach visitors the history and function of species with the help of displays, and to deepen their interest and understanding.

The greenhouse maintains a sub-tropical climate throughout the year and is equipped with machines that imitate squalls and mists. Wooden bridges meander through water tanks with mangroves, sandy hills, and rocky reefs showing varieties of topographical conditions and plant species. The oval courtyard recreates the shoreline ecosystem of Himi which can be viewed from the glass tube corridor flower greenhouse in bad weather.

四方を海に囲まれている日本には、海水や海風の影響を受けて独特の植生を持つ植物が多い。海岸は砂の移動が激しい砂丘、潮風にさらされる崖地、入江の奥の干満を受ける塩湿地などと変化に富んでいる。そうした環境の中で植物はどのような生活をしているのだろうか。自然の海岸は、その特殊な環境ゆえに内陸に見られる植物の進出を拒み、海岸の植物は「群落」を保つことができる。悪条件に絶えて生き延びてきた海浜植物の適応能力は、まさに生命の強さ、不思議さにはかならず、植物のみならず環境全般に対する認識や考察に新たな視点を与えてくれる。

この環状の建築形式は人が生きることと植生との「循環」を物語るために選ばれた。連続してひとつの輪となった展示室、温室、ガラスチューブが中庭の展示園を取り巻く構成となっており、訪問者はいくつかの曲面の空間に自然に導かれるように回避し、様々な方法で海浜植物に接することができる。展示ホールは、実際に生の植物に触れる前の準備として、海浜植物に関連したパネルや装置を通して、その生態の歴史や機能を学習し、理解と関心を高めてもらうのが狙いである。温室は1年を通じて高温で雨の多い亜熱帯気候に設定されていて、スコールやミストを発生させる装置により適宜気象環境がつくられている。室内にはマングロープの水槽や起伏をもった砂丘、岩場など、海から陸へと変化する地形や植生がつくられ、様々な角度から植物が観察できるよう、木製の歩道を巡らせてある。屋外展示園である楕円形の中庭には氷見市の海岸植物群落の特長を再構成した植栽計画が施され、天候の悪い日には花の温室であるガラスチューブからも観察することができる。

- 1: Entrance hall
- 2: Exhibition hall
- 3: Green house
- 4: Glass tube
- 5: Exhibition hall
- 6: Court yard
- 7: Workshop
- 8: Terrace
- 9: Kitchen
- 10: Sky lounge
- 11: Floating garden

Site plan S=1:2800

4th floor plan

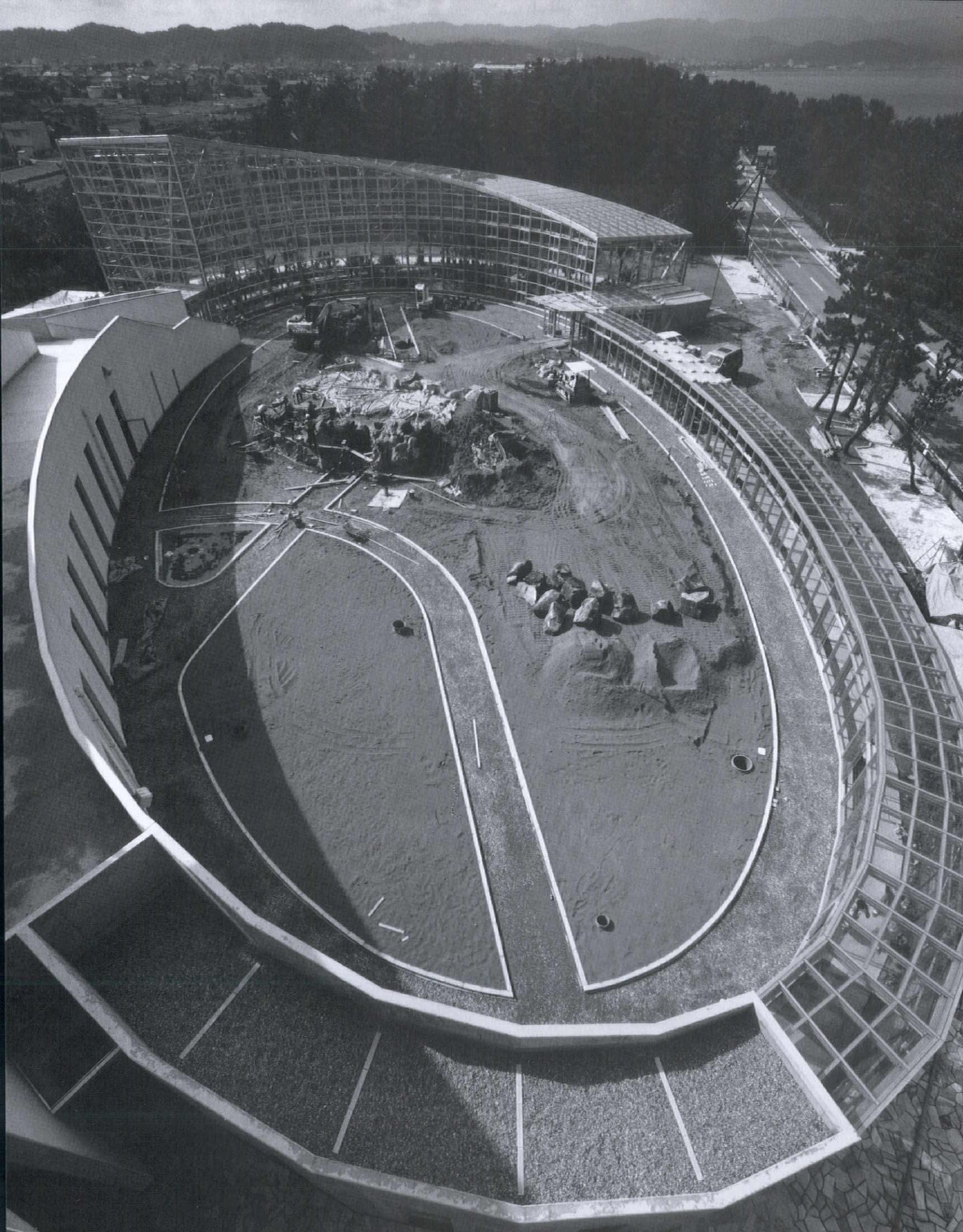
3rd floor plan

2nd floor plan

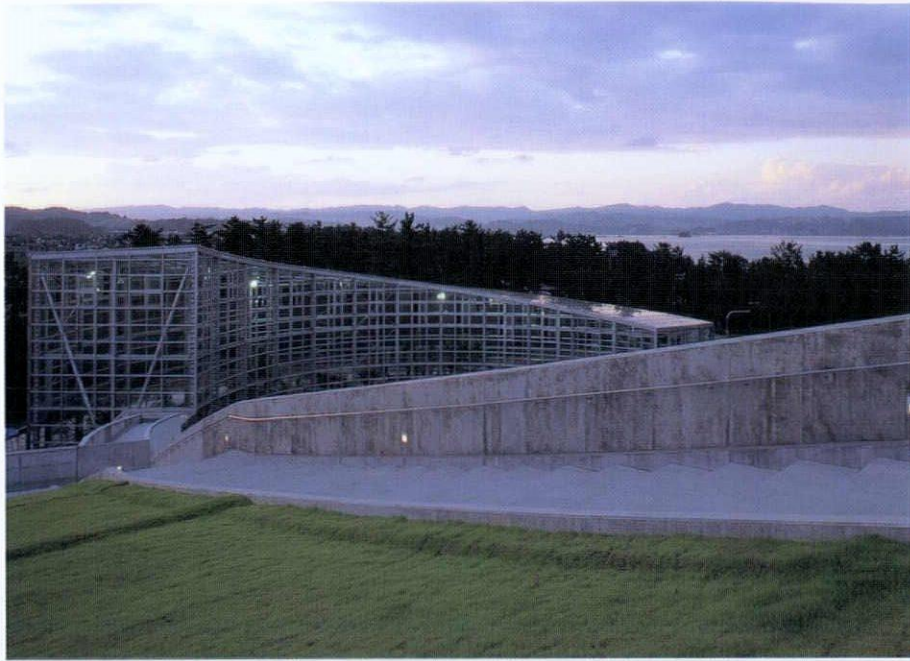
1st floor plan S=1:1500

North elevation S=1:1500

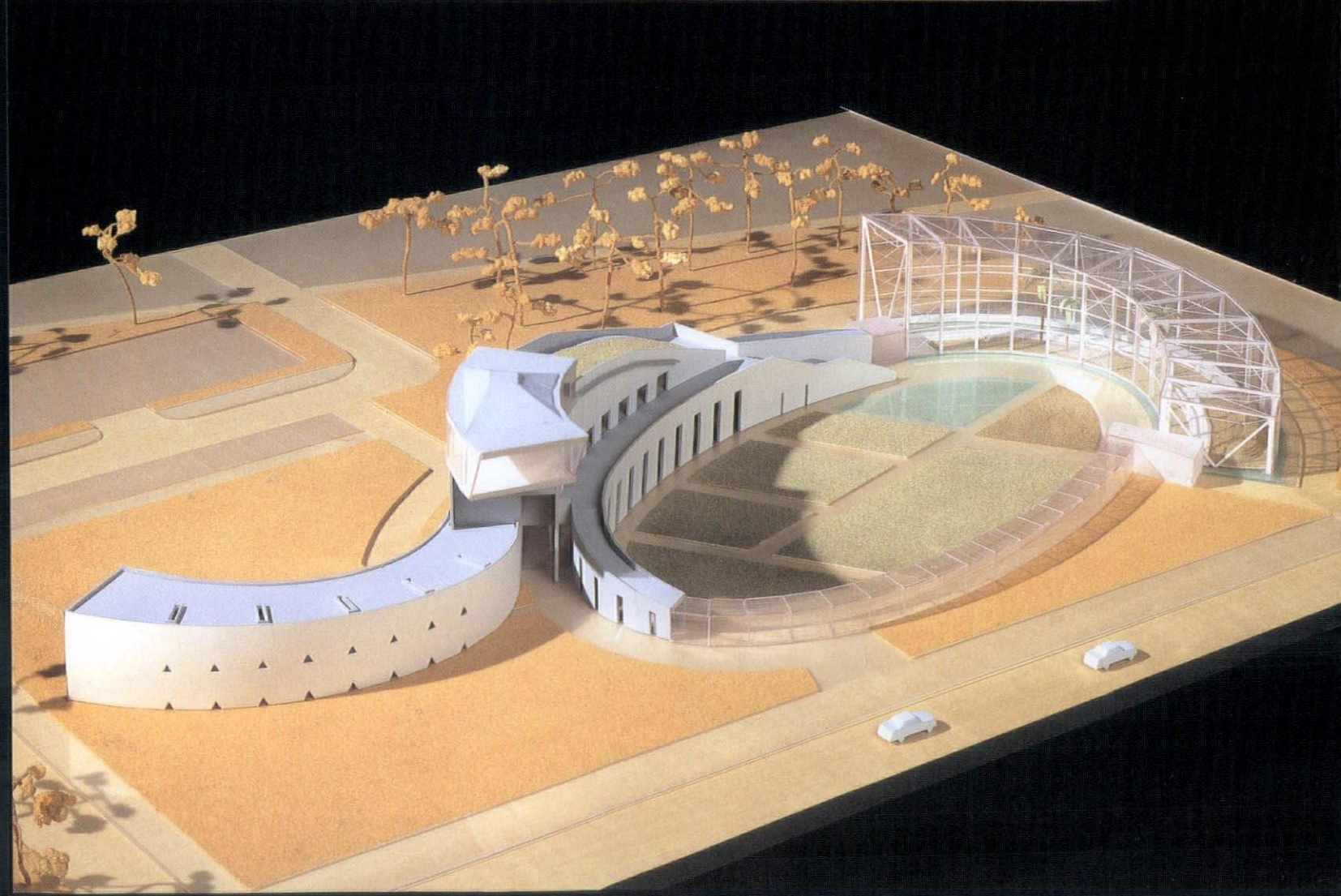














# STM House

Shibuya, Tokyo 1991

## STMハウス

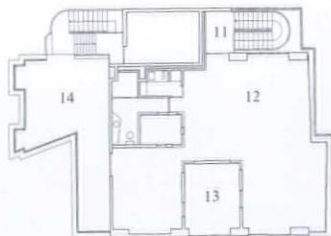
In ancient times the rainbow, also called "rainbow serpent" was considered to be a sublimation of the spiritual force released from the bondage of the earth because of its visual connotation. The city is an all-absorbing system which takes in various information, just as the earth stores its history in strata, and sublimates it into a life of its own.

In medieval Japan, there was a custom of setting up markets where a rainbow appeared, for it was thought to be a good omen. All social preoccupations and value judgments dissolve in the market to make it a blank state, a free city; in other words, a primal urban space.

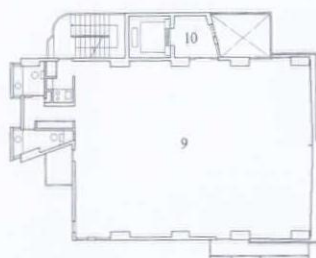
Three rainbows emerge from the street of Tokyo, ascending through the strata of the building at various angles and fly into the sky of Tokyo, the gigantic accelerator, synchrotron of urban space. Harsh natural light is filtered through two layers of outside skin before it enters the building. The first layer of perforated metal gently wraps the curtain wall support system and granulates the beam of light. The second layer of movable milk-white screens turns the interior into a space of white-wash. The opening of the screens provide cut-out views of Tokyo's high-rise buildings. The facade of the building changes colors depending on one's view point, and reflects changes in the weather. The rainbow serpent which has been freed to dance in the sky during the day loses its color and disappears into the urban background at 4:25 PM, to return at night as a pure white entity when the lights are turned on inside the building.

古代より虹は、その地層状の形態のアナロジーより、レインボー・サーバント（虹の蛇）と呼ばれ、地の勢いが大地の呪縛から解放され、昇華されていくものと見られてきた。それは、都市が差異を受け入れる穏やかなシステムであり、その層状の粘土の中に多様な情報をインプットし、それを生命へと昇華させていくことに酷似している。日本の中世においては、虹の立つところに市が立つという風習があったと聞いている。あらゆる既成の概念や価値判断は、市の場合持ち込まれることによって、しがらみから解かれ、真っ白な状態に戻り、初源的都市空間としての自由都市が存在した。

東京という巨大加速機シンクロトロン空間に、虹が大地から上昇するような軽快な建築をイメージし、そこには3本の虹が道路面に架かり、斜行しながら地層状に立ち上がり天空へと上る。外部の光はファサードの二重の膜を通して変化し、弱められて室内に差し込む。1枚目のパンチングメタルの膜は、カーテンウォールの支持材を優しく覆い、光を粒状化する。2枚目の乳白色の可動建具の膜は、内部を光る白い空間に変貌させる装置であり、この可動建具を部分的に開けることによって、東京の林立するビル群はシーンのように切り取られる。ファサードは歩くにつれて様々な色彩に変化するだけでなく、外の天候を受けて刻々と変化する気象装置である。昼間、解き放たれ乱舞したレインボー・サーバントは夕刻と共に色を失って背景に溶け込み、夜、内部に照明が入ると、まさに真っ白なシーンを展開する。



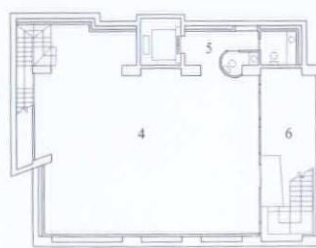
7th floor plan



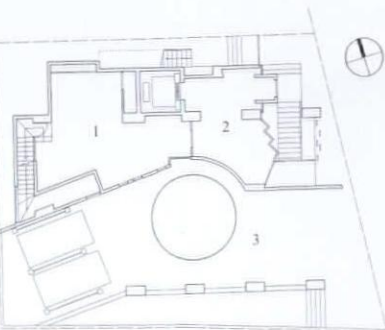
3rd floor plan



2nd floor plan



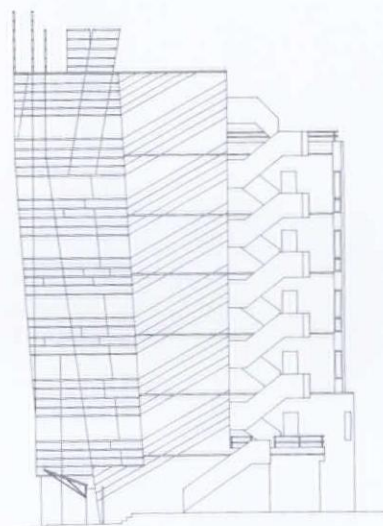
1st floor plan



Basement 1st floor plan S=1:400

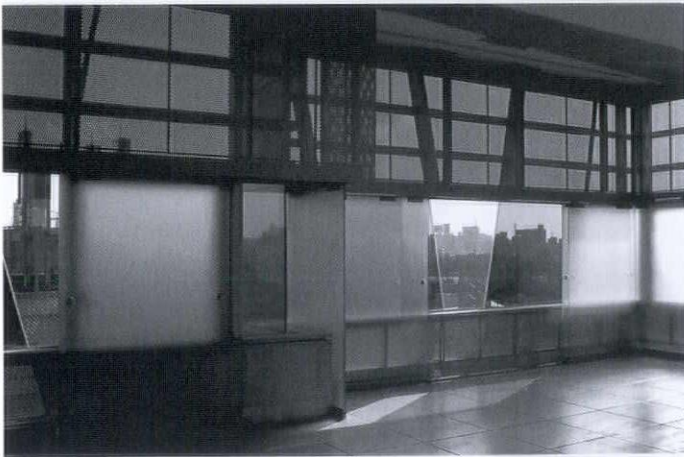


- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 1 : Office        | 8 : EV hall       |
| 2 : Entrance hall | 9 : Office        |
| 3 : Parking       | 10 : EV hall      |
| 4 : Office        | 11 : Entrance     |
| 5 : EV hall       | 12 : Atelier      |
| 6 : Sunken garden | 13 : Roof terrace |
| 7 : Office        | 14 : Terrace      |

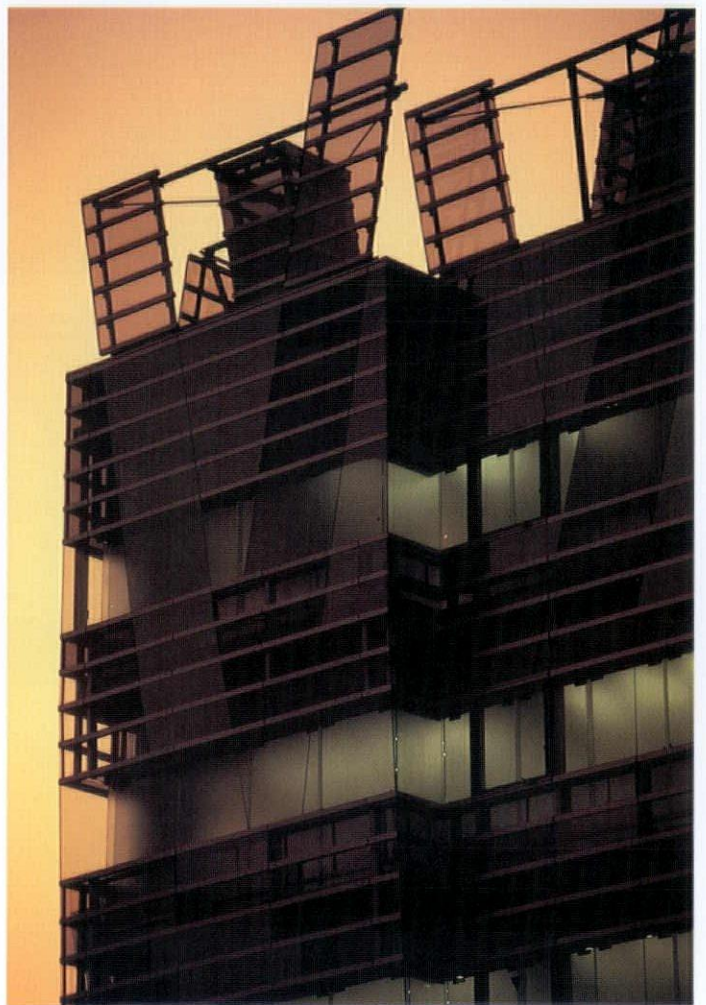


North elevation S=1:400

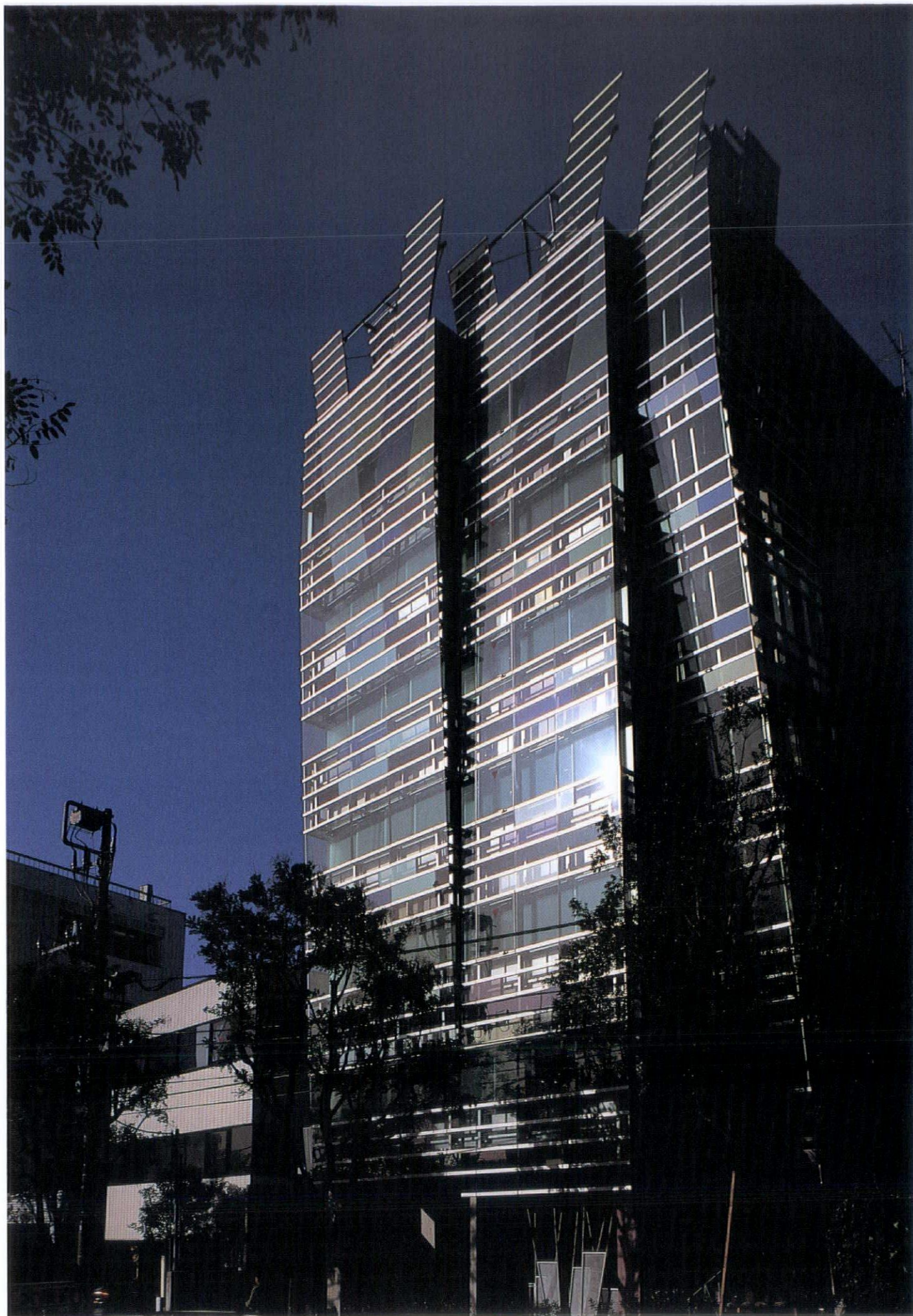














# Footwork Computer Center

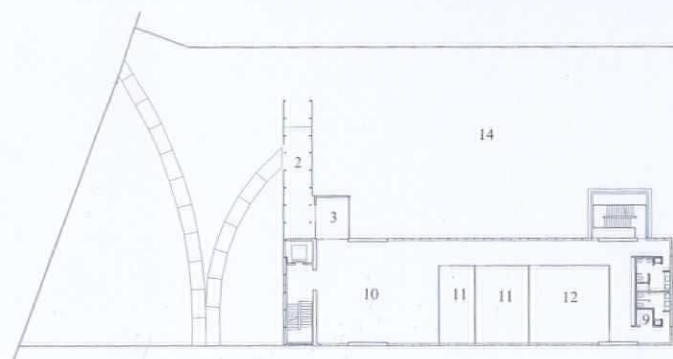
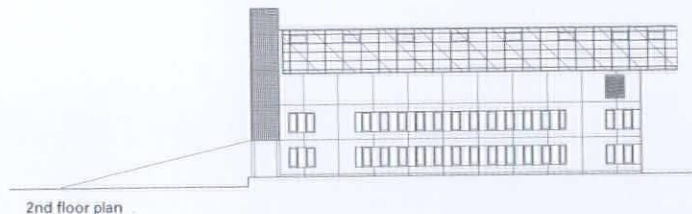
Katou, Hyogo 1992

## フットワーク コンピューターセンター

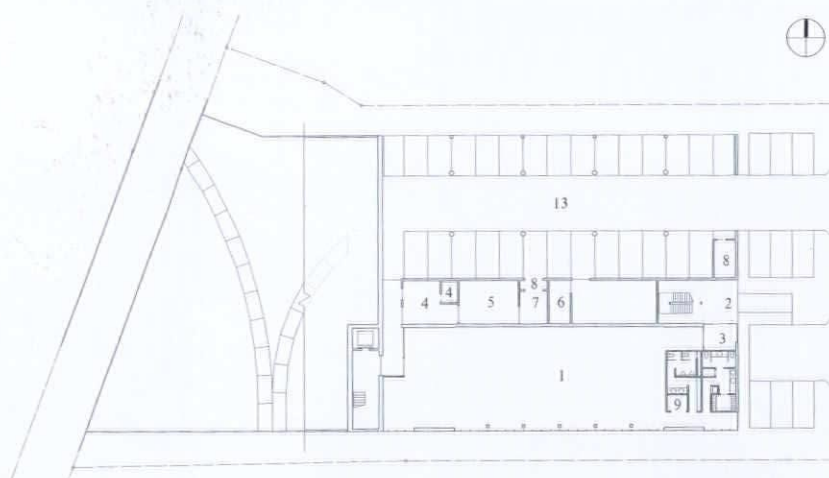
Because this is a facility mainly for computer use, the building took the form of a simple small-scale office prototype. In general, computer centers are not pleasant places for people to work, but here we tried to design open and creative office space. We wanted to stress the importance of workers' physical awareness of the outside world even though they deal with computers indoors all day long. For this reason, we placed office space on the top floor surrounded by glass walls and steel braces. Diagonal stripes on the glass surfaces present the corporate identity of the company. When exposed to light, these lines create an impression of being outside.

The site for this building, in Mori-machi, Hyogo, is the place where the client started his business. The initial building program called for a computer center and a memorial hall. Using the elevation difference between the east and the west roads, the basic design concept proposed a sloped approach from the west road. We proposed display cases consisting of two transparent sheets of glass placed in the greenery of the roof garden above the parking and a mechanical room, and lit the edges of the glass through slots cut in the parking garage roof. The main entrance lobby for the future memorial hall on the east is a tall thin glass box with giant transparent walls and constantly changing ambience. The box also carries signage and a see-through elevator shaft and stairs, these help create a facade of transparency and fluidity.

コンピューターを中心とする施設であることが、この建物の全体のプランを小規模なオフィスビルの特徴ともいえるシンプルな構成に導いた。一般にコンピュータセンターというと、働く空間としての快適さがおさなりにされがちであるが、ここでは開放的でクリエイティブなオフィス空間を積極的に提案したいと考えた。特に外部への関心を広げ身体への意識を重視することは、コンピューターと向かい合うことの中で必要なことではないだろうか。そういう考えのもとに活動的で快適なオフィス空間をつくるために、斜材構造とガラス張りのオフィスを最上階の空中に掲げた。ガラス面のストライプ状の処理は会社のCIを表現するものだが、この斜線と光の戯れは、半外部的な印象をつくりだしている。この敷地はクライアントであるグループの発祥の地である兵庫県杜町の一角にあり、当初はコンピュータセンターとグループの歴史と現状を紹介する機能を併せ持つものとして設計依頼された。東西の道路の高低差を活用することにより実現した東道路からのアプローチの斜面と、駐車場と機械室を覆う空中庭園を利用することを考えた。そして緑の中に透明な2枚のガラスを重ねてつくったダブルウォールを並べたショーケースとして展示を持ち込み、駐車場上部の天井に開口したスリットからガラスのエッジを照明することを提案した。特に東側メモリアルホールのアプローチとしての正面は、大きなダブルウォールの2枚のガラスより切り取られた薄い奥行き空間で、時間と共に変わり続ける透明感を表現している。透明性と流動性を持って正面性をつくり出す試みを行った。



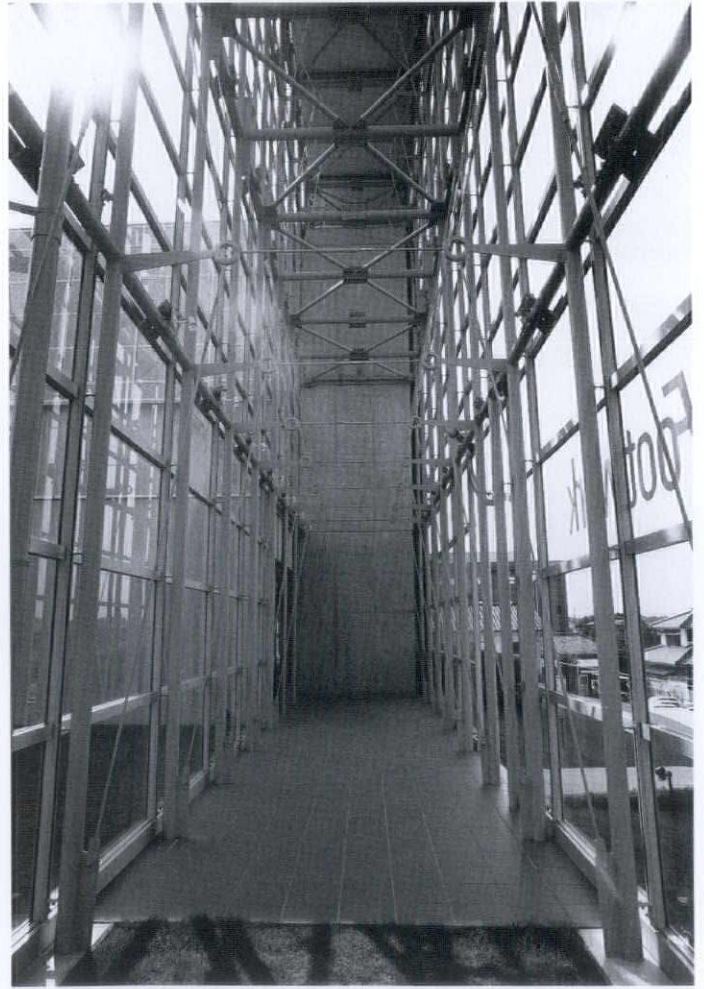
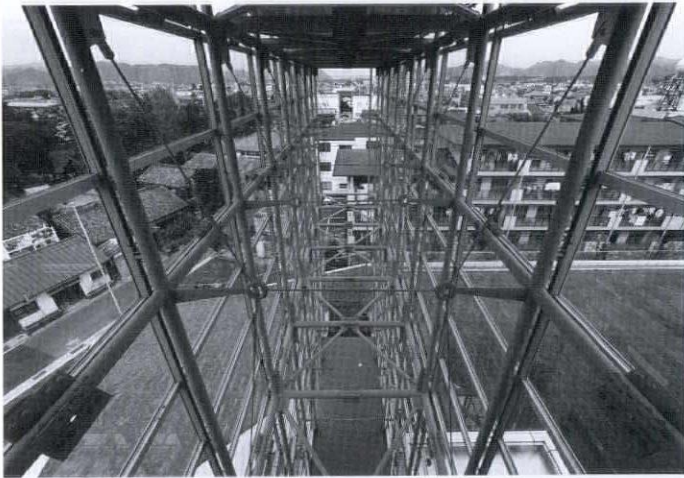
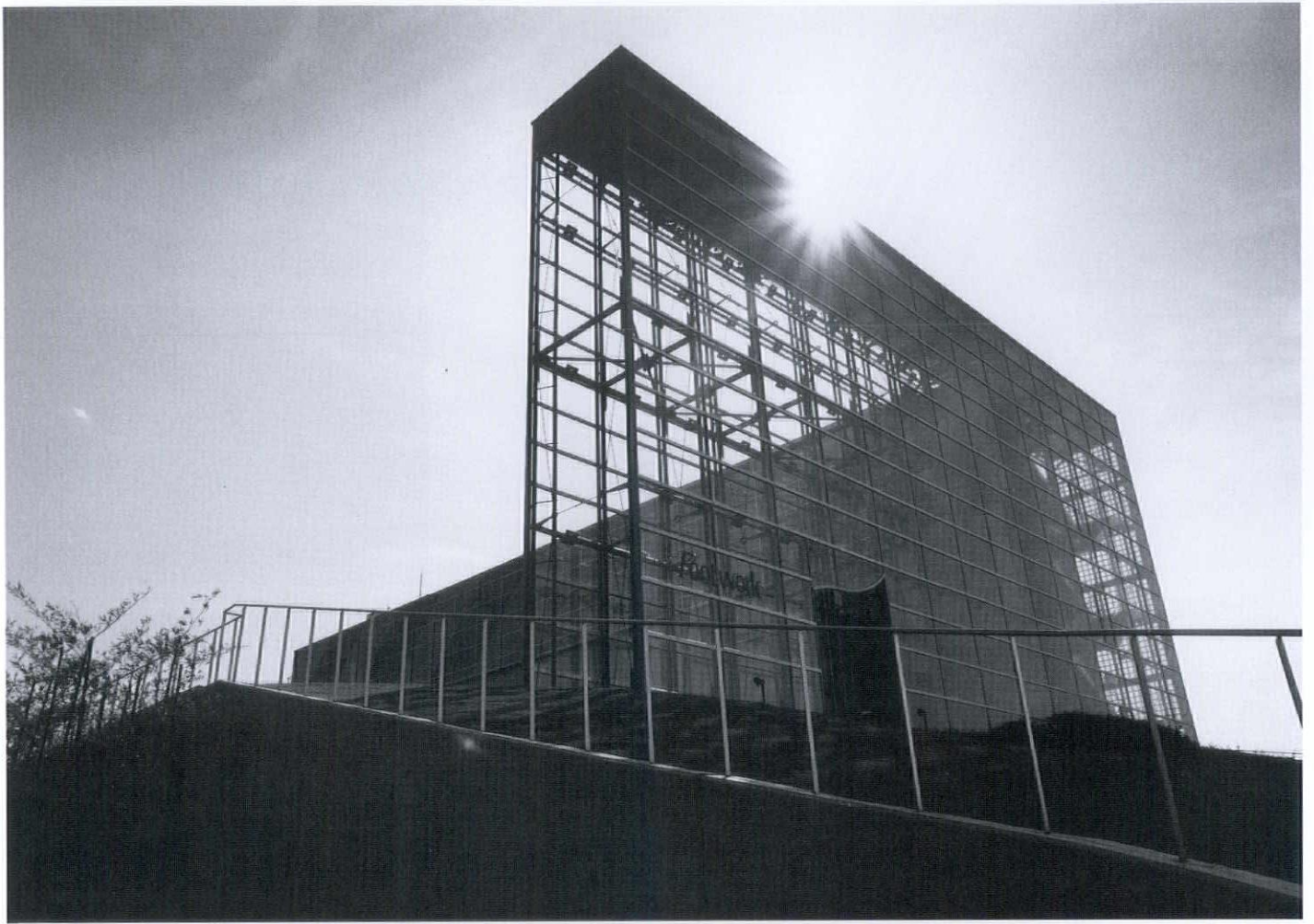
1st floor plan S=1:800



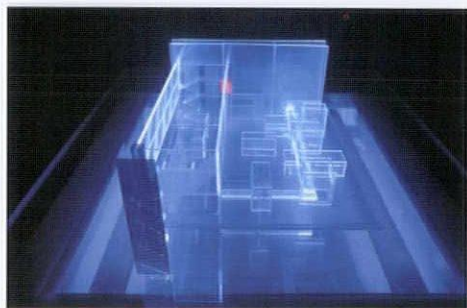
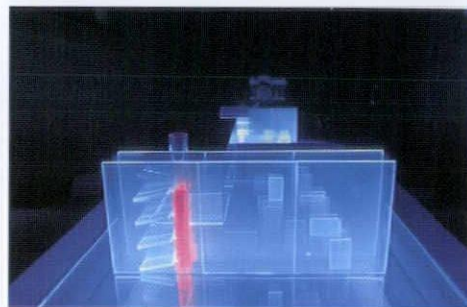
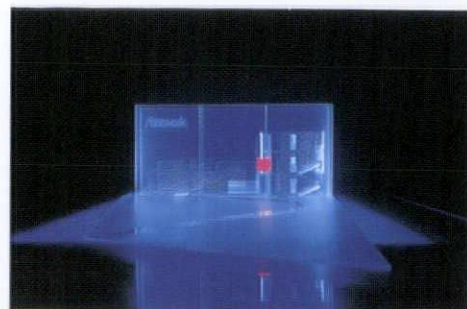
South elevation S=1:800

- 1: Office room
- 2: Entrance
- 3: Windbreak room
- 4: Machine room
- 5: Pump room
- 6: Electric room
- 7: Fire-fighting system room
- 8: Storage
- 9: Hot water service room
- 10: Lobby
- 11: Reception room
- 12: Conference room
- 13: Parking
- 14: Memorial garden

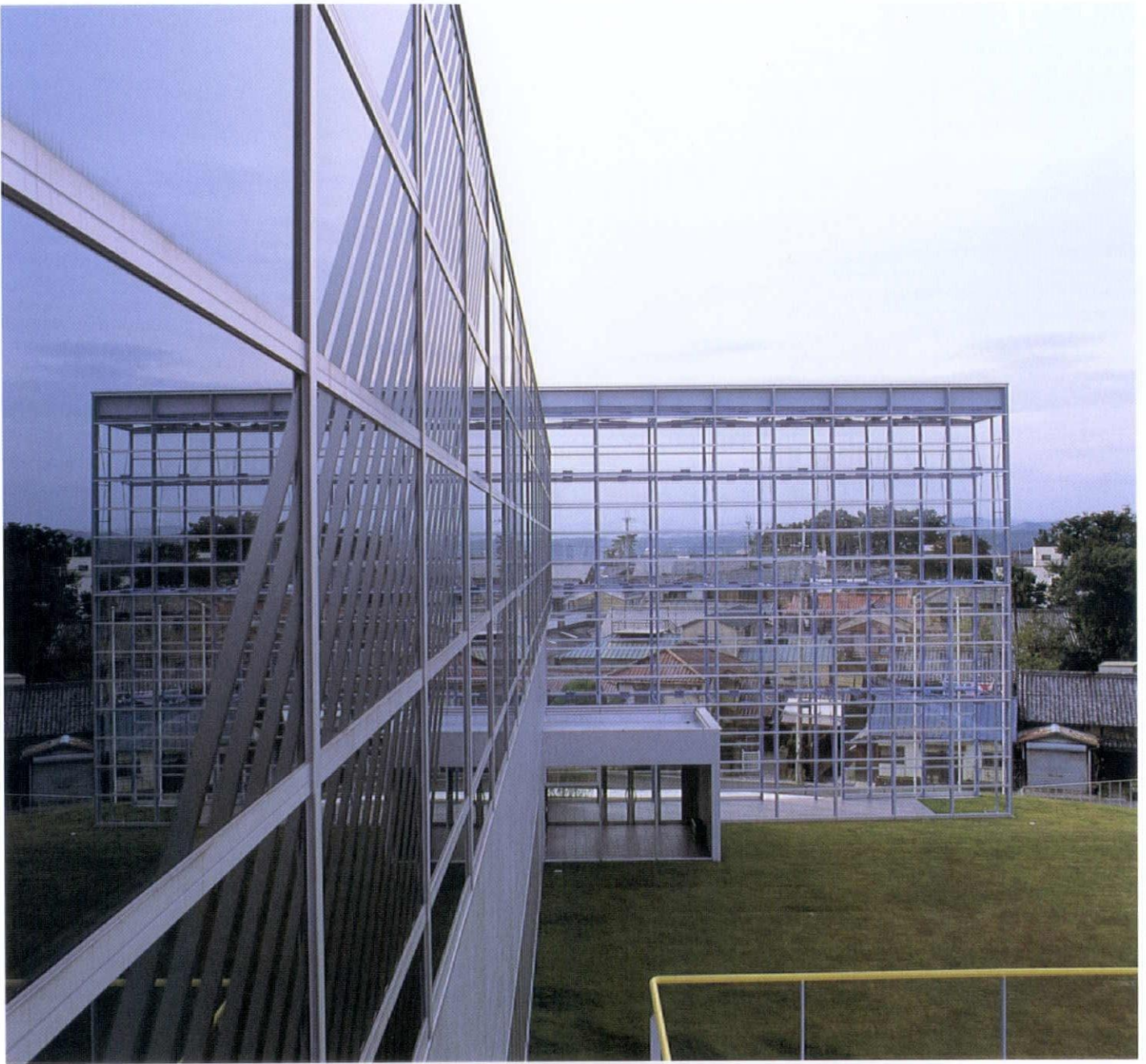














# Mt. Iwaki Project

Nakatsugaru, Aomori 1992

## 岩木山プロジェクト

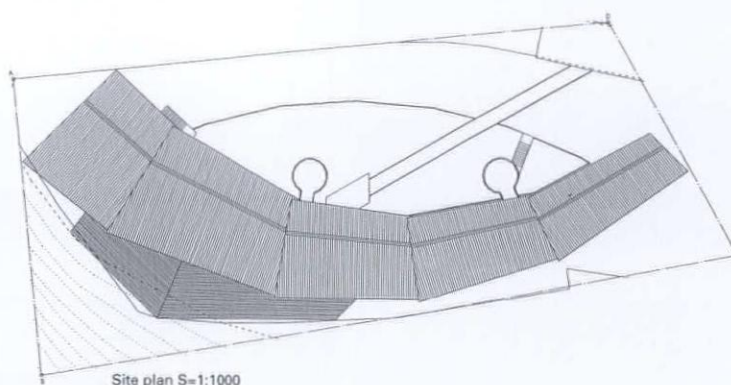
This Center is part of an all-season resort development on mount Iwaki in Aomori prefecture in the most northern part of Honshu (main island). The site is high on the eighth stage of the mountain. From here one can see the Japan Sea, and when it is clear it is possible to see even as far as Hokkaido to the north. Due east there is a beautiful view of the mountainous region of Shirakami with its famous virgin forest of beech trees.

The client wished the Center to include a restaurant for 200 people, as well as a space which could be used both in summer and winter: a hall was therefore proposed by the architects. The form of the building is derived from an image of an anthropod rising its head to see the Shirakami. Inside, continuity is achieved by merging the hall and restaurant with a rise in the floor level of the restaurant above the hall, allowing for a beautiful view of Shirakami. The hall itself is oriented due north so that an event within can take place with the Japan Sea as its background. Inside the hall, the theme is "a place for watching nature and performing art," which caters to exhibitions about Mount Iwaki, Chamber music, "shamisen" recitals (a three stringed Japanese banjo), workshops on nature (plant, stars); and traditional arts and crafts. In winter, there is six to seven metres of snow, so the floor level is raised two and a half meters above the site. This allows the building to be entered via a sloped ramp over a pool of water.

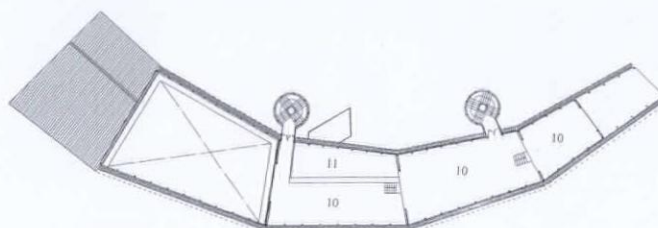
この施設は、四季を通して利用されるリゾートの開発の一部として、青森県岩木町に計画された。山の8合目にある敷地からは普段でも日本海が見渡され、天気の良い日には遠く北海道を臨むこともできる。東側にはブナの原生林で有名な白神山溪の美しい山並みが広がっている等、非常に景観に恵まれたところである。

クライアントの要望は、200人収容できるレストランと、夏冬共に様々な活動に利用できるスペースであり、そうしたスペースとして私達はホールを提案した。ホールよりレストランに向かって少しずつ段差を設けながら連続性を持たせ、施設内のどこからでも白神山溪の山並みをよく見渡すことができ、ホールでの催しは日本海を背にして行われる。ホールのテーマは「自然とパフォーマンスアートを観賞する場」であり、岩木山に関する展示のほか、三味線による室内楽、植物採集や天体観測といった自然に親しむためのワークショップ、伝統工芸の実習なども企画された。

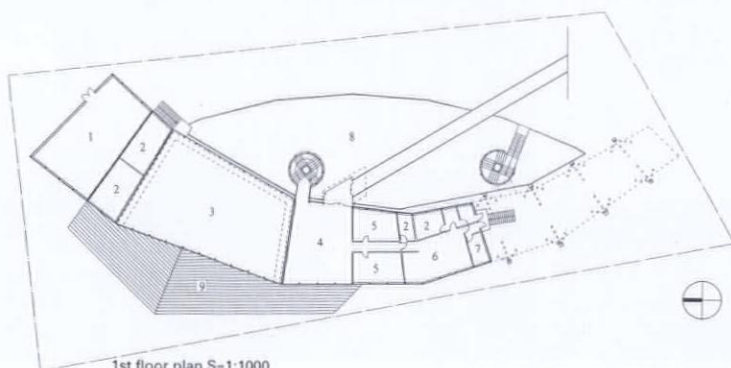
冬には6.7mもの積雪があるため、床は地面より2.5m持ち上げられていて、訪問者は池をまたぐスロープによって施設へと導かれる。多くの細い柱に支えられ、いくつもの節を持つように見える外観は、まるで白神山溪に向けて頭をもたげている、ムカデの様でもある。



Site plan S=1:1000



2nd floor plan



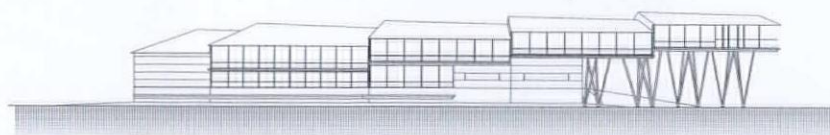
1st floor plan S=1:1000

### Site plan

- 1: Parking
- 2: Cable-car station
- 3: View point
- 4: Bridge
- 5: Pond

### Floor plan

- 1: Machine room
- 2: Storage
- 3: Gallery
- 4: Entrance hall
- 5: Rest Room
- 6: Office
- 7: Locker room
- 8: Pond
- 9: Deck
- 10: Restaurant
- 11: Kitchen

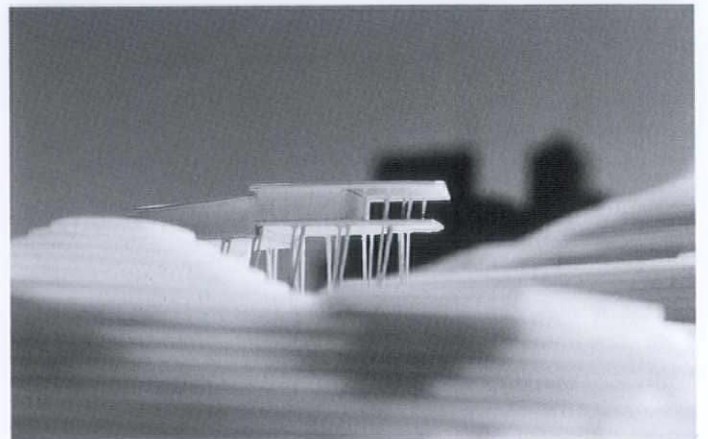
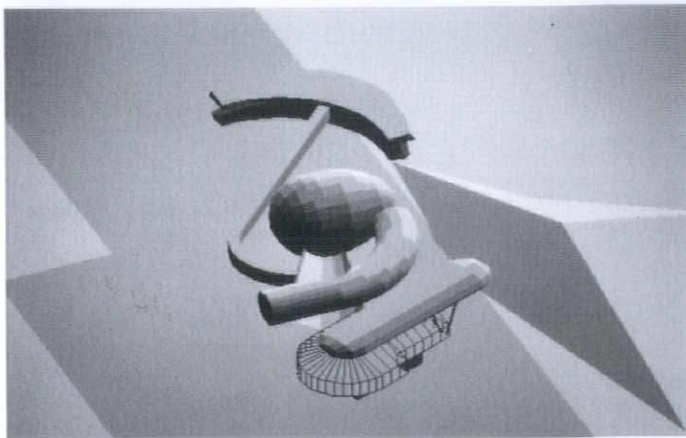
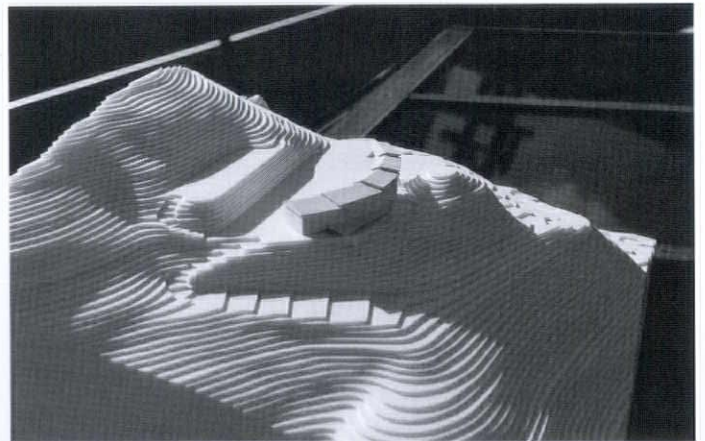
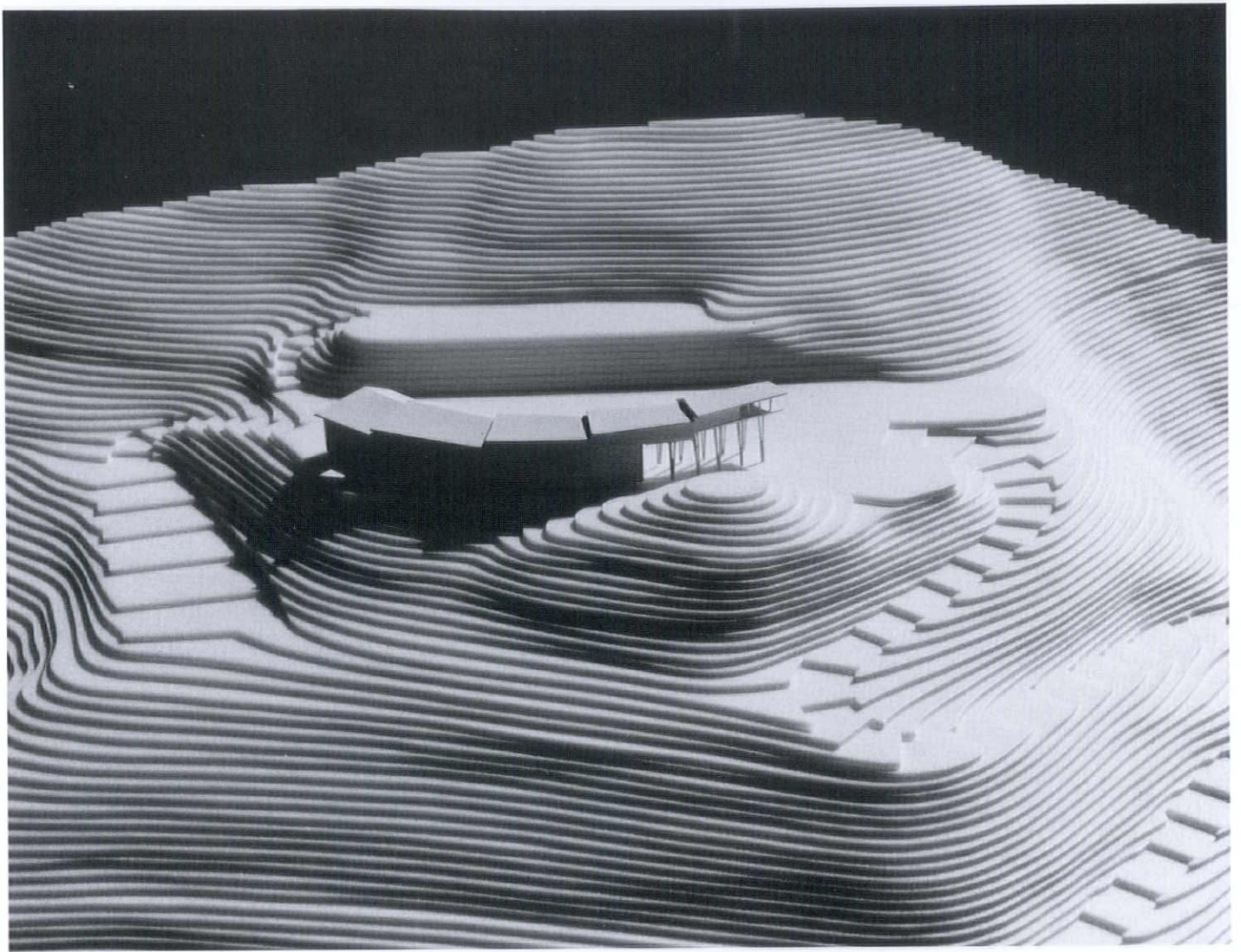


West elevation



South elevation S=1:1000







# Atelier in Tomigaya

Shibuya, Tokyo 1986

## 富ヶ谷のアトリエ

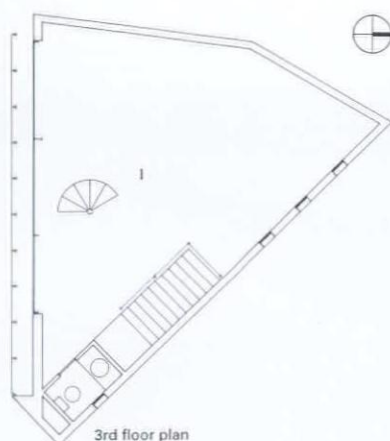
In order to implement a concept of "architecture as latent nature" in the increasingly alienating urban environment, I use translucent membranes, which respond to the changes of daylight and seasons, as a device to gently separate interior and exterior spaces, and perforated metal panels to transform the nature of light and create sharper images of winds and sounds. My buildings try to become parts of the surrounding streetscape and, at the same time, to provide a refreshing beam of brightness.

My idea of the architecturalization of nature is based on my desire to express nature and the universe in high-tech detailing and, by expressing architecture with naturalistic and cosmic details, to imply a flexible outlook on the contemporary world. The artist's atelier in Tomigaya was designed along the line of this architectural philosophy.

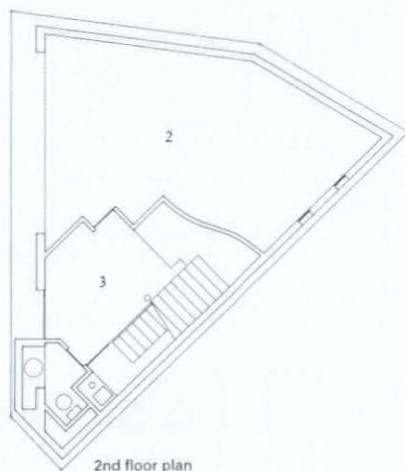
We are asked to maximize the massing in the triangular corner lot. The facade along the street consists of layers of thin perforated aluminum membranes, cut in cloud shapes, attached to the concrete structure. The transparent parts of the facade respond to subtle changes of interior and exterior lights, and the aluminum surfaces reflect surrounding scenery and sky. They combine to create unusual visual effects. At dusk, interior lights start filtering through a circular window. The result is a landscape of light which seems like waves or mountains with the setting sun, or clouds with the moon. The facade is thus a scene of Tokyo sky; a crane rising against the background of clouds.

ビル化によって都市が硬質化してゆく中において、半透明な薄膜を導入することで建築の内と外の間を薄く軽く隔てるものになると同時に、その薄膜が自然光を受け、春夏秋冬、終日変化する様や、パンチングメタルがつくる強い光のシャワーで、新しいもうひとつの自然を感じさせる光景をつくろうとしてきた。周辺の界隈づくりの一部としてファサードが機能し、その建物の一画は突き抜けるような明るさと、さわやかさを提供するよう設計してきた。

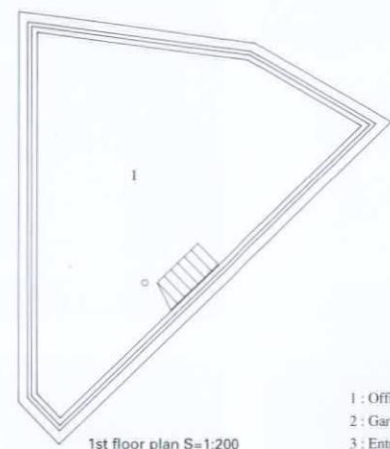
前々から私が自然のイメージを建築化しているのは、建築的高技術的な細部による自然と宇宙の描写と同時に、自然的宇宙的細部による建築の描写によって、現代を生きる自由な世界観を表明したかったからだ。こうしたこれまでの建築の考え方の延長線上に、この「富ヶ谷のアトリエ」もある。この角地の三角形の敷地に法的制限一杯の容積を持つ建物を設計するように依頼されたことから、建物の外形は決定されてしまった。道路側のファサードにはコンクリートの本体にアルミ板とアルミパンチングメタルを雲形に切り抜いたものを繰り返した薄膜を重ねた。ひとつの面に組み込まれたパンチングメタルのシースルーの部分が内部と外部の微妙な明るさの変化の中で働き、さらに周辺の気配や空の色を表面に映すというアルミの特性が重なり、不思議な光景をつくり出している。夕刻から次第に内部の明かりがもれ出すと丸窓も浮かび出し、波と夕日、山並みと夕日、あるいは雲とも月ともとれる光のパターンが浮かび上がってくる。雲の薄膜とクレーンのあるこの面は、東京の空を見上げた光景でもある。



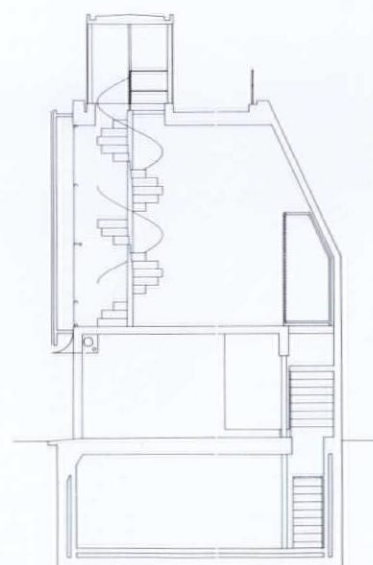
3rd floor plan



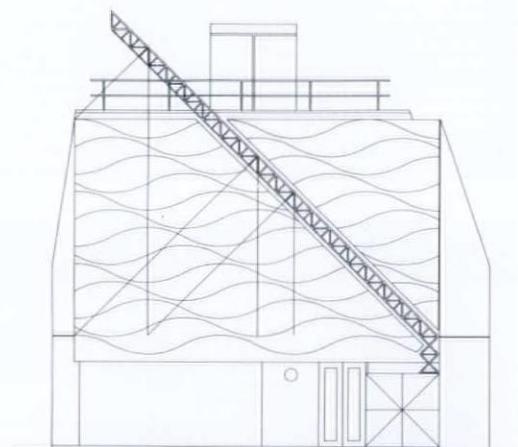
2nd floor plan



1st floor plan S=1:200



Section S=1:200

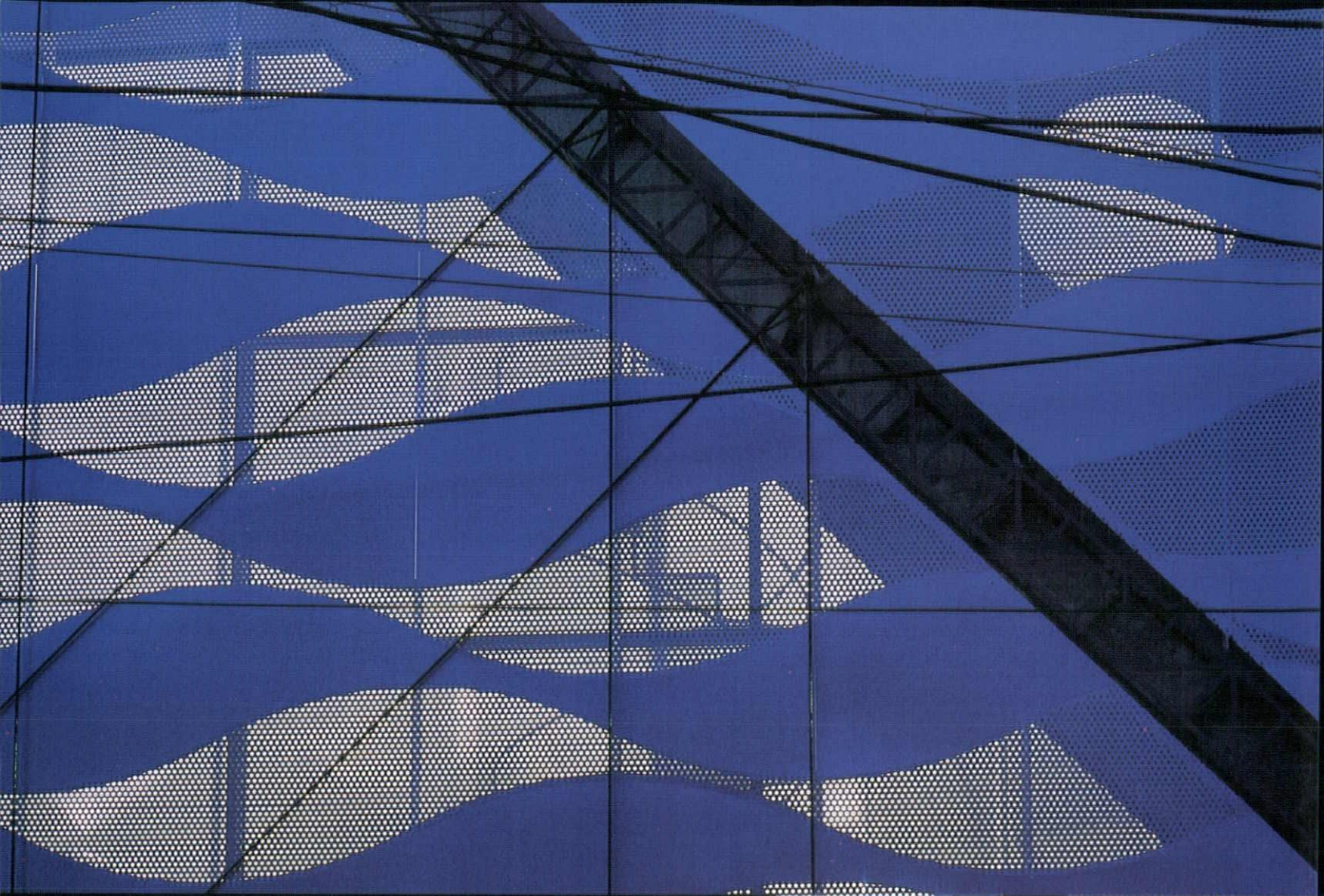


South elevation S=1:200

- 1: Office
- 2: Garage
- 3: Entrance hall









# Nagoya World Design Expo Pavilion

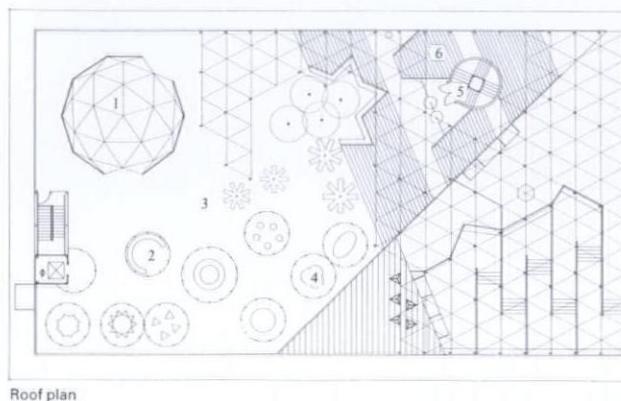
Nagoya, Aichi 1989

## 世界デザイン博覧会インテリア館

A distant view of this building emulates a misty landscape, with layers of perforated metal panels and see-through screens reflecting the atmospheric colors of the clouds and sea. The garden is reminiscent of the spiky rocks in Keilin, China or a group of chador covered Muslim women. It is actually a rest area with custom designed chairs made of perforated plywood, and shaded by milky white fabric tents. Imaginary trees made with expanded metal sheets and FRP (Fiber Reinforced Plastic) change their appearance constantly by reflecting sunlight. A deformed geodesic dome "high mountain" is also clad with FRP and perforated metal sheets, and surrounded by a great sense of nature.

The building contains a 200 seat theater where one can watch shows on interior design subjects. The initial program called for a design with interior comfort as its theme. I felt that, regardless of the amount of decoration employed, I could not make closed interior space intimately pleasant. Traditionally in Japan, with four distinctive seasons, people have created interior space by layering thin membranes which allow natural light, wind and air to filter through. In order to convey my belief that architectural comfort exists only along with its environmental equivalent, I devised a plan which contrasts the interior theater space and the roof garden. It is one of our themes to gain some semblance of nature in architecture, within the context of an increasingly more complex urban environment.

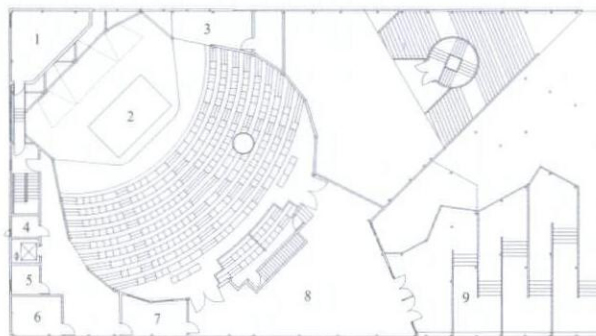
この建物のパンチングメタルとシースルーのスクリーンが幾重にも重なる外観は、雲や海のように空気の様々な色に染まって変化し、その柔らかい輪郭も遠方から眺めると、まるで霞が立ち込めたような風景となっている。岩山が林立する中国・桂林の風景やイスラムの女性たちのチャドルにも見えるもの、それは乳白色の薄い布で覆われた休憩所で、内部にはパンチング合板の独特の表情を持つ椅子が置かれている。エキスパンドメタルやFRPでつくられた樹木のイメージの装置は、その様相を太陽の光を受けて刻々と変化させ、フラードームをゆがめた造形のハイマウンテンはFRPやパンチングの面がそのヴォリュームを形成し、大自然の音色に包まれている。このパビリオンはインテリア館と名付けられた200人収容のシアターで、インテリアをテーマにしたショーを見せることが主題となっている。当初、インテリアの快適さというものをテーマにした設計を依頼されたが、閉じたインテリアをどんなに華やかに飾っても直接には快適さなど感じられない。この日本の風土では、四季と共に変化する光や風や空気があって、そうした自然の様相が感じられる薄い皮膜を重ねさせて内部空間を成立させてきた。建築の快適さはその環境の快適さと並行してあるものだというメッセージを込めて、シアターと空中庭園というふたつの空間を対峙させて全体を計画することを考えた。ますます複雑化していく都市の中の環境としてある建築に、自然さと自由を獲得していくことをテーマとしている。



Roof plan

### Roof plan

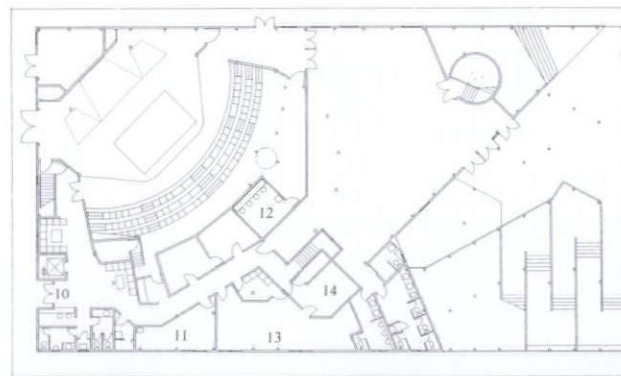
- 1: High mountain
- 2: Counter
- 3: Floating garden
- 4: Terrace
- 5: Island
- 6: Oasis steps



2nd floor plan

### Floor plan

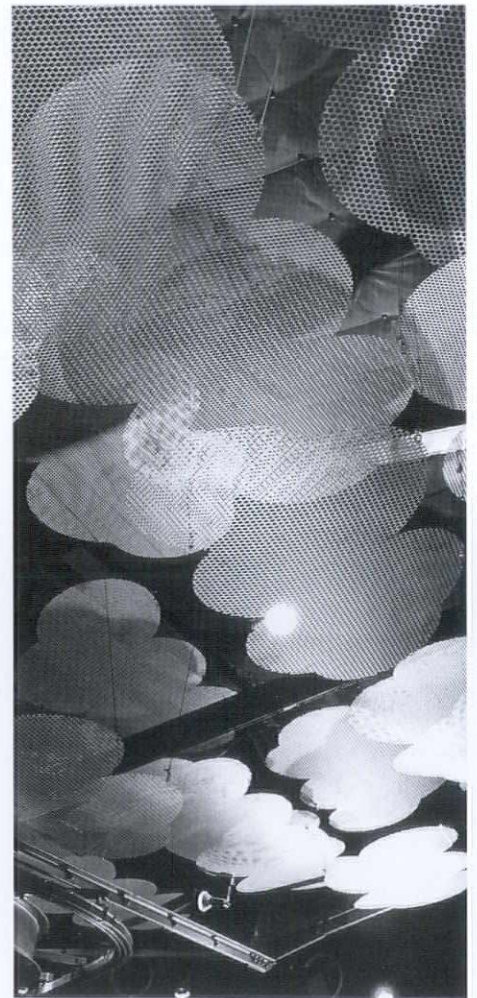
- 1: Mechanical room
- 2: Theatre
- 3: Extra room
- 4: Waiting room
- 5: Security's office
- 6: Electronic room
- 7: Control room
- 8: Preshow area
- 9: Waiting area
- 10: Entrance
- 11: Waiting room
- 12: Dressing room
- 13: Office
- 14: Meeting room



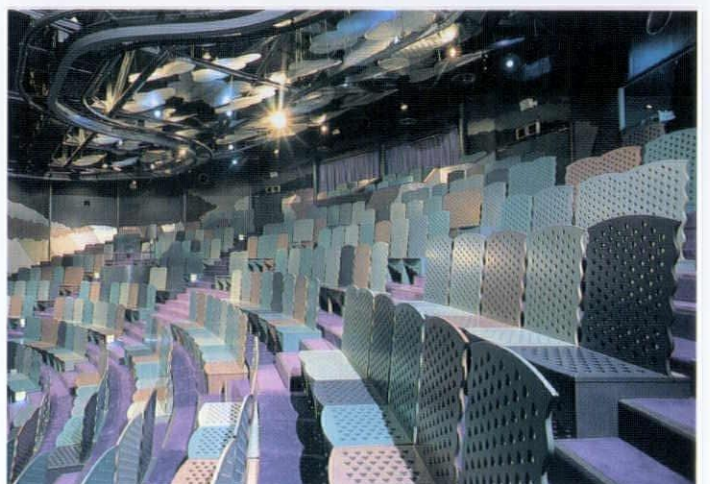
1st floor plan S=1:600



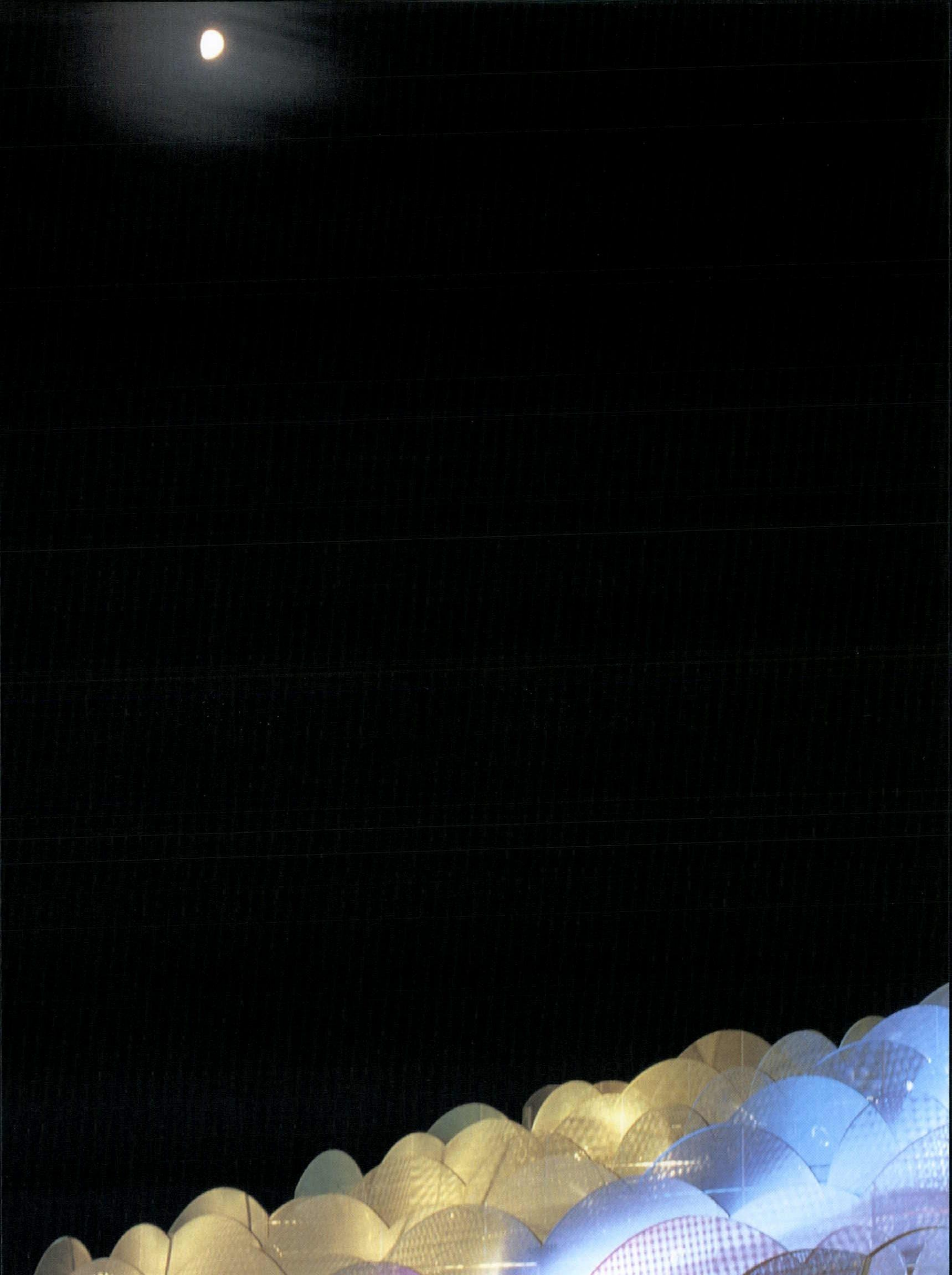














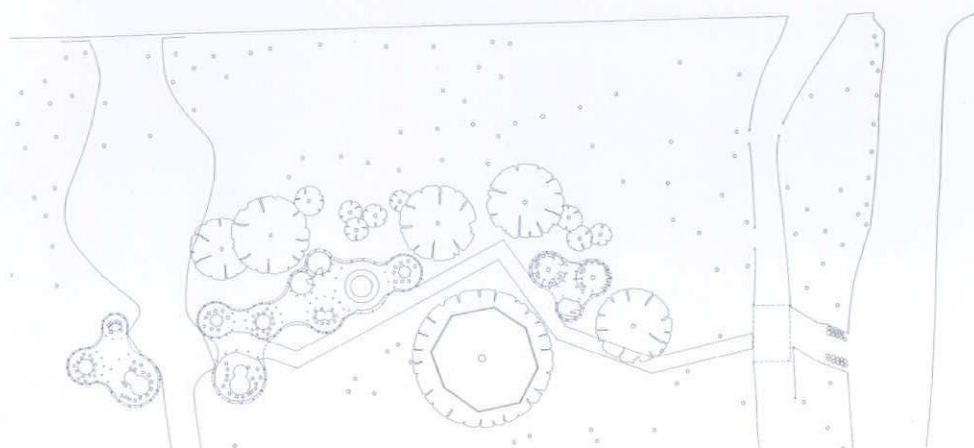
# Nara Silkroad Expo, Asajigahara Rest Area

Nara, Nara 1988

## 奈良シルクロード博覧会浅茅原休憩施設

This steel framed tent structure was designed as a rest facility for the Expo. The origin of the imagery is a landscape of oasis meeting places for people from different cultures who wrap themselves with single sheets of fabric, such as Muslim garments as the chador in Iran, and the sari in India. It is also analogous to the varying shapes of nomadic Mongolian tents in the wind, and panoramic mountain ranges of the Silk Road. When inside, reflections of stream ripples and shadows of surrounding trees are projected on the tents, similar to black ink paintings.

The project was initially planned to be placed on an east-west axis in a clearing of the Asajigahara Woods. However it was willingly reduced in size to accommodate the use of the area by deer herds who had moved away from adjacent construction.

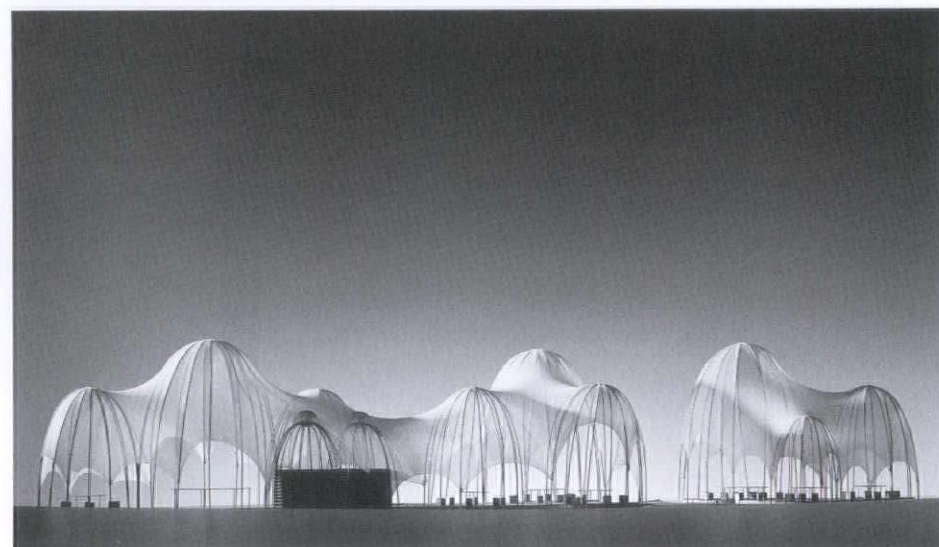
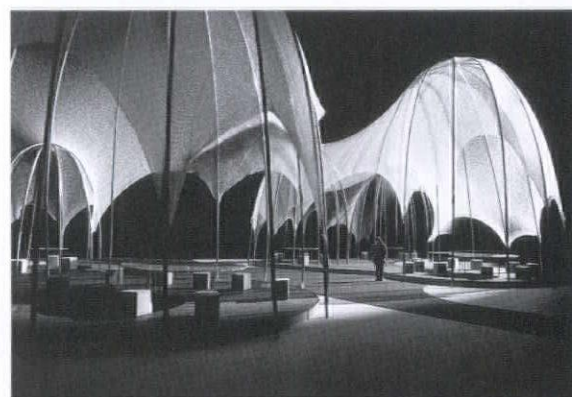


Roof plan S=1:1000

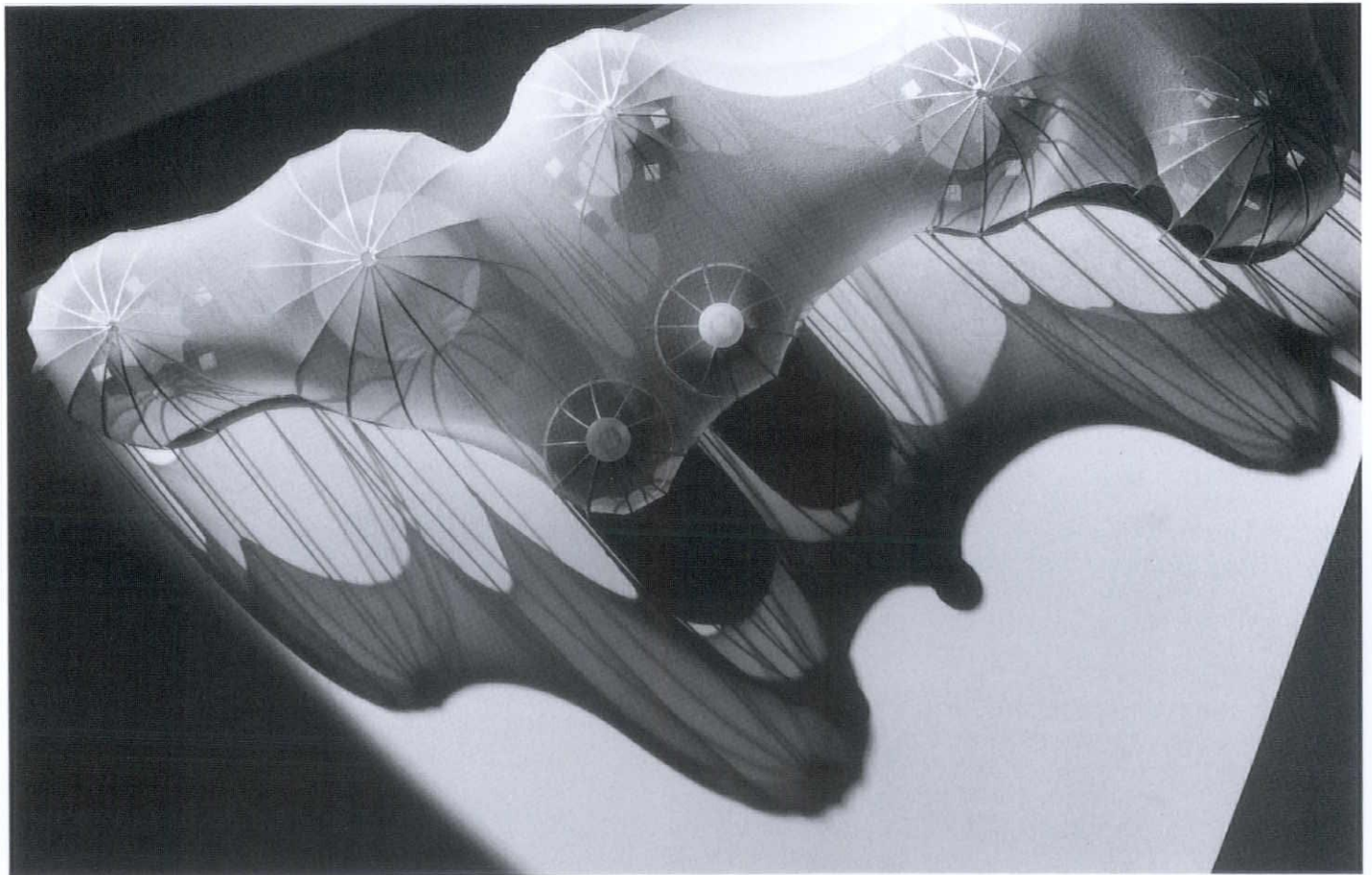
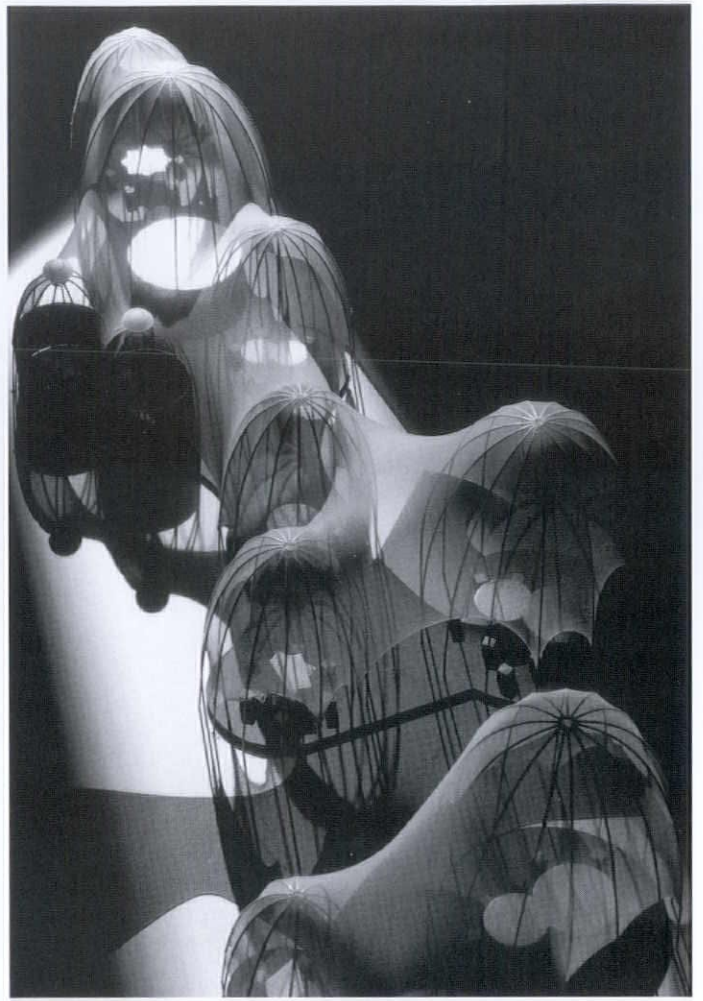
このスチール・フレームのテント建築は、休憩施設として設計したものである。イスラムにクルタ、イランにチャドル、インドにサリーなど1枚の布で身を包む文化があるが、そういう人々が集合している風景がイメージの原点にあった。風に舞い上がった姿を大中小の高さの違うパオの形に置き換えたようなもの、または次々に展開し連なるシルクロードの山並みに見立てられるものにしたかった。また、内部にいと近くの流れの水面の照り返す波紋のゆらめきや、樹々のシルエットが水墨画のようにテントに映し込まれるように配置することを考えた。始めは浅茅原の樹々に取り囲まれた中央の空地に東西に広がるように設計したが、予算等の理由で工事の着工が遅れ、その間、他の工事が進むにつれてこのエリアが鹿の移動ルートになってきたため、積極的に縮小し実施された。



South elevation S=1:1000









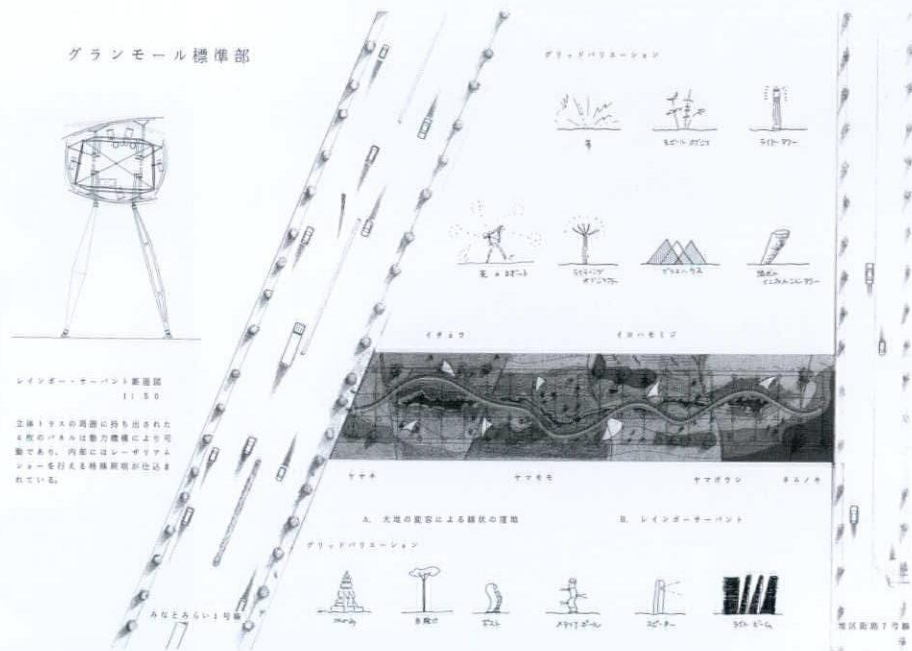
# Yokohama Grandmall Project

Yokohama, Kanagawa 1989

## 横浜グランモールプロジェクト

The city becomes both a symbol of this dynamic process as well as a catalyst which releases and generates the momentum of the energy of a free state of mind (elemental particle) from the body of the people (nucleus of atom), like a synchrotron. We want to create a device which constantly dissolves power in a codified society with a single-minded consumerism, and continuously forms meaning.

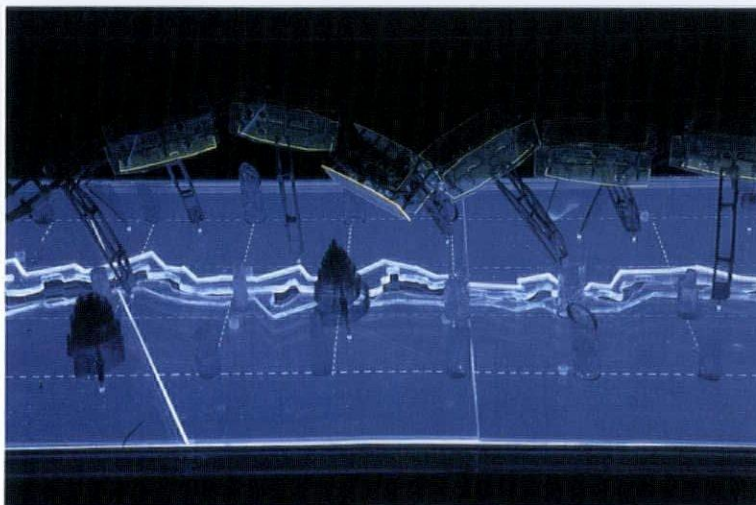
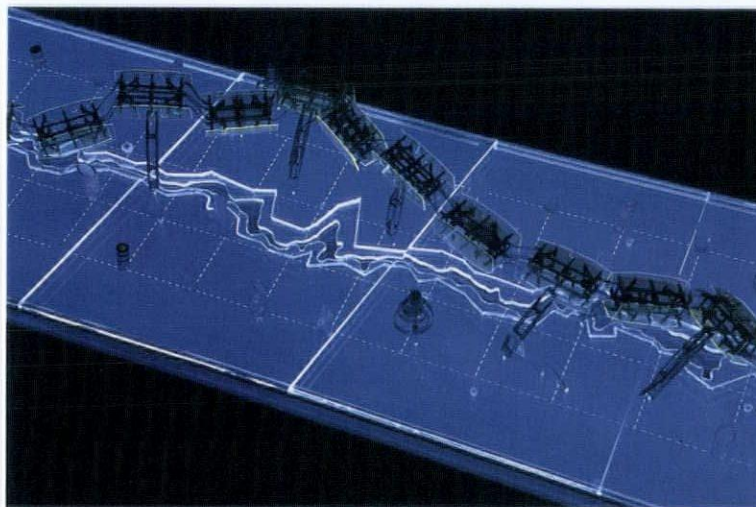
We name this symbolic device the "Rainbow Serpent." The Rainbow Serpent is a two meter wide twisting serpentine object floating in the air. Its dorsal and abdominal surfaces also wave up and down, and it is clad in stained glass which, when lit, illuminates the periphery with a constantly changing spectrum. The sides are covered with various kinds of mesh metal sheets. In the evening or on a foggy day, the Rainbow Serpent releases fading colors as if to correspond with the light from the transformed landscape. The dorsal portion of the Serpent can be motorized to twist and turn for a particular time or event. With a special lighting system incorporated into the device, it can perform laser shows and may turn the entire place into a time machine



都市における倫理とは、惰性化した都市を脱コード化し、より自由で拡張された人、情報、快楽などの多様で流動的な交通様式を間断なく追及することではないだろうか。

都市はそこを行き交う人々の身体と意識の多層領域を形成しうるものである。それは我々の存在様式そのものとしての都市であり、意味のビッグバンを繰り返す「粒子としての都市」である。そしてその粒子は、最新の物理学が見出したクォークのように色も香も持っている。このダイナミックな生成のプロセスにふさわしいのは、人々（素粒子）の自由な意識状態を監禁する凝結体（原子核）から、その結合エネルギーを解き放ち、都市のエッセンス＝意識（粒子）の軽やかな運動を引き起こす「シンクロトンとしての都市」である。都市を一元的な消費のシステムのもとにまとめ上げようとするコード化の力を耐えず解体し、意味形成の自然状態を持続させるための装置を内在させたい。

私達はこの装置を「虹の蛇（レインボー・サーペント）」と呼ぶ。「虹の蛇」は宙を走る幅2m平均の蛇行する連続体であり、その背も腹も水平ではなく弦のように波打っている。その側面は各種の金属のメッシュ、背と腹はステンドグラスとし、その反射色の方向によるうつろい、色彩を持った透過光による多様な色彩体験により、通行可能なままに場を分節する。夕刻からあるいは霧の日に大地に向けて多様な色彩の光を変容した大地より水や光の噴出に呼応し合うように、うつろいを持ちながら噴出する。また、特定の時刻やイベントに合わせ、背のラインを動力機構により波打たせ、モール全域にわたるレーザーリアムショーを行える特殊照明を仕込むならば、この場はタイムマシンそのものとなるであろう。









# Shonandai Cultural Center

Fujisawa, Kanagawa 1990

## 湘南台文化センター

I wanted to retain and strengthen the rich local activities as well as architecturalize formless sentiments and behavior.

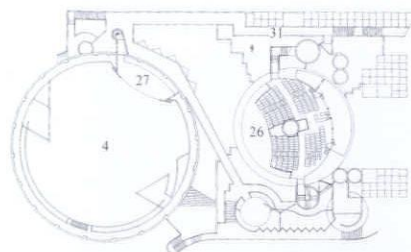
What I called "architecture as topography" during the design competition meant a new kind of environmental design which was concerned with regionalism, mother earth, primal rural landscape and cosmic relationships. During the design process, we held a number of community meetings to listen to the local people. This is one way to give architecture meaning in society; encourage community participation in design instead of isolating it as a symbol of bureaucratic authority.

The concept of "architecture as latent nature" also appealed to the post-modern sentiment of the citizens. Seventy percent of the floor area is provided underground to leave as much ground space as possible for outdoor gardens. An artificial plaza design and more natural green roof gardens generate a landscape of the new open field as latent nature. Nature and man, and architecture and society should not exclude each other but coexist to create a better environment. This inclusive approach to architecture is also expressed in the open character of the facilities and free flowing circulation routes around the site.

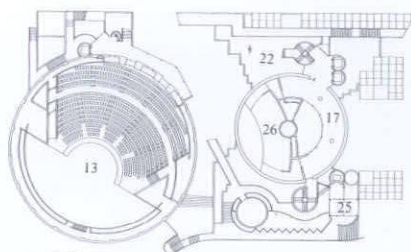
私は地域の生活に密着し、未だ真の豊かさを内蔵しているローカリティをさらに掘り下げ、人間の様々な感情や行動など、それら非建築的なものを包み込む建築をつくりたかった。そのように文化を捉え、野原の多機能性を市民文化センターの原器とし、その質を延長させ、さらに積極的にコミュニケーション空間として立ち上がらせたいと考えてきた。コンペ時の「地形としての建築」というテーマは、そうした地域、地表面、農耕社会の原風景、宇宙的な広がりなどと関わる、新しい自然づくりを意図していた。

実施設計の期間中、相当数におよぶ市民サークルとの意見交換会を行い、コンペ案を市民と共に問い直した。これは建築をひとつの社会的存在に位置付ける行為であり、また支える側の行政の権威の表現ではなく、市民が中心にいる新しい社会建築の実現という流れをつくることを目指していた。

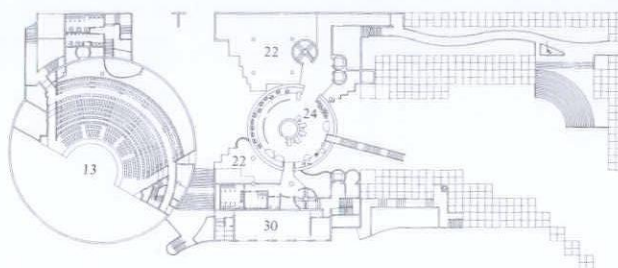
私が掲げてきた「第2の自然としての建築」というコンセプトも、市民感情のポストモダンに共鳴を与え、多くの人たちの気持と共有し得たのだと思う。床面積の70%をサンクンガーデンと共に地下に埋め込み、地上部は人工の庭園のような様相を持つものとした。プラザの人工的な広場と屋上庭園の緑が重なりあう風景を持って、新しい原っぱ空間がつくる第2の自然としての風景とし、自然と人工、また建築と社会の在り方が、相反する関係にあるのではなく、それらが両輪となって回り、共生しうるのであると考えた。そして環境や社会など様々な問題に対して、inclusiveに考えてきた。地上部は四方からアプローチでき、対角線にも横断でき、これまでの文化センターのように集会やイベントのないときは閉まっている施設ではなく、常に開かれた建築としてつくられている。



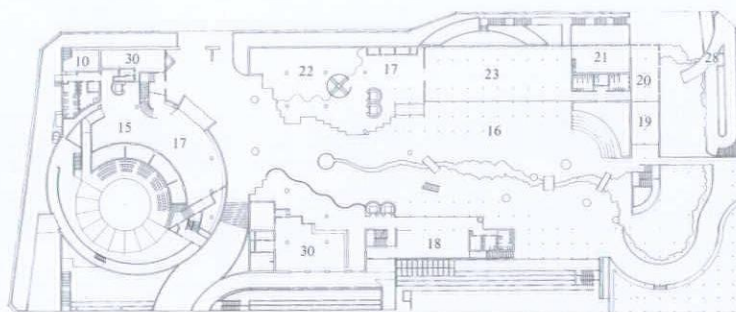
5th floor plan



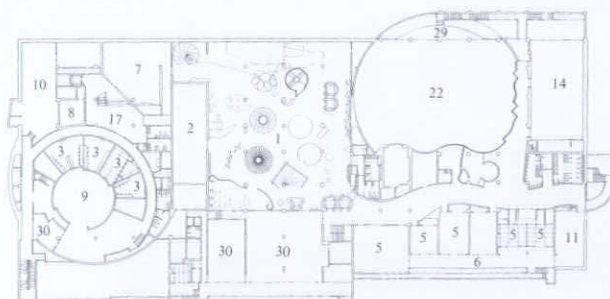
4th floor plan



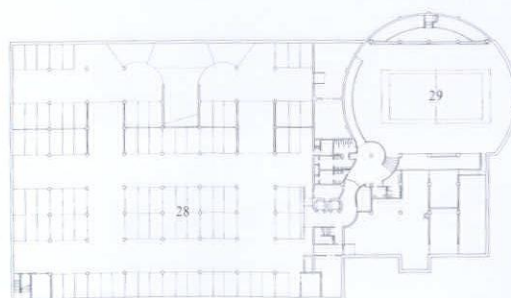
3rd floor plan



2nd floor plan



1st floor plan



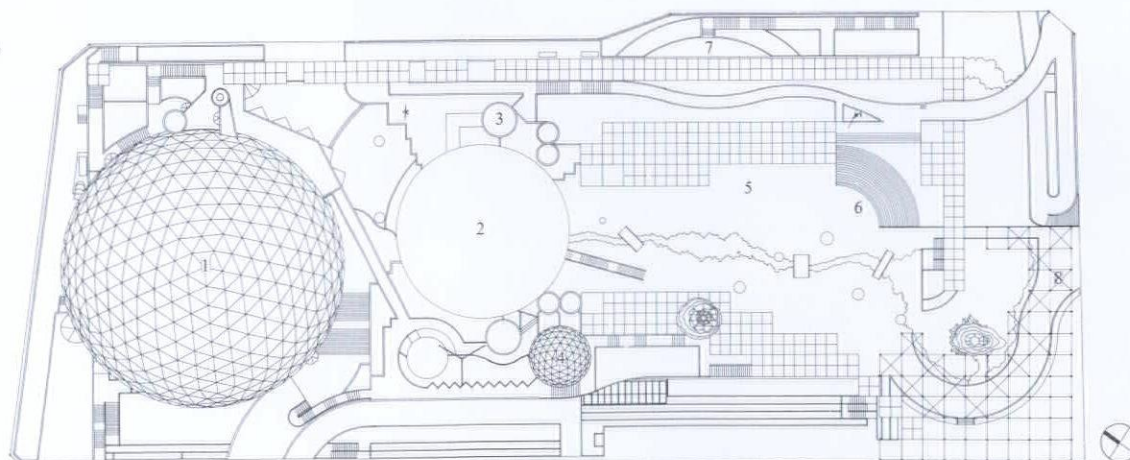
Basement 1st floor plan S=1:1500

- 1: Children's exhibition hall
- 2: Ramp
- 3: Dressing room
- 4: Hall
- 5: Lounge
- 6: Sunken garden
- 7: Rehearsal room
- 8: Studio
- 9: Trap cellar
- 10: Mechanical room
- 11: Kitchen
- 12: Children's room
- 13: Citizen's theatre stage
- 14: Citizen's theatre lobby
- 15: Reception
- 16: Plaza
- 17: Lobby
- 18: Gallery
- 19: Pottery room
- 20: Terrace
- 21: Laboratory
- 22: Void
- 23: Workshop
- 24: Circular gallery
- 25: Amateur wireless studio
- 26: Ceramic theatre
- 27: Control room
- 28: Parking
- 29: Gymnasium
- 30: Office
- 31: Circular garden



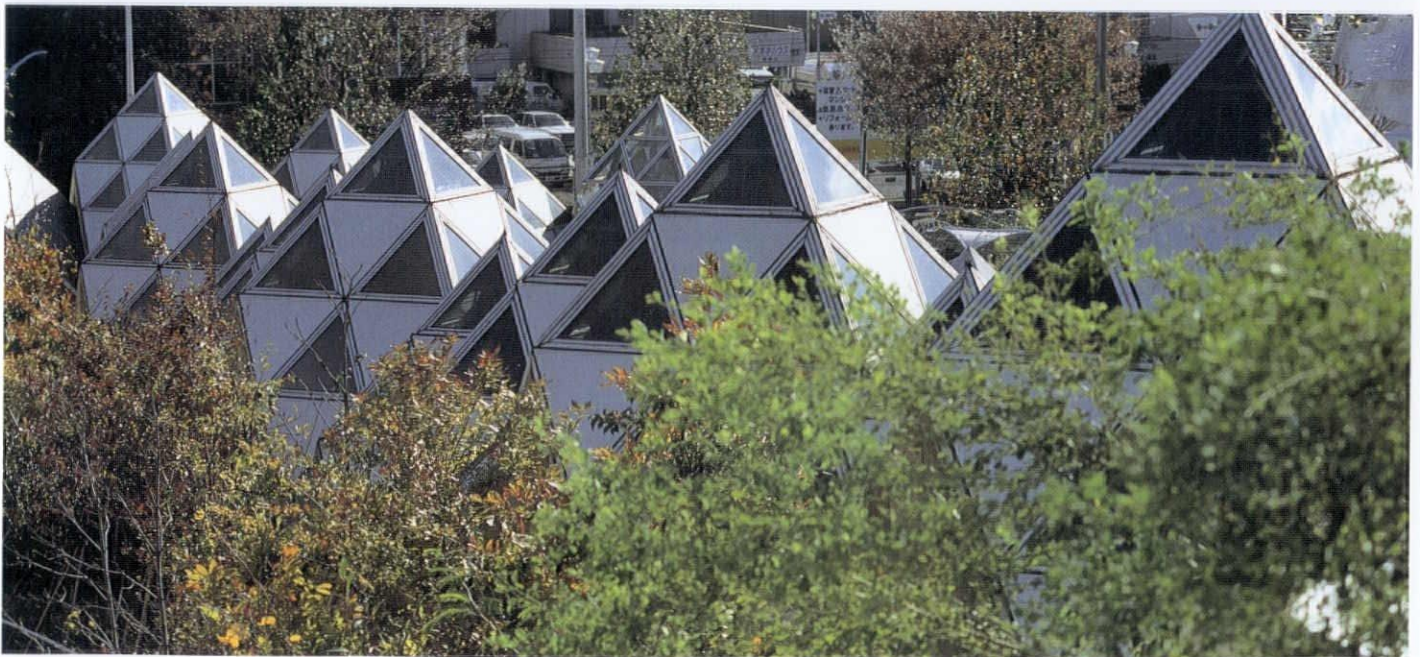
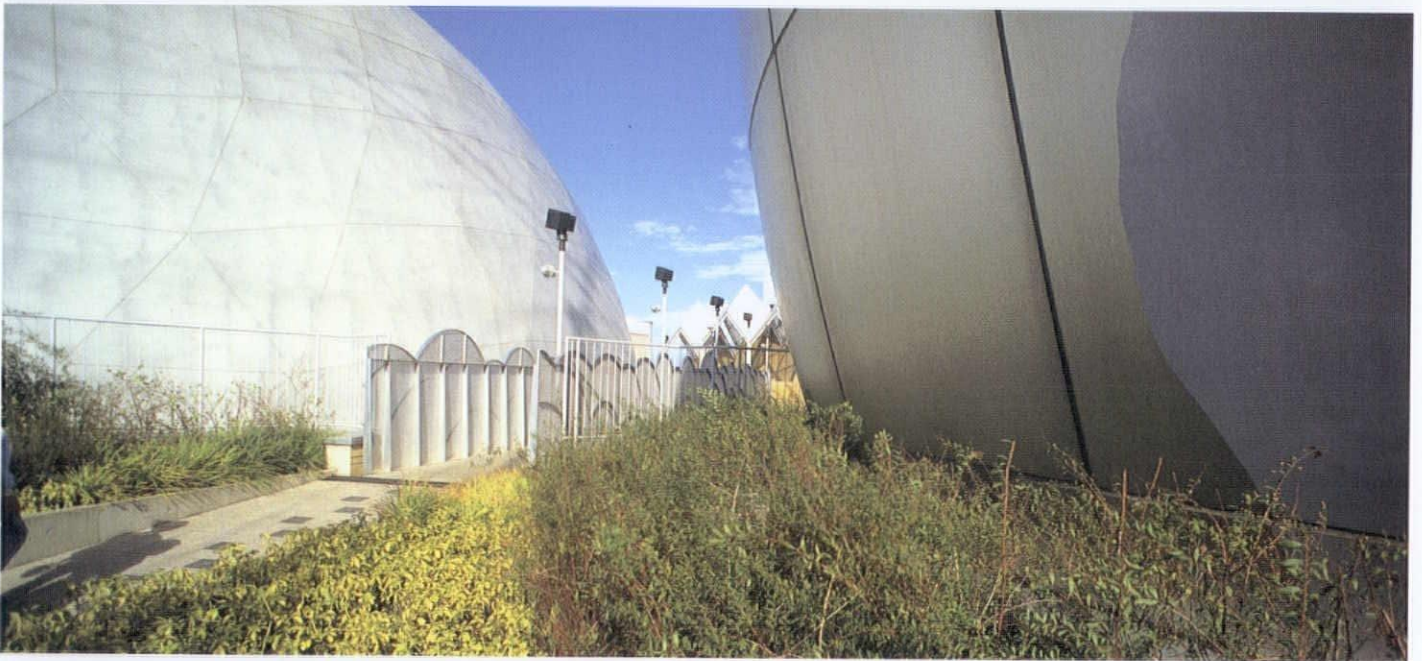
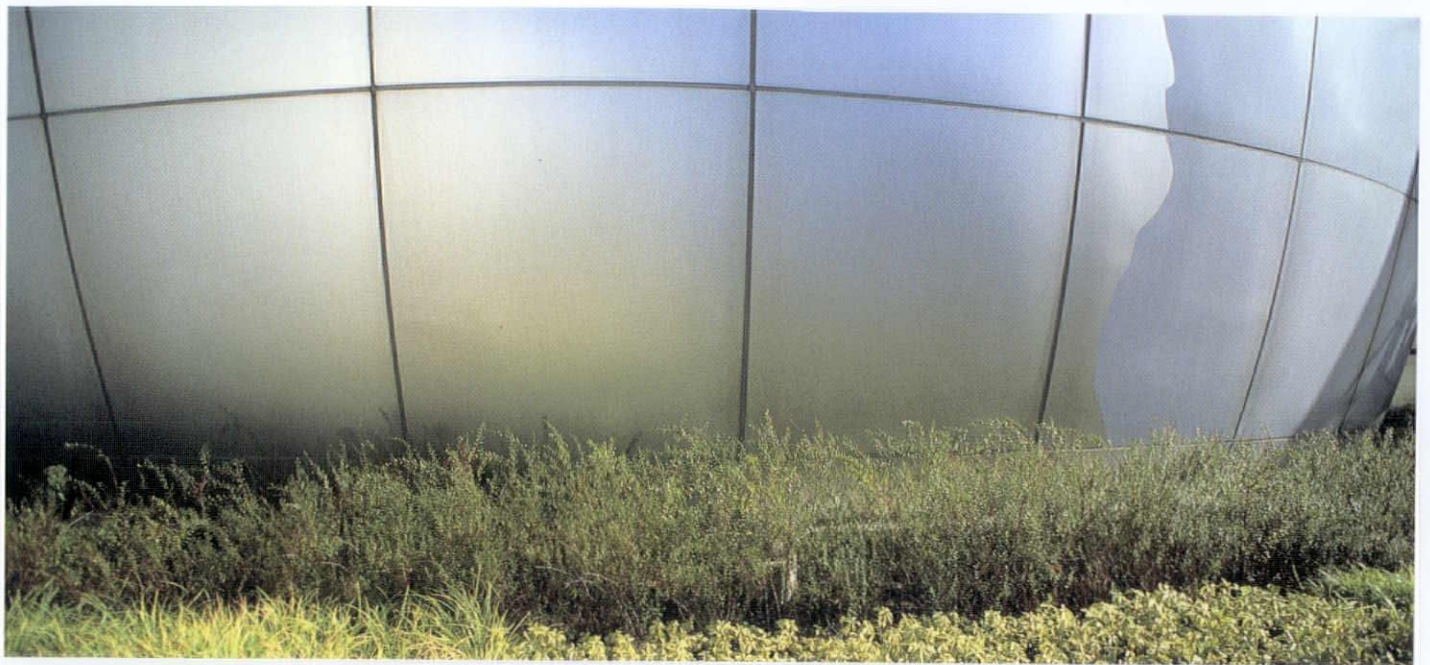


- 1 : Civic theatre (the universe)
- 2 : Space theatre (the globe)
- 3 : Heliometer
- 4 : Geodesic dome
- 5 : Plaza
- 6 : Open air theatre
- 7 : Sunken garden
- 8 : Entrance



Site plan S=1:1000

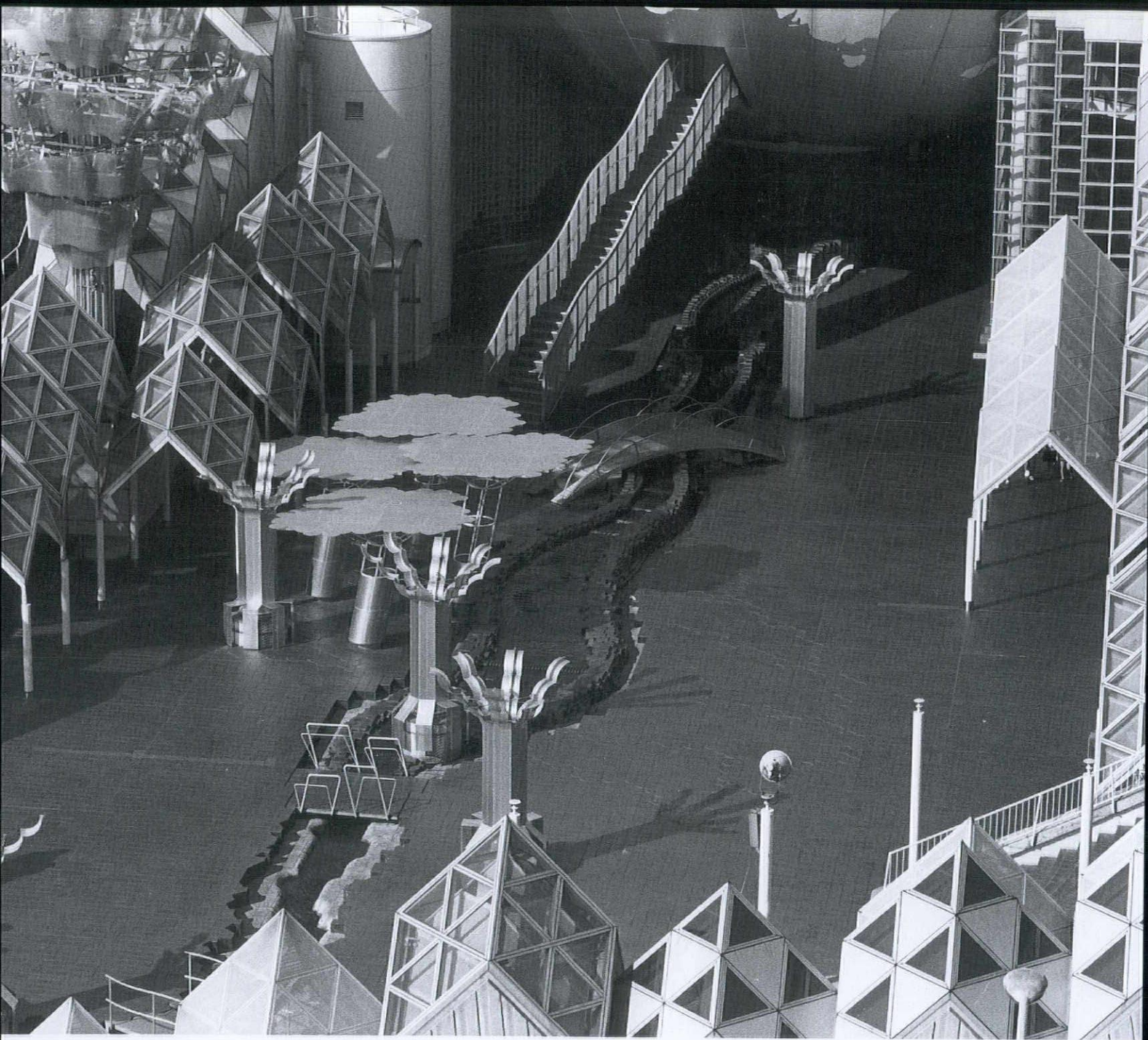








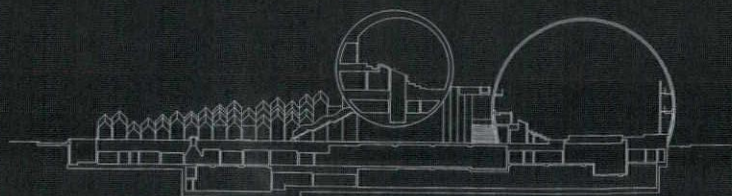




North elevation

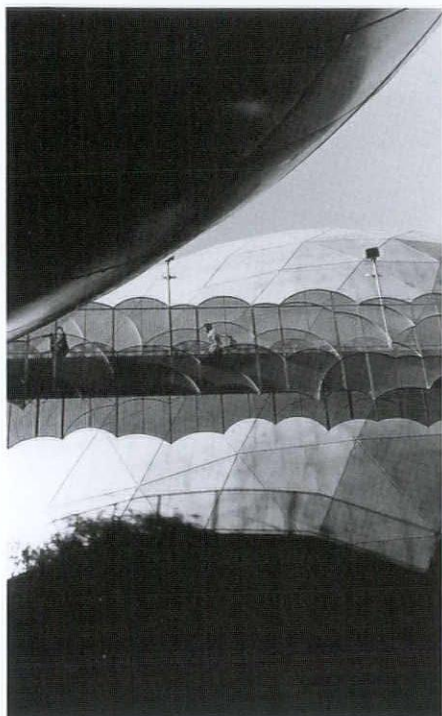


South elevation



Section S=1:1500





## Architecture as Latent Nature

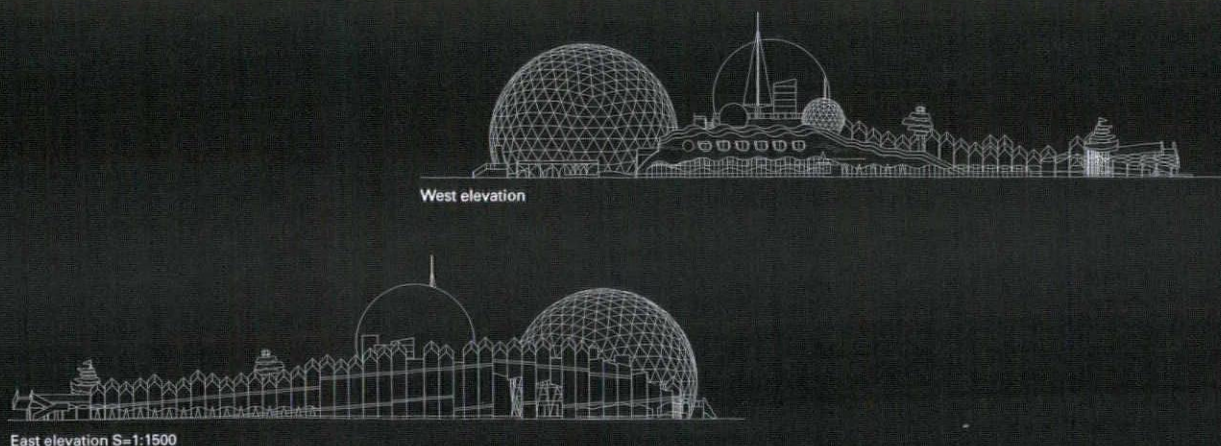
### 第2の自然としての建築

We proposed "architecture as topography" for the 1986 Shonandai Cultural Center design competition. We thought that if we architecturally recreated a primal hill (which existed on the site before development) and established vestiges of nature hidden in the urbanity, then we could possibly find a new nature in the man-made environment. As human bodies carry traces of primordial memories, so the earth has its own latent characteristics. By transforming them through new technology, we can bring out "architecture as latent nature." Making architecture is essentially a process of interpreting and digesting life experiences and examining future life styles and quality. There exists

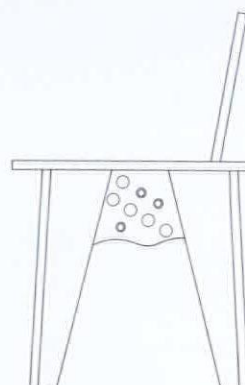
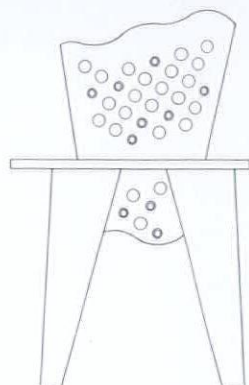
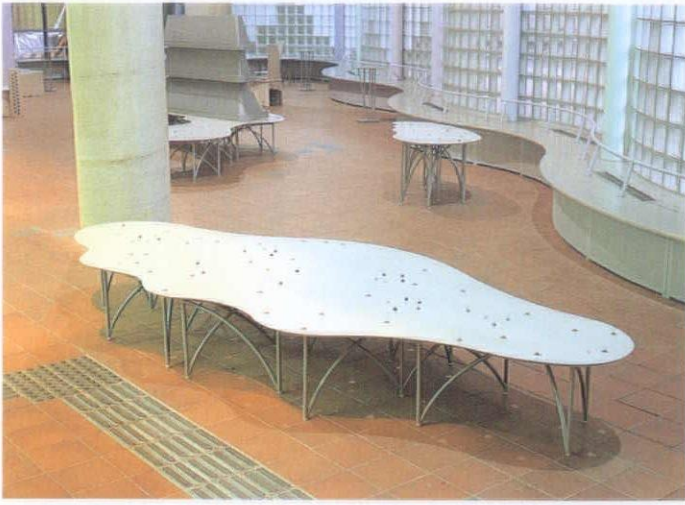
a dynamic reality where human desires and fantasies are amplified by advanced technologies and devour even art and nature. New sciences, such as fractal and chaos theories, imply that vague uncertainty is the essence of nature, in contrast with the principles of Newtonian science. Science has started to resemble the human senses. Already the technologies which make up the cities are transforming themselves from the 20th century history of exploitation to a more soft-edged symbiotic entity. "Architecture as latent nature" is an attempt to seek architectural answers in this changing world.

1986年のコンペ時に私達の掲げたテーマは、「地形としての建築」であった。区画整備される以前にあった丘を建築化し、都市の中に潜む自然のピュシスを立ち上げることができるならば、新しい自然=人工環境の提案が可能なのではないかと考えていた。人間の身体の中に根源的ともいえる記憶が残留しているように、その土地に含まれる潜在するもの(latent)

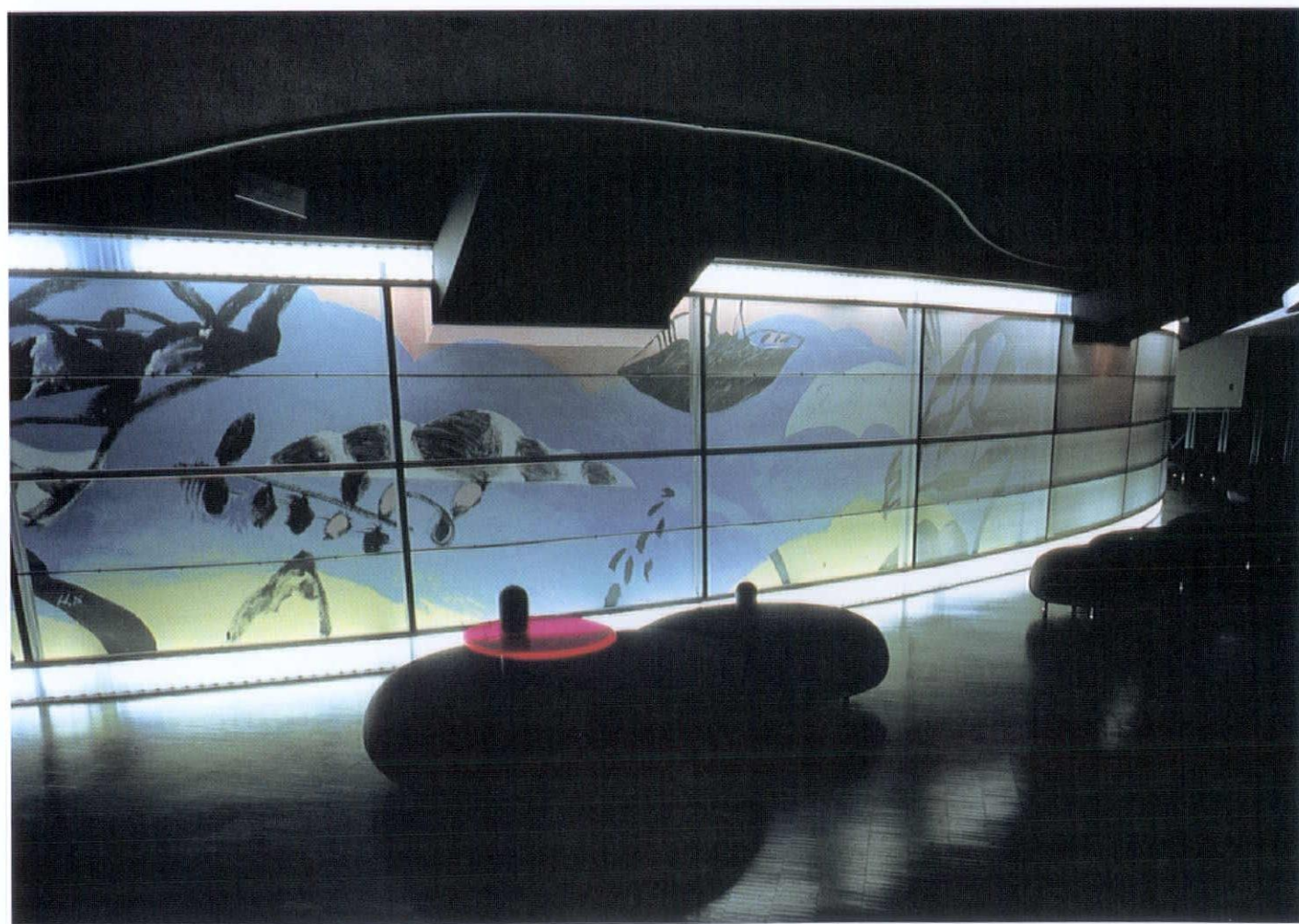
を立ち上げて、新しいテクノロジーに転換していくことによって、「第2の自然としての建築」を浮上させる。建築を考えることは、人間が生活していくなかで経験してきたことを全く異なるヴォキャブラリーで練り直し、新しい生活と新しい生命の質を問い直すこととすることができる。人々の欲望や夢想は、テクノロジーを介して増幅し、芸術や自然さえも取り込んでしまうようなダイナミックな現実が展開している。ニューサイエンスとしてのフラクタルやカオスの理論は、曖昧さを含み非正常なるものこそが自然の本性であることを示しており、原理に帰納するニュートンの世界観よりも、人々の五感が捉える身体的な日常感覚に近い質を持ち始めている。すでに都市を支えるテクノロジーは、自然と人間が対立する20世紀的なエクспロイト（開発、搾取）主体の技術から、より柔らかい共生的な技術へと変貌し始めているが、「第2の自然としての建築」は、このような変化に伴って建築が持つべき空間の探求である。



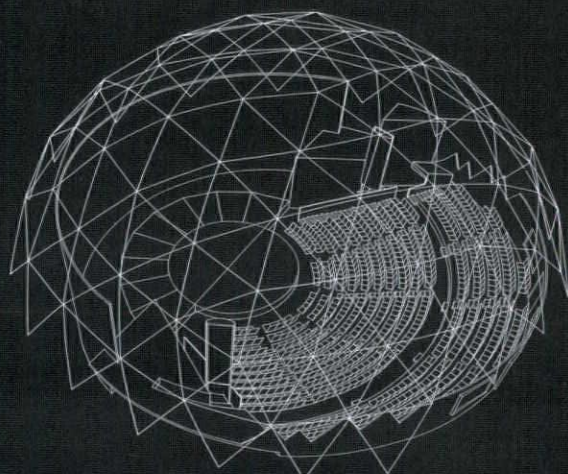




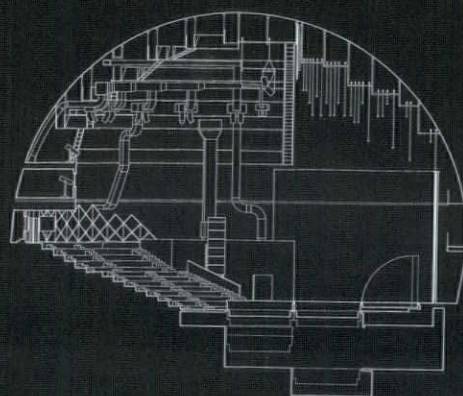




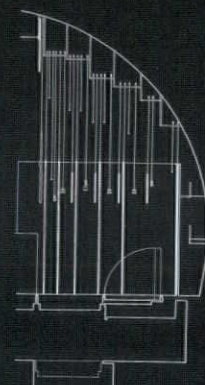




SD9511 Theater axonometric drawing  
92



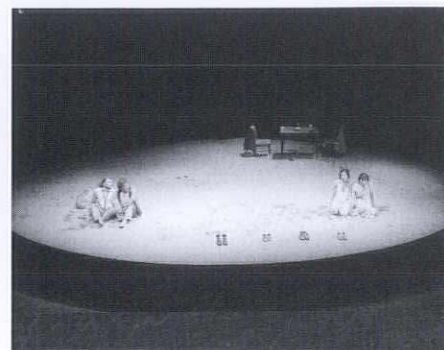
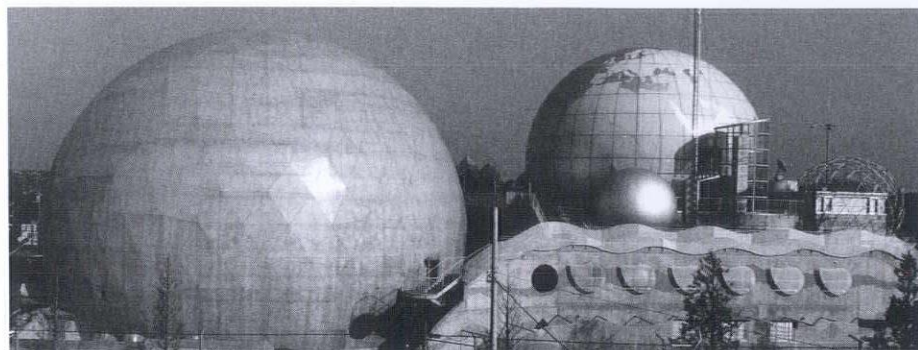
Theater section





## Civic Theatre

### シビックシアターについて



『砂の駅』作・演出＝太田省吾

The civic theater aims to be an outdoor performance space supported by modern technology. We chose the form of a sphere for the theater in hope of creating an environment of primal vitality. After several years of use, we have found that the spherical form itself is essential for innovative programming. For example the original works introduced in the theater, "When we were children" by MODE, and "Dadasko Dada" by Saburo Teshigawara are called "Shonandai Versions". Min Tanaka requested a structural check of the stage for his use of a large crane truck which dwarfed performers for his dance, "The Fest of Spring." Pamphlets for the dance featured the dark interior of the theater which suggested his strong desire to challenge the space. As we modeled the planetarium on the globe, the observatory on the moon, and the theater on the cosmos, I believe that Min was trying to dance toward the limits of the universe.

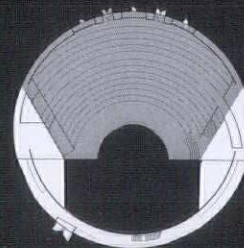
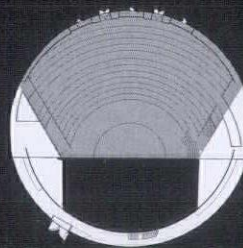
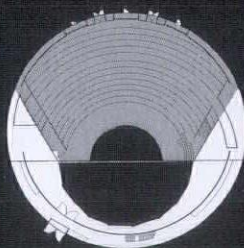
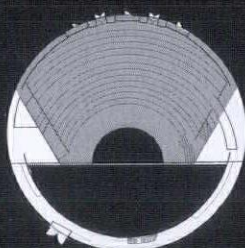
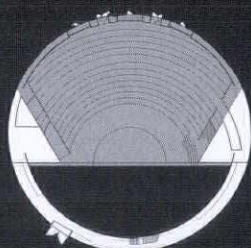
The most interesting review of the performance was by Masatoshi Sato, comments which I thought also applied to the characteristics and possibilities of the facility. He wrote; "I have seen many of Min Tanaka's performances on white sanded outdoor stages, but this was the first one I had seen in a

theater setup. It was a well ventilated secret chamber. There was darkness full of light, and density with lightness. I discovered a completely new aspect of dance, a movie-like fortuity, which I never noticed in the outdoor performances, due to the confines of the theater. Furthermore, as Tanaka himself suggested, he responded to the specific stage environment being at the bottom of the high-ceilinged bowl space as if he was sensing the vastness of the universe."

市民シアターは、現代のテクノロジーによってつくられた、天空の下の原っぱのような演劇空間を目指している。初源的生命力をもって創造される文化を生み出したいという思いから敢えてシアターとしての球儀を選択した。完成して数年を経て振り返れば、このシアターは球儀という建築の形そのものがソフトプログラムを生み出していると言えるだろう。ここでつくられたいくつもの作品は、例えばMODEの〈わたしが子どもだったころ〉、勅使川原三郎さんの〈ダーダスコ・ダーダ〉などは、この劇場のためのオリジナルの演出が施されていて、それぞれ湘南台版と名付けられている。舞台上に人間が小さく見

えるほどのクレーン車を持ち込みたいと、構造上のチェックを依頼されたことから始まった田中泯さんの〈春の祭典〉(湘南台版)もそのひとつである。配付されたチラシには、球儀のシアターの黒い室内空間が大きく印刷され、空間への挑戦を試みようとするすさまじいまでの意気込みが感じられるが、コンペ時にプラネタリウムの球儀を地球儀、大気観測所を月球儀、そしてこのホールを宇宙儀と名付けた経過があるので、私は泯さんが本気で宇宙へ向けて踊るのではないかという気がした。

この〈春の祭典〉のいくつもの批評の中から最も興味深いのは、佐藤正敏さんの批評であり、それは同時にこの建築の特徴と可能性を捉えたものといえる。「田中泯は白州の地で野外では何度も見ているが、劇場では初めてである。そこは風通しの良い密室だった。そこは光に満ちた闇であり、軽やかな濃密さがあった。映画を連想させる偶然性、つまり、白州の野外では全く感じられない新しい見え方が生じたことは劇場という密室性、しかも天井の高いスリ鉢状の底が舞台という劇場空間にあらかじめ田中泯がチラシで指摘していた通り、広大な宇宙を感じた彼の感性がそのスペースの固有性に応えたからだ。」





# Ever-Evolving Talent of Hasegawa

Peter Cook

My first visit to Japan was in 1979—ostensibly to judge the *Shinken-chiku* House Design Competition and to give some lectures. This had all been set up by Arata Isozaki with (I suspect), two or three coincident motives. First, to reveal to an “Archigrammer” that Japan was the natural culture for the expendable and toy-like environment. Secondly to introduce to the “correct” end of the Tokyo architectural world the idea of a serious European designer and teacher who could laugh at himself at the same time as being part of an old and ongoing culture. Thirdly to push forward the personal contact of people with parallel ideas across (what was then) a rarely-travelled connection. His old apartment was small and snug: still the same one that he had inhabited as one of Tange’s “bright young men.” It seemed consistent with such cosiness that he should ask round some of his younger colleagues. Toyo Ito, Hajime Yatsuka, Riken Yamamoto, Kikko Mozuna and Kazuhiro Ishii were there plus one girl architect—Itsuko Hasegawa who was clearly one of a relaxed group of friends who giggled and gossiped a lot. Who had clearly met many times before and who gave me the distinct feeling of familiarity.

A familiarity with the notion that the most creative and inventive young architects are good gossips and good exchangers of ideas whilst still being people who take their art seriously. A familiarity with the atmosphere of intrigued-ness and, at the same time, fellow-feeling for another young architect who just happened to come from another city. The next day I looked up all the published material on these new friends. I guess I asked Arata for the “lowdown” on them as well. Hasegawa’s work was the coolest of the group. Neither as literary as Ishii’s nor as exotic as Mozuna’s. She was not so effusive about robots and skins as Ito. Just a clear, cool designer.

Two years and then six years later he more-or-less repeated the party. During which time I consciously followed the progress of these architects. Surely they separated-out. But just as surely I realised the combination of perception and generos-

seniority would have willingly and coercively thrust such talented younger colleagues into the network. I passed on their credentials to other Europeans. Some of them began to show up in London or Frankfurt or Scandinavia. I began, at the same time, to re-group them in my mind. Yatsuka as not quite so much the scribe, the commentator but also more of a freewheeler himself. Ito combining many of the ideals of the Archigram world with an elegant—almost eerie—style of wispy space. Hasegawa starting to be curious. Curious with form and composition. Curious with iconography. Curious with the shape of edges. She began eating into surfaces. Eating into the biscuit-like veils of mesh. Pushing them up into space. Was this the same cool designer. Now equally clear but less circumspect?

If one takes the “House in Kuwabara, Matsuyama” as a starting-point in a series, one can see a certain progression via the “NC House” (in which, I believe, Itsuko lives) through the “House in Shimorenjaku” and towards the “KK House.” They work within the modest field of making houses (or housing) so they clearly have budgetary restrictions; yet they progressively “take off” . . . as if to set up an increasingly light and dreamlike world in which the mere business of resting and looking is both framed and released by a form of pictorialisation that few living architects can make. One inevitably searches for clues in Itsuko’s own personality. In her increasing confidence and toughness—as she develops as an architect—but allied to (perhaps) a revelation of the child within.

Now, in many “correct” architectural circles the mention of such things as “dreams” and “lightness” and the “child within” might be seen as a put-down. In my book, it is quite the reverse. It is very difficult to spin a flowing cobweb across a surface without it looking merely “decorative.” It is difficult to progressively release the constraints of placing, geometry or consistency, over a series of buildings, without them getting (progressively) out of control. To do such things needs talent, wit and nerve.

From the European viewpoint, we like to

architects of talent. A few less of wit. And measurably few less still of nerve. And yet the culture of Japan; with all its paranoias, observances, niceties of behaviour and sexism seems an unlikely breeding-ground for such an approach to be made by such a person. Her first lecture at the Architectural Association was a case in point. Here was this small, giggly lady who could clearly design with immense freshness and power. Without the advantage of direct speech since she always needs to be translated. Her charm and her humour came through to a hot and blase audience. At the Bartlett in more recent times she has had the advantage of a steady build-up in exposure, and most of all, the exhibition which two and half years ago showed how much control was involved in the making of her works. The exhibit, its models and graphics, had all such a special air of *construction* that even the slowest or youngest student could appreciate and which the quickest and most sophisticated could still envy.

Naturally, there is the categorisation that comes through via publications and lecture-lists. If Isozaki, Fumihiko Maki, Kazuo Shinohara and Kisho Kurokawa read as a certain generation and a certain power (however little they may speak to one another), the same is true of Tadao Ando, Ito and Hasegawa. In a way, we can remove Ando from the “younger” group; his terms of reference are clearly different and his audience always consists of those who are seeking *perfection* and formula for the making of *beautiful* space. My italics are here because for me, such objectives are there in the buyer of the Armani suit. Somehow, neither Toyo nor Itsuko have the same appeal. Thank goodness they do not. Hasegawa’s work in particular shares a characteristic that (for me) is found only in the GREATS of twentieth century architecture. Think of Gunnar Asplund, Ralph Erskine, Frank Lloyd Wright or James Stirling . . . Frank Gehry or Eric Owen Moss. They sometimes make *howlers*. (An English cricketing . . . or is it theatrical . . . expression for something that you would rather forget about). For most of them; one good building, one mediocre and one



one. In Hasegawa's work the howlers *do* exist, but on a much rarer incidence . . . and then, *wrapped amongst* parts of a whole building. Am I saying her work is patchy? No. For it is strong and vehement. Rather am I saying that her work is experimental. With the corollary that experiment leads past varying consistency and a certain game of chance.

The key building, for opening-up these conversations, has to be the "Shonandai Cultural Centre." It is unbelievable. It is so raunchy and naughty and has real *sillies* . . . like three balls! Except, of course, that they're not sillies at all. The balls exist like the great dome of the Taj Mahal or Big Ben as key icon. Moreover, the interior interpretation has bypassed the expected shoe-horn level of the built interiors of Sydney Opera House; they work and are consequent within the figuration of the whole. The girl runs around her mountainous (metal) outcrops. She runs along her river-bed into a land of flowing form and deliciously well contrived layers of space and creeping reflections. Moreover, the plan is extremely easy to understand and to use. Isn't it amazing that so many dreary and straight architects create buildings that are not easy to identify with (or within)? Isn't it amazing that such buildings are often a muddle to use . . . and are unmemorable anyhow? The clue, surely, is that Itsuko has worked through straight buildings . . . she can make them elegantly . . . remember my first impressions? And then, she has come through . . . out the other side.

In her office, a few months ago, there was a scheme being designed (I honestly cannot remember what it was for . . . but some large cultural complex or other) and there were these *naughty things* forcing their way up through the slab of *useful* accommodation. On closer examination, I have no doubt that naughties will be just as thoroughly workable as the more obviously "useful." What is being demonstrated is a clear discrimination between high figuration and self-created context. You bring your 21st century city with you (in such a large scheme) and then build up your own equivalents of the historical castle, temple or cathedral.

I get the impression that Japanese architects and Japanese critics are exceedingly anxious to know how they are regarded by Europe or the U.S.A. They have surely missed the point; that Japanese architecture, already, 20 years or more ago, had moved passed the point of needing to verify its level of sophistication, literacy or invention. Yet if I must, for the record, make a statement about Hasegawa as a historical phenomenon I must beg that she is not forced into comparison with a non-Japanese person. Wright was a demagogue, Gehry is a Jew, Zaha M. Hadid is a cosmopolitan and a bit of an exile . . . deep down). These things bring pressures, cause responses, set up, for the creative persons concerned a series of yardsticks, role-models and (as in Don Quixote), windmills to tilt at. In Japan, some pieces of luck; the calmness and essential intellectualism that combines with naughtiness too is the way of Kazuo Shinohara, and no better "teacher" could have existed for the young lady and her friend, Ito. The politicism and intellectual thrust of Isozaki (also acting as a forceful juror on key competitions) certainly upsetting the calm, heirarchical Japanese scene and supporting the Shonandai project. A moment in history when it became a relaxed thing to use the new materials and the cheap materials whilst remembering the calm and filigree atmosphere of the interior. Without more than necessary reference to *Modernism*. So Itsuko Hasegawa is a new kind of model for us. One who has the chance to consolidate the national mannerism of the new architecture. Far harder, in a way, for the young Kazuyo Sejima, who has chosen coolness and deft placement as *her* trajectory. Time will tell whether Sejima has Hasegawa's humour. Others will, of course, ask whether she needs it.

Yet for me humour is the basis of witty conditions in architecture which are themselves at the core of invention. There is a marvellous realisation that the top surfaces of the "Cona Village" are both a parasite architecture existing on the crust of the "real" architecture, but also that we cannot be absolutely sure *which* of the two is the true (or generic) architecture. This business of throwing two or more "architectures" in

the air and then letting various elements of the two-or-more settle in space is also a characteristic of Enric Miralles's work. Another fearless architect . . . another who has the occasional "howler" buried in the wall, or poking out of an embankment.

Two Tokyo buildings remain from the last three years as facets of Itsuko Hasegawa's internal juggling between succinctness and volubleness. Both are city buildings but not "downtown" buildings. The first, "STM House," seeks to create a skin of such clarity and calmness-with its own special coloration that the most bored office worker can reach beyond the confines of the word-processor or the filing-tray. The world is skinned in a constant spring season. The Sumida Culture Factory is also wrapped, but more loosely; the more complex brief is interpreted as a series of identifiable functional elements; with each *speaking*, but all *ensnared* to some extent, by the mesh or web. In a part of town that offers nothing special, there is this constant hint of the specialness of *where they are*. In having started a description of these two buildings as different facets of her consciousness-based upon being inside them and having a clear memory of the feel and the essential *parti* . . . now I find myself realising that she is-with both-a seeker of atmosphere. This aspect of architecture has been lost by many of her contemporaries who are only seeking form.

The clue is in the woman herself; she has burst through the barrier of modesty into immodesty. She has burst through the barrier of the foursquare into multi-formation. She has burst through the barrier of empty succinctness into an ability to make us . . . when inside her buildings . . . forget the limitations of the real world. She is an escape artist.

The others are just builders.

London August 1995

● Architect, UCL Bartlett Professor of Architecture



ピーター・クック／訳＝千葉 学

私が初めて日本を訪れたのは1979年、表向きは「新建築」の住宅設計競技の審査と、いくつかの講演を行うためだった。すべては磯崎新が取り計らってくれたのだが、彼には他にも2、3の思惑があったようだ。ひとつは、日本が、消費可能でおもちゃのような環境を生むにはごく自然な文化を持っていることを「アーキグラムのメンバー」に見せるため。ふたつ目は、今なお続く古い文化の一部でありながら、自らを笑い飛ばすことのできる、そんなヨーロッパの真面目なデザイナー先生のを、東京の建築界の「正しい」方面に紹介することであった。3つ目は、同じ様な考えを持ちながら、ほとんど交流のなかった（当時はそうだった）人達との個人的な付き合いを広げるためだった。磯崎が丹下の「若き逸材」であった頃から住んでいた古いアパートは、小さく快適だった。若い連中が彼のところに集まるのも、そんな居心地の良さからして、至極当然のことのように思えた。伊東豊雄、八東はじめ、山本理顕、毛綱毅曠、それに石井和紘がいたし、もうひとり、女性の建築家、長谷川逸子もそこにいた。いつもくすくす笑い、噂話をし、そしてリラックスしていた連中のひとりだった。それぞれが以前にも何度となく会っていたようだし、親しみやすいという印象は強く私の中に残った。

創造力と才能に満ち溢れる若い建築家達は、よく喋り、意見の交換をしながらも、お互いの作品を真面目に受け止めるといった、そんな思いを抱かせる親しみやすさを持っていた。何か企んでいるようで、それでいて、ひょっこり他の都市からやってきた若い建築家を、まるで仲間のように受け入れるてくれる、そんな親しみやすさだった。次の日、私はこの新しい友人に関するあらゆる出版物を調べ上げた。そう、確か（磯崎）新にも、彼らの「内情」について尋ねてみた。長谷川作品は、そのグループの中では最もクールなものだった。石井のように直喩的でもなく、毛綱のようにエキゾチックでもない。伊東のようにロボットや皮膜に固執しているわけでもない。まさに明快でクールなデザイナーだった。

2年経ち、さらに6年が経った。その間磯崎は時折パーティーを開いていた。一方、私はその建築家達の行方を意識的に追っていた。

彼らがそれぞれ別の方向に向かっていったのは明らかだったが、同時に、私は磯崎の知的で寛容に満ちた先導的役割をも、はっきりと認識するようになった。そうした若き才能溢れる建築家を、積極的にしかも強引にネットワークに引き入れようとする年長の建築家は、そうはいない。私も、他のヨーロッパの連中に彼ら売り込んだ。彼らのうちの幾人かは、ロンドンやフランクフルト、スカンジナビアなどで目にするようになってきた。それと時を同じくして、私は彼らを自分の頭の中で再度グループ分けすることを始めた。八東は著述家あるいは批評家というよりは、むしろ自由人だ。伊東は、アーキグラムの世界で生まれた数多くの概念を、優美で、ほとんど不気味とも言えるスタイルで、揺めく空間にまとめている。長谷川の動向は興味深くなってきた。その形態と構成が好奇心をそそった。そのイコノグラフィも、エッジの形もだ。彼女は表層を浸食していった。ビスケットのように丸味をおびたメッシュのベールへと浸食していき、そして空間へと拡張した。これが同じクールなデザイナーなのか。明快なのは今も変わらない。だが、用心深さといった呪縛から解放されたのだろうか。

一連の作品の中で、〈松山・桑原の住宅〉をその出発点とすれば、〈NCハウス〉（確かそこに逸子が住んでいると思うのだが）から〈下連雀の家〉、そして〈KKハウス〉へのある流れをそこに認めることができよう。それらは、住宅（あるいは集合住宅）をつくる上での慎重深さの範疇にある。つまり、予算の制約が明らかだ。それでいて、皆進歩的な「飛躍」を見せている。それは、驚くほど軽く夢見のような世界をつくり出している。この世界でも、ほんの限られた建築家のみが生み出すことのできる絵に描いたような形が、単なる休息や訪問といった行為に枠組みを与えつつ解き放つ、そんな世界である。人は、当然、逸子の人格に手掛かりを求めるだろう。それは、次第に自信と粘り強さを身につけ、つまり建築家として成長するにつれ、内に秘められた子供の部分が露呈してくることに（恐らく）関係しているのだ。

今や「正当な」建築の社会では、「夢」とか「軽さ」とか、あるいは「内に秘められた子

供の部分」などといったことを口にすれば、それはこきおろしているのだと取られてしまう。だが、私の話の中では全く逆だ。単に「装飾的」なものに陥らずに、表層を流れるような蜘蛛の巣を紡ぐのは、困難なことだ。配置の制約、あるいは幾何学や一貫性といったことを、一連の建物の中で、コントロールを（次第に）失わず、発展的に解き放っていくことはとても難しい。それには才能とウィットと度胸を要する。

私達ヨーロッパ人の視点で見回してみても、才能ある建築家が、幾人かいると考えたい。だが、ウィットを持った者は少ないし、度胸のある者はなおさら少ない。一方、日本文化が抱える被害妄想や慣習、立ち居ふるまいの繊細さ、あるいは性的差別からすると、こうした長谷川のようなアプローチも、そうそうあるとは思えない。AAスクールでの彼女の最初の講演がそのことをよく表している。そこには、計り知れない新鮮さと能力を持ち、明快なデザインを生み出すことのできる小柄で良く笑う女性がいた。彼女にはいつも通訳が必要だったので、直接話ができるといった恵まれた状況ではなかったが、彼女の魅力とユーモアは、熱心で多少のことでは喜びもするような聴衆にさえ伝わってきた。最近のポートレートにおいては、多くの人の目に触れながら、次第に自らの立場を確立してきたという点で有利ではあったが、それよりも何よりも、2年半前に開かれた展覧会では、彼女の作品制作の過程で、いかに上手くコントロールがされているかが十分に表現されていた。その展覧会は、模型も写真もそうした独特の構築の雰囲気を出して、それは、非常に鈍感な学生やまだ若い学生にも感知でき、それでいて鋭敏かつ洗練された者でさえ羨望のまなざしで見つめてしまう、そんなものだった。

建築家が出版物や講演を通じて分類されるのは自然なことだ。磯崎や槇、篠原や黒川をひとつの世代であり、ある勢力として見ることができのなら（たとえ彼らがお互いにほとんど話すことがないとしても）、同じことが、安藤と伊東、長谷川についても言えるだろう。見方によれば、安藤は「若い」グループからはずしてもいい。彼が参照するアイテムは明らかに違うし、またその聴衆も完璧と、そして美しい空間を作るための公式を求めるような人々たちだ。私はここで傍点を使っているが、その実体は、アルマーニのスーツを買うような人たちの内にあるものと同じだ。だが、何と言うか、伊東と逸子の魅力はそれと同じではなさそうだ。いや、ありがたいことに彼らは全く別物だ。特に長谷川の作品は、20世紀



の建築の名作に見られるような特質（私にとっての）を持ち合わせている。グンナー・アスプルンド、ラルフ・アースキン、フランク・ロイド・ライト、ジェームス・スターリング、フランク・ゲーリー、エリック・オーエン・モスなどを考えてみればいい。彼らは時にとんでもないものをつくる（英国のクリケットとか、あるいは、思い出したくもないような何か芝居じみた表現とか）。ほとんどの連中には、ひとつ良い建物が、ひとつ平凡なものが、ひとつ忘れ去ってしまいたいものが、そして、その他に秀逸なひとつがある。長谷川作品にもとんでもないものは確かにある。だが、それは本当にまれだ。そして、建物全体の部分部分の中に隠されてしまっている。私は彼女の作品が継ぎはぎだと言っているのだろうか。いや違う。なぜなら、それは力強く、生き生きしているからだ。私は、彼女の作品がむしろ実験的だと言っているのだ。当然の結果として、その実験は、過去からの一貫性に変化をもたらすし、ある偶然のゲームを生むことにもなる。

こうした会話の口火を切る鍵となる建物は、〈湘南台文化センター〉を置いて他にはあるまい。それは全く信じ難い。全く挑発的で、行儀が悪く、本当にばかっている。3つのタマなんて！ もちろん、それが全くの愚行であるわけではないが。その球は、タージマハールの巨大なドームやビッグ・ベンのような、鍵となるアイコンだ。おまけに内部の演出は、シドニー・オペラハウスの無理やり押し込まれた内部空間、といった想像のレベルを遥かに超越している。それは全体の中でうまく機能しているし、矛盾がない。地表へと露出した金属の山（小屋根群）のまわりを少女が駆け抜ける。少女は河床を駆け、流れ落ちる大地へ、楽しげにうまく仕掛けられた空間の層へ、ゆらゆらする反射の中へと消えて行く。それでいて平面は、驚くほど理解しやすく使いやすい。アイデンティティのない（内部においてさえ）建物をつくる、陰気で真面目な建築家が何と多いことか。それでいて、そんな建物に限って混沌として使いにくく、どうやって記憶には残らないというのは驚きではないか。逸子が明らかに筋の通った建物をつくってきたこと、それが出発点だろう。それを彼女は優雅につくり上げるようになり、そして私の第一印象を覚えているだろうか、そう、彼女は対岸へと突き抜けたのだ。

2、3ヵ月程前、彼女の事務所にはデザイン真っ最中の計画があった（正直言って、それが何であったか思い出せないのだが、確か大きな複合文化施設か何かだった）。そこに見たのは、使いやすい施設のスラブを無理やり突

き抜けているその行儀の悪いものだった。よく見ると、その行儀の悪いものは、見るからに使い勝手の良いものと同じく、十分機能するだろうことは疑いようがなかった。そこで明らかにされていたのは、高度な造形力と自らが生み出すコンテキストの明確な識別である。あなたはこういった大きな計画を通じ、あなた自身であなたの21世紀の都市をつくっていく。そして歴史的な城や寺院や教会にも匹敵するあなた自身のものを築き上げるだろう。

日本の建築家や批評家は、自分達がヨーロッパやアメリカでどう受け止められているかについて、非常に神経質であるという印象を受ける。だが、それは明らかに的はずれだ。日本の建築は、その洗練の度合、あるいは解釈や表現の力、その発想に関し、何か実証しなければならぬ時期は、20年あるいはそれ以上前に過ぎ去っている。だが、もし私が記録に留めるために、歴史的な現象としての長谷川について何らかの言明をせねばならないのなら、彼女が日本人以外の人との比較を強いられることのないようお願いしたい。ライトは民衆扇動家。ゲーリーはユダヤ人、ザハ・ハティドはコスモポリタン、本質的には亡命者のきらいもある。こういったことは、一連の評価基準を懸念する創造的な人たちにプレッシャーを与えるし、何らかの反応も巻き起こす。また、その役どころ、あるいは（ドンキホーテのように）仮想に戦わねばならない敵を仕立て上げることにもなってしまう。日本において幸運なことは、冷静さ、あるいは行儀の悪さと結び付いた本質的な知的主義を持つ、篠原一男がいたことだ。若き女性（長谷川）やその友人の伊東にとって、彼以上の良き「先生」など存在しようがなかった。磯崎の政治主義と知的攻撃（重要なコンペにおいて、強力な審査員としても活躍すること）は、確実に冷静で階級的な日本のシーンを攪乱し、湘南台の計画を支持した。内部の落ち着いた、そして繊細な雰囲気を感じてみよう。それは、新しい素材や安価な材料を安心して使えるようになった歴史の瞬間でもある。モダニズムへの必要以上のリファレンスもない。そう、長谷川逸子は、私達にとって新しい類のモデルなのだ。新しい建築が抱える国家的な型ともなりつつある手法を、より確実なものとしていくチャンスを持つ人だ。やはり自らの軌跡として、クールで巧みな位置付けを選択した若き妹島和世にとっては、ある意味でより大変だろう。妹島が長谷川と同じ様なユーモアを持っているかどうか、時間が教えてくれる。もちろん、彼女にそれが必要なかどうかと言う者もあるだろうが。

しかし、私にとってユーモアは、やはりウィットに富んだ建築のあり方としての基本である。つまり、それが発想の核なのだ。〈コナ・ヴィレッジ〉の最も外皮に近い部分は、「本当の」建築の殻に寄生する建築であって、それでいて、そのふたつのうちのどちらが本物の（あるいは一般的な意味での）建築であるかに絶対的な確信を持たないような建築である。それは驚くべき事実だ。ふたつの、あるいはそれ以上の「建築」を宙に投げ出し、ふたつがそれ以上の様々なエレメントを宙に漂うがままにしておくという仕業は、エンリック・ミラーレスの作品の特質でもある。同じく恐れを知らぬ建築家であり、時として「とんでもないもの」を壁に葬り去り、また土手から突出させる、そんな建築家だ。

寡黙さと饒舌さとの間を揺れ動く長谷川逸子の内面的な様相の表われとして、東京にここ3年のうちにできたふたつの建物を挙げよう。両方とも繁華街に建つ建物というわけではないが、都市的な建物だ。まずSTMハウスは、そうした明快で冷静な表層を、独特の色彩とともに生みだそうと試みている。それは、退屈きったオフィスワーカーでさえ、ワープロや書類トレイなどの世界を飛び超えていけそうなものである。世界は包まれ、いつも春のようだ。〈すみだ生涯学習センター〉も同じように包み込まれている。だがそれはもっと緩やかだ。より複雑な内容は、識別可能な一連の機能の要素として捉えられ、それぞれが発言しつつ、それでいてある程度メッシュや蜘蛛の巣で交感させられている。何の変哲もない町の一角にあって、それは自分たちの居場所を特別な暗示として発信し続けている。私はこのふたつの建物を、彼女の相異なる意識の様相として説明し始めた。しかし、その内部空間において、そこでの感触と本質的な原イメージを、はっきりした記憶として手繰り寄せてみる、そう、やっと私は理解し始めた。彼女はいずれの場合でも雰囲気探究者であるということだ。建築のこうした側面は、ただ形のみを追及してきた同世代の建築家の多くが見失ってきたことだ。

手掛かりは、女性である彼女自身の内にある。彼女は、憤り深さの領域を突き破り、傲慢ともいえる域にまで達した。実直の域を超え、多構成へ。空虚な簡明の壁を突き破り、そして一度でも建物の中に入れば、現実の世界の境界を忘れさせてくれる、そんな才能さえ身につけた。彼女は、逃走し続ける魔術師だ。

他は皆、ビルダーに過ぎない。  
●ピーター・クック／建築家、ロンドン大学バートレット校教授



# House in Kumamoto

Kikuchi, Kumamoto 1986

## 熊本の住宅

Three sides of the 800 square meter property are defined by streets. To create a large garden in the southeast corner, a simple linear arrangement of rooms along the west and north property lines, connected by a large hall facing the garden, was created. The entrance is placed on the northwest corner, opposite the garden.

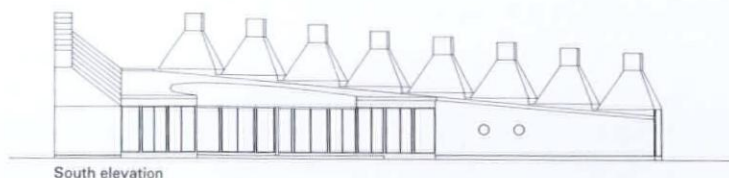
The rooms in the north wing, under a series of small roofs, are daily living quarters for the owners. The west wing is designed as guest quarters for their parents who visit every weekend from the city. The living rooms face the garden through the totally glazed hall. Diagonally latticed movable partitions divide the rooms to create smaller air conditioning zones. Each room is equipped with a skylight and receives borrowed light through the hall. The hall is expansion space for larger gatherings as well as a major circulation node. It is a semi exterior space attached to the vined trellis outside. It can be fully opened for ventilation in summer, and closed in winter to act as passive solar energy storage.

The wings are of wood box frame construction on which small roofs made of panelized structural plywood were placed by crane. The hall is of steel frame construction with a low pitched metal deck roof. A half-circular opening for the trellis gives it horizontal rigidity. Vertical loads are carried by 90mm diameter steel pipe columns and wood framing. Horizontal loads are transferred to the two wings.

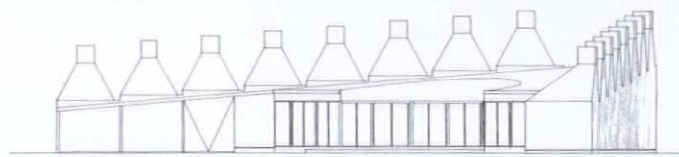
三方が道路で、300坪という敷地に東南に広い庭園を残すために西と北面の道路沿いに各室を並べ、それらを南の庭側のホールで結び、庭に対角の北西の角を入口とした明快なプランを持つ。小屋根の下の居室は北ウイングがクライアントの日常生活エリアで、西ウイングが市内から週末を過ごしに来るご両親のためのゲストエリアとなっている。これらの居室は全面ガラス張りのホールを介して、庭へ臨むものである。その間を斜め棧張りのガラス建具で仕切ることによって各室の容積を絞って空調条件を保つことができ、採光は各室の様々な高さの違う筒状のトップライトからのソフトな光とホールの方からの奥深い明りを持つ。

ホールは各室への連絡空間であると共に、人が集まった時に茶の間や居間を拡張する場でもある。また、その外側で蓐子などの蔓棚のあるテラスと一体になっている半外室的空間で、季節の変化に応じて夏は開放して外室とし、冬は日光を十分蓄熱するパッシブソーラー的機能を持つ温室ともなる。

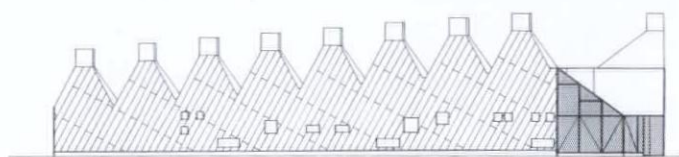
構造としては道路沿いに並ぶ小屋根群を支える木造部と、ホール、テラス部分の鉄骨造部とで構成されている。木造部は構造用合板と垂木によって二重に固められた小屋根を柱梁で組まれた段上の箱フレームの上にクレーンで吊り上げながら固定していった。ホール部分は緩勾配の屋根を軽鉄で組み、半円部のテラスに設けられたパーゴラを加えて、この部分の水平剛性を取りながら木造部のフレームと90度の鋼管でその荷重を支え、水平力を両木部に持たせている。



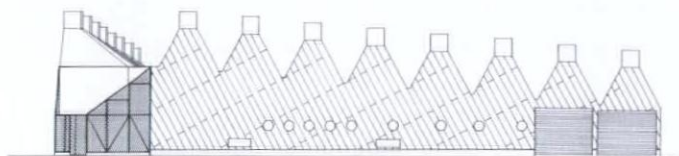
South elevation



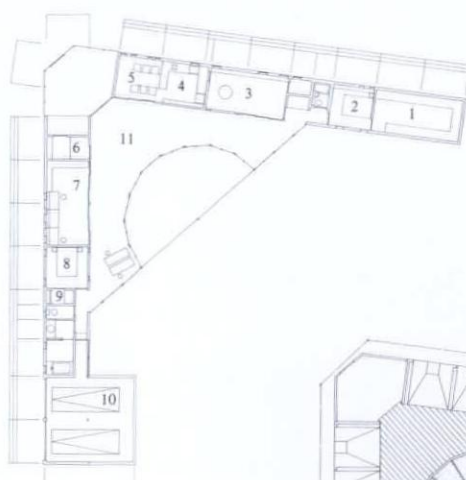
East elevation



North elevation

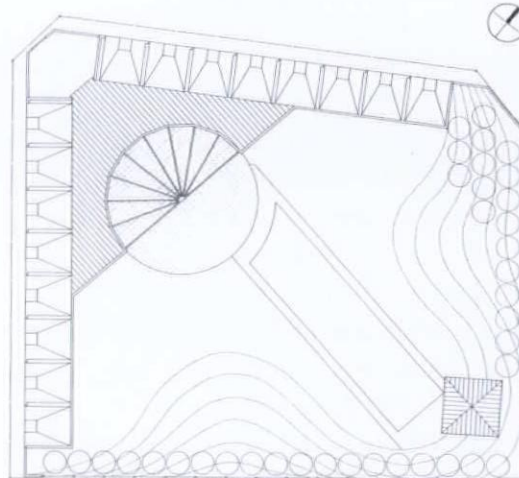


West elevation S=1:500



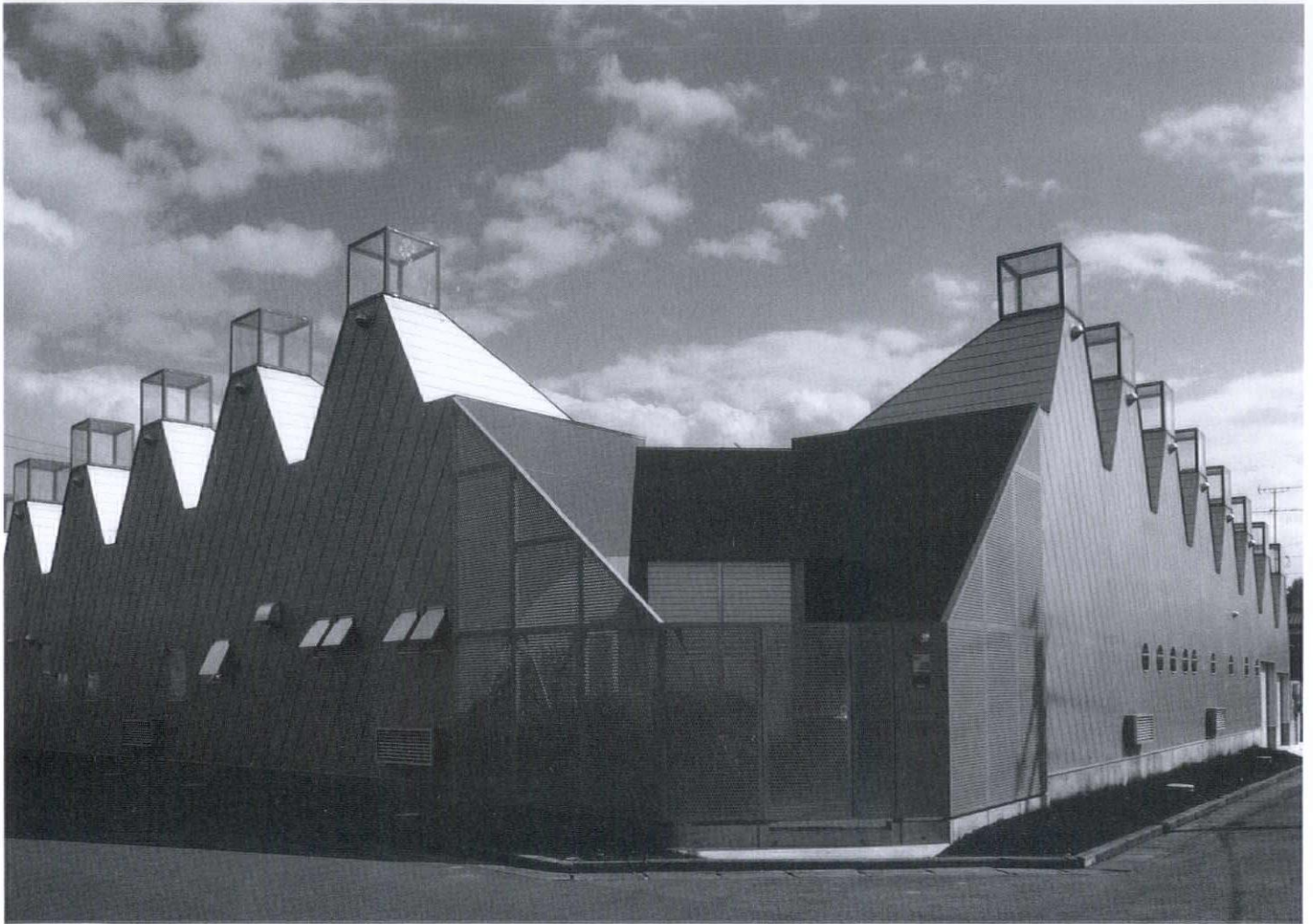
1st floor plan S=1:500

- 1: Closet
- 2: Bed room
- 3: Living room
- 4: Kitchen
- 5: Dining room
- 6: Entrance
- 7: Living room
- 8: Guest room
- 9: Cloak room
- 10: Garage
- 11: Sun room



Site plan S=1:500







# House in Nerima

Nerima, Tokyo 1986

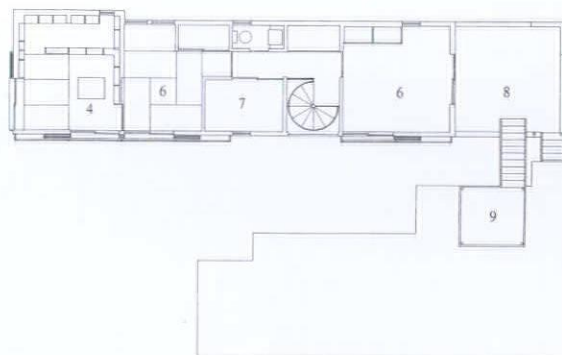
## 練馬の住宅

The house consists of two units; the main part for a novelist and his wife and the other part for their daughter who is an editor. The two houses share common entrance stairs and a courtyard, a second floor exterior room which is roofed and enclosed with perforated metal panels, and a moon viewing pavilion accessible by stairs from the exterior room. The pavilion commands fantastic views of the high-rise towers in Shinjuku and Ikebukuro, and even distant mountains including Mt. Fuji.

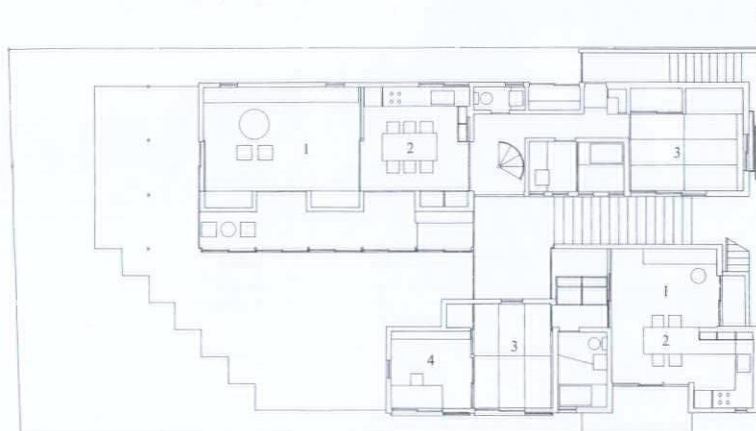
I often try to bring outdoor living space into house design. All of the three houses I designed in Matsuyama City have exterior rooms, but this is the first time I have used it in a Tokyo house. In Matsuyama, I learned that the exterior room not only adds physical space but also makes architecture become more strongly a part of the natural environment by projecting aspects of nature into the built form.

The design of the bedrooms is based on personal needs, but both living room spaces are defined gently from the outside world by white acrylic panels and perforated aluminum panel furniture, similar to shoji screens and wood lattices. They create twilight-like semi transparent space. The concrete basement box supports the wood framed upper structure and curved metal deck roof. The large wave-like main roof covers all of the spaces and objects below. The street facade symbolically expresses the ever-changing translucency of the architectural space.

- 1: Living room
- 2: Dining room
- 3: Tatami room
- 4: Study room
- 5: Sun room
- 6: Bed room
- 7: Storage
- 8: Outdoor room
- 9: Moon-viewing terrace



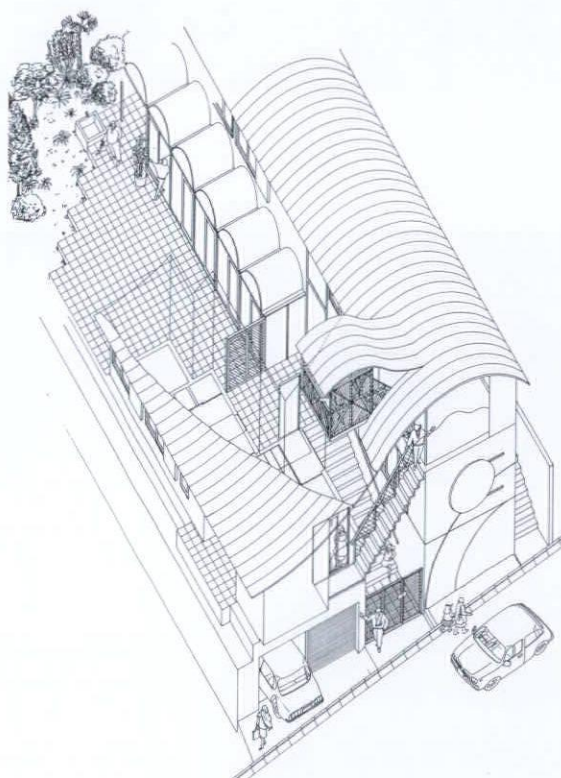
2nd floor plan



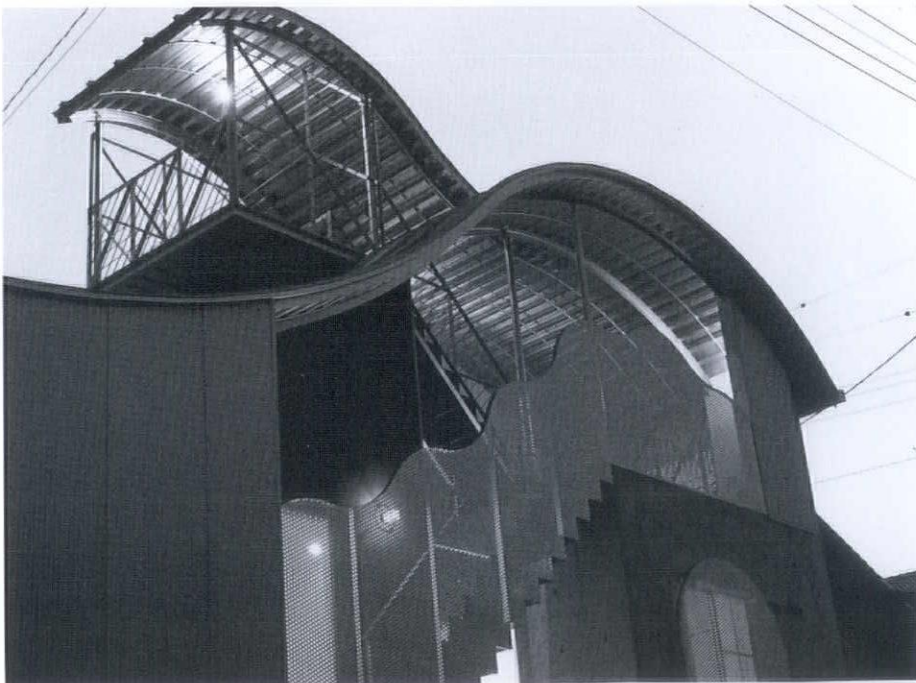
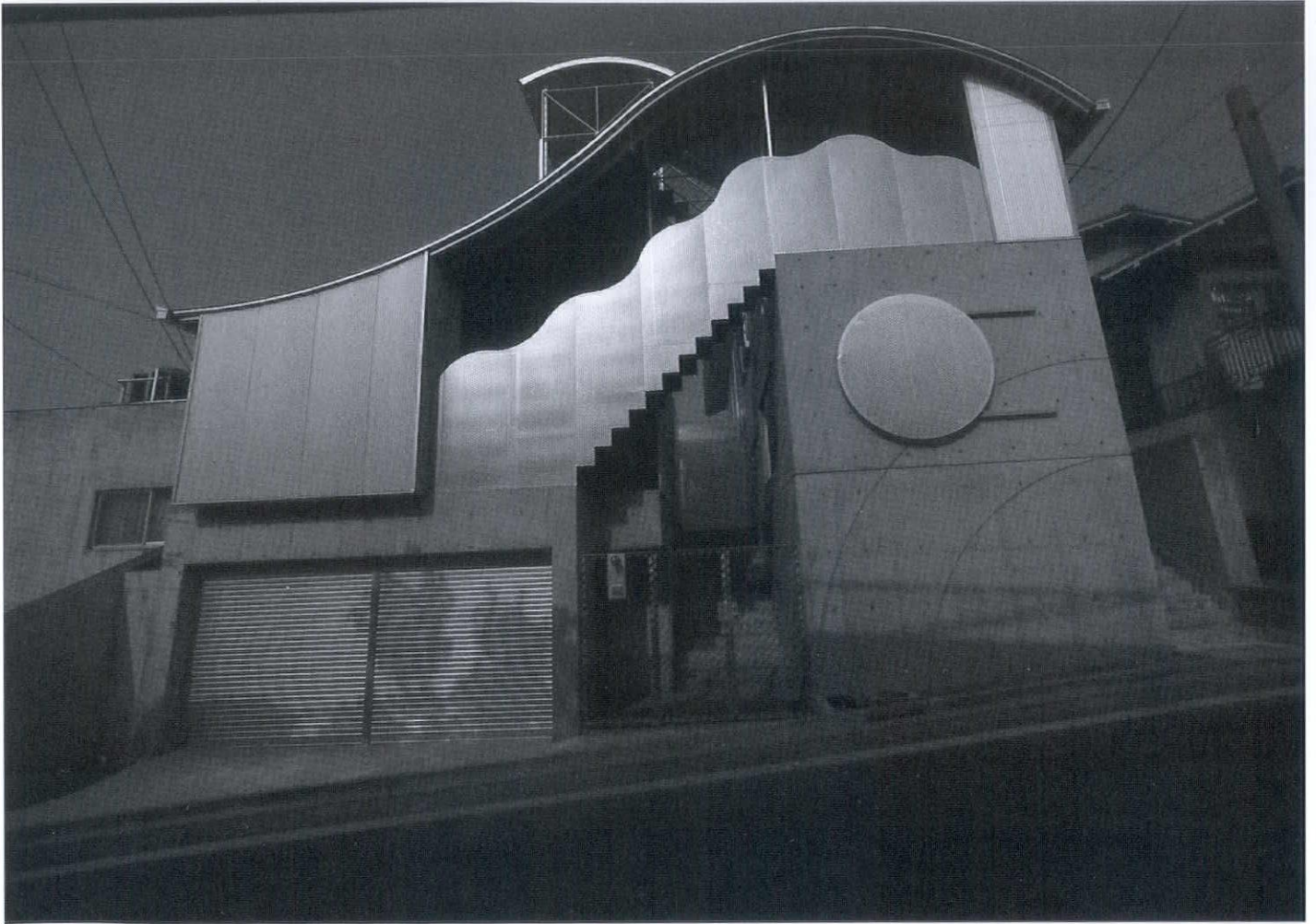
1st floor plan S=1:250

この住宅は小説家夫婦の主屋と同じ仕事を持つ娘の住宅部分とでできているが、ふたつの住宅を隔てる入口の階段や中庭、そして一度中に入って2階に上がると両方から共有される外室（屋根が架かり、壁は風が通るパンチングメタル張り）と、そこから上る月見台（そこには新宿と池袋の超高層や、遠くは富士山などの山々まで広々とした眺望が開かれている）がある。外で生活する機能を持ち込みたく、松山で以前つくった住宅は3軒とも外室を持っている。東京の建築では初めてつくったのだが、松山の建築を通して考えるに、単に空間に広がりができるというだけではなく、自然の相貌を映し出し建築が自然環境の一部であるということを外室は感じとらせてくれる。室内では個室はそれぞれの繊細な条件によってつくられているが、特に両方の居間は、障子や格子に似た白いアクリル板とアルミパンチングメタルの建具によって、外部と柔らかく隔てられた空間である。光を制御した半透明の薄明りの膜で包まれた空間ともいえるものだ。

地下部分の基礎を兼ねた箱はコンクリート造だが、地上部分の主構造は木造で、その上にスチールの連続するデッキプレート曲面構造の屋根を載せている。いろいろな空間や物体が並んでいる上に大きく1枚、波打つような感じに屋根を架けた。道路に面するファサードはこの住宅のそうした構成をそのまま表しているが、その面の中にパンチングメタルを導入したことで、終日変化する薄膜の半透明さがこの建築の有り様をシンボリックに表した。









# House in Higashi-Tamagawa

Setagaya, Tokyo 1987

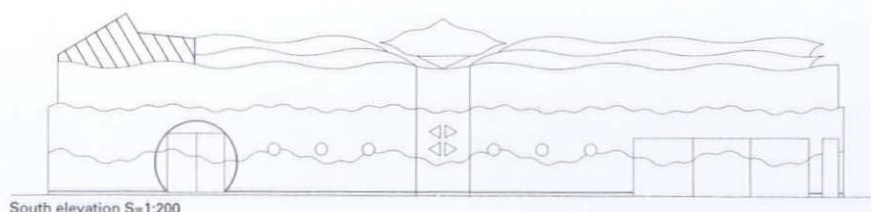
## 東玉川の住宅

The house is enclosed by concrete walls on both the south and west property lines for privacy to allow utilization of the entire site. The walls have joint lines in the form of waves or clouds with drop-like punched circular and triangular windows floating above the waves. The upper level of the roof garden and exterior rooms are expressed by the use of perforated aluminum screens. The two dimensional nature of clouds in an atelier in Tomigaya become three dimensional as the profile of a vined trellis exaggerates the effect of disappearing clouds. The exterior room at the corner is protected by a translucent canopy which seems to take flight.

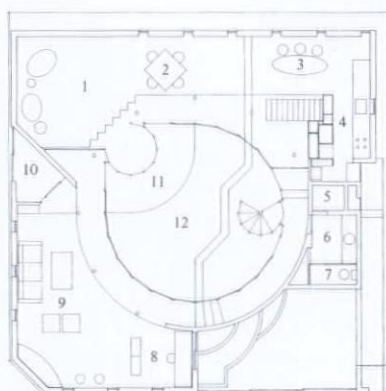
The overall exterior expression is a considerable departure from conventional houses. The structure is a mix of reinforced concrete for the basement and first floor, and wood framing for the second floor. In addition, along the circular courtyard, steel pipe columns (100mm diameter for the first floor, and 50mm for the second floor) are placed at 30" intervals. The horizontal thrust is transferred to perimeter concrete walls, thereby leaving the courtyard wall structure-free.

The first floor contains continuous circular space for dining, a bar, family and living areas. These functions are partitioned by perforated metal and translucent acrylic dividers. The L-shaped second floor along the east and north sides of the property has five individual rooms. The large terraced area on the south and west is bordered by planters for seasonal enjoyment.

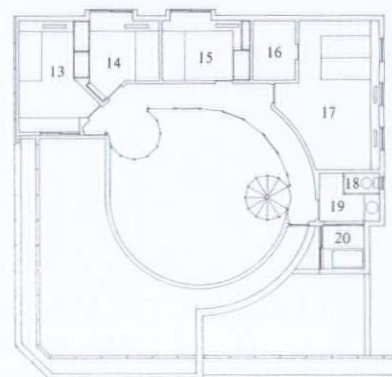
この住宅では南面と西面道路からの視線と騒音を防ぎ、敷地一杯のスペースを確保するため、1階の外面として塀のようなコンクリートの壁を設けた。この壁には、雲あるいは波を思わせるコンクリートの目地を施し、さらに水滴のような丸窓や三角窓が波間に浮かんでいる。その上部の屋外庭園と外室をつくっているパンチングメタルの面では、〈富ヶ谷のアトリエ〉で平面的に描いた雲、あるいは波のパターンをここでは蔓植物の棚としてつくり、さらに奥行き方向に配置したので、その輪郭が霞んで空中に溶け出すかのように見える。また、外室として利用する角部にはシースルーの日除けを配し、それは空中に舞っていきそうなシルエットを持っている。このようにして、外壁全体から従来の建築らしさを消去させている。構造としては、地下および1階がRC造、2階が木造の混構造である。さらに中央のサークルコートに沿って並んでいる上階のスラブを支える1階の100φの柱と2階の50φの柱はスチールである。そして、その鉄柱を30度ピッチに配し、水平力を敷地境界線に沿ったRCの外壁に負担させることにより、コートに向けては全面開放を可能にしている。1階はサークルコートを囲むような円環状の内部スペースで、食堂、バー、居間、応接などのコーナーをもつ。それらをパンチングメタルと乳白色の亚克力板の建具で仕切ることも可能である。隣地境界沿いの東側と北側にL型平面を持つ2階部分は5室の個室群であり、広いテラスの南側と西面には季節の花々を楽しむための蔓植物類が植え込まれている。



South elevation S=1:200

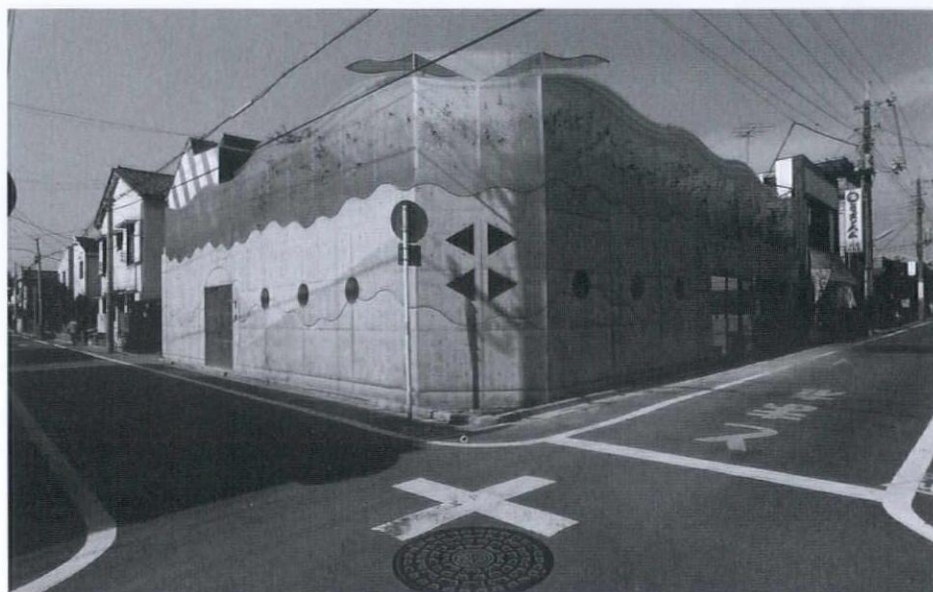


1st floor plan S=1:300

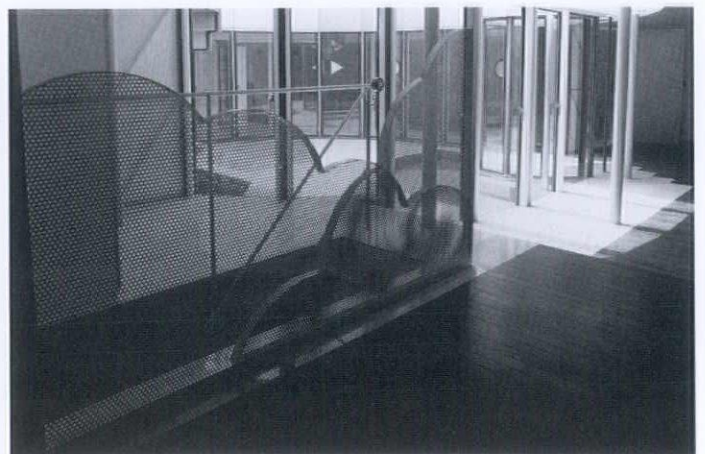
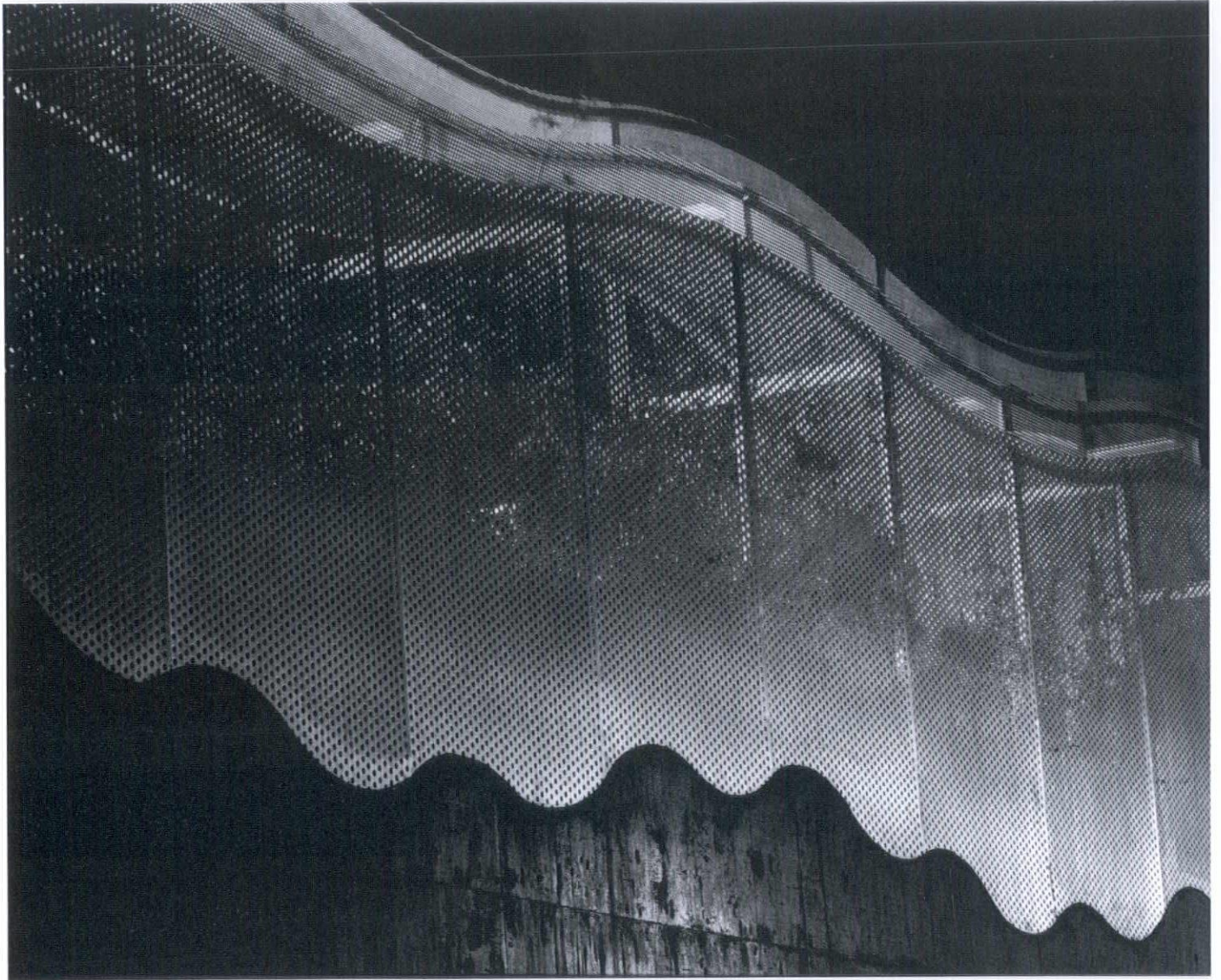


2nd floor plan

- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 1: Family room    | 11: Swimming pool |
| 2: Dining room    | 12: Court yard    |
| 3: Mini bar       | 13: Guest room1   |
| 4: Kitchen        | 14: Guest room2   |
| 5: Shower room    | 15: Guest room3   |
| 6: Powder room    | 16: Store room    |
| 7: Toilet         | 17: Guest room4   |
| 8: Den            | 18: Toilet        |
| 9: Reception room | 19: Powder room   |
| 10: Porch         | 20: Bath room     |









# House in Jiyugaoka

Setagaya, Tokyo 1988

## 自由が丘の住宅

Three rows of shallow vaulted roofs introduce north south ventilation to provide natural comfort to the house. The north elevation facing the street is composed of a main and a secondary entrance, a perforated metal screened driveway, and translucent FRP panels on the upper floor. The screen translates the outside landscape into a spectrum of pale colors like a soft tent space. Because of the nature of the materials, the front facade symbolizes a semi transparent urbanity instead of an alienating territorial rejection.

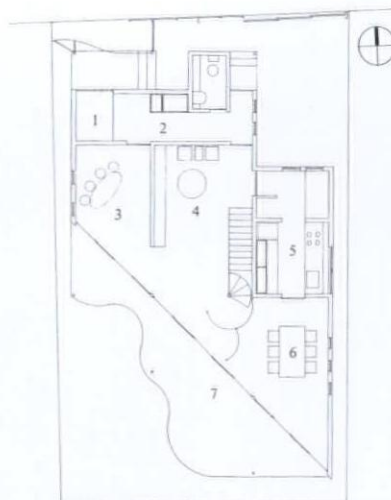
The south side of the house is provided with a wooden fenced patio with a wood slat floor for outdoor dining and relaxation to create a suburban-like space in the city. The south elevation is a juxtaposition of various forms and colors; the large angled glass wall, the wing-like vaulted roof edge, the silver eave-trough, the wood decked balcony, and its handrails and three support columns. They coexist without overpowering each other.

Interconnected dining, family and living rooms are arranged along the south wall to take advantage of natural light. A spiral stair leads to the second floor bedrooms under vaulted ceilings. The balconies on the both south and north sides provide shafts of light and wind. They break down the contrast of inside and outside spaces, and help establish "architecture as a natural environment" in the urban context.

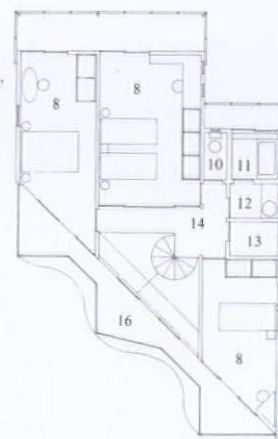
3本の緩いヴォールト屋根が象徴しているように、風の抜ける筒が南北に貫通しており、それは自然と柔軟に対応し、快適さを体感できる装置である。道路に面した北側の立面は、玄関や勝手口、そして駐車場回りの前庭をつくるシースルーのパンチングメタルの面と、上部の半透明のFRPのスクリーンとで構成されている。外部の風景は、このスクリーンを透過することによって淡い色味を帯びた虹色に変わり、内部に優しい膜空間をつくる。このパンチングメタルとFRPによるフラットな立面は、その素材の性格から境界線を限りなく空疎にし、半透明に開いた建築として都市性を漂わせている。

南側には、すのこ床と板壁に囲まれ半内部化した空間が設けられ、外の空気の中で食事をしたり寝ころんだりする生活を取り込んだ。これは都市におけるのどかな自然の演出である。ここでは45度に振られた長い開口ライン、斜めにカットされた飛行機の翼のような3枚の薄いヴォールト屋根の庇、そして2階の広いテラスのすのこ床と手すり、構造の3本柱とシルバーの樋などが複雑に交差し、それでいてそれぞれの形態を主張することのない建築をつくり上げている。

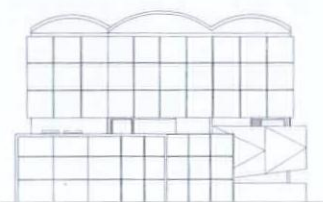
内部では、食堂、居間、応接のコーナーが広い外室に面して一体化され、拡がる光を内部に浸透させている。居間から螺旋階段を上がると緩いヴォールト天井をもつ3つの寝室に導かれるが、これらの部屋は南と北にテラスを持ち、風の筒、光の筒となっている。閉じて濃密なる内部空間をつくり、内部と外部という二項対立を生む手法を打破し、敷地全体を計画する中で、都市における「自然環境としての建築」を目指した。



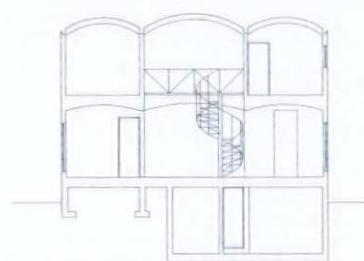
1st floor plan S=1:300



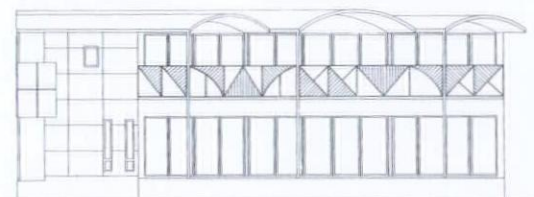
2nd floor plan



South elevation

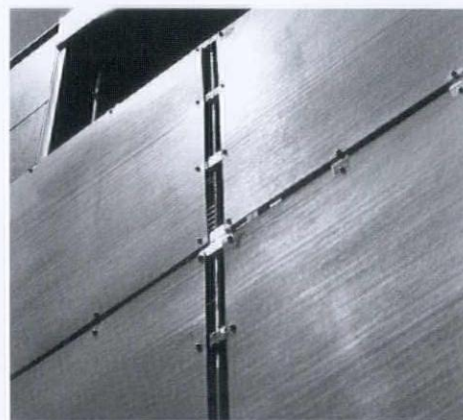


Section

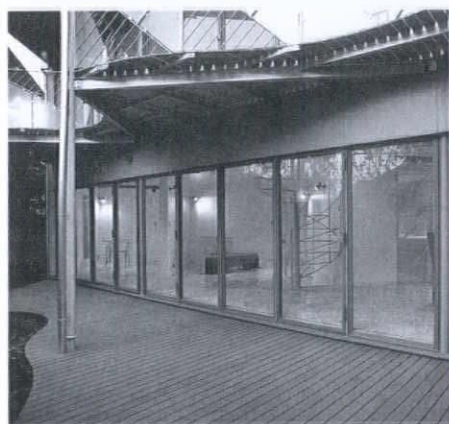
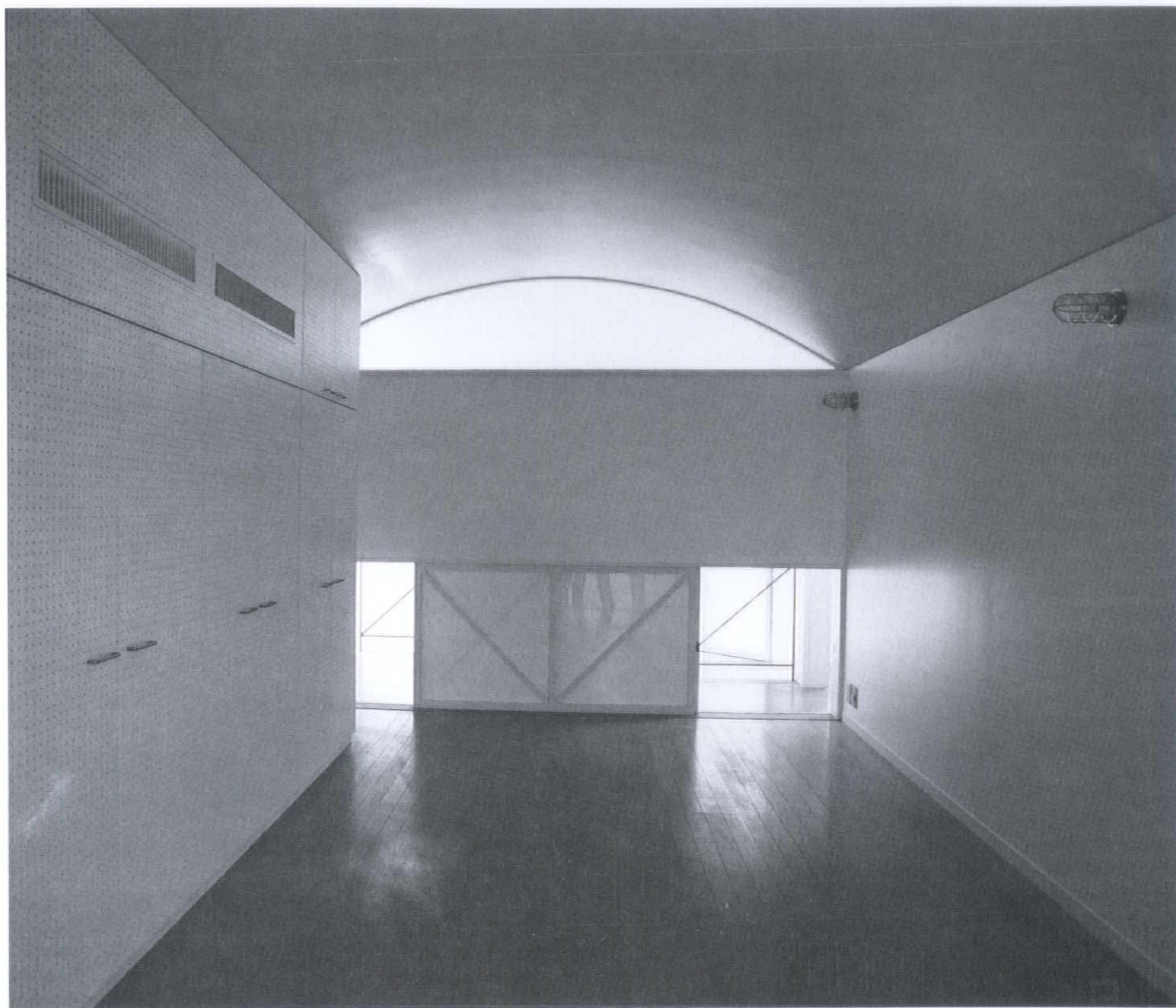


West elevation S=1:300

- |                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| 1: Entrance       | 8: Bed room     |
| 2: hall           | 9: Toilet       |
| 3: Reception room | 10: Bath room   |
| 4: Living room    | 11: Powder room |
| 5: Kitchen        | 12: Store room  |
| 6: Dining room    | 13: Hall        |
| 7: Terrace        | 14: Deck        |









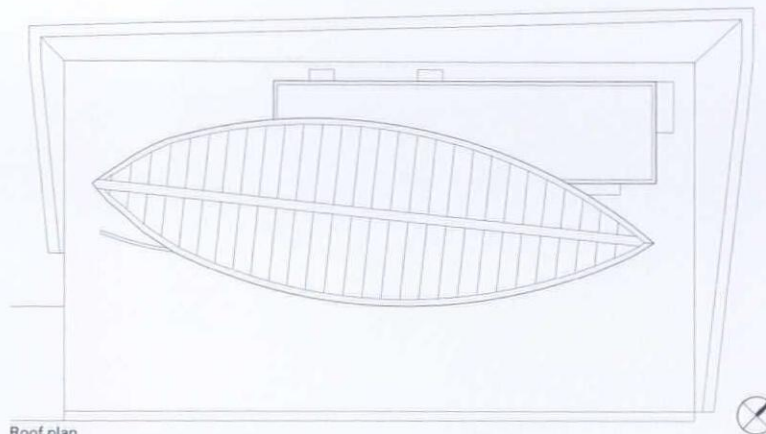
# Leaf House

Yamanashi, Yamanashi 1995

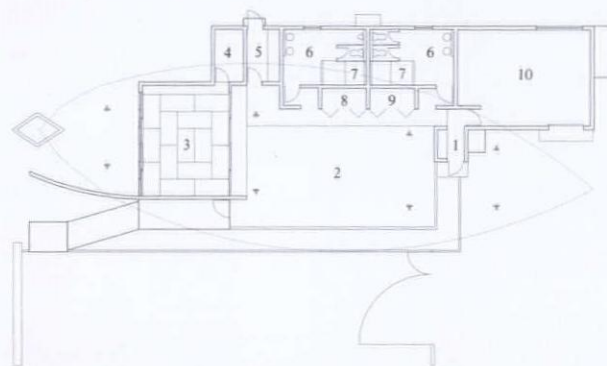
## 葉っぱの住宅

This building, located in the Fuefuki River Fruit Park (the site of Yamanashi Fruit Museum), was built as a facility for the maintenance of the park and a rest for the park employees prior to construction of the other park buildings. It was designed in the image of a falling leaf of a fruit tree. The leaf inspired roof is of steel construction. The triple steel column design directs forces in only axial directions which reduces member sizes. Concrete structural walls act as partitions and are visually separated from the roof structure by continuous glass clerestories. This structural and visual design is intended to express the idea that the roof is as light as a leaf.

この建物は、山梨のフルーツミュージアムの建つ笛吹川フルーツ公園の一角にあり、パーク内の果実の管理および、そこで働く作業員のための休息施設として、他の施設に先行して建設された。フルーツに関連させ、ひらひらと舞う落ち葉をイメージしている。葉っぱである屋根は鉄骨造であり、それを支える3本組みの柱は軸力のみを受ける構造としているため非常に細いものになっている。部屋を構成する壁はコンクリート壁構造とし、屋根とは構造を分け、屋根と壁との間にガラスを廻している。こうした構造上、意匠上の工夫により、落ち葉である屋根をより軽快に見せるよう意図している。



Roof plan



- 1: Entrance
- 2: Office
- 3: Tatami room
- 4: Storage
- 5: Kitchen
- 6: Rest room
- 7: Shower room
- 8: Mechanical room
- 9: Storage
- 10: Garage

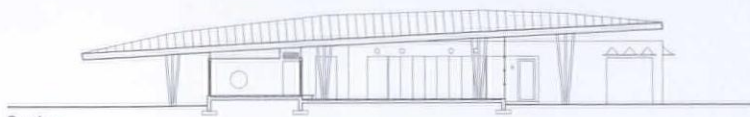
1st floor plan S=1:400



South elevation



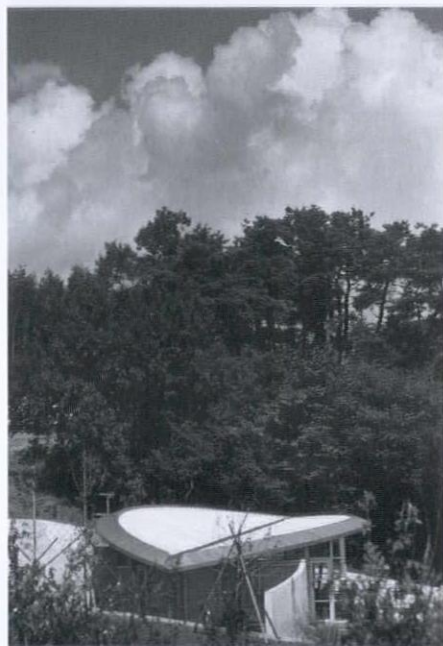
West elevation S=1:400



Section



Section S=1:400









# Shiranui Hospital, Stress Care Center

Omuta, Fukuoka 1989

不知火病院

Shiranui Hospital's "Sea Ward" is a treatment facility for mental stress disorders. The site is bordered by a river on the southwest, which has large tidal level changes. We intended to use the psychological healing effects of the river-shaped tidal basin and bring their positive impacts to the treatment spaces. It was hoped that surrounding the patients' five senses with the subtle, ever-changing yet constant rhythmic recurrence of tidal movement and accompanying light, temperature and humidity changes would ease their stress.

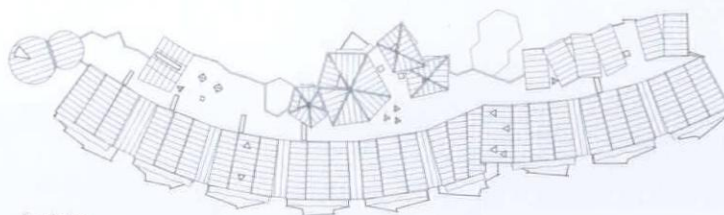
Most patients' rooms are arranged parallel to the river's edge. The wide balconies are reminiscent of the decks of ships. Along the axis of the patients' rooms, various auxiliary spaces are laid out. Exterior walls and roofs enclose individual functions in close segmental lines of curved forms with subtle offsets. The gaps of the offsets are clad with numerous fenestrations and their interior walls are painted in subtle pale colors. The result is that some interior public spaces, particularly the dining room, the corridors and the day room, which are more clinically important spaces than patients' rooms, are always filled with delicate fluctuating reflections of light on the water. Just standing in these spaces provides a feeling of idly watching the river flow. Each patient's room has four beds in order to create a sense of both privacy and community, where one can feel alone but not quite alone.

不知火病院「海の病棟」は、精神科のストレス疾患専用の治療病棟である。敷地の南西を流れる川は、以前は有明海の一部であったために潮の干満が激しく、みるみるうちに水位が変わる。この「川の形をした海」の持つ効果、人の気分を治癒するような力を病室を始めとする治療空間へ積極的に取り込んでいくことを目指した。不断の変化を繰り返しながら一定のリズムに回帰してくる海水の細やかな変化とそれに伴う光や気温、湿度の変化を五感で感じ取り、常にそれらに包まれることによって、ストレスから解放されることを意図している。

主な病室はできる限り川のエッジに沿って配列され、広いバルコニーに出ると船のデッキの上にいるような気分が味わえる。この病室群を基軸として、必要なスペースが接合される。建物の外壁および屋根は個々のスペースを包み込む不定形で滑らかな曲面が非常に細かな直線によって近似、分割され、ふれを与えられていて、その隙間には大小様々な数多くの開口部が設けられ、その効果を高めるように内壁は微妙な淡い色彩によって細かく塗り分けられている。これによって、建物の内部空間、特に食堂や廊下、デイ・ルームなどある意味では病室以上に臨床的価値を持つパブリックなスペースは、常に水面と光の変化による微妙なゆらぎやざわめきに包まれ、そこに佇んでいるだけでほんやりと川の流れを見ているようになりリラックスした気分になれる。

病室は4人部屋を基準とし、ひとりになることと皆で一緒にいることが各自の気分によって使い分けられるような、「ひとりになれてひとりではない病室」をつくる試みが行われている。

- |                               |                          |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 : Bath room                 | 12 : Shop                |
| 2 : Psychological Remedy room | 13 : Cafe                |
| 3 : Library                   | 14 : Entrance            |
| 4 : Terrace                   | 15 : Locker room         |
| 5 : Body sonic room           | 16 : Machine room        |
| 6 : Nurses' station           | 17 : Working remedy room |
| 7 : Ward                      | 18 : Tatami room         |
| 8 : Examination               | 19 : Dining room         |
| 9 : Day room                  | 20 : Living room         |
| 10 : Staff room               | 21 : Kitchen             |
| 11 : Meeting room             | 22 : Workshop            |



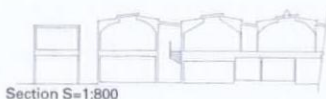
Roof plan



2nd floor plan



1st floor plan S=1:800



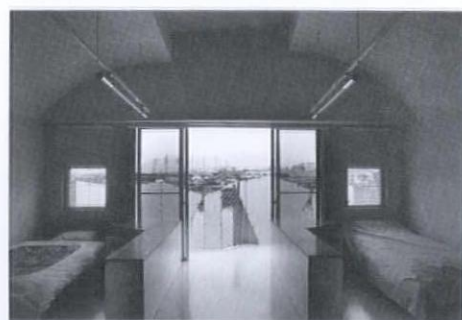
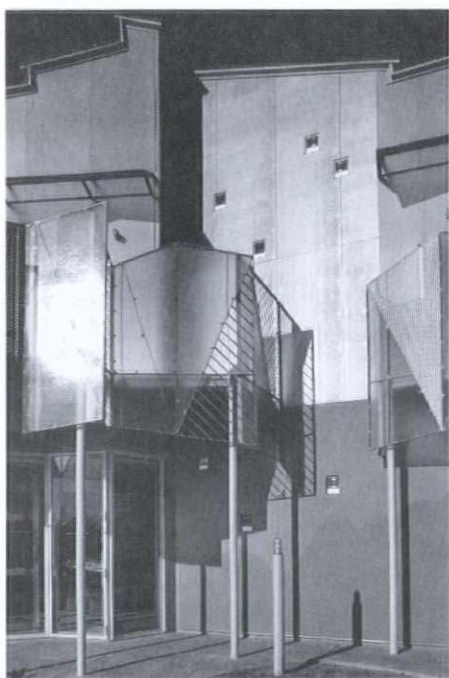
Section S=1:800



Section









# Sugai Internal Clinic

Matsuyama, Ehime 1986

菅井病院

The building is a seven story structure containing a clinic, housing for doctors and other employees, an entrance elevator and stair tower, and its connecting bridge. The wavy balconied facade form in the rear resulted from our desire to avoid mature trees. The multi-colored tiles respond to the seasonal color changes of nature (the light green of spring, the deep green of summer, the bright foliage colors of autumn and the dryness of winter), and reduce the visual size of the building. The lines of balconies are staggered from floor to floor, giving the visual stimulation of impressionist paintings, as if the building is melting into the woods. The complex wave patterns of the balconies provide various interpretations for viewers. When seen through trees, the building seems to be like forest spirits hiding with their eyes and mouths open.

The opposite elevation facing the commercial district incorporates patterns of imaginary trees which were cut down for development in an artificial and urban interpretation. Movable perforated aluminum doors are designed in the abstract form of leaves.

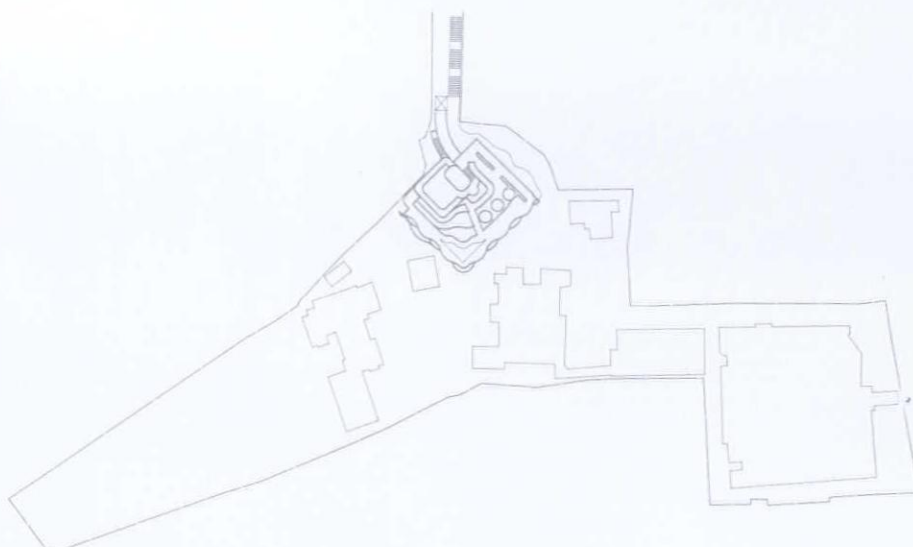
The roof space is used as the owner's private garden. Gabled wistaria trellises provide shelter from the streets and tie into the tree tops of the woods in the rear which in turn expand into the plateau of Matsuyama Castle grounds. All together it gives the owner a sense of living above the clouds which hide the top of the green mountain.

この建物は、医院と医師や関係者の住居等のための7層のメインブロックと、エレベーター室と屋外階段を持つサブブロックおよびそれらを接続するエントランス・ブリッジにより構成されている。

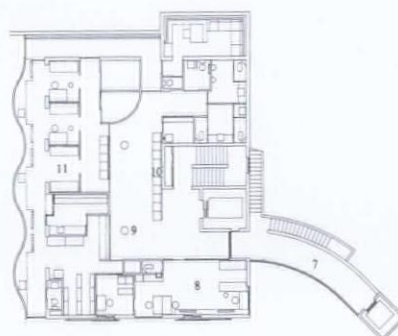
裏山の森林に接する面は、樹木を避けることから出た曲線であり、そこに波打つバルコニーを回してある。春の若葉、夏の新緑、秋の紅葉そして冬の枯れ木と城山の四季の変化に対応でき、そのヴォリュームをカムフラージュする迷彩色をつくることを、この多色タイルの使用では意図した。この境界は各階ごとにずれながら波打ち、7色のモザイクタイルのパターンは現実には印象派の絵に感じられるような網膜的刺激を生み、裏山の森林に建築が溶け出したような感じを与えている。波の重なりは見る場所によって様々なイメージを喚起するが、木立の間から見えるためか、ふと森の精霊があちこちに目と口を開けながら潜んでいるような思いにかられる。

これに対して商業地に面する立面は、以前切り倒されたであろう樹木たちの生まれ変わりとして、都市化し人工物化した樹木の姿をファサードとして捉えた。その上に散りばめられた可動のアルミパンチングの目隠し戸は、トランプマークと同じように抽象化された木の葉のモチーフである。

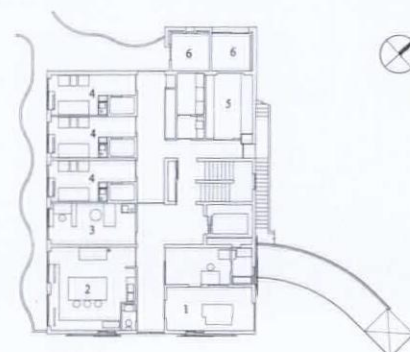
また、屋上はクライアント専用の庭園としてつくり、また同じレベルで森林の頂部に連なることによって裏山に広がっている松山の城山に重なって一体となり、まさに緑色の山の頂部にかかる雲の上に住んでいるような感じを与えてくれている。



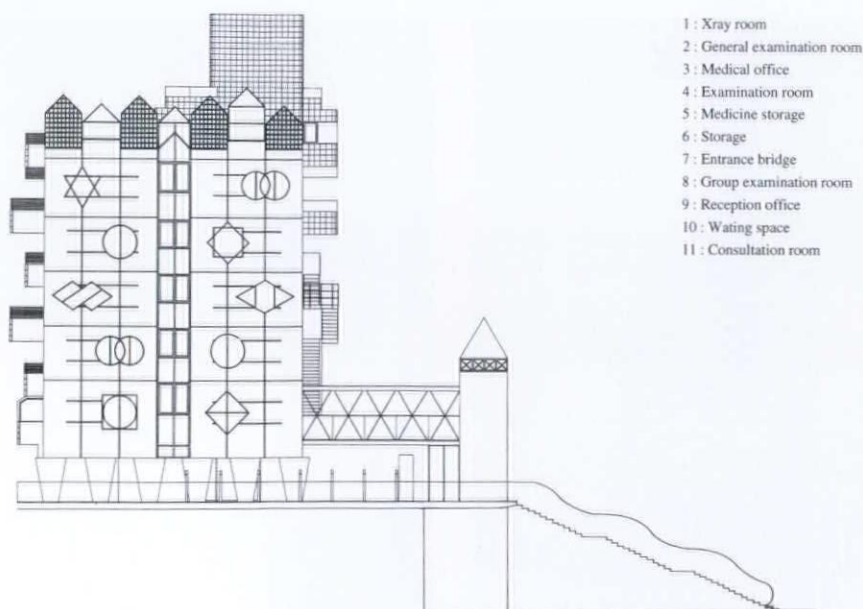
Site plan S=1:1200



1st floor plan S=1:400



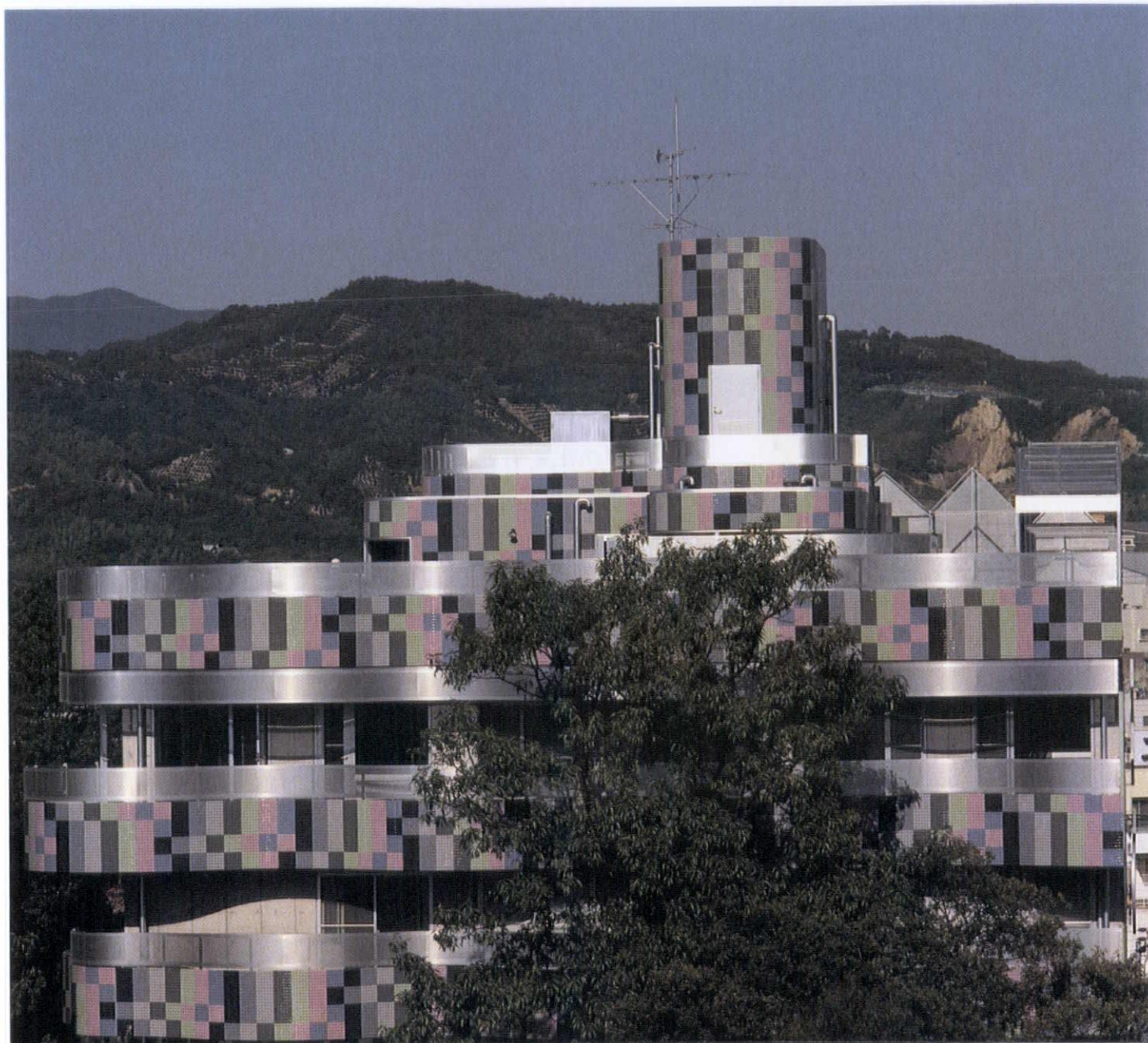
2nd floor plan



South elevation S=1:400

- 1: X-ray room
- 2: General examination room
- 3: Medical office
- 4: Examination room
- 5: Medicine storage
- 6: Storage
- 7: Entrance bridge
- 8: Group examination room
- 9: Reception office
- 10: Waiting space
- 11: Consultation room







# Cona Village

Amagasaki, Hyogo 1990

コナ・ビレッジ

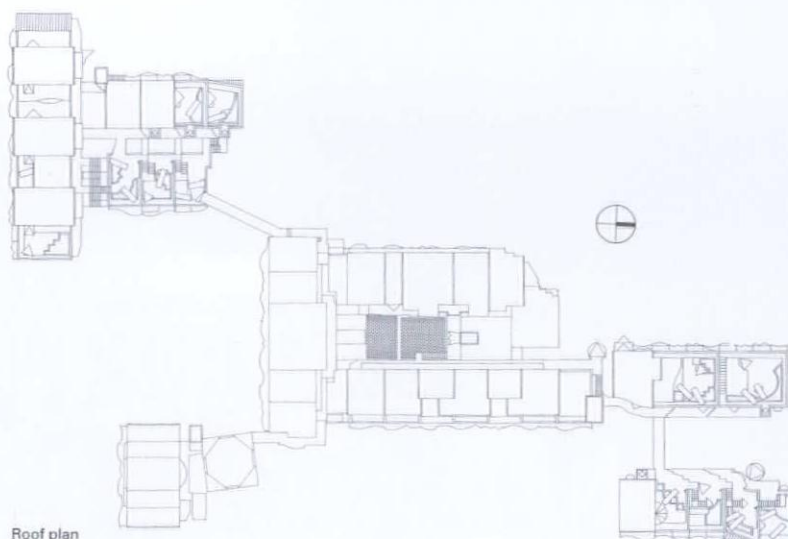
The 6,600 square meter site is surrounded by high density single family housing with 150,000V high voltage wires crossing overhead. The extremely irregular site configuration is the by-product of assembling agricultural land as it became available. There were complex requirements of set backs, shadow lines, high voltage wires and environmental protection. The site condition was chaotic.

The housing project consists of 259 rental units in nine blocks which are all connected by bridges. Expansion of the living room to outdoor space is achieved by providing balconies for individual units as well as communal roof terraces/fire escape route by taking advantage of the set back requirement. To accommodate the high voltage wire height restrictions, the penthouse units are covered with waves of slightly staggered shallow arcs of metal roofs in varying heights. A typical unit is roughly 43 square meters.

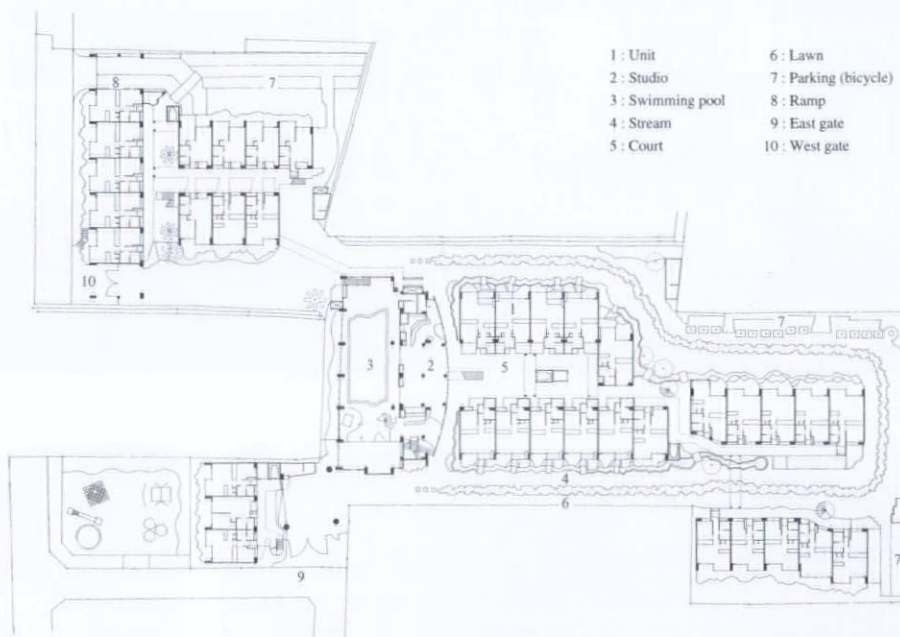
Prototype apartments for different life styles and family compositions are achieved by using movable closets and walls to create studio, one-bedroom, or two-bedroom configurations, all with eat-in kitchens. The units all have balconies of varying sizes. Doors and windows are made flush to the ceiling by using up-turned beams, creating a sense of openness to the exterior space. The effect emphasizes the design intent to make each floor like a secondary ground level.

敷地の周辺には高密度の戸建て住宅群が取り巻き、上空には15万ボルトの高圧線が通り、その真下に残っていた農地を買い足してできたこの敷地は、極めて変則的な形をしていた。斜線と日影の規制は厳しく、高圧線下の規制も周辺環境への配慮も複雑なものであった。敷地状況はまさにカオスに向かう環境であるといえる。惰性化した既存の都市の中に固定しようとする抑制力から解放し、建築は軽やかな運動を引き起こす加速器となって抽象空間としての新たな都市に解き放ちたいと考えた。

この集合住宅は全259戸からなる賃貸住宅で全体9棟を空中ブリッジで結んでいる。斜線制限によりセットバックを強いられるルーフに避難経路を兼ねたコミュニケーションテラスを設け、同じように各住戸にも専用の空中庭園を持たせ、外への生活の延長拡大を図った。高圧線真下の屋根部分はその制限の複雑さに対応させ、最上階の一戸建て型住宅には、一戸ずつ微妙に高さの異なる浅い円弧屋根がずれながら、いらかの波のように連なっている。重層構造の中の多くは43㎡位の標準タイプでそれらはワンルーム、1LDK、2LDKとフレキシブルに対応する可動クローク、可動ウォールをオプションとし、様々な異なる生活を引き受けることができる新しいプロトタイプとなることを目指してつくられた。その各戸には異なる広さのテラスを用意し、逆梁の採用によりたれ壁を消して建具を天井までとることで、外部への開放性と一体感をつくった。それは階層ごとの第2の地表面を目指して設計されていることを強調している。



Roof plan

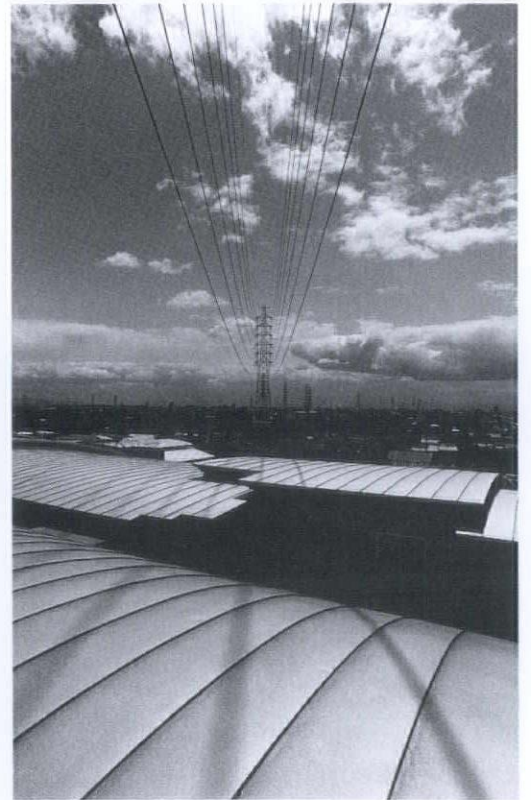
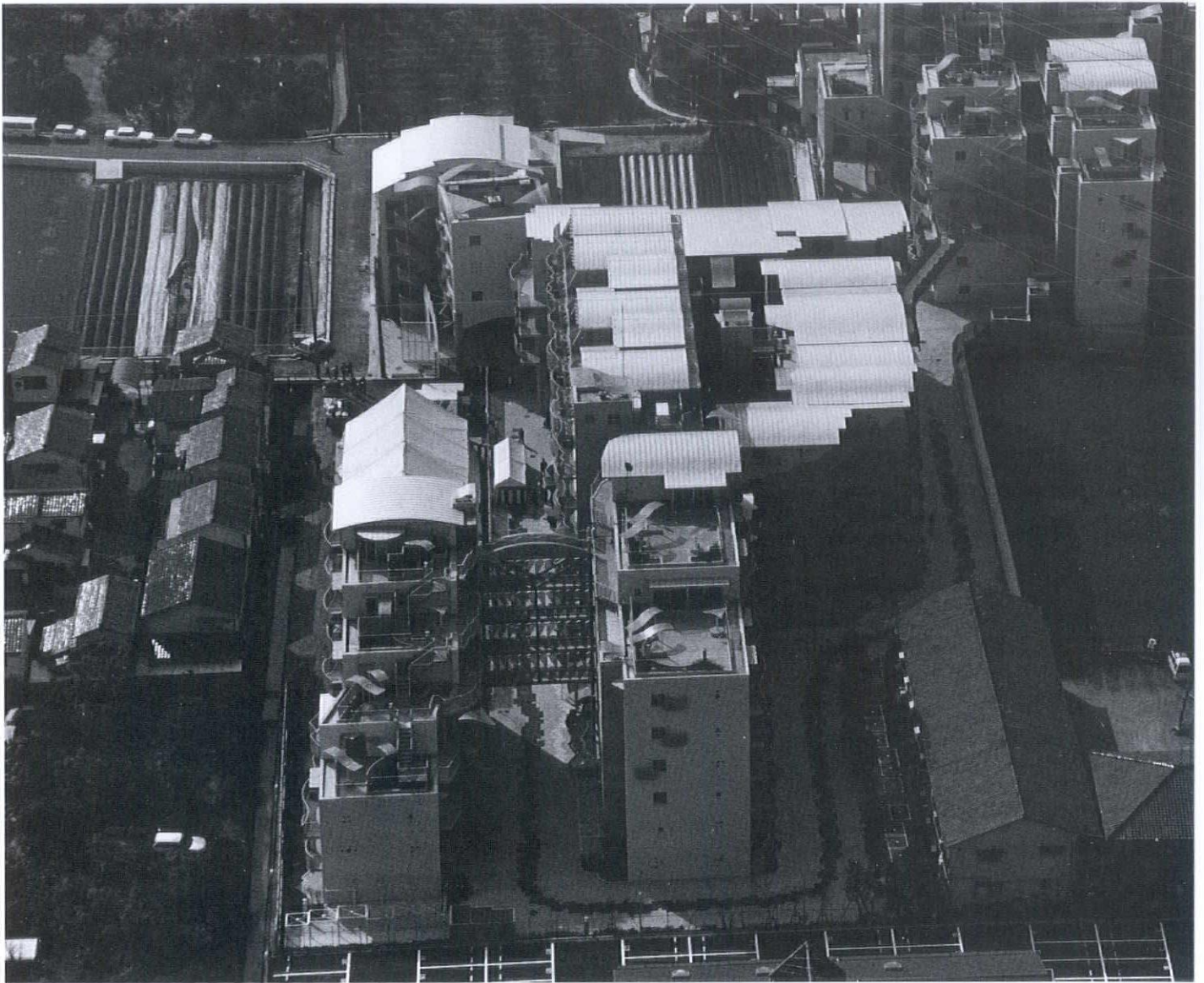


1st floor plan S=1:1500



East elevation S=1:1500











Itsuko Hasegawa

In the 70's and 80's, I designed houses in suburbs for friends and relatives who started having families. As we all believed that we would own only one house in our lifetimes, it was a very serious undertaking. There was strong pressure to design an appropriate house for each client. I spent a great deal of time talking to the clients and making study models. The minutes of these meetings are, in a way, the client's exact biographies.

In the late 80's, condominium and corporate residential commissions started to come in. Working for the housing industries became an economic, rather than artistic activity, and it gradually affected the entire architectural profession including my attitude toward the housing design. Multi-unit housing was initially introduced to solve urban housing shortages but, in reality, became the tool of speculation.

Too often, the design of housing blocks and environmental consideration are completely detached. This housing is treated as only temporary accommodation rather than a comfortable place to enjoy life and family. If the city can provide sufficient amenities, I believe it is possible to live a civilized life even in the small living quarters of mass housing, an inevitable result of high land costs. On the other hand, people's desire to own a single family house in a suburb has pushed high density development further out of the city, created tremendous urban sprawl, and resulted in a great loss of nature. If urban mass housing provided attractive, well-designed, beautifully landscaped living spaces, places for elderly people to relax, children to play and families to picnic, I wonder if it would be possible to prevent the destruction of the natural environment around big cities. All of us should recognize a more pluralistic approach in residential designs.

My first public housing project was a part of Artpolis Project in Kumamoto (Takuma Housing) in the early 90's. Since then I have been involved in the preparation of a master plan for Asakura Housing Complex in Gifu, and at the present I am designing Imai New town Housing in Nagano. I have observed that, in the past, architects designed multi-family housing only from the owners' points of view and did not pay enough attention to social needs of elderly people, the physically handicapped, and young couples just starting their families. Instead of addressing the social issues of living, architects were only interested in creating their masterpieces. In our office, we spend a great deal of time discussing the real issues of mass housing among the staff members.

The reason that I like to work on public housing and private houses is because I believe that communication with people is the basis of any architectural design.

Massing and block layouts are adapted to respond to site conditions. For example, grade differences are exploited to design public circulation spaces for accidental encounters and to create buffer zones between common and private spaces. The relationships among residential units are considered carefully to provide maximum privacy. While public housing, for budgetary reasons, offers relatively small unit sizes compared to private sector projects, the sites are often generous for more extensive landscaping. I am interested in proposing the concept of garden housing with comprehensive environmental design to pursue the new possibility of residential design as landscape architecture of both indoor and outdoor spaces.

長谷川逸子

70、80年代頃、子供が生まれアパートを出て自分の家を持つとする友人や知人から依頼されて、郊外の分譲地に住宅を設計してきた。住宅は一生に一度しか持てないという古くからの考えもあってか、クライアントは皆生きることに真剣に取り組んでいた。そうした生活に直面しているということからくる厳しさが、設計行為の中にいつもあった。私は設計のためのディスカッションを繰り返し、何度もモデルを作り変え、その間のディスカッションのレポートはクライアントの生き様そのものといえる。

80年代になり、企業のマンションや住宅を手掛けるようになって、住むことよりも経済活動を優先する住宅産業の考え方は、私達建築家の仕事にも少しずつ影響しだし、私の住宅設計を受ける姿勢も変わってきた。もとはと言えば、都市における人口の集中化に対して用意された集合住宅も、現実には投資の対象としてつくられている。また集合住宅とそれを取り巻く環境デザインは、往々にして切り離されて発注され、環境とか自然の心地良さを設計することより、むしろ都市で働くための仮の空間というイメージで捉えられてきた。土地の高騰により狭い住居しかもてなくても、それを外の都市の機能で補うならば幅のある生活も可能であろう。一方で、人々が郊外に一戸建を持つことを最終目的にすることにより、郊外への高度開発が進む中で、スプロール化が身近の自然を喪失させる結果となった。代わりに現れたのは、環境まで整備され、四季折々の変化までもが人工的な空間である。もし高齢者が憩い、子供達が遊び、家族がピクニックしている様な風景が都市の集合住宅に導入されていたならば、住宅開発を進める中でこれ程まで周辺の緑地を破壊してこなくとも済んだのではないかと。生きていることの多様な在り方を大切にできる余裕を、社会はもっと持ち続けるべきだった。

私達はアートポリスの一環であった熊本市営住宅を皮切りに、岐阜の朝倉団地のグランドデザインの提案、長野の市営住宅のプロポーザルコンペの入賞など、90年代に入ってからこうした公営住宅の設計に加わりだした。しかし、これまでの建築家の姿勢を見ると、高齢者、身障者への福祉的機能を始め結婚した若い夫婦が家族生活をスタートさせるための住宅の在り方など、社会的レベルに立っての住宅建築を考えてこなかったのではないかと。住まい方の提案を具体的にするというよりは、建築家は自分の作品としてのオブジェをつくるために見た目のデザインに終止してきたのではないかと、私なりの批判を持っている。私はスタッフと共に、集合住宅のプロトプランはどうあったらいいかというディスカッションをしながら設計を続けている。

住宅建築をつくり続けたいのは、人々の生活の有り様と向かい合うことを通して時代の生き方をいつも考え、公共建築を始め、様々のこと考える原点としたいからだ。

公共住宅は安価に供給するために住宅面積こそ狭いが、民間と異なり余裕のある敷地を持ち、グランドデザインをうまく導入することで庭園住宅のような環境を提案できることに非常に魅力を感じる。インドアとアウトドアの両方の住まい方のルールを見直しながら環境を整備し、ランドスケープ・アーキテクチャとしての住宅建築設計に新しい可能性を期待している。



# Takuma Housing Project, Kumamoto

Kumamoto, Kumamoto 1992

熊本市営託麻団地

By repetition and differentiation of two-unit modules, we intended to create a variety of exterior and interior spaces in this housing project. Instead of the uniformity and regularity of a massive residential block, discontinuity and incidentality were pursued in the overall design. The grade elevation difference of two to three meters is expressed in the block massing. The building height is kept low to defer to neighboring residences and to maintain the topographical characteristics of the site.

The blocks have basic stair tower configuration layouts. The painted stair towers are used as natural ventilation shafts. Each unit has a terrace and a balcony on the south and north sides for light and air. In order to keep those two sides structure-free, a concrete structural wall system was employed. Despite very restrictive site conditions, we managed to give a few rooms of each unit a sunny south exposure and reduce the unit depth.

In response to the hot Kumamoto summers, and to maintain the openness of interior space, a large tatami room is provided with wood panel doors for flexible partitioning. The kitchen cabinets are facing to the living room and treated as built-in furniture. These traditional elements of local house design were positively adapted for both private and communal space-making in public housing. For privacy, light and air, perforated aluminum screens were used for the facade. I hope that we created an attractive communal landscape with a sense of friendly openness.

この住棟計画では、2戸の住宅からなるユニットの反復と差異化により、内外ともに変化のあるものを目指した。大きくマッシュヴな住棟により均質さや規則性を表現するのではなく、人為的構成を越えたある不連続性や偶発性を取り込みながら環境に馴染ませたいと考えた。敷地の2~3m程の高低差を持つ斜面を取り込み、緩やかに上下させながら住戸ユニットを反復させている。近隣の住宅の高さを考慮しヴォリュームを控え、周辺環境に馴染ませるだけでなく、敷地の特性を維持している。集合住宅の形式としては階段室型とし、この階段室を風の道のスリットとして風の色を施し、周辺住宅地と当団地の通風を確保した。住居内にあっても南北にテラスとバルコニーを設け、通風と採光が十分に行われるようにし、その2面を開放するためにコンクリート柱壁構造の柱梁が見えないシンプルな架構としている。日照的には厳しい配置計画であったが、各住戸とも数室を南側に配し、奥行きを抑えた。住居内が閉鎖的にならないように畳の部屋を数室連続させ、板戸の仕切りにより広さを自在につくれるようにし、また対面式キッチンセットをリビングの家具のひとつとして扱っている。こうした地域に残る伝統的住まい方を積極的に採用し、集合住宅でのプライバシーとコミュニティを改めて見直した。外側は、日中は視線が透けず採光と通風を妨げないアルミバンチングスクリーンを張り巡らしている。開放感のある住居を集合させる中で、住まい手のつくる日常性を重層させて魅力的な風景をつくりだしている。



Site plan S=1:2500

S : Kazunari Sakamoto M : Yasumitsu Matsunaga H : Itsuko Hasegawa

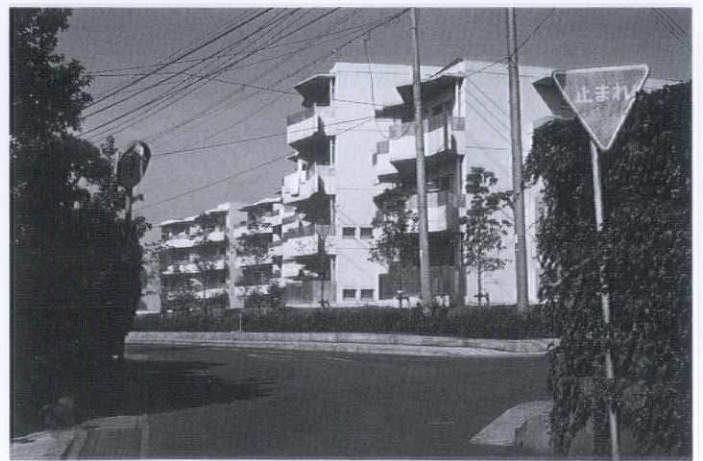


H1Block 1st floor plan



H2Block 1st floor plan S=1:900







# Namekawa Housing, Ibaraki

Hitachi, Ibaraki 1994-

茨城県滑川アパート (仮称)

The site is favorably located on a southern slope with a 15 meter grade difference and a view of the sea to the east. To take advantage of the topography, we planned two long blocks along the contour lines like wings. The buildings hug the gently curving grade in response to the speed of vehicular traffic on the adjacent state roadway. The two blocks are separated by two gardens (Garden 1 & 2). Pedestrian ramps criss-cross the space to connect the residential blocks, the meeting house and the gardens. Together they create a three dimensional urban communication network.

The 72 residential units are divided into three blocks. A breezeway separates every two units, each of which also has a generous terrace space (a floating garden). Together they present an appearance of continuity. The glass entrance hall is located adjacent to the floating garden, and is large enough to be used for informal receptions, sitting and as a transitional space between interior and exterior.

Although public housing is generally considered to be for low-income families, it is more desirable to provide an environment where people of diverse ages and family compositions can live together. It is also an opportunity to introduce better community space; this is a great deal more difficult in private housing for profit.

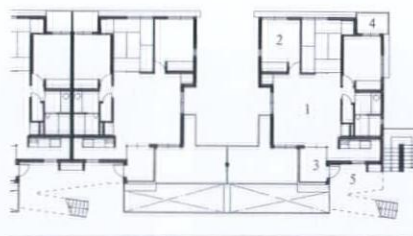


Site plan S=1:1500

滑川アパートの敷地は、東側に海を臨む南斜面で全体的高低差15mという良好な敷地条件を備えている。この土地が持つランドスケープのポテンシャルを建物の形態にそのまま還元し、地盤に沿って滑らかに上昇する2枚の羽根をイメージして、2本の長いヴォリュームとして配置した。カーブを描きながら上昇するヴォリュームは、国道からの視線を意識し、そのスピード感に呼応するものとなっている。2枚の羽根の間には緑の丘（ガーデン1、2）が広がり、地上や空中をランプ（共用歩廊）が駆けめぐり、集会室や住棟、ガーデンを3次元で連結し都市的なコミュニケーションの場をつくり出すことを意図している。

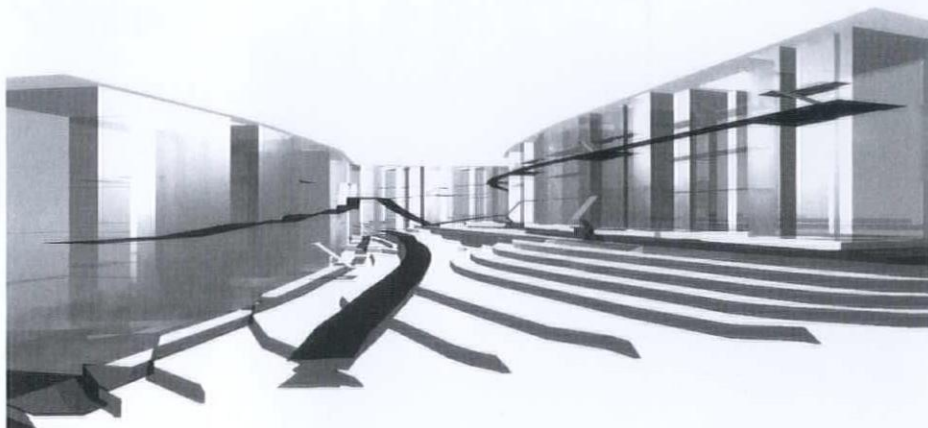
全72戸の住戸は3棟に分割され、各棟には2ユニットごとに風の抜ける道を通し、各住戸ごとの広いテラス（フローティング・ガーデン）を浮かせ、一棟として連続した外観を形成している。住戸は玄関兼ゲストルームとしての広いグラスハウスを持ち、フローティング・ガーデンに連続している。グラスハウスには植物やティーテーブルを置き半外部の空間で接客や休憩ができるコミュニケーション・スペースとなっている。

公営住宅は、低所得者の住む特殊なものとして受け止められている場合もあり、狭義の福祉住宅の色合いが強いようだが、より望ましい環境は、様々な年齢層の人、様々な形態の家族が集まって住みコミュニケーションする場にはないだろうか。また、民間の集合住宅では得にくい余裕のある共用部分や外部空間を取り込み、ここに住んだ人々が住まうことに興味を持ち、不動産としての住宅ではなく住むための住宅を思考することを期待している。

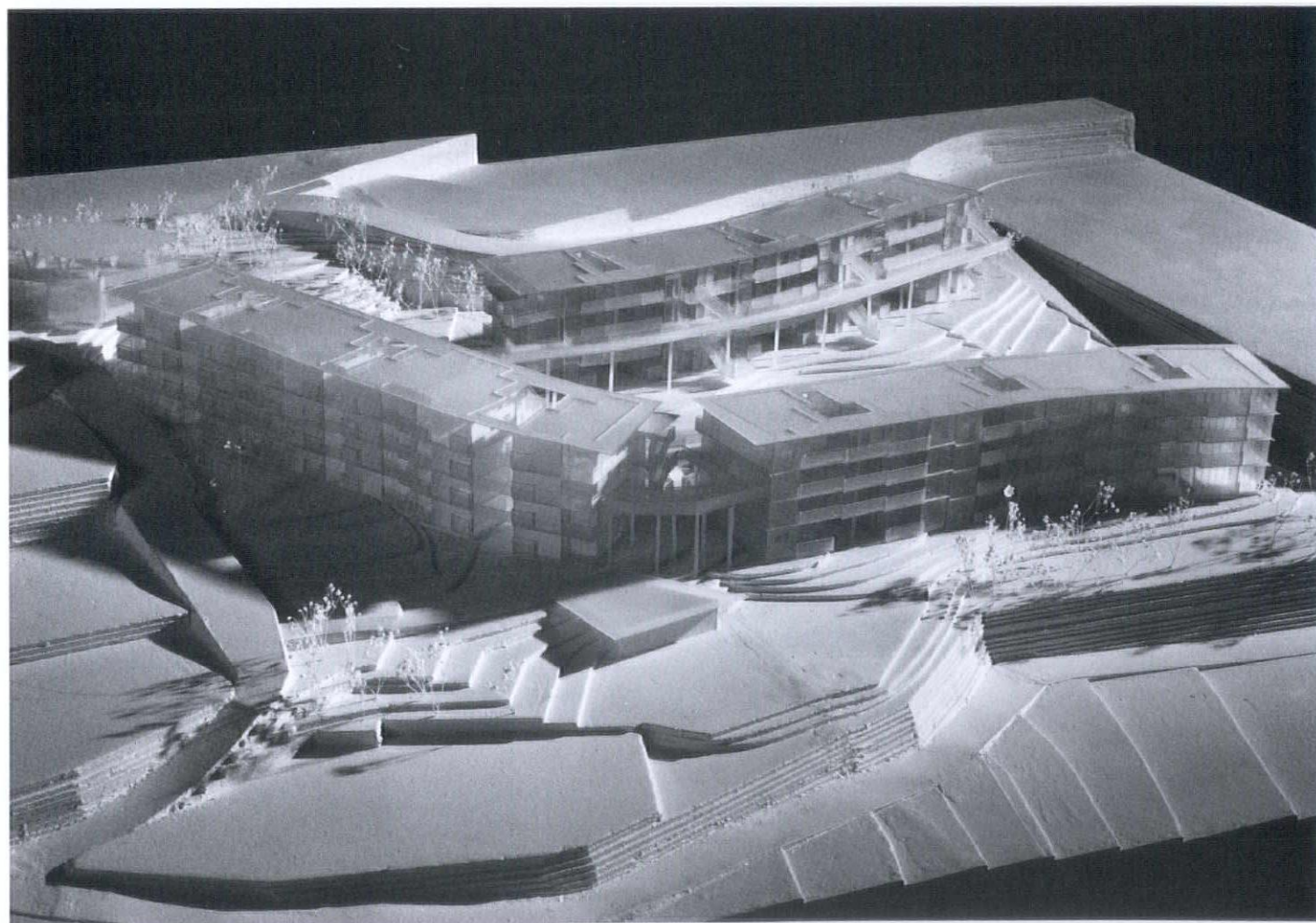
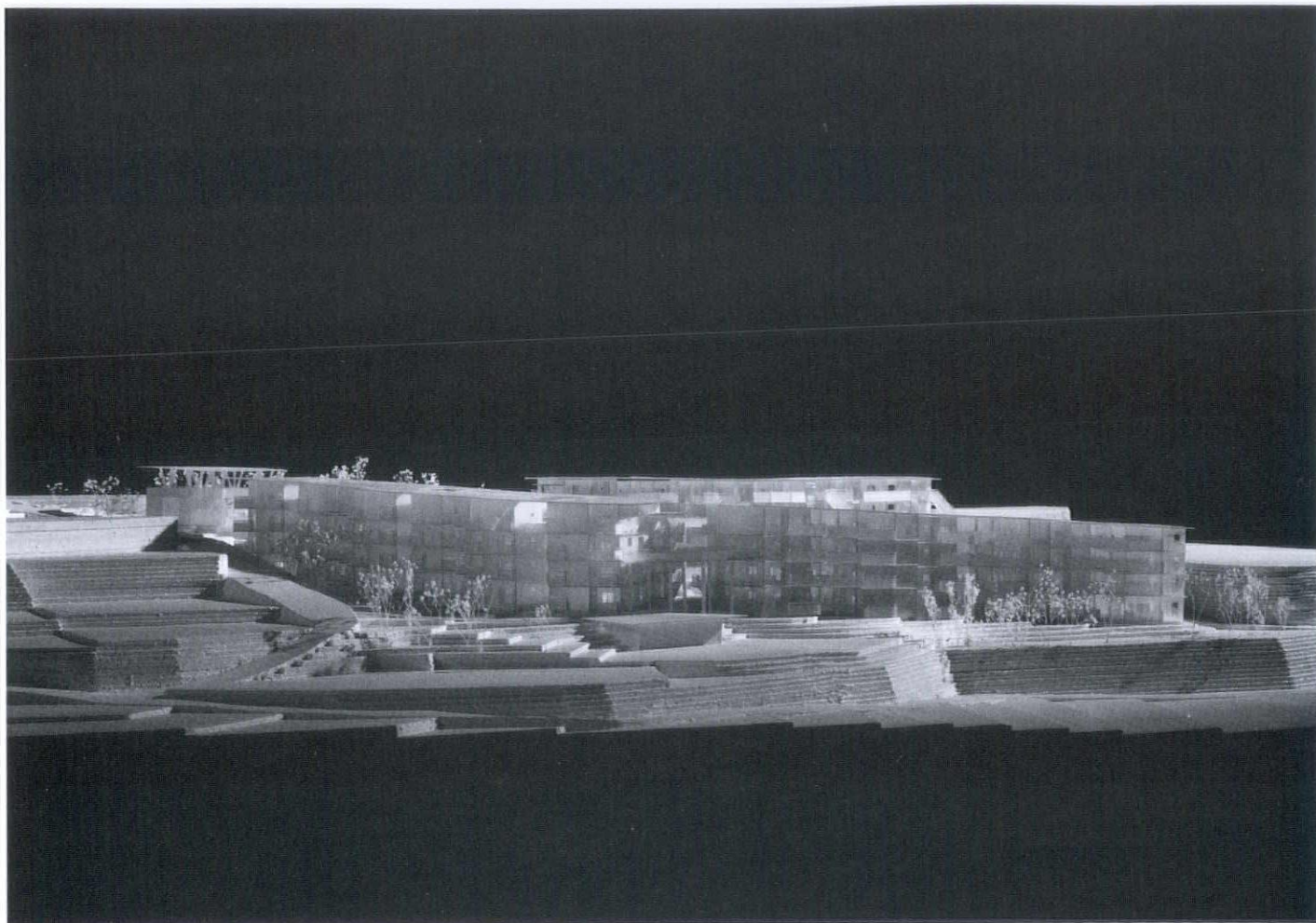


North block unit plan S=1:500

- 1: Living dining
- 2: Bed room
- 3: Entrance (Glass house)
- 4: Balcony
- 5: Approach









# Imai Newtown Housing, Nagano (Olympic Village)

Nagano, Nagano 1994-

長野市今井ニュータウン (オリンピック村)

- 1 : Entrance approach
- 2 : Living room
- 3 : Glass room
- 4 : Private garden
- 5 : Public entrance hall
- 6 : Floating bridge (Outdoor corridor)
- 7 : Community garden

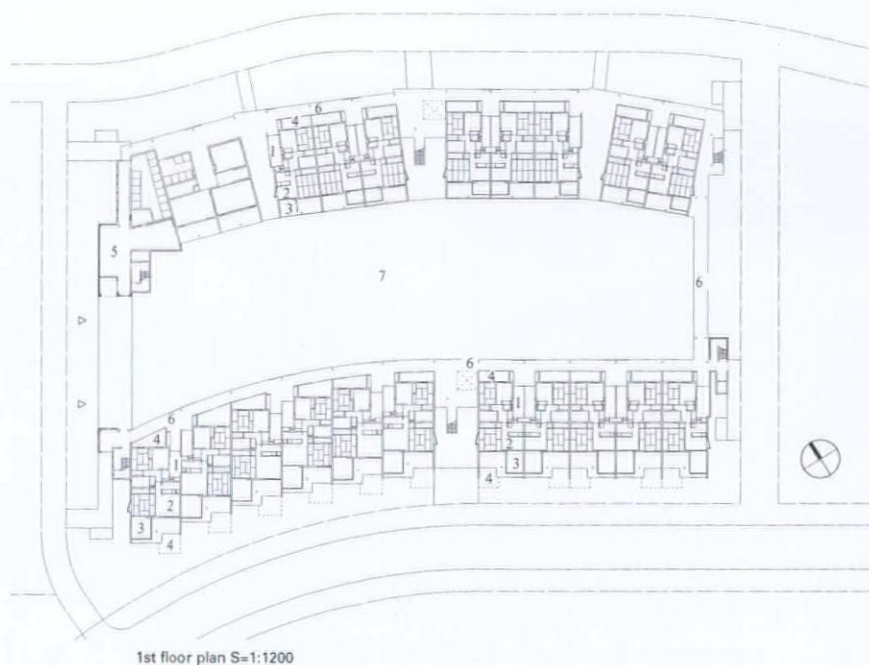
This new town project will be used as an Olympic Village for the 1998 winter Olympic Games before the public housing authority takes over. A seven block 1,000 unit project was started under the leadership of Sadao Watanabe, Design Commissioner, to provide comfortable living quarters for a new community. The government policy on environmental conservation and the welfare society are also major issues to be dealt with in this project.

It is imperative to actively encourage accidental encounters to create a sense of community in public housing projects which tend to isolate and alienate residents. The west bridge with the main entrance connects the north and south wings at every floor level. The common corridor on each floor, called a "communication necklace," allows circulatory movements. Along the communication necklace, there are meeting places and roof gardens for accidental and planned gatherings. At each unit entrance, a light well is provided for privacy, air and light. Although it is still a part of the common space, it can function as a space for chatting among the neighbors. Within the unit, a living room large enough for social gatherings and private bedrooms are clearly separated in plan. The glass room is used as a sun room in winter and as a part of the balcony in summertime. It is hoped that this project will encourage younger generations to stay in the community and elderly people to live together.

敷地は長野市南部の犀川と千曲川に挟まれた平坦地にあり、周辺の高い山並みの風景に囲まれている。このニュータウンは1998年の冬季オリンピックの選手村として利用され、その後公営住宅や企業住宅となる。デザインコミッショナー渡辺定夫氏の監修のもと1000戸の住宅を7ブロックに分け、新しいコミュニティの形成と快適なる空間をテーマに設計がスタートした。行政の掲げる環境との共生と福祉社会への対応もここでの課題である。

私達は集合住宅に住む中で、とかく解体しがちな共同体意識を再構成するためには、住民同士の出会いを積極的に仕掛ける必要があると考えた。エントランスのある西ブリッジは各階で北棟と南棟をつなぐ連結空間であり、共有廊下「コミュニケーションネックレス」は建物を水平に一周できる装置である。この「コミュニケーションネックレス」には集会スペースやルーフガーデンなどもあり、移動のためだけでなく、住民が集ったり、くつろいだりするための場としても機能する。

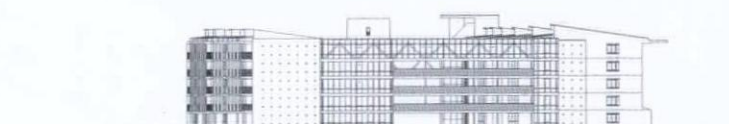
各戸のエントランス部分には廊下からのプライバシーの確保と、通風や採光のためのライトウェルを設けた。この辺りの広がりには共有廊下の一部であると共に、近隣の住民がカジュアルに集う井戸端会議の場ともなる。住戸の中では、社交的で宴の開けるリビング空間とプライバシーの高い個室が平面的に明快に分離されている。周辺環境の四季の変化を取り込むガラスルームは、冬はサンルームとなり、夏は廊下の深いバルコニーと一体になる開放的な場である。この計画では若い世代が積極的に地方で生活する、あるいは高齢者が共生する可能性を追求した。



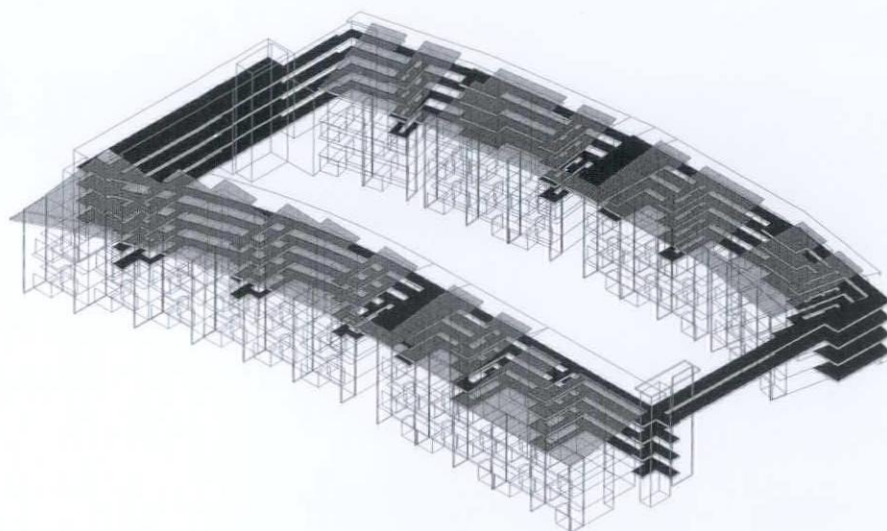
1st floor plan S=1:1200



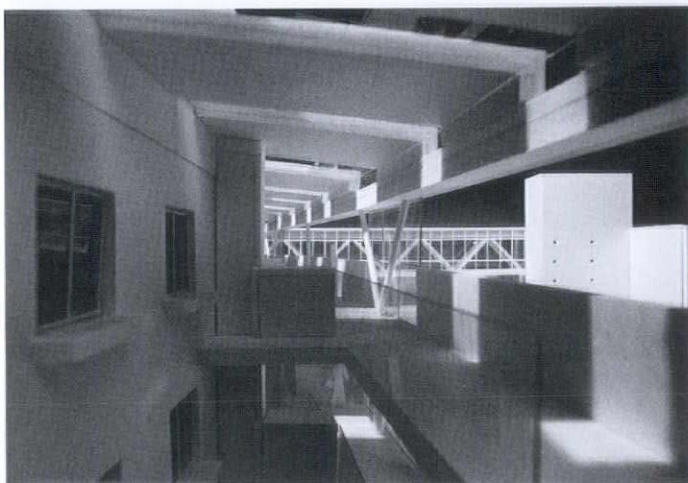
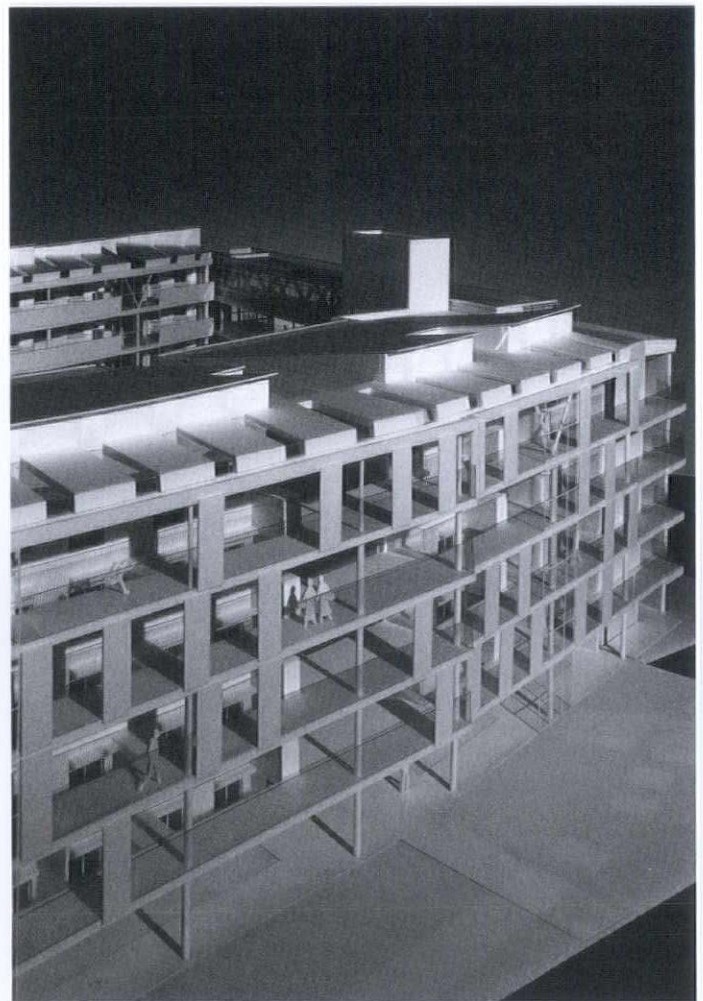
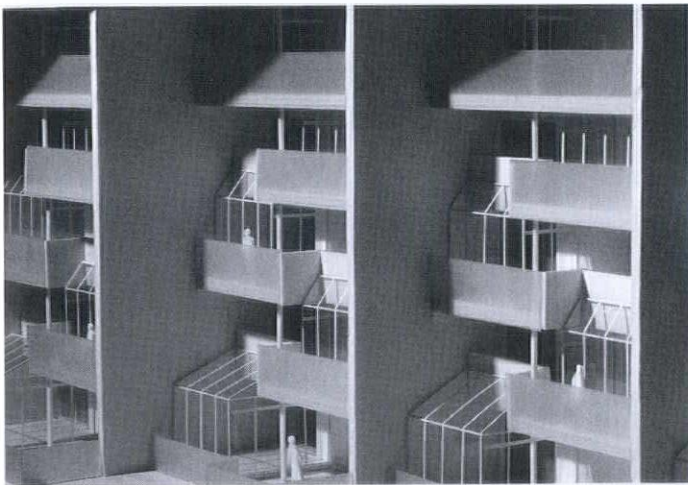
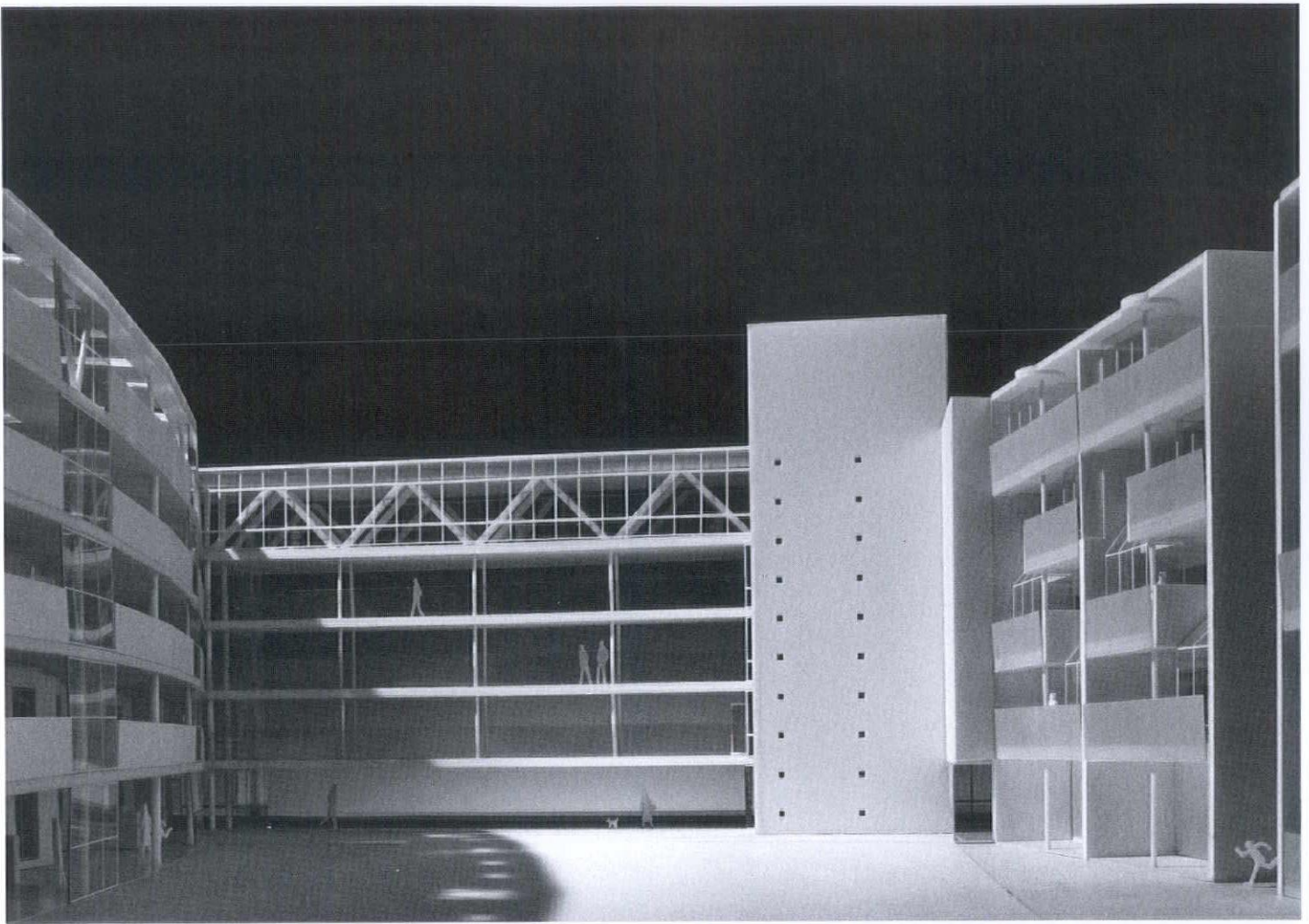
South elevation



West elevation S=1:1200









# KJ Project

Kobe, Hyogo 1990

## KJプロジェクト

The reason we are attracted to the chaos of Japanese cities is, I think, because we sense a kind of nature in the accumulation of history, which gives contemporary Japanese vital energy. The smallest component of urban space, a house, can be further broken down to the fractal level of sun exposure and natural ventilation, which in turn, constitutes the overall city. In other words, the existence of chaos is directly related the Japanese view of nature.

If we can find a certain pattern of assembly deep within the chaos of the city, we will find the key to create a new urban space. To design urban mass housing is to seek the methods of collaboration and congregation most suited to our physical beings. This is also an extension of the Japanese sense of nature in its broad meaning.

In this project, I tried to create a new structure and form of loose collaboration, based on the concept of "latent nature," by expressing layered urban structure in the form of nature and the earth's surface. My aim is to create comfortable living space with a sense of nature in the city, akin to the feeling of living in a traditional single family house with a small garden.

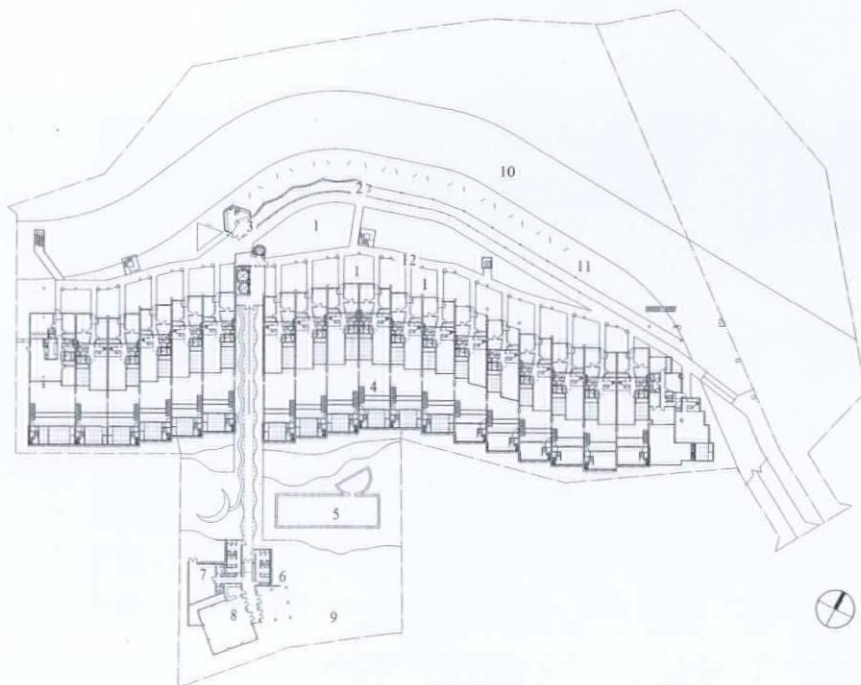
The project is high-rise multi-family housing in Tarumi, Kobe. Because it is a private development, we were required to maximize the volume within the law for economic reasons. We wanted to design a somewhat different building from what would normally be expected from the given conditions, and give the building additional aesthetic value. By changing each floor plan and changing the scales of composition, we came up with a variety of unit types and dynamic visual effects.

日本の都市のカオスの中に、時に魅力的なものを感じるのは、現代人の生きる活力を持った自然が時間の中に蓄積されていることを見出すからだと思う。構築物としての都市の最小単位の住宅のうちに、さらに住居内関係の中に、フラクタルに日照や通風などに対応しながら、都市全体の自然空間を形成してきた。言い直せば、カオスの発生は日本人の自然感と関係があるのではない。今日ある都市のカオスを乗り越えて、日本に相応しい集合の形式を見出せば、都市を生成する手掛かりとなると考えられる。また都市の集合住宅を考えることは、私達の身体に相応しい共同と集合の形式を求める作業でもあるが、それも日本人の自然感の拡張と言い換えてよい。この設計では都市概念の重層構造を自然と地表の重層構造として構築し、これまでの「第2の自然」というテーマに緩やかな共同の形式と新たな構造を引き出そうと考えた。小さい庭を持つ伝統的な戸建住宅から、都市という広義の自然に生きる居心地良さを生成する住居を引き出すことであった。

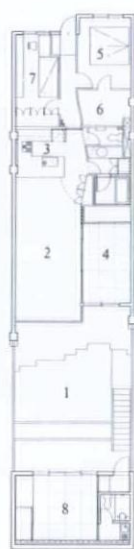
民間による開発ゆえに、経済性を追求され、法規の許容範囲内で最大の容積が要求された。こうした与条件より通常導き出される形態に対しあるズレを生じさせ、今までの集合住宅とは異なる価値をもたらすことを意図した。上下の階を連続的にずらしたり、スケールを変えることで、様々なタイプの住戸とダイナミックな外観をつくりだしている。

### 1st floor plan

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1: Pond             | 7: Training room     |
| 2: Post box gallery | 8: Meeting room      |
| 3: Service counter  | 9: Community garden  |
| 4: Private garden   | 10: Parking          |
| 5: Swimming pool    | 11: Suspended garden |
| 6: Changing room    | 12: Porch            |



1st floor plan S=1:1500



Type G1 S=1:400



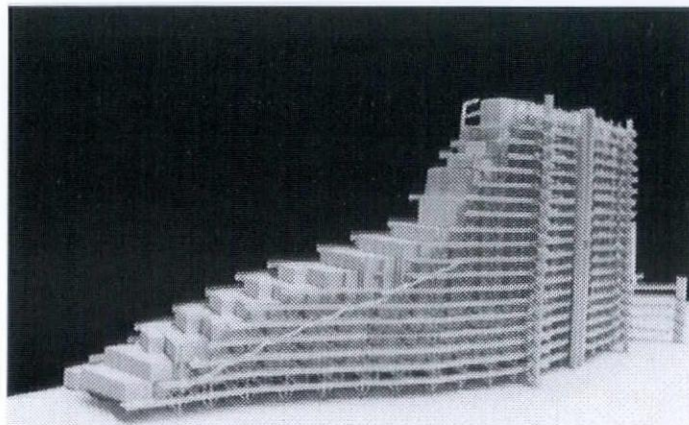
Type G2

### Type G1

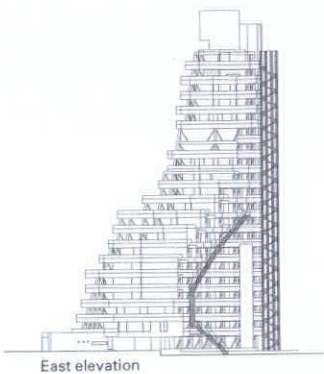
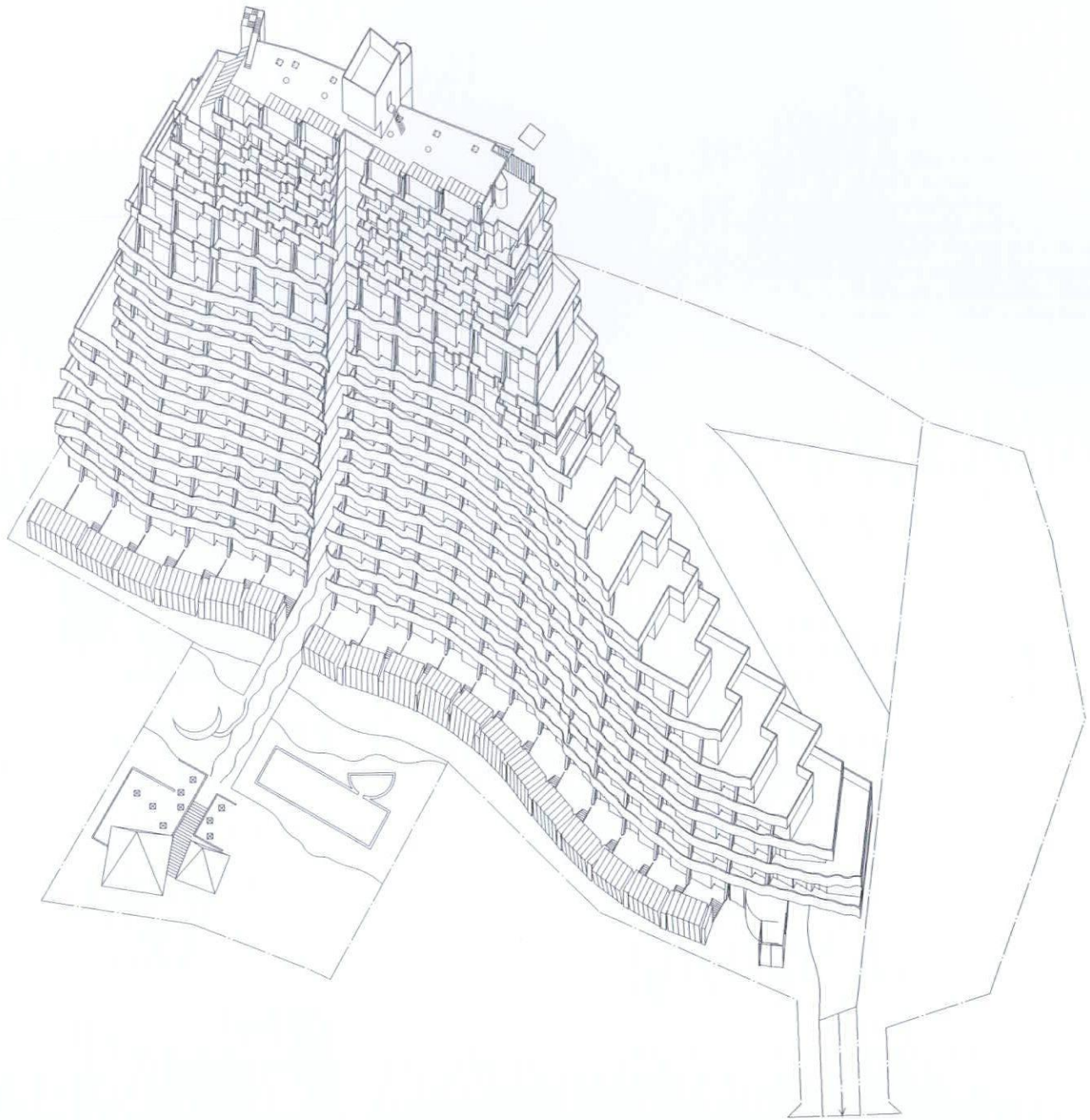
- 1: Private garden
- 2: Living-dining room
- 3: Kitchen
- 4: Tatami room
- 5: Main bed room
- 6: Walk in closet
- 7: Bed room
- 8: Extension

### Type G2

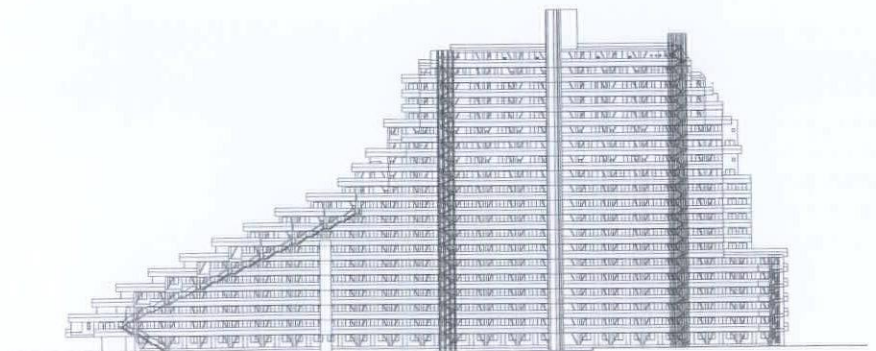
- 1: Living room
- 2: Dining room
- 3: Kitchen
- 4: Entrance
- 5: Main bed room
- 6: Walk in closet
- 7: Bed room







East elevation



North elevation S=1:1500



# House in Malaysia

Kuala Lumpur, Malaysia 1994-

## マレーシアの住宅

The heavily wooded and hilly site for these four housing units is located in a suburb of Kuala Lumpur. Design requirements included minimizing impact on the site and adaptability to various site conditions. The second phase will be mass production of the prototype models. We attempted to utilize natural topographical features and to adopt the physical and psychological comfort of traditional Japanese houses in the summer to the tropical Malaysian climate.

### Compact House

A combination of rectangular boxes makes a compact massing. Several open air green spaces within the box provide an easy transition between the artificial and natural environment.

### Interweaving House

Grid planned rectangular boxes are layered in response to the natural site slope. Floors expand both horizontally and vertically, providing an interconnected loop of spaces.

### Pavilion House

Four separate pavilions with semiopen exterior walls are loosely connected by multi-level outdoor corridors and decks, easily responding to the existing topography.

### Split House

It consists of two wings with two separate corridors running through them at different angles. By using these corridors as axes, the landscapes of the house and nature are regenerated to reveal new relationships.

ここに示す4つの住居タイプは、大半を樹木に覆われた起伏の激しい傾斜地に計画されている。ディベロップメントの思想として敷地への操作を最小限に抑えると同時に、様々な敷地の物理的条件に対応できるタイプであることが求められた。これは、将来的に、これらのプロトタイプに基づき量産されることを想定してのことである。この自然勾配のある敷地の特徴を有効に使い、日本の夏のしつらえの中に見る身体的、精神的な居心地の良さをマレーシアという熱帯の風土を考慮した上で実験したい。

### Compact House

シンプルな直方体を組み合わせ、全体としてコンパクトな四角い箱となっている。この中にいくつかのグリーンスペースを設け、シンプルで人工的な空間と自然との共存を意図している。

### Interweaving House

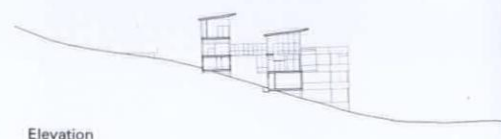
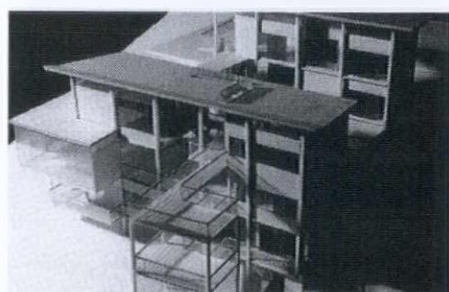
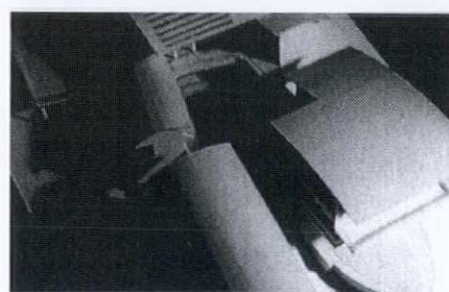
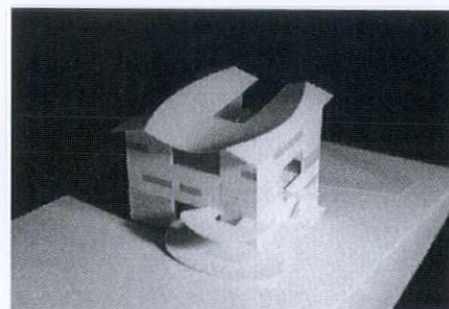
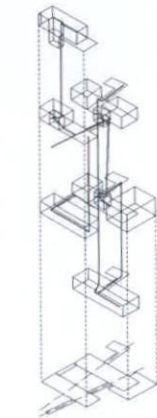
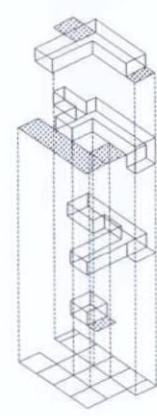
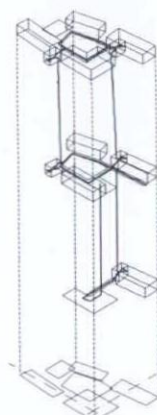
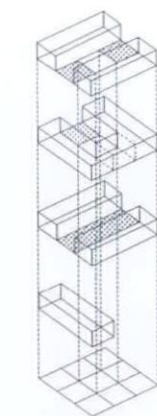
グリッドから形成される直方体を敷地の傾斜に呼応するように積み重ね、水平垂直の両方向に展開し、終わりがなく回遊できる連続した空間としている。

### Pavilion House

自然の中にランダムに置かれた4つのヴォリュームは、それぞれ外部と内部とが緩やかに融合されている。それらは水平垂直の回廊によってつながれ、ランドスケープと強く呼応している。

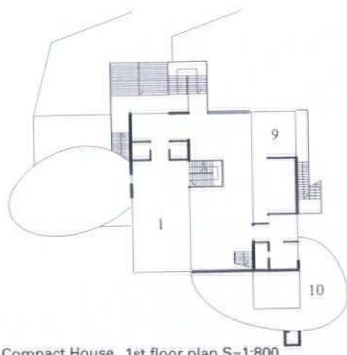
### Split House

ふたつに分離されたヴォリュームによって構成され、そこを角度の異なる2本の回廊が横切っている。この回廊を軸として風景は再構成され、様々な異なる建物と自然の関係が現れる。

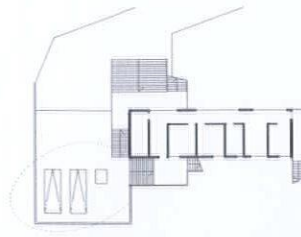


Elevation

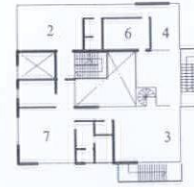




Compact House 1st floor plan S=1:800



2nd floor plan

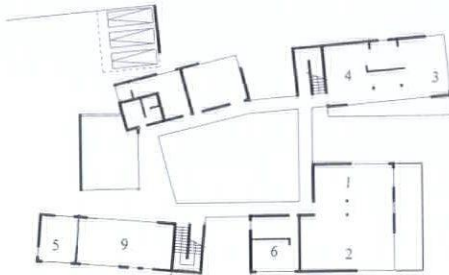


3rd floor plan

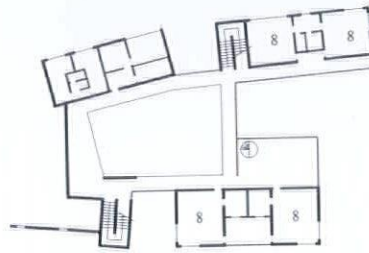


4th floor plan

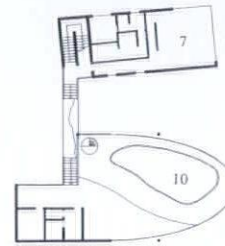
- 1 : Living
- 2 : Dining
- 3 : Family living
- 4 : Family dining
- 5 : Office
- 6 : Kitchen
- 7 : Master bed room
- 8 : Bed room
- 9 : Theater
- 10 : Pool



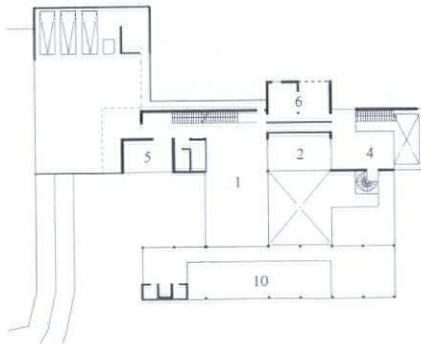
Pavirion House 1st floor plan S=1:800



2nd floor plan



3rd floor plan



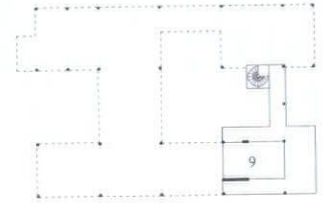
Interweaving House 1st floor plan S=1:800



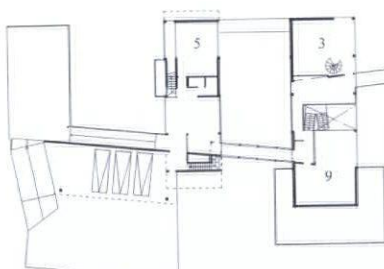
2nd floor plan



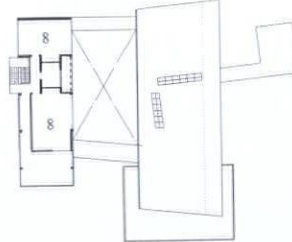
3rd floor plan



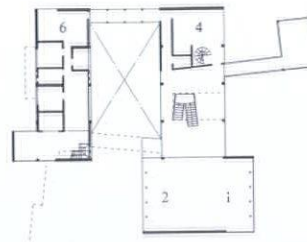
4th floor plan



Sprit House 1st floor plan S=1:800



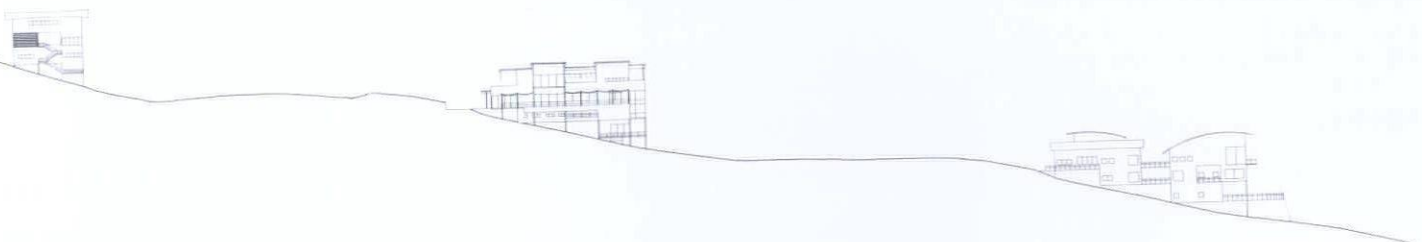
2nd floor plan



3rd floor plan



4th floor plan





# Rose Garden, Amakusa

Kawaura, Kumamoto 1994-

## 天草ローズガーデン

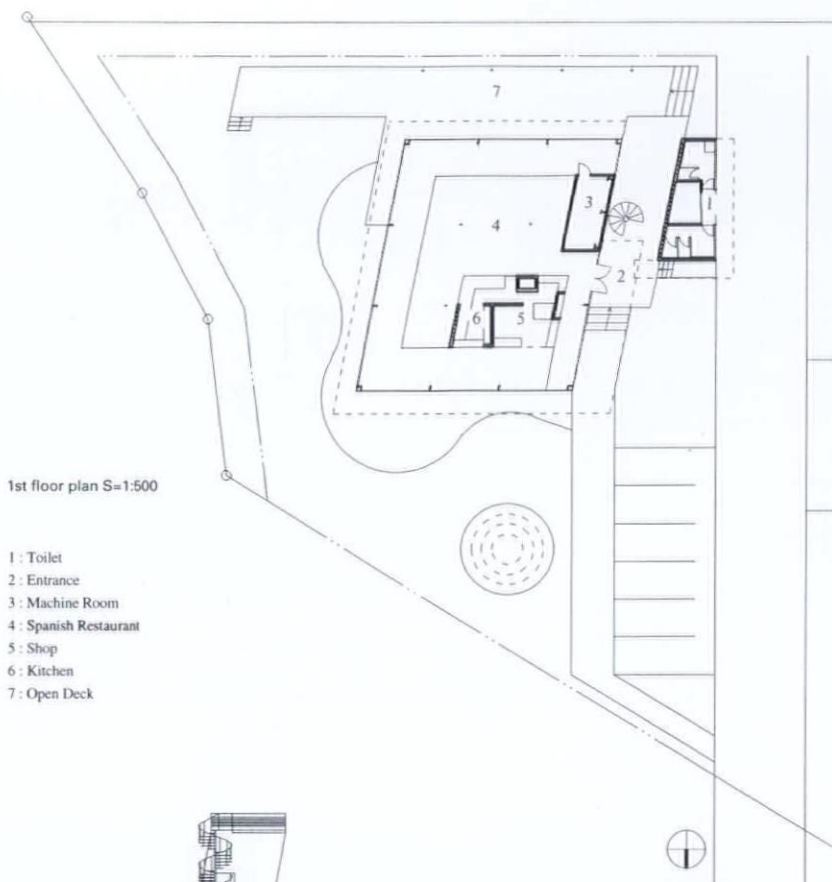
The Rose Garden is a private recreational and cultivation facility for roses, built as a part of the town's industrial plan and to provide a place of cultural exchange through flowers and gardening.

The master plan is divided in three phases. The first phase, which has been completed, is a glass greenhouse. The second phase includes a rose garden and its auxiliary facilities; the third phase will be a large parking garage and a museum. The second phase garden will be full of varieties of roses and will stretch in a north-south direction with a sprinkling of rest areas called green islands. The islands will be connected by two main passageways to enable visitors to promenade through the garden. During flowering season, views of the garden from the state roadway which runs along the site, with the garden islands floating in a sea of roses, will remind viewers of the Sea of Amakusa.

A flower shop will sell roses, potpourri and custom designed souvenirs; it will also contain a Spanish cafeteria. The parallelogram-shaped building will be clad with glass curtain walls to allow views of the surrounding space, full of roses and the sparkling water of the bay in the distance. In order to provide views of the entire facility, a viewing tower, which extends diagonally above the building, is also planned. The tower, clad in perforated aluminum panels, and the glass box of the flower shop will become a shining landmark for both the rose garden and the town.

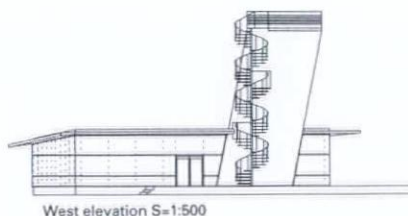
天草のローズガーデンは、バラの生産およびレクリエーション施設としてのバラ園を提供することによって、花と緑を媒介とした文化交流の場をつくることを目指している。全体計画は3期に分れており、1期工事として生産用ガラス温室の建物が完了しているが、2期においてはバラ園およびそれに付随した施設が、3期においては大規模駐車場とミュージアム施設(未定)が計画されている。2期工事では様々な種類のバラによって覆われた、南北に延びる敷地内にグリーンアイランドと名付けた休憩スペースを点在させ、それらを2本のメインパッセージで結び、周遊しながらバラが見せる様々な表情を楽しむことができる。開花期の国道からの眺めは、天草の海に島々が浮かぶように、バラの海に鮮やかなグリーンアイランドが浮かぶ風景となるだろう。

フラワーショップは、ここで生産されたバラやポプリ等のオリジナルグッズを販売する施設であると共に、スペイン料理を楽しめるカフェテリアとして来訪者がくつろげる空間を提供している。平行四辺形の平面形を持ち、ガラスのカーテンウォールで覆われた建物は、庭園内に咲くバラの色や入江の水のゆらめきなど様々な外部の情景を呼び込み、中にいながらそれらを楽しむことができる。庭園全体を見渡せる施設が要求されたため、空へと斜めに突き出す壁によって支えられた展望台も計画されている。フラワーショップはアルミバンチングによって覆われたこの展望台と共に、ガラスの箱のように発光し、ここ天草の新しいランドマークとなるだろう。

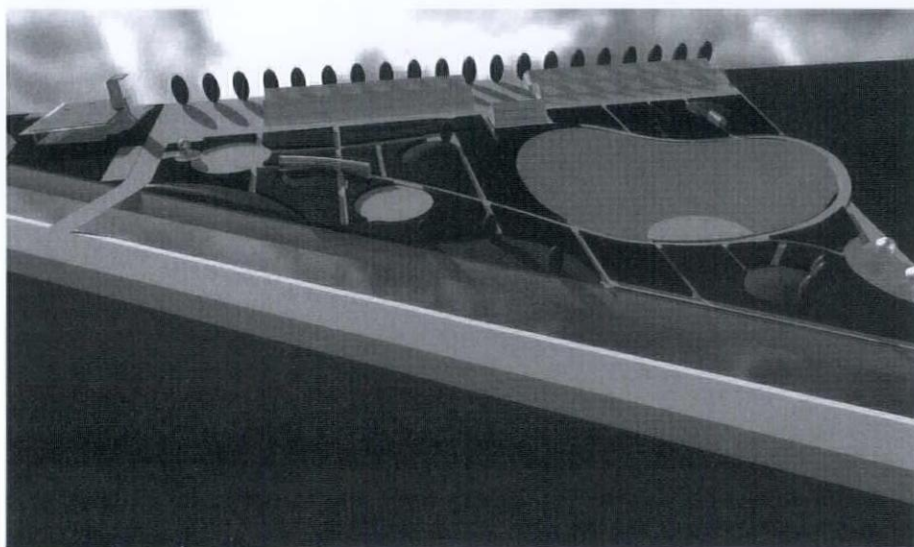


1st floor plan S=1:500

- 1: Toilet
- 2: Entrance
- 3: Machine Room
- 4: Spanish Restaurant
- 5: Shop
- 6: Kitchen
- 7: Open Deck



West elevation S=1:500









# CP Jetty Project

Chiba, Chiba 1994

## CP防波堤プロジェクト

Until now, Japanese harbors and ports were very utilitarian, designed solely to address technical problems such as high waves, tsunami, typhoons and tides. The function of jetties was only to protect the harbors and coast lines. If carefully selected however, spaces around a jetty provide tremendous possibilities for waterfront activities, and often command spectacular views.

In recent years, the psychological healing effect of the coastal environment has attracted the attention of experts and the waterfront areas have the potential to provide more than simple recreational amenities. Attempts are being made for the jetty structure to incorporate harbor cleaning facilities, marine habitats and fish farming.

**Park :** In order to take advantage of the proximity of business and residential areas to the shoreline, we propose to build a tree-lined pedestrian road along the river. The jetty is extended into the harbor on the axis of the road as a linear urban park which connects the sea and the city.

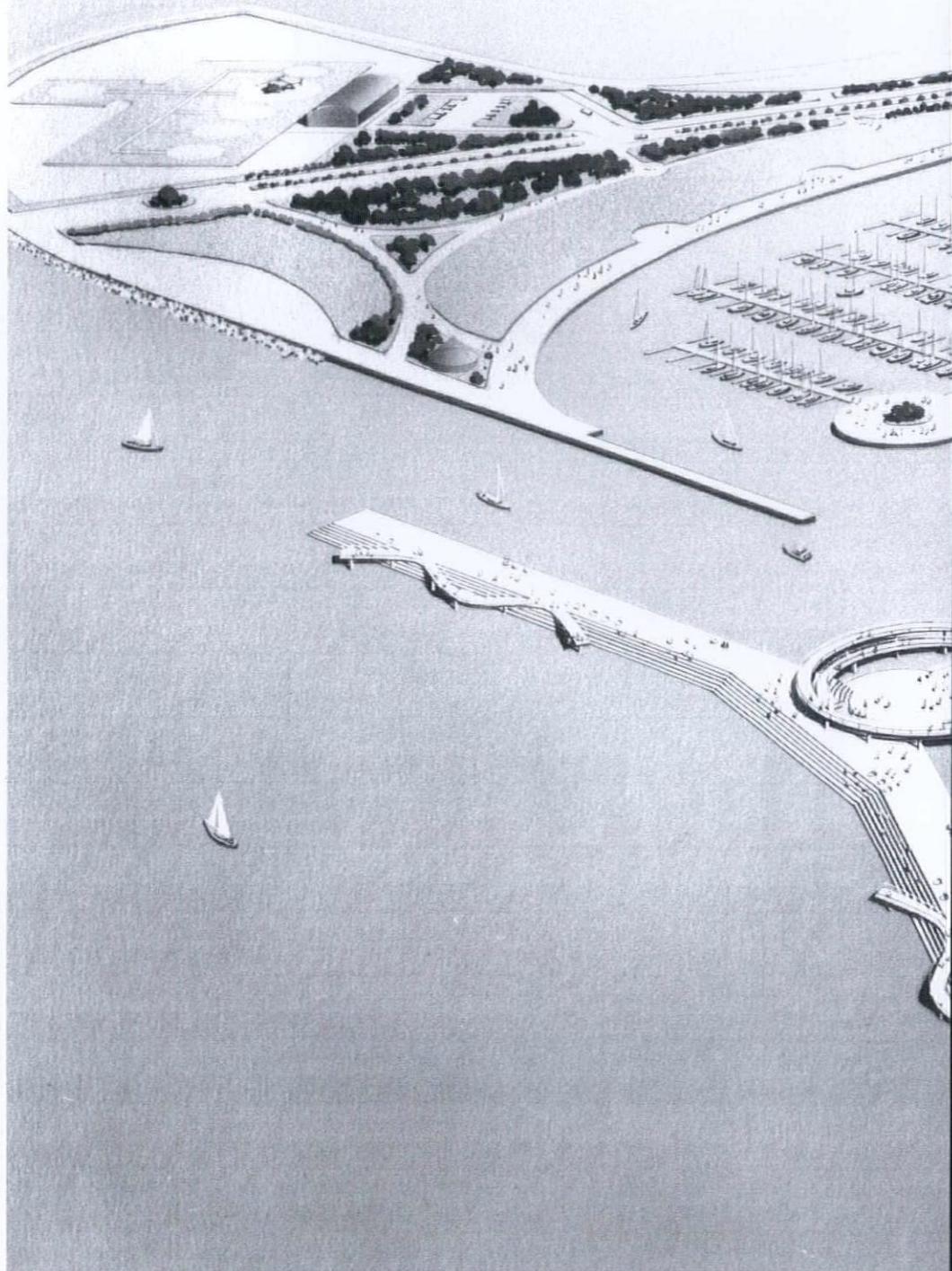
**Ecology :** We Introduced a seawater cleaning system using microbiological gravel filtration and a marine life habitat system within the caisson of the jetty. We proposed to develop plant species suitable for the coastal environment to replenish greenery which was lost around the harbor.

**Jetty Functions :** We proposed to investigate incorporating the newest technologies into the main function of the jetty. Through the use of new wave reducing design, we hope to create rocky shores for beautification and recreational uses.

これまで日本の港湾は、高波や津波、台風の被害、潮の干満が大きいことなどの条件からのみ整備され、防波堤はそうした状況から波を防ぐという機能と構造のみを考慮してつくられてきた。しかし、防波堤も適切で安全な場所を選定してゆけば、最も親水性の高い空間となり、周辺の水域が見通せることから眺望空間にもなり得、大きな可能性を秘めている。近年では、海洋環境の持つ精神的な治癒効果も着目され、単なるアメニティの機能を越えた展開が期待されている。また、防波堤の構造物に生物を生息させることによって、海水浄化を行ったり、漁場の形成をはかたりする試みもみられる。私達の提案は、パーク：オフィス空間、居住施設が港湾に面する幕張新都心の特性を生かすため、川沿いの緑道を提案し、その軸の延長として防波堤を捉え、街から海へと突き出る線形的な都市公園の一部としてデザインする。

**エコロジー：**防波堤の新しい機能として、ケーソンの構造内部に磯間接触による海水の浄化システムと生物生息システムを導入する。また海岸線から失われた緑を回復するため、海水で育つ植物の開発を行い、港湾の緑化を検討する。

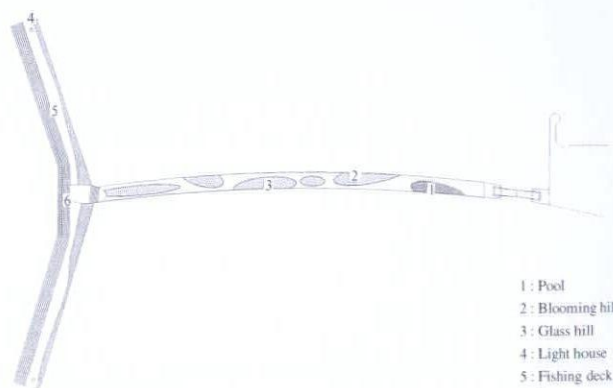
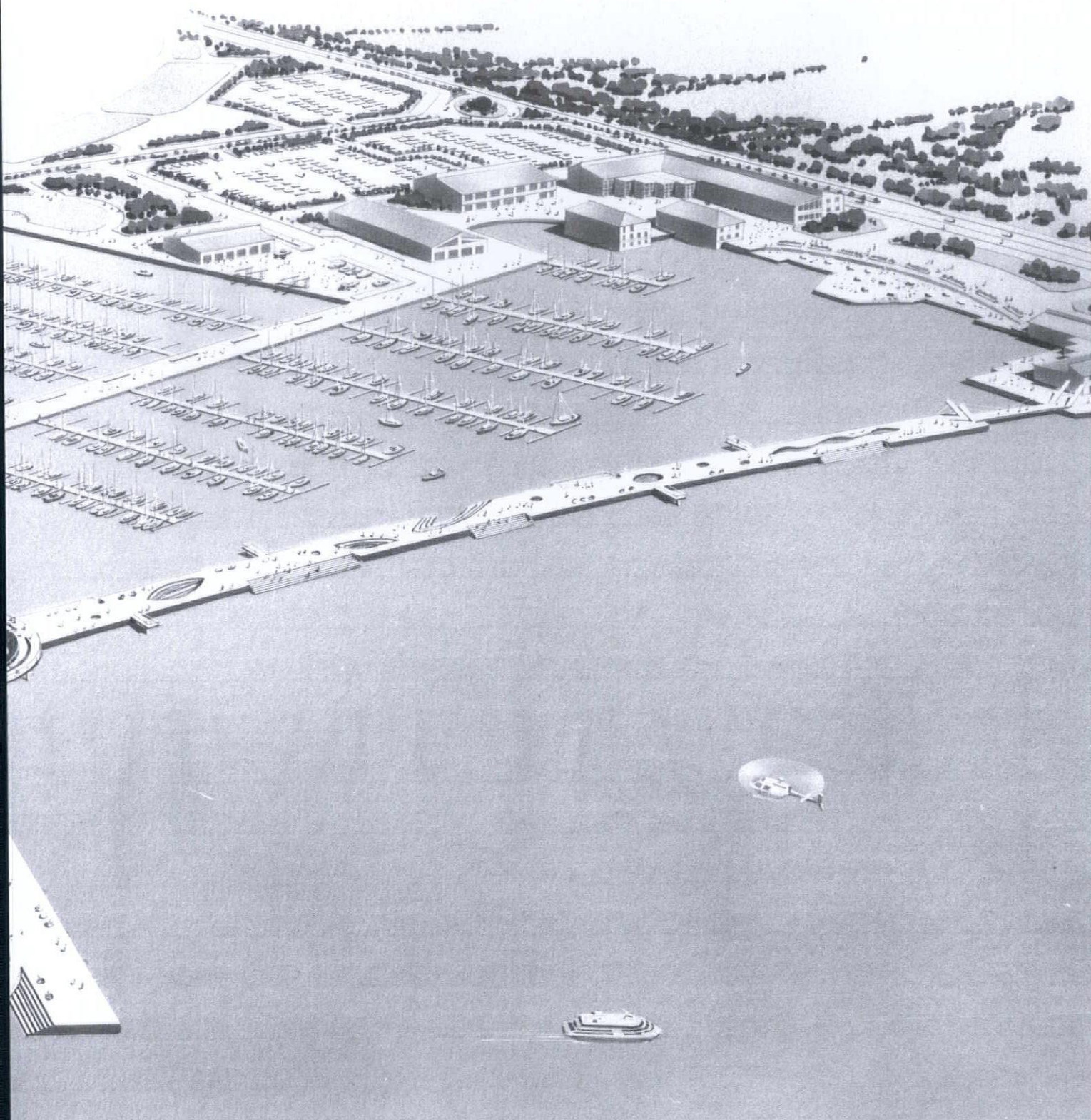
**ファンクション：**防波堤本来の機能に最新のテクノロジーの導入を検討する。新しい消波装置により、美観を守りつつ岩礁を発生させ、その一部を親水空間として利用する。



Type A—Water museum for children

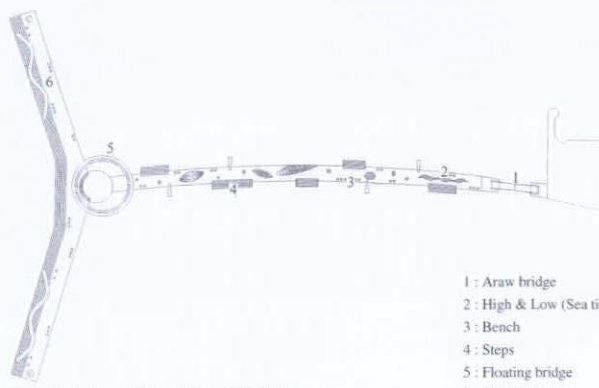
- 1 : Stream
- 2 : Spread columns
- 3 : Sculpture park
- 4 : Open-air stage
- 5 : Light house
- 6 : Fishing deck





Type B—Green floating island

- 1 : Pool
- 2 : Blooming hill
- 3 : Glass hill
- 4 : Light house
- 5 : Fishing deck
- 6 : Steps



Type C—Natural observation of seastide

- 1 : Araw bridge
- 2 : High & Low (Sea tide)
- 3 : Bench
- 4 : Steps
- 5 : Floating bridge
- 6 : Fishing deck



# T Civic Center Project

Taichung, Taiwan 1995

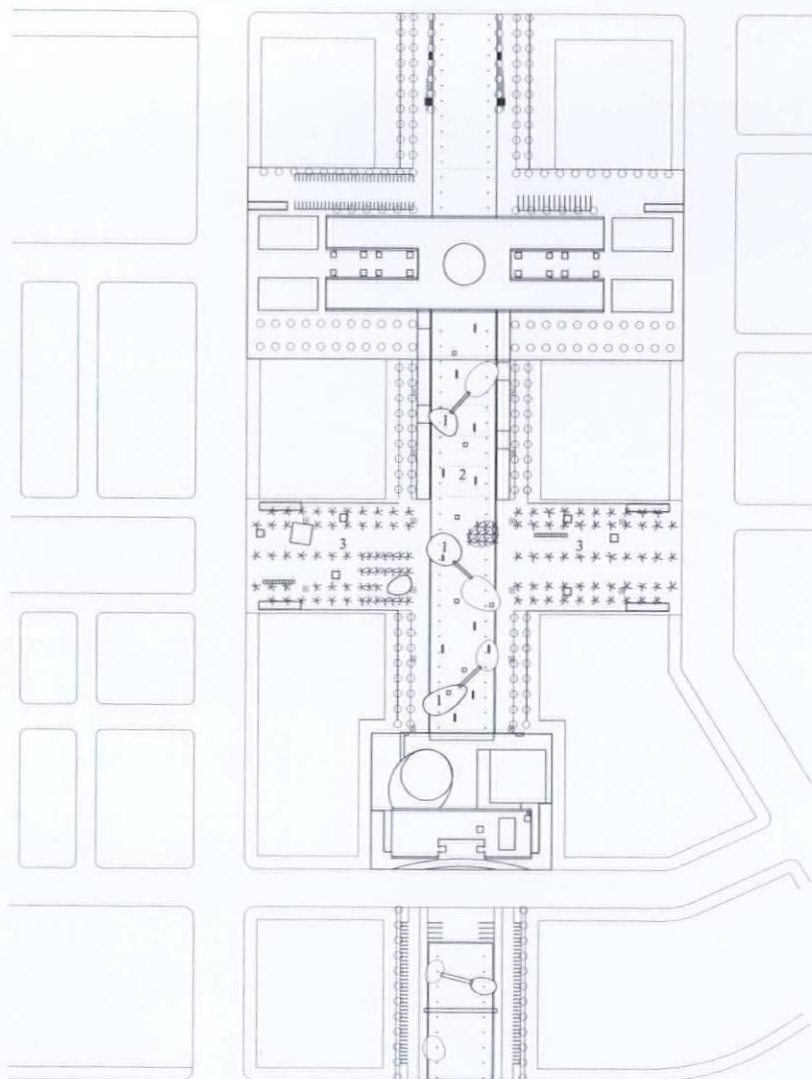
## T市庁舎プロジェクト

The challenge was dealing with the extremely large office space requirements for the city bureaucracy. We adopted a concept of fractal geometry, and inserted many open spaces in the massing of office floors to create a sponge-like organism of super-porous volume. This solution provided environmentally sensitive conditions which were open, active and energy efficient, instead of the isolated artificially closed space of a typical large office building. Unlike the conventional layering of uniform office space, the building is organized as a kit of parts using the three-level modules, and inlaying alternating spaces of architecture (interior) and void (garden).

Scattered vertical service cores and numerous bridges criss-crossing void spaces connect each unit horizontally, and make circulation among the modules possible. Often the bureaucracy is considered to be a hierarchical, tree-like organization, but in reality, it is a complex network of countless sources of information. The fractally divided interior space provides the clear order of a tree system, and the flexibility of a complicated multi-lateral functional relationship, and it is highly effective as an office concept in general.

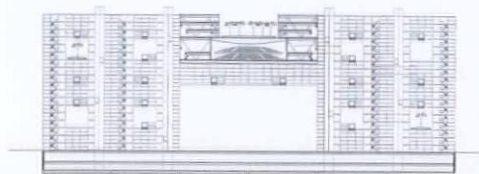
The City Hall and the Assembly Hall are connected by a park with a slow flowing pool and islands of different sizes. People can enjoy evening strolls across the island bridges. The City Hall, the Assembly Hall and the park together create a better communication network for all citizens, a symbolic landscape for the future development of the city.

このプロジェクトでは、行政の執務スペースとして圧倒的な量の事務空間が要求され、それをどう扱うかが大きなテーマであった。基本的にはフラクタル幾何学の考えを採用し、建物の中に様々なスケールのヴォイドが立体的に布置され、全体として超多孔質のスポンジの様な空間を計画した。このスポンジ空間は、大規模オフィスにありがちな自然と隔絶された環境ではなく、自然のエネルギーを効率よく取り込みながら、開かれた活動的な場をつくり出す。具体的には、従来のフラットに積み重なる均質空間に対して、吹き抜けのある3層ユニットを基本とし、建築（室内）とヴォイド（庭園）とが交互に捻り合わされ、部分から全体へと建築が組み立てられていく。また、分散型コアとヴォイドに縦横無尽にかけられるブリッジは自由な水平方向への広がりを生み、回遊性のあるオフィス空間を生み出す。市庁舎の官僚組織とは、一般的に樹系状の組織が想像されるが、実際の活動では無数の情報、ネットワークが錯綜している。規則性を持ちながらも異質な機能を柔軟に内包していくフラクタルに分節化された空間は、これからのオフィス空間に有効なモデルであると考えられる。市庁舎のヴォイドと議事堂を結ぶ公園には、ゆったりと流れる水盤が広がり、大小の島が浮かぶ。人々は島々やブリッジを回避し、夕涼みを楽しむ。市庁舎や議事堂が公園と相互に関係し、コミュニケーションを可能にする開かれたネットワークを目指し、ランドスケープを計画した。



Site plan S=1:6000

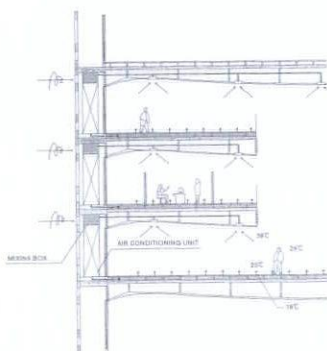
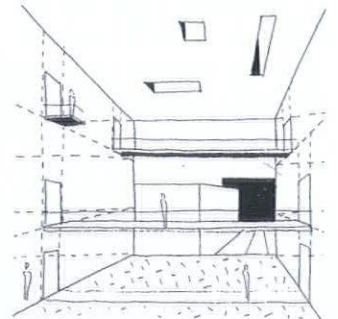
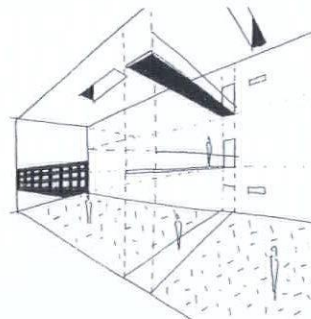
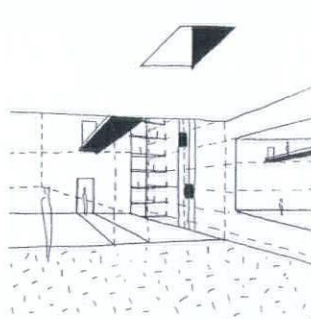
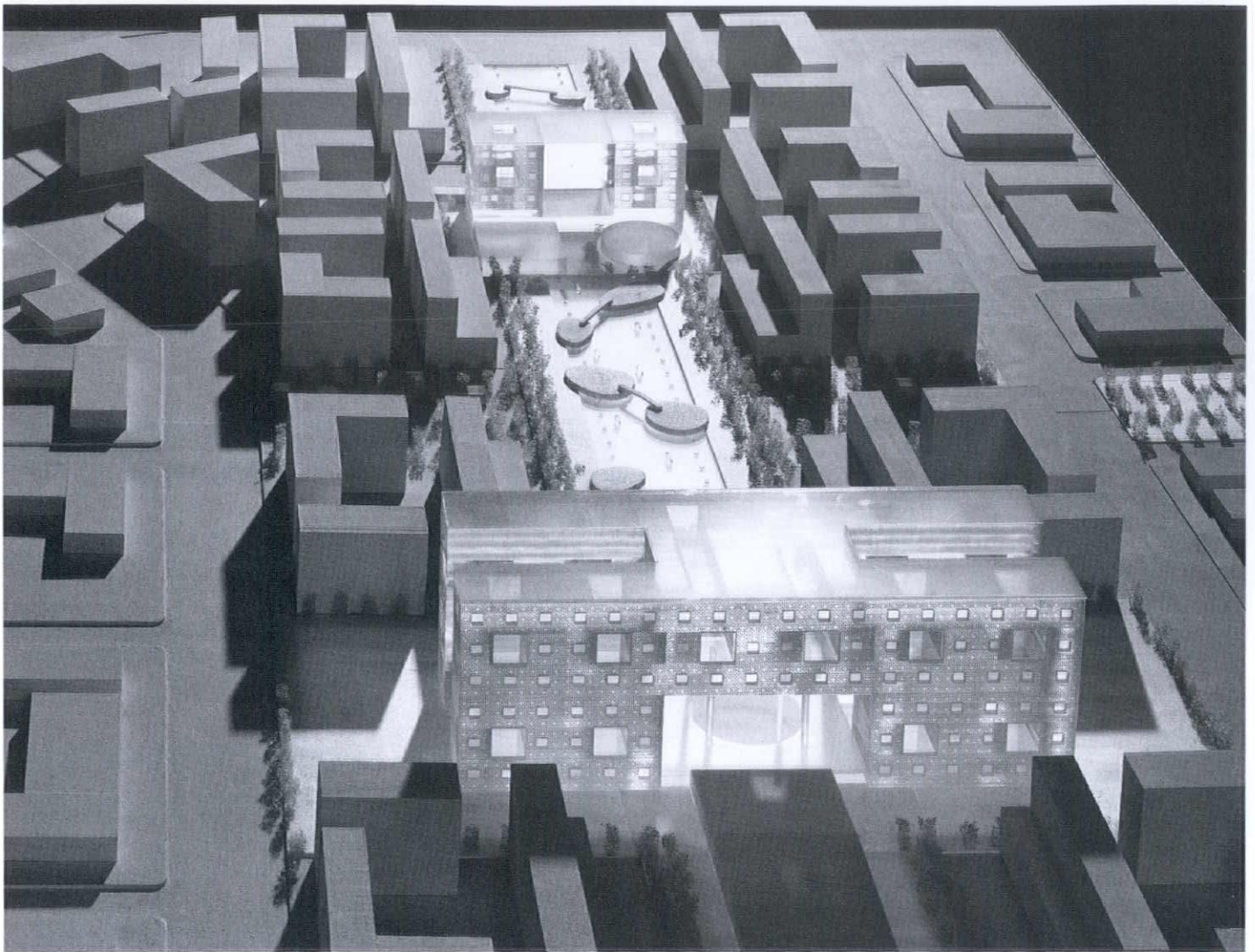
- 1: Island
- 2: Water plate
- 3: Public square



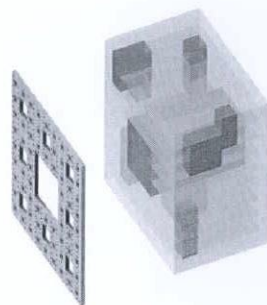
City government elevation S=1:6000







Under floor air conditioning system



Sponge unit





# Yokohama International Port Terminal

Yokohama, Kanagawa 1994

横浜港国際客船ターミナル国際コンペ

A lightly-woven cage structure and glass skin stretch over a wharf to create a new landscape of interior and exterior spaces. Analogous to old European railway stations and conservatories, this open interior space becomes a place where time passes slowly in the omnipresent reflection of water, as in grand voyages. The floating cylindrical space which spans from the city to the sea is a poetic machine that reminds us of allegories of exotic foreign lands and histories, such as a flying Kew Garden, floating islands, *Dejima* and *Kurofune*. It will become a new landmark in the Port of Yokohama.

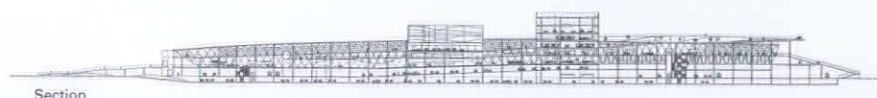
Arrival, departure, services and parking have autonomous, separate circulation, but are effectively interconnected by means of open public space and gardens. This system allows a clear articulation of each function and visual relationships between various program elements. It elevates the dynamic energy of the space and create a spiritual ambience which is full of accidental encounters and provides an out-of-ordinary spatial experience.

Linear exterior gardens intertwine with the "cage" space and thus generate free movement between the interior and exterior. The garden enveloped in architecture takes off from the landscaped approach road, cuts across the building, pushes through the roof, and extends into the sea. The flow of public space from Yamashita Park to the terminal ties elements together from an urban design perspective and promotes the concept of Yokohama Garden Port as a new kind of landscape.

埠頭の空間そのものをランドスケープ化し、軽やかに編み込まれた籠状の構造とガラスの被膜によって、内部と外部のすべてを可能な限り大きく包み込む。浮遊する「籠」(ケージ)の空間は、かつてのヨーロッパの大駅舎あるいは大きな温室のようにおおらかで半屋外的な内部空間を構成し、常に波のゆらめきと光の網のなかに包まれながら、大航海(グランドツアー)のような壮大でゆるやかな時間を紡ぎ出す。都市から海へと突き抜け、浮遊する筒状の空間は、空飛ぶキューガーデン、浮島、出島、黒船など、異国や歴史上の様々なアレゴリーを喚起する詩的マシーンとなり、横浜の新しい名所となるだろう。

到着、出発、サービス、パーキングなどの動線はそれぞれ自律的かつ機能的なサーキュレーションを形成し、その間にオープンなパブリック・スペースと庭園が浮遊する。これらは明確に分節されながらも視覚的な透明性、隣接性を保つことで、内部空間のダイナミズムと偶発的な出会いに満ちた気分の高揚を生み出し、ターミナルを訪れることが未知の船に乗って航海することであるような、新しいランドスケープ体験を生み出すように配慮されている。

「籠」(ケージ)の空間には線形の外部庭園が継起的に組み込まれ、内部、外部の自由な移動、空間的な浮遊状態をつくり出す。建築に内包された庭園は、公園化されたアプローチ道路から徐々に離陸し、建築を縦断し、ルーフを突き抜け、海へと張り出す。山下公園から建築へと至るパブリックスペースの流れは、ターミナルの建築に都市計画的な意味づけを与える。



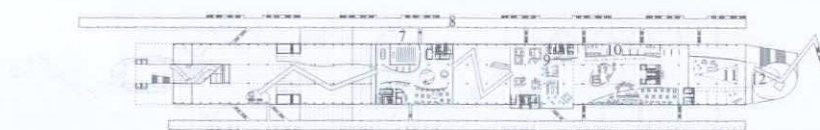
Section



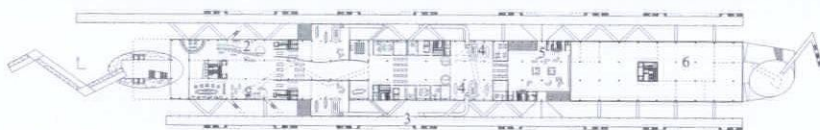
6th floor plan



5th floor plan



4th floor plan

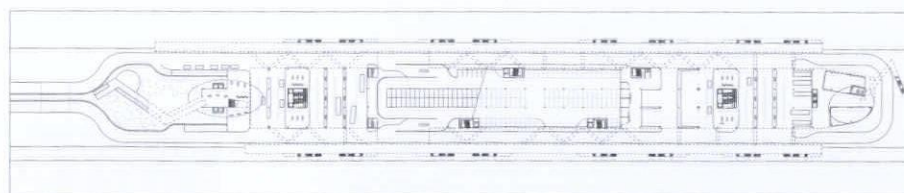


3rd floor plan

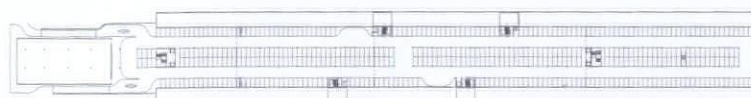
- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1: Lobby         | 7: Visitor hall   |
| 2: Arrival hall  | 8: Visitor's deck |
| 3: Cruise deck   | 9: Shops          |
| 4: Baggage       | 10: Foyer         |
| 5: Arrival lobby | 11: Event hall    |
| 6: Machine room  | 12: Deck          |



2nd floor plan



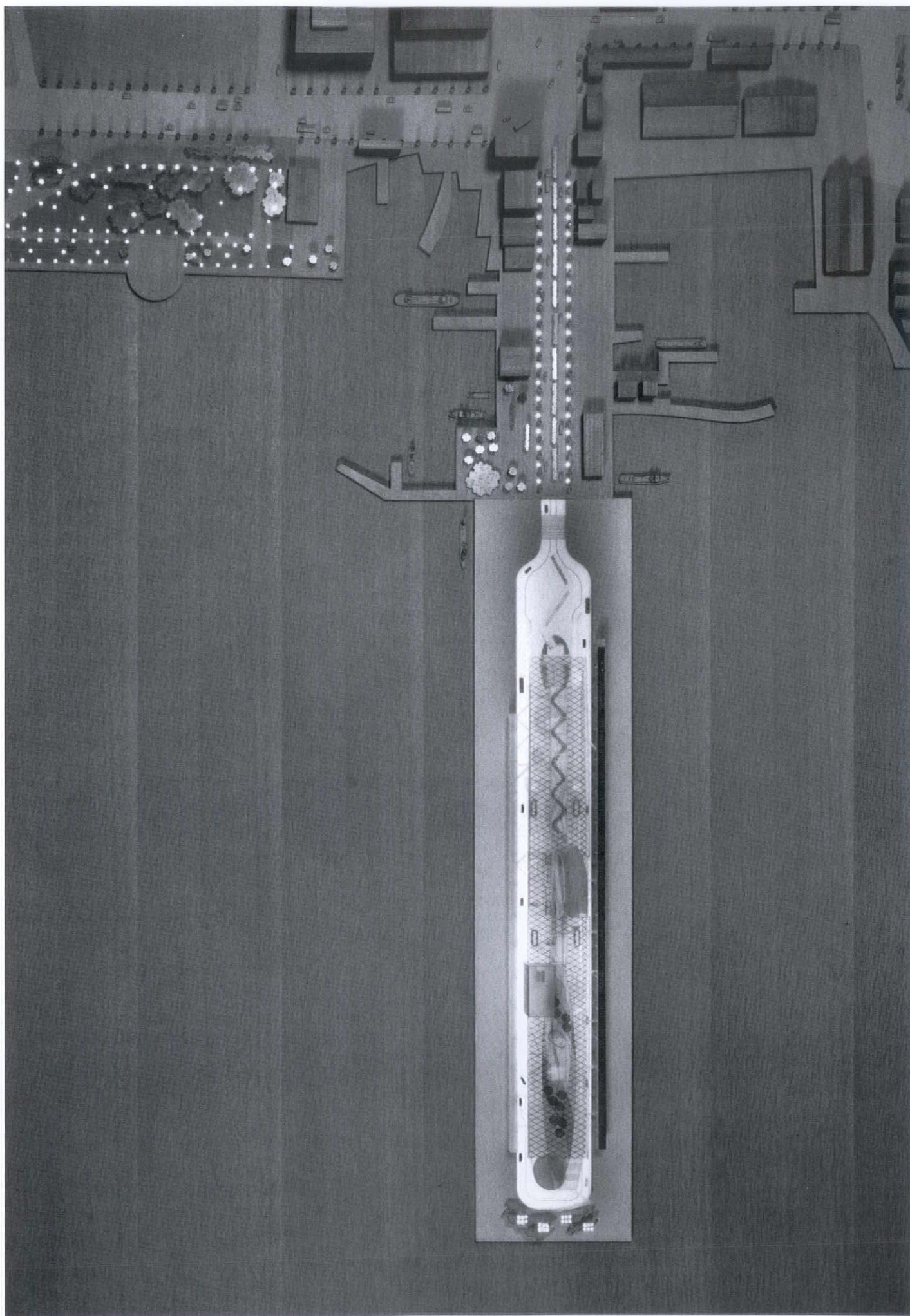
1st floor plan



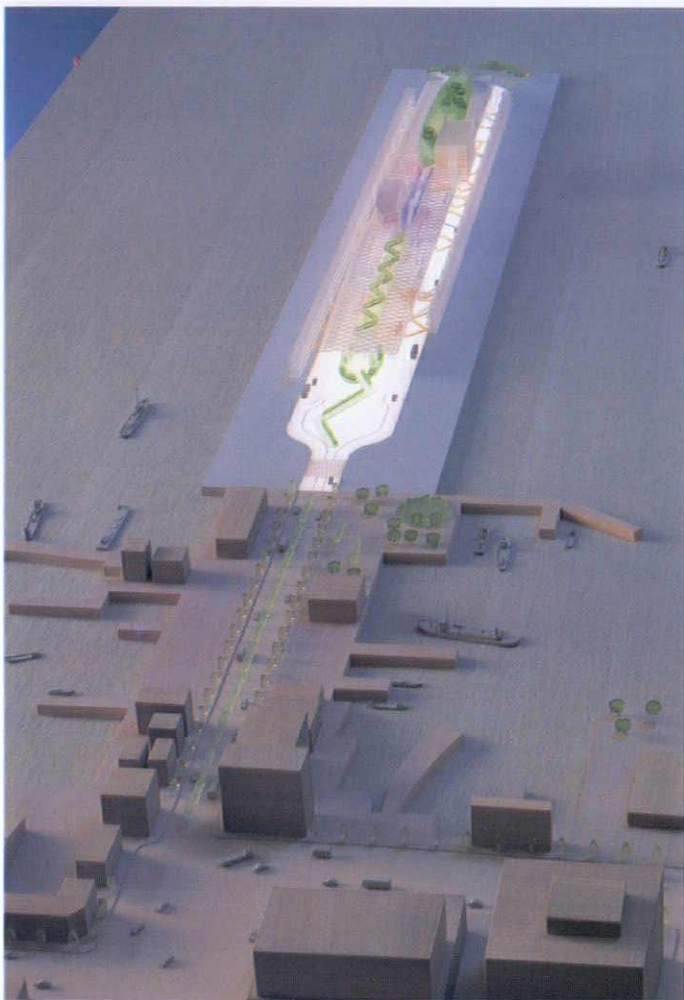
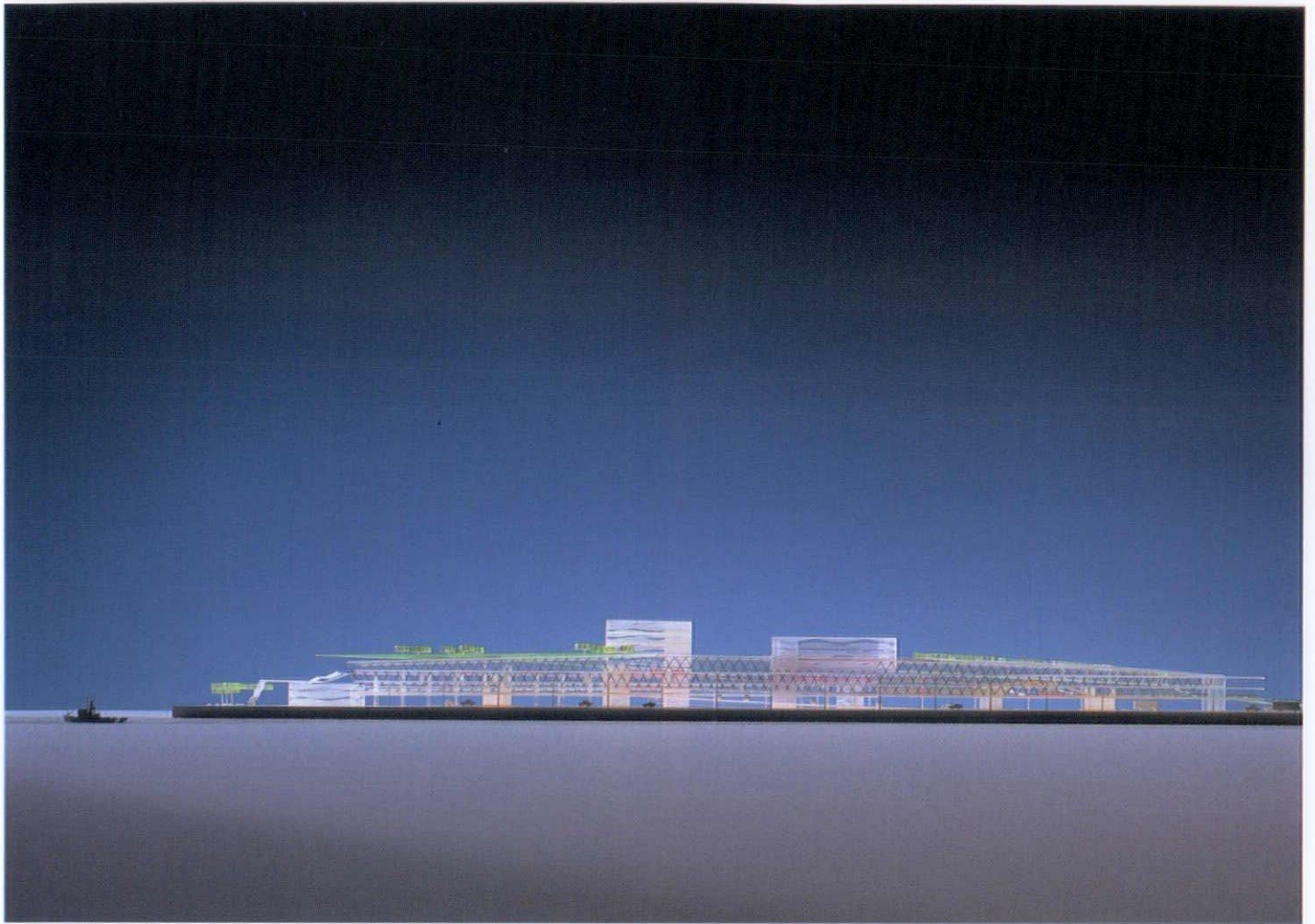
Basement 1st floor plan S=1: 4000



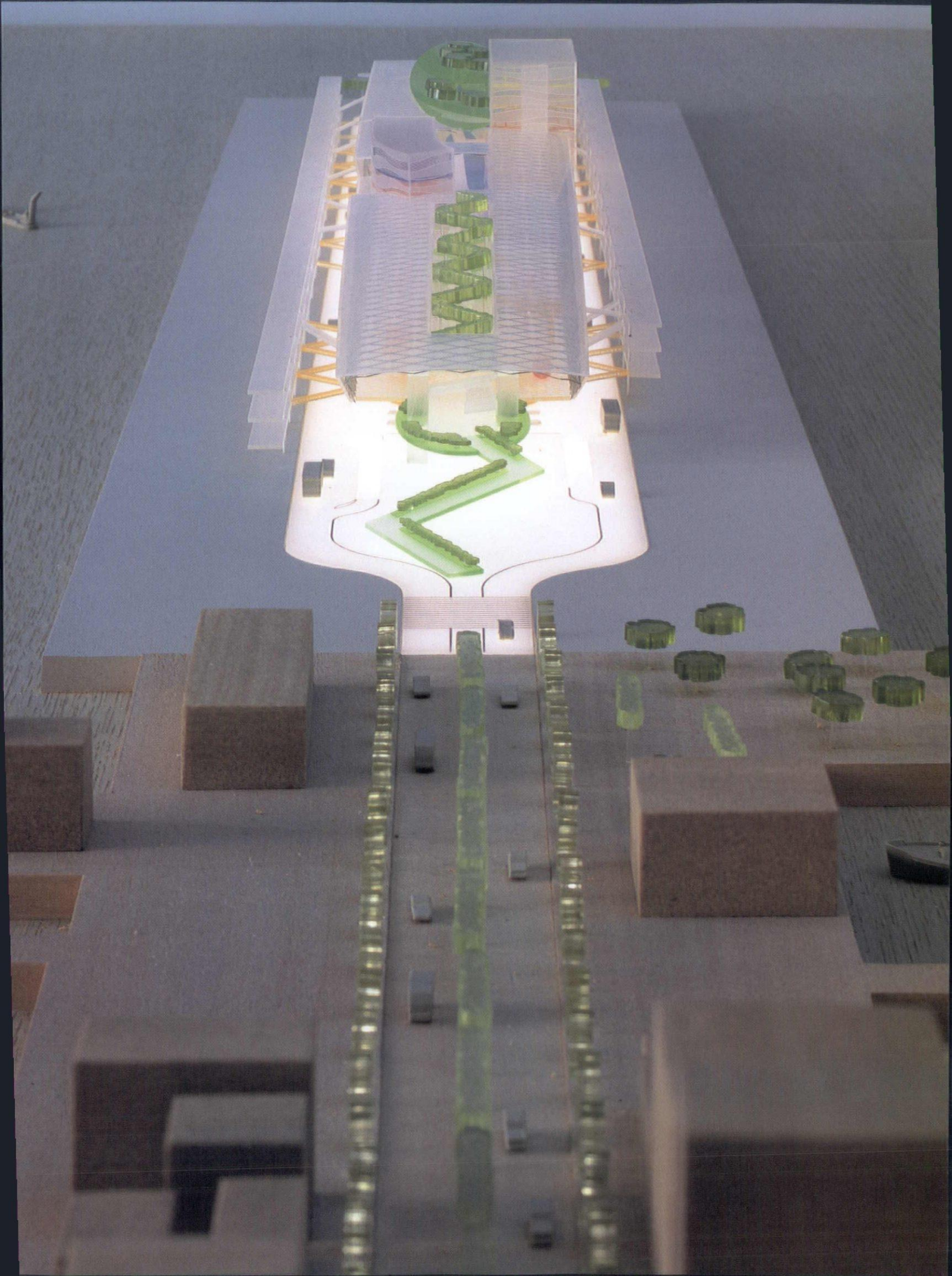














# Cardiff Bay Opera House

Cardiff, Wales, United Kingdom 1994

## カーディフベイ・オペラハウスコンペ

This is our entry in the international opera house design competition for the Welsh National Opera. We were selected as one of four finalists in the first stage of the two stage competition. The second stage was held for eight entrants, including the four invited architects.

Cardiff is currently planning to redevelop its water front as a leisure and business center after a long history as a prosperous industrial and trading port. The national opera house will be the first one built in the last 100 years in the U.K. Our proposal included suggestions for the master plan of large scale redevelopment program of the entire Cardiff Bay area. It is a recreation of port scenes with numerous large cargo ships anchored in the bay in the form of a group of public and private buildings. The opera house site is on a wharf where an old dock will be excavated and restored. There are other similar projects under way within the bay area. We likened the auditorium to a new ship leaving a dock (the back of the opera house and offices) to symbolize the new meaning of the port, rather than a simple-minded tourist oriented reconstruction of history. The auditorium is clad with wood siding, like a giant musical instrument, and enclosed in a glass skin along with foyer spaces. It is a shining Opera Ship, a messenger of the rebirth of Cardiff Bay. The foyers are open to the public plaza developed around the restored dock. A giant outdoor video screen on the wall broadcasts opera performances inside and turns the plaza into an amphitheater with the spectacular background of the bay.

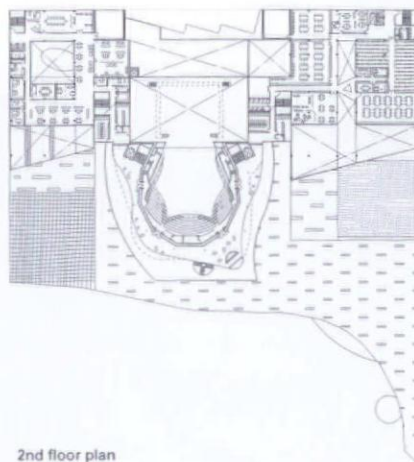
ウェールズ・ナショナル・オペラの国際コンペティションのための提案である。第1段階はオープン・コンペで、我々を含む4案が選ばれ、第2段階は招待建築家4人を加えた8人で行われた。

かつて工業・貿易港として興隆していたカーディフは、次の時代へ向けてオフィスとレジューの基地としての再生をはかっており、100年振りに建設される国立オペラハウスは再開発の中心である。私達の提案は、計画の背景となるカーディフ湾の大規模な再開発の方法に対する示唆を含むもので、湾岸に建つ公共施設やホテル、オフィスビルの建築によって、多くの大型船が無数に停泊していたかつてのカーディフの歴史を新しい形で反復しようというものである。オペラハウスの建つ場所は、埋め立てられてしまった古いドックを再生しようというエリアであり、湾岸全体で同様の計画が進行していた。私達はオペラハウスのオーディトリウムをドックから推進していく新しい船として、バックヤード、オフィス部分をドックとして見立て、古い港の再生が単なる観光的なオブジェにとどまることなく、新しい価値を発生させていくことを意図した。

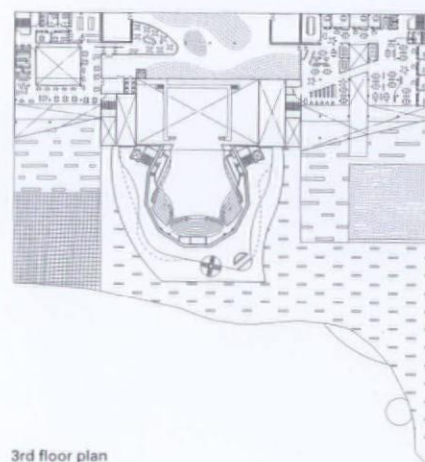
巨大な楽器のように木で貼られたオーディトリウムは、ホワイエごとガラスの皮膜で包まれ、湾岸の中にひときわ輝く光のオペラシップを出現させる。ホワイエ上部に設置された大型の映像スクリーンは、広場そのものを海に向かって開かれた屋外劇場とし、湾岸全体をスペクタクルの場へと変貌させる。

SD9511  
136

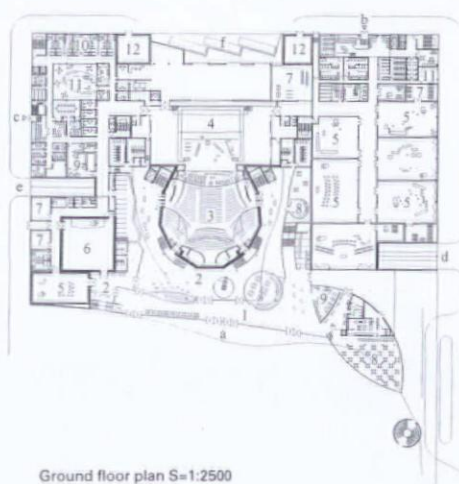
- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1: Concourse       | a: Audience entry |
| 2: Foyer           | b: WNO entry      |
| 3: Auditorium      | c: Stage door     |
| 4: Stage           | d: Parking entry  |
| 5: Rehearsal room  | e: Parking exit   |
| 6: Cloak           | f: Loading bay    |
| 7: Storage         |                   |
| 8: Cafe/ Bar/ Shop |                   |
| 9: Office          |                   |
| 10: Dressing room  |                   |
| 11: Green room     |                   |
| 12: Mechanical     |                   |



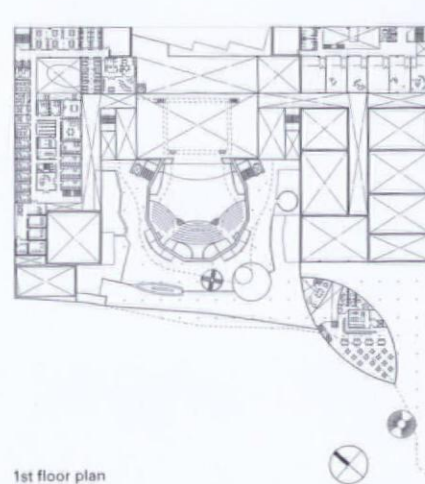
2nd floor plan



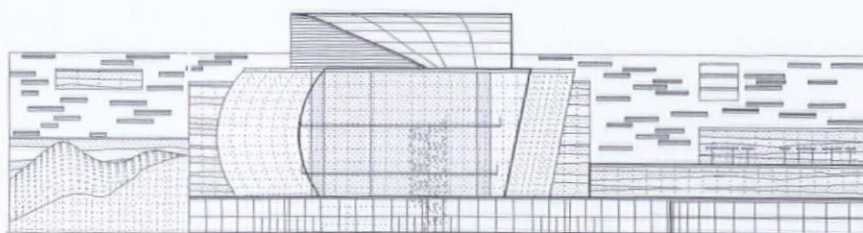
3rd floor plan



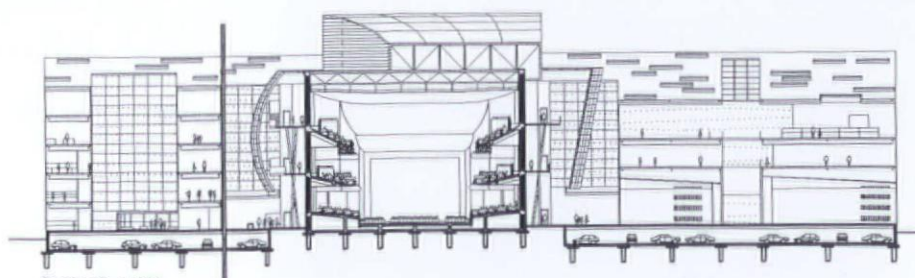
Ground floor plan S=1:2500



1st floor plan

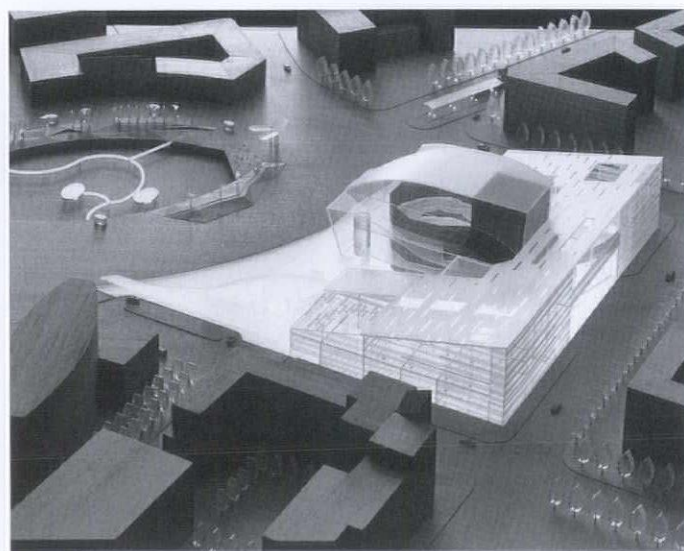
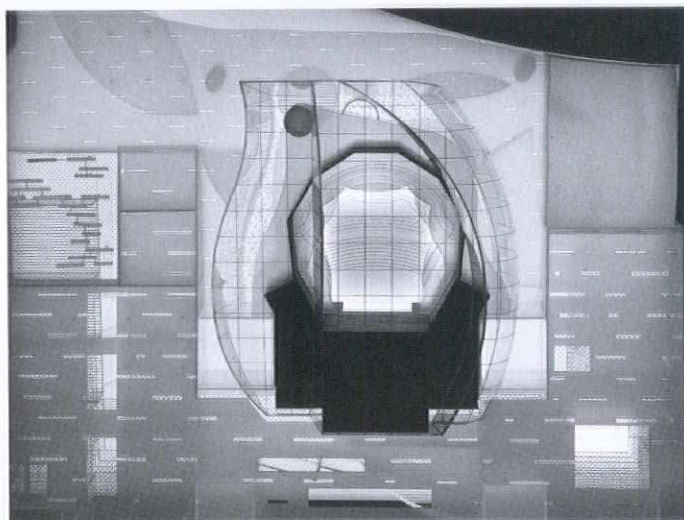
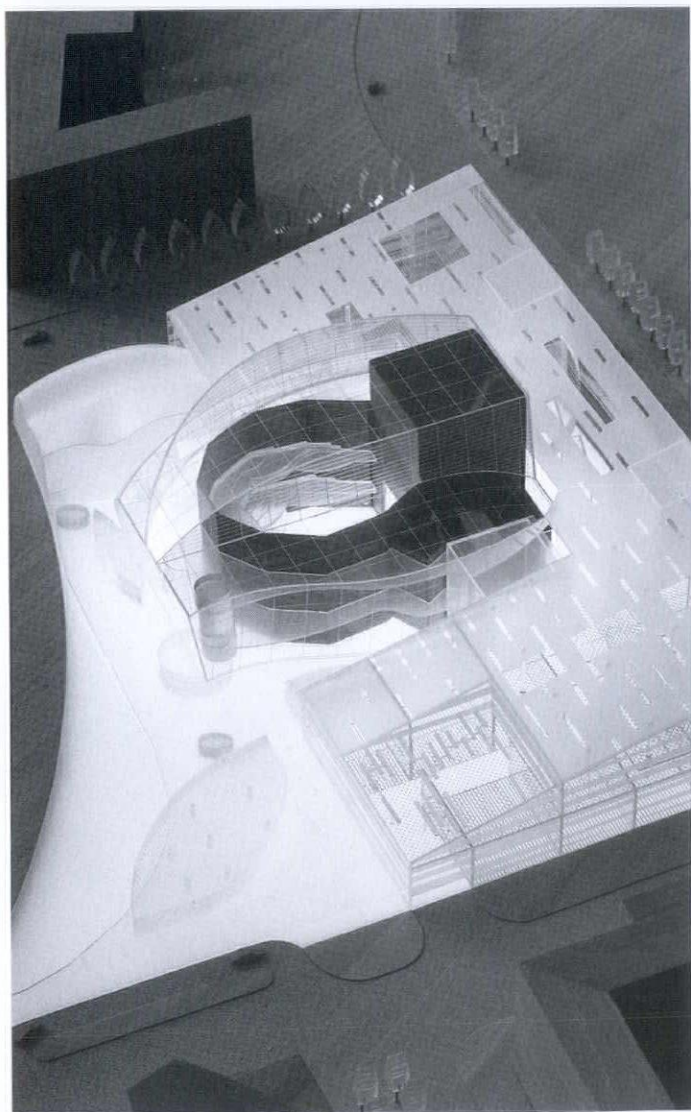
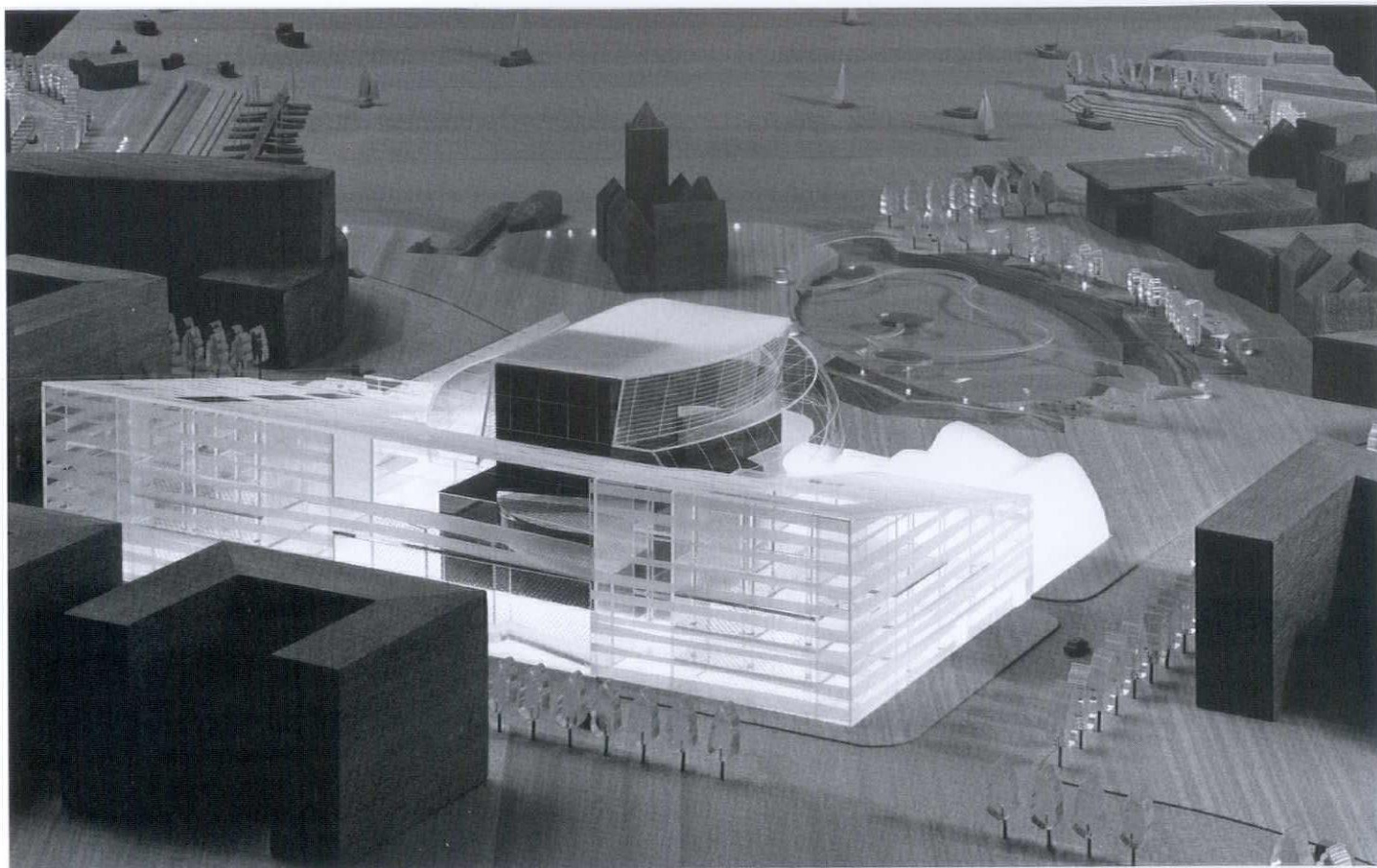


South elevation S=1:1200



Section S=1:1200

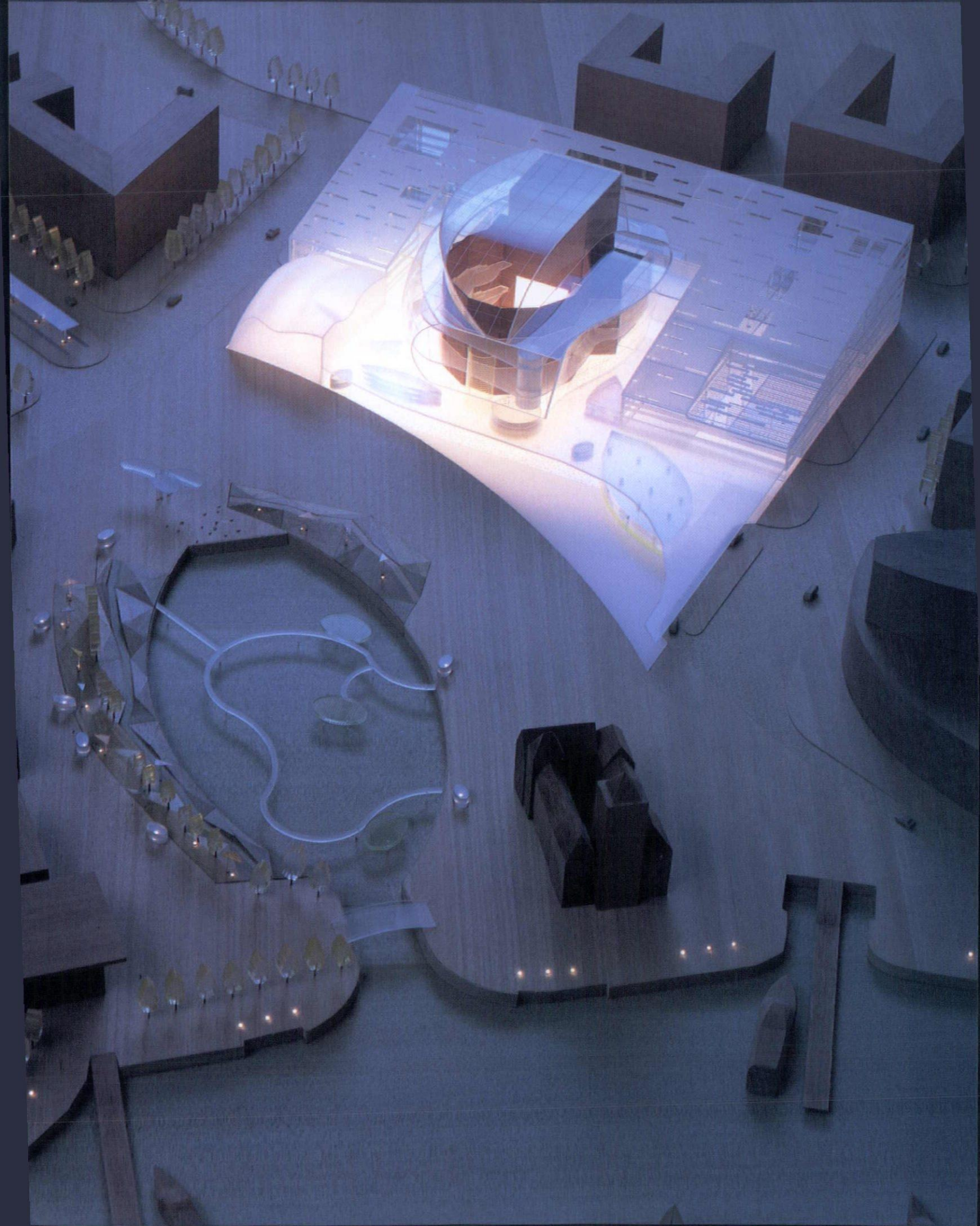














# Niigata City Performing Arts Center

Niigata, Niigata 1993-

新潟市民文化会館および周辺整備計画 (仮称)

## 1.City

### Place of Emerging City/Archaeology of the City

Waterfront areas have great potential as public space. From ancient times, most cities were built on river deltas, river banks and seashores. The waterfront has always been a place where men and women gathered from far away; theaters and markets were held in different seasons, goods were exchanged, and differences were accepted. There was full of the energy of the open area. The city was on water, and a delta island was a stage.

### Niigata, City of Water

Niigata is a city like a floating island surrounded by the Sea of Japan and the Shinano River. Geological changes of the river mouth are directly related to the history of the city. In the past, Niigata's urban space was closely tied to the waterfront. The city was laid out in a pattern to connect the sea and the river, with a network of canals running throughout. It has always lived with water. The site of this project is on reclaimed land that was a part of the Shinano River basin until the early Showa period (1920's).

## 2.Landscape

### Seven Floating Islands (Hanging Gardens)/Floating Bridges

Reminiscent of the numerous islands which dotted the Shinano River, the seven islands (floating gardens/man-made plateaus) are laid out to

respond to complex site conditions. This archipelago is set at the height of the main level of various facilities within the site, and by floating around these facilities, the islands act as mediators of both new and existing buildings. The network of islands generates new relationships among public halls scattered around the site, and simultaneously turns the exterior space into a giant performance stage.

The islands reduce the visual volumes of the facilities, provide parking spaces underneath, and green park spaces above. With special planting schemes and use of water, each island creates a unique theatrical garden. They can be used for a number of activities such as outdoor concerts, plays, garden parties, flower viewing, poetry reading, tea ceremonies, bazaars, summer dances, and so on. New chains of spatial relationship will be created when more than one island is used for different functions. The islands in the forest and lobbies of all the halls are connected by bridges to provide a network of pleasant walkways uninterrupted by vehicular traffic. The adjoining Hakusan Park is known as a promenade garden. The bridge and island system expands that characteristic to a larger urban scale to connect the built-areas with the Shinano River. Visitors can either take bridges directly to their final destinations, or enjoy walks in the forest from Hakusan Park to the riverbank before and after concert.

## 3.Architecture

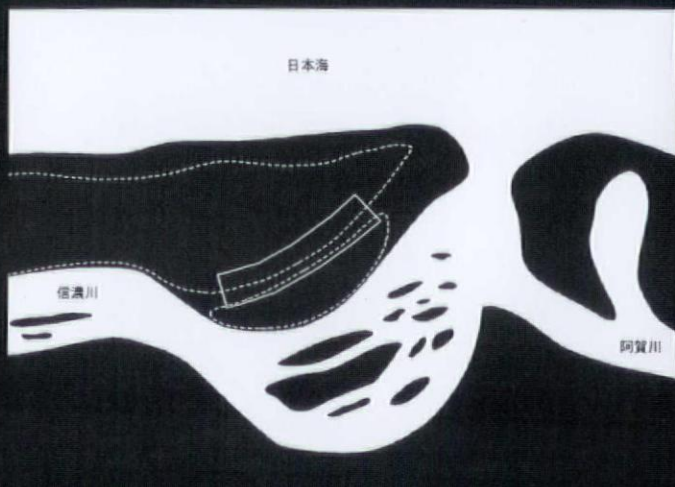
### High-tech Screen/Floating Field

Above the level of the main lobby and the foyers, which is the level of the floating islands as well, a large glass membrane gently wraps a 1,900 seat concert hall, a 900 seat theater, a 375 seat Noh theater and rehearsal rooms. This screen is made of two layers of transparent glasses with DPG (Dot Pointed Glazing) system and custom-made double glass panels with built-in louvers. In combination with two layers of thin perforated stainless steel sun shades for energy efficiency, the screen creates subtle interplays of reflection and transparency with the surrounding environment.

By enclosing the inevitably solid auditorium walls inside the glass screen, the perimeter walls are open all around to create semi outdoor, terrace-like public lobbies and foyers. Because of its circulatory nature, the public space creates places for different activities for people along the way, even when there is no performance inside.

The adjacency of the three major auditoria may provide interesting cross-categorical possibilities; for example, performing one act of an opera in each auditorium. Except for the concert hall, the halls and the rehearsal rooms employ isolated structural systems in order to achieve high acoustic separation characteristics.

The roof structure, where differing curved surfaces due to different interior space requirements meet, is covered with light-weight artificial soil. The completely grassed tilted concave green lens form of the roof presents a new image of public buildings and landscape.





## 1. 都市

### 都市のできる場／都市のアルケオロジー

水辺の空間は、パブリックスペースとしての大きなポテンシャルをもっている。きわめて古くから都市のできる場は中洲、河原、浜であったというが、このような水辺の空間は、春は花、秋は紅葉に彩られ、広い範囲から男女が集まり、芸能が演じられ、市の立つ場であった。物品の交換が行われ、異なるものたちの共存を許し、フリースペース（解放区）としてのエネルギーに満ちていた。都市は水辺に発生し、中洲は舞台であった。

### 水の都市／新潟

新潟は、日本海と信濃川の間で浮島のような都市であり、河口の変遷はそのまま都市の歴史に結びついている。かつての新潟の都市空間は水辺と直に面し、川と海を結ぶ街路を中心に市街地のコアが形成された。市内には掘割のネットワークが縦横に走り、都市はいつもゆらゆらとした水の流れのなかにあった。本計画の敷地は、昭和初期までは信濃川の一部であり、都市のコアが水辺に接するエッジであった。

## 2. ランドスケープ

### 7つの浮島（空中庭園）／空中ブリッジ

かつて信濃川に数多く浮かんでいた中洲のような、緑で覆われた7つの浮島（空中庭園／人工台地）を計画し、これらの群島によって敷地内の複雑な与条

件に対応する。浮島群は、各施設のロビーレベルと同等の高さに位置し、それぞれの施設の周りに浮かぶことによって、新しくできる施設と既存の諸施設との間に、ゆるやかな連結をもたらす。これによって、ホール施設が集約する敷地全域を群島システムとでもいふべき新しい関係へと導く。浮島群は屋外をも舞台芸術の場とする。

浮島群は、各施設のもつ大きなヴォリュームをやわらげ、地下化できない駐車場を確保しながら上部を公園化し、緑被率を最大限にする。それぞれの浮島は、特色ある植栽と種々の水のデザインによるシアトリカルな庭園という趣をもつもので、それぞれが特色ある舞台として計画されている。

林の中に浮かび上がる浮島群と各ホールのロビーは、空中ブリッジによってネットワークされ、車の動線と交錯することのない歩行者のための快適な環境を形成する。既存の白山公園は、回遊式庭園として親しまれているが、空中ブリッジは回遊性を都市的な規模へと拡大し、市街地から信濃川への流れをつくりだす。訪れる人々は、空中ブリッジによってストリートに目的地へと到達できるとともに、自然に白山公園からやすらぎ堤への散策に誘われ、木々の中を「空中散歩」しながらビフォー・コンサート、アフター・コンサートを楽しむことができる。

## 3. 建築

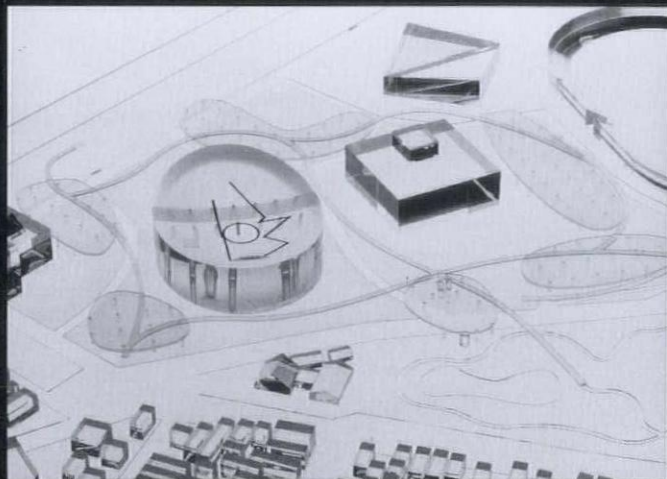
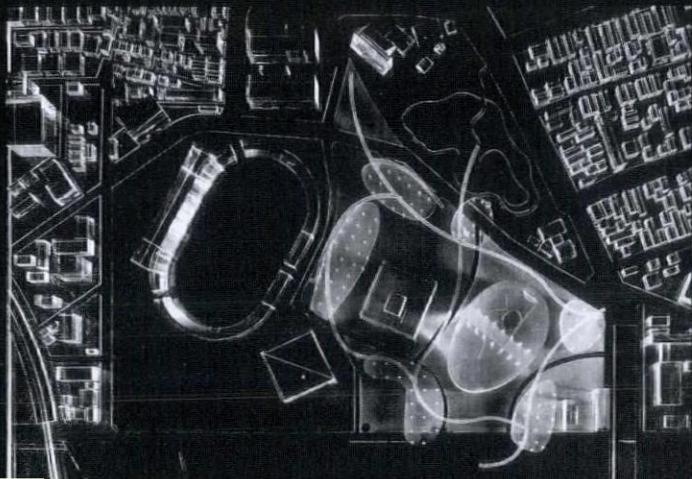
### テクノロジカルな幔幕／浮遊する原っぱ

楽屋、事務室、機械室等が収められた浮島（空中庭

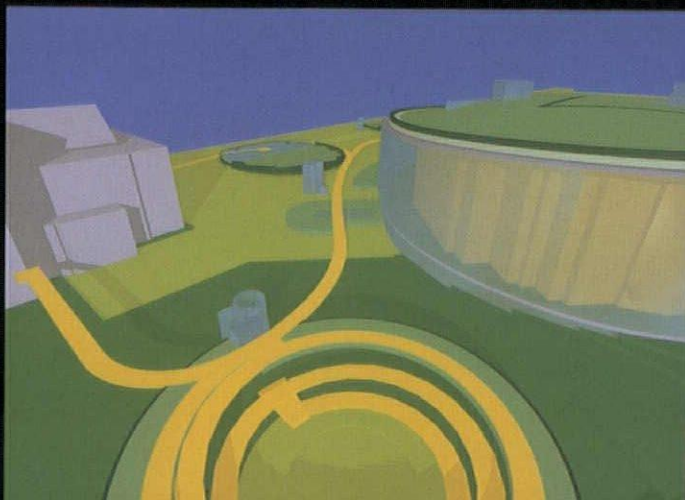
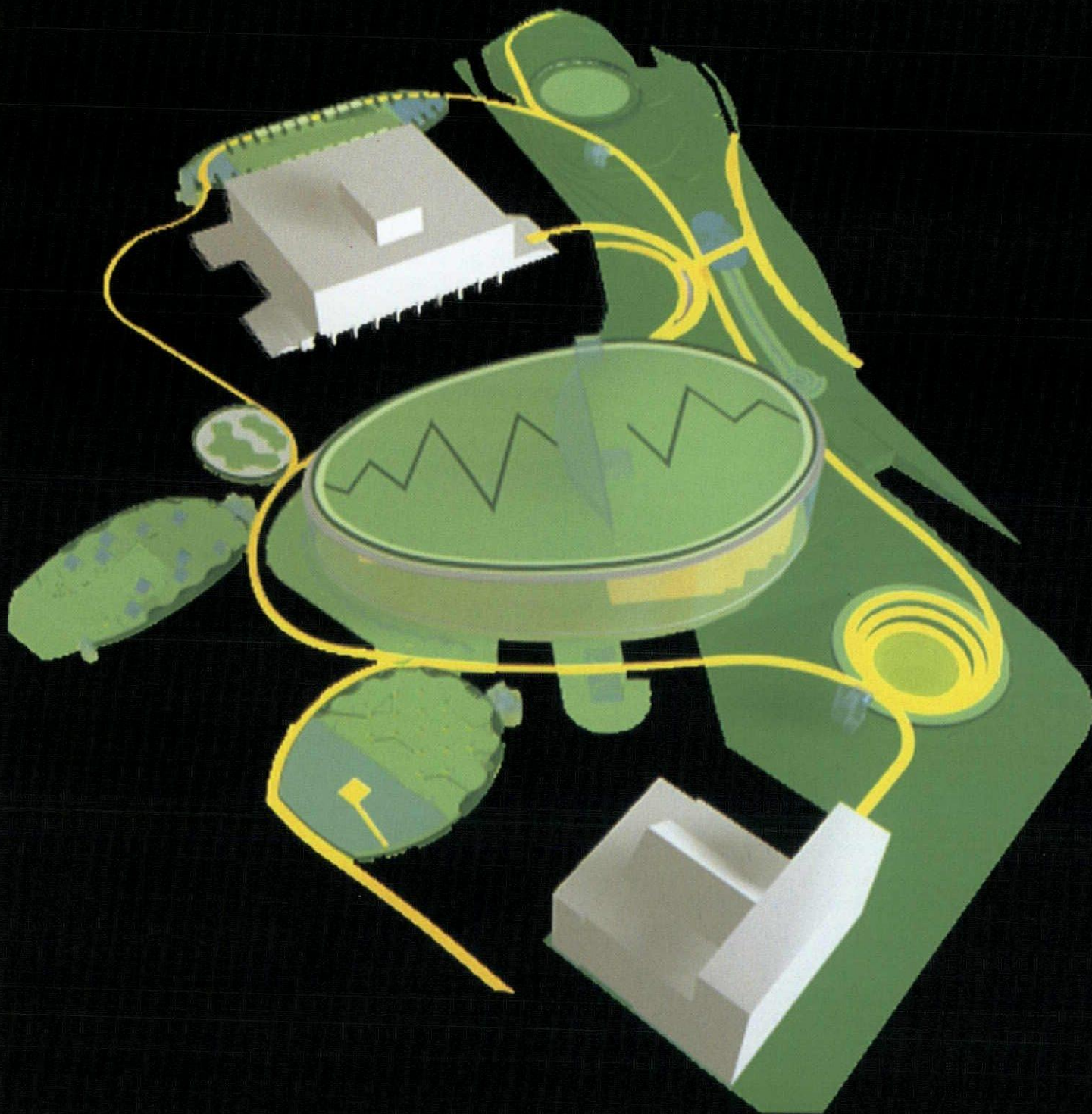
園）と同等レベルの台地の上に1900席のコンサートホール、900席のシアター、375席の能楽堂という3つのホールとリハーサル諸室が立ち上がり、これらのすべてはゆるやかなガラスの幔幕で大きく包み込まれる。ガラスの幔幕は、DPGによる極めて透明度の高い2重ガラスとルーバーを内蔵した特殊複層ガラス等の組み合わせからなり、ステンレス製のダブルの薄膜による遮光スクリーンにより、省エネルギーを考慮した外部環境との細やかな対応が風景と透明度の変化となって現われる。

ホール施設に不可避免的に現われてくる大きな壁面をすべて内側に折り込むことによって、林に囲まれた半屋外のテラスのような360度解放された環状のパブリックエリア（ロビー／ホワイエ）を実現する。環状のパブリックエリアは、建築内部に回遊性と局所的なさまざまな場所を生み出すことによって、多様な活動の容器となり、上演のない時にも解放され、市民の自由な文化交流の場となる。

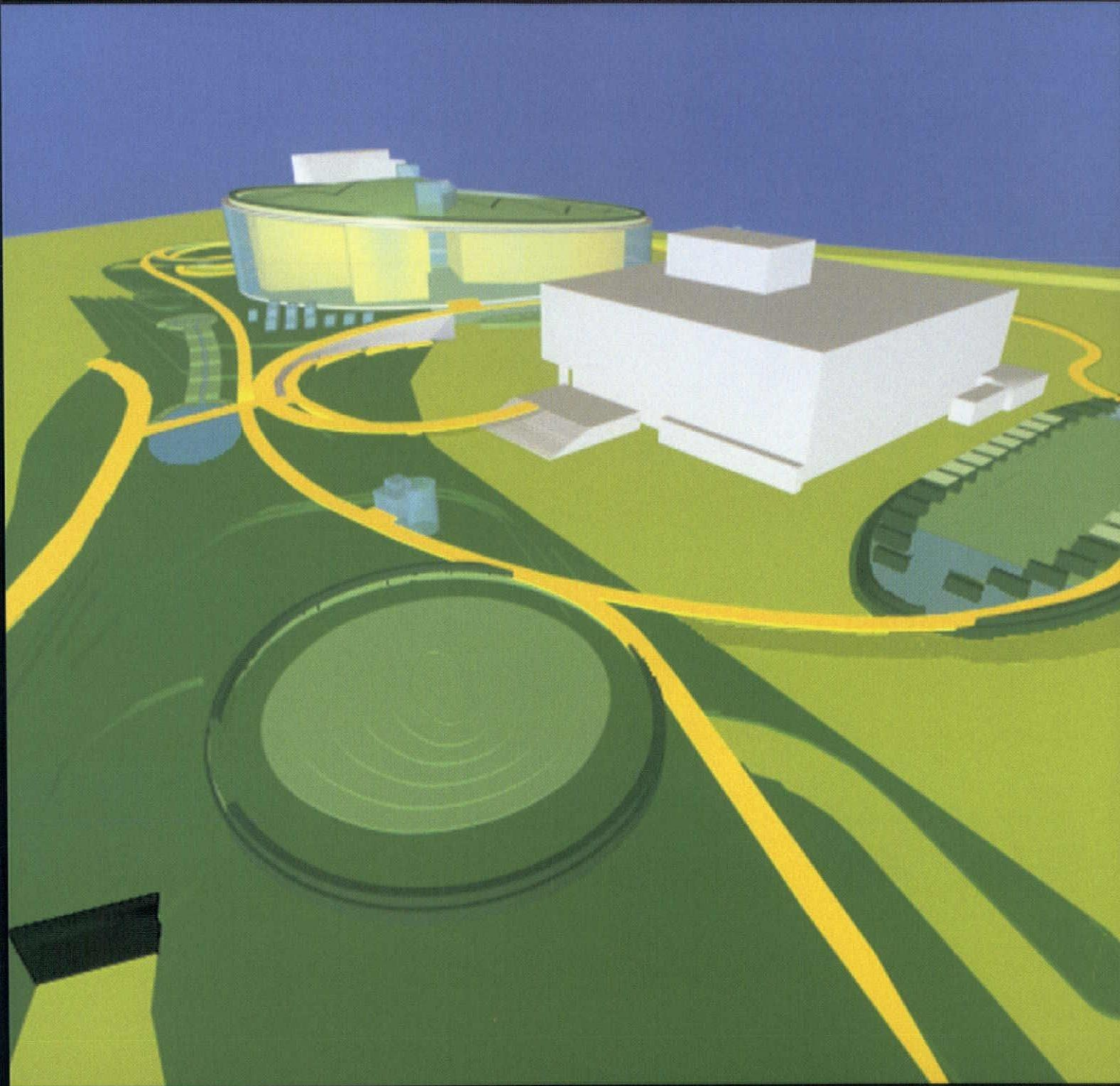
3つの専用ホールは、ひとつにパッケージングされることによって、例えばひとつのオペラを3つのホールで1幕ずつ上演するなどの異なるジャンル間の複合的な交流が期待されている。コンサートホール以外の各ホールとリハーサル室には浮構造が採用され、音響的に独立した高度な遮音性能を達成する。内部空間にしたがって異なる曲率（ふくらみ）が出会う屋根面は、浮島（空中庭園）と同じく人工軽量土壌と、押えコンクリートなしの新しい緑化システムによって、全面的に緑化され、斜行するレンズ状の緑の丘が浮かぶランドスケープは、公共建築の新しいイメージをつくりあげる。



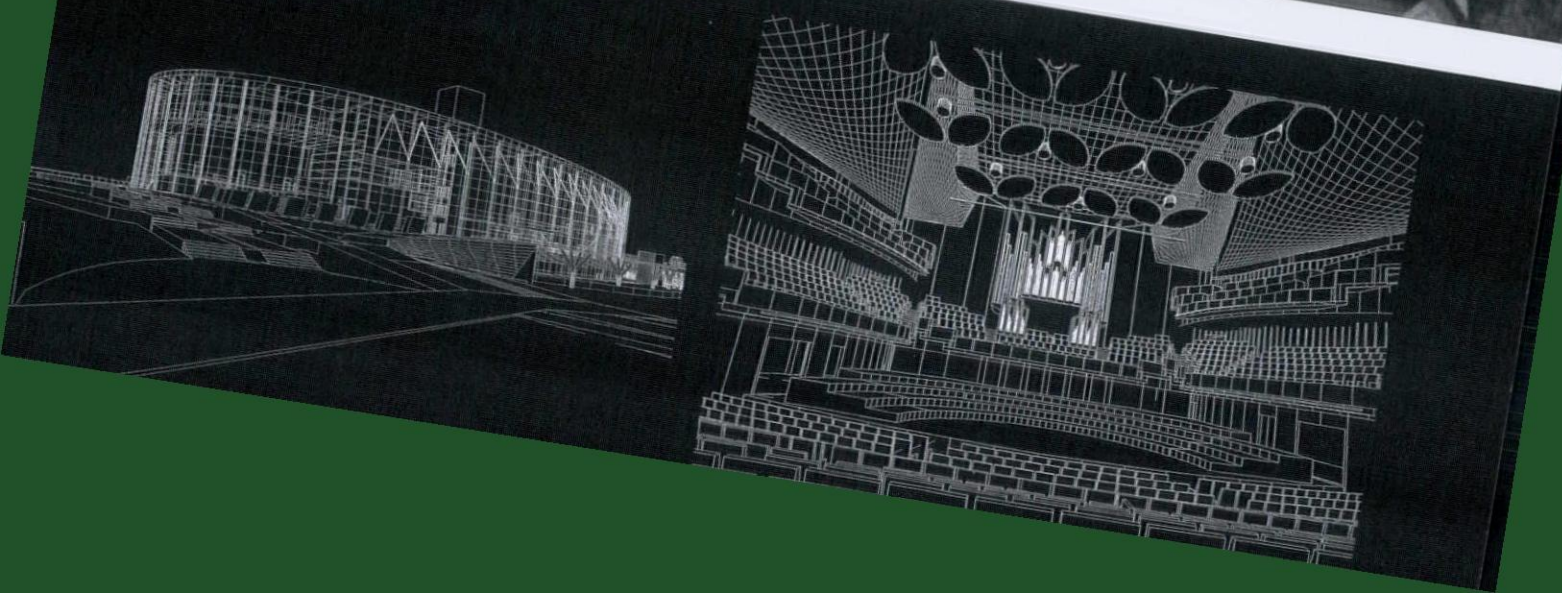
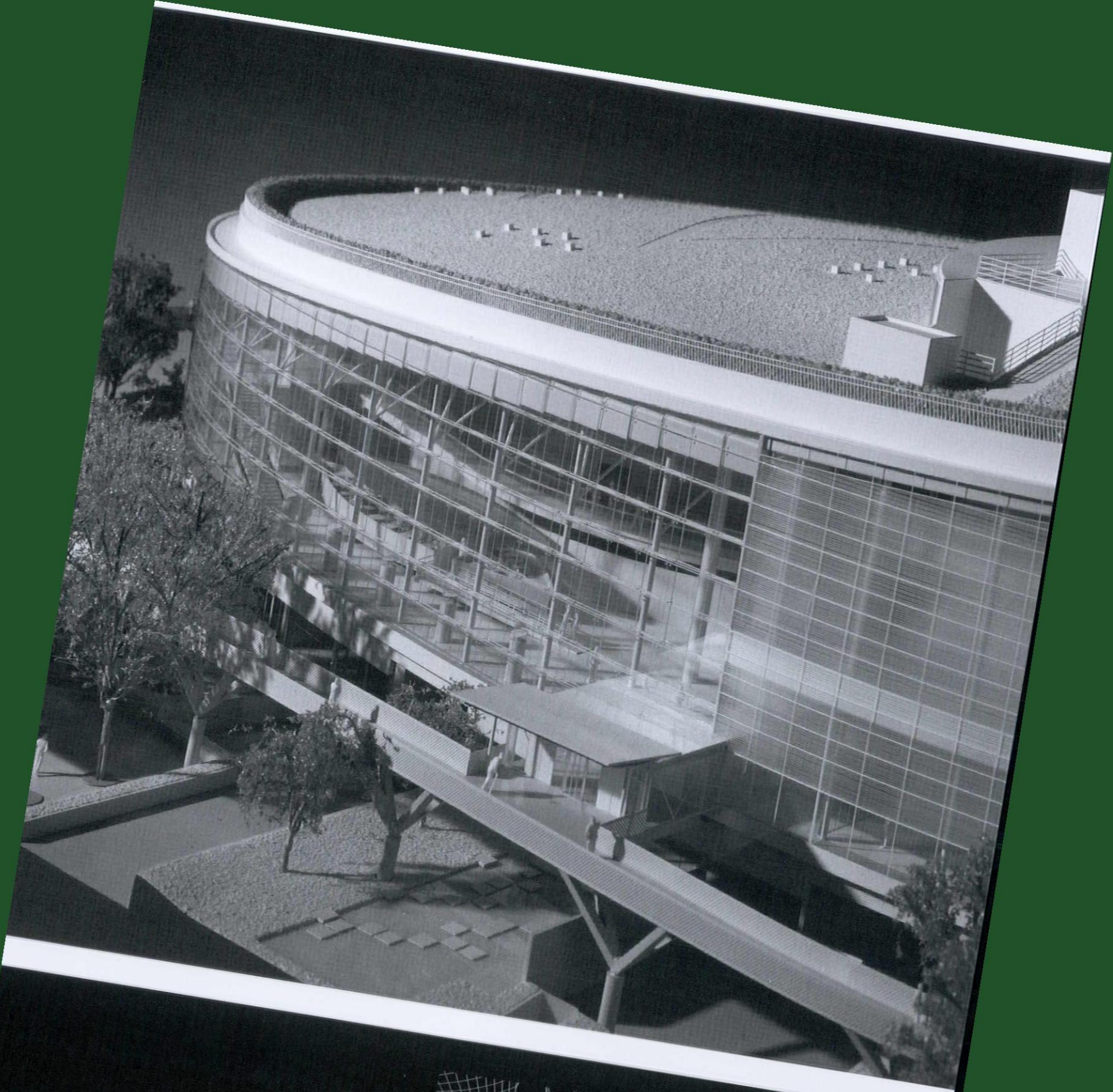




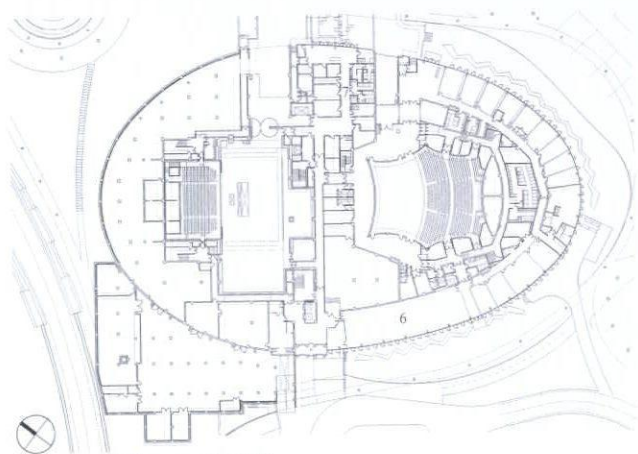
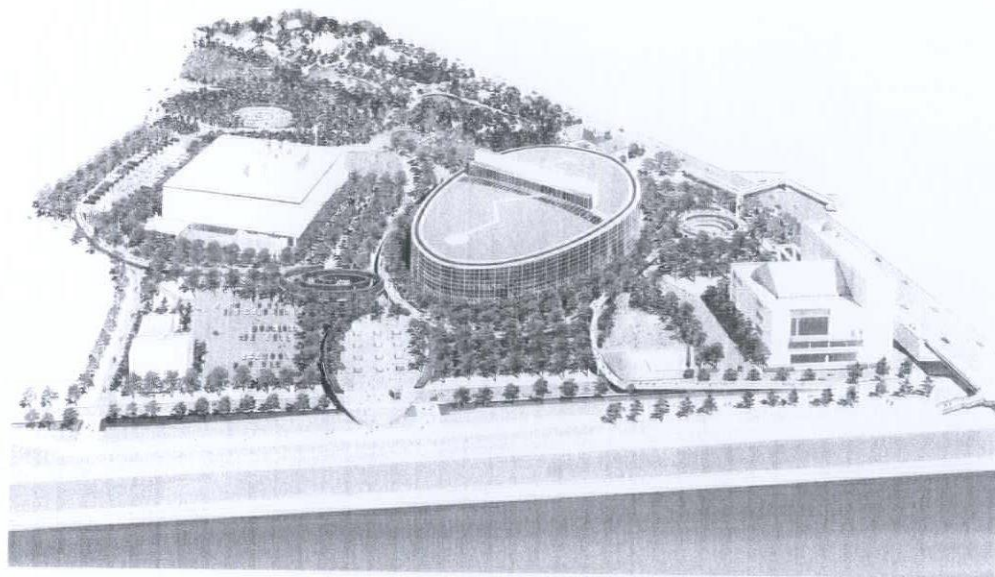




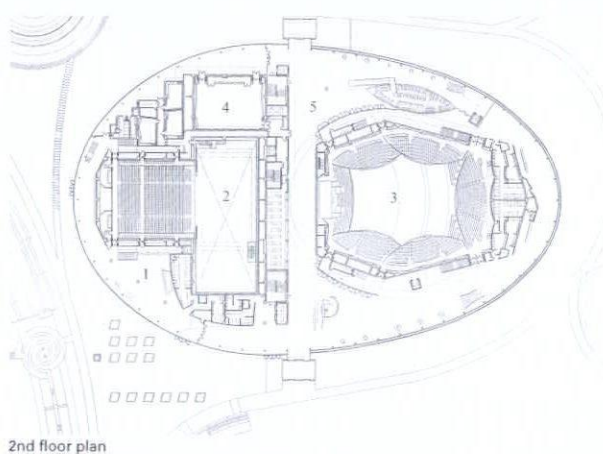






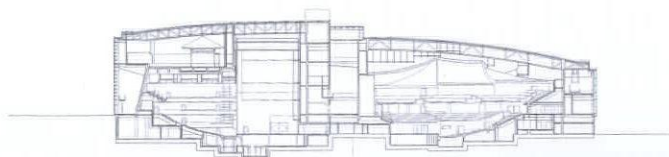


1st floor plan S=1:2000

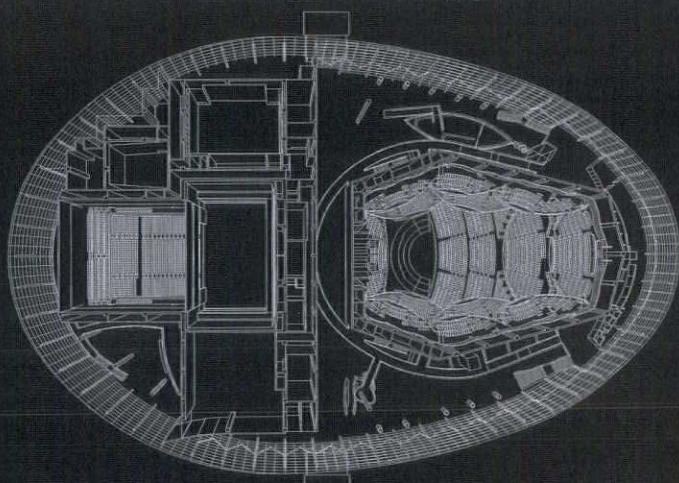
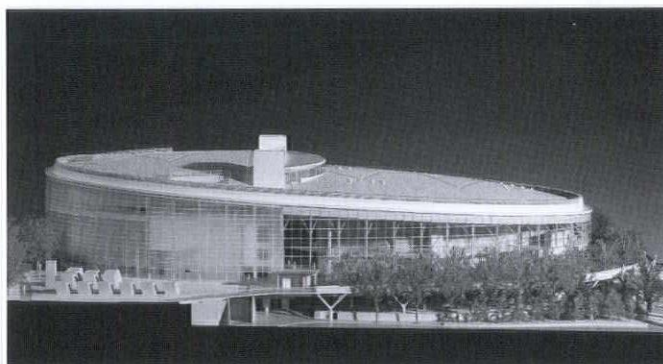


2nd floor plan

- 1 : Concert hall
- 2 : Rehearsal room
- 3 : Main lobby
- 4 : Office
- 5 : Dressing room
- 6 : Foyer
- 7 : Theatre



Section S=1:2000





We started the N-Pac (Niigata Performing Arts Center) Workshop program, sponsored by the City of Niigata, in preparation for the opening of Niigata Performing Arts Center (N-Pac) in 1998. We plan to organize about 60 seminars in these three years as a part of staff training courses for planning and management of the facilities. The first program of this kind attracted responses from all over the country, well beyond our expectations. The classes, consisting of 50 regular participants and 30 additional observers, began in September 1994. The attendees vary in age and background. Half of them are from Niigata; the rest are mainly from the Tokyo area, with smaller numbers from Toyama, Gunma and even as far away as Akita and Matsuyama.

We are impressed with the level of their interest in the architecture and management issues of the building. We invite top notch professionals from a wide range of fields to present lectures at these seminars. With the increasing numbers of public halls, civic centers, and museums all over the country, people have started to recognize the lack of content within. Still, the recognition of the problem does not go beyond hiring creative artists and theater groups, popular producers and directors. The most serious problem facing the operation of the facilities is the shortage of skilled staff who implement the policies of producers and directors. It is not only a matter of their numbers but also their lack of enthusiasm and knowledge. The N-PAC Workshop is a new attempt to alleviate this sad situation.

The role of the staff is analogous to the operation and application systems of the computer. A fast computer needs an excellent operation and applica-

tion system to run complicated software. A capable staff is a necessity for the fulfillment of the facilities' potential. There are a variety of functions which these staff members carry out: building maintenance crew, technicians, stage directors, set carpenters, lighting crew and others. In the workshops, we concentrate on production planning and management staff training.

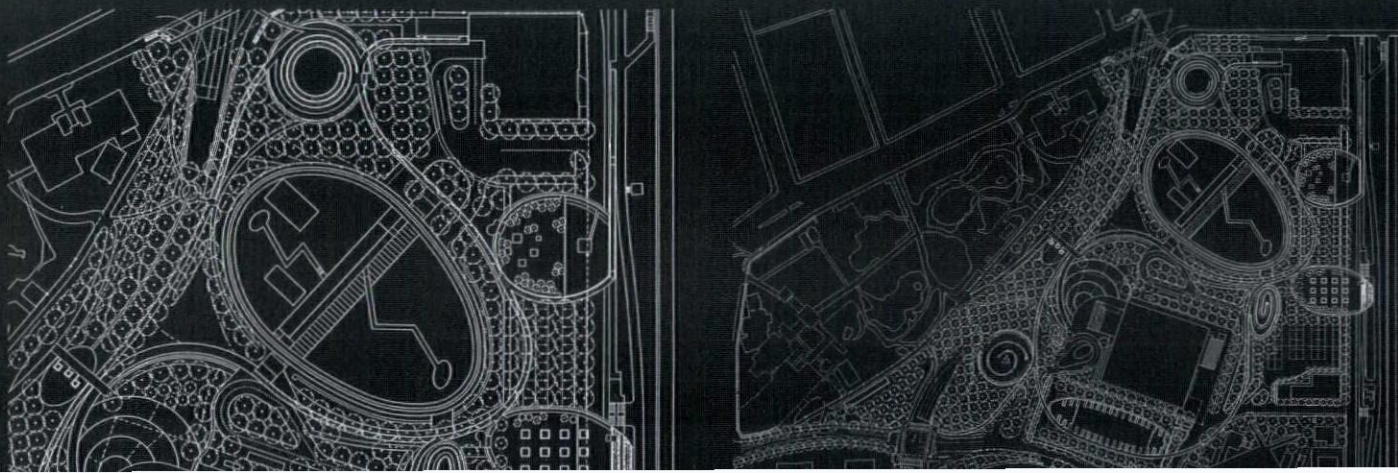
The staff plans performance programming, negotiate contracts and work out details at rehearsals; they do all of these important tasks behind the scenes. Art management is an attractive profession these days and there are a number of schools which offer this training. It is, however, not easy to teach people to be producers and directors without the experience of staff work. Although the sole purpose of the N-PAC Workshop is to train staff level managers, it is hoped that those people will learn from their experience and eventually become skillful producers and directors.

It has been one year since the workshops started. In order to share that experience with the public, we have published a report of our efforts as a book. We are planning to issue reports for the following years as well as offering seminars and camps which will be open to a wider range of interested people.

2000年に開館する新潟市民文化会館の準備事業として企画し、市に主催をお願いして始めたN-PAC Workshopは、会館の企画・運営スタッフの養成を目的として、3年間で約60回の講座を予定している。こうした内容の講座は全国でも初めてであり、受講生を全国から募集したところ、予想を越える反響があり、予定の50人に加えて聴講生30人を受け入れて1994年9月スタートした。様々な年齢層、職業の人が参加し、新潟市および新潟県内から半分、残りは東京近辺が多く、富山、群馬など隣県、秋田や松山という遠距離の人もいる。建築とソフトに対する関心の高さ、期待の大きさを感じる。それにこたえるべく、講師は、現場の一線で活躍しているスタッフの方々を招き、幅広くかつ実践的な講座になっている。

各地に多くの公共ホール、文化センター、美術館などが建設されるにつれて、その中身、ソフトの大切さがようやく認識されるようになってきた。しかし、芸術家や劇団などの創作の部分と、比較的華やかで脚光を浴びるプロデューサーやディレクターまでにはその認識は及んでいないのが現状である。今、多くのホール、劇場の運営にとって深刻な問題になっているのは、裏方として芸術を支え、プロデューサーやディレクターのもとで企画を実行していくスタッフの不足、それも、人数の問題もさることながら非芸術的な対応といった、意欲や力量の不足であると聞いている。N-PAC Workshopはこういった状況に対する新たな試みなのである。

スタッフの役割は、コンピュータにおけるOSやアプリケーションに当たる。能力の高いハードを、高レベルのソフト（成果物）の作成につなげるためには、





優秀なOSやアプリケーションが欠かせない。マッキントッシュの成功が何よりそれを示している。優秀なスタッフをもつことは建築がよい建築であるための必要条件といえよう。

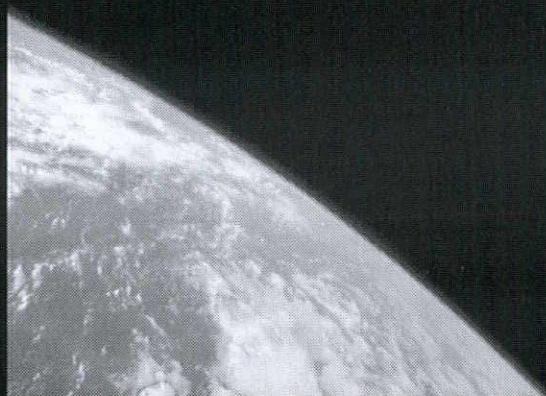
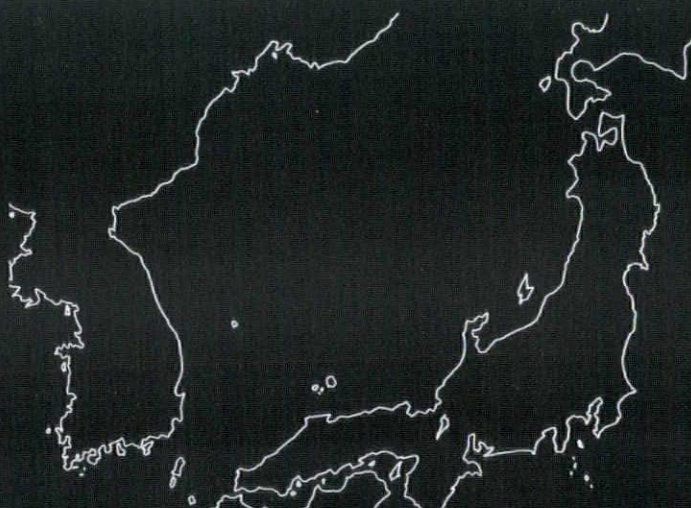
一口にスタッフといっても様々で、メンテナンスをする人、施設の技術スタッフ、外部からやってくる舞台監督、大道具や照明を仕込む人たちなど、施設にかかわる人達すべてをスタッフと呼ぶことができるが、ここで養成するのは企画・運営を行う制作のスタッフである。彼らは、施設の中でデスクワークをする人達だが、上演するものを考え、交渉をし現場に立ち会ったりと様々な活動をする、まさに縁の下の力持ちともいうべき人達である。アートマネージメントということが言われ始め、プロデューサーやディレクターを養成するための講座は増えつつあるが、本来プロデューサーやディレクターは、スタッフを経た上での経験職であって、簡単に養成できるものではないようだ。

N-PAC Workshopは、あくまでスタッフを養成するワークショップではあるが、ここで学んだスタッフが経験を積んで、将来、優秀なプロデューサーやディレクターとなることも同時に期待している。

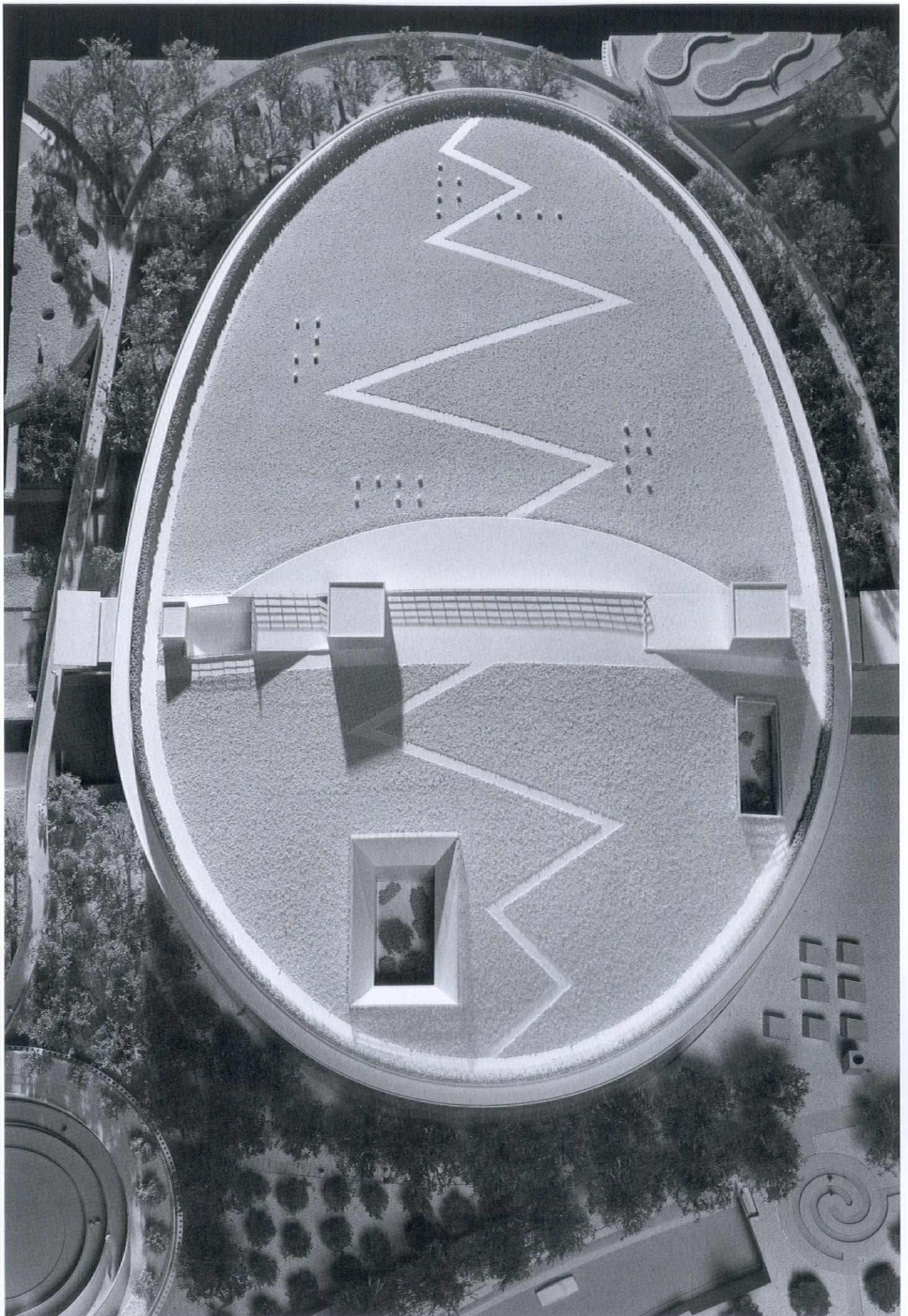
ワークショップは、現在ほぼ1年が経過したところである。この内容を内部だけのものに終わらせず、広く公開することで何かに役立てて欲しいと考え、初年度分をまとめて本を出版した。2、3年度と続刊の予定である。より多くの人たちにも参加してもらえるように公開講座を始めたり、合宿を行ったりと、ますます活動の輪を広げ、盛り上がりを見せているところである。

月日	内容	講師
<b>1994年</b>		
9月24日(土)	開講にあたって	長谷川逸子 今野裕一(ワークショップグループ)
	歌舞伎の裏方、狂言作者の仕事	竹柴源一(歌舞伎狂言作者)
9月25日(日)	ピアノの調律	村上輝久(ピアノ調律師)
10月15日(土)	舞台監督(バレエ)	田中英世(舞台監督)
10月16日(日)	ステージマネージャーの仕事	上原正二(サントリーホール・ステージマネージャー)
11月19日(土)	舞台美術とスタッフ	毛利臣男(舞台美術家)
11月20日(日)	衣裳製作の現場	桜井久美(衣裳デザイナー)
12月17日(土)	テクニカルディレクターの仕事(オペラ)	小栗哲家(舞台監督)
12月18日(日)	芸術と社会	畑 祥雄(写真家)
<b>1995年</b>		
1月21日(土)	劇場機構見学(サントリーホール、国立劇場)	竹柴源一(歌舞伎狂言作者)
1月22日(日)	劇場機構見学(湘南台文化センター)	花光潤子(演劇プロデューサー)
2月18日(土)	演劇史	大笹吉雄(演劇評論家)
2月19日(日)	音楽会と音楽ホールの社会史	松本 彰(新潟大学教授)
3月18日(土)	音響設計実習(音楽文化会館)	清水 寧(ヤマハ音響研究所) 永井秀文(ヤマハ音楽振興会)
3月19日(日)	舞台照明実習(新潟テルサ)	坂元理人(照明家)
	レセプションリストの仕事	伊藤せい子(レセプションリスト)
4月16日(日)	制作について	花光潤子(演劇プロデューサー)
5月20日(土)	N-PAC コンサートホール	長谷川逸子 奥村和雄(ヴァイオリニスト) 寺田尚弘(新潟市音楽文化会館職員) 宮原源治(新潟市民文化会館整備課長)
5月21日(日)	ボランティア	金子郁容(慶応大学教授)
6月17日(土)	市民活動	細井綾子(栃木県の街音楽祭実行委員長) 山田勝巳(墨田区民劇場) 小粥保夫(袋井市民生部)
6月18日(日)	公共ホールのネットワーク	田中勝美(茨城大学地域総合研究所)
7月22日(土)	プロデューサーの仕事	萩元晴彦(カザルスホールプロデューサー)
7月23日(日)	美術と行政と市民	平野明彦(いわき市立美術館学芸員) 志賀忠重(いわき地平線プロジェクト実行会) 藤田忠平(いわき地平線プロジェクト実行会) 芹沢高志(P3ギャラリー主宰)
8月19日(土)	舞台の作り方(合宿準備)	竹柴源一(歌舞伎狂言作者)
8月20日(日)	大道具の仕事	神谷卓男(俳優座劇場舞台美術部)
9月15日~17日	舞台の作り方(合宿)	竹柴源一(歌舞伎狂言作者)
10月21日(土)	アート・舞台の制作現場	木幡和枝(アート・舞台ディレクター)
10月22日(日)	ビデオについて	荒木隆久(ビデオカメラマン)
11月18日(土)	ポスター・チラシ配布	さすがわさめ(ポスター・ハリスカンパニー)
11月19日(日)	プレスのしごと	長井八美(ゆりあプロジェクト)
12月16日(土)	ワークショップ実習	佐藤 信(演出家)
12月17日(日)	ワークショップとは(公開講座)	佐藤 信(演出家)

N-Pac Workshopカリキュラム一覧









多木浩二×長谷川逸子

## 形式とプログラム

多木 SDでは10年前に一度、僕は長谷川さんにインタビューしていますね。この間に長谷川さんの仕事も、随分、変化しました。単純化していうと、個人住宅を設計することから、社会的な公共建築に移行された過程です。その結果、建築についての思考も当時とはかなり違ったと思います。それに僕の方も変わりました。僕は建築家じゃないし、今でも興味は失っていませんが、もはや建築の内部にいません。僕の仕事のひろがり必然的にそうさせたのですが、意識的に外部から観ています。だから旨く話しが合う心配ですが、まあやってみましょう。

僕は長谷川さんの建築を非常に社会的な建築だと思っています。建築は本来そうではないかと言われるでしょうが、ある時期には、むしろ優れた建築家たちは意識的に「形式」を外側の世界とは切り離し、孤立した「形式」として極限的に追求した時代がかなり長く続いたと思います。特に70年代から80年代の半ば頃までは、そういう傾向が非常に強かった。その思想からいうと、建築というのは竣工した瞬間が最高の状態にあり、そこから後は死んでいくものだということになります。これは建築の形式についての考察を進めたとは思いますが。しかしそれである限り、絶対に社会性というのは獲得しないわけですね。建築というのは、ひとつのものが物体として、あるいは空間としてつくられるけれども、動いていく社会の中で、何かをその中に取り込み、またそこから何かを社会に向けて発信します。それは意味の場合もあるだろうし、具体的な出来事の場合もあるでしょう。建築家が社会とか歴史とかいうようなものと本当に向かい合って考え始めた、この10年ぐらいの期間が僕の以前のインタビューからの時間です。その発端になったのが、多分〈湘南台文化センター〉だったのでしょう。〈湘南台〉の時から話題が変わりました。建築と社会との関係、市民と文化施設など、そういう今まで語られなかった形で建築が語られるようになってきました。

まず最初に伺いたいのは、ある建築を建てるにあたって、社会についてのどんなイメージを長谷川さんが持っていたらっしゃるかということです。もっともそれは今日のインタビューの全体を通して浮かび上がるテーマかもしれませんが。いくら行政の側でのプログラムができていても、それに建築家として関わる以上は、どんな社会をそこへ出現させたいかが一番肝心なことだと思うんですね。ところが、今まで建築家というのはそういう議論をしたことがほとんどないわけなんです。いかなる社会が望ましいか。それは理想の社会を目指すとか、ユートピア的な志向をすることではない。現実の社会での可能性の探求です。社会についての思想を模索することで

すし、あるいは歴史についての何らかの認識を持ち、あるいは人間とか人類とかいうところまでおよぶかもしれない認識を探ることと重なっています。

長谷川 以前のSD85年4月号の時に、多木さんにインタビューを受けてその整理をしたことがありましたが、住宅建築をつくることを通して作品をつくるような立場がなかなか私にはなかったということが、ある意味で建築の周辺を含むものとなりました。そのインタビュー記事のタイトルを当時の伊藤編集長に「建築のフェミニズム」と名付けられたように、クライアントとの対話的プログラムづくりを通して設計を進めてゆく建築、日常の行為とともにある、広い世界と一体になってある建築を考えてきたと言えます。それは複数の具体的出来事と引き受けざるを得ない流動性をどこに着地するかということでもあり、そこに形式の問題が関わってきます。結果的にはいつも非常に強い形式というものを残すけれども、住宅の設計で重要だったことは、友達をクライアントにしたことで、とことん議論することになったことです。そのコミュニケーションの中に、人の生き方から社会の問題まで入ってきて、その時に、住宅建築をつくるということは自分の考えで作品性を求めるより、本来共同作業であるべきものだろうということを知るに至ったわけですね。住宅設計の時は、自分の考えたことを、ねじ伏せてもつくれるという状況が私にはそれほど開けてなかったというか。それでも片方で、住宅というものを作品化するというスタンスも取っていたので、形式というものをすることが建築を動かすことと思っている部分と両方あったと思います。結局、最後に積極的に私が残せるのは「形式」としてのガランドウしかないかもしれない。中身はつけれないと思ったのです。

住宅設計を進める中ですでに、そうした対話のプロセスをまとめるだけで建築になるかもしれないということは感じていたように思います。ガランドウというのは、そのような考えから生まれたものです。

それで公共建築のコンペに86年5月頃に一等に入ったんですね。SDでの特集号が出版されるとすぐに。初めてのコンペ参加という意識から、イメージ性の強いドローイングでした。床面積の70%を占める地下空間は単純なラーメン構造の空間であるのに対し、地上部分は小屋根群と3つの球儀と空中庭園、せせらぎなどの集合体です。すごく強いものだったと思います。フォルムが強いというか……。

例えば球儀の劇場を立ち上げるというのも、結果的にはそれは「形式」というより、後から考えると、プログラムそのものだったという言い方もできるかなと思うくらい、それは後々の使われ方に影響するほどのものだった



多木浩二（たき・こうじ）  
1928年神戸生まれ  
東京大学文学部美学美術史学科卒業  
芸術学・記号学専攻  
著書  
『ものの詩学』  
『目の隠蔽』  
『生きた家』  
『欲望の修辭学』  
『都市の政治学』ほか  
『家具のオデッセイ——大橋晃朗の全仕事』（SD9306号）でも伊東豊雄氏、坂本一成氏との鼎談がある。



長谷川逸子



たと思います。それは球儀であって、その中にアンフィシアターみたいな急な段状の客席が入っているために、勅使川原三郎さんの様に、面白いからといって挑戦してくれた人もいたわけですね。そういう意味では、強い形式そのものが新しい演劇を誘導する力を持ったために、そのことからアフターケアもしなければいけなくなったと思います。

また、使われる建築にしたいという意識も強くて、それで市民と対話しながらプログラムを見直し組み立ててきた。人々の活動のきっかけをつくりたいと、このようないろいろな使い方もできるので使ってみてください、という感じでやってきたような気がします。

そうしたふたつのことは、どうも住宅をやっていた建築家のやり方だったと思います。

多木 そのプロセスの理解、住宅の方法が公共建築の中に入り込んでいたということには僕も賛成ですね。

長谷川 〈湘南台文化センター〉では、住宅が持っていた手法を延長してやる以外になかったけれど、その手法をその後もずっと持続するというのではなかなかいかない。

多木 〈湘南台〉は、公共建築とはいえ、わりと狭い地域の公民館的なものですね。その点では〈すみだ生涯学習センター〉も似ているところがあるかもしれない。ですから公共性についても、一様に考えないで、もう少し分類していかなければならないと思います。そのことは当然、あとで問題になるでしょうが、〈湘南台〉は私的な生活が営まれる地域性を持っています。だから今、長谷川さんの言われた住宅の手法を転用することが比較的可能だったのでしょうか。

だけど、今おっしゃったような住宅ではあまり必要ではないプログラムという問題、あるいは人々の生活様式との関係が、コミュニティの中では当然、集合を対象にしたプログラムになる。その時、形式がすでにプログラムを内包しているという自覚が、〈湘南台〉の場合には極めて強くあったと思うんです。そのような建築の形式とプログラムについての考え方を今に至るまでずっと引きずっていらっしやと思いますね。いろいろ変化があったにしても。

#### クロスオーバー・アートをめぐって

多木 プログラムというのは、本来ならば、社会でどのような人間の生き方の可能性があるかという問題を、当然未知の部分を含んでいることを承知の上で、とりあえずダイアグラム化することですね。

例えば〈山梨フルーツミュージアム〉の場合、籠というのがあるイメージから出発した強い形式性を持っていますが、籠を3つ建ち上げてその地下をつなぐことで、ひとつのミュージアムとしてのプログラムをつくり出したわけですね。建築家の場合には、空間の形式とプログラムというのはそんなに分離できるものではないと思います。プログラムはこうです、それに対して建築の形式はこうですというような進み方ではなく、建築家の思考の中では、プログラムは形式という言葉によって分節され、統合されていくのだと思います。この方法の中に建

築家の社会的な認識を含んでいるのではないかという気がしています。その辺はどうでしょうか。

長谷川 そう言えるでしょう。建築の形式はあらゆることをインクルーシブに思考した結果としてあると捉えています。新潟のコンペでは、要項の時点ではいくつかの専用ホールを並べて配置するという最近の方法を踏襲して、ホールの在り方そのものの提案をする余地はなかったわけです。

私には、どうも西欧の古典音楽のための大コンサートホールというものを専用ホールとしてつくる公共の在り方、というのがイメージできなかったんですね。だから私は音楽、演劇、能という3つの専用ホールを複合させて新しい活動の場として機能させようと考え、全体をひとつにして幔幕を張るように、楕円の建築を提示したわけです。私はクラシック音楽が好きですからいいのですが、西洋の音楽のためにこれほど大きな公共のホールをつくるということはどういうことか。能楽堂という伝統形式の中にある芸術も、ある限られた人々しか関われないものだとしたら、つまり、公共でつくるべきかどうかということになります。公共でつくるということはどういうことか。劇場は〈湘南台〉でシビックシアターとしてつくりましたから、コンサートホールも市民の日常生活の中にどう位置付けるかという時に、私の理解している劇場なるものとコンプレックスしたくなったんですね。つまり、コンサートホールと劇場をセットにして、もう少しわかりやすい、音だけではなく視覚的な部分をコンサートホールに持ち込む。クラシック音楽と能もミックスして。そのために3つのホールがクロスオーバーしたような演題をやっていくプログラムを提案し、そういうコンセプトで新潟市民文化会館を立ち上げ、独自の活動の場としたいとイメージしてきました。形式の異なる3つのホールをひとつの大きな幔幕で囲むというのは、そういう考えから来ているのです。私はどうやらいつも与えられた条件やプログラムに、現代性と利用する側のリアリティが盛り込まれているかを問い、異議申し立てをしつつ提案し続けている。空間の形式と提案するプログラムは一体化したものであるからこそ、プログラムを疎かにしておけないのだと思います。

新潟のコンペの後に、考えていることを行政の人にお話して、そういう大変な案を選んでいただいたんですが運営できますかと聞いたら、そんなものは全然イメージしていなくて、音楽は音楽、演劇は演劇の場として、できるだけ独立して運営したいと思っていたという話でした。

結局、新しい企画を動かすには運営するスタッフが必要ではないかということを提案して、スタッフを養成するワークショップを私が率先して立ち上げなくてはならなくなりました。そしてそれを通して、皆でこの建物はどうやって企画運営したらいいか、設計2年、工事3年の期間を利用して勉強をしていこうということをやっています。今年の8月で、1年終えたところですね。

#### コンテンポラリーをテーマに

多木 最初に与えられたプログラムは、完全に分離した



形の専用ホールの並列的な結合だったわけでしょう。それを結びつけたといっても、一体、どんな関係が生じるのか、受けとる側は理解できないかもしれないですね。長谷川さんのクロスオーバーというコンセプトは、ある意味では未知数のようにその結合関係のなかに含まれているわけで、それがどういうものかはなかなか読めないと思います。

長谷川さんの計画は、今までの演劇という形式、音楽という形式が果してそのまま持続するであろうか、ひょっとしたらもっと変わっていくかもしれない、そういう時に、バロックの劇場のようなものをつくってそれで済ませられるかどうか、という問いを含んでいるわけでしょう。例えば、いかにも長い伝統のように思っているけれども、あの能の形式だって、江戸時代に成立しているわけですから。

長谷川 室内化の始めは、江戸城の中につくられたと聞いています。

多木 今言ったのは演劇としての所作の形式であって、劇場としての能舞台のことではありません。世阿弥の時代は、全く演技の形式が違うし、今のような摺り足ではなかったようですし、橋懸かりも1本の場合もあったり、2本の場合もあったりというような、いろんな変遷を経て初めて今のような能舞台が生まれてきた。それと同時に、能というのはどうしようもなく古いわけですね。その古さというのは、これはシェークスピアとの違いですが、シェークスピアは脚本だけ残したから、誰がどう演じてもいいわけです。ところが、能は「形式」を残したのです。そのために、今みんなが後生大事にしているものは、戯曲の本質じゃないんです。演技の形式を伝えているから、どうしようもなく古いわけ。

僕の場合は、パフォーマンス芸術に対する建築は大して意味をもっていないので、あまり劇場論をやる資格はないんです。例えば、ミュンヘン・マルシュタール劇場というのがありますが、その名の通り昔の王様の馬小屋ですが、あそこでジョン・ケージの作品をやったのはものすごく良かった。それは全部コンピュータで仕掛けてあって、それを何時間かずっと流しっぱなしにするわけ。みんな三和土の上に寝ころんだり、いくつかある椅子に腰掛けたりして、好きな時間だけ出ていけばいい。

長谷川 劇場ですよ、あれは。

多木 劇場にも使いますが、全部取っ払ってしまえば、昔の馬小屋がそっくり現れてくるわけです。あのマルシュタール劇場のような感じは絶妙なわけです。だけど、そういうこともバロックの劇場ではできないですね。

それから演劇と劇場についての考え方も、ピーター・ブルックは非常に大きな革新力になりましたが、ピーター・ブルックの方法というのは、空間は演劇がつくるのだから、劇場はなくてもいいという考え方がむしろ先行していったわけですね。それは太陽劇団の時代を経て今でも続いているが、ある意味ではピーター・ブルックが最も始まりのところへ演劇に戻って考え、それに応じた劇場を探したわけです。ブルックの芝居を観ていると、確かにこちらにも自由になります。

今、僕が一番興味を持っている人でアメリカのピータ

ー・セラーズという演出家がいいます。このピーター・セラーズというのは〈ピンク・パンサー〉のピーター・セラーズじゃないですよ。同名だけれども(笑)。ピーター・セラーズは演劇について、舞台上で進行している時間についてとか、歴史についてとか、非常に本質的なことを考えています。そこだけ観ていると、ブルックと似たところもある。しかし演じ方は全く違います。例えばシェークスピアを彼の演出でいくつか見っていますが、もう完全に現代劇だし、前衛と大衆演劇のすれすれのところを掠めています。もうひとつ違うのは、今まで演劇というのは生の声を聴かせるとずっと思っているわけですが、ピーター・セラーズは全部マイクを通して。なぜそうしなければならないかという、人間の声には囁きというものがあるでしょう。小さな声で語らなければならない。それはマイクを通じてなら伝えられますね。だけど舞台上で生の声で囁かれたら、どうしようもないわけ。彼の演劇はテンポは早いし非常に楽しめます。演劇そのものもつねにすごく変わっているわけです。

能はやっぱり、形式をこれからも大事にしていきたいと思います、能をやっている人は。それはそれでいい。伝統芸能だから。だけど、能舞台を今度は能楽師でない人が使うことだってあり得るわけですね。音楽とか演劇とか古典芸能とかいったようなもの、要するに芸術というものは、形式が固定されていると考える方が問題なんです。長谷川さんのクロスオーバーが何を指すのか、僕にもまだよくは分かりませんが、とにかく従来型の演劇ではないものを目指しているのですね。3つの劇場の結合関係のところに何が生まれてくるか、長谷川さんのプログラムという考え方の重点があるわけでしょう。

長谷川 そうです。クロスオーバーによって大、中、小の3つのホールをこれまでの在り方を超えて、自由な新しい企画を持って運営しだしてもよい時代を迎えているのではないかと考えています。でも運営するというのは、この社会では大変なことなわけですよ。コンサートホールも能楽堂も形式を守って運営することに意味を見出してきました。コンサートホールといったらオーケストラのための音の場をつくり、ポピュラーもロックもだめ、異なるものを排除してその形式の完成を目指しているわけですね。そこに全然違うものを入れてミックスさせようという時には抵抗が起こります。クロスオーバー芸術がそう安直につくれるとは思っていません。それでも「コンテンポラリー」をテーマに実現を目指すことが、〈新潟〉の持っているプログラムだと思っています。

多木 そうですね。あと環境の問題もありますが、それはさておいて、特殊な機能でプログラミングされてあって、その特殊な機能を結合した時に出てくるもうひとつ新しい計画案というのが提案だったわけでしょう。その提案は、やっぱり空間形式という形で抑えられている部分があると思います。

#### 日常性を横断する空間

長谷川 複合可能な配置計画ですが、当然、各々単独にも機能します。そういう機能を持った全体、つまり卵の黄身が3つあって、その周りを幔幕が張っていて、白身



であるところは、コンペの時には透明感のある自由なパフォーマンス空間ということでした。ある時はロビーとして仕切られ、普段人々が行き来している時はこの大きな円環空間はフリーなパフォーマンス空間になることをイメージして設計してきたんです。

現代建築は、均質空間化していくことによって多目的化していく。建築家は「複合」というテーマの中で、可能性を広げていくために、ユニヴァーサルな、倉庫のような空間をつくっておいて、そしていろんな展示が可能じゃないかという提案をしますね。先日エジンバラでポンピドー・センターの人と一緒にあった時、「個室に仕切られた、限定された展示室に作品を持ち込むことの方がどんなにもイメージを膨らませ易い。広すぎる展示空間を学芸員がつくり上げるのは苦労が大きく、なかなか密度が上がらないし運営もとても大変だ。どうも建築家は展示の企画運営のことがわかっていない。『複合』ということと一緒に均質空間をつくろうとしている」と言われました。

私はまさにホール周辺の透明性を持つ白身のところを複合空間と考えてきたのですが、そこをもう少し突っ込んで考えていかないと、黄身3つがジョイントしてクロスオーバーしていくということと、そのフリー空間というものの在り方がどうもいまひとつ図式性を抜け切らない。だからホールを支えているロビーのパフォーマンス空間の運営が難しいことになってしまうのではないかと懸念しているところです。その空間の在り方について、設計は終わったんですが、私は今スタッフと議論しています。

多木 なるほど。要するに均質な空間を与えて、それを自由に使えるという機能の考え方は、幻想だったんですね。ポンピドー・センターの展示というのは、常にその問題にひっかかっていますね。

長谷川 公共建築において常に変化する社会性と一緒に、複合ということが大きなテーマとなっていて、それを引き受ける場というのはフレキシビリティのあるフリースペースであることで、ひとつの開かれた公共の場となりうると考えてきました。

多木 そうですね。今言われたことは重要なことで、理解できますが、実際の建築での在り方としてはどういうものなのか、僕には分からない。

最初に、社会とか歴史とか人間の文化について建築家は何かのイメージを持っているのか、という質問したのは、そういうこととも関連しています。演劇というのは、ある非日常的な状態を生み出すことによって、人の感情とか精神を刺激する。だけど、それは空想的な世界を提示することではなく、物との関係が普通以上に直接性を持つような世界のことで、日常の空間とは隣接しているわけだから、その演劇の空間の経験が、日常の生活を送っている社会というものを逆に照らしだすはずですね。この関係が建築家の抱く演劇的な社会のイメージだと思います。

長谷川 芸術は、生活から切り離された儀式的なものの時代から、徐々に今日にあっては日常に隣接してある存在に変わってきた。芸術と社会、芸術と教育も密接に関

わる時代の中にある。公共の建築の持っている重要な機能としては、人々の日常に横断線を引いてやるというか、現代の生活の中に芸術的なものの役割が大きく組み込まれてきている。一部の愛好家の枠を越えて、より広く、人々の生活を豊かに変えていく機能を建築も担いつつあると思います。それを支えているのが、さっき言った白身のところだと思っています。何気なく訪れて来た人にホールと関わるきっかけをつくる場所ですから。ホールが使われていない時間でも、そこはいつも開放されているコミュニケーション広場として利用される。また、グラフィックや映像の展示される情報センターとしての空間で、外に6つある浮島型の空中庭園と同じような様相を与えようと考えてきました。

〈湘南台〉をやっている時に、子供館、公民館、劇場という3つの施設の複合化は外部のプラザと空中庭園をつなぎ、空間として導入して全体化を図り、イメージとしては原っぱでした。その原っぱを取り込んで球儀の劇場をつくっているというような言い方をしてきましたが、ここでのパフォーミングアーツホールの原点は原っぱであって、住宅のガランドウに置き換えられるほどのものでいいんじゃないか。利用者が活動を立ち上げながら変化してゆく空間。そういうフリースペースでいいんじゃないか。〈新潟〉では、基本的にはクラシック専用のコンサートホールや形式そのものであるような能楽堂などをつくっているで、それを支える周辺の場合は原っぱみたいなフリースペースにしておきたい。白身だと思っているので白くて(笑)、透明感のある、ニュートラルなものだということにしてきたのです。日常性を横断する空間だとするならば、単に均質化するのではなく、もっと運動が起こるようなものなのではないかと、今日この頃思っています。

#### 社会のイメージ、公共のイメージ

多木 そういう話をしてくると、問題の焦点に近づいているのですが、その時に社会というのはどういう状態で長谷川さんの前に現れているのですか？

長谷川 次第にグローバルな広がりを持ち出しています。芸術的な行為は社会と密接に結び付く方向に変容してきています。その社会はグローバルな広がりを持ち出しています。〈新潟〉の建築は、世界中の音楽家もやってくるし、旅行者が東京からも新しいクロスオーバーの演劇を見にくるとすると、定住している人達のための場所だけではなくて、訪れてくるいろいろな人達が行き交う場所になりますね。

東京にいつも行くのではなく、いいイベントがあればどこでも行く。そして人々が地域と交流していく動きが少しずつ出ています。そういう人達をも引き受ける場を「公共」としていけば、超越性も何もない、原っぱ的な、白く透明なホールの周りの空間は、地域の人達だけでなくもっと大きな世界に開かれていい。だから〈新潟〉は、そこに特殊な超越した空間をつくり上げてしまうよりは、もっと空白なものでいいのではないかと、これが最初のスタートですね。そのことによって公共建築を行き交う人々は、不特定で幅広い人達になるだろう



うということなんです。

多木 そう。そこがポイントです。つまり〈湘南台〉というのは本質的にローカルなんです。ローカルなだけにそれはひとつの特徴を持つけれども、世界全体に向かって開いている必要がない。ところが、〈新潟〉の場合は「シビック」という〈湘南台〉で使われた言葉で表せるものと、どこか違ってきますね。

長谷川 そうですね。規模的にも違いますね。

多木 スケールが違うことが決定的な要因です。つまりそこで行われる芸術は、世界を対象にすることになります。言い換えると、建築を成立させる基盤は、市も、県も、あるいは国というレベルも超えたようなもの、現在の世界全体をイメージしなければならないというところに来ています。

長谷川 最近、市民活動とか市民参加というものが〈湘南台〉の頃より私の頭では稀薄なんです。でも、新潟の人たちも、最初は〈湘南台〉でやったような意見交換会をやってほしいということで、コンペ直後は市民グループとの意見交換を何度かしてきました。しかし、湘南台のように具体的な利用形態やそこでのプログラムを問題にするより、なぜ建設するのか、コンペ以前の構想がどうつくられてきたかというレベルが問題でした。市民は具体的参加より、新潟市は将来どのような芸術都市を目指そうとするのかということこそ論じあわれなければならないと考えていることを知りました。ですから、施設とともに市民活動はさらに活発化するだろうことを支援する手法はもとより、現代生活全体に関わる産業、教育、セラピー、情報など〈社会と芸術〉というものをどう進めるかという手法も持たなければならないと考えたんです。そこで、そうしたことを学習する期間に完成までの5年間を使おうと考え、最終的にはこうした大きな課題も盛り込みつつ、さらには具体的政策と製作を学習するWorkshopを開く方向を取りました。

そのスタッフ養成学校であるN-PAC Workshopを開く時に、市役所はちょっと戸惑っていましたが、私は全国から人を募集するように頼みました。50人集めようと思ったら300人も来てしまいました。50%は新潟、50%は新潟以外です。講師には外国の方にも来ていただきたいと考えていますが、まずは全国レベルに建築を置きたいと私は思ったんです。将来、公共がもっとネットワークを組んでやっていかないと今の私が考えているようなプログラムは立ち上がらないと思っていますので。

ところで、このワークショップを進めながら芸術のクロスオーバーということはそう簡単じゃない、ということがわかってきました。スタッフ学は演劇を中心に学んでいけばいいとか、演劇はディレクションをし、創り上げるものだが、音楽のことはプロモーターがやるものだという話になるわけです。様々な分野の芸術はその自立性を問題にし、できるだけ異なるものを排してゆくことを通して論理武装してやってきて、異なるものとのクロスを避けてきたのがこれまでの縦割り型芸術ですね。社会と芸術、芸術と生活も密接に結び付かないまま、また人材も作品も育成しないまま、それを「成熟」と言ってきたわけでしょう。

多木 ただクロスオーバーするのが芸術の発展とは断定できないんです。ただ芸術というものを既存の形式に納まっていけば良いという時代でなくなったことは明らかです。ですから芸術の探究にもいろいろな方法があることは認めていかねばならない。これは、まだよく分かってはいない世界をどう把握するかが本質なのです。芸術の真の目的というのは人間が自由になることです。そういう芸術の存在の仕方がどうすれば可能なのか、それは芸術家の問題で、建築が予想できるものではないし、先回りできるとも言えません。しかし来たるべき芸術が可能になる条件をつくることは建築の問題です。

長谷川 私たちが公共建築をやりだしてから「共生」とか「共存」という言葉を使ったり、建築が複合していることの面白さというのは、そこに異質なものが入っている宴を開くことによって、刺激を受けて新しい運動が起こるというようなことを考えているわけです。それぞれ専門化して自立した論理を煮詰めていっても煮詰まってしまうだけでした。確かな新しい共生の在り方を見出していないと、公共のホールにおける「自由になること」のための場は開けてこないでしょうね。

#### 都市の世界化

多木 そのことを発展させていくと、行政の側からみれば都市というのは、確かに税金をとったり使ったりという地域性を持っていますが、すでに都市の存在の仕方は世界化しているわけですね。これは最初に伺おうと思ったことで一番ポイントになるところだと思いますが、要するに、都市というものをひとつの地域的空間として考えるレベルもありますが、たとえば長谷川さんが今なさっているような芸術のための空間というところからみると、都市というのは完全に世界化することによってしか「都市」であり得ないという状態が見えてくるわけです。あまり経緯は知りませんが、このスケールのホールをつくるとなると、確かに市がやったかも知れないけれども、これが向き合っているのが「世界」だという考え方を市の側も持たなくてはならないわけです。

都市というのはどういうものか。これは言語化されていないけれども、今、ローカルな「都市」というものを越えて、都市が世界化しているというのが建築家の頭の中にあると思います。建築をつくること自体がそうした都市の世界化を引き出してしまふのです。もしそのことを行政側が気が付いていなければ、随分、迂闊な話です。だってこの規模のホールを3つ含んだスケールの建築でしょう？ ということは、都市が世界化しているという状況を一番反映するはずのものになってしまいます。地域の機能だけを引き受けているだけでは成り立ちません。だから、演劇のクロスオーバーをする前に、もう都市とか社会とかいったものを固定した枠組みから解放しないと……。

長谷川 その社会といったものを固定化した枠組みで捉えているのは一般に、市民より行政側の人達だったりして。地域性、ローカリティをテーマに掲げて説得しますよね。

湘南台のコンペの時、行政側がつくったコンセプトに



は「地域に根差しながら世界に開く」という二重構造が書かれていて、私達はそのコンセプトを掲げて意見交換していたわけですね。また、そういうレベルのものだと思います。市民オペラをプロとアマと組んでつくることを先頭に立ってやっている市長さんですから、一方で「世界に開く」というテーマも持っていて、それであるような建築をつくることができたのですが、それでもやっぱりまだ都市は世界化するという意識に達していなかった。地域というコミュニケーションが一番大切だったですね。

多木 要するに公共建築がある規模を超えたときには、そこの地域性という形での市民性というか、市民との関係がもはやそれだけでは成立し得ない。つまり、今、都市というのは「世界」であり、世界というのは「都市」であるといったような、社会観ないし都市観を持つようになって、それが公共建築を支えているというところに差しかかっているんだということになっていると思います。僕は地域性を無視することを主張しているのではありませんが、地域とか市民とかいう概念が、すでに世界性を含んでいる、あるいは世界性に含まれていると考えています。第一、こうした企画が成立することはすでに社会のもつ異様に巨大な力、資本といてもいいんですが、それに依存しているわけでしょう。その力はいかなる境界も無視して動いていることは、今では誰でも知っていることです。ともかくそうした世界性の認識がないと、結局は、地域としての都市としてとんでもないモニメントをつくったというだけになってしまうのです。

視点を変えてみますと、建築というものはロジカルにできているわけです。非論理的だと建たないからロジカルにできている。どんなところでも一応説明可能な合理性が言説として与えられるのです。ところが、それと、個人であろうと集合であろうと、人間の生とは絶対にずれがあるわけですね。そのずれというのは、単に建築がガランドウで人間が勝手に動くといったようなことではなくて、論理と生との間の決して解決しない本質です。この矛盾を含み込んで、はじめて「都市」というのは成立し、その矛盾を含み込んで、初めて「世界」というのは成立しているわけですね。そのずれを未完の世界の断片と捉えて、建築がこのずれを含み込んだものを本質とする断片的空間として立ち上げる手法が見つかった時に、多分それはこれまでとは違う空間になると思います。その辺りの理論が、建築をつくる人も建築を使う側も、今ないんですよ。特に使う側にはないんだな。

長谷川 そうですね。私達はいつも具体的ないくつもの活動を引き込み、それこそ未完の部分を残しながらも建築と共にソフトを立ち上げることとを試みてきました。まだまだ十分とはいえない状況ですが。

すみだ生涯学習センターを通して

多木 くすみだの場合もかなり複合体ですね。だけど、〈新潟〉が必然的に持ってしまうような世界性はあまり要求されていないから……。

長谷川 なかったですね。私はすでに〈湘南台〉の時から、ローカリティというものに密着することによって狭

い領域に対応した施設からは新しいことは生まれてこないことを分かっていました。世界都市である東京の一面を占める墨田にあって、都市に開く建築というのはどうあったらいいかということのを区役所に相当ぶつけたんです。つまり、建築をつくるというのは利用者の視点に立って考えると、地域性だけでは解決できないということですね。東京という様々な体験が可能な大空間を生きる区民の視点と行政的視点はギャップが大きかった。

区民グループは住民による自主運営体制をつくり上げたいとドイツのハンブルグの下町、オッテンゼンの人達と交流してお互いに学習し始めていた。

私達は要求されたたくさんの機能を縦割りに配置するのではなく、8本ものブリッジでクロスさせ横につながる内容を提案しようと考えました。ここでも様々な機能をジョイントさせ、来訪者が独自の新しい体験を自らが作りだせる施設にしたいと考えてきたのです。

例えば私が提案したメディア工房というのは、インターネットや企業の人たちが来て身障者や子供達という社会性が欠けがちな人たちと組んで何か起こしていくということもプログラムに組まれています。そういう支え合いがなければいけない人達と、支えることで学ぶ人達のミーティングの場所としてつくったのがメディア工房だったんです。私の中には、メディアやAV工房は新しい学習内容だったので、東京、世界という意識、それから現代ということ積極的にテーマにして、ここでもクロスオーバーアートの提案をし、新しい芸術を〈すみだ〉から立ち上げたいと考えていました。東京につくることもあったから、学習という領域を狭めないようにして、これまでの公民館のように与えられたものを単に学習する生涯学習センターではないもの考えたんです。

多木 それがローカリティであると同時に、それを世界に開いていくことになるけれども、今のところ、なかなかそうはならないでしょうね。

長谷川 「真のローカリティはグローバルに開く」という考え方は行政側の視点に立っても、なかなか将来的に有効な方法だったのに。私達は、墨田が江戸からの伝統工芸を残す工場地帯だったので「すみだファクトリー」という名前をつけて設計を進めていたのですが、担当者が突然公募してつけた名前が「すみだ生涯学習センター」というものだったんです。ある生涯学習という施設の形式ができたら、それを守っていこうというようなところがありますね、運営者の側に。

多木 そうですね。ただ、それは行政が市民というものを大事にするというような振りをしながら、実はみくびって、狭いところに押し込めているわけですね。例えば障害者の問題にしても、似たようなことをしています。

「何とかに優しい都市」というようなキャッチフレーズはいろいろありますが、こういう言葉は信用がおけません。

障害者の能動性を尊重するとき、初めて差別がなくなるのです。演劇と関係のある面でいうと、聾啞者の劇団というのが日本にもありますが、ものすごく良い劇団がフランスにあります。ちゃんとプロフェッショナルなんです。僕はいくつか見っていますが、聾啞者であるがゆえ



に、逆に演劇の本質を見せることが可能だということもあります。非常に面白いんですよ。だから、生涯学習なんていって、その中には身体障害者の方も入っているとは思いますが、そういう人たちをそこにただ釘づけにするのではなくて、皆そういう世界が市民に開かれているわけです。聾啞者同士は世界的にネットワークがあるわけ。そうすると、聾啞者自身が本当にいい演劇をつくることができれば世界化できるんですね。それに行政とか、あるいは政治家というのは気が付かない。

繰り返すようですが、〈新潟〉の場合になると、演劇や音楽といった広い意味でのパフォーマンスというものが行われる限り、否応なく世界に向かって開かれるわけですね。そのときに、3つのホールをただ単純に包み込んだというのではなくて、どうやら問題は、幔幕で包んだ空間の在り方をどう考えるかということにあるような気がするのですが、それはもうそろそろ可能なところにきているだろうと思います。

長谷川 世界化するための装置ですね。建築の空間表現よりも。

#### 公共建築と市民参加

長谷川 伊東豊雄さんが「通過点としての公共建築」という文章を書いていますね。公共建築は駅のプラットホームみたいなものでよいと。でも、規模と内容に関係なく「公共建築」と全部まとめて言っちゃうと反論が起これると思うんです。

多木 「公共建築とは——」という言説では全体は括れないですね。さっきローカルなことをかなり否定的に言いましたが、〈フルーツミュージアム〉とか〈大島町絵本館〉は、やっぱりローカリティというものが絶対にあります。

もうひとつは、都市にも、全体を把握できる大きさの都市と、もう把握できない都市がありますね。藤沢はまだ頭の中でイメージできるスケールですが、藤沢をちょっと超えたらもうだめですね。

長谷川 ちょっと超えたら新潟になりますね。

多木 新潟ですね。スケールがある限度を超すと都市像が見えなくなりますね。都市像がないということは、要するに都市が世界化しつつあるという傾向のひとつだから。行政の方は、諷刺文句としての国際化ではなくて、本当に都市というのはそういうものだという理解を示さないといけないんですね。

長谷川 公共建築を考える場合、高度な芸術を鑑賞する機会を市民に与えるだけでなく、そこでの活動が生活や教育と結びつけるという機能、つまり芸術と社会について考えるため「市民活動・市民参加」のことをN-PAC Workshopで取り上げました。例えば墨田区で戦後50年ぐらい市民演劇を上演してきた人たちや、栃木の蔵の街音楽祭を毎年開催しているグループや、静岡の袋井市で田園コンサートを行っている人たちに来て頂いて、市民活動、または市民参加とは何かというディスカッションをしてもらいました。

そのあとに、ワークショップの人たちも参加してディスカッションをしたのですが、川崎から来ている受講生

が、そういう活動は好きな人達で、好きなことをしているだけであって、行政に活動資金を請求して自分たちの活動を正当付けようとしている、それは行政が支えるべきものでもないし、市民参加でもない。まさに伊東さんがおっしゃるように、駅のように訪れる誰でも通過していく人たちを全部支えるべきであるということですね。東京の生活をしている普通の主婦の彼女の視点なんです。

墨田でも、地域で活動する人たちを市民参加と言っても、まだ活動していない人、関われない人にきっかけをつくるというプログラムづくりまでいかない。私も〈湘南台〉の時にはそのような考えでした。見えない人まで利用者といってもしょうがない、そこを使ってくれる人こそ利用者と言えいいんだと。そしてそれを市民参加などと言ってしまいましたが、彼女の考えにこそ新しい都市感があると思いましたね。

多木 それは感じ方としては正当ですね。長谷川さんが〈湘南台〉を設計された時には、やっぱり長谷川さん自身も、市民参加の問題にしても公共建築の在り方にしても、まだ未熟な段階だったと思います。

長谷川 そうです。まさに公共というのは、ローカリティが主題でした。世界の一片としてのチルドレン・ミュージアムの展示にしたい、と考えたプログラムづくりの時はとても意識していましたが、そのようなレベルでした。ところで、そこには螺旋状にひとまわりしたような一般性をめぐる問題があって、簡単にはいかないですね。カーティフとか、いくつか外国のコンペに参加してみても思うことは、世界の在り方も同時的で共時的ですよ。

多木 それは様々なところで同じようにあります。今たかれて問題外ということになっているけれども、湾岸開発のようなことも世界中でやっているわけです。だから風景がほとんど同じですね。それが良いか悪いかというのはちょっと問題としても。

やっぱり建築家は、都市や社会や世界というもののイメージをはっきり持って、それで建築空間を立ち上げるというプログラム、そのところがプログラム化という言葉で言い表せるし、そのプログラムというのは、さっき言ったようなロジックと生の不可避的なずれを内包するようなものでなくてはいけないと思います。

(1995年8月10日 於：長谷川逸子建築計画工房)



## True Regionalism is Global

—Reflections on the conversation with Koji Taki

We often have to consider public architecture in the context of the global environment rather than regional conditions. Throughout our conversation, I strongly felt that, like it or not, we already live in such a world of global communication. As the world is rapidly becoming borderless, especially since the fall of the Berlin Wall, public architecture must address issues of global importance.

Koji Taki stated, "It is futile to think only about local issues when designing public architecture." This is a dilemma everybody has known but did not dare discuss publicly. For example, the use of an ambiguous word *machi-zukuri* (community making) is symbolic of the Japanese systems which force regionalist design on local community planning projects. This often creates a situation where two neighboring communities try to establish different cultural identities against any logical thinking. This kind of nonsensical system of regionalism ironically functions very well to homogenize the country. This regionalism is also difficult to criticize because it forms a sort of "political correctness" which mixes many local political agendas and historic views.

In the past, we tried to introduce plurality in public architecture from the users' perspective. It is, in a way, a process of inserting new ideas into local communities and opening up society. We attached great importance to thinking of architecture as a unified entity of hardware and software, a result of the recognition that the building itself was not sufficient to provide new activities in the community.

In Shonandai, although the scope of the project was limited to a community hall, we attempted to connect the community inter-

nationally mainly through theater activities, and promote the co-existence of the regional and the avant-garde. The Sumida Culture Factory, a conventionally exclusive continuing education center, was made both physically and visually accessible to the community; because we included a flexible buffer space, the center provides new possibilities for local activities. The Niigata City Performing Arts Center, which is under construction, contains three different types of halls under one roof. By enclosing them within one large screen, we tried to encourage the cross-germination of different art forms. We are also involved in the training of planning and management staff in order to realize this goal. In addition, the fusion of architecture and landscape architecture is meant to create a three-dimensional park environment as an expansion of urban functions.

Mr. Taki states, "we must find an architectural theory which contains the essential contradiction between logic and *leben* (life), their divergence and fragments of unknown forms." I feel that, to a certain degree, we have started to deal with this divergence in terms of the software programs of public architecture. The logic of architecture represents a rigid and hard environment. *Leben* (life), typified as the movement of people and diversity of facility usage, is like a free-flowing river. There are no functional and artistic solutions for this amorphous element. The often used concept of "provision for accidentality" to address it never really succeeds. As Mr. Taki says, such a concept can not anticipate the unknown. We try to relate architectural programs, which always include concrete activities, with room for the unknown. This may not be

enough, but at least we hope it points towards a realization of integrating logic and *leben*.

If not used, public architecture has no value. Despite the fact that they are often left out of the political programming process, architects (as form-givers and implementors of architectural programs) have a partial responsibility for the validity of public architecture. I often question the attitude of architects who view programs from a superior position, and discuss them in an authoritarian manner. Programs are important, but the process of making program is more important. There should be a more pluralistic approach. In order to generate lively public space, as many people as possible must participate in program development, not just bureaucrats and narrowly focused experts. When Mr. Taki says the concept of society is more important than that of city, he means the city as a phenomenon and society as a relationship. Architecture is potentially connected to social relationships.

When finished, architecture is no longer a concept but an object, without much flexibility. Architecture functions well socially only when integrated with a software program. Then it can contribute to *machi-zukuri* in a real sense, and exist as the essence of public architecture. Otherwise, architects will continue to design monuments and play with baseless concepts. According to Mr. Taki, architects do not discuss social issues and there is no sign that this situation will change soon. I believe that in the new globalization, architects will be judged by their ability to present alternative visions to regionalism.

●Itsuko Hasegawa



## Inclusive Mind

For Itsuko Hasegawa, architecture is defined as a long duration or "*durée*" of planning, designing, construction, occupancy, inevitable changes and ultimate disappearance. Hasegawa borrows the word "*durée*" from Henri Bergson as best representing her conceptual framework, but adds her own meaning, and the definition is still unfolding. Hasegawa's "*durée*" describes the complex, inclusive relationships of architecture and society as they are thrown together and points to hidden variable possibilities. The architect's function is to pull architecture out of this constantly changing dynamic dialectic relationship. Furthermore, to be meaningful, this must be done in practice and cannot remain as an ideological concept. This is the opposite approach to the representation of certain doctrines. It is universally inclusive of the plural and complex nature of the architectural process, and its expression in architecture attempts to create a new architecture-society relationship. It is a way of treating architecture

as a means for new societal arrangements or new kinds of social activities.

However, Hasegawa does not propose a clear vision of how society should be. Someone once compared her to the literary style of Gertrude Stein. But she reminds me of Walter Benjamin's "Der Destruktive Charakter." Her advocacy can be summarized ultimately with a very simple slogan: "Create a *harappa* (empty field)!", a desire for fresh air and flexible space. Whenever we talk about the fragile metaphysical notion of architectural programs and activities in the office, she can instantly upset the argument with the naive concept of "harappa." It is not a typical architect's phantasmagoria, but rather it is a mysterious black box; as the joke goes "like Jack Derrida's chora, so it is like Hasegawa's *harappa*". The word "*harappa*" is akin to *furoshiki* (Japanese wrapping cloth) in the way it wraps everything and anything. It is a place where the *durée* and the space combine to create architecture, sometimes like Mikhail Bakhtin's "carnival space," or Yoshihiko Amino's "*mugen, kugai, raku*" and sometimes or Jurgen Habermas' "communication space."

Hasegawa persistently questions the validity,

contemporaneity and public support of existing architectural programs. She shakes up established organizations and systems to bring about certain cracks, then works on the bureaucracy, challenging pre-conceived ideas and formulating new relationships. For her, the cracks themselves, or actions above that fluidize the conditions of making architecture, are the beginning of creating *harappa*. (One world for all? The *harappa* for society?)

The possibility of architecture exists in the projection of architecture in society; the question is the method of projection. In other words, the possibility of architecture depends on its inclusivity. In architecture, ineffective ideas and styles must be immediately replaced. Clear formulas and concepts do not necessarily make great architecture. We must move from a "schema" to an "attempt." To start accepting architecture as a *durée* superimposed on society is one opportunity to create new critical standards for architecture. As has already become legendary, Hasegawa told those attending the Shonandai Cultural Center ground-breaking ceremony, "I do not make architecture."

●Takehiko Higa/Itsuko Hasegawa Atelier

## インクルーシブ・マインド

長谷川は建築というものを、あるひとつの建物が意図されてからそれが設計され、現実の建築として立ち上がり、使用され、変化し、消えていくまでの長い過程をもった「持続」と考えているようである。近頃、長谷川が用いるこの「デュレ（持続）」という言葉は、もともとはベルグソンから来ており、長谷川によって様々な意味が込められ、現在も開発途中の概念であるが、建築に対する長谷川の考え方を最もよく表している。長谷川のいう「デュレ」とは、ひとつの建築が社会の中に「投企」される時に「インクルーシブ」としか言いようのない重層的な有様と、そこに潜む流動する可能性を指し示そうとするものであり、建築家の仕事とは、この刻々と変化し続けるダイナミックな流れの中から建築をつかみ出してくることで捉えられている。しかも、それは理念的なレベルに止まるものではなく、現実の社会の中で極めて具体的にを行わなければ価値がない。ある主義主張を表現（リプレゼンテーション）するのではなく、建築の成立をめぐる立ち現れてくる様々な出来事、複数の人の意図、解消され得ない多数性、関係性といったものを総合的にインクルーシブし、建築というかたちで顕在化させていくことに

よって、建築＝社会の新たな諸形態の飛躍へと結び付けようという試みである。それは建築を新たな社会性のアレンジメント、あるいは新しいタイプの社会活動のようなものとして捉えようとする視点でもある。

しかしながら長谷川は、社会がどうあったらよいかということに対する明確なヴィジョンを提出するわけではない。かつて長谷川をガートルードスタインの文体に譬えた人がいたが、私はいつもベンヤミンの『暴力批判論』の中の短いエッセイを思い出してしまう。長谷川が掲げるのは究極的には「原っぱをつくれ！」というスローガンだけであり、それはさわやかな空気とフレキシブルな空間への渴望に支えられている。建築のプログラムが……とか、アクティビティが……等とやりだす我々の脆弱な形而上学的思考を瞬時に破壊した後に長谷川が持ち出す、いささかナイーブとも思える「原っぱ」という概念は、建築家にありがちなファンタスマゴリーというよりも、「長谷川の「原っぱ」かデリダのコラカ」というジョークが飛んでいるように、謎のブラックボックスとしてある。風呂敷のようなこのことばは、ある時にはバフチンのカーニバル空間、あるときには網野善彦的な無縁・公界・楽、あるときにはハーバーマスのコミュニケーション空間となり、「デュレ」が空間と交錯し建築が発生してくる場所である。

公共建築における長谷川は、つねに既成のプログラムを疑い、その有効性とコンテンポラリー性とこれが多数の意思を反映してつくられたものであるかどうかを執拗に問いつける。既存の組織やシステムを揺さぶってある種のすき間をつくりだしていく。行政の仕組みに働きかけ、既存の考え方を批評し、新しい関係をつくり始める。長谷川にとってはこのすき間そのもの、建築を成り立たせている条件を流動化させていく活動自体が「原っぱ」の始まりなのである。（地上にひとつの場所を？ 社会に「原っぱ」を？）

建築の可能性は建築がもっている社会の中への投企性にある。その投げ入れ方こそが問われなければならない。建築の可能性は建築が持っているインクルーシブな在り方にある。建築においては、理念や形式というものは効果がなければ直ちに書き換えられなければならないものだし、明快な図式や概念で説明できればそれがすぐれた建築になるわけではない。「企て」から「試み」へ移ろう。建築の新しい批評の基準をつくる必要がある。そのとき、建築を社会へ投企される「デュレ」として捉えることがひとつの契機となるだろう。すでに伝説になっている話であるが、かつて長谷川は湘南台の起工式の席上で全ての関係者を前にこう言ったという。「私は建築をつくっているのではありません」

●比嘉武彦/長谷川逸子・建築計画工房



Going back to our past projects, we find a number of general characteristics. We extracted seven key words that best describe them, and have tried to organize them along a time line. Those words are; *garando* (emptiness), latent nature (topography), *harappa* (empty field), bridge, screen and software. Although some words differ slightly from the rest in application, all of them share common design directions.

All of our work maintains the concept of "*garando*" and the "*harappa*" as a basis of design. We especially sought "*garando*" in our early residential projects in order to actively provide unexpected flexibility for "*long durée*" instead of the preconceived formulas and patterned theories of architects. In public buildings, it is an "*harappa*." Residential "*garando*" is the equivalent of a public "*harappa*". The "*harappa*" is an all inclusive space for diverse

activities, unbuilt land, a forest, a place of multi-layered "*long durée*" with many views and voices, and a free space of continuous changes and creations.

"Latent nature" or "architecture as topography" is the architecturalization of a "*harappa*" and points awards the emphasis of the landscape aspects of architecture. The interplay of the natural and the artificial or the environment comfortably transformed by architecture (as represented in "showers of light filtered through perforated metal panels") has become the main theme of our work. The small cupolas used for ventilation and light in the Bizan Hall and the House in Kumamoto are the applications of this concept on the roof. The "bridge" is an extension of the "*harappa*" concept as an articulated circulation system.

The glass skinned buildings built since the

Footwork project are transparent "*garando*." Contrary to houses which require privacy, in highly public buildings we have tried to induce incidental architectural relationships with the surroundings. This approach was later formalized as the concept of the "screen." The "screens" set up in the "*harappa*" are symbolic of the germination of a new society, and the inclusion of complex, unspecific, and pluralistic relationships. The "screens" wrap all the people, their actions, light, wind, nature and a whole landscape, and we believe, create a new inclusive architecture.

As we reached the concept of "*garando*" through close communication with clients, in public building projects we used the "software" of social and architectural arrangements to start motion toward utilization of the "*harappa*."

過去の作品を一群のアルシブとみなしたとき、そこには複数のゆるやかな線分が見出される。ここではこれまでの作品から7つのキーワードを抽出し、時系列的に簡単な整理を試みた。

抽出したキーワードは、ガランドウ、第2の自然(地形)、原っぱ、ブリッジ、幔幕、ソフトの7つである。若干カテゴリーを異にするものもあるが、設計の過程でキーワードとして共有されたものをまとめている。

全ての作品の底流には「ガランドウ」と「原っぱ」がある。「ガランドウ」は主として、初期の住宅群の設計過程において探求された。これは、生活というものを固定した様式、あるいは建築家による図式化された理念としてではなく、思いがけない程のフレキシビリティに満ちた「長い持続」としてとらえたときの建築の在り方の積極的な提案である。

公共建築においては、これが「原っぱ」と言い換え

られている。ガランドウ(住宅)=原っぱ(公共)という関係である。「原っぱ」とは多様な関係性を可能にする滑らかな空間であり、さら地であり、森であり、複数の視点、複数の声による重層的な「長い持続」の場であり、流動し、生成するフリースペースである。

「第2の自然」または「地形としての建築」は、「原っぱ」の建築化であり、結果的に建築のランドスケープ化への傾向を示している。また、「パンチングを通した光のシャワー」というように、建築によって変換され最適化された環境、自然と人工のうつろいが主要なテーマとなっている。

〈眉山ホール〉や〈熊本住宅〉の通風と採光の取り込み装置としての「小屋根群」は、これをルーフという建築的手法によって展開したものといえる。

「ブリッジ」は同じく建築的装置によって「原っぱ」をサーキュレーション化するものである。

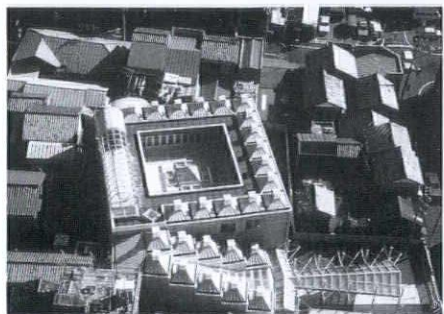
〈フットワーク〉以降のガラスの建築は、「ガランドウ」の透明化として捉えることができる。プライバシーが必要な住宅とは違って公共性の強い建築となったとき、周辺との偶発的な関係をも誘い込もうという意図があり、その後これは「幔幕」という概念として方法化されようとしている。

「原っぱ」の上に立ち上がる「幔幕」は、社会性の萌芽、不特定多数の関係性の包括である。「幔幕」は、多数の人々とその活動、光と風(自然)、ランドスケープを丸ごとくんだ「未知のものを含んだ建築のあり方」を見い出そうとする試みである。

「ソフト」の関わり合いは、住宅建築の「ガランドウ」が濃密なコミュニケーションを経てたどりついたヴォイドであったように、「原っぱ」での活動を始動させるための契機、建築の社会化あるいは、建築という企てを通して現れる社会のアレンジメントである。



House in Kuwabara, Matsuyama



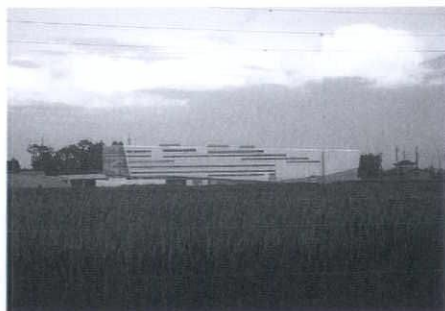
Bizan Hall



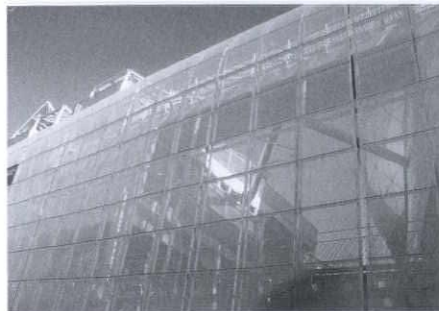
Shonandai Cultural Center



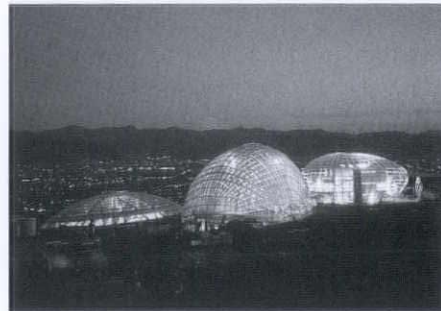
種別	作品名	garando	small roofs	latent nature	harappa	bridge	screen	software	Name of Works
住宅	初期住宅群	■							Houses of Early Period
研修施設	眉山ホール	■	■	■					Bizan Hall
住宅	練馬の住宅	■		■					House in Nerima
アトリエ	富ヶ谷のアトリエ	■		■			■		Atelier in Tomigaya
病院	菅井病院		■	■					Sugai Internal Clinic
住宅	熊本の住宅	■	■						House in Kumamoto
住宅	東玉川の住宅			■					House in Higashi-Tamagawa
住宅	自由が丘の住宅	■							House in Jiyugaoka
公共建築	湘南台文化センター	■	■	■	■	■		■	Shonandai Cultural Center
仮設建築	奈良シルクロード博覧会浅茅原休憩施設		■		■				Nara Silkroad Expo, Asajigahara Rest Area
仮設建築	世界デザイン博覧会インテリア館		■	■	■				Nagoya World Design Expo Pavilion
集合住宅	KJプロジェクト			■					KJ Project
集合住宅	コナ・ビレッジ		■			■			Cona Village
病院	不知火病院	■	■	■					Shiranui hospital, Stress Care Center
街路	横浜グランモール			■	■				Yokohama Grandmall Project
オフィス	STMハウス			■			■		STM House
集合住宅	熊本市営託麻団地			■					Takuma Housing Project, Kumamoto
公共建築	すみだ生涯学習センター	■	■	■	■	■	■	■	Sumida Culture Factory
オフィス	フットワーク コンピューターセンター	■			■		■		Footwork Computer Center
公共建築	氷見市仏生寺小学校	■		■	■				Busshoji Elementary School, Himi
公共建築	大島町絵本館	■		■	■	■	■	■	Oshima-Machi Picture Book Museum
公共建築	山梨フルーツミュージアム	■		■	■		■	■	Museum of Fruit, Ymanashi
公共建築	葉っぱの住宅			■					Leaf House
公共建築	滋賀県立大学・体育館	■			■		■		The University of Shiga Prefecture, Gymnasium
公共建築	氷見市海峰小学校	■			■				Kaiho Elementary School, Himi
公共建築	氷見市海浜植物園	■		■	■		■	■	Himi Seaside Botanical Garden
公共建築	新潟市民文化会館 (仮称)	■		■	■	■	■	■	Niigata City Performing Arts Center
公共建築	カーディフオペラハウス			■	■		■		Cardiff Bay Opera House
商業建築	天草ローズガーデン	■			■			■	Rose Garden, Amakusa
集合住宅	茨城県常滑川アパート (仮称)				■	■			Namekawa housing, Ibaraki
公共建築	横浜国際客船ターミナル	■		■	■	■	■		Yokohama International Port Terminal
集合住宅	長野市今井ニュータウン				■	■			Imai Newtown Housing, Nagano
住宅	マレーシアの住宅	■		■					House in Malaysia
港湾施設	CP防波堤プロジェクト			■	■				CP Jetty Project
公共建築	T市庁舎プロジェクト			■					T Civic Center Project
展示	〈Japan Today〉デンマーク				■		■		"Japan Today" Installation in Denmark
		ガランドウ	小屋根群	第2の自然	原っぱ	ブリッジ	幔幕	ソフト	



Ohshima-Machi Picture Book Museum



Sumida Culture Factory



Museum of Fruit, Yamanashi



# 作品データ

## Chronological Data of Works

### ■練馬の住宅 House in Nerima

1. 所在地 Location
2. 主要用途 Program
3. 設計協力 Cooperator
4. 設計期間 Design Period
5. 工事期間 Construction Period
6. 敷地面積 Site Area  
建築面積 Building Area  
延床面積 Total Floor Area

1. 東京都練馬区 Nerima, Tokyo
2. 専用住宅 House
3. 構造：梅沢建築構造研究所
4. 1985.4～1985.11
5. 1985.12～1986.4
6. 330.58㎡／153.08㎡／244.64㎡

### ■富ヶ谷のアトリエ Atelier in Tomigaya

1. 東京都渋谷区 Shibuya, Tokyo
2. アトリエ Atelier
3. 構造：梅沢建築構造研究所
4. 1984.9～1985.12
5. 1986.2～1986.7
6. 75.67㎡／60.10㎡／188.47㎡

### ■菅井病院 Sugai Internal Clinic

1. 愛媛県松山市 Matsuyama, Ehime
2. 病院＋住宅 Hospital＋House
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：佐野武二
4. 1985.6～1985.10
5. 1986.1～1986.9
6. 4,725.76㎡／367.20㎡／1,458.41㎡

### ■熊本の住宅 House in Kumamoto

1. 熊本県菊池郡 Kikuti, Kumamoto
2. 専用住宅 House
4. 1985.4～1985.9
5. 1985.10～1986.3
6. 985.72㎡／202.32㎡／198.58㎡

### ■東玉川の住宅 House in Higasi-tamagawa

1. 東京都世田谷区東玉川 Setagaya, Tokyo
2. 専用住宅 House
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：佐野武二
4. 1986.1～1986.7
5. 1986.8～1987.3
6. 240.04㎡／143.97㎡／237.7㎡

### ■自由が丘の住宅 House in Jiyugaoka

1. 東京都世田谷区奥沢 Setagaya, Tokyo
2. 専用住宅 House
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：佐野武仁
4. 1987.1～1987.9
5. 1987.10～1988.5
6. 177.028㎡／101.25㎡／163.73㎡

### ■湘南台文化センター Shonandai Cultural Center

1. 神奈川県藤沢市湘南台 Fujisawa, Kanagawa
2. 複合文化施設 Public Cultural Complex
3. 構造：木村俊彦構造設計事務所  
設備：早稲田大学井上研究室
4. 1986.3～1987.3 (第1期工事)  
1987.4～1988.3 (第2期工事)
5. 1987.7～1989.3 (第1期工事)  
1989.4～1990.3 (第2期工事)
6. 7,930.3㎡／2,105.47㎡／10,529.83㎡



■奈良シルクロード博覧会 浅茅原休憩施設 Nara Silkroad Expo, Asajigahara Rest Area

1. 奈良県奈良市 Nara, Nara
2. 博覧会用仮設休息施設  
Expo Temporary Rest House
4. 1987.5~1987.12
5. 1988.1~1988.3
6. — / 300.00m<sup>2</sup> / —

■世界デザイン博覧会 インテリア館 Nagoya World Design Expo Pavilion

1. 愛知県名古屋市熱田区西町世界デザイン博覧会  
白鳥会場内 Nagoya, Aichi
2. 博覧会用仮設展示施設  
Expo Temporary Exhibition Facility
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：ARCシステム設計室
4. 1988.4~1988.11
5. 1988.11~1989.6
6. 1,500.00m<sup>2</sup> / 889.08m<sup>2</sup> / 1,345.56m<sup>2</sup>

■コナ・ヴィレッジ Cona Village

1. 兵庫県尼崎市常松 Amagasaki, Hyogo
2. 賃貸集合住宅 Housing for Rent
3. 構造：Oak設計事務所  
設備：櫻井設備設計システムズ  
企画協力：タケツ、エムケイ設計事務所
4. 1987.10~1988.3
5. 1988.6~1990.2
6. 6,624.47m<sup>2</sup> / 2,977.03m<sup>2</sup> / 13,243.17m<sup>2</sup>

■不知火病院 Shiranui Hospital, Stress Care Center

1. 福岡県大牟田市大字手鎌 Omuta, Fukuoka
2. 病院 Hospital
3. 構造：服部重信設計事務所  
設備：団設備設計事務所
4. 1987.10~1988.10
5. 1988.11~1989.11
6. 14,289.90m<sup>2</sup> / 863.40m<sup>2</sup> / 1,508.30m<sup>2</sup>

■STMハウス STM House

1. 東京都渋谷区富ヶ谷 Shibuya, Tokyo
2. 事務所 Office
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：団設備設計事務所
4. 1989.7~1990.2
5. 1990.4~1991.9
6. 290.19m<sup>2</sup> / 185.59m<sup>2</sup> / 1,234.33m<sup>2</sup>

■熊本市営託麻団地 Takuma Housing Project, Kumamoto

1. 熊本市新南部町 Kumamoto, Kumamoto
2. 共同住宅 Public Housing
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：郷設計研究所
4. 1989.1~1990.10
5. 1990.12~1992.3
6. — / 1,077.37m<sup>2</sup> / 3,555.84m<sup>2</sup>

■フットワーク コンピュータセンター Footwork Computer Center

1. 兵庫県加東郡 Katou, Hyogo
2. 事務所（コンピューターセンター）Office
4. 1991.1~1991.10
5. 1991.11~1992.7
6. 2,823.09m<sup>2</sup> / 1,271.31m<sup>2</sup> / 2,640.90m<sup>2</sup>

■すみだ生涯学習センター Sumida Culture Factory

1. 東京都墨田区東向島 Sumida, Tokyo
2. 生涯学習施設  
Public Hall ( Hall + Library + Workshop )
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：設備計画
4. 1990.10~1992.3
5. 1992.7~1994.9
6. 3,400.07m<sup>2</sup> / 2,245.49m<sup>2</sup> / 8,447m<sup>2</sup>



■岩木山プロジェクト Mt. Iwaki Project

1. 青森県北津軽群 Kitatsuuru, Aomori
2. レストラン+ホール Restaurant + Hall
4. 1991.10~1993.5
5. 1993.5~1994.10
6. 5,000m<sup>2</sup>/1,100m<sup>2</sup>/—

■氷見市仏生寺小学校 Busshoji Elementary School, Himi

1. 富山県氷見市惣領 Himi, Toyama
2. 小学校 Elementary School
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：設備計画
4. 1991.12~1992.5
5. 1992.6~1994.3
6. 15,099.0m<sup>2</sup>/2,685.73m<sup>2</sup>/2,948.13m<sup>2</sup>

■大島町絵本館 Oshima-Machi Picture Book Museum

1. 富山県射水郡大島町鳥取 Imizu, Toyama
2. 複合文化施設 (図書館 + ホール + ギャラリー)  
Library + hall + gallery
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：設備計画、祥設計
4. 1992.1~1992.10
5. 1992.12~1994.8
6. 9,111.79m<sup>2</sup>/1,171.59m<sup>2</sup>/2,413.10m<sup>2</sup>

■山梨フルーツミュージアム Museum of Fruit, Yamanashi

1. 山梨県江曾原地内笛吹川フルーツ公園  
Yamanashi, Yamanashi
2. 展示施設 + 温室 + 集会施設  
Exhibition Hall + Green House + Meeting Room
3. 構造：Ove Arup & Partners Japan Limited  
設備：設備計画
4. 1992.2~1993.1
5. 1993.7~1995.8
6. 19.5ha/3,297m<sup>2</sup>/6,459m<sup>2</sup>

■葉っぱの住宅 Leaf House

1. 山梨県江曾原地内笛吹川フルーツ公園  
Yamanashi, Yamanashi
2. 公園監理施設 Park Maintenance Facility
3. 構造：服部重信設計事務所  
設備：設備計画
4. 1992.2~1993.9
5. 1993.10~1995.7
6. 19.5ha/223.16m<sup>2</sup>/193.61m<sup>2</sup>

■滋賀県立大学体育館 The University of Shiga Prefecture, Gymnasium

1. 滋賀県彦根市八坂町 Hikone, Shiga
2. 体育館 Gymnasium
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：設備計画
4. 1993.9~1994.3
5. 1994.4~1995.3
6. 294,567.3m<sup>2</sup>/3,579.4m<sup>2</sup>/3,917.3m<sup>2</sup>

■氷見市海峰小学校 Kaiho Elementary School, Himi

1. 富山県氷見市阿尾 Himi, Toyama
2. 小学校 Elementary School
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：祥設計
4. 1993.10~1994.5
5. 1994.6~1996.3 (予定)
6. 18,351m<sup>2</sup>/3,064m<sup>2</sup>/3,681m<sup>2</sup>

■氷見市海浜植物園 Himi Seaside Botanical Garden

1. 富山県氷見市柳田 Himi, Toyama
2. 植物園 Botanical Garden
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：祥設計
4. 1993.10~1994.2
5. 1994.5~1995.5
6. 10,119 m<sup>2</sup>/1,741 m<sup>2</sup>/2,294 m<sup>2</sup>



■新潟市民文化会館（仮称） Niigata-City Performing Arts Center

1. 新潟市一番堀通町 Niigata, Niigata
2. 音楽ホール+演劇ホール+能楽堂  
Concert Hall + Theater + Noh Theater
3. 構造：木村俊彦構造研究所  
設備：環境エンジニアリング  
音響：ヤマハ音響研究所
4. 1993.4~1995.2
5. 1995.7~1998.5
6. 140,143.87m<sup>2</sup>/10,062.4m<sup>2</sup>/25,099.9m<sup>2</sup>

■カーディフベイ・オペラハウスコンペ Cardiff Bay Opera House

1. ウェールズ州カーディフ、イギリス  
Cardiff, Wales, United Kingdom
2. オペラハウス Opera House
3. 構造：Ove Arup & Partners Japan Limited  
設備：Ove Arup & Partners  
音響：ARUP ACOUSTICS, ヤマハ音響研究所
6. 14,947m<sup>2</sup>/11,999m<sup>2</sup>/37,680m<sup>2</sup>

■天草ローズガーデン Rose Garden, Amakusa

1. 熊本県河浦町久留 Kawaaura, Kumamoto
2. 店舗 Shop
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：設備計画
4. 1994.8~1995.5
5. 1995.1~
6. 14,644.70m<sup>2</sup>/1,368.94m<sup>2</sup>/1,329.78m<sup>2</sup>

■茨城県営滑川アパート（仮称） Namekawa Housing, Ibaraki

1. 茨城県日立市滑川町 Hitachi, Ibaraki
2. 共同住宅 Public Housing
3. 建築：横須賀満夫建築設計事務所  
構造：梅沢建築構造研究所  
設備：設備計画
4. 1994.8~
5. 1995.3~
6. 10,462.41m<sup>2</sup>/2,577.12m<sup>2</sup>/5,849.23m<sup>2</sup>

■長野市今井ニュータウン（オリンピック村）  
Imai Newtown Housing, Nagano (Olympic Village)

1. 長野市川中島町今井 Kawanakajima, Nagano
2. 共同住宅 Public Housing
3. 建築：エル設計事務所、誠設計事務所、基建築  
設計事務所（協同設計）  
構造：梅沢建築構造研究所  
設備：玉井設計事務所、環境設備設計事務所、  
NEI設計
4. 1995.1~1995.6
5. 1996.5~
6. 11,782.76m<sup>2</sup>/3,862.84m<sup>2</sup>/10,359.76m<sup>2</sup>

■横浜港国際客船ターミナル国際コンペ Yokohama International Port Terminal

1. 横浜市中区海岸通り Yokohama, Kanagawa
2. 客船ターミナル Port Terminal
3. 構造：梅沢建築構造研究所  
設備：環境エンジニアリング

■マレーシアの住宅 House in Malaysia

1. クアラルンプール、マレーシア  
Kuala Lumpur, Malaysia
2. 住宅 Spec. House
3. 建築：Arkitek Kumpulan Design International  
(AKDI)  
構造：GCS Sdn Bhd  
設備：Angkasa Jurutera Perunding Sdn Bhd
4. 1994.11~
5. 1995.12~
6. 約2,300m<sup>2</sup>/Interweave 546m<sup>2</sup>, Split 410m<sup>2</sup>,  
Compact 492m<sup>2</sup>, Pavilion 594m<sup>2</sup>/737m<sup>2</sup>, 746m<sup>2</sup>,  
796m<sup>2</sup>, 829m<sup>2</sup>

■T市庁舎プロジェクト T Civic Center Project

1. 中華人民共和国台湾省台中市 Taichung, Taiwan
2. 市庁舎 Civic Center
6. 143,001.64m<sup>2</sup>/195,165m<sup>2</sup>





## Personal History

- 1964 Graduated from Department of Architecture, Kanto Gakuin University
- 1964 -69 Worked in office of Kiyonori Kikutake
- 1969 -71 Research student in Kazuo Shinohara Laboratory, Department of Architecture, Tokyo Institute of Technology
- 1971 -78 Worked in Tokyo Institute of Technology
- 1979 - Established Itsuko Hasegawa Atelier
- 1988 -90 Lecturer at Waseda University
- 1989 -92 Lecturer at Tokyo Institute of Technology
- 1992 -93 Visiting Professor at Harvard University Graduate School of Design
- 1993 Lecturer at Niigata University

## 略歴

- 1964 関東学院大学建築学科卒業
- 1964-69 菊竹清訓建築設計事務所勤務
- 1969-71 東京工業大学建築学科 篠原一男研究室
- 1971-78 東京工業大学建築科勤務
- 1979- 長谷川逸子・建築計画工房設立
- 1988-90 早稲田大学非常勤講師
- 1989-92 東京工業大学非常勤講師
- 1992-93 ハーバード大学客員教授
- 1993 新潟大学非常勤講師

## Staff

- |       |                   |
|-------|-------------------|
| 志鷹正樹  | 久原 裕              |
| 比嘉武彦  | 藤井 愛              |
| 川原田康子 | 今村創平              |
| 多羅尾直子 | 杉山雄二              |
| 日置和宜  | 林 浩希              |
| 信太淳英  | 吉永健一              |
| 八尾知子  | 石崎友久              |
| 吉澤洋子  | 卯月恵美子             |
| 山本祐介  | 工藤健吾              |
| 田村顕博  | 有泉朋子              |
| 森田修司  | Anne Scheou       |
| 藤森泰司  | 中山 薫              |
| 津枝勝見  | 西澤高男              |
| 柿本美樹枝 | Michel van Ackere |
- (1995.10 現在)

## Awards

- 1986 The Prize of Architectural Institute of Japan for design
- 1986 1st Prize, Open Competition for Shonandai Cultural Center, Fujisawa
- 1986 Japan Cultural Design Award
- 1990 Avon Arts Award for Shonandai Cultural Center
- 1990 1st Prize, Invited Competition for Sumida Culture Center, Tokyo
- 1991 1st Prize, Cultural Award of Residential Architecture in Fukuoka
- 1992 BCS Prize for Shonandai Cultural Center, Fujisawa
- 1992 1st Prize, Hospital Architecture Award
- 1993 1st Prize, Open Competition of Niigata City Cultural Hall and Area
- 1994 Toyama prefecture Architectural Award for Busshiouji Elementary school

## 受賞

- 1986 日本建築学会賞作品賞(眉山ホール)
- 1986 湘南台文化センター公開コンペ最優秀賞
- 1986 日本文化デザイン賞(一連の住宅建築)
- 1990 エイボン芸術賞(藤沢市湘南台文化センター)
- 1990 墨田区文化学習センター(仮称)招待コンペ最優秀賞
- 1991 福岡県建築住宅文化賞大賞(不知火病院)
- 1992 BCS賞(藤沢市 湘南台文化センター)
- 1992 病院建築賞(不知火病院)
- 1993 新潟市民文化会館(仮称)および周辺整備計画プロポーザル公開コンペ最優秀賞
- 1994 富山県建築賞(氷見市仏生寺小学校)

## Photo Credit

- Tomio Ohashi 大橋富夫 下記以外
- Shuji Yamada 山田脩二 p.5, 7, 85-89, 92, 93左, 113-114, 158右
- Mitsumasa Fujitsuka 藤塚光政 p.64-67, 74-75, 80上, 81右上および下, 91下, 99, 101-103, 111
- Katsuaki Furudate 古館克明 p.90, 91上
- Shonandai Cultural Center 湘南台文化センター p.93右
- Shinkenichiku-sha 新建築社 p.141
- Itsuko Hasegawa 長谷川逸子 p.6, 9-11, 21右下, 33-34, 70右4点, 73, 82-83, 158左2点, 159

## Translation of project descriptions

Hiroshi Asano 浅野 浩



# HITACHI

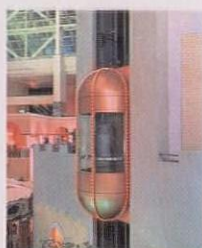
広がる生活空間を、  
やさしく、  
速やかに結びます。

## 日立エレベーター・エスカレーター

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の「超高速エレベーター」や、身近な暮らしの中で利用される「車いす用ステップ付きエスカレーター」、ホームエレベーターなど、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



### Hotel & Residence



### Public Space



### Office Building



### Shopping Center



超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。



株式会社 日立製作所

お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地  
電話/(03)3258-1111(大代) または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000  
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)261-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)741-1111





戸村 浩

### MOVE FORM——動—ム

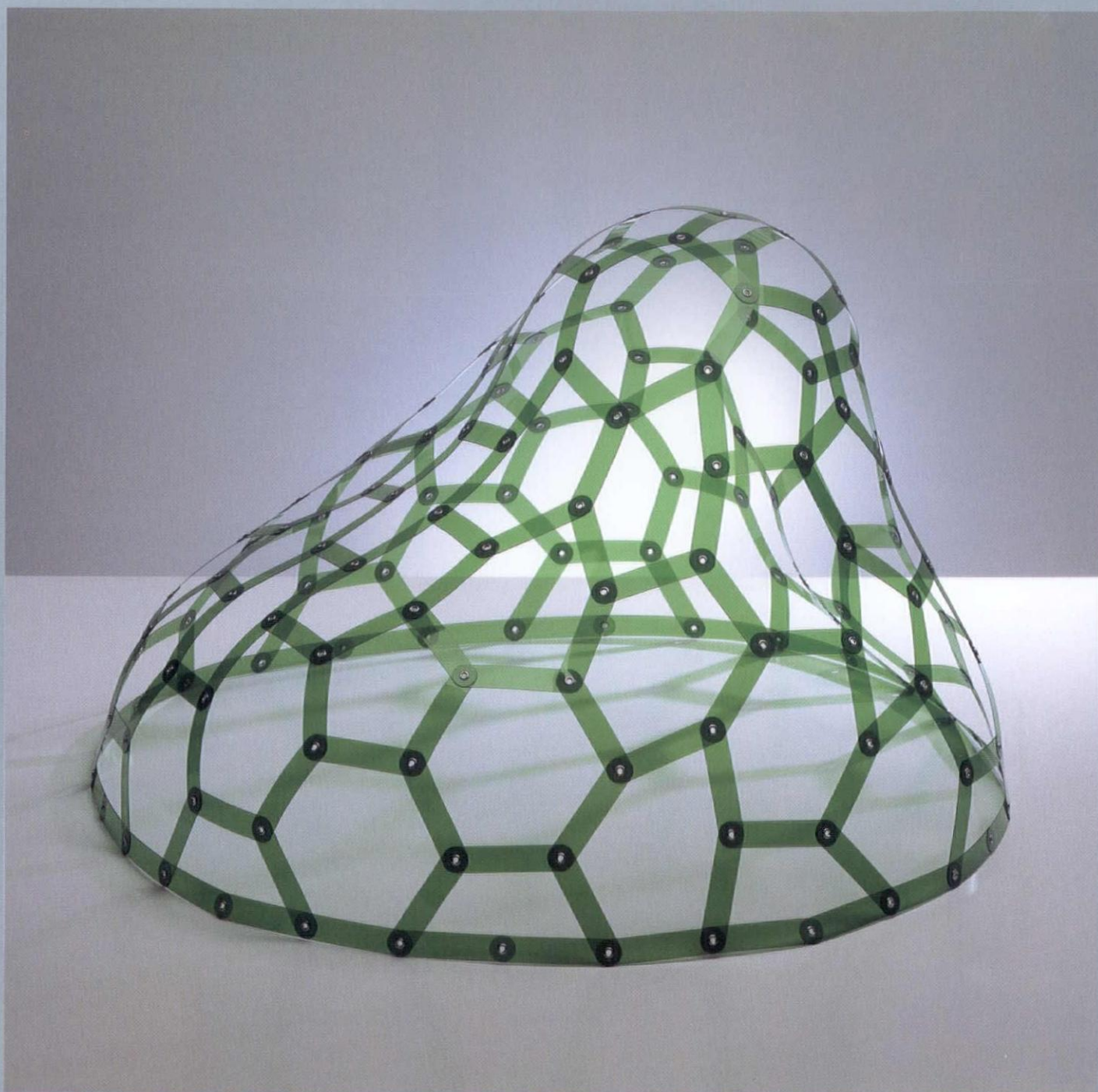


まず、このアップル・トモロジーで紹介したのは、MOVE FORMによる多面体の DONONACONTAHEDRON。12面の5角形と80面の6角形によって構成される92面体の照明器具である。

内部にたっぷりと光りを蓄え、周囲の空間を大きく包んでくれる発光体。宙空に浮かぶ禁断の惑星のようであり、まるで丸々と完熟し、豊富に蜜を保ったリンゴのようであった。だから、つかじりついて、形を変えてしまいたくなるのである。しかし、形を変えるとといっても、それは形態上の変化だけではない。

球体の中心に位置する光源を、クリヤー電球に取り替えるだけなのである。すると、室内の床から壁、天井全体に、92面体の270本の稜線と180の頂点が、影となり縞となって大きく写し出される。我々は、瞬時にして、ムーブ・フォルムの92面体の内部空間へと導き入れられたというわけだ。いわゆる、インスタントなドームの出現である。魅惑的なミラーボールのようだが、中心に核をもつこのドーム空間は、92面体の外部空間にいるはずなのに、球体の内部組織に組み込まれてしまったかのような、妙な錯覚を触発する。





そもそもドームは天空であり、天地創生の原型であって、大地に直立し得た我々人間の、根元的な時空感覚でもあろう。その原初的な空間や類似空間は、長い建造物史の中の随所に見られるが、ドーム空間の概念が確立されたのは、ほんの50年ほど前のことだ。異端の建築家バックミンスター・フラーによる測地線ドームの発明である。従来の閉鎖的な空間ではなく、天空を写し取ったかのような、そのジオデシック・ドームは、パイプを主構造とし、短時間で組み立てられる画期的なものだった。そして、現在、ドームは巨大空間を覆うことの出来るものとして、極一般的建造物となっている。しかし、それらは、外部とそう変わらない内部を隔てるために作られている天候膜に過ぎない。当時、フラー・ドームを愛した若者達にとって、このドーム空間は、天空の無窮空間を旅することの出来る宇宙的乗り物であった。

多面体を形作るすべてのムーブ・フォルムは、一種のドーム構造であり、それらは自由自在に形を変え、また動く。122面体の半球である緑色の動一も、変容し動き出すことのためにある。

●とむら・ひろし／造形美術家



撮影：田中 昇





すみだ生涯学習センター  
設計/長谷川逸子・建築計画工房 施工/安藤・東武谷内田・東京長谷川建設共同企業体

大型陶板でデコールしよう。

東京/〒101  
大阪/〒540  
工場/〒529-18  
札幌/〒060  
仙台/〒981  
高松/〒716  
福岡/〒812

東京都千代田区神田司町 2-6  
大阪府中央区大手通 3-2-21  
滋賀県甲賀郡信楽町作原 926  
札幌市中央区南一条西 7-12  
仙台市青葉区堤通雨宮町 3-23  
香川県高松市勅使町字田中84-1  
福岡市博多区奈良屋町 13-13

TEL.03 (5295)3555  
TEL.06 (943)6695  
TEL.0748( 8 2 )3001  
TEL.011 (281)0806  
TEL.022 (234)9741  
TEL.0878( 6 6 )3967  
TEL.092 (262)7077

大型陶板

**大塚オーミ陶業**

●OTセラミック ●テラコッタ ●美術陶板



## ものの潜在性／「1970年—物質と知覚」展より

「1970年—物質と知覚」展

岐阜県立美術館 1995年2月17日—3月26日

広島現代美術館 1995年4月15日—5月28日

北九州市立美術館 1995年8月19日—9月24日

埼玉県立美術館 1995年10月7日—12月17日

もの派の活動に焦点をあてた展示は、これまでのところ、一部の画廊にはあったものの、公共の美術館では、あまり紹介されてこなかったように見える。この展覧会は、4つの美術館が協力して、1970年前後の、関根伸夫や菅木志雄、原口典之といった、もの派の活動に焦点をあてたものだ。

1960年代の芸術運動が、世界的に同時進行していたことは、よく知られている。日本のもの派や、アメリカの（ポスト）ミニマリズム、フランスのシュポール／シュルファスや、旧西ドイツにおけるヨーゼフ・ボイスの活動、オーストリアのアクションイズムや、イタリアのアルテ・ポーヴェラなどは、明らかに同じ時代を呼吸していた運動だった。とりわけ、日本のもの派とアメリカのポスト・ミニマリズムは、理論的には、ともに現象学に依拠しつつ、なおかつ、先行する活動を踏まえながら、同時にそれを批判的に拡散・展開させていった点でも、よく似ているかもしれない。もの派の中心的人物の一人、関根伸夫は元ハイ・レッド・センターの高松次郎の下から出てきているし、アメリカのポスト・ミニマリストの中には、カール・アンドレアロバート・モリスのように、ミニマリストからそのままポスト・ミニマリストへシフトしていったメンバーもいる。あるいは、ありていに言えば、アレグリー性とカリスマ性がべったりへばりついたヨーゼフ・ボイスの活動に比べれば、日本やアメリカの活動の方が、理論的には真摯だったし、シャープだったとも言えるのかもしれない。

もの派にせよ、（ポスト）ミニマリズムにせ

よ、その理論的な根拠は、現象学だった。現象学的に解釈された「作品」の「場所」とは、構造化された空間のことで、この空間を構造化しているのは、けだし人間の身体性である。こうした視点は、制作者から「作品性」という特権的な立場を剥奪し、制作者と鑑賞者、そしてものそのものが形成する「知覚」の場所／空間へと「作品」を変容させた点では、確かに画期的ではあったろう。だがしかし、今度は人間の身体性が、特権的なものとして、いわば人間中心主義として、措置されてしまったとも、言えるものである。

さらに、ポスト・ミニマリズムについて、もうひとつ言うなら、よく言及されたことに、社会的・政治的文脈との関係がある。1970年、ニューヨーク大学に結集したアンドレア・モリスたちは、マンハッタン4つの主要美術館と、40の主要ギャラリーを巻き込み、「ベトナム反戦」を掲げてアート・ストライキに突入する。

「ストライキは、芸術である！」

それは、現代美術がレゾン・デートルを賭けた、ぎりぎりの闘争だったとは、言えるだろう。だがしかし、「すべてが芸術である」のなら、もはや「芸術」などという概念は必要ないのであり、その行き着く先にあるのは、容赦のない自己否定以外の、なにものでもない。

1970年。

この5年後、当のベトナム戦争において、アメリカは苦い敗北を味わうことになる。

それにしても、しかしながら、1970年前後の世界的な芸術活動は、こうした歴史的・理論的・社会的・政治的文脈の外側では、語り

得ないものなのだろうか？

あるいは、もはや「ものそのもの」や、制作者や鑑賞者の関係を、これまでとは別の視点から捉え、別の仕方で展開させることは、もうできないのだろうか？

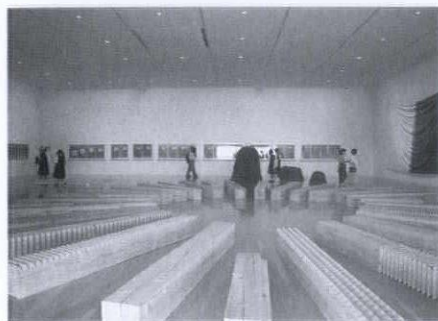
そんなことを、ふと思いついたのは、菅木志雄のパフォーマンスを見ていたときだった。長さ10メートルはある白い布を、両側から丹念に折りたたんでいき、小石で押さえ、牛乳をかけ、泥をまぶし、それから丁寧に布を広げ、布を帯状に切り裂き、その先に小石をくくりつけ、小枝を布にくるんで…、といった行為を、えんえん2時間かけて展開していく。だがそこで展開されているのは、ものの可能性の追求とか、ものの可能性の表現の追求とか、まして、ものの多種多様性の表現などでは、あるまい。「すべては芸術である」などという謂いが、つまるところ粗雑な全体主義でしかないように、「多種多様性」などという謂いも、つまるところ、ものの「全体」性を、暗黙のうちに措置してしまっているからである。そうではなく、そこで展開されているのは、二度と再び繰り返すことのできない、その時間、その場所での、ものの潜在性の展開なのである。あるいは、この時間と場所ともものそのものが、固定的な知覚関係などではなく、生成するひだのように、ものの潜在性を展開しているのだとも、言えるだろう。

おそらくそこに、制作者と鑑賞者が入っていける余地が、まだあるようにも思える。

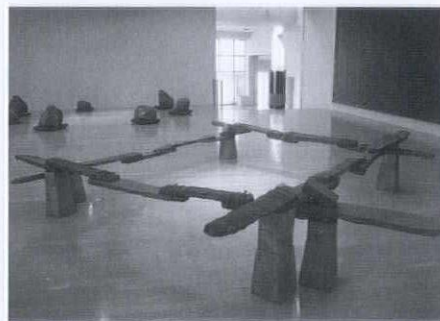
●松畑強／建築家



吉田克明、「Cut-off No.2」(1969、手前)と  
野村仁、「Tardiology」(1968-69、奥)



小清水漸、「表面から表面へ」(1971)

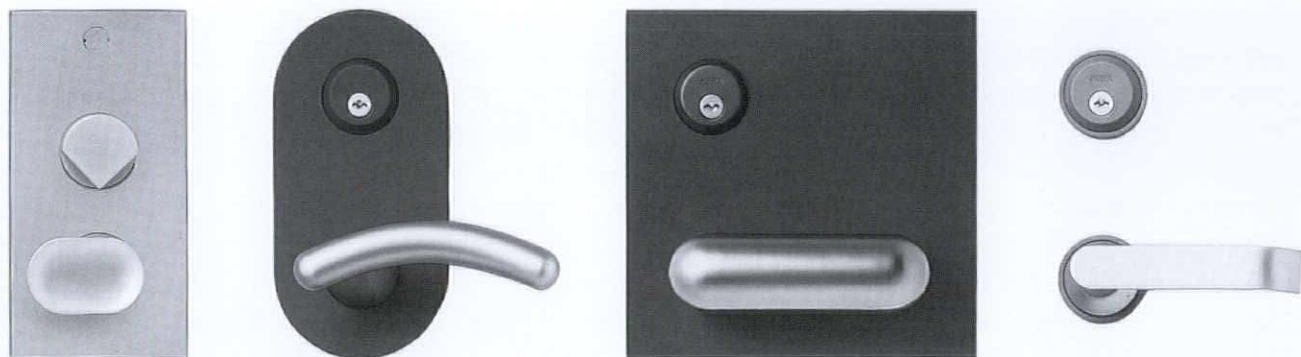


菅木志雄、「連體体」(1973)

photos:T.Matsuhata

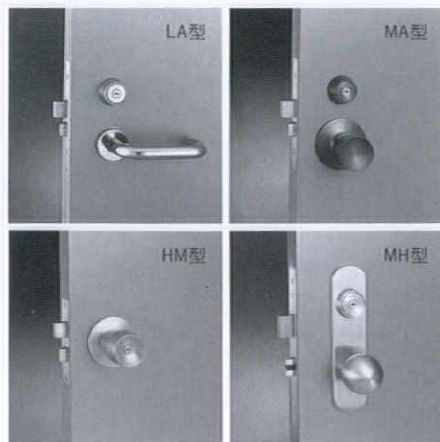


# なぜINTERFACEは



## いい製品だけを心掛けてきたMIWA。

ロックには、まず破壊攻撃に対する対破壊強度、耐久性、豊富なカギ違い数という3つの基本性能が求められます。その上で、いいロックであるためには、用途に合わせた幅広い機能、使いやすさと建物との調和を考えたデザイン、さらには滑らかな作動感や音質、多彩なキーシステムなどをできる限り盛り込んだ、完成度の高いメカニズムが必要です。もちろん安心してご使用いただくための品質管理、販売、アフターサービスなどソフト面の充実も欠かせま



せん。MIWAはこのすべてを満たすことに全力を投入してきました。

## 時代を先取りしたロックINTERFACE。

ロックはさまざまな用途や要望によって細分化され、現在では実に多くの製品がつくられています。もちろんすべての製品は、今の社会が必要としているものばかりです。しかし決して現状に満足しているわけではありません。私たちは今の時代にふさわしいロックをあらためて考え、さらに1歩前進させるために3つのコンセプトを見つけました。それはボーダーレス時代に備え、国際的に通用するロックにすること。高級化する建物に即した機能、性能、感性を備えた本格的なロックにすること。そして利用者にとって選びやすく、取り付けやすいロックにすることです。この3つの要素を満たすには、まず国際的な規格に適合させる必要があります。しかし、残念ながらロックには世界共通の規格がありません。そこで私たちは性能基準が厳しく、システムチックに整備されているアメリカのANSI規格（米国国家規格協会）に着目しました。

## ●ANSI規格は厳しい性能基準を規定。

ANSI規格はロックの実用性能試験、防犯性能試験、耐久性能試験、仕上性能試験について厳しく規定しています。その内容のレベルは非常に高いのですが、MIWAでも同じような研究を継続的にやってきたので、努力の結果クリアすることができました。もちろんINTERFACEはこの規格のすべてに適合させて、信頼性を実証しています。

## ●ANSI規格は切り欠き寸法を規定。

ANSI規格には寸法基準があり、施工性を向上させています。玄関ドアから室内ドアまですべての錠ケースとストライクは、規定の切り欠き寸法に合致しなくてはなりません。ですから、扉と枠の加工が錠機能の決定前に行え、錠機能の変更もケースの交換だけで済みます。また、この規格はアメリカのものだけに、日本の一般的なドアには適さない部分があります。そこで、国内のドアの仕様に合わせたフロントの幅、デッドボルトのストロークなどを盛り込んだ、国内仕様のケースも用意しました。もちろんANSI規格のメリットはそのまま確保しています。

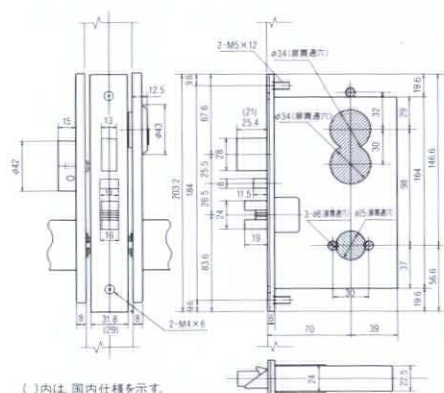
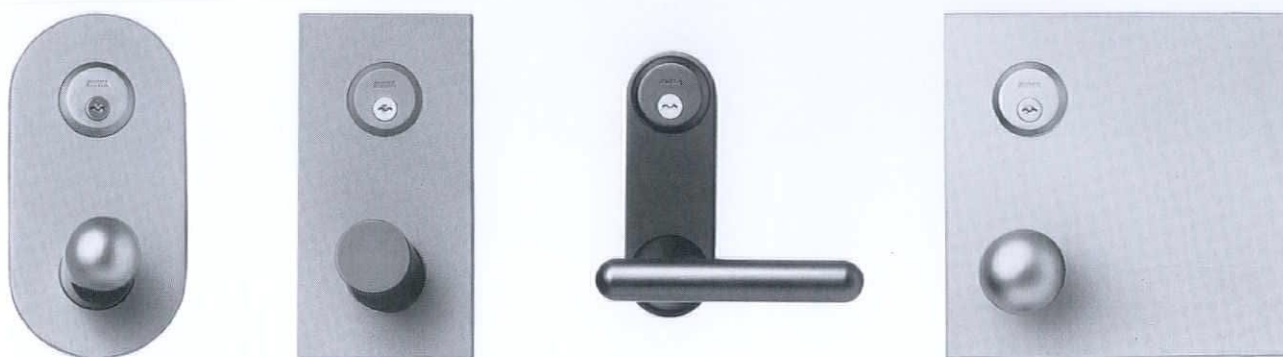
最新鋭の設備をそなえた創立50周年記念工場が竣工し  
生産力がさらにアップしました。



ありがとうございます。おかげさまで50周年。  
美和ロック株式会社 〒105 東京都港区芝3丁目1番12号 TEL.03(3452)5551代



# 生まれたのか。



## ●ANSI規格はロックの機能を統一。

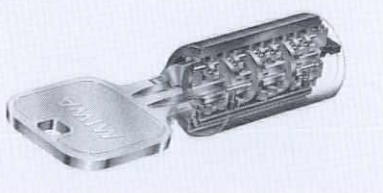
ANSI規格の最大の特長ともいえるのが、錠機能の記号化で、20数通りの機能がシステムチックに構築されています。たとえばルームドア錠は『F21』、ホテル錠なら『F15』というように、部屋の用途に合わせた機能の指定が、メーカー間共通の記号で行えます。

## INTERFACEの安心を支える『U9』

ANSI規格では特に規定されていませんが、けっして無視できないのがロックの生命ともいえるシリンダーです。INTERFACEとはほぼ同時

期に完成した主力シリンダー『U9』は、約1億5千万通りの膨大なカギ違い数を得たので、多彩なキーシステムにも対応できます。しかもキーシステムの構築によって起きる、急激なカギ違い数の減少はありません。もちろん不正解錠に強く、カギの質感もよく抜き差し感が滑らかになりました。

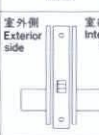

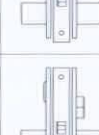
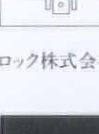
U9



## 格調を重視したシステムチックなデザイン。

このようにANSI規格への適合をはじめ、操作感や音質などにまで配慮してメカニズムを磨き上げましたが、もうひとつ大切な要素があります。デザインを忘れてはなりません。人の感性に訴え、高級化する建物にも対応する格調高いフォルムを用意するために、私たちは一流デザイナーに協力をお願いしました。モジュール化されたレバーハンドル、ノブ、エス

カチオンは自由な組み合わせができ、カラーを含めると660ものバリエーションが得られます。選択の幅をより広げることにより、それぞれの個性やセンスが表現でき、組み合わせること自体が楽しめるようになりました。これがMIWAの自信作INTERFACEです。今後もデザイン展開などを含めて、さらに充実したシリーズに育てていきます。

記号	用途例または一般名称	略図	機
F01	空錠		常時、内外のハンドルでラッ
F02	個室 寝室 浴室錠		ラッチボルトは内外のハンド ムターン、外からは非常開錠 操作すると、外ハ
F21	一般居室用		ラッチボルトは内外のハンド ムターン、内からはサムターンで
F22	個室 寝室 浴室用		ラッチボルトは内外のハンド ムターンの操作で施錠されま すのハンドル操作により外ハン

※INTERFACEカタログをご希望の方は、美和ロック株式会社までご請求ください。

INTERFACE



心は、どこまで旅していくのだろうか。  
思いは、どこまで表現できるだろう。

たった一冊の絵本にも、確かなひとつの宇宙があります。

ページを開けば、心は自由に飛び立ち、

大人も子どもも、豊かな世界を旅していく。

そんな絵本の文化を発信する建物に、

建築家が託したイメージは、「船」でした。

強く、あふれる思いを形にするために、

求められる技術や表現力を、より高く実現したい。

建築空間への夢や思いとともに、私たちも進みつづけます。

施工例／大島町絵本館

人にやさしい快適空間をめざして。

**立山アルミニウム工業株式会社**

本社／〒933 富山県高岡市早川550番地(ビル建材事業部/ビル建材部)  
(商業施設事業部/アドサイン部)

TEL (0766) 20-3321  
TEL (0766) 20-3329



『ビザンティン美術への旅』

赤松章＝写真 益田朋幸＝文

A4判 256頁

平凡社 4800円

トルコ、ギリシャ、イタリアなど  
ビザンティンの各地を訪ね、教会建築、モザイク、  
フレスコなどの作品群を通して具体的に  
ビザンティンの世界に迫る。  
ビザンティンの歴史、美術、建築をめぐる  
新しい旅への提言でもある。



『論評 建築界を視る』

橋本喬行＝著

A5判 305頁

日刊建設通信新聞社 1800円

本書は、著者がかつて、設計・施工・専門工事の  
三者間の共通言語を確立しようと提案した、  
著作『論評 建築界を考える』の続刊である。  
ここでも、共通語の重要性を訴え続け、  
さらに、建築分野には多様化する顧客の要望に応え  
ようとする発想がないことに憂えている。



『数寄屋の実践——番匠設計の30年』

小町和義＝著

A4判 212頁

建築資料研究社 3900円

本書は『住宅建築』誌に掲載された  
著者の作品を中心に、未発表の作品も含めて  
番匠設計の数寄屋建築にみる空間造形を掲載する。  
作品紹介とあわせて、巻末の著者による自分史は、  
激動の昭和を生きた建築家の記録として  
読む者を魅了する。



『戦後建築の終焉——世紀末建築論「ート」』

布野修司＝著

四六判 285頁

れんが書房新社 3090円

近代建築からポストモダン、  
バブル時代を経て世紀末へ、  
戦後半世紀の建築（思想）を跡づけ  
総括するとともに、  
磯崎新・原広司の建築思想論を媒介に  
21世紀へ向かう新たな展開の可能性を問う。



『大聖堂の生成』

ハンス・ゼーデルマイヤー＝著

前川道郎・黒岩俊介＝訳

B5判変形 706頁

中央公論美術出版 41200円

本書は『中心の喪失』や『近代芸術の革命』等の  
構造分析の方法で一世を風靡した  
オーストリアを代表する美術史家の著者が著した、  
総合的、包括的に考察されたヨーロッパ中世の大聖  
堂研究に関する壮大なる著作である。



『新編——谷根千路地事典』

江戸のある町 上野・谷根千研究会＝著

四六判変形 224頁

住まいの図書館出版局 2400円

ヤネセン——山手線の内、東京のほぼ中央にある、  
谷中、根津、千駄木をあわせた地域の愛称。  
再開発の波にもまれて徐々に変貌しつつも、  
なお人を惹きつけるこの町をフィールドに、  
都市の本当の豊かさとは何かを考えさせる、  
もうひとつの東京・都市論。



自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の  
三建設備工業株式会社

本社 東京都中央区日本橋蛸殻町1丁目35番8号

☎(03)3667-3431(大代)

支店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州

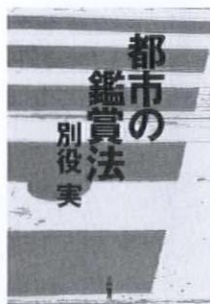


『都市の鑑賞法』

別役 実=著

四六判 211頁

大和書房 1600円



評者=

元倉真琴

## もう一つの都市の解読

長野に行く列車の中でこの本を読み始める。5つめの短章を読み終えた時、急に眠くなった。しばらくウトウトしていたが、隣の気配に目が覚めてまた読み始める。3つぐらい読み進んだところでまた眠ってしまった。そんなことを繰り返しているうちに、妙な考えが頭に浮かんだ。列車の中ではいつもほんとうによく眠くなる。私だけでなくほとんどの人がそうだろう。もちろん適当な振動がゆりかごになっているからだだろう。しかし、こうも考えられるのではないか。列車はもともと人を眠らせる装置としてつくられているのではないかと。私たちは、どこかに行くために列車に乗ると思っているけれど、本当はある種の眠りを欲して列車に乗っているのではないか。ウトウトという眠りである。日頃私たちは学校や職場でウトウトすることは許されていない。はしたない行為とされている。この大好きな行為はいつもは押さえつけられている。私たちはウトウトを解放させるために列車に乗るのだ。母の胸の中に帰りたいという願望だ。JRもそれをよく知っていて、列車には程よく揺れる仕掛けがしてあって、もしかしたら、座席の背もたれには催眠剤が染み込ませてあるのかもしれない。

この妄想は、私の読んでいた本の影響によって。私は『都市の鑑賞法』というタイトルから想像して、この本を今はやりの軽めの都市論だろうと読み始めたのだが、最初の短章を読んだとき、これはまぎれもない別役実の世界なのだと理解してしまった。そして、私自信もいつのまにか別役の世界に入ってしまったというわけだ。

デパートの屋上の空間が解放感をもっているのは、デパートの中の人工の空間を、改めて振り返る視点で見ることができるからだとする。商隊が砂漠という辺境から城壁の都市を「ザマーミロ」と振り返る解放感と同じだという。作者にとってはデパートの室内は「都」、

屋上は「辺境」と認識される。そして辺境を体験することで、デパートの体験は完成するという。さらに商隊の「ザマーミロ」の感慨を得るには、ヘリコプターで立ち去る必要があるとする。

私の下手な紹介でも、ここに展開されているのが別役の戯曲の世界と同じだと気が付くであろう。私がここで別役実の難解な戯曲について語るほどの技量はない。しかし、彼が終始「街」にこだわってきたことに、ずっと興味をもって見てきた。「マッチ売りの少女」「不思議の国のアリス」「そよそよ族の叛乱」など、どれも「街」についての芝居と見ることができる。その寓話的なスタイルは、街と私たちの身体の関係を描いている。「良いモデルが風景の中で、それに相応しいポーズをとるように、我々もまた、都市がそうである機能からドラマを感じとり、それにふさわしく実をくねらせてみなければならぬ」と作者が述べているように、ここでの試みもまた、私たちの身体の外から都市を改めてとらえ直すそうとすることなのである。

都市空間の穴としての「電話ボックス」、電車の凶暴性を発揮させるための「踏切」「地下道」「ホテルのロビー」など、40の都市の要素について語られている。

別役実の仕事の中心はやはり、戯曲だろうが、他に「淋しいおきかな」などの童話や、「けものづくし」「道具づくし」のような悪魔の辞典スタイル、「日々の暮らし方」のようなハウツーものスタイルをとったものがある。この本も「自然の鑑賞法」があるのなら『都市の鑑賞法』があってもいいと、パロディのスタイルでつくられているが、私たちが見ている都市の裏側にあるもう一つの都市（別役実の世界）を解読するテキストとしても十分役にたつものである。

●もとくら・まこと／建築家、スタジオ建築計画代表

## Metropolitan Library

11月の評者=  
高島直之

松山巖の著作が、今年の7月と8月に2冊立て続けに出版された。1冊は『肌寒き島国「近代日本の夢」を歩く』で、もう1つは『闇のなかの石』である。松山は建築学科の出身で、初期は町並み調査や建築史に関わる執筆で活動を開始している。とりわけ『乱歩と東京』(84年)によって、文学と建築の境界を取り払い、独自の、歴史家としての眼差しを確立していったことは記憶に新しい。この本は、故・磯田光一や故・前田愛ら、文芸評論・文学史からのアプローチと交差しながら、日本における都市社会の近代化過程を、江戸川乱歩の小説に即して微細に分析し、かつ1920年代文化の骨格をえぐりだすものだった。これは、磯田や前田の、都市空間と文学との相互関係論とも違いがあり、また80年代の建築探偵、東京論などの回顧ブームとも一線を画す仕事であった。意に反して、この本がブームの起爆剤となってしまう

たことは、松山にとって皮肉なことだった。それはともかく、その松山の、この間こたわってきたモチーフが、2著を通じて低く底ごもるように響いており、読者の心に迫ってくる。

『肌寒き島国』は、主に『週刊朝日』に連載したルポを加筆しまとめたもので、『闇のなかの石』は著者初の小説である。ルポのほうは、炭坑・漁業・養蚕業・製鉄・林業・町工場・製糖工場・開拓農業・魚河岸・証券取引業の現場を辿り、この百年にわたる各業界の歴史と、直面する現状を、聞き書きを中心に報告されている。いうまでもなく、この現場に張付いた各業種は、いずれも「産業立国日本」の根幹を支えてきた。そしてその支え方とは、技術の伝統の継承、そこでたたきこまれた身体的技術、直感と知恵といったものだろう。このかけがえのないものが、政府・行政の無策、いや誤策によって切り捨てられていっ



『都市と建築のパブリックスペース  
——ヘルツベルハーの建築講義録』  
ヘルマン・ヘルツベルハー＝著  
森島清太＝訳  
B5判 270頁  
鹿島出版会 6901円



評者＝  
湯本長伯

## 領域—空間—形態から存在へ

この書は大きく3部に分かれている。それはすなわち著者がこの3つの側面を、建築・都市・環境を考える明確な3つの側面と考えていることを示す。このヘルツベルハーの講義録は、座標のしっかりした地図のごとく、まず何よりも明快で分かりやすい。自分の考えの総体を語ろうと思った時、頭から尻尾まで、一列の言説でしか語れない者もあれば、見事に整理し切り分けて見せてくれる者もある。著者は、後者であろうと努めているか否かは不明だが、結果は分かりやすい講義録となっている。

第1部：公共の領域 (Public Domain)、第2部：空間をつくること、残すこと (Making Space, Leaving Space)、第3部：心を誘う形態 (Inviting Form) の3つを少し大胆に言い換えると、「状況・文脈の理解：目的と要求を考え合わせる」「思考・設計の対象：要求と機能・空間を考え合わせる」「自立する空間の振る舞い：空間から新たな目的を考え合わせる」となろう。デザインの状態を考えること、様々な要求に対して対象をいかにかたちづくり、制御するかを考えること、のふたつは誰でも考えることである。しかしそこで終わったのでは、計画であっても設計にならない。ある一面だけで考えられた習作を、現実の中に放置してはいけない。世にある以上、最低限の目鼻・姿形が必要なのである。したがってこの書は、建築計画の良き教科書であるが、窮屈な教科書ではない。この点は大切である。十を教える一方で、六、七を失う書も多いからである。

第1部で示される領域論は、極めて上質である。PublicとPrivateの2元概念で整理をしてはいるが、我々の関わる領域の位置づけは常に多様でパラメトリックである。そうした中で、状況の中での位置を的確に把握しつつ、その領域の性質を間違えないことは、デザインの要諦である。1. Public and Private

から、12. Public Accessibility of Private Space まで、領域・使用・占有などの鍵概念を下敷きに、個人性と公共性が的確に語られている。

第2部で示される機能空間論は、形態を意識の中心に置いている。空間はその形態によって主に機能するからである。そしていったん形成された形態は、狭苦しい解釈を超えて機能する。すなわち「形態は楽器のようなもの」(2-10)であり、弾き方次第で様々な音色を奏することは間違いない。最終章に再掲されている「アイデンティティ」という一文は、プログラムとスペースと自由度という哲学的な問題に対して、かなり示唆的である。

第3部で示される空間機能論は、むしろ第1部の領域論に回帰してゆく。様々な場に空間を発見してゆくことのノートでもある。柱、壁、床と天井、窪み出っ張りなど、様々な囲み、覆い、凹凸などの要素から、魅力的な空間を発見してゆくことは楽しい。そうした豊かさは、建築のプログラムを損なうことなく支える。

3部を通して基調となっているのは、状況定義・場面描写・解決提案をセットとした記述である。パタンランゲージなどという言い方で知られてしまったが、プロフェッサーアーキテクトなら誰でも用いるやり方であり(木島安史)、本書全体に平易さと明快さを与えている。建築のプログラムを常に高めようと努力している設計者には、様々な示唆と時に解決を与えてくれる書である。

それにしても評者のように、学生を前に建築と設計について何かを伝えようと努力している者にとって、内容は諸処違うとしても、一刻も早く創り上げたいと願う、一つの理想的なテキストである。

●ゆもと・ながのり／共栄学園短期大学教授

た。  
松山は、その深刻とといい、現業者の声を聞きながら、つぶやきを発する。「どうやら日本人は仕事の輪のなかで自己を成長させる契機を失いつつあるような気がしてならない」、「道具もまた人を選ぶ、木もまた人を選ぶ、道具や木の命を見ることができない者には、人間の生命も見えない」と、生産現場の、一般からは見えにくい、労働の本源的な喜びと相互の豊かな関係を浮かび上がらせる。本来、これらの生産現場においては、生産・製造のシステムがオープンであるにも関わらず、産業立国の集中性において、閉じられた回路に置かれて「裏世界」に追いやられた。しかもなお、先端技術の末端を担われる、という大きな矛盾がある。

この矛盾を遠い背景として、石工の次男として生まれた、松山本人の自己史を「私小説」として編み

あげたのが「闇のなかの石」である。この「石」とは、むろん石工の父。記念写真に定着した、早逝した母親の「石」のように動きが止まったイメージ。そして子供の頃に遊んだ石屋の倉庫・仕事場などが重ねられている。

それをキーワードにし、生地・虎ノ門界隈の、路地や近辺の寺社・建物、各都市の徘徊がエピソードとして折り混ぜられる。「石」の固く黙して語らない表情と冷たい物質感によって、どうしても「死」のイメージが、この小説に影のようにつきまとって離れない。ルポで印象的に描写される、震災の瓦礫の中を、何かに追いたてられるようにひたすら前に進む、薄汚れた、飼い主とはぐれた犬の姿は、果たして近代日本のそれなのか、それとも著者自身の化身であるのか、深い余韻として残されている。

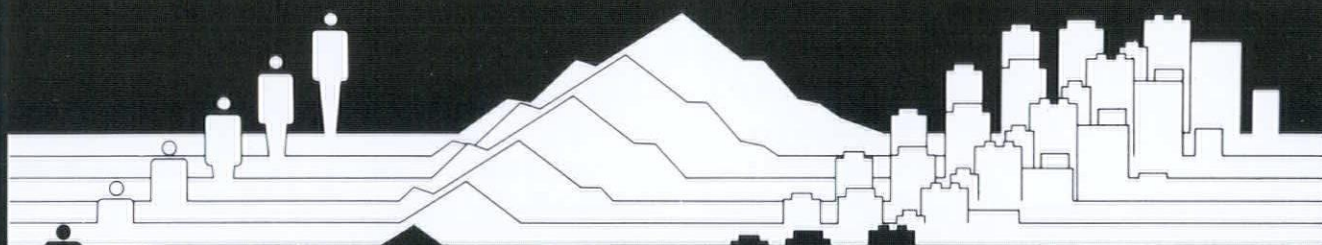
「肌寒き島国「近代日本の夢」を歩く」

松山巖＝著  
朝日新聞社 2500円  
「闇のなかの石」  
松山巖＝著  
文芸春秋 1600円



# SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。  
**三機のエンジニアリング技術は多彩。**



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、  
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、  
合理的で先進的な産業活動、そして、それをとりまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、  
総合技術を通して見つめ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

多彩な技術を結び、  
新たなシステムを展開している三機。



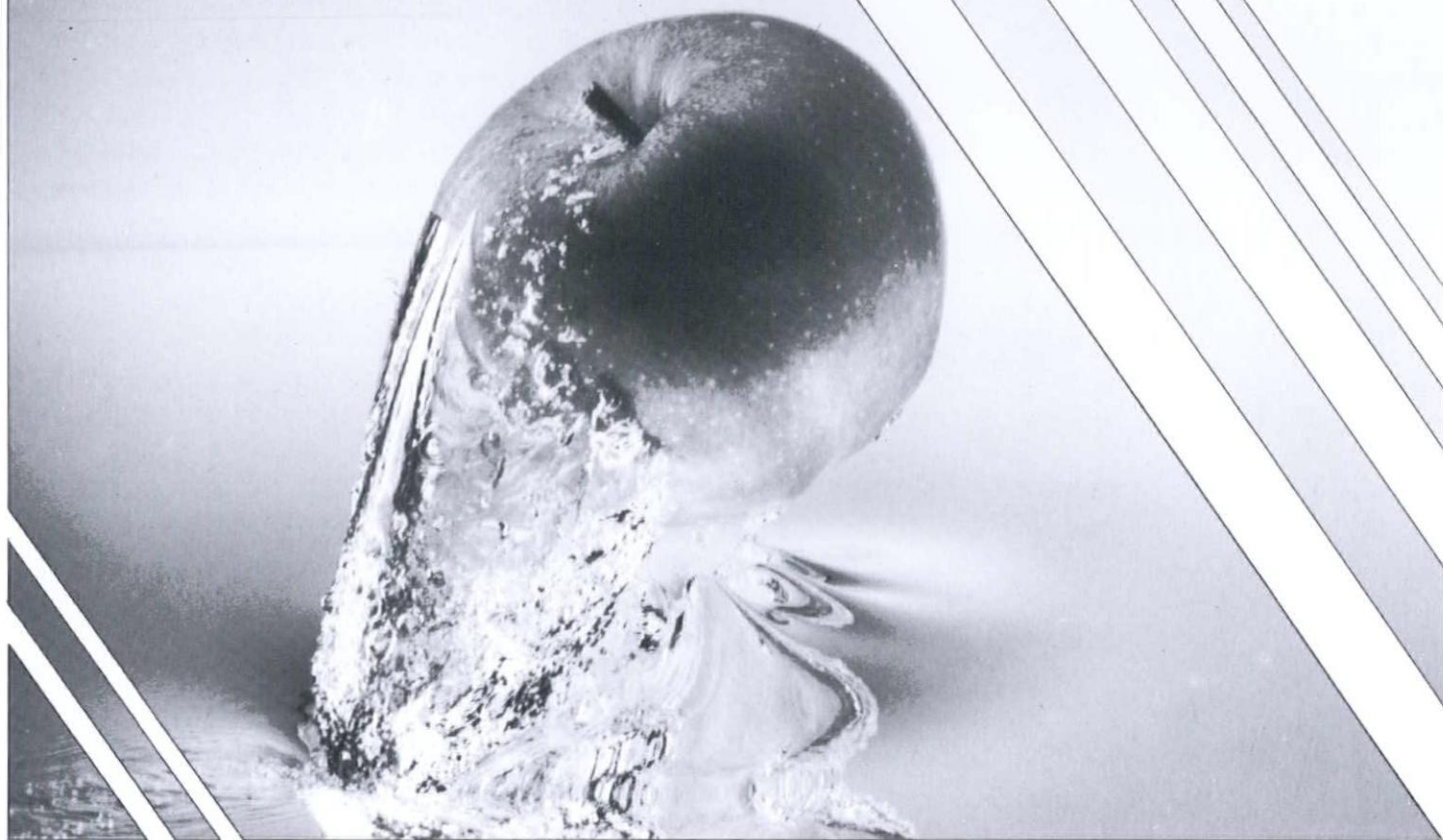
## 三機工業株式会社

本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111  
支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・  
神戸・四国・中国・九州



# 個性が集まって大きなエネルギー

## サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から  
“テクノロジーとヒューマンイズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、  
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ(快適さ)や、

建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など  
美的付加価値の重要性もますますそのウェイトを高めています。

弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、  
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

## 昭和鋼機株式会社

本社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号  
☎ 東京 (03) 3969-1101 (代表)

所沢工場 ▶ 〒354 埼玉県入間郡三芳町大字上富 1163

明石工場 ▶ 〒673-01 明石市二見町南二見 21 番 3 号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号

大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所



昼と夜とを描き分ける／ジャン・ヌーヴェル展「リュミエール」と講演会より

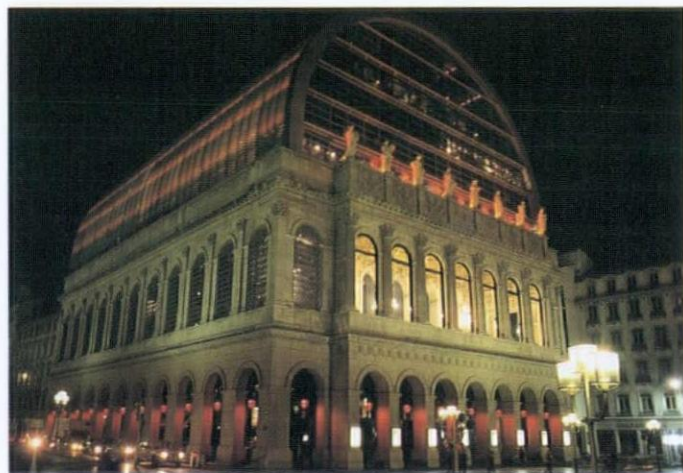
9月18日からギャラリー間でジャン・ヌーヴェル展が開かれた。レム・クールハースとバーナード・チュミという話題の海外建築家に次いで、とうとう真打ち登場となったわけである。ギャラリー間でのオープニングパーティーは超満員、ワイングラスを手にするのがやっとで身動きも取れない始末。講演会に至っては反響を察知して通常より大きな900名も入れる会場を手当てしたそうだが、そこにも溢れ出るほどの人が殺到して、数百人の人が入場できずに泣く泣く引き返すような騒ぎとなってしまった。いったいこの芸能人をも凌ぐような人気の原因は何なのだろうか。1987年に時の大統領ミッテランによるグラン・プロジェクトの先駆けとなったアラブ世界研究所を完成させてから今日までの8年間で、ヌーヴェルの名は急激に世界に浮上した。私は特に光のデザインを仕事としていることもあ

って、カメラのシャッター機構を建築のファサードに拡大したアラブ世界研究所が出現してから、ヌーヴェルの仕事をできるだけ現地で見るようにしている。特にある建築雑誌の特集で「光の魔術師」とのリングネームをつけられてからは、彼の正体をつかむためにリヨンにまで出かけて行くほどになった。明らかに彼は光を重大なテーマにしている。そして光が様々な変容を見せるように、建築の素材やスケールや作り方のシステムはそのつど自由に変化する。いつも次に来る話題作には、前作によって予想できる延長線上にない何かを提供している。この光の扱いに対する執拗なエネルギーが、私達に新鮮な驚きを与え続けてきたのだ。

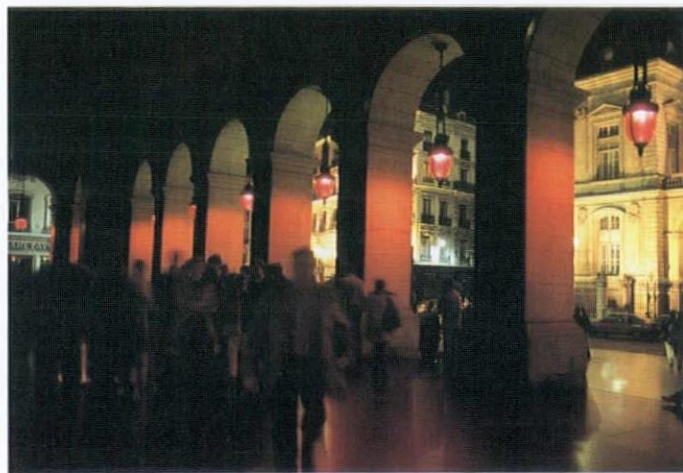
それ故にギャラリー間での展示内容は私には少し拍子抜けであった。壁面にポジフィルムや液晶カメラによる作品紹介がされている

が、もう少し「光の魔術師」の片鱗を伺わせのような空間展示を期待する人が少なくないように思われた。彼の多忙さが中途半端な光の空間展示を避けさせたのだろうか。

九段の日本教育会館で9月19日に行われた講演会は印象深い内容であった。私が時間ぎりぎりまで会場についた時には、僅かな空き席を期待して狭い階段に長い列ができていた。その人達の脇を図々しくどうにか擦り抜けて招待者の席に着いたが、私の席の回りには東京国際フォーラムの設計者ラファエル・ウィニオリ氏や、長谷川逸子氏、目の前の最前列には石井和紘氏などの豪華メンバーの顔も見られる。もう少し遠くを見渡すと熱っぽい学生たちの間にまだまだたくさんの著名な建築家先生方の顔がちらほらしている。これだけを見てもヌーヴェルは時の人、ということか。暫くするとヌーヴェル氏が場内に入場し私の



リヨン・オペラ座





講演会

日時：9月19日、20日

会場：日本教育会館（東京、19日）都久志会館（福岡、20日）

展覧会

日時：9月19日～11月2日

会場：ギャラリー間

目の前の席にその巨体を横たえた。隣の石井和紘氏と何やら内輪話をしていたが、座り切れずに通路の至る所に座り出したり、立ち見席さえ一杯になってくる異様な雰囲気を察知して、盛んにきょろきょろと後ろを振り返りながら驚きの度を増している。自分にもどうしてこんなに異様な反響が起こっているのかがぴんとこない様子である。

講演は前段の建築家としての哲学や思想の解説と、後段のスライドを用いたプロジェクトの解説によって構成されていた。いささか会場の雰囲気に飲まれたか、話に熱が入り過ぎていて表情が固いように見える。「現代のカオスの状況で、歴史主義からは何も学ぶものはない。都市や建築を過去のやり方で作ってはいけない。モダニティのみがテーマだ。新たなものを創造するのではなく、これまでの知識をアレンジすること、カオスの状況を変化

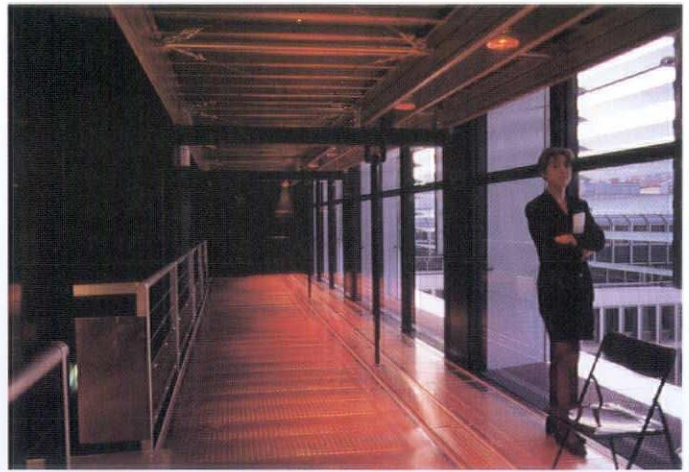
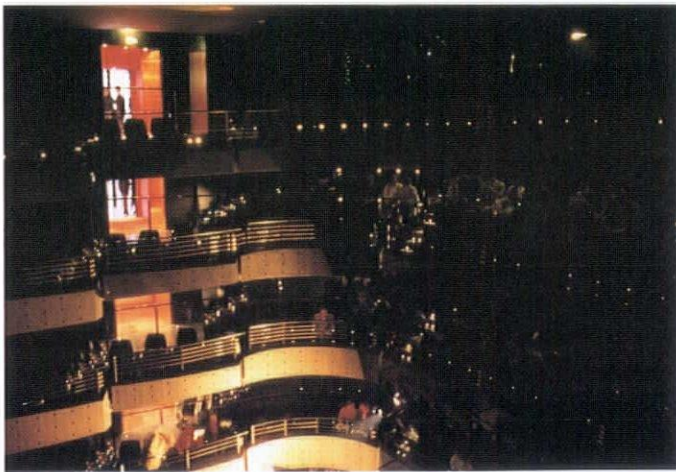
させて行くことのみが許されている。」「建築家は映画監督とよく似ている。常にプロダクションの中でもものを考える。絵描きや小説家のような空想の中の自由さを持ち得ない。」「レジメを見るわけでない講演は通訳泣かせだ。しかもフランス語と日本語のみの同時通訳なので英語のみが頼りの外国人は不満げである。

「建築家は夜と昼の図面を描くべきである。」光のデザインをしている私にとっては拍手絶賛の一言が聞けた。「建築家は常に45度で入射する自然光のみをイメージしているが、現実の建築にはそんな光ばかりが当たっていない。」私が常々声をかしていることをヌーヴェルが言うと言説力がある。しかし、「第二国立劇場のコンペあたりから、リヨン・オペラ座、ツール・コンベンション・センターにかけて、谷崎潤一郎に影響されて光を発想した。」と言われると、どうもこの人は谷崎を誤解し

ているのではないかと疑問を抱いてしまう。リヨン・オペラ座の黒いインテリアには谷崎の慈しむ染み入るような闇はない。単に谷崎にインスパイアされてアレンジした黒と金、そして反逆の赤いのろしが暴れているだけである。彼の建築の表現が余りにセンセーショナルなだけに、光の魔術師もそのうち光のネタ切れで、時代の徳俵に追いつめられはしないだろうか。多少心配な向きもある。

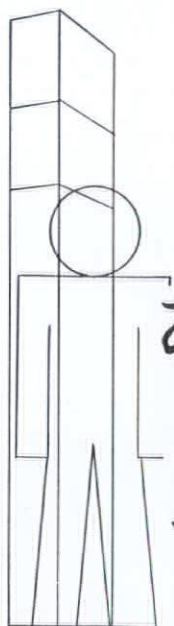
何れにしてもヌーヴェルは時代に対して十分刺激的である。それが故に日本の若い建築家が「ヌーヴェル様式」のような流行のコピーに走らぬように祈りたい。彼の教えるところは教条主義的歴史観からの脱却、現代のアレンジメントなのだから。

●面出 薫／照明デザイナー



photos : K.Mende





からだのしくみは  
「骨格と筋肉」だけでは  
ありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないのでしょうか。

ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空調などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴らしい居住性が生れると思います。

しかし……

それだけで終わったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴らしいことはありませんか。

集中管理或は集中制御によって……省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完ぺきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能をフルに発揮できるのではないのでしょうか。

集中管理装置  
**NESCA**

**川崎電気株式会社**  
KAWASAKI ELECTRIC CORP.

東京本社 〒108 東京都港区芝浦3丁目7番4号  
電話03(3454)5271(代)  
本社 〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地  
電話0238(49)2011(大代)

## お知らせ

### 舞鶴市立赤れんが博物館秋季企画展 「ガウディのれんが」

「世界のれんが」をテーマにした展示を行なう同博物館の開館2周年記念企画展。今回はアントニ・ガウディが好んで用いたれんがに焦点を当てる。展示はグエル公園の釉薬タイル、コロニア・グエルの地下聖堂のれんがなど。

会期：～11月30日 9:00～17:00(入場は17:00まで)  
月曜祝日休館(月曜日が祝日の場合はその翌々日)

会場：舞鶴市立赤れんが博物館  
舞鶴市字浜2011番地 Tel: 0773-66-1095  
入館料：一般300円 学生150円

### サー・マイケル・ホブキンス講演会

日英の建築家の交流と、建築を通じて両国文化を相互に理解することを目的に創設された日英交換プログラム。第2回目に当たる今回は英国を代表するハイテク建築家のマイケル・ホブキンス卿夫妻が来日、自身の建築について講演を行なう。

日時：11月28日(火) 16:00～17:30(受付15:00～)  
会場：大阪国際交流センター 大阪市天王寺区上本町8-2-6 Tel: 06-772-5931

会費：正会員、賛助会員、学生、500円 一般、1500円  
申し込み：(社)新日本建築家協会近畿支部  
〒541 大阪市中央区備後町2-5-8(綿業会館)  
Tel: 06-229-3371 Fax: 06-229-3374

### Japan Art Festival '95 in 沼津 「竹のアート展」

沼津市、草月会および沼津市振興公社の共催によるフェスティバルの一環。竹を素材とした作品を公募、その中から「Responsive Environment」の球状のページなど、審査に残った12作品を展示している。

会期：～11月15日(水)  
会場：沼津御用邸記念公園  
沼津市下香貫島郷2802-1  
公園入場料：400円  
問い合わせ：日高仁 Tel: 03-3797-7780  
World Wide Web site  
<http://kingo.t.u-tokyo.ac.jp/satoru/>

### 大阪ツキ板協議会「建築・内装セミナー」

環境と人間に優しい内装材である、ツキ板、化粧合板の解説と日本の住まいをテーマに、講演とパネルディスカッションを行なう。

会期：11月24日(金) 18:30～20:30  
会場：大阪府建築健康会館  
講師：吉田保夫、岡幸男  
会費：1500円  
問い合わせ：(リンゲージ企画内)スライウッドの会・大阪ツキ板協議会 Tel: 06-562-1031

### 新居千秋展 「建築の境界・爪楊枝から摩天楼まで」

会期：11月27日(月)～12月9日(土)  
10:00～18:00(最終日は14:00まで)  
会場：アトスペース フジカワ  
大阪市中央区瓦町1-7フジカワビル3階  
Tel: 06-231-4304 ※入場無料  
問い合わせ：新居千秋都市建築設計  
Tel: 03-3760-5411

### ミクロ・コスモス Part1 「ドナルド・エヴァンス展」

神奈川県立近代美術館が今年から企画する展覧会。現代美術界のユニークな作品を紹介するシリーズ第1弾は、切手の形式を用いて独自の世界を創造したアメリカの作家ドナルド・エヴァンスを取り上げる。

会期：～11月12日(日)  
会場：神奈川県立近代美術館(本館)  
鎌倉・鶴岡八幡宮境内  
入館料：一般1000円 学生850円(65歳以上および高校生以下は無料)  
※同時開催「イギリスの本版画展 1890-1945」  
問い合わせ：管理課 広報担当 戸村達  
Tel: 0467-22-7718

### 日仏工業技術会シンポジウム 「景観工学と風土」

各国専門家を招き、景観工学とデザインについて広く社会学や哲学までを包括した論議を展開。

日時：10月30日(月) 18:00～20:30  
会場：日本化学会 7階ホール  
東京都千代田区神田駿河台1-5  
パネラー：オギュスタン・ベルク(パリ社会科学高等研究院教授)、樋口忠彦(新潟大学教授)、面出薫(照明デザイナー)  
司会：三宅理一(芝浦工業大学教授)  
会費：1000円  
問い合わせ：日仏工業技術会 東京都渋谷区恵比寿3-9-25 Tel: 03-5424-1146

### シンポジウム「ネットワーク@life」 ——ネットワークは生活環境をこう変える

急速な進展を遂げる電子情報通信網について、電子通貨の登場、CALSの普及といった現状を踏まえ、今後の生活環境のデザインを考察する。

日時：11月2日(木) 14:00～17:00  
会場：建築会館ホール  
会費：会員2000円 非会員2500円 学生1500円  
申し込み・問い合わせ：氏名、勤務先・所属、Tel、Faxを明記の上、「高度情報都市シンポジウム」事務局/三枝 Fax: 03-3456-2058まで



TOKYO (HARAJUKU)

ADVAN

ひやく聞は  
いっ見にしかず。

4F タイル

3F 石材

2F 新建材

1F 家具

B1F 輸入家具

## ADVAN SHOW ROOM

全国のショールームでお待ちしております。

ÔSAKA

FUKUOKA

SAPPORO

YOKOHAMA

NAGOYA

HIROSHIMA

## 株式会社 アドヴァン

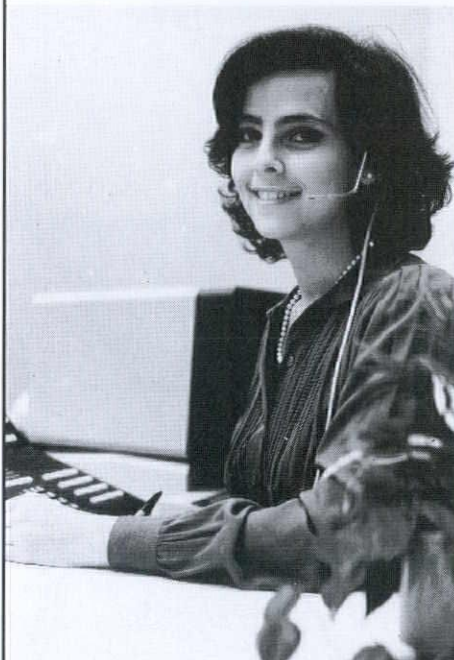
〈アドヴァン SHOW ROOM〉

- 札幌 〒064 札幌市中央区南2条西23丁目1-1 テイストビル ☎011(622)3363代
- 東京(原宿) 〒150 東京都渋谷区神宮前4-32-14 ☎03(3475)0281代
- 横浜 〒231 横浜市中区日本大通17番 朝日生命横浜日本大通ビル1F ☎045(663)3041代
- 名古屋 〒460 名古屋市中区東2-22-18 日興ビル(CBC放送前) ☎052(932)3400代
- 大阪 〒542 大阪市中央区島之内1-21-22 共通ビル ☎06(245)0975代
- 広島 〒730 広島市中区小町2-30第二有楽ビル ☎082(246)3344代
- 福岡 〒810 福岡市博多区中洲中島町2-8 日本火災福岡ビル ☎092(291)1011代

 **ADVAN**



## 情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、「私達の住む地球をまーるくつづける」。日立電線は、いま、快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界でひとつの大きな役割を担っているもの——それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

**日立電線株式会社** 東京(03)3216-1616

## お知らせ

### 照明探偵団 第1回連続シンポジウム 「ようこそ照明探偵団へ」

ゲストパネラーに東京大学生産技術研究所第5部助教授 藤森照信、画家・小説家 赤瀬川原平を迎え、生活を取り巻く光について語る。

日時：11月24日(金) 17:30開場、18:00～20:00

会場：東京デザインセンター

会費：一般2500円、学生1500円

12回通し券一般27500円、学生16500円

応募方法：往復はがきに住所、氏名、年齢、職業、連絡先を明記の上、11月10日必着で下記に送付。

東京デザインセンター

〒141 東京都品川区五反田5-25-19 照明探偵団シンポジウム係宛 Tel: 03-3445-1121

### 高橋正治 講演会+ワークショップ+作品展

芸術や建築の抱える複雑な問題について「ひと」と「もの」の関係を軸に、新しいアプローチを模索。

作品展

会期：11月1日(水)～11月10日(金)

会場：梨木神社能楽堂

京都市上京区寺町通広小路上ル

入場料：一般500円 学生300円

講演会及びワークショップ

日時：11月3日(金)

会場：旧春日小学校

京都市上京区河原町丸太町北西角

会費：一般2000円 学生1500円(作品展含む)

問い合わせ：京都建築フォーラム事務局/新本

Tel: 075-231-3036

※ワークショップの参加については事前に事務局まで問い合わせのこと。

### 川田喜久治写真展「ラスト・コスモロジー」

日本を代表する写真家、川田喜久治の70年代からの作品約60点を、未発表のものを含めて紹介する。

会期：11月3日(金)～11月29日(水)

※11月23日以外の木曜日は休館

会場：タワギャラリー

横浜市西区みなとみらい2-2-1

ランドマークタワー3階 Tel: 045-222-5008

入場料：大人300円 学生250円

### 「霧島彫刻ふれあいの森アートホール (仮称)」公開プロポーザル

主催：鹿児島県

問い合わせ：(財)鹿児島県住宅・建築総合センター(企画課)

〒892 鹿児島市新屋敷町16-228

Tel: 0992-24-4539 Fax: 0992-26-3963

### 「The Architecture of The Window ——窓の建築」展

同名の本を出版するYKKアーキテクチュラルプロダクツ社が、これを記念して展示会を開催。同書で扱っている24人の建築家の作品の「窓」を通じて、建築の歴史と現状を概観する。展示はアントニオ・ガウディ、安藤忠雄、ジャン・ヌーヴェルなど。

日時：11月28日(火)～12月22日(金) 10:00～18:00

※最終日のみ16:00まで

会場：YKK R&Dセンター エグジビションホール

東京都墨田区亀沢3-22-1 ※入場無料

問い合わせ：YKKアーキテクチュラルプロダクツ社 コミュニケーション部 Tel: 03-5610-8143

### 現代美術への視点「絵画、唯一なるもの」

1984年から国立近代美術館が行なっている同シリーズの4回目。今回は現代の絵画を中心に据え、アド・ラインハート、プライス・マードン、ゲルハルト・リヒター、そしてそれぞれに独創的な仕事を展開する日本の画家などを展示する。

会期：東京/11月3日(金)～12月17日(日)

京都/平成8年1月5日(金)～2月12日(月)※月曜日休館(1月15日は開館、翌16日休館・2月12日開館) 10:00～17:00 (入場は16:30まで)

会場：東京、京都とも国立近代美術館

入場料：大人790円、高校生・大学生450円

### 「ドックランドの橋 ——Building Bridge」展

現在開発中のロンドン・ドックランド地区。この歩道橋コンペでは建築家とエンジニアの共同チームで参加させるユニークな形式が取られた。今回は入賞作品12点を展示、公共建築のシンボル「橋」を通してデザインと建築の社会的な方向を検証する。

会期：～11月17日(金) 11:00～18:30 祝日休館

会場：東京デザインセンター「アティック」

入場料：400円

### 「北欧デザインの系譜」展

19世紀末から今世紀にかけて活躍した北欧の建築家5人とその流れを組む現代の建築家1人(エリエル・サーリネン、グンナー・アスブルンド、アルヴァ・アアルト、アルネ・ヤコブソン、ハンナ&ポール・ケアホルム、シモ・ヘイッキラ)を取り上げ、彼らの自邸およびサマーハウスのインテリアを紹介する。

会期：11月14日(火)～12月10日(日)

10:00～19:00 (ただし14、15日は16:00で終了)

会場：ヤマギワ5番町ビル 東京都千代田区五番町

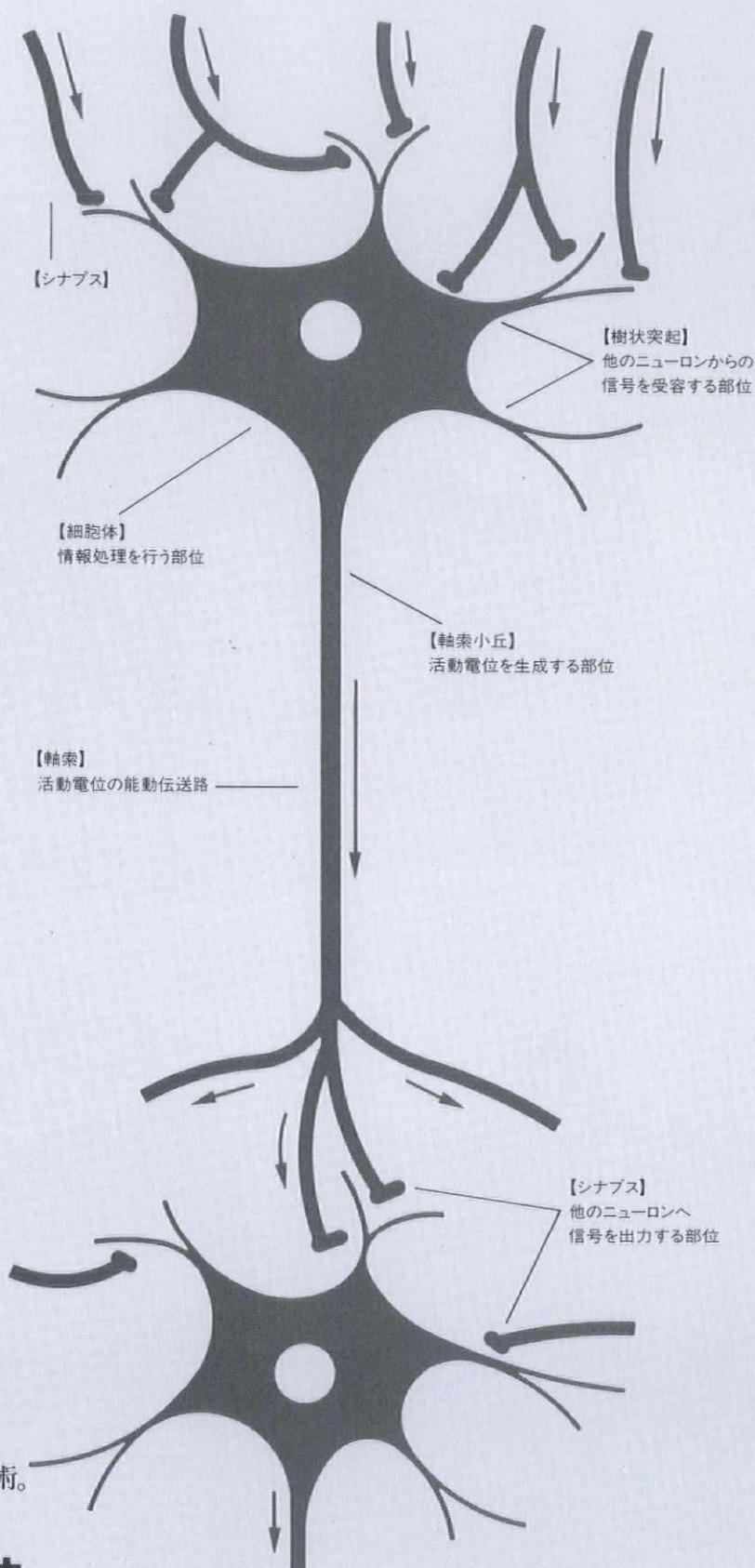
12-5 ※入場無料

問い合わせ：(財)山際照明造形美術振興会

Tel: 03-5275-3111 (代)



# 21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマにこころをこめて、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。



東熱




EXTERIOR (環境石材)

INTERIOR (建築石材)

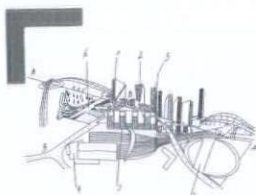
SPIRITUAL (墓碑石材)

For the Beauty of Stone

 藤田石装株式会社

〒939-05 富山市三郷5番地 TEL(0764)78-3200 FAX(0764)79-1119





現在、日本及び世界の各地では再開発的なものも含め多くの都市が新しく作られている。その規模や状況はまちまちであるが、それらの都市の最大の特徴は、その姿が構成されるまでのプロセスが単純であることであろう。

前2回で問題にしてきた都市のインフラストラクチャー（以下インフラ）は、ある程度歴史の有る既存の都市に複雑に内在し、建築を規制する力としての存在であった。しかし、新しい都市を作るような場合のインフラは全く性格が異なるものである。既存の都市のインフラに対して言うならば、建築の内部に入った後のインフラ、もしくは設備計画に近いかもしれない。そこに作られるインフラは、その都市を作るためだけのインフラであり、それは都市のイメージに従属する存在である。従って、既存の都市におけるような建築とのせめぎあいの生じる余地はなく、建築テキストの展開の場ともなり得ない——順調に都市ができていけば。

東京都の臨海副都心を始めとして、実際に現在日本で進められているいくつかの新都市開発はその当初の意志を達成する事が困難になっている。それらの多くは公共

性を制限する枠組みの辺境にアクセスすることによって、自らの存在意義を模索しなければならないのである。実際に建築設計の段階において、建築家によるこのような作業の機会は増えて来ている。建築と都市が共生していくため、都市—建築—意識の三すくみをシフトさせるための原動力となり得るのは現在では個々の建築を作るという行為のみなのではないか、ということは前回述べたが、新都市計画においてはより直截な論理のフィードバックが必要なのではないか。建築を作る論理を都市レベルに拡張していくことによって、より生産性のある都市が作られていく可能性があると思われるのである。そしてそれは、都市（行政）にとっては建築が敷地で完結する意識、あるいは建築と都市を作る段階を切り離れた意識からの脱却である。一部で始められた地域的環境アセスメントのような動きにその萌芽は見られる。また、建築家にとっては「インフラをつくる」部分への職能（意識）の拡張であると言えるだろう。

OMAのEuralilleのように、コンペ等によって、建築家が新都市計画に参加する事も多い。今回テーマとするのは、そのような建築家によって新しい都市（インフラ）がつけられる事例である。建築家の都市計画への参加によって、もちろんその造形的イメージは求められるであ

## 海外建築情報リミックス

の多額の負担と妥協によって辛うじて、中途半端な姿で存在しているのみである。それはそれらの都市が、建築を発生させる力を持っていない事を示している。もちろん、不況下の民間の経済事情に困るところが大きいのだが、新都市の為に作られた設計マニュアルやインフラが建築にとっては負担になるようなものであるという事実も否定できない。例えば、セットバック、人工地盤、地域冷暖房、デザインコード、緑化、公益施設……。これらの要素は建築個体の経済原理には適合しにくく、計画当時に比べて経済状況が悪化してしまうと、これらは既存の都市のインフラ以上に明確に、建築に都市の為に重い負担を強いるのである。

そのようなマニュアルやインフラは、それらが作られた後にその上に建築を作る手とは別の手によって作られるのが一般的である。たとえ建築家の手によってマスタープランが作られるとしても、それは実際に作られる個々の建築の論理とどの程度の密度でリンクしているだろうか。建築を作る時点と時間のずれが、実は致命的に、都市を計画する論理を建築を傍観する論理にしてしまっているように見受けられる。近代に構成されたこの論理が、都市をインフラと建築に分節しているのである。そして新都市計画のプロセスの単純さの中にあるこの唯一の段階的分節が、都市の形成における意志達成の最大の障害となっているのである。

しかし、都市が建築の発生母体としての強権を振るえない今、建築はその存在のために都市の仕組み——インフラにアクセスすることを余儀なくされる。建築の生産

## Theme: 都市のインフラストラクチャー その3「インフラをつくる」

ろう。しかし、問題としたいのはその建築家の都市に対するスタンスである。都市というビルディングタイプへの挑戦は、その特殊性ゆえに建築テキストの展開の上でも大きなチャンスである。しかもそれが、実際の建築を作っていくというリアリティの中で展開するとき、初めて都市と建築が（建築家の内部においても）共生するのではないか。ここではその都市計画の、以下のような点における検証が必要となる。

1. 都市のテキストの存在  
(建築の造形イメージに依存し過ぎていないか)
2. 建築を発生させる力
3. 建築を作るという意識の都市への還元
4. 既存の都市と建築の関係に対する分析
5. 新しい都市機能、都市像

これらはその都市が新しい建築テキストを構成する「場」となり得るための条件と言い換えることができるだろう。また、これらは結果として既存の都市におけるような高密度な情報を新都市計画に持ち込むことになる。近代的低密度の都市計画における人工地盤や公開空地は、本来的に生産性のある都市の活性の障害となっている時点で、もはや快適な都市施設とは言えないのではないか。膠着した都市の三すくみを操作できる状況下での建築家の戦略は、形式的な快適さを超えた、よりリアルなアーバンイズムの模索のステップとならなければならない。

以下に挙げられるような都市計画の中にも、よく見ればそのような建築家の戦略が見えてくるのである。

山本想太郎

9511

新井大介  
五十嵐太郎  
大川信行  
田上健一  
村上誠一

都市のインフラと建築テキストの関係について論じる第3回。インフラと建築を同時に計画する場合、そのインフラは前2回で述べてきたような「都市のインフラ」とは全く異質なものであり、ともすれば都市に対する分析力を持ち得ない。それゆえ、建築家は分析的なアプローチを越えて、より戦略的にテキストを構成していく必要が生じるのである。建築を発生させる力を持った都市を作るために。

コア・スタッフ'95  
今井公太郎  
岩下暢男  
アトリエ・ワン  
曾我部昌史  
山本想太郎

ar: The Architectural Review  
PA: Progressive Architecture



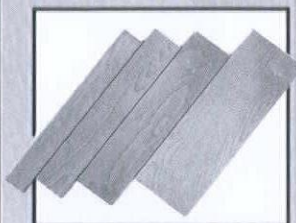
人に愛される「床」でありたい。

New  
**OTTIMO**

高級木質床材

オッティモ

他社では真似のできない  
良質の単板だけを商品化しています。



●サイズ

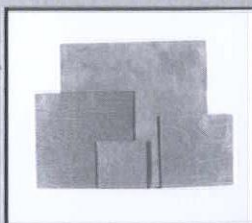
オッティモ BIG&WIDE

15×(300角、450角、600角、900角)  
15×100×1818、15×150×1818  
15×200×1818、15×300×1818

●樹種

カバ、ナラ、ブナ、メープル

(表面単板 2mm)



オッティモダイレクト(直貼用)

12×75×909  
12×100×909  
12×150×909

●birch



●oak



●beech



●maple



**ALBERO**  
株式会社アルベロ

〒183 東京都府中市紅葉丘2-9-8  
TEL.0423-40-7685 FAX.0423-69-2220



阪神大震災で有名になった言葉に「ライフライン」という和製英語があるが、いわゆる「インフラ」のうち電気、ガス、水道、電話回線などを指している。これらに交通網を加えて「インフラストラクチャー」というのが一般的だが、本稿で使おうとしている「インフラ」というのは、「建築を成立させ、あるいは束縛する、都市の条件」と考えられたい。これを他の言葉で置き換えてもよいのだが、ここでは便宜上これを使わせていただく。

簡単な例で言えば容積率や高さの制限といったようなことを一定範囲内だけに適用する約束事として法規とは別枠で設け、かつ、それが都市や公共に対してのみならず、個別の建築に対してもより有益であるような条件である、と自分なりに解釈している。以前講演会でレオン・クリエ氏が建築の階数制限を設けることによって、階高が様々に異なる建築からなる都市が出来上がるということを話していたが、このような「建築側からの枠」への積極的な介入」と定義することもできよう。

このことに関してアムステルダムとパリで対照的なプロジェクトを見る機会があったので、そのアイディアの要点だけを紹介しよう。

パリではベルシー地区を取り上げたい。地下鉄6番に乗ってベルシー駅で降りると大蔵省の長い橋のような、壁のような建物とフランス国立図書館が見えた。ショーケースの中にコンパネを展示しているようなビルだった。同じベロー氏の事務所ビルの透明

なガラス箱のような印象はない。もとは本もベニヤも同じです、と言ったかどうかは知らないが。これとセヌ川を挟んで対岸に広がるベルシー地区はワインの貯蔵庫などが以前存在していた場所で、20年前に始まった、APURなる都市計画事務所によるパリ東部再開発のひとつである。1,400戸の住居とコミュニティ施設、商業施設などを含んだプロジェクトに、コンペで選ばれた8人の建築家が参加している。マスター・アーキテクトのバフィが提示したのは、各ブロックを公園側に開いたコの字型プランにすること、同時に面性を残すため空中バルコニーを設けること、他に、ブロックを通り抜ける道、ブリッジを配することなどである。ここで特徴的なのは、マスに対する約束が類似のそれより一歩踏み込んである点だ。都市をブロック毎に捉える方法としては、高さ制限などのレベルから一歩進んだ提案である。彼の提案に対し、APURは公園側の住戸が少なくなることなどを指摘しようだが、結果的には公園側のヴォリュームを抑えることによって公園と中庭がゆるやかにつながり、圧迫感のない開放的な街になっていた。ただし、ゲーリーのアメリカン・センターは別格扱いらしく、場違いな印象は拭えなかったが、隣接する体育施設との緩衝にはなっているのかとも思えた。このベルシー地区はさらに東にベルシー2なるピアノの手掛けた商業施設などにつながるのだが、ベルシー駅からここまで歩くのは相当辛そうだ。これは線形の都市が抱えつつ持病のようなも

のといえよう。

アムステルダムでは以前、港湾施設があった所に慢性的に不足している集合住宅を供給しようという計画を見た。道の両側にハウジングブロックが並び、それぞれに中庭をもち、それらが海に向かって開いているというものだ。ここでは「インフラ」＝「枠組み」に関する約束は見えにくい。むしろこうした類似の計画が、約束が存在することでかえって画一的になってしまうことを考えれば、約束が少ないことが成功している例である。各棟とも別々の建築家によるものだが、ハンス・コルホフのブロックなどは特に秀逸で、一見武骨だがダイナミックである。一般に集合住宅ではバルコニーなどがデザインが多くを決定してしまうことがあるが、ここでは各戸に四周に10mm程の隙間をもつサッシュに囲われた半屋外テラスが設けられて、これが利いていた。

ふたつのプロジェクトに共通するのは建築家の存在であり、違うのは仕切り壁が表に出ているか、そうでないかである。単に、「インフラ」＝「枠組み」が無秩序に見えないことや公共的であることのためにだけに存在するのであれば、その意味は薄い。「インフラ」＝「枠組み」の存在は建築と都市との急な断絶を避けるためなのか、あるいは建築家の発言力を強くするためなのか、それとも建築家が「まとめ役」の出現を望んでいるからなのか。いずれにせよ規制緩和時代の「枠組み」は自由化のためでなければならない。

## 枠組みへの介入

新井大介

Urban regeneration, Bercy, Paris — ①②

architect: Jean-Pierre Buffi  
ar 9506

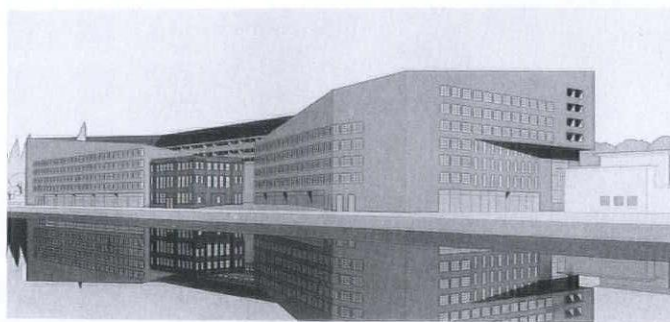
Housing project, Woonblok, Amsterdam — ③④⑤

architect: Hans Kolhof

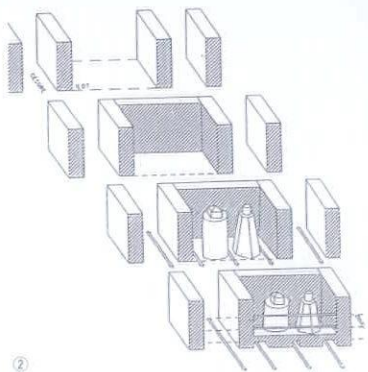
\*Hans Kolhof, Editorial Gustavo Gili, S.A., 1991



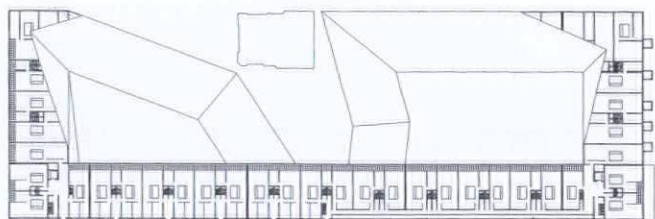
①



③



②



④



⑤



# 石屋の千両役者・トーテラ

## 東洋テラゾ工業株式会社

知れどア表って聞かせやむよう。

浜の東砂と五右衛門が、歌に残せぬ盗人の、種  
は尽きねえ七里が浜、その白波の夜働き、以前を  
表やアはノ島で、羊羹勤めの湘南谷、文化セン  
ターではテラゾーを、かわやに立てゝのスワ  
リーン、面が二面と施工例、御影加工せえだん  
だんに、評判はのぼるすみだ川、文化センターで  
は面角、床の施工も大変なり、新羽田空港も床工  
事、とうとう都もぬけたら、それからフルーツ  
ミュージアム、ここやかむこの甲州で、小耳に聞  
いたのでききの、玉石タイルで床を飾り、おさえ  
由縁の芥天小僧、トーテラたア俺がことだ。

いよ、日本一！

オリジナルテラゾ開発・景観石材工事・大規模テラタイル工事・御影石、大理石設計施工  
当社施工例：湘南台文化センター、すみだ文化センター、フルーツミュージアムほか



### 東洋テラゾ工業株式会社

■OFFICE 〒142 東京都品川区二葉1-6-2 TEL.03(3787)5201 FAX.03(3787)5451  
■FACTORY 〒144 東京都大田区東横谷4-8-10 TEL.03(3744)7611 FAX.03(3744)7615

代表取締役

廣 浦 義 幸

創 業

昭和11年11月

設 立

昭和26年11月

資 本 金

22,500千円

建設業登録

東京都知事許可(般-6)第4275号 石工事業

取 引 銀 行

さくら銀行 羽田支店 三菱銀行 羽田支店



闇夜の中を数台のヘリコプターが飛行する、『ショート・カット』のオープニング。空から散布された農薬が、断片化された世界を包み込む。そして22人の群像がモザイク状の物語を紡ぎ始める。そこは磯崎新が「見えない都市」を発見し、R.バンハムが独自の建築を作る生態系を指摘し、M.クロフォードがファンタジーの環境と命名し、伊藤俊治がセルロイド・バビロンと呼び、D.スジックが100マイルシティの参考とした天使の街、ロスアンジェルスだ。しかし実際のところ、K.リンチがそのイメージのしにくさを論じているように、茫漠と広がる不気味な都市を前に、誰もが戸惑っているのかもしれない。エリック・オーエン・モスは、そのダウントウンの南西10kmに位置する、カルヴァー・シティを舞台に、密やかに都市の構造を変えている建築家である。

かつて工業地帯として繁栄した、L.A.の外れには寂れた工場や倉庫が多く残っている。そこでモスは1986年からバトロンのスミス夫妻と共に、一連の仕事を行う。例えば、国道8522号沿いの1920年代から40年代までの5つの倉庫や工場を改装しつつ、連結させた商業コンプレックス、そして1940年代に遡る倉庫等に手を加えた、インスと呼ばれる4つの芸術関係の施設群。現在、後者の中央にある駐車場には、内外に階段をめぐらし、3つの球体を接合した形態のインス・シアターが計画され、ブリッジにより道路向いの別のプロジェクトと繋ぐなど、さらに有機的に展開している（ヒルサイドテラスの廃品利用版と言えば理解しやすいだろうか）。またもうすぐ取り壊されるドライブ・イン・シアターのスクリーンを屋上の

円形劇場に付ける予定になっており、まわりの建物や公園からも見えるという趣向だ（『ニュー・シネマ・パラダイス』のあのシーンを思いだすといい）。実は空間を再利用する方法には、更地にして新しく建てるのに比べて、幾つかの利点がある。直方形の構築体を持ち上げ、既存の工業施設にのせたサミタールのプロジェクトは、ぎりぎり法律と格闘しつつも、新築に課せられる駐車場の設置やセットバックの制限が免除されるのだ。また同じ敷地の端部に増築予定のプロジェクトでも、市当局が地域の再生と経済効果を考慮し、その高さ制限を緩和するという。ちなみに施主のスミスは、モスの建築自体が芸術であるから、パブリック・アートのための1%プログラムも不要だと主張し、芸術家との間にちょっとした論争も起こしている（PA9502）。そして川沿いのハイデンの一角も、カルヴァーシティの時代遅れになった典型的な重工業地帯であり、モスは複数の部分的な再生案を提出する。それらを結び合わせるのが、スパール・シティのプロジェクトだ。もう使用されていない、約15m幅の鉄道用地が約800mの弧を描きながら、敷地を縦断するところに着目し、同じライン上を空中にチューブを飛ばして、敷地の一体感を強める（貨物輸送車がメタファーである）。レールのあった地表は公園およびブロードワードとして再生し、各施設からは自由にアクセス可能にするわけだ。つまるところ、モスの戦略とは、新たにインフラを作るのではなくて、付加することにより、既存の施設をインフラ化＝下部構造化させていると言った方が正しい（英語的に思考するならば、これはmake an

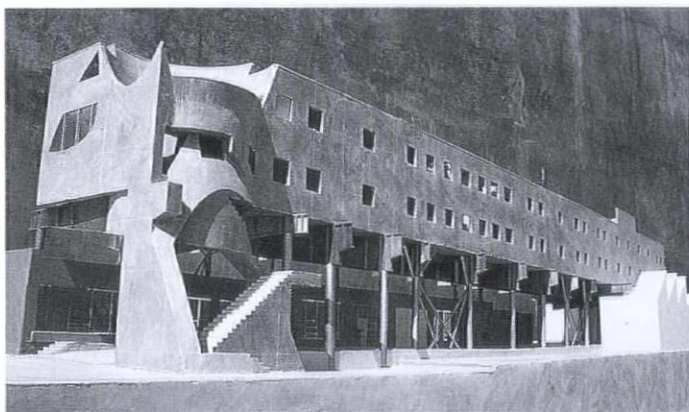
infrastructureではなく、make X infrastructureなのだ）と理解すべきだろう。そしてデザイン的には、既存のコンテクストに異物を挿入する手法であり、立体する要素は調和しないがために、意味の二重性を生むものだ。これがP.ジョンソンをして、モスを「ジャンクな宝石細工の名人」と言わしめたゆえんである。（モスの仕事の幾つかは、P/A賞をとっており、その評価の高さもうかがわれる）。

モスの形態だけを見て、F.ゲーリーの亜流と片付けてはいけない。これはダーティ・リアリズムの建築なのだ。ダーティ・リアリズムとは、雑誌「グラント」の編集長ビル・ブフォードが、テキスト内の戯れに逃避せず、日常生活の汚れた現実を描くアメリカ文学に対して命名した言葉に由来するが、ルフェールによって、建築の概念に導入されたものである（『Architecture in Europe Since 1968』1992）。フランプトンが提唱する批判的地域主義の都市版と言ってもいい。つまり、工場跡や屠殺場跡、シティ・エッジなど、否定的な性格をもつ敷地に魅力を感じないとわがまを言わずに、敷地自体の性質を変えてゆく態度だ。しかも彼らはその現実を強調するような異化の手法により、逆説的に都市の魅力を引き出す。M.ヴィタールやR.コールハース、あるいはD.リベスキンドの1994年ベルリン・コンペ案のように。バブルのはじけた時代の戦略。だが、これがゆるやかに都市のインフラを変革する手段であることは間違いない。

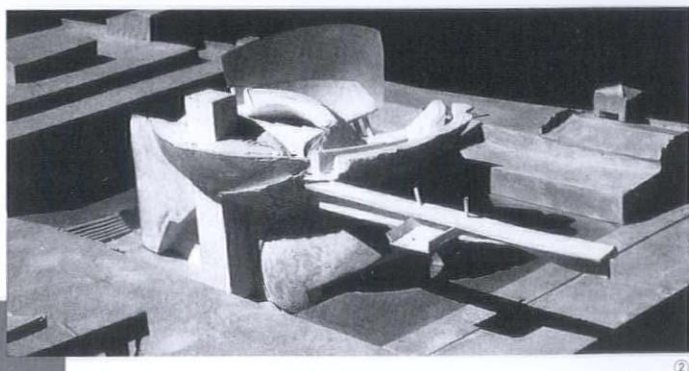
## リ・インフラストラクチュアリング

五十嵐太郎

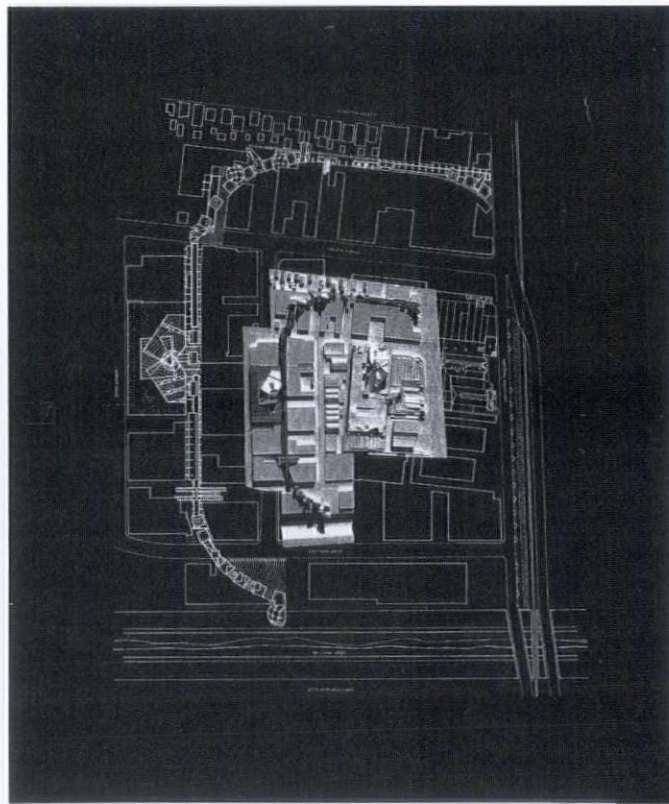
(Samitaur Building) Los Angeles — ①  
architects: Eric Owen Moss Architects  
PA9507  
(Ince Theater) California — ②  
architects: Eric Owen Moss Architects  
PA9501  
(Spar City) — ③  
planner: Eric Owen Moss Architects  
"Eric Owen Moss", Academy Editions, 1993



①



②



③



水、大地、緑……。そして優しい自然と融和する技術。

人と自然が豊かに融和する、美しく優しい環境を求めて、  
私たちは今日も新たな技術を追求しています。

 **飛島建設**  
本社／東京都千代田区三軒2番地 TEL 03-5611-1111 (代表) FAX 03-5611-1112



ヴェーバーが『儒教と道教』の中で「Feng Schui: Wind und Wasser」と言い表していたものは一般的にGeomantikの範疇に入ると考えられている。もともと地勢の判断を一握りの砂を地面に投ずることによって占うことを意味するGeomantik=地相術という概念は西洋全般に流布するものらしく、各国語の辞典に同じ語源を持った語が収録されている。

そのような文化人類学的背景の中で「風水」をGeomantik oder "Feng Schui"と表記しその内容をはじめて西欧世界にレポートしたのが、オランダの中国学者、ヨハン・ヤコブ・マリア・デ・フロートである。彼の『中国の風水思想』（牧尾良海訳、1992年、第一書房）はヴェーバーの典拠ともなっている文献で、昨今の風水ブームも、学術的な視点からはこの文献なくして語ることはできない。

たったこれだけの情報からなのだが、ここで不思議なのは近代以降西欧の地相術→風水術への関心/貢献が、ドイツ語圏を中心に読み取れるということである。

しばしば今の風水ブームは環境への関心の高まりからであると説明される。いうまでもなくこれは日本だけの話ではなく、例えばここ数年の海外の建築雑誌の中にもecologyに関するプロジェクトや論考を散見する。特に環境に配慮した住宅（またそれ以外のビルディングタイプでも）への関心はドイツにおいて高い。環境の相違が場所に依拠するものだとするならば、州の自立性が高いドイツの政治制度は、環境との「共生」をテーマとした実験に「お読みの

き」と言えるだろう。そんな中、1993年9月、日本の建設省は「環境共生住宅市街地モデル事業」の一貫として、ドイツ、オランダ、オーストリアへ視察団を派遣し、カッセル・エコロジー住宅、シュツットガルトガーデンEXPO'93-IGA展のリビング2000、ミュンヘン・ペルラッハの長屋、オランダ・アルペンアンデルラインの「エコロニア」、ウィーンのフンデルトバッサー市営住宅等の報告をしている（手近には日経アーキテクチャ1994年2月28号—5月9日号参照）。奇しくも東洋からgeomancy=「風水」を持ち返ったデ・フロートとヴェーバーの母国からecologyを持ち返ってきた格好である。

ルシアン・クロールがプロデュースするアルペンアンデルライン（Alphen-aan-den-Rijn）の「エコロニア」世界的に著名なデザイナーがマスタープランを作っているという点で、これらの事例の中でも注目すべきプロジェクトである。エコロニア（Ecolonia）とはエコロジーとコロニーから作られた造語で、彼の命名かはわからないがポピュリスト=クロールにはふさわしいプロジェクト名であろう。配置は運河から引いた池を中心として計画される。そしてオランダ全土に共通する地耐力のない低湿地帯への対処策として、まず計画地全体に砂を敷き詰め、後に道路に陥没等が生じないように土壌を十分に養生する。通常はその後砂は搬出され、改めて敷地の造成が始まるが、クロールはその砂で全体に起伏を作り、変化に富んだ風景を計画する。砂が飛ばされてしまつて結局はフラットな敷地になってしまうという悲喜

劇に終わってしまったのだが。

デ・フロートのGeomantik "Feng Schui"にしろルシアン・クロールのEcoloniaにしろ、またより一般的なecologyにしろ（黒川紀章ならば「共生（Symbiosis）」を持参してこの中に割り入るだろう）それ自体は単なる概念であって、ここからデザインを発生させるには何らかのよりプライベートな手法が必要である。しかし都市のデザインに参画する者全体の下部に通底する構造は、あってもよい。上記の概念はまさにそうした構造体といえるであろう。

さて今ブームの風水だが、こうした構造体になりえるだろうか。絶望的に明るい問いかけだが、沖縄に可能性はあるだろう。また一般大衆の、特に若い世代の目は意外に冷やかかなようだが、韓国にも大きな可能性がある。

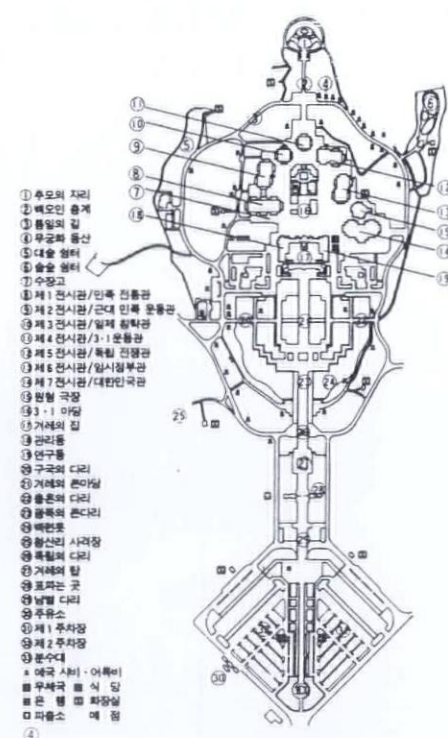
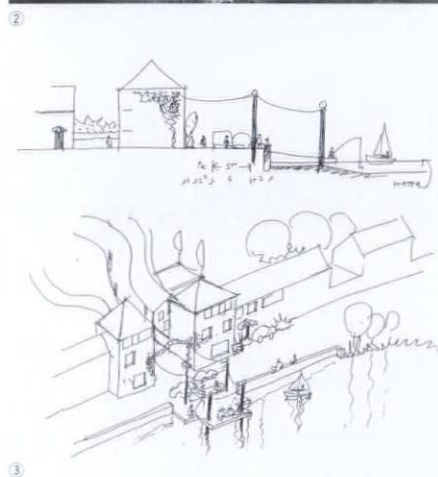
教科書問題を機に全斗煥の命により造られた独立記念館は、「建築研究所広場」そして「韓国風水地理研究会」の主宰である建築家キム・ウォン（金涇）の手による、風水思想の壮大な適用例である。建築というよりは都市に近い規模を持つこのプロジェクトの経緯の中で、キムは「記念館をめぐるさまざまな考えや反対論を統一するためにも、風水思想は大変有効」だったとしている。（野崎彦彦『韓国の風水師たち：今よみがえる龍脈』1994年、人文書院）社会全体の中で風水が下部構造たり得ている現状を表わす告白であろう。

ちなみにキムも、ソウル大卒業の後オランダへの留学経験がある。

## Feng Schui (風水)

大川信行

(Ecolonia) Alphen-aan-den-Rijn, the Netherlands — ①③  
planner: Lucien Kroll  
ar 9203  
〈独立記念館〉韓国 — ②④  
planner: 金涇 (キム・ウォン)  
『韓国の風水師たち：今よみがえる龍脈』人文書院





# MITSUBISHI

SOCIO-TECHの三菱電機



## ぐっと身近な ホームエレベーター 三菱から誕生。

見晴らしのいいところに

皆があつまるリビング・ダイニング。

それが主婦の私の夢だったけれど。

重い買い物袋を下げて階段を昇ることや

朝のゴミ出しのたいへんさを考えると、

ちよつと無理かな、なんて思ってたの。

それなのに、

「母さんには、毎日のことだからね」と、

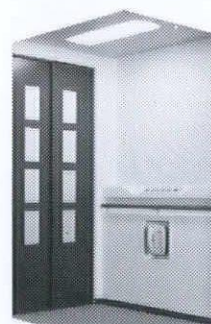
ホームエレベーター付に

してくれたお父さん。

ほんとうに、ありがとうございます……。



新 登 場



本写真はAタイプです



家族のこと。これからのこと。  
ホームエレベーターにできることが  
たくさんあります。

納入実績No.1

平成7年5月現在

# ホームエレベーターは三菱。

三菱電機株式会社

お問合せ、カタログのご請求は 三菱電機株式会社 ●東京(03)5573-3789-3796 ●札幌(011)212-3727 ●仙台(022)216-4583 ●埼玉(048)653-0255  
●千葉(043)241-8422 ●横浜(045)224-2611 ●新潟(025)241-7221 ●富山(0764)42-2326 ●金沢(0762)33-5506 ●名古屋(052)565-3167 ●大阪(06)347-2271  
●広島(082)248-5286 ●高松(0878)25-0006 ●福岡(092)721-2163



先日、ある営業担当者と話をした時のことである。彼曰く、ある政治家から街のマスタープラン作成を依頼されているが、マスタープラン作成はいわゆるカネにならないので、マスタープラン抜きの「ハコモノ」の話はないかと問いかけているということであった。

ここで言うマスタープランとは、おそらく10-20年先を目標とする将来構想を描いたもので、誰がフォーマットを決めたのか定かではないが、お粗末な右へ倣え方式の構想図と共に約束となっているマニュアル通りの計量データが付加されたものである。

このマスタープランとは資本・市場主義・生産性というパラメーターによってのみ判断・再生産されたもので、あくまでも建築家にとっては本来の意味つまりは字義通りのマスタープランではない。つまりインフラと建築とを予定調和的に結ぶ「繋ぎ」にしかすぎないものである。通常、建築家がこの種の作業に関わる時には、マスタープラン作成後の「ハコモノ」の見返り目的があることが多い。さらに、それはしばしばサービス業務的な意味合いを含み、当局のローリングに延々と付き合わされる事態も発生することもある。労あって報いなし、そんなところから、彼の「ハコモノ」発言は出たものと考えられる。

1987年にベルリンのIBAの一環として行われたティアガルテン地区の設計競技で第1位となったダニエル・リベスキンドの案はピクチャレスクでそのマージナルな作風は十分に刺激的であった。都市を

覆い尽くした記号の洪水の中から、その内奥に埋められた分裂症的な歴史の記憶を空中のソリッド・ラインで表現して見せていた。リベスキンドの作品は常に思弁的かつその思弁システムの中に常にそれを超越しようとする激しい衝動がある。そこには必ず認識を常に越えようとする意識のダイナミズムが潜んでいるといっている。即成の都市を斜めに切り裂くように延びるこのソリッド・ラインはあらゆる都市機能、インフラにも優先して構築され、この地の楔としての意味合いを持つ。一見すると既存の都市に対してイデオロギー的解決を施したように見えるこの案は、インフラ・建築の既成理論を超越するための、その後の一連のアーバンマスタープランへの布石となっている。

リベスキンドは今年になって、同じくベルリンのLandsberger Alleeにおける設計競技で第1位を受賞した。A地区とB地区とに分けられた465,000㎡の敷地に「Production wedge」「Industrial Lever」「Market Matrix」「Dial」「Bazaar Geer」「Green Gate」と名付けられたコンポーネントはネーミングこそお決まりのものとはいえ、先行プロジェクトと同様、各々が敷地へと散りばめられ、複雑に貫入し合っている。その中でも特に、「Industrial Lever」は空間の楔としてのみならず、インフラをも制御している。各種インフラは最も影響力を持つ資本に制御され、実質と掛け離れた基準を適用されることが往々にして発生するが、ここでは既存のインフラ軸

を計画の大前提として捕え、踏襲、さらに合理的拡張を目指している。生産性というスローガンを高く掲げる不条理な都市に対して、その不条理を超越するようなラディカルな脱システムの存在が、インフラ整備・都市計画に新たな可能性を与えるのではないかと。それまでの先行マスタープラン追従の集合住宅や公共施設、業務施設とは全く異なった建築の在り方がここで問われて実現されつつある。

過去には、コルビュジエの「三百万人の都市」や丹下健三の「東京計画1960」などのように、空間や時代の要請についての優れた創造力を我々は見せつけられてきた。それが現実化されるかどうかという問題は別として、古典的な建築原理と都市の進歩の狭間から建築家の創造力が生み出したインターフェイスとしては圧倒的に魅力的であった。ところが現状の単発的發展図式・漂流の展望計画であるマスタープランにはとても、徹頭徹尾遵守していけるとは言い難い。

建築家の仕掛けがマスタープランというインターフェイスを通してインフラに進出し、巨大な都市の力にアクセスするような出来事が起こるかどうか。それは全てインターフェイスへの関わり方一つに懸かっている。

マスタープランへの参画はインフラと建築の軋轢を解決する手段の重要な一つである。前述の営業担当者にはこう伝えておくこととしよう。

## インターフェイスの構築

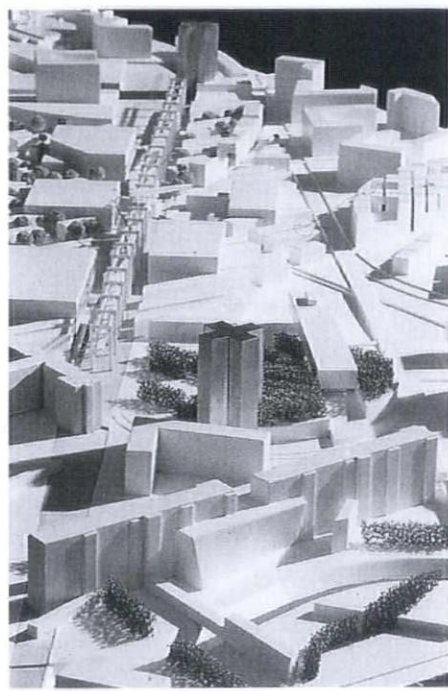
田上健一

Landsberger Allee, Berlin — ①②③

planner: Daniel Libeskind  
ar9506

IBA, Tiergarten, Berlin — ④

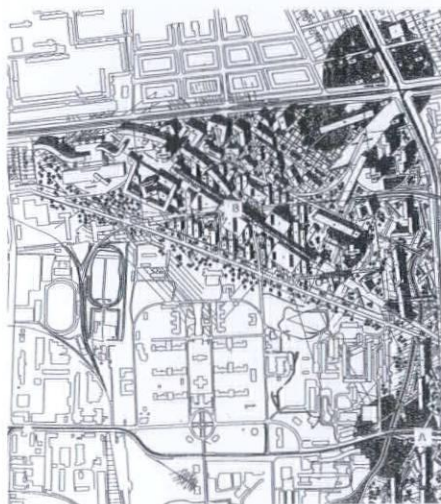
planner: Daniel Libeskind  
『季刊都市』都市デザイン研究所



①



②



③



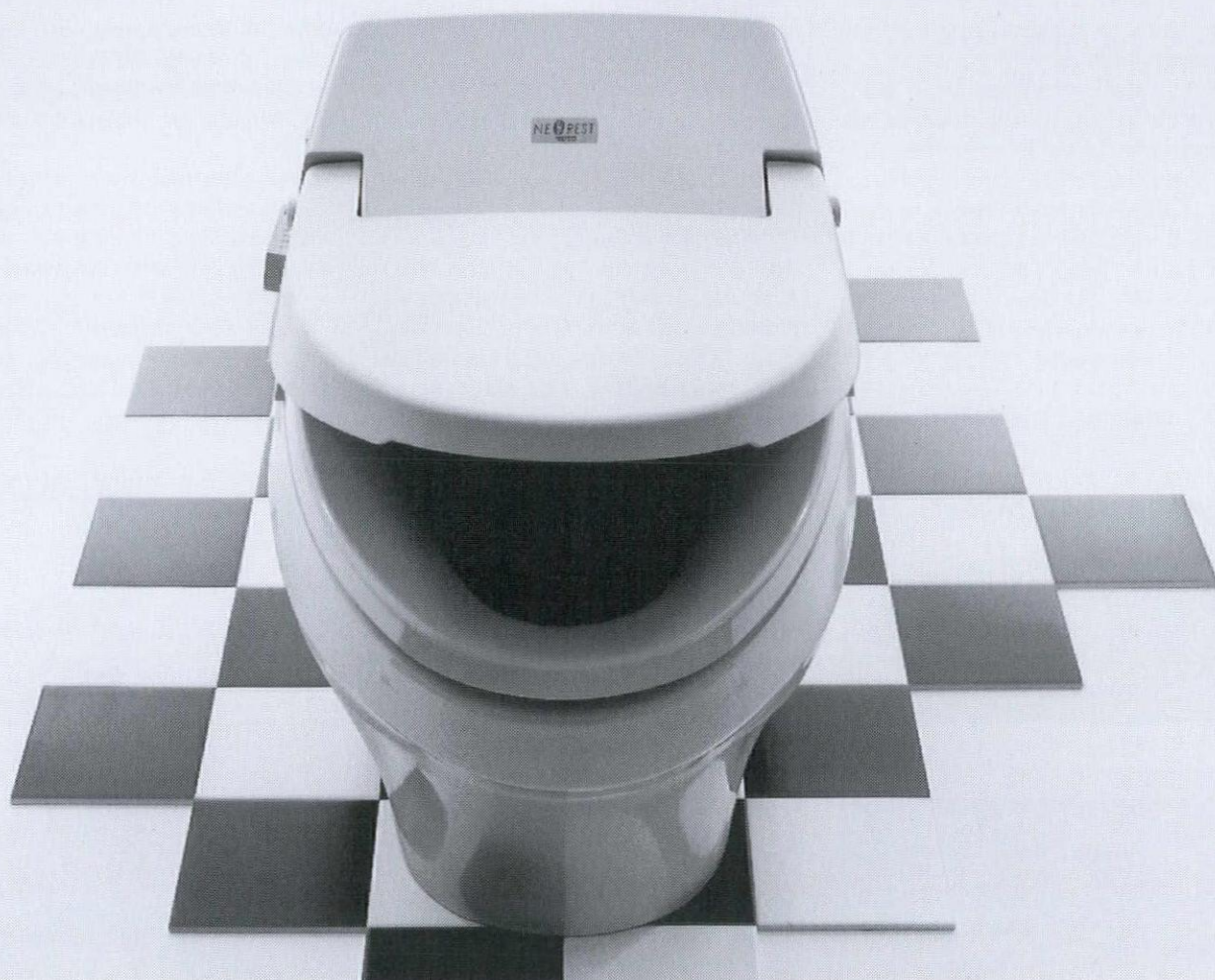
④



TOTO

# 「一等賞の便器」

と注文されたら、わたしたちTOTOの中では、このネオレストEXをおすすめします。



## 一等賞の理由

①タンクのいらない水道直結タンクレス便器。  
「新洗浄方式(シーケンシャルバルブ方式)」  
の開発で、水道管と便器を直接つなげることに成功。タンクに水を貯める必要がないので連続して流せるうえに、給水管もなく静か。1度に使う水の量も、40%程節水できます。  
②トイレ空間を広く使えるローシルエット便器。  
タンクがない分、トイレはスッキリ。収納や窓が広く、大きく、タップリととれる訳です。  
③使い勝手がとてもいい多機能一体型便器。  
ウォシュレット機能をはじめ、オゾン脱臭や室内暖房機能も装備。操作はじつに簡単です。

※カタログで希望の方は、〒107 東京都港区赤坂7-3-37 東陶機器株式会社 広告宣伝部「EX-1」係まで住所・氏名・電話番号を記入の上ご請求下さい。

NEOREST  
(ネオレストEX)



都市は生き物であり時代の推移とともに変化している。都市再開発の問題は過去の継承と現代的要求との乖離にある。それが歴史的建造物であった場合にはさらに顕著な事象として現れてくる。ノーマン・フォスターによるこのプロジェクトは、ロンドンにおいて現在もなお重要な役割を担う「キングズ・クロス駅」と「セント・パンクラス駅」そしてその両駅から伸びる鉄道路線によって囲まれた地区に集合住宅、公益レジャー施設、産業施設、ホテル、そして物販施設を含む1,625,000ft<sup>2</sup>の再開発を計画したものである。フォスターのこのプロジェクト提案の基礎は「保存」と「再生」にあるらしい。

まずこれらの駅建設の歴史的背景を見てみると、キングズ・クロス駅は1852年に最初に開設されており、石炭の陸上輸送増大とともに1868年にルイス・キュービットの設計により2連アーチを持つ駅舎として再建した。一方、セント・パンクラス駅は1868年にパーロウの設計によって、構造美に優れた鋳鉄尖塔アーチを持つスパン76m、高さ30m、全長は200mを越える駅舎が完成する。両駅とも、完成当時は世界最大規模の架構を誇っていた。また、後年の1876年にセント・パンクラス駅にはジョージ・ギルバート・スコットによってホテルを含むヴィクトリア・ゴシック様式の駅本舎が建設されている。

この二つの駅を供給した当時のイギリスの歴史的背景に注目してみると面白いことが分かる。最初のキングズ・クロス駅が開設される前年の1851年は、

ロンドンで『第1回万国博覧会』が開幕された年である。ジョセフ・バクストン設計の鉄とガラスの巨大建築『水晶宮（クリスタルパレス）』が、モジュールとプレファブ工法を徹底して採り入れて建設されている。この水晶宮に投入された建築技術は当時最高ランクのものであり、この技術によるロンドン万博の成功によりイギリスは産業革命の恩恵を受け、「世界の工場」とまで呼ばれるようになる。前出の両駅建設も、「鋳鉄」と「ガラス」そして大スパン架構の「ストラクチュアデザイン」という形で技術導入の成果といえる。

この歴史的背景を追っていくとフォスターの起用と、彼が計画の基本に据えた「保存」と「再生」というふたつのキーワードは非常に的を得た解答として見えてくる。まず始めに、計画区域南端に位置する駅舎について、フォスターは2駅舎の優れたデザインの構造をそのまま生かして「保存」した。ふたつの駅の間に残された三角の部分には、両駅を調和・融合させるコンコースを設け、屋根には三角形にモデュロール化された鉄とガラスの単純な架構が架けられた（再生）。

街路計画においては、ふたつの駅から伸びる路線が描く緩い2つの曲線が木の葉形に囲まれた領域の中に、在来の線路形状を保存してこれに沿うように建物を配置し、その両脇と街区の間に街路樹を置いている。街区内に建設される道路は新しいインフラとなり、この道路に立ち並ぶ街路樹の並木はロンド

ンにグリーンベルトというサブインフラを形成（再生）するといえよう。

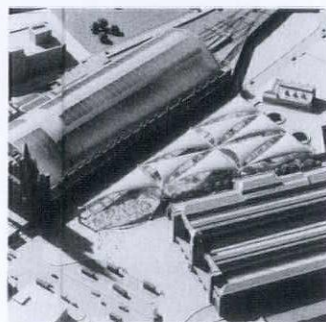
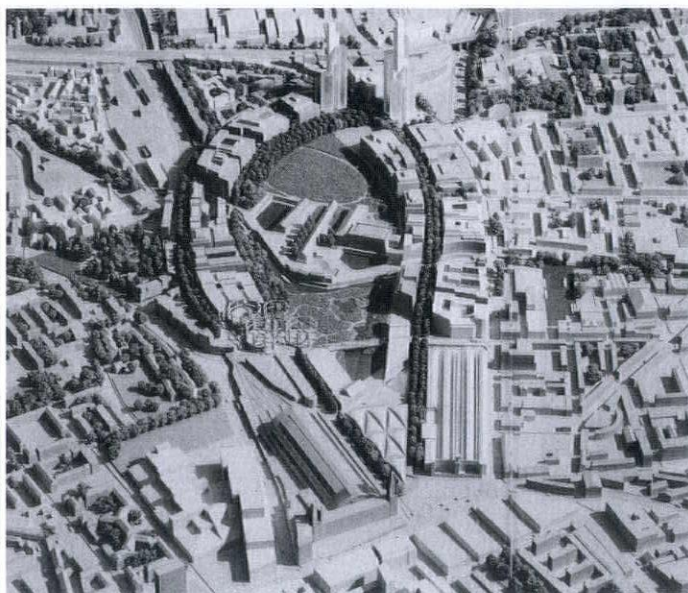
展開する町並みの中心には、これも現在の形を生かしたままに取り込まれるグラウンド・ユニオン・カナルが配置され、歴史の記録をそのままの形で保存しながら新しい公園ネットワークの形成（再生）に寄与している。この中央広場は伝統的なピクチュアレスクの手法を継承しており、オルムステッドのセントラル・パークを連想させる提案である。

ここまで見てくるとフォスターは再開発計画の中でこの土地の歴史とその価値を理解し「保存」と「再生」を達成したかのように思えてくるのだが、あのフォスターがそれだけで留まっているのだろうか？ 何か足りない気がする。そういう観点からこの計画に再度目を凝らしていくと、あるではないか！ 保存された2駅と反対側の計画区域内には、「monumental markers」と銘打たれた、高さ185mにも達する非常に造形的なフォルムを持つオフィス・タワーが（保存された駅舎と同じ数だけしっかりと）2本計画されている。従って、この再開発計画の中には既存建築・既存インフラ保存の代償として、ロンドンの街並みのスケールを遥かに越える「超高層」が配置され、「超高層」というビルディングタイプの中で現代の『鉄』と『ガラス』と『ストラクチュアデザイン』を披露する場所を創ろう」という彼の強い意志が隠されているような気がしてくる。

## インフラを包み込む

村上誠一

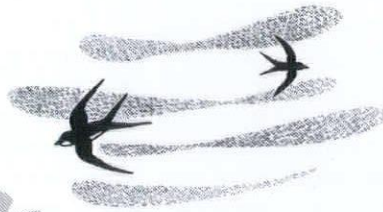
the redevelopment of the site between King's Cross and St Pancras stations, London  
planner: Foster Associates  
I'ARCA plus 02





## 空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて  
入り江に近い河原を歩く。  
頬に当たる風は冷たいが、  
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと  
何の稚魚だろうか  
スイスイと元気である。  
何万年も繰り返されてきた  
自然の鼓動を体の奥に  
感じる瞬間。  
ピューイ、ピューイ。  
澄みわたった空気に、  
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。  
額に汗をにじませながら、  
一步一步標高を稼ぐ。  
セミの合唱に負けじと  
梢で声を



夏

張り上げているのは  
クロツグミだろうか。  
樹齢は数百年に  
及ぶだろう、  
ブナの巨木を見上げると、  
突然、時間の感覚が薄れていく。  
鬱蒼とした空気のなかで  
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで  
季節の深まりを知る。  
山の秋は短い。  
頂から麓へ向かって  
早くも赤や黄に色づきはじめた



秋

林の中を歩くと、  
よく南へ旅する渡り鳥に出会う。  
例えば、エゾビタキ。  
ヒラリヒラリと木の葉のように  
舞いながら  
フライ&キャッチを繰り返す  
この鳥が姿を消す頃、  
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちょっと早起きして  
近くの山に足を運んでみた。  
枯れ落ちた木の葉を  
踏むたびに  
ガサガサという音が



冬

林全体に響き渡る。  
見上げると  
餌を探しているのだろうか、  
シジュウカラの仲間の群れが  
盛んに鳴き交わしながら  
枝から枝へ飛び回っている。  
凍てついた空気のなかで  
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆ 新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡





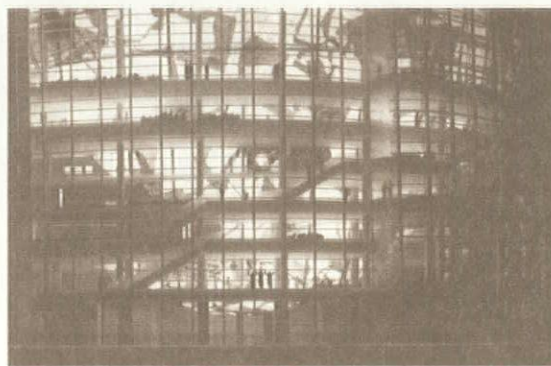
トム・ヘネガン+安藤和浩+梶直樹/アーキテクチャー・ファクトリー



遠藤秀平



手塚貴晴+手塚由比



吉田進+松本哲弥+有馬浩一+森吉直剛/大成建設設計本部

## 9512

特集

### SDレビュー1995

SDレビュー1995入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。

[入選者]

市原出、遠藤秀平、大林直高 (KAJIMA DESIGN)、佐々木聡、佐藤光彦、チー・ティエナン、手塚貴晴+手塚由比、トム・ヘネガン+アーキテクチャー・ファクトリー、長坂大、長田直之+筏真司、中東嘉一、西沢大良、藤本壮介、山口賢+BEAM STUDIO、由田徹+岡本美樹、吉田進 (大成建設設計本部)

[審査員]

高橋龍一、坂本一成、内藤廣、妹島和世

### 水戸岡鋭治のトランスポーター・デザイン

1993年、特急「つばめ」の車輛デザインで、国際鉄道デザインコンテスト「ブルネル賞」を受賞し、今春には特急「ソニック883」が完成し注目を集めている。

JR九州を舞台に続けられている一連の公共交通の仕事を紹介する。

[作品]

特急ソニック883、特急つばめ、高速船ビートル2、高速バスレッドライナー、JR西鹿兒島駅舎

### Villa romana：ローマのヴィッラと庭園

ローマの都市部・近郊にみるヴィッラと庭園——そこには、自然や神話などを主題にした「文学的な空間」がある——を逍遙する。

[事例]

ヴィッラ・アルバーニ、ドリア・パンフィーリ、ヴィッラ・ファルコニエリ、ヴィッラ・メディチ、他。

[文+写真]

長谷川正允

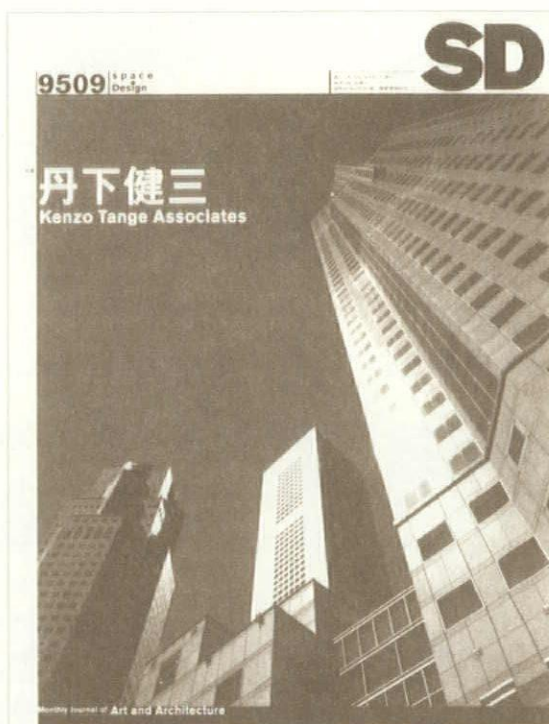
連載：トムの時空形象学 3

[文] 戸村浩



# SD

バックナンバー



## 9509

特集

### 丹下健三

国内、海外にと精力的な活動を展開する巨匠、丹下健三。本特集では、最新作シンガポールの超高層ビル[UOBプラザ]、東京都庁舎に続き新宿の新たなスカイラインを構成する[新宿パークタワー]を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内の新作、プロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介する。

[作品]

UOBプラザ、サイゴン・サウス・プロジェクト、台中市千城商業地区マスタープラン、テレテック・パーク、UEスクエア、パリ・イタリア広場、パリ・セヌ左岸計画、ナポリ市新都心計画、新宿パークタワー、国連大学本部施設、幕張プリンスホテル、日光東照宮宮殿・社務所、山口県立萩美術館、香川県新庁舎、東京ファッションタウン、FCGビルディング、他。B

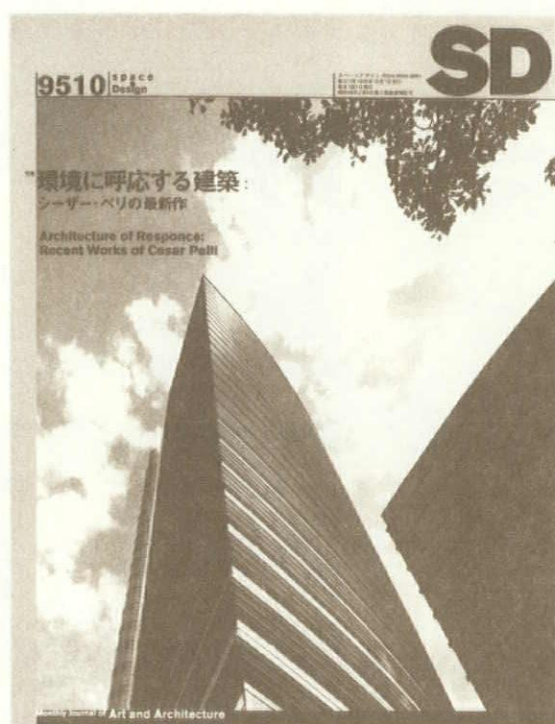
[論文] 丹下健三

[撮影] 村井 修、他

連載：時分の花／ディテール写真館12（最終回）

写真＋文＝下村純一

特別定価＝3,800円／本体3,689円



## 9510

特集

### 環境に呼応する建築： シーザー・ペリの最新作

近年、海外、特にアジアでのプロジェクトが注目されているシーザー・ペリ。本特集は、日本国内での最新作NTT新宿本社ビルや福岡シーホークホテルを始めとするアメリカ国外の新作を紹介しながら、ペリの現代都市への視線を探る。

[作品]

NTT新宿本社ビル、シーホーク ホテル&リゾート、クアラルンプール・シティ・センター、デル・ボスケ、香港コンベンションセンター、リパブリカビル、キャナリーワーフ・タワー駅舎および複合施設、新台中シティセンター、ハイグ・タワー、アバンドイバラ、埼玉アリーナコンベンション募案、生産性国際交流センター

### ランドマーク・グラフィティ

「タワーアート in 通天閣」：  
ヴァナキュラーな電脳都市」展より

関西在住の若手建築家、造形作家44人が、21世紀の通天閣を提案。この作品群を通天閣3階フロアで展示した展覧会を紹介。

[文] 鴻 英良、飯島洋一

[対談] 東 孝光＋橋爪紳也

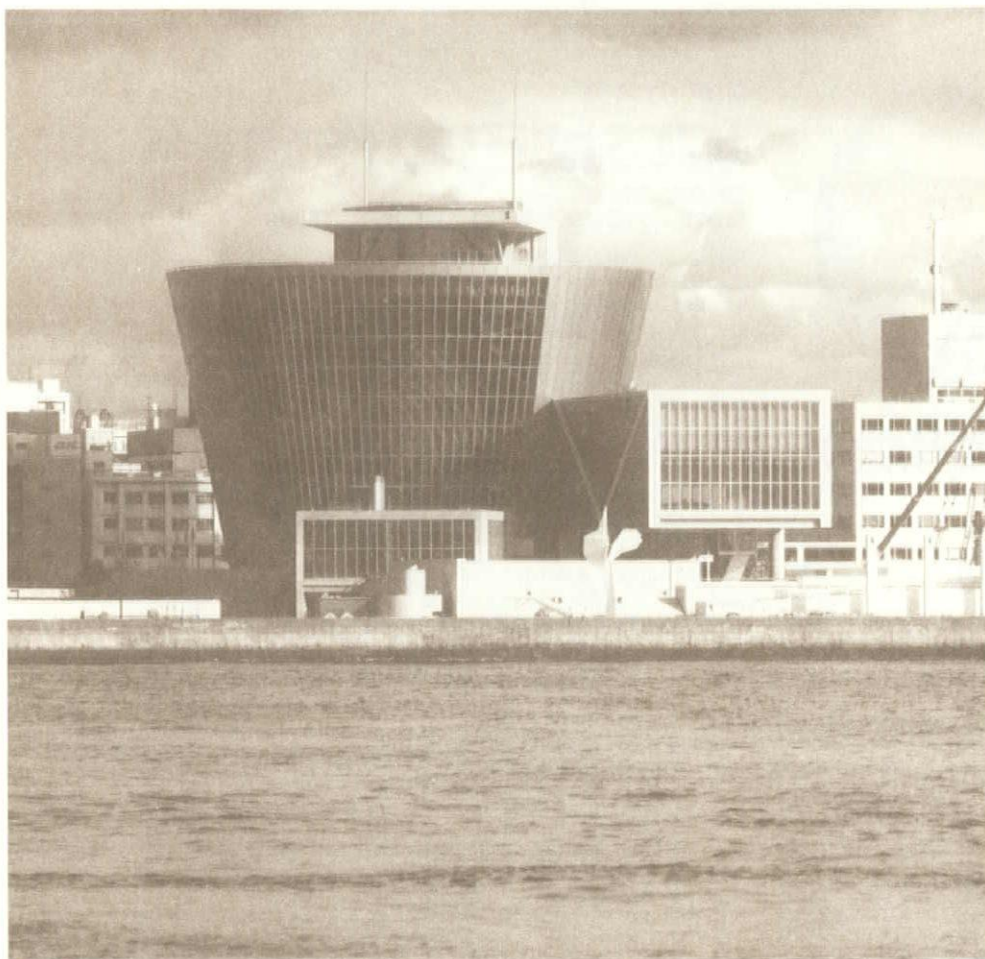
[写真] 堀内広治

連載：トムの時空現象学1

文＝戸村 浩

定価＝1,950円／本体1,893円





新刊

# サントリーミュージアム天保山

大阪・天保山に昨年完成した安藤忠雄設計のサントリーミュージアムの全貌を余すところなく伝える建築の書。

三宅理一の書き下ろし論文、項目別の簡潔な解説文、大橋富夫による多数の写真、スケッチ、そして新たに描き起こされた詳細図などによって、大胆な構想、精緻な設計、様々な建築技術が明らかにされている。

ひとつの作品を通して、建築家安藤忠雄の全てに迫る。

安藤忠雄・三宅理一 共著

A5版

80頁

定価1950円







不朽の名著

## 堀口捨己著作集〈全8巻〉

刊行委員 50音順

稲垣栄三、内田祥哉、木村徳国、神代雄一郎、平良敬一、高橋駿一、中村昌生、早川正夫

堀口捨己博士が、大正9年、分離派建築会をおこして世に出られてからの設計・著作活動は、まことに濃厚なエネルギーと鮮烈な姿勢によって貫かれております。

堀口博士の建築作品は芸術院賞や学会賞に輝き、またその著作は毎日出版文化賞、北村透谷文学賞、学会賞を受けられています。

著作集は先生自ら企画・装丁され完結までに10余年の歳月を要し、堀口先生の研究成果の集大成となった我が国唯一の堀口捨己著作集です。

### 庭と空間構成の伝統 (縮刷版)

B5変・318頁  
¥20,600

庭の意義、庭のあり方、庭の生いたち、庭作りの伝え書きなど、日本古来の伝統を解明し、写真を通してその空間構成の伝統を追求する名著。

### 堀口捨己作品・ 家と庭の空間構成 (縮刷版)

B5変・266頁  
¥16,480

書名の示す通り「自然を入れた庭と建築の連り」という一貫した設計思想を背景とした作品の集大成である。

### 利休の茶室 (復刻版)

A5・714頁  
¥18,540

文章家として歌人として、また建築家としても一流である著者が、コクのある文章と史実に基づく数多くの資料や図版・写真を挿入しつつ、利休の茶室の真髄を解明する名著。

### 建築論叢

A5・554頁  
¥13,390

1.現代オランダ建築、2.現代建築に表われた日本趣味について、3.建築における日本的なもの、4.信長茶会記、5.桂離宮、の5編を収め、とくに1、5は約200頁の写真を付す。

### 茶室研究 (復刻版)

A5・876頁  
¥23,690

利休の茶を受けついだ人たちの茶室をまとめたもの。利休が作った茶室を更に進めた江戸時代の秀れた人たちのもので、利休の弟子の織田有楽の如庵から尾形光琳の遼廓亭などまで、国宝や重文を主として調べた成果。

### 書院造りと 数奇屋造りの研究

A5・614頁  
¥18,540

書院造りと数奇屋造りについて永年にわたる研究の成果。(一)書院造りと数奇屋造りについて (二)君台親左右帳記の建築的研究 (三)君台親左右帳記の異本校注 (四)洛中洛外屏風の建築的研究

### 利休の茶 (復刻版)

A5・782頁  
¥18,540

茶の湯のもつ深みと広がりを感じそれを知り究めようとする。昭和16年北村透谷文学賞をうけた論文をもとに今回加筆された。利休の茶の真髄を探る名著。

### 堀口捨己歌集

A5・558頁  
¥13,390

建築・庭の大家として知られる著者には、歌会始の召人に選ばれたほどの歌人としての一面がある。自選の和歌800首と珠玉のような随筆5点に、自作の絵・茶杓の写真等13点を配し、年代順に編集されたユニークな歌集。

【関連書】

### 堀口捨己 〈現代の建築家〉

SD(スペースデザイン)82年1月号の堀口捨己特集をハードカバーとした保存版です。堀口先生の作品・著作を理解するための格好の入門書となっております。

SD編集部編  
A4変・176頁  
¥3,300



鹿島出版会 107 東京都港区赤坂6-5-13  
TEL (03) 5561-2551 FAX (03) 5561-2561



## テクノスケープ 都市基盤の技術とデザイン

片木篤著

四六判・248頁 定価2,987円

鉄道、水路、上下水道、ガス等近代都市基盤を構成する要素を、移動する物、経路、起点・終点の3点に着目して、その技術とデザインを分析する。近代技術が生み出した新たな都市空間の特性を概観し、近代の枠組を問う試み。

## 庭園の詩学

C.W.ムーア、W.J.ミッチェル、  
W.ターンブルJr共著 有岡孝訳  
A5判・304頁 定価4,841円

主に中国、日本、イスラムの庭園を取り上げ、庭園の空間を構成する基本的な手法を解明する。目次：①場所の精神、②デザイナーによってつくられる場所、③過去の場所(しつらい・収集・巡礼・パターン)、④私たちの場所

## ビルディング・エンベロプ 建物の外装のデザインと技術

アランJ・ブルックス、クリス・クレグ共著  
難波和彦・佐々木睦朗監訳  
B5判・148頁 定価4,635円

本書は、建築デザインの今日的潮流と、先進的工法を新しい技術とともに紹介し、ここ10年の技術的な発展に関する総合的な最新情報を提供している。話題の33事例のデザインとディテールを豊富な写真・図面と簡潔な説明で概観する。

## 超級アジア・モダン 同時代としてのアジア建築

村松伸著  
四六判・272頁 定価2,575円

本書はアジア各都市で活躍するアジアの若手建築家達の紹介を通して、急激に変貌を遂げつつある隣国の都市、建築界の状況を述べるもの。筆者は数年をかけて現地に取材し、足で歩いたアジア現代都市論にもなっている。

[SDライブラリー]②⑩

## 建築と非建築のはざままで

ロバート・ハーピソン著 浜田邦裕訳  
A5判・208頁 定価3,193円

本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意図性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。庭園、モニュメント、要塞、廃墟、絵画空間、イマジナリーな建築に言及する。

## かたちに見る造形の構成

イメージ・ジェネレーターの展開  
島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

造形のイメージを発想し、三次元で展開した造形教育の教材として編集。素材の基礎形態のシステム化、形の連続・断片的活用を、コンピュータ・グラフィックス処理し、建築の部分・全体・パターン考案の補助手段にて解説。

## 都市と建築の解剖学

形態分析によって[設計戦略]を読む

ジェフリー・ベイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

歴史的な町並や集落の成立を探り、また現代建築の巨匠であるアルト、マイヤー、スターリングの作品の設計過程を分析する豊富なイラストによって構成された本書は、建築を学ぶものにとって貴重なテキストである。

## ハイテック・コンストラクション3 スーパーシェッズ 大空間のデザインと構法

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦・佐々木睦朗監訳  
B5判・144頁 定価4,635円

本書は大架構建築の歴史と今後の可能性について、具体的な事例を中心にまとめており、単に技術的な視点からだけでなく建築的視点からも論じている点が特異である。19世紀の博覧会展示場、鉄道駅舎、工場などからはじまり、最近の空港、競技場、展示場にいたるまで、多種多様な大架構建築の事例を機能別に分類し、それぞれについて過去から現在までの歴史的変遷をコンパクトにまとめている。写真・図版多数。

## インテリアデザイナーのための 住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・182頁 定価2,266円

技術開発の著しい住宅設備の設計について、インテリアデザイナー向けに解説。コンセントやスイッチの配置、空調や照明、給排水設備の留意点、さらにマンション等に設置されるホームオートメーションなどにも言及。



人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

月刊

ダルトンレポート

# DALTON REPORT

9510号 目次

## ●特集●大都市圏での拠点空港整備が緊急課題

- わいどあぐる ●排ガス、騒音なし—免許不要の電動自転車が人気/研究成果—眠気防止にはガムをかむのが効果的
- 霞が関ホットライン ●10月から一般管理費大幅引下げ/公共工事、7ヵ月ぶりに増加/都市開発にTMC
- 阪神復興 ●西宮・鳴尾地区、がれき埋立て都市再開発用地造成/兵庫県が下水道復興計画
- 列島を拓く ●道路の上でビル建設—新宿駅南口再開発/幕張メッセ新館の基本計画まとまる
- 海外建設事情 ●大手重電各社が中国で拠点づくり
- 学会・協会・業界 ●ISO取得加速/都銀が金銭保証—損保“履行ボンド”に対抗
- ビッグ・プロジェクト進行中 ●東京湾横断道完成は1年遅れ97年度
- こんな方法考えました ●廃パチンコ台から固形燃料/ゴム弾性利用し凍結抑制舗装
- ただいま研究中 ●海砂、砕砂活用して高流動コンクリ
- こんなモノつくりました ●クレーン不要—荷降ろしマッスを発売/墨出しロボットを開発
- ハウジング ●工期短縮—住宅床に新工法/石油製品販売会社が輸入住宅
- コンピュータ ●建設業向け情報管理ソフト/ビル修繕改修費用をパソコンで算出

▶今月の「拾出し」◀ターゲットは騒音対策



建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

購読のお申し込みは今すぐに!  
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。  
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに  
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。  
※お申込みは個人名でおねがいします。

□新規購読申込

SD

フリガナ お名前			
ご自宅 〒 住所			
お勤め先 (職種)	該当の ものに ○印を	ご専門 ご担当	建築 土木 機械 電気 事務 ほか 設計 施工 管理 営業 経理 ほか
購読期間(☑印をつけてください)		□1年 □3年	

購読申込書の送り先

〒107 東京都港区赤坂6-5-13

㈱鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

- 定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)  
(送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の  
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。





**9407 The Works of Peter Walker:** Minimalism and Landscape Architecture; Introduces Peter Walker William Johnson and Partners' main works and future projects: Tokio Marin Oyama Training Center, Center for the Advanced Science and Technology, Marugame Station Plaza, IBM Japan Makuhari, Solana, Hotel Kempinsky, Europa-Haus, Longacres Park, etc. ¥2,200



**9408 Massimiliano Fuksas:** His recent works; School Saint-Exupery, Graffiti's Museum of Niaux's Cave, Brest City Center university, Sports Complex, Housing, Parking, etc. Text; Dorian O. Mandrelli, Otto Steidle, Hideto Horiike. **Rumanian Orthodox Churches in Mordovia:** Four churches built 16th century. Photos; Takeshi Taira. Text; Yoshi Yamazaki, Riichi Miyake. ¥1,950



**9409 Ideas and Approaches to Architecture and the City:** A New U.S. East Coast Movement; Introduces 11 architects. B. Shirdel / J. Kipnis, Michael Sorkin Studio, S. de Martino, A. Wall, RAAUm, W. Jones, A. Zago, Pollari x Somol, G. Rynn, D. Garofalo, M. Rakatansky. Texts; Tsuyoshi Matsuhata. **Recent Work by TAO ARCHITECTS / Shuntaro Noda:** Photos; Kouji Horiuchi, Text; Youichi Iijima. ¥1,950



**9410 Torroja's Legacy of Structure and Space:** The contemporary meaning of Eduardo Torroja. Works; Madrid Racecourse at Zarzuela, Market at Algeciras, Pont de Suert Church, etc. Discussion; Norihide Imagawa, Keiichi Irie. **Rebirth As a City of the Arts: Gibellina Nuova, Italy:** Urban development and architecture in Italy. Photos, Texts and Interviews; Masaru Miyawaki. ¥1,950



**9411 Airport Architecture as the Nexus of the City:** Featuring Kansai International Airport Passenger Terminal Bldg. And 21 airport terminal buildings in the world; Stanterd, Denver, Chicago O'Hare, Stuttgart, San Pablo, King Abdul Aziz in Jeddah, New Seoul Metropolitan, Chek Lap Kok in Hong Kong, etc. Texts; Deyan Sudjic, Paul Andreu, Hiroyoshi Yamada, Noriaki Okabe, etc. ¥3,500



**9412 SD Review 1994:** Featureing SD Review 1994: The 13th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. Text: Naoyuki Takashima, etc. **International Collaboration Project: The Children's Village in Oswiecim:** Architect: Mario Botta, Fumio Maki, etc. **Projet pour La Chapelle de St. Viogor de Mieus par Takubo 2.** ¥1,950



**9501 Riken Yamamoto:** Introducing his works for last 5 years. Ryokuentoshi=Inter-Junction City, Takashimacho Gate of the Yokohama Expo'89, Day Care Center for the Geriatric Patients, Junior High School in Iwadeyama, House in Kamakura, House in Okayama, etc. Text by Riken Yamamoto, tom Heneghan, Motomu Uno. ¥3,000



**9502 Baroque Architecture in Sicily and Lecce:** Features the distinctive Baroque style resulting from the mingling of Roman Baroque and the indigenous ancient Grecian and Hellenistic cultures. Introduces Palazzo Spadaro, etc. Photos: Ichiro Ono. Text: Hirohide Yakeyama, Masanobu Hasegawa, Satoshi Okada. ¥1,950



**9503 Multi-unit Housing Today:** Introduce architects who have made many multi-unit housing recently and their works. Masahiko Araki: Living Alley, Takao Endo: Higashi-Osaka Yoshita Public Housing Complex, Hidetoshi Ohno: YKK Namerikawa Dormitory, Yuzuru Tominaga: Shinchi Housing-C, Yasumitsu Matsunaga: Project 951, Makoto Motokura: Seikousou. ¥1,950



**9504 Scenes from the Technoscape:** Focus some scenes or landscape constructed by industrial facilities, civil engineering structures, etc. Introduce Wind Firm, The Thames Barrier, The Arecibo Observatory, The Kurobe Dam, Shiobara Hydro-Electric Power Station, Kasai Sewage Processing Plant, Trans-Tokyo Bay Highway, Drilling Platform, Japan Microgravity Center, Circular Farm, etc. ¥3,000



**9405 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu:** Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on **The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and Its Development.** ¥1,950



**9506 The Potential for Using Computers in Architecture:** Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisenman, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sottsass, S.uchida, etc.. ¥1,950



**9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail:** Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriya City Museum of Art; etc.. ¥2,700



**9508 Urban Public Spaces:** Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawa, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950



**9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates:** Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



**9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli:** Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950





Space Design  
Hardcover Edition  
and Order Form

**Space Design** published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:  
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:

Subscriptions Department  
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.  
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,  
Tokyo 107, Japan  
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

#### Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to  
Space Design,  
starting in \_\_\_\_\_, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

#### Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

#### Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

#### Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

#### Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

#### Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

#### Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

#### Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

#### Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

#### Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

#### Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

#### Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

#### Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

#### Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

#### The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

#### Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

#### Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

#### Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

#### Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

#### Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

#### Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrich Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944



## ●

壁装材

## 東リウォール1000 VOL. 4

## ●

東リ株式会社



東リ(株)では、壁装材(壁紙)の主力である、東リウォール1000 VOL. 4を新発売した。サンプル帳には、その名前のとおり、1m当たり1,000円(税抜き材料価格)を中心に、新柄新色304アイテムを含む計593アイテムを収録した。環境・安全・健康問題を見据えた「エコロジー」、適正な価格を追及した「エコノミー」、多面的な顧客満足度に応える「エッセンス」、施工性を重視した、「イージー」の4つのキーワードが開発コンセプトになっている。構成としては、一般住宅のレジデンシャル市場を中心とし、一部店舗などの商業市場も意識している。内容的に、VOL. 3と比較して、再生紙を主体としたエコウォール防汚67点、アクリル系壁紙17点と、環境問題を配慮した収録点数を大幅に増やした。ともに塩素を含まないため焼却処分しても有害な塩化水素などが発生しない。エコウォール防汚は、再生紙のベースの表面にエチレン・ビニルアルコール共重合樹脂(商品名・エパール、クラレが製造)のフィルムを張り付けた壁紙。表面が平坦で油性、水性を問わず汚れがほとんど除去できる。また、織物調や砂・石目調のテクスチャーの重複を整理し、見やすく、変化に富み、価格帯にふさわしいポップなイメージにまとまっている。

東リ株式会社 営業企画部  
兵庫県伊丹市東有岡5番125号  
〒664 Tel 06-494-6605

## ●

屋上断熱二重床システム

## フクビ エフクリートR

## ●

フクビ化学工業株式会社



フクビ化学工業(株)では、スーパー繊維ケブラーで補強された強度と耐久性のある特殊コンクリート板と耐候・耐久性のある特殊ナイロン樹脂性支持脚(フクビプラ木レン)とで構成された、乾式屋上断熱二重床システム、フクビ エフクリートRを新発売した。このシステムは、屋上防水層の耐久性能と屋上の断熱性能を向上させると共に、屋上の美観や多目的な有効スペースとして使用できる。

## 特長

- ①パネル基本寸法500mm×500mm(パネル重量13kg/枚)の為、運搬およびパネル敷き込みなどの施工性がよい。また、簡単な工法で施工できる為、工期が短縮される。
- ②ケブラー繊維は、鋼鉄の1/5の重さで同じ強度、同重量で5倍の強さを持ち、軽量で強度のあるコンクリートパネルとなる。また、ケブラーは錆びない為、鋼鉄のように錆膨張によるコンクリート板のヒビ割れが起こらず、酸性雨や塩害の心配がない。
- ③脚部構造は、特殊ナイロン樹脂を素材とする床支持材であり、錆による腐食の問題もなく、また、レベル調整が可能な製品である為、複雑な水勾配による下地の不陸にも対応できる。

フクビ化学工業株式会社  
福井市三十八社町33番66号  
〒910-37 Tel 0776-38-8001

## ●

塗料

## VトップHマイルド

## ●

大日本塗料株式会社



大日本塗料(株)では、強溶剤型の性能を保持しながら、人と環境に優しい、弱溶剤型ポリウレタン樹脂塗料を開発し、VトップHマイルドとして新発売した。同社では、新設や特に各種塗り替え物件の塗装向けに「エポオールマイルド」(下塗)、「VトップHマイルド」(中塗・上塗)のマイルドシステムを完成し、塗装業者や周囲の環境にも優しい重防食塗装システムを提供している。

## 特長

- ①各種プラント、タンク外面、橋梁、建屋鉄骨、クレーンなどの新設および塗り替え。また全ての旧塗膜の上に施工できる。
- ②非水エマルジョン型塗料のため、特に刷毛塗り、ローラー塗りの作業性が良い。また、エアレス塗装時のスプレーダストが少ない。
- ③弱溶剤型でありながら強溶剤型「VトップH」と同等の塗膜性能や光沢が得られる。

## 価格

VトップマイルドH 中塗	18kg	27,100円
上塗	18kg	35,670円

大日本塗料株式会社  
大阪市此花区西九条6丁目1番124号  
〒554 Tel 06-466-6661



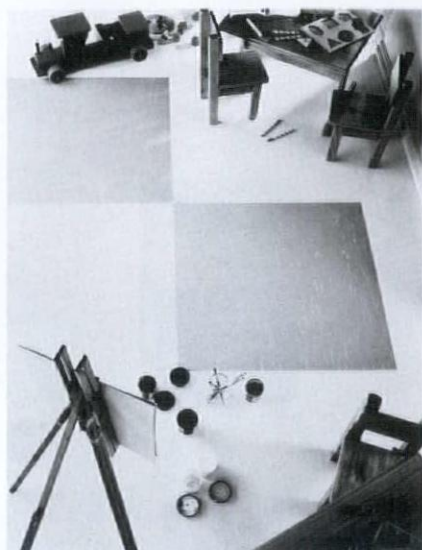
●

床材

## エンデバー

●

株式会社エービーシー商会



株式会社エービーシー商会では、アームストロング塩ビ長尺床材、エンデバーを新発売した。エンデバーは、昨今の市場ニーズである低価格指向に応えるべく開発したもので、アームストロング塩ビシートとしては初の㎡あたり2,000円台を実現した。さらに2.0mmという厚みながら、アームストロング独自のスルーグリーン単層構造(柄が厚みの中で木目の流れのようにになっている)で摩擦に強く、耐久性に優れるという高品質を保っている。飽きのこない8色を揃えて、さまざまな場所に使用できる。

### 特長

- ①スルーグリーン単層構造で色柄が長持ちする。
- ②専用目地棒で溶接するので、目地部分に汚れが溜まらず、メンテナンスも簡単に行える。

### 規格・価格

幅1.5m 厚さ2.0mm  
2,900円/㎡ (設計価格)

●

昇降機

## 楽ちん号

●

大同工業株式会社



大同工業株式会社では、取付けの場所を選ばない、いす式階段昇降機、楽ちん号を新発売した。

### 特長

- ①暮らしに合わせた、使いやすさと安全性を徹底追求し、どんな方でも簡単に操作ができる。また、乗り降りがラクラクできる。
- ②日本の家屋に合わせコンパクト設計で、家庭用コンセントで使用できる。(低騒音型200Wの小動力設計)
- ③形状に合わせたレール設計で、KS型(まっすぐな階段)、KC型(踊場のついた階段、90度の曲がり階段、180度の曲がり階段)など、ほとんどの階段に取付けができる。
- ④木製、コンクリート製、鉄製を問わない。
- ⑤急な勾配の階段でも対応できる。
- ⑥万一に備えた緊急自動停止機能など各種の安全装置付きである。

●

ガラス

## マルチライト・レイボークII

●

日本板硝子株式会社



日本板硝子株式会社では、従来の複層ガラスに比べて遮熱・断熱効果を一層高めた遮熱高断熱複層ガラス、マルチライト・レイボークIIを新発売した。通常の複層ガラスは2枚のガラスで乾燥空気層を挟んだもので、断熱(室内の熱(=暖かき)が室外に逃げるのを防ぐ)に効果を発揮する省エネガラスであるが、マルチライト・レイボークIIは、複層ガラスの室外側ガラスに特殊金属膜をコーティングすることにより、断熱効果を一層高めるとともに、遮熱(日射熱(=暑さ)が室内に侵入するのを防ぐ)効果も高めた製品である。主な特長としては、太陽熱(日射熱)の遮蔽性を高めることにより、室内に侵入する日射熱量(暑さ)を通常の3mmフロート板ガラスと比較して50%以上も軽減し、夏季の冷房効率を大幅に向上させることができる。また、室外に逃げる室内の熱量(暖かき)を通常の3mmフロート板ガラスの2/5程度に抑えることで、冬季の省エネルギーにも効果を発揮する。いわば、高い遮熱・断熱機能を備えた、夏・冬兼用の複層ガラスである。色調は、ライトグリーン調で高級感溢れる外観となっている。

株式会社エービーシー商会 アームストロング事業部  
東京都千代田区永田町2丁目12番14号  
〒100 Tel 03-3507-7221

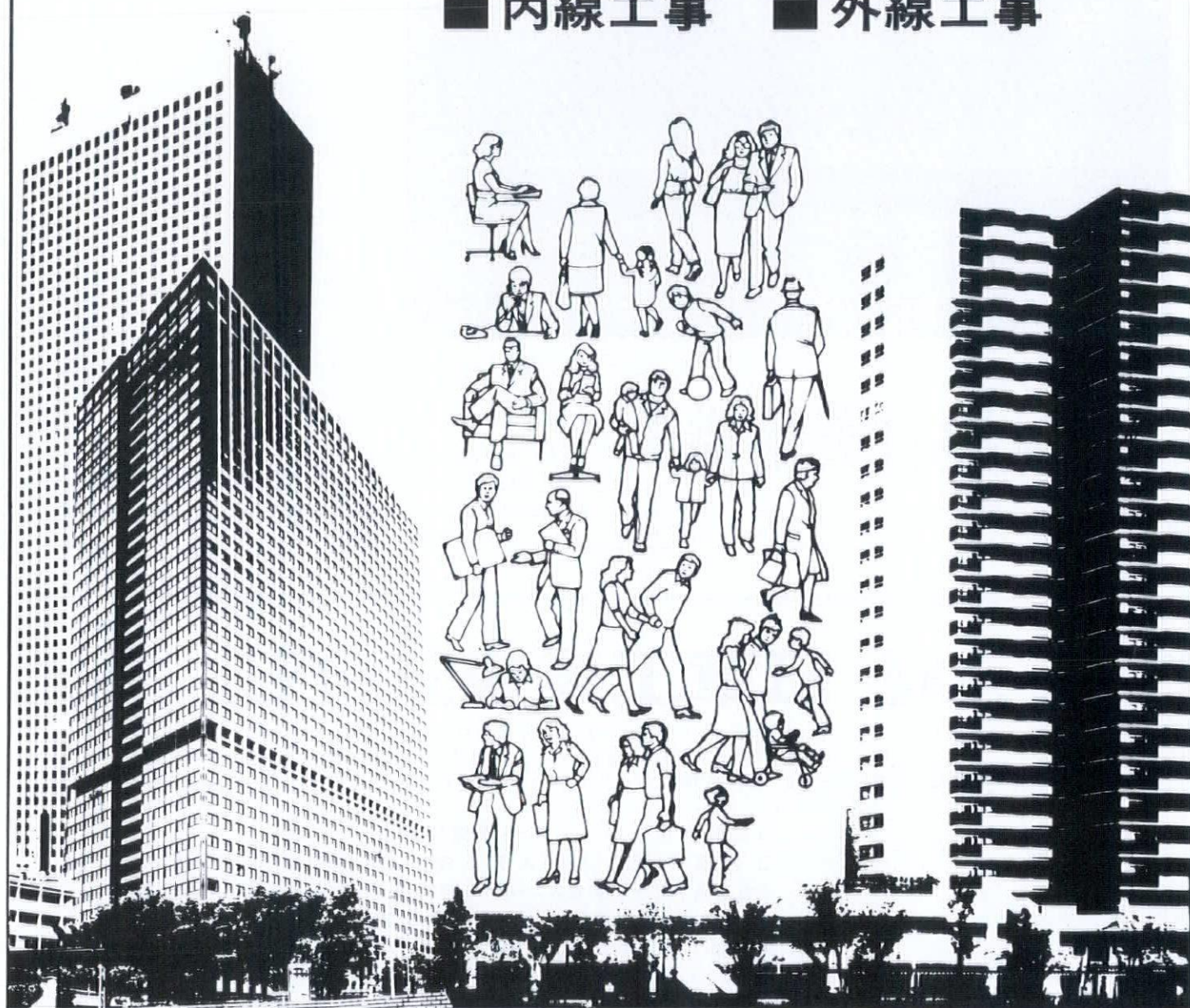
大同工業株式会社 AS商品部  
石川県加賀市動橋町22番1号  
〒922-03 Tel 07617-4-2969

日本板硝子株式会社 東京支店  
東京都港区芝1丁目11番11号  
〒105 Tel 03-5443-0127



# 技術と伝統の...

■ 内線工事 ■ 外線工事



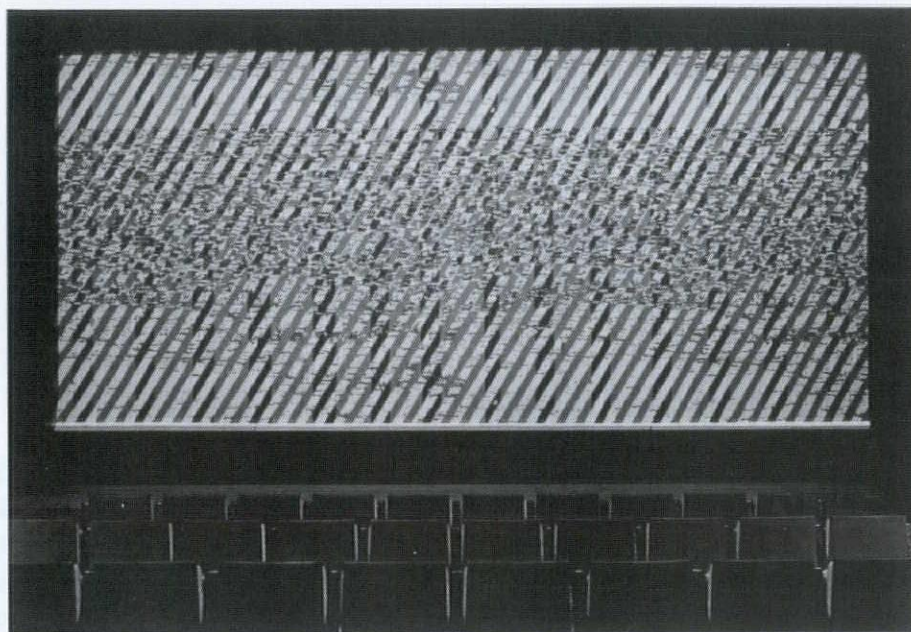
## 東光電気工事株式会社

取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1 - 4 - 5 千101 電話/東京 3292-2111

支社所在地/札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡





すみだ生涯学習センター

西陣綴錦織緞帳

間口10.5m×天地6.5m

デザイン 長谷川逸子建築計画工房

## 株式会社 龍村美術織物

本社・京都店 京都市中京区壬生森町29 ☎(075)802-3251代  
 東京店 東京都中央区日本橋2-2-20 ☎(03)3274-2274代  
 名古屋店 名古屋市中区栄2-1-1 ☎(052)204-0815代  
 大阪店 大阪市中央区南本町3-5-14 ☎(06)245-5630代  
 札幌営業所 札幌市中央区南1条西5丁目 ☎(011)271-3644代  
 福岡営業所 福岡市博多区博多駅前1-15-20 ☎(092)474-0031

## N 日章工業株式会社

●本社 〒101 東京都千代田区内神田3-11-7(日立神田別館) ☎03-3254-3000  
 ●大阪支店 〒541 大阪市中央区高麗橋2-4-6(大正不動産ビル6階) ☎06-201-5704  
 ●仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央3-2-27(日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店  
 日立製作所OAシステム特約店  
 日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店  
 旭化成建材パイル・ヘーベル代理店  
 大和ハウス工業代理店

### 施設商品

エレベーター・エスカレーター  
 立体駐車場設備(新明和工業)  
 バスユニット(日立化成工業)  
 住宅機器類  
 集中浄化槽  
 受水槽  
 ソーラー  
 受変電設備

自家発電設備  
 無停電定電圧定周波電源装置  
 ビル監視制御装置  
 冷暖房空調設備  
 通信設備  
 ターボ冷凍機・吸収式冷凍機  
 各種ポンプ設備・換気設備

### OAシステム機器

パーソナルコンピューター  
 ワードプロセッサー  
 ファクシミリ  
 オフィスコンピューター

ハイスプリット・ハイベース  
 鉄骨  
 大昭和ユニボード

### 建材商品

AHSパイル  
 ヘーベル  
 フリーアクセスフロア

### 建設商品

クローラクレーン  
 ショベル  
 軽量鉄骨プレハブ規格建築物  
 軽量鉄骨系プレハブ住宅



建築設備の一役を担う

## 電気設備工事

最新の技術と信頼される施工



# 大栄電気株式会社


代表取締役社長 伊藤 赳

本 社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所 大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、  
浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

心から心への限らない伝達。

■ 学術誌・技術誌への専門広告代理業  
その道のベテランに読まれている学術・技術  
専門誌の掲載ご要望に迅速に応じられるよう、  
常に媒体資料を豊富にとりそろえ、確実な宣  
伝効果をめざして、ユーザーへの橋渡しを致  
します。

学術・技術誌専門広告代理業  
 **共栄通信社**

本 社：〒104 東京都中央区銀座8-2-1 (ニッパビル)  
☎ (03)3572-3381代 / FAX (03)3572-3590  
大阪支社：〒530 大阪府北区西天満3-6-8 (笹屋ビル3階)  
☎ (06)362-6515代 / FAX (06)365-6052

広告についてのお問合せの際は「SDを見て」と御明記願います



あなたのそばに、  
私はいます。

# HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

## Type of Operations

●General Electrical Work ●Internal/External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work  
for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work

テクノロジー&システム



**中立電気株式会社**

〒150 東京都新宿区新宿1丁目13番12号 4F TEL 03-3356-2511 FAX



# 広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください(五十音順)

## ●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX 06(368)6052

## ●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX 03 (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX 06 (227) 0268

## ●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8249代

FAX (3552) 8249

## ●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12

神田ポンピアンビル (3863) 6011代

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641代

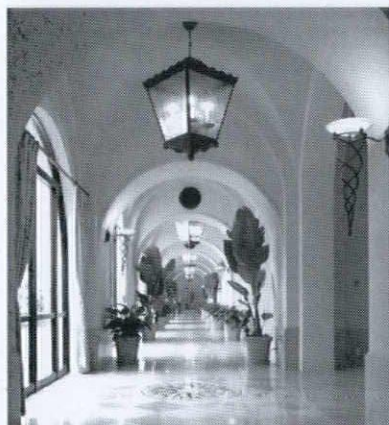
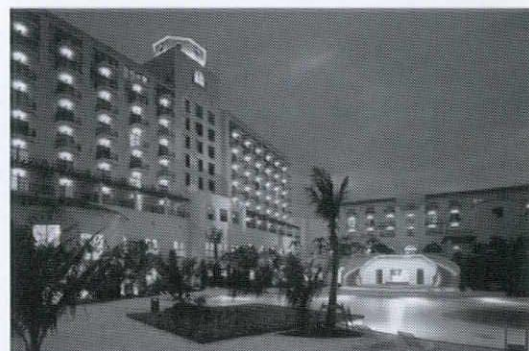
ア	(株)アドヴァン	181
	(株)アルペロ	186
	(株)青島商店	A13
エ	(株)エドラス	表4
オ	大崎電気工業(株)	A1
	大塚オーミ陶業(株)	168
カ	(株)関電工	A3
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	川崎電気(株)	180
キ	(株)きんでん	A16
	(株)共栄通信社	A21
サ	三和シャッター工業(株)	A12
	三建設備工業(株)	173
	三機工業(株)	176
シ	昭和鋼機(株)	177
	新菱冷熱工業(株)	196
ス	住友電設(株)	A11
タ	大興物産(株)	A7
	ダイゲン(株)	A15
	(株)龍村美術織物	A20
	大栄電気(株)	A21
	立山アルミニウム工業(株)	172
チ	(株)中電工	A15
ト	東陶機器(株)	194
	トーヨー理研(株)	A14
	東洋テラソ(株)	188
	飛鳥建設(株)	190
	東洋熱工業(株)	183
	東光電気工事(株)	A19
ナ	中立電気(株)	A22
ニ	(株)西原衛生工業所	A10
	日新工業(株)	A9
	日本バルカー工業(株)	A14
	日章工業(株)	A20
ヒ	(株)日立製作所	165
	日立電線(株)	182
フ	(株)フッコー	表2
	藤田石装(株)	184
ホ	ホテルイースト21	A8
マ	松下電器産業(株)	A2
ミ	美和ロック(株)	170・171
	三菱電機(株)	192
ヤ	山田照明(株)	A24
ロ	ロンシール工業(株)	表3



# 表情多彩



照明は空間づくりの重要なポイント。  
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。  
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、  
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、  
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、  
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



ホテル日航アリビラ（沖縄）

**山田照明株式会社** 本社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL.03-3253-5161 横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731  
 仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町11-11 (ANDOビル) TEL.022-267-1630 大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL.06-643-3421  
 福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL.092-282-7635 名古屋支社 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東陽ビル) TEL.052-252-5161 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水三條 4-2-3 TEL.011-811-2215  
 北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL.0273-63-1442 千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL.043-244-2540 静岡営業所 〒422 静岡市稲川 3-12-4 (山中ビル) TEL.054-283-9788  
 広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (東栄ビル) TEL.0992-58-0031 秋田出張所 〒010 秋田市山王 6-8-6 (ナカムラビル) TEL.0188-65-2550  
 宇都宮出張所 〒818 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL.0286-60-1381 長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL.0262-43-8420